鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

志布志福山線（有明志布志道路）改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

稲荷迫遺跡
（いなりざこ）

（志布志市志布志町）

２０１２年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

稲荷迫遺跡上空から志布志湾を望む

各時代の人々が使った道具

序　　文

この報告書は，主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴って，平成21年度及び平成22年度に実施した志布志市安楽中島に所在する稲荷迫遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡は，旧石器時代から古代に至る複合遺跡であり，多くの遺構・遺物が発見されました。

旧石器時代では，礫群１基を検出しています。

縄文時代早期では，集石64基を検出し，それに伴い南九州に特徴的な数型式の土器が出土しています。

縄文時代晩期から弥生時代では，刻目突帯文土器が大量に出土しています。この土器が弥生時代の壺形土器と一緒に出土していることから，時間的な位置づけを考える上で重要な資料となりました。

また，土坑墓を２基検出しました。そのうち１基からは，日常使われる壺や甕に孔をあけた土器が出土しました。

古墳時代では，４軒の竪穴住居跡が検出されました。大隅半島は古墳地帯であるにもかかわらず，集落の状況があまり知られていなかっただけに良い事例となりました。須恵器のほかに管玉や勾玉が住居内で出土していることも県内では希な例です。

これらの遺構・遺物は，両側を川で囲まれた丘陵地であるという立地条件や，この地が古くより他地域との交流が盛んであったことと深い関係があると考えられます。

本報告書を県民をはじめ多くの方々にご覧いただき，地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値をご理解いただくことにより，国民の共有財産としての文化財が保護・活用されることを祈念しております。

最後に，調査にあたり，ご協力をいただいた県土木部道路建設課，志布志市教育委員会，並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　寺　田　仁　志

報　告　書　抄

ふりがな	いなりざこ　いせき
書名	稲荷迫遺跡
副書名	志布志福山線（有明志布志道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第169集
編集者名	東和幸・羽嶋敦洋・辻明啓
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL0995-48-5811
発行年月日	2012年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	日本測地系経緯度 北緯	日本測地系経緯度 東経	発掘期間	調査面積 (㎡)	調査起因
稲荷迫遺跡（いなりざこいせき）	志布志市志布志町安楽中島（しぶしししぶしちょうあんらくなかしま）	46221	293	31° 50′ 85″ 05″	131°08 ′ 13″ 78″	2009.6.10 ～ 2010.1.28 2010.5.10 ～ 2010.10.28	16,250	志布志福山線（有明志布志道路）改築に伴う記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷迫遺跡	集落跡	旧石器 縄文時代早期 後期 晩期 弥生時代早期 前期 中期 後期 古墳時代 古代 時期不祥	礫群１基 集石64基 連穴土坑３基 土坑２基 土坑11基 土坑墓２基 竪穴住居跡４軒 土坑１基 土坑15基	細石刃，細石刃核，剥片尖頭器 岩本タイプ，加栗山タイプ・小牧３Ａタイプ，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，別府原タイプ，手向山式，平栫式，塞之神Ａａ式土器，打製石鏃，削器，石槍，二次加工剥片，石核，磨製石斧，礫器 市来式，丸尾式，北久根山式，中岳Ⅱ式，上加世田式土器，入佐式土器 黒川式土器 打製石鏃，石匙，削器，掻器，石錐，石槍，穿孔具，楔形石器，二次加工剥片，使用痕剥片，石核，石錘，打製石斧，局部磨製石斧，磨製石斧，礫器，磨石，敲石，砥石，石皿，台石 刻目突帯文土器，壺形土器（夜臼式・板付Ⅰ式・板付Ⅱ式），隆線文土器，入来Ⅰ・Ⅱ式，吉ヶ崎式，前山Ⅱ式（岡山県周辺），山ノ口式，須玖Ⅱ式土器（北部九州），山ノ口式系土器 磨製石鏃，素材剥片，扁平磨製片刃石斧 成川式土器 勾玉，管玉 土師器（甕・坏・蓋），焼塩壺，鞴の羽口	

遺跡の概要

旧石器時代の遺構・遺物は少なかったが，縄文時代早期になると多くの遺構が検出された。土器型式が多様であるのに対し，遺物量が少なかったことから，キャンプサイトとしての利用が考えられる。縄文時代後期中半の市来式土器や丸尾式土器には，雲母を多く含むものと含まないものの両者が見られ，土器が作られた場所の違いも想定される。縄文時代後期後半の中岳Ⅱ式土器は，上加世田式土器や入佐式土器と関わりをもつ後出のものであると考えられる。縄文時代終末期から弥生時代前期にかけての時期は，刻目突帯文土器や孔列文土器に伴って，北部九州系の壺形土器が出土しており，その時間的位置づけを再検討する必要が出てきた。弥生時代中期は前半期が主体であり，後半になると次第に遺物量が減ってくる。古墳時代は５世紀後半から６世紀代を中心とする住居跡が４基検出され，志布志湾岸古墳地帯における集落の様相が明らかになった。また，管玉や勾玉をもっている点も南九州では希な例である。古代は遺物が少なかったが，焼塩壺や鞴の羽口が出土している。

遺跡位置図

例　言

1　本書は，志布志福山線（有明志布志道路）改築に伴う稲荷迫遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県志布志市志布志町安楽中島に所在する。
3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
4　発掘調査は，平成21年６月８日～平成22年１月28日，平成22年５月10日～平成22年10月27日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成23年度に実施した。
5　遺物番号は，時代ごとの通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
6　挿図の縮尺は，各図面に示した。
7　本書で用いたレベル数値は，国土交通省が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。
8　発掘調査における図面作成の一部は，有限会社ジパングサーベイに委託した。
9　発掘調査における写真の撮影は，各年度の調査担当者が行い，空中写真撮影は，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
10　石器の実測・トレースの一部は，株式会社パスコに委託し，堂込秀人・羽嶋敦洋が監修した。
11　自然科学分析は，株式会社加速器分析研究所，株式会社パレオ・ラボに委託した。
12　遺物の写真撮影は，吉岡康弘・西園勝彦・辻明啓が行った。
13　土器断面のアミカケは大粒の金色雲母を含むものであり，表面のアミカケは煤を，赤色は顔料塗彩を示す。
14　本書の編集は東・羽嶋・辻が担当し，執筆分担は次の通りである。

第Ⅰ章　第１節　東・羽嶋・辻
　　第２節　東・羽嶋・辻
　　第３節　東・羽嶋・辻
　　第４節　東・羽嶋・辻
　　第５節　東・羽嶋・辻
第Ⅱ章　第１節　東・羽嶋・辻
　　第２節　東・羽嶋・辻
第Ⅲ章　第１節　東・羽嶋・辻
　　第２節　東・羽嶋・辻
　　第３節　１　吉井
　　２　吉井
　　３　東・羽嶋・辻
　　４　東・羽嶋
　　５　東・羽嶋・辻
　　６　東・羽嶋・辻
　　７　堂込・東・羽嶋・辻
　　８　東・辻
　　９　東・辻
第Ⅳ章　株式会社加速器分析研究所・株式会社パレオ・ラボ
第Ⅴ章　第１節　辻
　　第２節　東
　　第３節　羽嶋
　　第４節　堂込

15　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，稲荷迫遺跡の遺物注記の略号は「INAZ」である。

本文目次

序文
報告書抄録
例言
第Ⅰ章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯……001
　第２節　事前調査……001
　第３節　本調査……001
　第４節　調査の経過……003
　第５節　整理作業の経緯……004
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……005
　第２節　歴史的環境……005
第Ⅲ章　発掘調査の方法と成果
　第１節　調査の方法……010
　第２節　層序……011
　第３節　調査の成果
　　１　旧石器時代の調査
　　（１）調査の概要……018
　　（２）遺構……018
　　（３）遺物……018
　　２　Ⅷ層の調査
　　（１）調査の概要……019
　　（２）遺構……019
　　３　縄文時代早期の調査
　　（１）調査の概要……020
　　（２）遺構……020
　　（３）遺物……057
　　４　縄文時代後期～弥生時代前期末の調査
　　（１）調査の概要……087
　　（２）遺構……087
　　（３）遺物……092
　　５　弥生時代前期末～中期の調査
　　（１）調査の概要……174
　　（２）遺構……174
　　（３）遺物……177
　　６　古墳時代の調査
　　（１）調査の概要……193
　　（２）遺構と遺物……193
　　７　古代の調査
　　（１）遺物……209
　　８　時期不祥遺構およびその他の遺物
　　（１）調査の概要……211
　　（２）遺構……211
　　（３）その他の時代の遺物……217
観察表……219
第Ⅳ章　自然科学分析……236
第Ⅴ章　総括……251
写真図版……263

挿図目次

第１図　グリッド配置図……002
第２図　周辺遺跡地図……008
第３図　基本土層図……011
第４図　土層断面図①（Ｃ－３～６区，Ａ～Ｃ－３区）…013
第５図　土層断面図②（Ｅ－16～25区）……014
第６図　土層断面図③（Ｂ－33～41区）……015
第７図　土層断面図④（Ｂ－42～49区）……016
第８図　土層断面図⑤（Ｂ～Ｄ－41区）……017
第９図　礫群　旧石器時代の石器……018
第10図　Ⅷ層検出１・２号集石……019
第11図　縄文時代早期遺構配置図①……022
第12図　縄文時代早期遺構配置図②……023
第13図　集石実測図（１）１・６号……024
第14図　集石実測図（２）２～４・７号……025
第15図　集石実測図（３）５・17号……026
第16図　集石実測図（４）11・14・16・18号……027
第17図　集石実測図（５）９・15号……028
第18図　集石実測図（６）８・12号……029
第19図　集石実測図（７）10・13号……030
第20図　集石実測図（８）25号……031
第21図　集石実測図（９）23・24・27・28号……032
第22図　集石実測図（10）21・22・26号……033
第23図　集石実測図（11）19・20号……034
第24図　集石実測図（12）34・37号……035
第25図　集石実測図（13）29・33号……036
第26図　集石実測図（14）30・35号……037
第27図　集石実測図（15）31・32・38号……038
第28図　集石実測図（16）36号……039
第29図　集石実測図（17）39～41号……040
第30図　集石実測図（18）42～44号……041
第31図　集石実測図（19）45・50・53号……042
第32図　集石実測図（20）46～48・54号……043
第33図　集石実測図（21）49・51・52号……044
第34図　集石実測図（22）55・56号……045
第35図　集石実測図（23）57・59・60号……046
第36図　集石実測図（24）58・61・62・64号……047
第37図　集石実測図（25）63号……048
第38図　Ⅴ層集石配置図および１/100実測図（１）……049
第39図　Ⅴ・Ⅵ層集石配置図および１/100実測図（２）…050
第40図　Ⅵ層集石配置図および１/100実測図（３）……051
第41図　連穴土坑１～３号……055
第42図　土坑１・２号……056
第43図　遺物出土状況図①（１～４区下層）……058
第44図　遺物出土状況図②（５～８区下層）……059
第45図　遺物出土状況図③（１～４区上層）……060
第46図　遺物出土状況図④（５～８区上層）……061
第47図　遺物出土状況図⑤（９～12区）……062
第48図　遺物出土状況図⑥（13～16区）……063
第49図　遺物出土状況図⑦（17～20区）……064
第50図　遺物出土状況図⑧（21～24区）……065
第51図　遺物出土状況図⑨（25～28区）……066
第52図　遺物出土状況図⑩（29～32区）……067
第53図　遺物出土状況図⑪（33～36区）……068
第54図　遺物出土状況図⑫（37～40区）……069
第55図　遺物出土状況図⑬（41～44区）……070
第56図　遺物出土状況図⑭（45～48区）……071
第57図　遺物出土状況図⑮（49・50区）……072
第58図　縄文時代早期の土器①……073
第59図　縄文時代早期の土器②……075
第60図　縄文時代早期の土器③……077
第61図　縄文時代早期の土器④……078
第62図　縄文時代早期の土器⑤……079
第63図　縄文時代早期の土器⑥……080
第64図　縄文時代早期の土器⑦……081

第65図　縄文時代早期の土器⑧ …… 082
第66図　縄文時代早期の石器① …… 084
第67図　縄文時代早期の石器② …… 085
第68図　縄文時代早期の石器③ …… 086
第69図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の遺構配置図 …… 087
第70図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の遺構① …… 088
第71図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の遺構② …… 089
第72図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の遺構③ …… 090
第73図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の遺構④ …… 091
第74図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器① …… 093
第75図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器② …… 094
第76図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器③ …… 095
第77図　縄文時代後期土器と検出状況 …… 096
第78図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器④ …… 097
第79図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑤ …… 099
第80図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑥ …… 100
第81図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑦ …… 101
第82図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑧ …… 102
第83図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑨ …… 104
第84図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑩ …… 105
第85図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑪ …… 106
第86図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑫ …… 107
第87図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑬ …… 108
第88図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑭ …… 109
第89図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑮ …… 110
第90図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑯ …… 111
第91図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑰ …… 112
第92図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑱ …… 113
第93図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑲ …… 114
第94図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器⑳ …… 115
第95図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉑ …… 116
第96図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉒ …… 117
第97図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉓ …… 118
第98図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉔ …… 119
第99図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉕ …… 120
第100図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉖ …… 121
第101図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉗ …… 123
第102図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉘ …… 124
第103図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉙ …… 125
第104図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉚ …… 126
第105図　縄文時代後期から弥生時代
前期末の土器㉛ …… 127
第106図　石器（1）打製石鏃１ …… 134
第107図　石器（2）打製石鏃２ …… 135
第108図　石器（3）石匙・スクレイパー１ …… 136
第109図　石器（4）スクレイパー２ …… 137
第110図　石器（5）スクレイパー３ …… 138
第111図　石器（6）スクレイパー・石錐
・石槍・穿孔具 …… 139
第112図　石器（7）楔形石器 …… 140
第113図　石器（8）二次加工剥片 …… 141
第114図　石器（9）使用痕剥片 …… 142
第115図　石器（10）石核１ …… 143
第116図　石器（11）石核２ …… 144
第117図　石器（12）打製石斧１ …… 145
第118図　石器（13）打製石斧２ …… 146
第119図　石器（14）打製石斧３ …… 147
第120図　石器（15）打製石斧４ …… 148
第121図　石器（16）打製石斧５ …… 149
第122図　石器（17）局部磨製石斧１ …… 150
第123図　石器（18）局部磨製石斧２ …… 151
第124図　石器（19）局部磨製石斧３ …… 152
第125図　石器（20）磨製石斧１ …… 153
第126図　石器（21）磨製石斧２ …… 154
第127図　石器（22）磨製石斧３ …… 155
第128図　石器（23）磨製石斧４ …… 156
第129図　石器（24）礫器 …… 157
第130図　石器（25）磨石・敲石１ …… 158
第131図　石器（26）磨石・敲石２ …… 159
第132図　石器（27）磨石・敲石３ …… 160
第133図　石器（28）磨石・敲石４ …… 161
第134図　石器（29）磨石・敲石５ …… 162
第135図　石器（30）磨石・敲石６ …… 163
第136図　石器（31）磨石・敲石７ …… 164
第137図　石器（32）磨石・敲石８ …… 165
第138図　石器（33）磨石・敲石９ …… 166
第139図　石器（34）磨石・敲石10 …… 167
第140図　石器（35）磨石・敲石11 …… 168
第141図　石器（36）石錘・砥石 …… 169
第142図　石器（37）石皿・台石・砥石 …… 170
第143図　石器（38）石皿・台石・砥石 …… 171
第144図　石器（39）石皿・台石 …… 172
第145図　石器（40）砥石 …… 173
第146図　弥生時代前期以降　土坑墓配置図 …… 174
第147図　弥生時代　土坑墓１号および出土土器 …… 175
第148図　弥生時代　土坑墓２号 …… 176
第149図　弥生時代前期末から中期の土器① …… 178
第150図　弥生時代前期末から中期の土器② …… 179
第151図　弥生時代前期末から中期の土器③ …… 180
第152図　弥生時代前期末から中期の土器④ …… 181
第153図　弥生時代前期末から中期の土器⑤ …… 182
第154図　弥生時代前期末から中期の土器⑥ …… 183
第155図　弥生時代前期末から中期の土器⑦ …… 185

第156図　弥生時代前期末から中期の土器⑧ …… 186
第157図　弥生時代前期末から中期の土器⑨ …… 187
第158図　弥生時代前期末から中期の土器⑩ …… 189
第159図　弥生時代前期末から中期の土器⑪ …… 190
第160図　弥生時代の石器 …… 192
第161図　古墳時代　住居・土坑配置図 …… 194
第162図　古墳時代　１号住居 …… 195
第163図　１号住居内遺物 …… 196
第164図　古墳時代　２号住居 …… 197
第165図　２号住居内遺物 …… 198
第166図　古墳時代　３号住居 …… 199
第167図　３号住居内遺物 …… 200
第168図　古墳時代　４号住居 …… 201
第169図　４号住居内遺物① …… 202
第170図　４号住居内遺物② …… 203
第171図　４号住居内遺物③ …… 204
第172図　４号住居内遺物④ …… 205
第173図　古墳時代　土坑出土土器 …… 205
第174図　古墳時代　土坑 …… 206
第175図　古墳時代の土器（その他） …… 207
第176図　古墳時代の石製品 …… 208
第177図　古代の遺物 …… 210
第178図　その他の遺構配置図 …… 211
第179図　その他の遺構① …… 212
第180図　その他の遺構② …… 213
第181図　その他の遺構③ …… 214
第182図　その他の遺構④ …… 215
第183図　その他の遺構⑤ …… 216
第184図　その他の遺物 …… 218

表目次

表１　遺跡一覧表 …… 009
表２　石器石材分類表 …… 012
表３　集石観察表① …… 021
表４　集石観察表② …… 052
表５　集石観察表③ …… 053
表６　打製石鏃分類表 …… 083
表７　打製石鏃石材別一覧表 …… 083
表８　打製石鏃分類表 …… 128
表９　Ⅱ層における磨・敲石類別出土数 …… 132
表10　Ⅲ層における磨・敲石類別出土数 …… 132
表11　石器観察表① …… 219
表12　石器観察表② …… 220
表13　石器観察表③ …… 221
表14　石器観察表④ …… 222
表15　石器観察表⑤ …… 223
表16　石器観察表⑥ …… 224
表17　土器観察表① …… 226
表18　土器観察表② …… 227
表19　土器観察表③ …… 228
表20　土器観察表④ …… 229
表21　土器観察表⑤ …… 230
表22　土器観察表⑥ …… 231
表23　土器観察表⑦ …… 232
表24　土器観察表⑧ …… 233
表25　土器観察表⑨ …… 234
表26　土器観察表⑩ …… 235

図版目次

図版１　安楽川から鹿屋方面を臨む …… 263
図版２　散礫検出状況
集石検出状況 …… 264
図版３　集石１～４・６・７・14・15号検出状況 …… 265
図版４　集石５・９・18号検出状況 …… 266
図版５　集石10～12・16・17・26号検出状況 …… 267
図版６　集石24～26・29・30・36号検出状況 …… 268
図版７　集石32～34・37～41号検出状況 …… 269
図版８　集石42～45号検出状況 …… 270
図版９　集石46～49・52・54号検出状況 …… 271
図版10　集石28・55・57・59・62～64号検出状況 …… 272
図版11　連穴土坑２号検出状況 …… 273
連穴土坑２号半截状況
連穴土坑２号断面状況
連穴土坑２号完掘状況
図版12　連穴土坑３号検出状況 …… 274
連穴土坑３号完掘状況
連穴土坑３号内土器出土状況
連穴土坑１号検出状況
連穴土坑１号断面状況
図版13　埋設土器検出状況 …… 275
埋設土器断面状況
土坑８号内遺物出土状況
土坑９号検出状況
土坑９号完掘状況
土坑１号検出状況
土坑１号完掘状況
図版14　土坑２号検出状況 …… 276
土坑２号完掘状況
土坑３号検出状況
土坑３号半掘状況
土坑４・５号検出状況
土坑４・５号完掘状況
図版15　土坑墓１号検出状況実測図 …… 277
土坑墓１号埋設土器
土坑墓１号完掘状況
土坑墓１号半截状況
土坑墓１号埋設土器検出状況
図版16　土坑墓２号検出状況 …… 278
土坑墓２号断面状況
土坑墓２号半截状況
土坑墓１・２号検出状況
土坑11号検出状況
土坑11号内遺物出土状況
土坑12号完掘状況
図版17　古墳１号住居検出状況 …… 279
古墳１号住居断面状況
古墳１号住居完掘状況
図版18　古墳１号住居土坑内坏検出状況 …… 280
古墳２号住居内遺物出土状況
古墳２号住居完掘状況
図版19　古墳３号住居検出状況 …… 281
古墳３号住居断面状況
古墳３号住居内遺物出土状況
図版20　古墳４号住居検出状況 …… 282
古墳４号住居内遺物出土状況

古墳４号住居完掘状況
図版21　縄文時代早期の遺物① …… 283
図版22　縄文時代早期の遺物② …… 284
図版23　縄文時代後期の遺物① …… 285
図版24　縄文時代後期の遺物② …… 286
図版25　縄文時代後期の遺物③ …… 287
図版26　縄文時代晩期～弥生時代早期の遺物① …… 288
図版27　縄文時代晩期～弥生時代早期の遺物② …… 289
図版28　弥生時代早期～前期土器① …… 290
図版29　弥生時代早期～前期土器② …… 291
図版30　弥生時代早期～前期土器③ …… 292
図版31　古墳時代土器① …… 293
図版32　古墳時代土器② …… 294
図版33　旧石器時代・縄文時代早期の石器 …… 295
図版34　縄文時代後期・晩期の石鏃 …… 296
図版35　縄文時代早期・後期・晩期の石器 …… 297
図版36　縄文時代後期・晩期の石器 …… 298
図版37　打製石斧（石製土掘具）・局部磨製石斧 …… 299
図版38　局部磨製石斧・磨製石斧 …… 300
図版39　磨石・敲石① …… 301
図版40　磨石・敲石② …… 302
図版41　縄文時代・弥生時代・古墳時代の石器・石製品 … 303
図版42　石皿・台石・砥石 …… 304

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部道路建設課（以下，道路建設課）は，主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に先立って，事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は，平成18年度に志布志市内の埋蔵文化財分布調査を実施し，事業区域内に船迫遺跡・高吉Ｂ遺跡・宇都上遺跡・稲荷迫遺跡・後迫遺跡等の所在が判明した。

この結果をもとに，道路建設課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の３者で協議した結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において試掘調査を実施することとした。

稲荷迫遺跡の試掘調査は，県文化財課が埋文センター及び志布志町教育委員会（現志布志市教育委員会）の協力を得て，平成20年11月16日に実施した。その結果，２ヶ所のトレンチで古墳時代の遺物包含層を確認した。このことを受けて，再度３者で協議を行った結果，設計変更等が不可能なことなどから記録保存のための本調査を実施することとなった。

本調査は，埋文センターが担当し，平成21年度に用地取得の終了部分を中心に記録保存のための本調査を実施することとした。また，平成18年度に試掘調査が実施できなかった部分についても補充の確認調査を実施することとした。その結果，最終的な本調査対象面積は16,250㎡となり，平成21年度と平成22年度の２カ年にわたり本調査を実施することとなった。

平成21年度の調査は，平成21年６月８日から平成22年１月28日まで実施し，平成22年度の調査は，平成22年５月10日から10月28日まで実施した。これらの調査の結果，旧石器時代から近世に至るまでの遺構・遺物等が発見された。

報告書作成作業は，平成22年度中に一部の水洗い・注記等の基礎整理を行い，平成23年度に本格的に実施した。

第２節　事前調査

１　分布調査

分布調査は，平成18年３月14日から16日にかけて，志布志町・有明町（現志布志市）を対象に実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局曽於支所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	県文化財課	
調査統括	県文化財課　課長	中尾　理
調査企画	県文化財課	
	課長補佐	前原　浩一
	主任文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	青﨑　和憲
調査担当	県文化財課	
	埋蔵文化財係長	堂込　秀人
調査協力	県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	日高　勝博
	志布志町教育委員会	小村　美義

２　試掘調査

試掘調査は，平成21年11月26日に実施した。調査は，対象地に４ヶ所のトレンチを設定し，小型バックホーと人力で掘り下げを進めていった。その結果，２ヶ所のトレンチで古墳時代の遺物の包含層を確認した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局曽於支所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査者	県文化財課	
	文化財研究員	川口　雅之
調査協力者	県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	西園　勝彦
	志布志市教育委員会	
	生涯学習課　主任主査	出口順一郎
	〃　主査	柿川　幸司
立会者	大隅地域振興局建設部曽於支所	
	技術主査	小筋隆次郎

第３節　本調査

（１）平成21年度（６月～９月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局曽於支所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	齋藤　守重

第１図　グリッド配置図（Ｓ=1/3000）

	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	調査第一課長	中村　耕治
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第一調査係長兼	
	南の縄文調査室長補佐	井ノ上秀文
調査担当	文化財主事	吉井秀一郎
	文化財研究員	辻　　明啓
調査事務	総務係長	紙屋　伸一
	主査	髙﨑　智博

（2）平成21年度（10月～１月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局曽於支所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	齋藤　守重
	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	調査第一課長	中村　耕治
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第一調査係長兼	
	南の縄文調査室長補佐	井ノ上秀文
調査担当	文化財主事	吉井秀一郎
	〃	
		中村幸一郎
	文化財研究員	辻　　明啓
調査事務	総務係長	紙屋　伸一
	主査	髙﨑　智博

（3）平成22年度（５月～ 10月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	調査第一課長	長野　眞一
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第一調査係長兼	
	南の縄文調査室室長補佐	冨田　逸郎
調査担当	文化財主事	森田　郁朗
	〃	井口　俊二
	文化財研究員	辻　　明啓
調査事務	総務係長	大園　祥子
	主査	髙﨑　智博

（4）平成23年度　報告書作成

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第一課長	堂込　秀人
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第一調査係長兼	
	南の縄文調査室室長補佐	東　　和幸
調査担当	文化財主事	羽鳴　敦洋
	文化財研究員	辻　　明啓
調査事務	総務係長	大園　祥子
	主査	下堂園晴美
調査指導	福岡県立埋蔵文化財センター	
	所長	池崎　譲二
	鹿児島国際大学	
	学芸員	鐘ヶ江賢二

第４節　調査の経過

調査の経過については，日誌抄を年度ごと及び月ごとに集約して記載する。

平成21年度

６月

８日調査開始。表土剥ぎ，プレハブ設置，重機，ベルコン搬入，調査開始に伴う作業員オリエンテーション，確認トレンチ（Ｅ－10，Ｅ－19，Ｅ－22，Ｄ－25，Ｂ－33・34，Ｂ－42，Ｇ－41・42，Ｅ－43・44，Ｂ・Ｃ－47・48）の設置，掘り下げ。主な調査区Ｂ－10～14区，Ｃ－10～14区，Ｄ－10～15区，Ｅ－11～15区（縄文時代後期～古墳時代の調査）。遺物取り上げ（1～377）。

７月

主な調査区Ｂ－９～12区，33・34区，42区，Ｃ－９～14区，Ｄ－11～14区，Ｅ－11～15区，19～25区，43・44区，Ｆ－19～22区，43・44区，Ｇ－41・42区（縄文時代後期～古墳時代の調査）。遺物取り上げ（378～1648）。

８月

主な調査区Ａ－６区，Ｃ－５・６区，17～22区，Ｄ－５・６区，17～21区，Ｅ－13～24区，Ｆ－18～24区，Ｚ－６区（縄文時代後期～古墳時代の調査）。遺物取り上げ（1649～4133）。

９月

主な調査区Ｃ－14～22区，Ｄ－14～22区，Ｅ－13～22区，Ｆ－17～23区（縄文時代後期～古墳時代

の調査)。遺物取り上げ（4134 ～ 6477)。
10月
　主な調査区Ａ－６～８区，Ｂ－６～８区，Ｃ－２～８区，Ｄ－１～８区，Ｅ－１～８区（縄文時代後期～弥生時代の調査)。遺物取り上げ（6478 ～ 8626)。
11月
　主な調査区Ｃ－１～９区，Ｄ－１～９区，Ｅ－２～８区（縄文時代早期，縄文時代後期～弥生時代の調査)。遺物取り上げ（8627 ～ 11106)。
12月
　主な調査区Ａ－２～６区，Ｂ－２～６区，Ｃ－２～10区，Ｄ－２～10区，Ｅ－５～10区，Ｙ－２～４区，Ｚ－２～４区（縄文時代早期，縄文時代後期～弥生時代の調査)。遺物取り上げ（11107 ～ 12388)。
１月
　主な調査区Ｂ－４～８区，Ｃ－２～８区，Ｄ－２～７区，Ｅ－２・３区（縄文時代早期の調査)。遺物取り上げ（12389 ～ 13428)。
平成22年度
５月
　５月10日調査開始。主な調査区Ｂ－30 ～ 48区，Ｃ－24 ～ 27区，32 ～ 37区，39・40区，46 ～ 50区，Ｄ－24 ～ 27区，29・30区，32 ～ 37区，48 ～ 50区，Ｅ－24 ～ 27区，32 ～ 36区，43 ～ 50区，Ｆ－24 ～ 27区，33 ～ 36区，43 ～ 48区，Ｇ－42 ～ 48区（縄文時代後期～古墳時代の調査)。遺物取り上げ（13429 ～ 14236)。
６月
　主な調査区Ｂ－32 ～ 40区，46 ～ 48区，Ｃ－32 ～ 40区，46 ～ 48区，Ｄ－32 ～ 40区，46 ～ 49区，Ｅ－43 ～ 49区，Ｆ－42 ～ 48区，Ｇ－42 ～ 48区，Ｈ－43 ～ 48区（縄文時代後期～古墳時代の調査)。遺物取り上げ（14237 ～ 16517)。
７月
　主な調査区Ｂ－31 ～ 34区，36 ～ 40区，44 ～ 48区，Ｃ－31 ～ 34区，36 ～ 40区，43 ～ 48区，Ｄ－31 ～ 34区，36 ～ 40区，43 ～ 48区，Ｅ－31 ～ 34区，38 ～ 40区，43 ～ 47区，Ｆ－46･47区，Ｇ－46･47区（縄文時代後期～古墳時代の調査)。遺物取り上げ（16518 ～ 18846)。
８月
　主な調査区Ｂ－33 ～ 36区，41 ～ 46区，48 ～ 50区，Ｃ－33 ～ 36区，38 ～ 50区，Ｄ－33 ～ 50区，Ｅ－33 ～ 40区，42 ～ 44区（縄文時代後期～弥生時代の調査)。遺物取り上げ（18847 ～ 20434)。
９月
　主な調査区Ｂ－33 ～ 44区，49･50区，Ｃ－33 ～ 43区，49・50区，Ｄ－33 ～ 43区，Ｅ－39・40区，42・43区，Ｆ－42・43区，Ｇ－42・43区（縄文時代後期～弥生時代の調査)。遺物取り上げ（20435 ～ 22287)。
10月
　主な調査区Ｂ－32 ～ 43区，46 ～ 48区，Ｃ－37 ～ 43区，49・50区，Ｄ－33 ～ 43区，Ｅ－39・40・42・43区，Ｆ－42・43区，Ｇ－42・43区（縄文時代後期～弥生時代の調査)。遺物取り上げ（22288 ～ 23141)。

第５節　整理作業の経緯

　整理作業は，平成22・23年度に実施した。大まかな整理作業及び報告書作成作業の経緯は次の通りである。
平成22年度…水洗い・注記
平成23年度…水洗い・注記・接合・復元・実測・編集
　11月報告書作成指導委員会　井ノ上次長他９名
　11月報告書作成検討委員会　寺田所長他12名

平成21年度　Ｂ～Ｄ－２～４区調査風景

平成22年度　Ｂ～Ｄ－34 ～ 36区調査風景

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

志布志市志布志町（以下志布志町）は，鹿児島県の最東部で，大隅半島の東海岸に位置し，北東から東側を宮崎県都城市及び串間市と接し県境をなしている。北西部から西側へは，末吉町（現曽於市），松山町（現志布志市），有明町（現志布志市）と接し，南は太平洋に向け湾口を開く志布志湾に望んでいる。

志布志町の絶対位置は，町のほぼ中心にあたる志布志港導灯で示すと，北緯31度38分，東経131度11分30秒である。東西に最大幅約10.2㎞，南北に約23㎞あり縦長な形をなし，総面積は138.9㎢ある。人間の生活に大きな影響を与える気温は，年平均17.2℃，年較差は20.0℃となり温暖な気候である。ただし，海岸部と山間部では降霜状況を調べてみると差があることがわかる。降水量は比較的多く年間2200㎜を測る多雨地帯である。また，志布志湾に浮かぶ枇榔島は，海流の影響を受け，熱帯，亜熱帯植物が繁茂している。

大隅半島と都井岬半島にだかれた志布志港の湾頭に位置する志布志町の地形は，山地・台地・低地に大別できる。県境をなす北東部より東部の山地は日向山脈の一支脈鰐塚山塊の南端部にあたり，極北にある三角点（691.6m）を最高に，御在所岳（530.4m），笠祇岳（444.2m），陣岳（349.3m）の山々が連なり，東側の海岸線近くまで延びている。標高200m以上の山地とその山地に接続する丘陵地の山稜線は平坦化し，数多くの浸食谷が発達している。山稜に続く台地は，シラス土壌による火山灰台地である。台地を表す『原』『野』のつく地名が多い。これらのシラス台地は，東側にある延長約15㎞を測る前川，西側の延長約24㎞を測る安楽川を主とする大小河川による活発な浸食活動による深い浸食谷（『迫』と呼ばれる）が樹枝状に走り，大小いくつかの台地に分断されている。また，これらの河川は浸食谷を作るとともに，沖積低地を形成し，これらの低地は各所の河岸段丘上に発達している。海岸線の東半分は山稜並みにシラス台地が直接張り出しているので，小リアス式海岸状を呈し，西側部分は海食による僅かな海岸沖積地が形成され，市街地や一部水田が発達し，砂丘や砂浜をへて海岸に接している。しかし，近年志布志港が中核国際港に認定されたことにより港の改修工事が急速に進み，海岸線の様相は大きく変化している。

稲荷迫遺跡は，志布志町の西部で松山町境の安楽字稲荷迫に所在する。安楽川と尾野見川による浸食を受けた，痩尾根状の稜線の南から西にかけて標高約60mの斜面に立地している。なだらかな斜面であり，近くに２つの河川が流れているなど地理的な条件に恵まれていることから，旧石器，縄文時代早期・後期・晩期，弥生時代，古墳時代と遺構・遺物を検出・出土し，長期間に渡ってこの地が利用されていたことがわかる。

第２節　歴史的環境

志布志町は，古代以来日向国に属し，中世まで救二院と呼ばれていた。

『志布志』という地名は，鎌倉期の正和５年（1316年）11月３日の沙弥蓮正打渡状（旧記雑録）に「日向方嶋津御庄志布志津」とあるのを初見として，以後「旧記雑録」に頻出する。三国名勝図会によると，ひそかにこの地を訪れた天智天皇に宿の女性たちが手布を贈り，天皇がこれを賞したことにちなんだものだと紹介されているが，古くからこの地が海陸の要衝であったことが，このような言い伝えを残していることと関係していると考えられる。

室町時代以降も国内外航路の要衝として栄え，1562年に著された中国の海防・地理書「籌海図編」の倭国事略に，薩摩・大隅の主要港の一つとしてあげられている「審孛署」は志布志のこととされる。

このように要衝の地であった志布志を巡って中世から戦国時代にかけ，楡井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏と支配勢力はめまぐるしく変わり，最終的に島津氏の勢力下となり江戸時代をむかえる。江戸期も藩境の要地で，番所・辺路番所が設置されている。志布志湊は南大隅および日向所県群の蔵米の集積地で，琉球・大阪方面などへの物資の中継地として栄えた。近世中期には志布志千軒町といわれるほど賑わいをみせた。海運業で栄えた者の中には密貿易に従事していた者も多くいたと考えられており，地域の民話にも唄われることがあったとのことである。

明治４年の廃藩置県により鹿児島県諸県郡志布志郷となり，同年11月には新設の都城県に，同６年には宮崎県の所管に移され，同９年再び鹿児島県の所管となり，同16年宮崎県再設置の際は鹿児島県にとどめられ，同県南諸県郡に属した。

近年の平成の大合併により，志布志町・松山町・有明町の３町が合併し志布志市となり現在に至る。

志布志地方の考古学史をみると，戦前から瀬之口伝九郎，梅原末治，島戸貞義，寺師見国氏らの多くの調査研究があり，戦後は海老原行秀，鏡山猛，小田富士雄，河口貞徳，瀬戸口望，諏訪昭千代，上村俊雄，酒匂義明氏等の諸先学の調査研究がある。これらの方々の活動によ

り，早くから志布志町では，旧石器時代から歴史時代に至るまでの様々な時代の遺跡が発見されている。なかでも志布志町においては『縄文銀座』と称されるほど縄文時代の遺跡が多い地方である。以下に，時代ごとの概要を述べる。

旧石器時代では，八郎ヶ野遺跡から頁岩・黒曜石の破片が，井出平遺跡から細石刃核と黒曜石片が，倉園Ｂ遺跡・道重遺跡から細石刃・細石刃核が出土している。

縄文時代草創期では，東黒土田遺跡・鎌石橋遺跡から隆帯文土器が出土している。特に，東黒土田遺跡では，舟形石組遺構や貯蔵穴など遺構の検出があり，この貯蔵穴より落葉性のコナラ属と思われる木の実が出土し，IntCal09による較正年代で13,400calＢＰ頃であることがわかっている。鎌石橋遺跡では，薩摩火山灰直下から隆帯文土器が出土している。

『縄文銀座』と称される志布志において縄文時代早期から遺跡数が爆発的に増える。現在，志布志町内で確認している縄文早期の遺跡は76遺跡ある。代表する遺跡として倉園Ｂ遺跡がある。倉園Ｂ遺跡では，前平式土器・吉田式土器・石坂式土器など早期を代表する土器をはじめ，住居跡，連穴土坑，集石，配石遺構などが検出されている。出口Ｂ遺跡では，前平式土器・塞ノ神式土器が出土している。この出口遺跡では，故海老原行秀氏が昭和の初期に異形石器（双角石器または独鈷石）を発見している。また，稲荷迫遺跡の縄文早期のテーマである集石に焦点を当ててみると，家野遺跡，井出平遺跡，稲荷上遺跡，潤ヶ野遺跡，鎌石遺跡，倉園Ｂ遺跡，島廻遺跡，夏井土光遺跡，二反野遺跡，宮谷口遺跡，別府（石踊）遺跡，柳遺跡での検出が報告されている。集石の形状や土器の出土状況から，稲荷迫遺跡と比較する必要があると考えられる。

縄文時代前期の遺跡は，21遺跡ある。野久尾遺跡では，前期を代表する曽畑式土器が出土している。また，撚糸文土器から須恵器まで幅広い時代にわたる遺物が野久尾遺跡では出土しているが，約5,000点の遺物のうち約80％は条痕式土器であり，志布志町の前期末から中期初頭を代表する遺跡であり，近年，野久尾式土器として型式認定された。そのほか，鎌石橋遺跡，別府遺跡（周辺遺跡位置図49）で曽畑式土器，轟式土器が出土している。

縄文時代中期の遺跡は，23遺跡ある。野久尾遺跡では，突帯を口縁部に巡らせたり，波状や縦位に貼付するもので，その突帯がいわゆる「みみずばれ状」となり，底部が尖底になる野久尾式土器が出土している。形状から縄文時代中期を代表する深浦式土器との関連が考えられる。また，池野遺跡，樽野遺跡，土光Ａ遺跡，野久尾遺跡では，縄文時代中期該当の春日式土器が出土している。

縄文時代後期の遺跡は，41遺跡ある。代表する遺跡として中原遺跡と片野洞穴遺跡がある。中原遺跡（周辺遺跡位置図11）では，縄文時代中期終末から後期前半にかけての土器である，南福寺式土器や阿高系の類似土器，磨消縄文土器，擬似縄文土器，指宿式土器などが多量に出土した。特に，磨消縄文系土器で，瀬戸内地方の福田ＫⅡ式の完形に近い土器は，形態や技法は瀬戸内系であるが，胎土は地元のものであり，この時期における文化の伝播や交流を考える上で貴重な資料である。また石錘が400個を超える数で出土し，これだけまとまった量の出土例は県内でも見ない。この遺跡のすぐ下は安楽川と尾野見川が合流する地点であり関連があると思われる。また，土器の破片を利用した土製加工品のいわゆるメンコも多量に出土している。片野洞穴遺跡では，縄文時代後期から近世にかけての遺物が出土しているが，出土層位が確実となる層で，西平式・市来式・御領式・草野式土器が出土している。またこれらの土器と共に，骨針や骨鏃が出土している。

縄文時代晩期の遺跡は，45遺跡ある。遺跡数が多いが耕作による削平を受けている場合が多い。小迫遺跡，飛渡遺跡では，黒川式土器とともに孔列文土器が出土している。稲荷迫遺跡でも多量の孔列文土器が出土しており関連性が考えられる。

弥生時代の遺跡は，67遺跡ある。しかし，上記の縄文時代晩期と同様，層の残りが悪い状態である。柳遺跡では，４×3.3ｍの長方形プランの住居跡が検出されており，柱穴が内外に９基ある。住居を構築していた材木と思われる棒状の炭化物が多く認められ，焼失した可能性も考えられる。住居内からは山之口式土器と考えられる土器や，勾玉と考えられる土製品，軽石製品が出土している。上田屋敷遺跡からは完形の山之口式土器が出土している。また，夏井土光遺跡では，入来式土器と共に刻目突帯文土器が出土している。その中に方形状に区画するように刻目突帯文が巡り，区画内に３条を基本とした並行沈線が斜位と山形状に，２条をもって描かれた同心円状が部分的に見られる。刻目突帯の間に沈線を引く土器が，稲荷迫遺跡でも出土しており関連性を考える上で重要である。

古墳時代の遺跡は12遺跡ある。飯盛山古墳は志布志町夏井字牟田地内のダグリ岬で，標高約50.2ｍの丘陵の頂に残存している。日本考古学協会員故瀬戸口望氏によると，石室は後円部の頂上にあり，長さ約180㎝，幅約90㎝，高さ約90㎝の竪穴式石室だったとされる。墳端があまり広がらない，ほぼ長方形に延びた形が予想されており，墳形は柄鏡式の前方後円墳と想定されているが，昭和38年の国民宿舎建設工事により原形をとどめていない。平成10年の調査で，古墳の外表施設である葺石を検出し，赤色顔料が塗布されている，壺形埴輪，器台

形埴輪，円筒形埴輪が出土している。時期決定の指標となる須恵器や成川式土器等が出土していないため明確な年代を特定することはできないが，壺形埴輪の長胴化，円筒形埴輪が存在することから，壺形埴輪の最終段階である，４世紀末から５世紀初頭であるとまとめられている。小牧古墳（周辺遺跡位置図44）は，志布志町安楽字小牧地内の標高約51mの小牧台地に所在している。全長約40mの前方後円墳と想定されている。墳丘上では葺石の一部と見られる自然礫，軽石，土師器，須恵器等の遺物が表面採取されている。昭和59年1月10日に町指定された。また，六月坂横穴墓（周辺遺跡位置図53）からは，横穴墓とともに７世紀代の須恵器が出土している。志布志町内では，古墳時代に該当する遺跡の数が非常に少ないが，耕作等による撹乱や古くから生活した場所として数少ない平地を利用していたことが原因と考えられる。今回，稲荷迫遺跡では，古墳時代の住居が残りのよい状態で検出されていることから，この地方の古墳時代の人々の暮らしを考察する上で重要になると考えられる。

古代の遺跡は，18遺跡ある。宝満寺跡は，志布志湾に流れ込む前川のほとり，河口からほど近い場所に所在している。宝満寺は，近世の「三国名勝図絵」にも様子が描かれ，廃仏毀釈により明治２年に廃寺となるまで，西海の華と称されるほどの寺院であった。昭和42年3月31日に県指定されている。

中近世の遺跡は，18遺跡ある。中近世を代表する遺跡としては，志布志城跡（周辺遺跡位置図36 ～ 38）と宝満製鉄遺跡がある。志布志城は前川の河口付近，シラス台地の先端部に存在する。前川の西に北東から南西に延びた細長い丘陵の先端部に内城が存在する。内城の西側に松尾城，高城二の丸が続き，その南に高城と新城が存在する。４城は海岸段丘であるシラス台地の端部に存在し，アカホヤ火山灰土層あるいは，シラス火山灰土層まで造成して曲輪面等を得ている。遺物と文献資料から見ると，14 ～ 16世紀末まで４城が並行して利用されたと考えられている。宝満製鉄遺跡は，宝満寺跡内に所在している。志布志町内では，中世の製鉄・鍛冶関連遺跡として，宝満製鉄遺跡と志布志城跡が，江戸～明治の時期が東谷製鉄遺跡・荒田製鉄遺跡をはじめ合計14カ所が確認されている。製鉄が盛んであった理由として，原料砂鉄の供給地である志布志海岸に近いのが一つの理由と考えられる。現在でも浜砂鉄が薄く堆積している状態である。もう一つの理由として，安楽川，前川などの中小河川沿いに製鉄関連遺跡が多く確認されていることから，これらの河川を利用していたことが考えられる。安楽川沿いにある稲荷迫遺跡の周辺にも，地元の人が「カナクソ」と呼ぶ地名があったり，羽口と考えられる遺物も出土していることから，製鉄に関する生活が営まれていた可能性がある。

参考文献

工藤雄一郎　2011 『東黒土田遺跡の堅果類と縄文時代草創期土器群の年代に関する考察』

鹿児島県考古学会　1972 『鹿児島考古第6号』

鹿児島県考古学会　1980 『鹿児島考古第14号』

鹿児島県考古学会　1982 『鹿児島考古第16号』

志布志町　2『志布志町史』

安楽川沿いの岩陰

中島の田ノ神像

安楽
曲瀬
中島
風八重
毛穴野
弓場ヶ尾
高吉
南高吉
平和
老人ホーム
上宮内
北大原
大原
南大原
志布志町
下宮内
平床
安楽川
前畑
平城
養鰻場
昭和台
町原
関屋
文化会館
西谷
上昭和
志布志
新町
清水
六月坂
安良
志陽
中宮
稚子松
松波
若浜
丁田
上之浜
大浜
安楽橋
岩浜大橋
志布志港
0 (1 : 25,000) 1km

第２図　周辺遺跡地図

表１　遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	備考
1	札建遺跡	内之倉字札建	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(９)
2	稲荷上遺跡	安楽字稲荷上	志布志町埋文報 (32)
3	稲荷迫遺跡	安楽字稲荷迫・牧	本報告書
4	小迫下遺跡	安楽字小迫下	平成13年分布調査・平成16年確認調査
5	宇都上遺跡	安楽字宇都上・高吉	平成18年県道関係分布調査
6	高吉遺跡	安楽字高吉・茶屋馬場・雨堤	平成３年農政分布調査
7	弓場ヶ尾遺跡	帖字弓場ヶ尾	町埋文報(31)・(35)
8	渡迫遺跡	安楽字渡迫	平成11年農政分布調査
9	西迫遺跡	安楽字西迫	平成15年農政分布調査
10	中原遺跡	安楽字中原・西迫・中渡	
11	中原（曲瀬）遺跡	安楽4712-11・4712-6字中原	志布志町埋文報(９)
12	小瀬Ａ遺跡	安楽字中原	
13	小瀬Ｂ遺跡	安楽字小瀬	
14	大渡遺跡	安楽字大渡	
15	大渡遺跡	安楽字大渡	
16	船迫遺跡	安楽字船迫・大渡	平成18年県道関係分布調査・平成22年本調査
17	湯田堀遺跡	帖字湯田堀	平成11年農政分布調査・平成14年確認調査
18	桃ノ木遺跡	帖字桃ノ木	
19	上原遺跡	安楽字上原	平成11年農政分布調査
20	大久保C遺跡	安楽字大久保	平成11年農政分布調査
21	山角Ｂ遺跡	安楽字山角	平成３年確認調査・発掘調査
22	山角Ａ遺跡	安楽字山角	
23	炭床遺跡	安楽字炭床	平成３年確認調査・発掘調査
24	大久保Ａ遺跡	安楽字大久保	
25	大久保Ｂ遺跡	安楽字大久保・七本松	
26	上重遺跡	安楽字上重	
27	百堂穴遺跡	安楽字岩戸	
28	道悦遺跡	帖字道悦	
29	七本松Ｂ遺跡	安楽字七本松	平成11年農政分布調査
30	七本松Ａ遺跡	安楽字七本松	平成11年農政分布調査
31	高牧遺跡	安楽字高牧	平成５年確認調査・平成11年農政分布調査
32	安楽城跡	安楽字前原	1190 ～ 1198年（建久年間）
33	山宮神社	安楽字宮馬場	銅鏡(唐草鴛鴦文様鏡)，大正７年４月８日国指定
34	宮内遺跡	安楽字宮内	
35	宮之上遺跡	安楽字宮之上	平成12年東九州自動車道関係分布調査
36	志布志城（松尾城）跡	帖字松尾	平成17年７月14日国指定，志布志町埋文報(34)
37	志布志城（高城）跡	帖字高城	平成15年７月，平成16年３月確認調査
38	志布志城（新城）跡	帖字宇都上・高城	志布志町埋文報(14)･(34)
39	二重堀Ｂ遺跡	二重堀Ｂ	平成11年農政分布調査
40	二重堀Ａ遺跡	安楽字二重堀	
41	宮脇遺跡	安楽字宮脇･岩下･勢園･下原	志布志町埋文報(28)
42	水神松遺跡	安楽字水神松	
43	勢園遺跡	安楽字勢園	平成11年確認調査
44	小牧古墳群	安楽5973-10字小牧	昭和59年１月10日町指定(１号墳)，「古代学研究」102
45	大原遺跡	安楽字大原	消滅の可能性が高い
46	権現原遺跡	安楽字権現原	
47	八ヶ代遺跡	安楽字八ヶ代	平成６年農政分布調査・平成８年確認調査
48	鳥井下遺跡	安楽字鳥居下	
49	別府遺跡	安楽字別府	
50	別府上遺跡	安楽字別府上	
51	水ヶ迫横穴墓	志布志字水ヶ迫	昭和８年発見
52	船磯遺跡	安楽字船磯・水ヶ迫	
53	六月坂横穴墓	志布志字水ヶ迫	明治42年発見か
54	大西遺跡	志布志字大西	
55	愛甲喜春墓	志布志二丁目	昭和36年７月16日県指定
56	大慈寺(即心院跡)	志布志二丁目（字上小西）	1340年（興国元年）大慈寺開山，昭和46年７月１日県指定(即心院跡)
57	大慈寺開山堂墓地	志布志二丁目	大慈寺止々庵跡，大慈寺開山堂

第Ⅲ章　発掘調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

稲荷迫遺跡は，東側の安楽川と西側の尾野見川による浸食を受けた痩尾根状の稜線の南から西にかけて標高約60mの台地上に位置する。

調査範囲は，この台地を尾野見川から安楽川にむけて横切る16,250㎡である。調査区の設定は，工事計画図に示されているセングリッド№.76と№.77を直線で結びこれを東西軸とし，これに直行する軸を南北軸とした。これを基準に10m間隔に遺跡の西から東へ１，２，３・・・，北から南へＹ，Ｚ，Ａ・・・と調査区割りを設定した。

平成21年度は用地取得終了部分から本調査を行い，同時に試掘調査が実施できなかった部分の確認調査を行った。その結果Ｙ～Ｅ－１～８区で旧石器～弥生時代までの遺物包含層が確認された。そこで，21年度はＹ～Ｆ－１～27区まで期間を延長して調査を実施することとした。調査期間は，平成21年６月８日から平成22年１月28日までの８ヶ月間で，調査対象面積は7,620㎡である。

平成22年度の調査は，平成22年５月10日から10月28日までで，調査対象面積は，8,630㎡である。

調査の方法は，各年共通で重機（バックホー）によって表土を除去した後に人力による発掘を進めた。遺物包含層は，遺跡西側では良好に認められた。西側のうち１～８区は縄文早期が主体となることからⅦ層（サツマ火山灰）上面でコンタを作成し，９～27区はⅢ層下面（御池火山灰を含む）で作成した。遺跡東側の32～50区は残存状況が悪かったので，各時期ごとの地形測量は難しいと判断し，Ⅳ層上面で一括して測量した。

遺物包含層が残存している場合は，小破片は先に設定した調査区ごとに一括して取り上げ，それ以外の遺物に関しては必要に応じて写真撮影を実施した後に平板により取り上げた。

２　遺構の認定と検出方法

精査作業を経て検出された遺構については，概ね２ｍ四方以上のものを竪穴状遺構と認定し，検出された順にSHの略記号を用いた。２ｍに満たないものは土坑として取り扱い，検出された順にＳＫの略記号を用いた。集石は，１～８区の間に集中して検出し，検出した順にＳＥの略記号を用いた。

これらの遺構は，検出状況の写真撮影や図面作成を実施した後掘り下げを行い，出土遺物の取り上げや調査状況の撮影，土層断面実測等を遺構の残存状況に応じて行った。遺構の認定については，埋土の状況や床面の状態，遺構内遺物の出土状況などから判断していった。

なお，平成21年度の調査において，集石の図面の一部について実測業務委託を実施している。

３　整理作業の方法

水洗いは平成22年度中に実施した。水洗作業の方法は，土器や石器に関してはブラシを用いたが，黒曜石や剥片石器類は超音波洗浄器を用いて進めていった。

注記は，注記記号を「ＩＮＡＺ」を頭に，包含層資料は続けて「区」，「層」，「遺物番号」の順番で記入した。遺構は「ＩＮＡＺ」に続いて,「ＳＨ」や「ＳＫ」,「ＳＥ」などの遺構記号を用いている。なお，爪先上の小破片に関しては注記を省略している。

遺物の接合は，石器や剥片類は時間的な制約等から断念し，土器類に関してのみ行った。それぞれの同一区内で接合作業を行い，徐々に接合範囲を広げていった。その間に，特徴的な遺物で抽出できるものに関しては適宜抜き出して接合を進めていった。

４　出土遺物の分類について

（１）土器類

層位的に大きくアカホヤ（Ⅳ層）下層と上層に分かれるので，縄文時代早期とそれ以降に区分しⅢ層下面出土については縄文時代後期の範囲で扱った。Ⅲ層およびⅡ層出土の土器については，型式的に混在している様相がみられるため，古いと考える方から順に記述することとする。既存の型式名が明らかな土器については，様式ごとあるいは型式ごとに分類し，さらに器種で細分できる場合は深鉢形土器・浅鉢形土器・・・とした。なお，総括で述べるように，器種間の並行関係については，確実には押さえることができないので，時間順に並んでいない場合もある。

（２）石器類

①　石器，石製品

縄文時代相当石器については，縄文時代早期相当期に比定されるⅤ層・Ⅵ層出土の石器及び，縄文時代後期・晩期相当期に比定されるⅡ層・Ⅲ層出土石器に分類し，掲載した。

なお，Ⅱ層・Ⅲ層出土の石器及び石製品は，縄文時代晩期以降，弥生時代，古墳時代相当期と判断できるものと混在する可能性が高い。故に弥生時代及び，古墳時代相当と判断できる遺物のみ，時代ごとに掲載した。

従って，縄文時代後期・晩期として報告したものの中には，弥生時代以降相当の資料が混在している可能性がある。

② 石材分類

石材については，肉眼観察による石材産地分類がある程度推定できる，黒曜石及び安山岩等について細分化を試みた。その他の石材については，産地同定等行っていない。

多く検出された頁岩については，風化面等で判断し，他の頁岩と分類した。

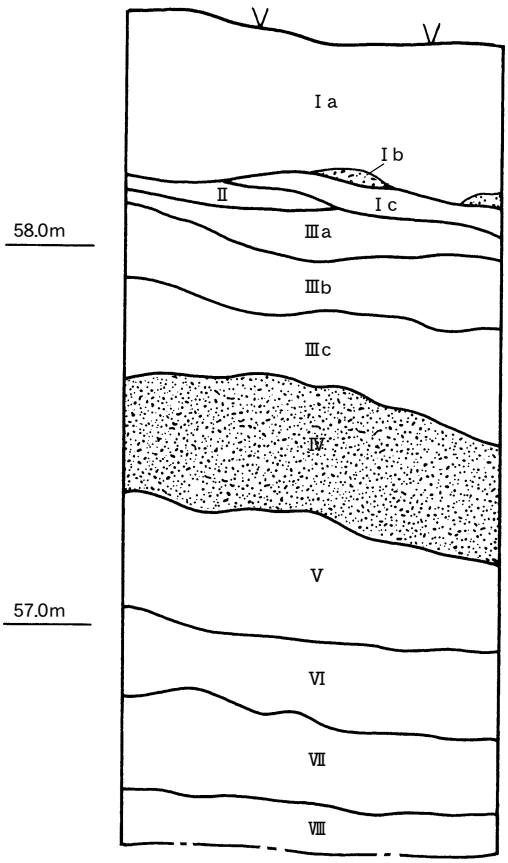
また，頁岩質，砂岩質素材礫等にホルンフェルス化しているものがみられたが，変成が顕著であるものについてのみ，ホルンフェルスとして分類した。

石器の分類は，器種ごとに細分が可能なものについては細分を行い，剥片・チップ類は石材分類は行ったが細分は行っていない。これらの概要は表２に示した。２次加工剥片に関しては，器種不明の資料もここに分類されている。

第２節　層序

稲荷迫遺跡の基本土層・遺物包含層は，以下のように整理した。遺跡全体が，茶畑もしくは畑であったため耕作による削平を受けていた。そのため全体的にⅡ層の残存状況が悪く，中央部分（16 ～ 22区）を除いては部分的に残っている状態であった。そのためⅡ・Ⅲ層では型式が混在する形で遺物が出土している。Ⅳ層（アカホヤ火山灰）から下の縄文時代早期遺物を包含する層は，残存状況が良かった。

基本土層図は，右図である。



第３図　基本土層図

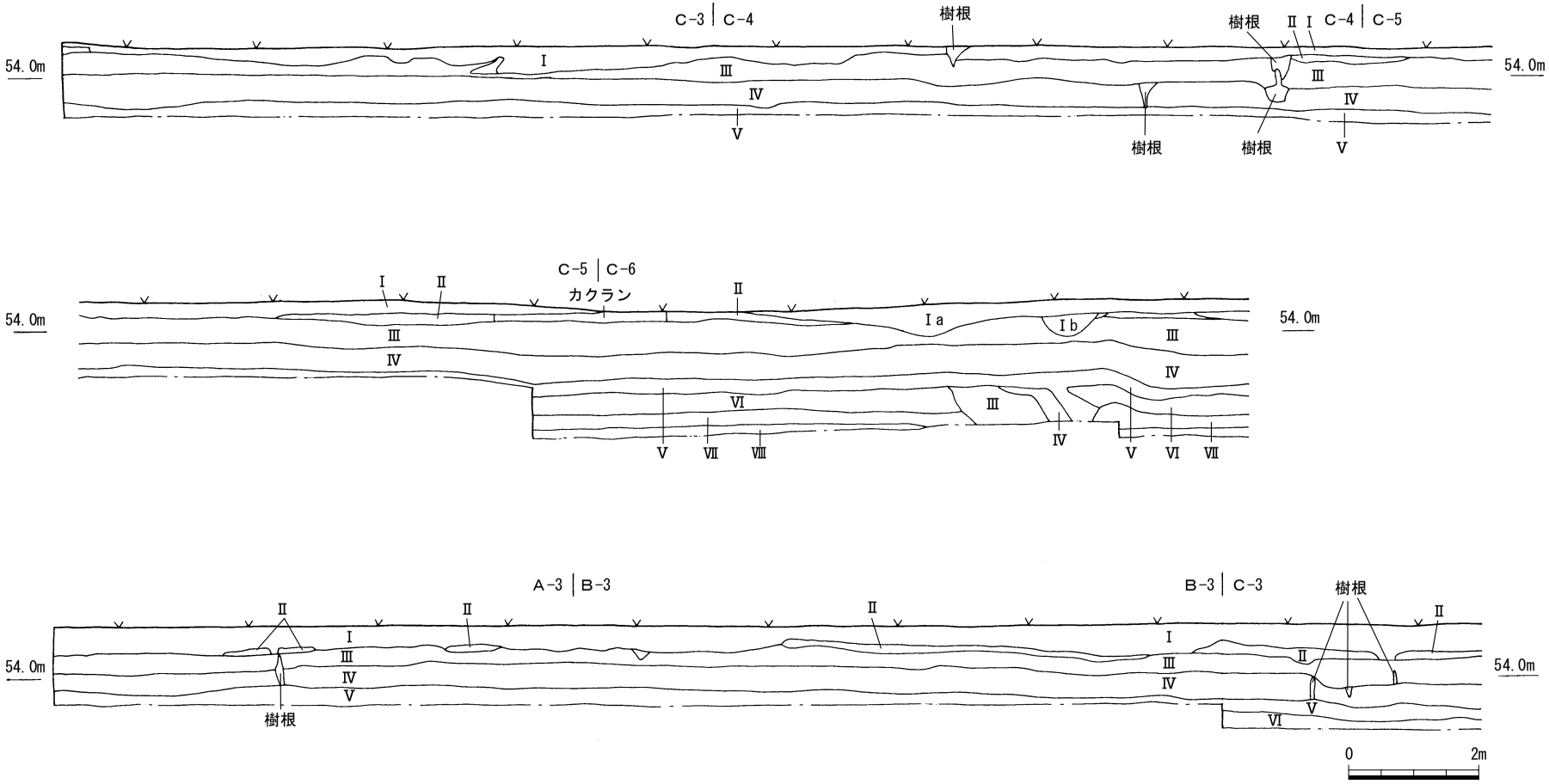
Ⅰａ層：現耕作土
Ⅰｂ層：Ｐ２火山灰と考えられるパミス
Ⅰｃ層：黒色土
Ⅱ　層：暗褐色土　縄文時代後期～古墳時代遺物包含層
Ⅲａ層：黒色土　縄文時代後期～古墳時代遺物包含層
Ⅲｂ層：黒色土　御池火山灰を含む
Ⅲｃ層：暗褐色土　池田降下軽石を含む
Ⅳ層：明橙色火山灰　アカホヤ火山灰，部分的に一次降下パミスで分層できる
Ⅴ層：黒褐色硬質土　縄文時代早期遺物包含層
Ⅵ層：暗褐色土　縄文時代早期遺物包含層
Ⅶ層：薩摩火山灰混在土
Ⅷ層：暗褐色粘質土

表土～Ⅵ層上面

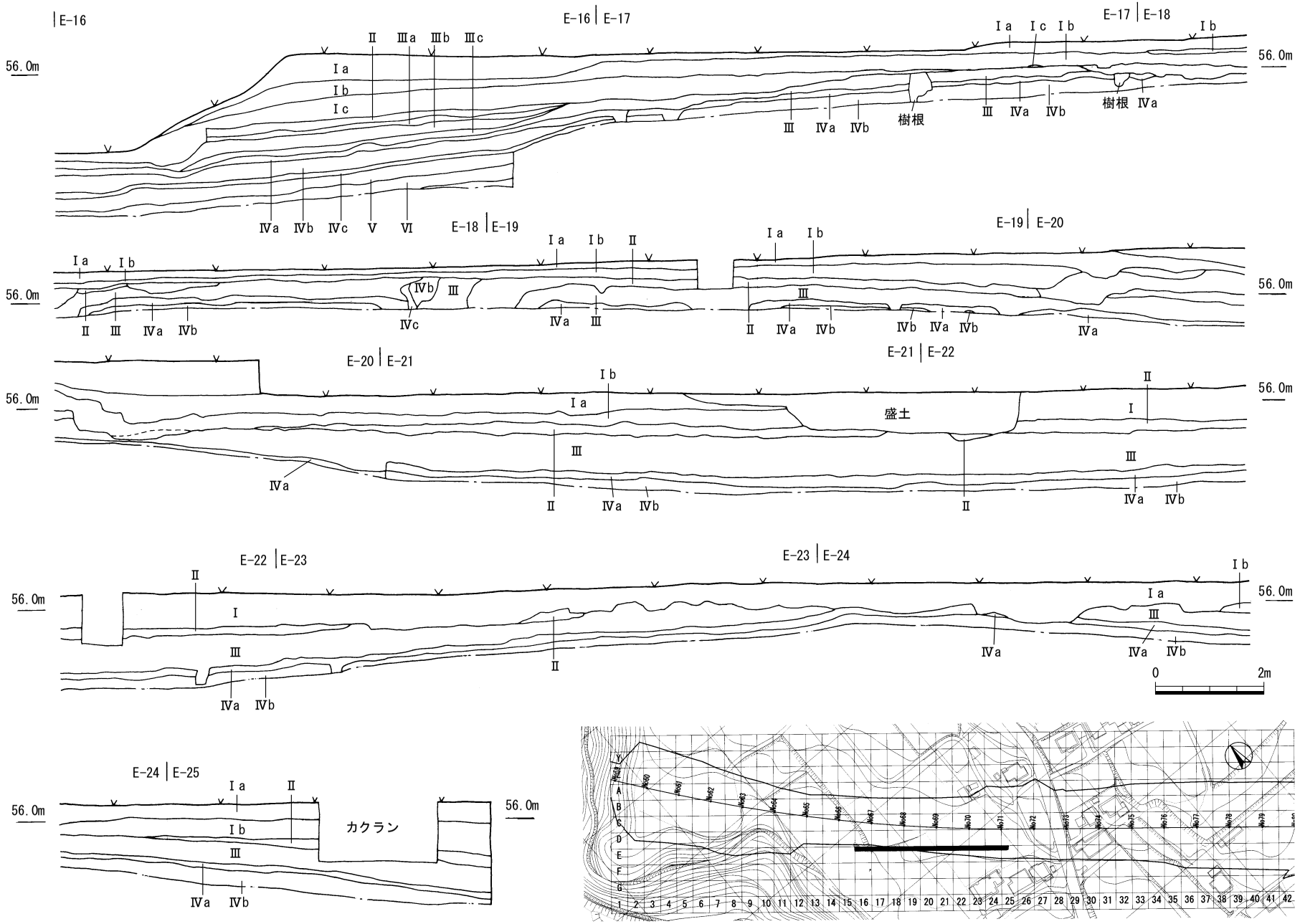
Ⅶ層～シラス

表２　石器石材分類表

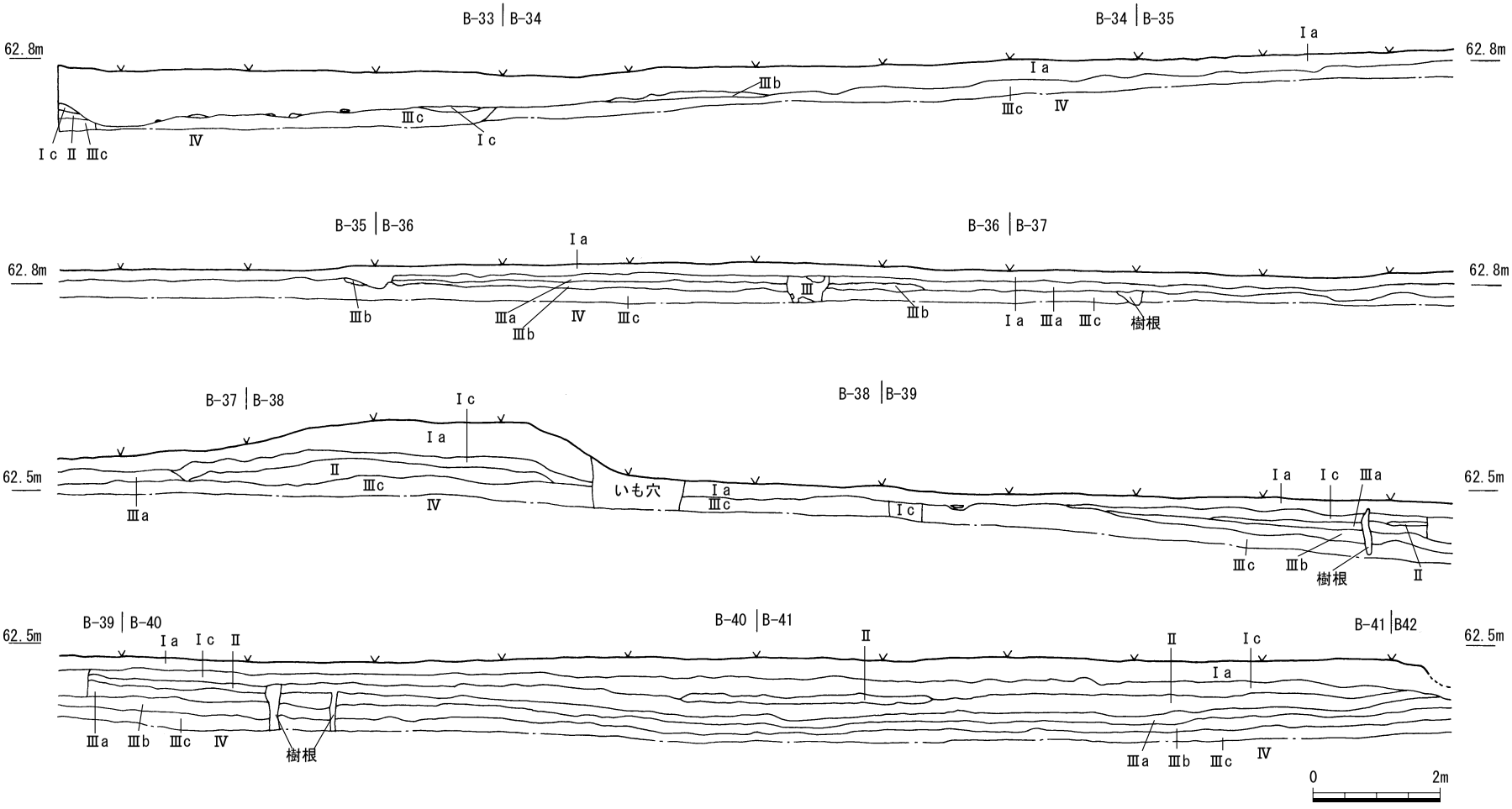
石材	分類	概要
黒曜石	ＯｂⅠ	黒色で光沢があり，クリストバル石などをほとんど含まない良質の黒曜石。黒墨色の透明感を持つものも含まれる。佐賀県伊万里市腰岳産の試料に類似する。
	ＯｂⅡ	青灰色で透明感が無く，不純物をほとんど含まないものを包括した。長崎県佐世保市針尾や東浜，淀姫など西北九州産の試料に類似する。
	ＯｂⅢ	灰色～灰白色で若干の光を通す。極小黒粒を多く含むことから，他と類別した。大分県姫島産の試料に類似する。
	ＯｂⅣ	飴色を基調とし，透明感のあるものを包括した。不純物や気泡のあるものも含む。自然面の風化は顕著でなく，独特のぬめり感を持つものが多い。伊佐市上青木周辺に産する試料に類似する。
	ＯｂⅤ	不純物や気泡を多く含むが，透明感があるものが多い。伊佐市日東や猩猩，また鹿児島市三船産の試料に類似する。
	ＯｂⅥ	不純物を含み，漆黒で光を通さないものを包括した。風化の状況で，ある程度の年代識別ができる。薩摩川内市樋脇町産の試料に類似する。
	ＯｂⅦ	ＯｂⅢに類似するが，透明感が無くガラス光沢がみられない。自然面は黄色から白の不純物に覆われていることがある。近隣の遺跡からも検出されるが，産地は同定はできない。
頁岩	ＳｈⅠ	本来暗灰色であるが，風化が顕著で黄灰色～白灰色を呈するもの。
	ＳｈⅡ	青灰色～黒灰色等を呈する。節理が強く，風化は弱い。剥片石器に多くみられる。
	ＳｈⅢ	風化が観察できる。層状剥離や石英脈がみられるものが多い。
	ＳｈⅣ	Ⅲに類似するが，風化が弱い。
	ＳｈⅤ	青灰色を呈し，剥離が強い。鉄分を多く含み，さびが付着する。
	ＳｈⅥ	白色～黄白色の硅質の頁岩。
安山岩	ＡｎⅠ	いわゆるサヌカイト。緻密で堅硬な安山岩で，斑晶は少ない。正式な岩石名は古銅輝石安山岩。
	ＡｎⅡ	多くの鉱物や小礫を含む火山岩性の岩石，風化によりもろくなるものも含む。
	ＡｎⅢ	石英粒等多くの鉱物を含むが，粒は細かい。砂岩質であるが，概して帯磁率が高い。
凝灰岩	Ｔｕ	火山灰や火山礫などが堆積し凝固したもの。大小の礫を含む凝灰角礫岩を含む。
花崗岩	Ｇｒ	通称，御影石。石英，カリ長石，角閃石等を主成分鉱物として含む。風化が顕著である。
砂岩	Ｓａ	砂粒・石英粒が集合して凝固した堆積岩。砂粒感の強いものを本類に含めた。シルト質，泥岩質も含む。
石英	ＲＣ	結晶体である水晶。透明或いは半透明な結晶質のものを包括した。
鉄石英	Ｆｑ	鉄分を多く含む赤色の石英，ジャスパーであるが産地が異なる碧玉と区別した。
チャート	Ｃｈ	硅酸を含有し，光沢感を有する堆積岩で，硬度が高い。様々な色調があるが，本遺跡では主に灰白色，青灰色，黒灰色等を呈する。
蛋白石	Ｏｐ	珪酸分を多く含む。本遺跡では半透明～白色のオパール質のものを包括した。
玉髄	Ｃｃ	微細結晶質の石英で半透明のカルセドニー質のもの。同じ石英質の水晶や碧玉とは区別した。
ホルンフェルス	Ｈｆ	変成作用により，硬質化が著しいものを総括した。大きく砂岩質，頁岩質のみ本類に分類した。
碧玉	Ｊｐ	島根県周辺の中国地方に産する碧玉（ジャスパー）に相当する。または類似する試料
翡翠	Ｊａ	新潟県糸魚川市小滝周辺で産する翡翠輝石に相当する。または類似する試料



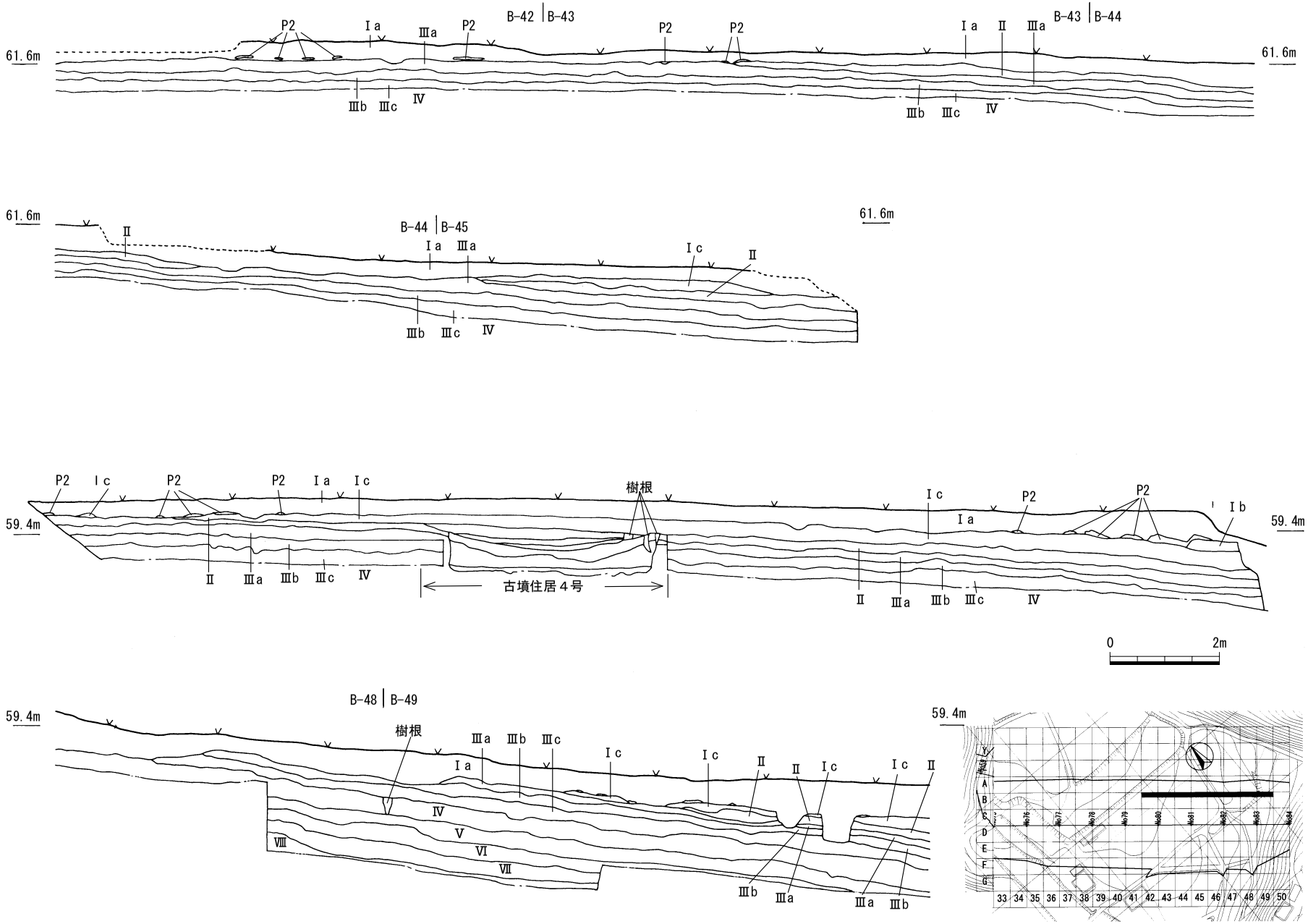
第４図　土層断面図①（Ｃ－３～６区，Ａ～Ｃ－３区）



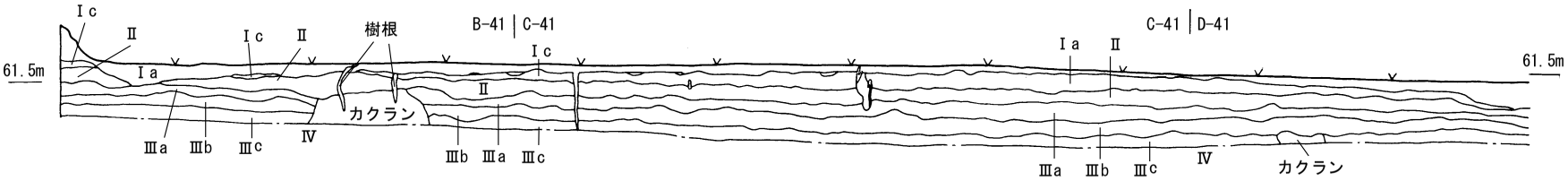
第５図　土層断面図②（E － 16 ～ 25 区）

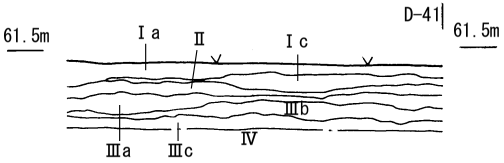


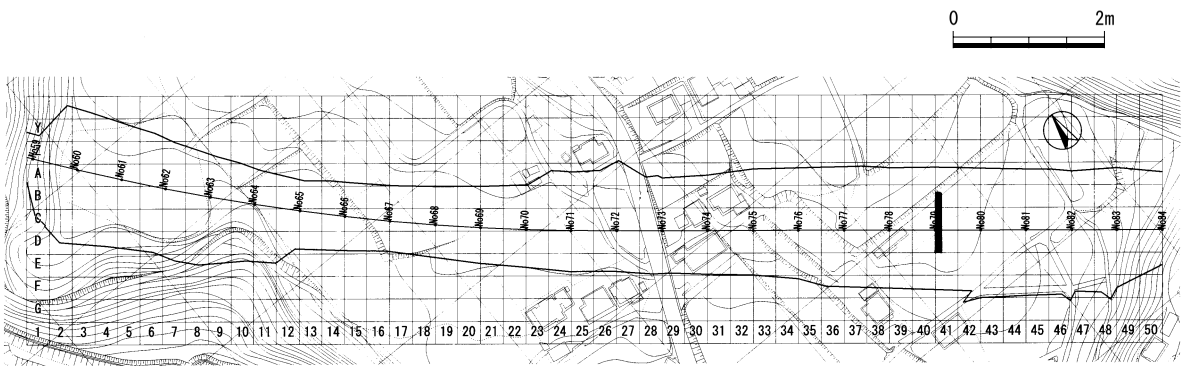
第６図　土層断面図③（Ｂ－33～41区）



第７図　土層断面図④（Ｂ－42～49区）







第８図　土層断面図⑤（Ｂ～Ｄ－41区）

第３節　調査の成果

１　旧石器時代の調査

(1) 調査の概要

稲荷迫遺跡における確認調査では，旧石器時代に該当する遺物等は確認されていなかったが，Ⅴ・Ⅵ層から細石刃等が出土したことから，下層の確認調査を広げて行った。その結果礫群１基を検出したが，それ以外の遺構・遺物等を確認することができなかった。

(2) 遺構

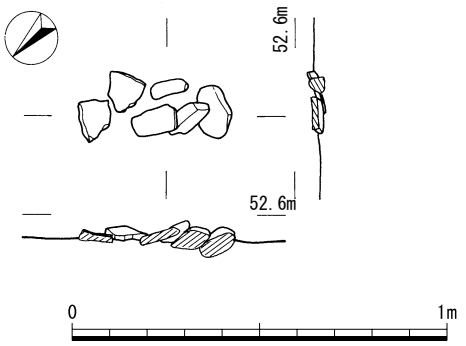
Ｃ－４区から，礫群を１基検出した。礫６個から成り掘り込みは見られない。被熱によるものと考えられる赤化が見られた。微量であるが，炭化物が点在した。

(3) 遺物

遺物については，いずれもⅤ層，Ⅵ層からの出土である。流れ込みの可能性が高く，遺構との関連は低いと思われるが，旧石器時代相当期の遺物として掲載した。

剥片尖頭器（第９図 ６）

６は良質な頁岩を素材とする，長軸5.3cm刃部長3.8cm，8.42gの小型の剥片尖頭器である。刃部，基部へのブランティングを片面から施している。

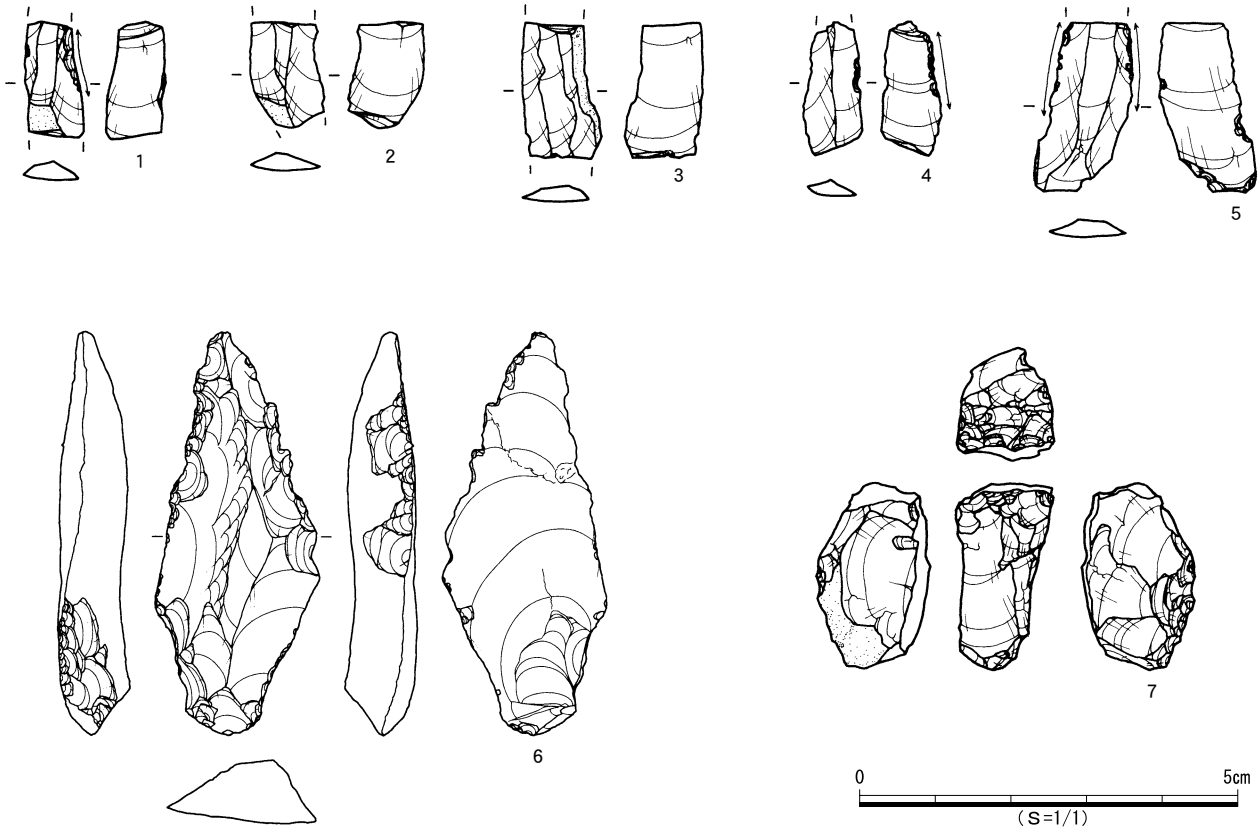


細石刃（第９図 １～５）

１～５は腰岳産黒曜石試料に類似する。２～５は，青木産黒曜石試料に類似する。５の刃部には，使用によるものと思われる，微細な剥離痕が観察される。

細石刃核（第９図 ７）

７は，細石刃核である。青木産黒曜石の小礫を打面調整し，一面のみ細石刃を剥いでいる。



第９図　礫群　旧石器時代の石器

2　Ⅷ層の調査

(1) 調査の概要

稲荷迫遺跡の位置する大隅半島北西部の志布志湾を望む台地縁辺部において,淡黄白色のⅦ層（サツマ火山灰）は，Ⅵ層の下位からブロック状および斑状に入る。

Ⅵ層の調査が終了した箇所よりⅦ層を掘り下げたところ，Ｂ－３区のⅦ層直下からすり鉢状に板状の石を配置した集石遺構を２基検出した。しかし，その他の遺構は検出されず，遺物も出土しなかった。

(2) 遺構

１号集石（第10図）

Ⅶ層直下で検出した。遺構をⅦ層が覆うように堆積しているので，桜島北岳が噴火しサツマ火山灰が噴出した時期まで使用されていた可能性が高い。

底部に水平に板状の石を配置し，すり鉢状に板状の石を配置してある。石材は水分を含みもろくなっている性質から，凝灰岩ではないかと思われる。石と石の隙間にサツマ火山灰中の黄橙色パミスが入り込んでいる。また，石と石の隙間の土は粘質が高く炭化物を含む。

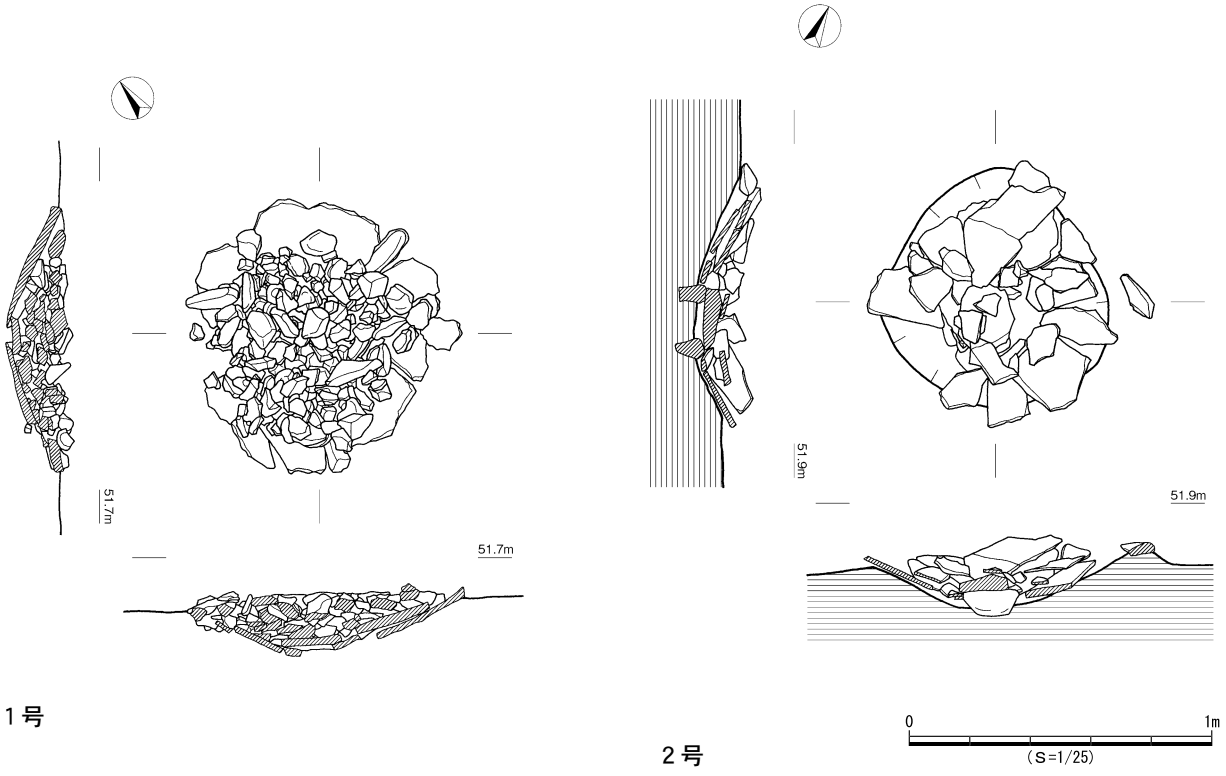
掘り込みは判断できるほど明確ではないが，石をのぞいた後に残る掘り込み跡がおおむねそれと相違ないと思われ，直径が80㎝，短径が76㎝のほぼ円形のすり鉢状を呈し，深さは検出面からほぼ15㎝を測る。

２号集石（第10図）

１号集石同様にⅦ層直下で検出した。遺構をⅦ層が覆うように堆積しているので，使用時期も１号集石と同時期と考えられる。

凝灰岩を板状に加工した石を掘り込み面にすり鉢状に配した後，掘り込み中心部に石を設置したと思われる。板状の石の隙間を埋めるように配置された礫はいずれも砂岩で被熱によると思われる赤化がみられた。すり鉢状に配置された集石内には，礫が詰め込まれており267個を数える。石材は砂岩で，被熱のための赤化がみられるもの，破砕しているものが混在している。石と石の隙間にサツマ火山灰中の黄橙色パミスが入り込んでいるが，集石底部に近づくにつれてパミスの数が少なくなる傾向がみられる。また石と石の隙間の土は粘性が高く炭化物を含む。

掘り込みは判断できるほど明確ではないが，石をのぞいた後に残る掘り込み跡が概ねそれと相違ないと思われ，直径が92㎝，短径が90㎝のほぼ円形のすり鉢状を呈し，深さは検出面からほぼ15㎝を測る。



１号　　２号

第10図　Ⅷ層検出集石１号・２号集石

3　縄文時代早期の調査

(1) 調査の概要

稲荷迫遺跡では，確認調査の結果Ｙ～Ｅ－１～８区で縄文時代早期の遺物包含層が確認された。

縄文時代早期の包含層は，Ⅳ層（アカホヤ火山灰）を重機掘削により除去したのち，包含層であるＶ・Ⅵ層を山鍬等で徐々に掘り下げた。

出土遺物は，大型の破片等は平板で出土地点の記録を行い，小破片はグリッド毎に一括して取り上げた。

遺構は，個々に検出状況の記録写真を撮影した後，各遺構の主軸にあわせてベルトを設定し実測を実施した。

縄文時代早期の遺構には，集石・連穴土坑・土坑がある。また,集石に伴う膨大な数の被熱破砕礫が出土した。

集石遺構の認定は，被熱破砕礫を平板でレベル情報を入れながら取り上げ，礫がまとまって検出されたところを集石遺構とした。また，Ⅶ層（薩摩火山灰）上面では連穴土坑・土坑を検出した。これらの内容については各項で詳しく述べる。

縄文時代早期に該当する土器・石器については，各項で詳しく述べる。

(2) 遺構

ア．集石遺構

①概要

稲荷迫遺跡で検出された縄文時代早期の集石遺構は64基を数える。この項では報告を行うにあたっての留意事項を述べる。

発掘調査において縄文時代早期の遺構は，Ｖ層とⅥ層との両方で検出された。検出時に該当層の認定をおこなったが，Ｖ層とⅥ層の境界が不明瞭な場所からも集石が検出され，すべてを明確にＶ層該当・Ⅵ層該当に分けられない状況であった。そのため集石の時期判断については，発掘調査時の検出状況（集石所見・写真），周辺の被熱破砕礫や遺物の垂直分布状況・層位的確認を踏まえた検討が必要と判断した。また，過去の成果に左右されることなく稲荷迫遺跡での実態を探るため，土器型式との照合は最後におこなった。

従って，本報告では地形・集石の密集具合を見ながら便宜的に平面的なグループ分けを行い，第１グループから第８グループまで区分して掲載を行った。よって，各グループは見た目でのグループ分けであり，集石の時期変遷や形態の変遷を示すものではない。なおレイアウトの都合上,集石№と掲載の順番は前後している場合がある。

所属時期の検討結果については，小結で述べる。

また，集石に付随すると判断した被熱破砕礫が非常に多く出土した。これらの被熱破砕礫は，参考資料として遺構配置図に平面分布状況をグレーのドットで掲載し，同様に各集石の断面にも垂直分布状況として反映した。なお，各集石の断面に掲載した被熱破砕礫・遺物の垂直分布は，各遺構の実測基準線の手前・奥各２ｍの範囲に絞った。

断面に反映させたドットの色分けは，○はＶ層出土遺物，●はⅥ層出土遺物，グレーは被熱破砕礫である。

また，各集石の観察表では，発掘調査時の状況（写真・図面注記)・被熱破砕礫分布状況・遺物出土状況・Ⅶ層（薩摩火山灰混在土）コンタラインから総合的に判断し，集石が該当する層を明示することとした。

②形態分類

上野原遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター　2000）では，集石遺構の形態的特徴から次に示すように分類している。

Ⅰ．構成礫が集中せずに，掘り込み部も確認できずに検出された集石遺構。

Ⅱ．構成礫が集中するが，掘り込みが確認できずに検出された集石遺構。

Ⅲ．構成礫が集中し掘り込み部が確認できたものの，底石や壁石などの施設は確認できずに検出された遺構。

Ⅳ．構成礫が集中し,掘り込み部が確認できたうえに，底石や壁石などの施設を伴い検出された集石遺構。

と，４類型に分類している。

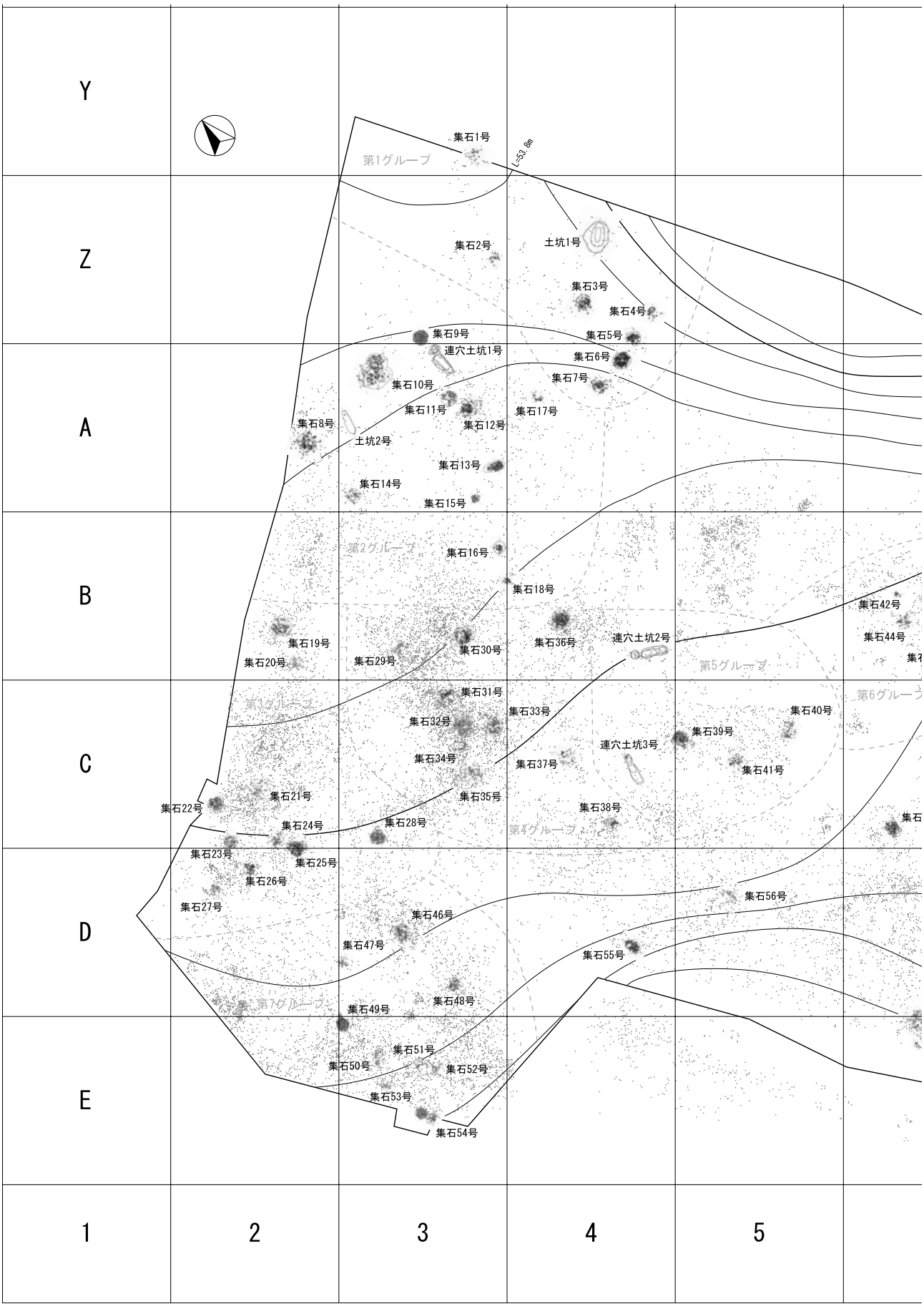
そこで，稲荷迫遺跡で検出できた集石遺構をこれらの類型に当てはめると，多くはこの４類型に属することがわかった。そこで，本報告では，各区で検出できた集石遺構を以上の類型に基づいて分類し，観察表に示した。ただし，Ⅲ類型については，掘り込み部の床面と集石の礫にレベル差がある集石が検出された。そこで，掘り込みと床面にレベル差がある集石をⅢｂ類とし，その他の掘り込みを持つ集石をⅢａ類と分類した。また，Ⅱ類型に分類できる部分の周囲に，Ⅰ類型に分類できる部分が確認できた集石遺構についてはⅡ＋Ⅰ類のように類型を併記した。

また，表４と表５には集石の掘り込み・総礫数に対する構成礫の重量の割合を表示している。各構成礫の割合は，見やすさを優先し四捨五入で計算を行ったため，合計が100％にならない場合（99％・101％など）がある。

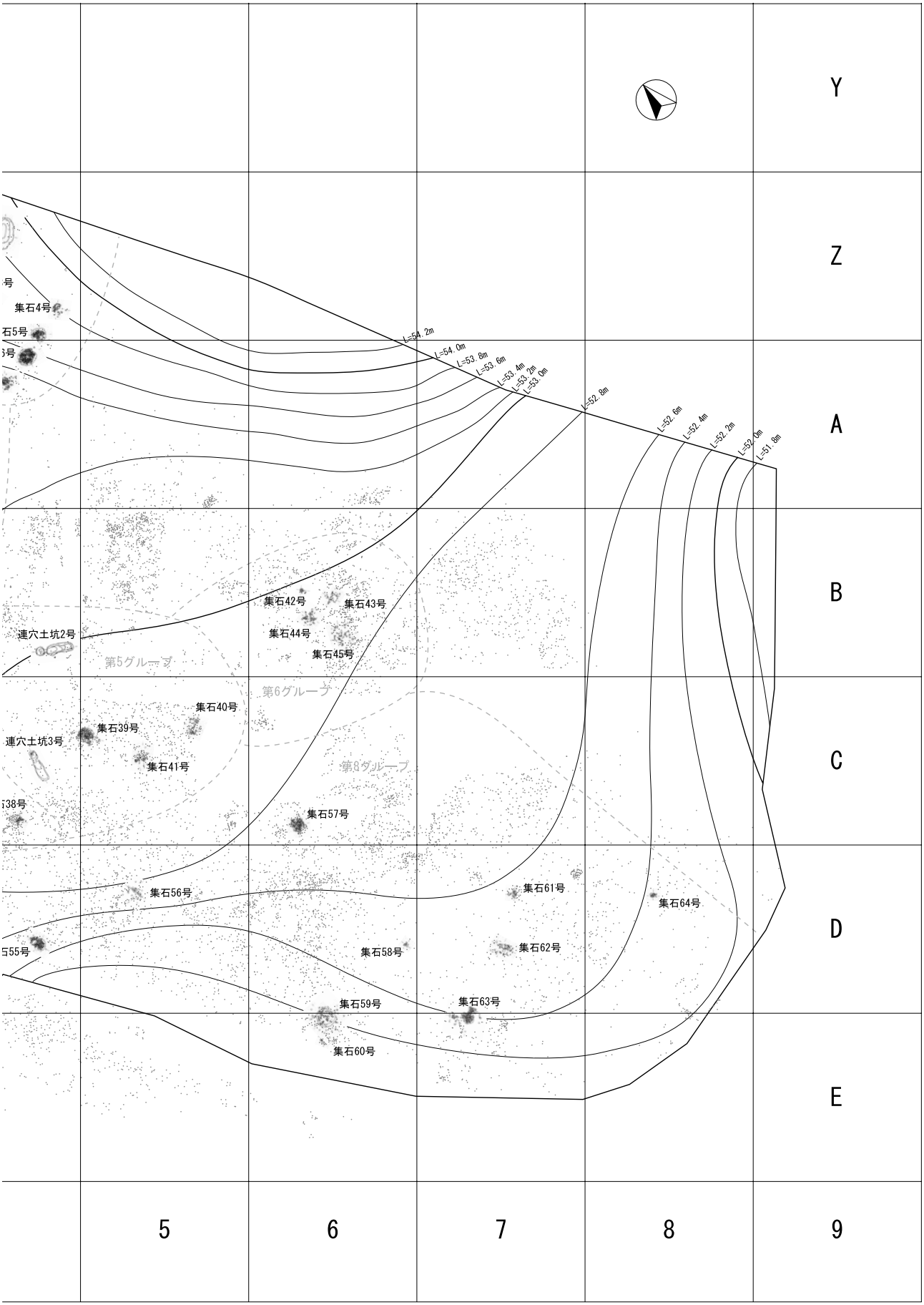
表３　集石観察表①

集石No.	総礫数	大きさ		層	分類	グループ
		長軸(cm)	短軸(cm)			
集石１号	51	84	80	Ⅴ	Ⅰ	1
集石２号	26	70	60	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ	1
集石３号	163	95	89	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲａ	1
集石４号	66	80	70	Ⅴ	Ⅲａ	1
集石５号	116	90	80	Ⅵ	Ⅳ	1
集石６号	399	115	103	Ⅵ	Ⅳ	1
集石７号	126	90	65	Ⅴ	Ⅲａ	1
集石８号	220	131	127	Ⅵ	Ⅲａ	2
集石９号	－	95	90	Ⅵ	Ⅳ	2
集石10号	569	190	190	Ⅵ	Ⅳ	2
集石11号	145	95	90	Ⅵ	Ⅲｂ	2
集石12号	124	100	85	Ⅵ	Ⅳ	2
集石13号	270	125	65	Ⅵ	Ⅳ	2
集石14号	77	96	74	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲｂ	2
集石15号	79	60	45	Ⅴ	Ⅲａ	2
集石16号	49	80	75	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲａ	2
集石17号	26	80	60	Ⅵ	Ⅲａ	2
集石18号	58	50	38	Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	2
集石19号	229	129	115	Ⅴ	Ⅲｂ	3
集石20号	47	82	77	Ⅵ	Ⅱ	3
集石21号	149	134	100	Ⅴ	Ⅱ＋Ⅰ	3
集石22号	413	115	110	Ⅵ	Ⅲａ	3
集石23号	93	82	70	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲｂ	3
集石24号	70	110	80	Ⅴ	Ⅲａ	3
集石25号	156	87	86	Ⅵ	Ⅲａ	3
集石26号	85	90	75	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲａ	3
集石27号	42	74	66	Ⅴ	Ⅰ	3
集石28号	250	114	97	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲａ	3
集石29号	－	112	86	Ⅵ	Ⅲａ	4
集石30号	274	108	103	Ⅵ	Ⅲｂ	4
集石31号	144	110	65	Ⅵ	Ⅲａ	4
集石32号	336	130	115	Ⅵ	Ⅲａ	4

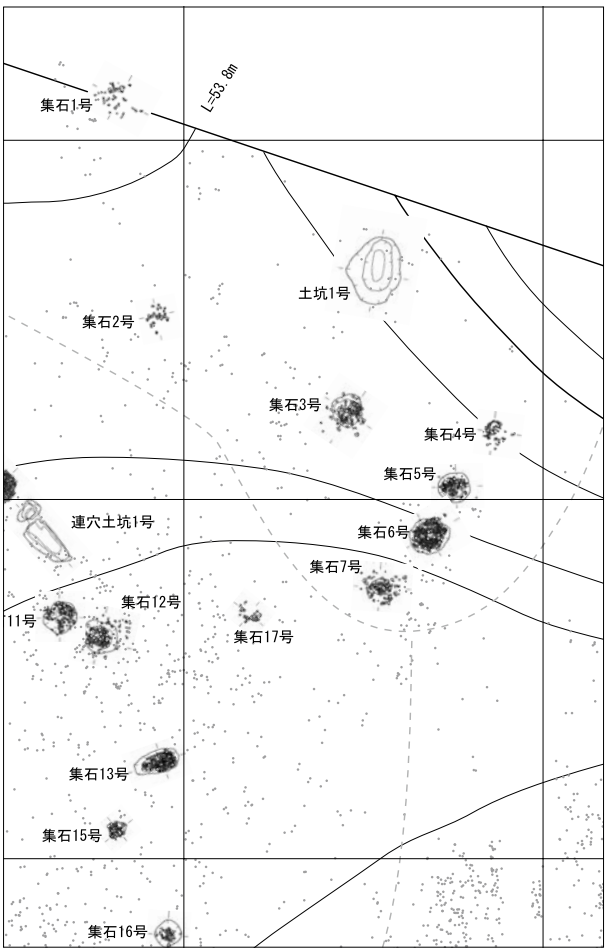
集石No.	総礫数	大きさ		層	分類	グループ
		長軸(cm)	短軸(cm)			
集石33号	239	139	125	Ⅵ	Ⅲａ	4
集石34号	77	103	86	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	4
集石35号	210	140	140	Ⅴ	Ⅲａ	4
集石36号	447	117	105	Ⅵ	Ⅳ	4
集石37号	62	102	101	Ⅴ	Ⅰ	4
集石38号	52	75	70	Ⅵ	Ⅱ	4
集石39号	207	100	90	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲｂ	5
集石40号	62	101	81	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	5
集石41号	60	82	72	Ⅴ	Ⅱ	5
集石42号	37	42	31	Ⅵ	Ⅱ	6
集石43号	49	90	78	Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	6
集石44号	－	99	88	Ⅵ	Ⅱ	6
集石45号	82	124	106	Ⅵ	Ⅰ	6
集石46号	223	110	107	Ⅴ	Ⅲａ	7
集石47号	－	70	65	Ⅴ	Ⅲａ	7
集石48号	－	90	80	Ⅴ	Ⅲａ	7
集石49号	327	115	77	Ⅴ	Ⅲａ	7
集石50号	－	89	62	Ⅴ	Ⅲａ	7
集石51号	－	55	45	Ⅴ	Ⅰ	7
集石52号	－	100	68	Ⅴ	Ⅲａ	7
集石53号	24	44	40	Ⅴ	Ⅰ	7
集石54号	186	147	85	Ⅴ	Ⅲａ	7
集石55号	96	110	80	Ⅵ	Ⅲａ	8
集石56号	45	112	86	Ⅴ	Ⅲａ	8
集石57号	161	80	75	Ⅴ	Ⅲａ	8
集石58号	－	30	28	Ⅴ	Ⅱ	8
集石59号	167	164	109	Ⅴ	Ⅲｂ	8
集石60号	－	65	65	Ⅴ	Ⅲｂ	8
集石61号	19	47	30	Ⅵ	Ⅲａ	8
集石62号	78	127	82	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	8
集石63号	325	107	100	Ⅴ	Ⅲａ	8
集石64号	20	44	29	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ	8



第11図　縄文時代早期遺構配置図①



第12図　縄文時代早期遺構配置図②



第１グループ

第１グループは，集石１～７号までの集石である。Ｙ～Ａ－３・４区に広がり，遺跡北側の最も高い部分から南側に下る斜面上に広がる。Ⅴ層該当集石が３基，Ⅴ・Ⅵ層該当集石が２基，Ⅵ層該当集石が２基検出された。

集石１号（Ⅰ類・第13図）

100g以下の破砕礫は28%で散在している状況である。調査時に明確な掘り込みを確認できなかったが，断面の状況から浅い掘り込みを持っていた可能性もある。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石６号（Ⅳ類・第13図）

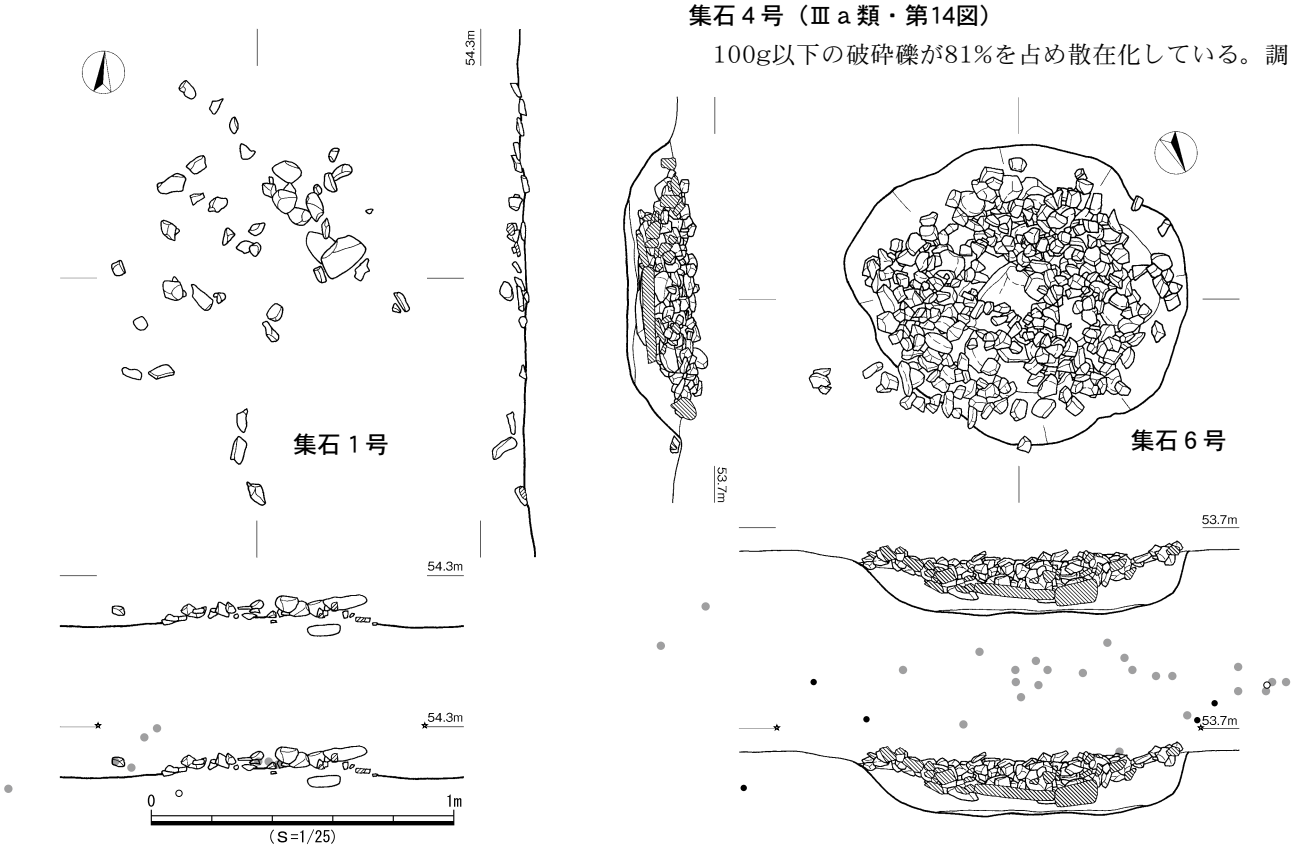
礫の総数が多いが，100g以下の破砕礫が82%を占める。約115㎝×100㎝のたらい状の掘り込みをもつ。第１グループ内では礫の数，重量ともに最大であり，構成礫の総重量は約32kgである。掘り込み内の礫は原位置を保っていると考えられる。集石下部には底石と考えられる礫が設置してあり，Ⅳ類集石である。また，集石５号とほぼ同じレベルで検出され，集石の構造も似ている。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石２号（Ⅱ類・第14図）

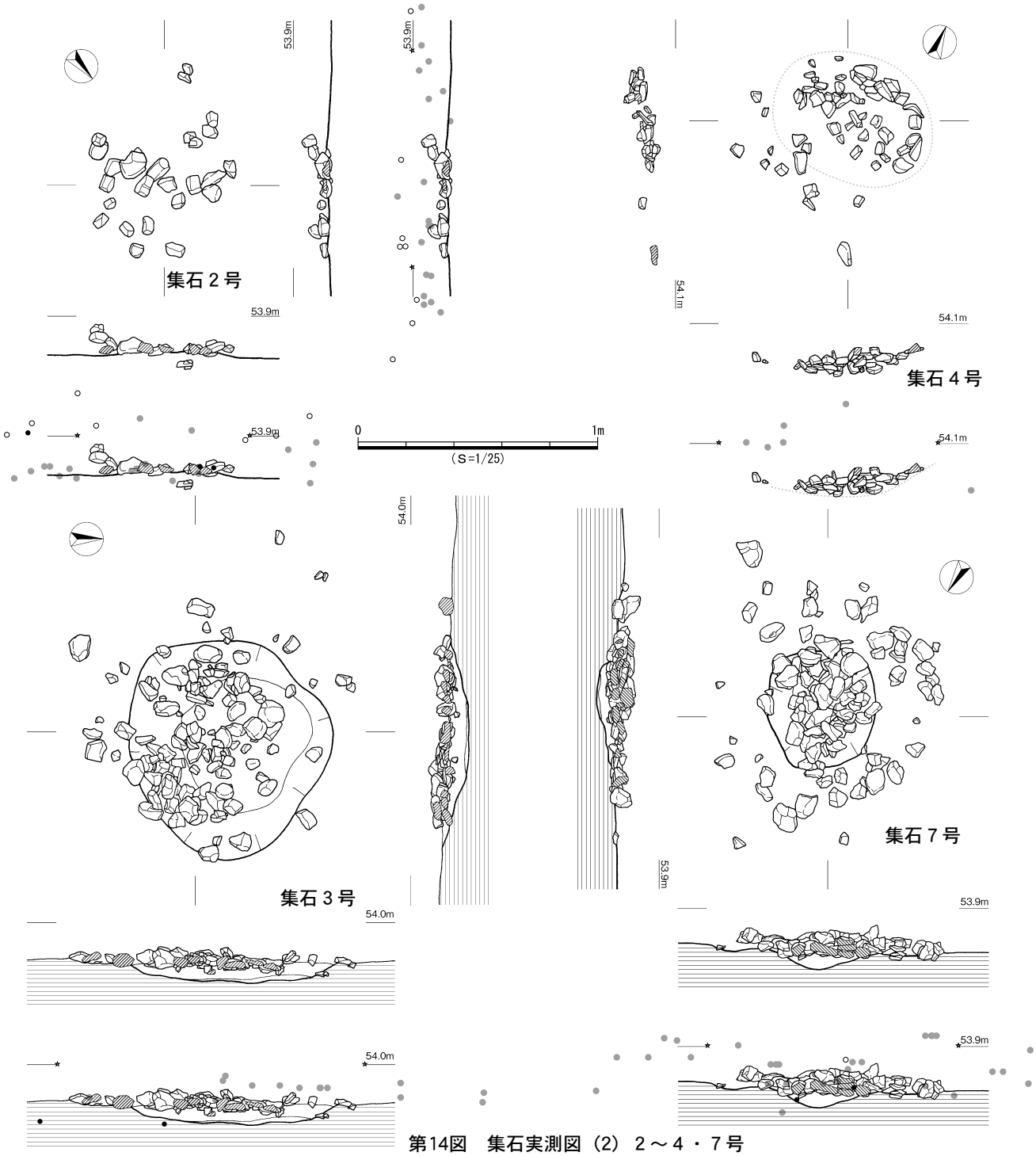
100g以下の破砕礫は23%であり，規模の小さい集石であるが，１つ１つの礫が大きい。調査時に明確な掘り込みを確認できなかったが，断面の状況から掘り込みを持っていた可能性がある。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

集石４号（Ⅲａ類・第14図）

100g以下の破砕礫が81%を占め散在化している。調



第13図　集石実測図（１）１・６号



第14図　集石実測図（2）２～４・７号

査時に明確な掘り込みを確認できなかったが，断面状況・写真から掘り込みを持つと考えられ，Ⅲ類集石とした。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石３号（Ⅲａ類・第14図）

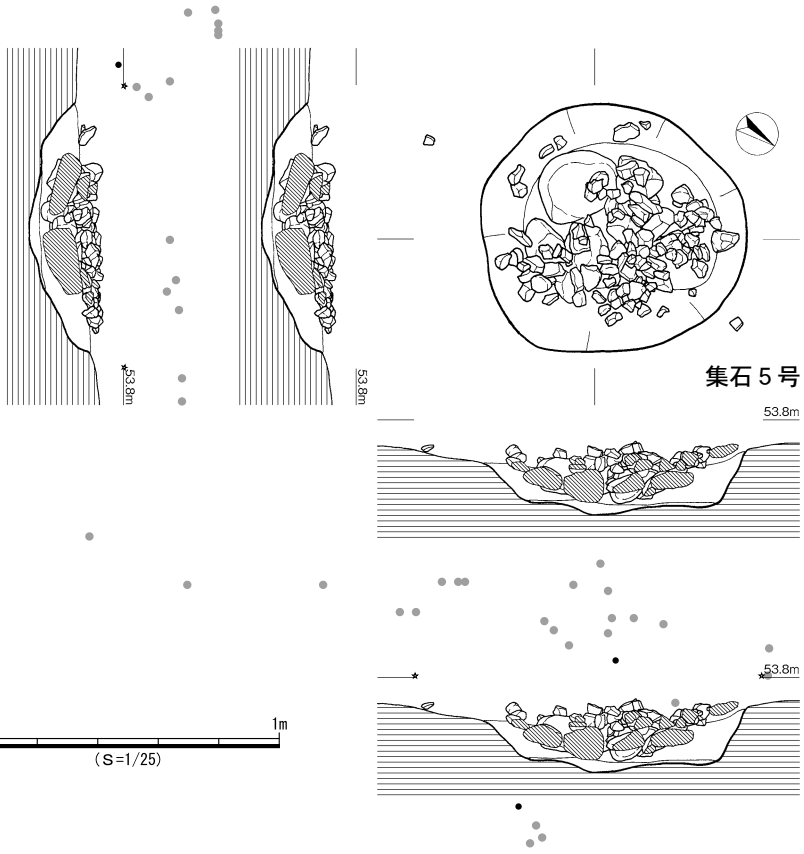
約90㎝×85㎝の浅い皿状の掘り込みを持つ。100g以下の破砕礫が67%である。発掘調査時の検出状況，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

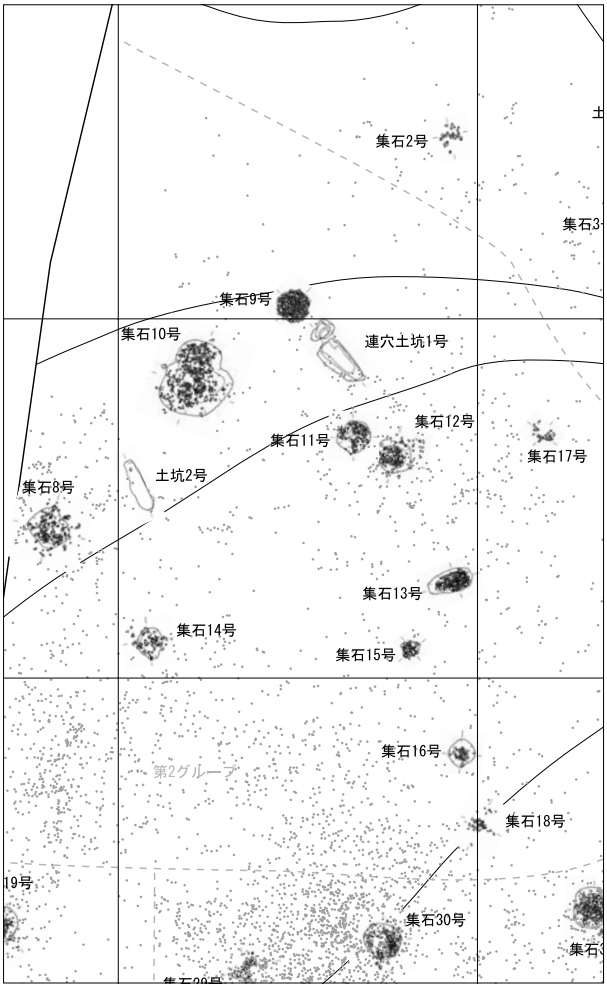
集石７号（Ⅲａ類・第14図）

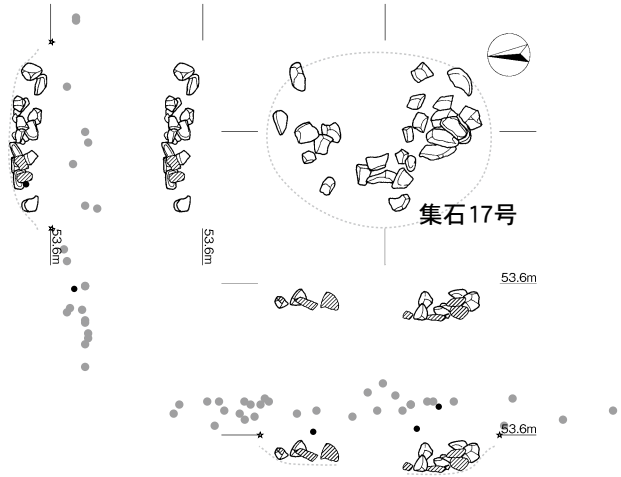
100g以下の破砕礫は47%で散在化している状態である。約50㎝×45㎝の浅く小さい掘り込みを持つ。掘り込み内の礫だけでなく，周辺に散在している礫も大きい。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石５号（Ⅳ類・第15図）

100g以下の破砕礫は73%である。約90㎝×80㎝のたらい状の掘り込みを持つ。小破砕礫の占める割合が高いが，底石・壁石も見られるⅣ類集石である。集石６号とほぼ同じレベルで検出されており，集石の構造も似ている。底石で使用した礫は，第1グループ内で使用された礫としては，もっとも重い。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。







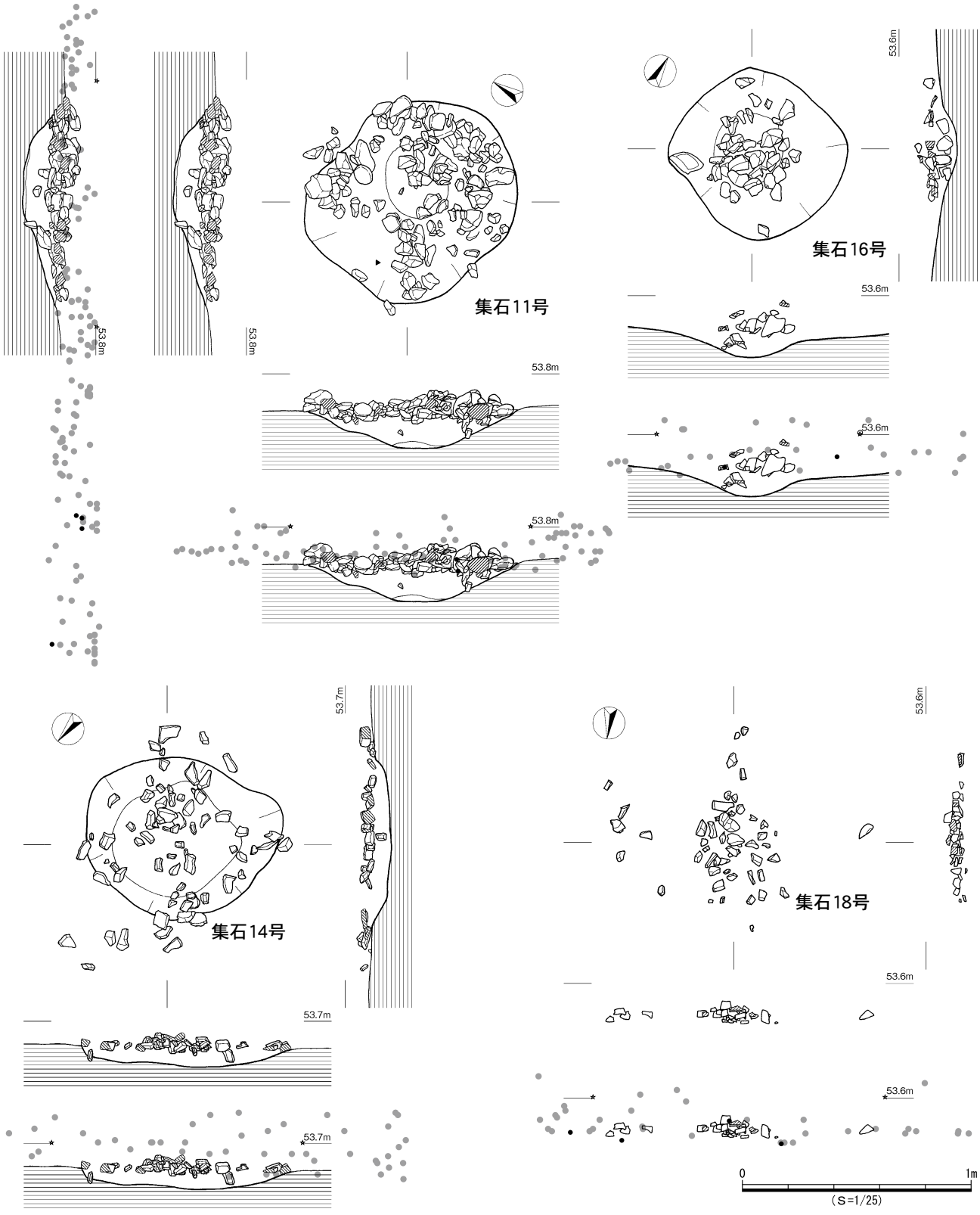
第15図　集石実測図（3）５・17号

第２グループ

第２グループは，集石8～18号までの集石である。Ｚ～Ｂ－２～４区に広がる。Ａ・Ｂ－２区から西側の調査区外は，尾野見川に向けて下る斜面になっている。Ⅴ層該当集石が１基，Ⅴ・Ⅵ層該当集石が２基，Ⅵ層該当集石が８基検出された。

集石17号（Ⅲａ類・第15図）

100g以下の破砕礫は31%である。検出時の状況および断面形態から浅い掘り込みを持っていたと考えられ，Ⅲ類集石とした。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層相当と考えていたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。



第16図　集石実測図（4）11・14・16・18号

集石11号（Ⅲｂ類・第16図）

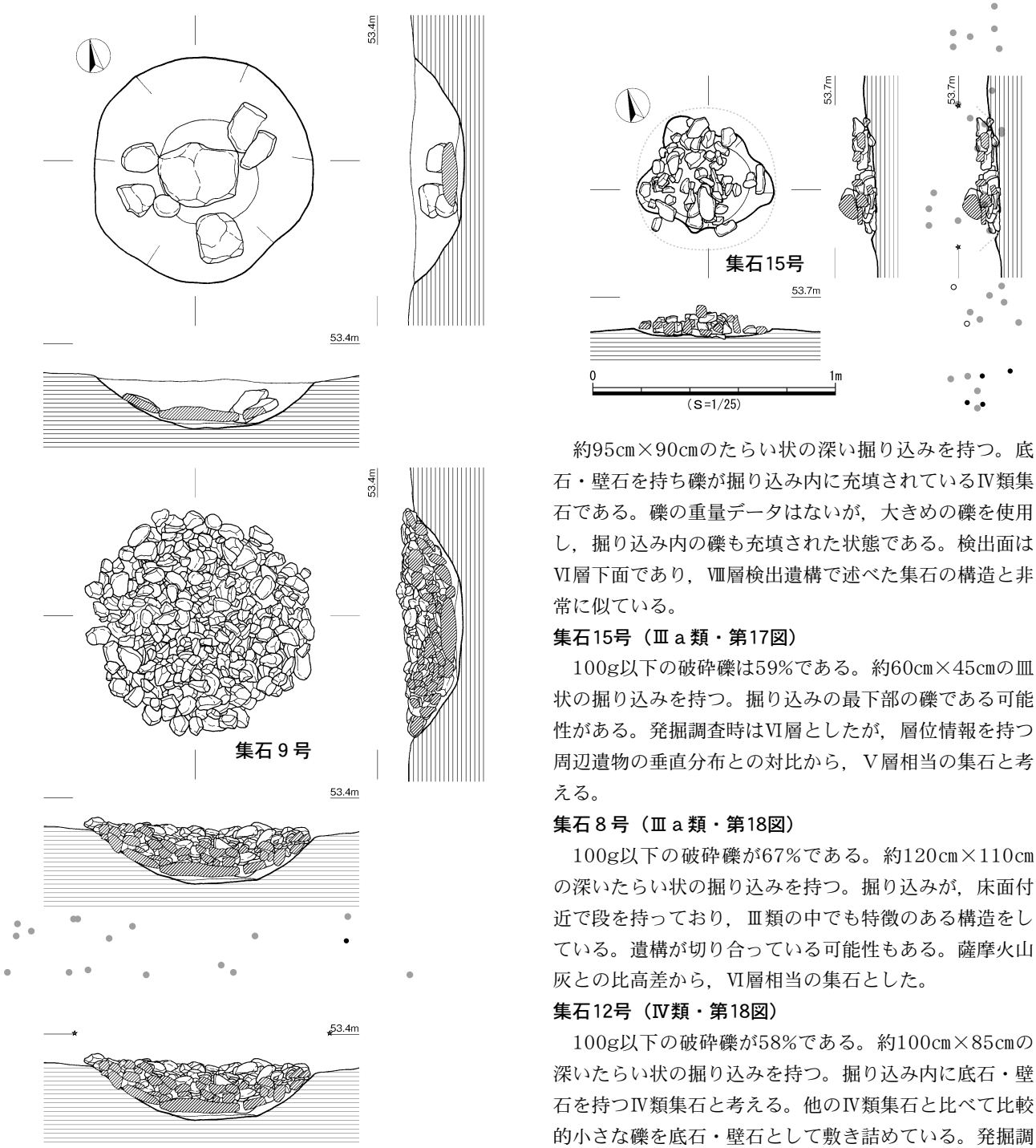
100g以下の破砕礫は65%である。約95㎝×90㎝の深い掘り込みを持つ。掘り込み内の礫は，掘り込みの床面から離れた状態である。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石16号（Ⅲａ類・第16図）

100g以下の破砕礫は32%であるが，300gを超える礫が29%もある。約80㎝×75㎝の掘り込みを持つ。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ・Ⅵ層集石と考える。

集石14号（Ⅲｂ類・第16図）

100g以下の破砕礫が63%である。約90㎝×70㎝の浅い皿状の掘り込みを持つ。掘り込み内で，礫が散在して



第17図　集石実測図（5）９・15号

いる。発掘調査時はⅥ層としたが，Ⅶ層（薩摩火山灰混在土）との比高差から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石とした。

集石18号（Ⅱ＋Ⅰ類・第16図）

100g以下の破砕礫は59%であり散在化している状況である。明確な掘り込みプランは確認できなかった。集石の中心と考えられる礫の密集部と，周辺に礫が散在していることからⅡ＋Ⅰ類集石とした。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当集石と考える。

集石９号（Ⅳ類・第17図）

約95㎝×90㎝のたらい状の深い掘り込みを持つ。底石・壁石を持ち礫が掘り込み内に充填されているⅣ類集石である。礫の重量データはないが，大きめの礫を使用し，掘り込み内の礫も充填された状態である。検出面はⅥ層下面であり，Ⅷ層検出遺構で述べた集石の構造と非常に似ている。

集石15号（Ⅲａ類・第17図）

100g以下の破砕礫は59%である。約60㎝×45㎝のⅢ状の掘り込みを持つ。掘り込みの最下部の礫である可能性がある。発掘調査時はⅥ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石８号（Ⅲａ類・第18図）

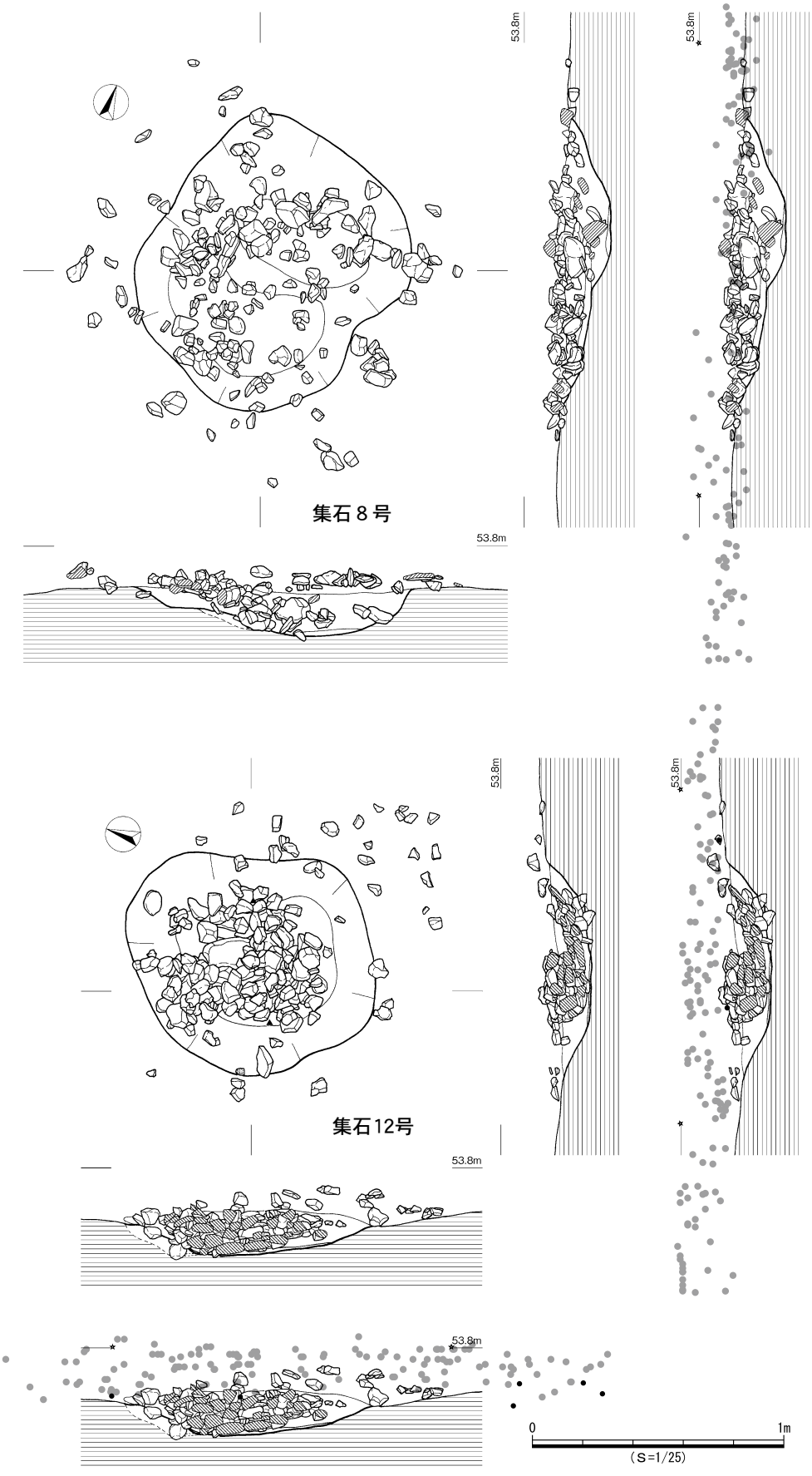
100g以下の破砕礫が67%である。約120㎝×110㎝の深いたらい状の掘り込みを持つ。掘り込みが，床面付近で段を持っており，Ⅲ類の中でも特徴のある構造をしている。遺構が切り合っている可能性もある。薩摩火山灰との比高差から，Ⅵ層相当の集石とした。

集石12号（Ⅳ類・第18図）

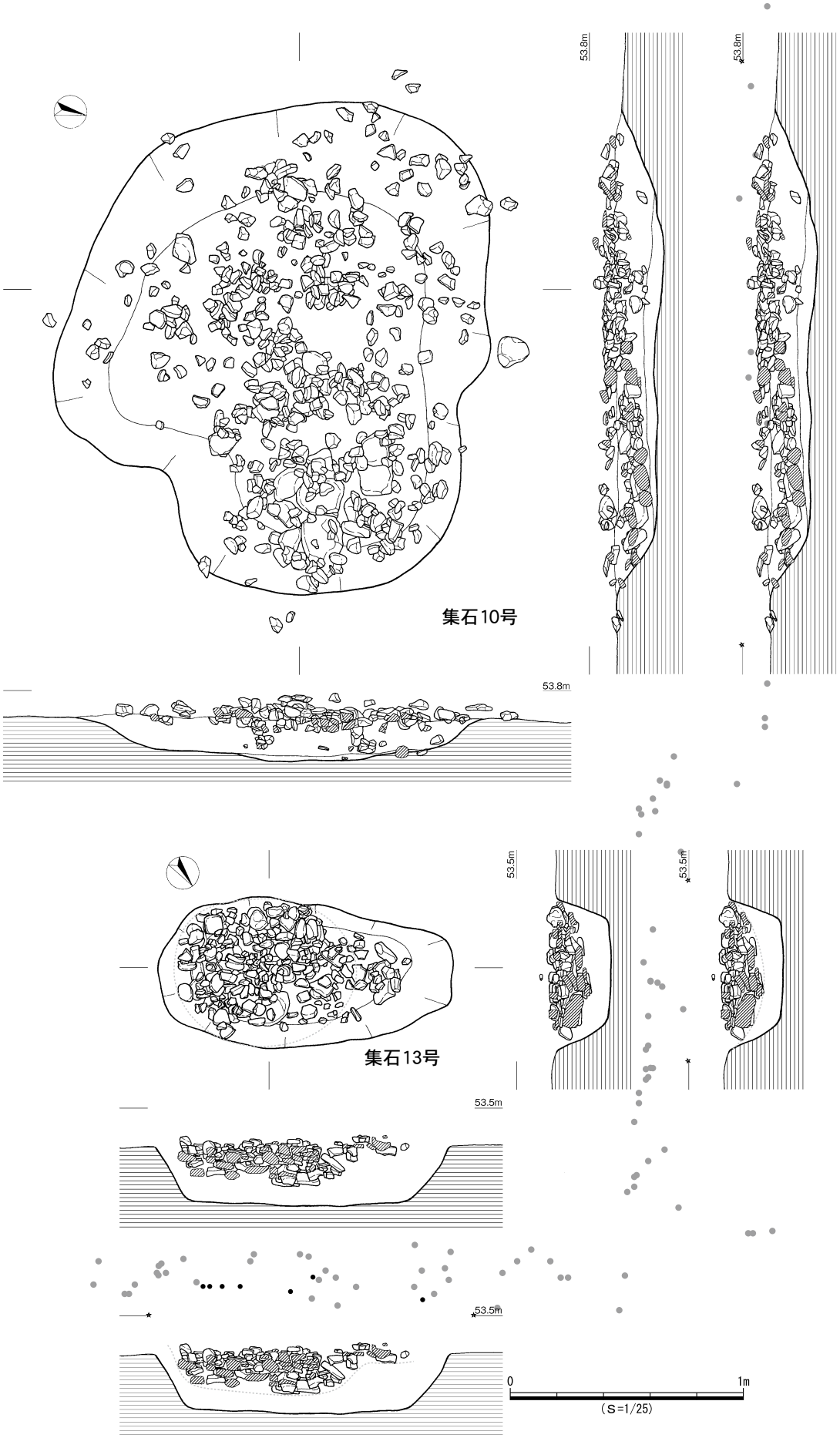
100g以下の破砕礫が58%である。約100㎝×85㎝の深いたらい状の掘り込みを持つ。掘り込み内に底石・壁石を持つⅣ類集石と考える。他のⅣ類集石と比べて比較的小さな礫を底石・壁石として敷き詰めている。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石10号（Ⅳ類・第19図）

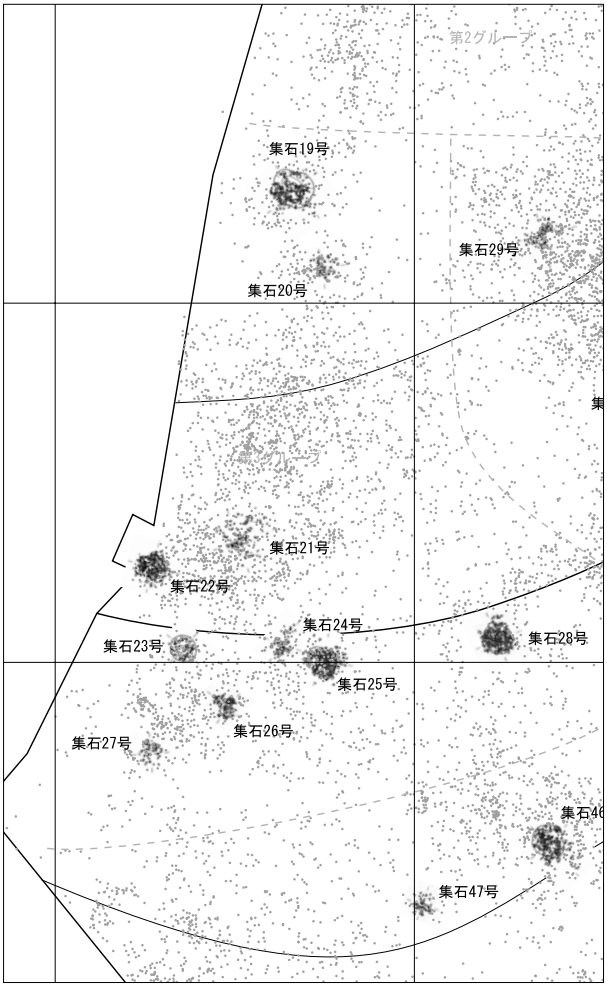
100ｇ以下の破砕礫が70％である。約190㎝×190㎝のかなり大きな掘り込みを持ち東側には，壁石・底石がある。不整形で散在化している状況である。この大きさの掘り込みを持つ集石は，稲荷迫遺跡内では集石10号だけである。第２グループ内で礫の数・重量ともに最大であり，１基あたりの構成礫数では，計測をおこなった稲荷迫遺跡の集石の中では最大数である。また，2基の集石が切り合っている可能性もある。発掘調査時の検出



第18図　集石実測図（6）８・12号



第19図　集石実測図（７）10・13号



状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石13号（Ⅳ類・第19図）

100g以下の破砕礫は61%である。約125㎝×65㎝の深いたらい状の掘り込みを持つが，平面のプランが楕円形である集石はこの1基のみである。掘り込みの底部から集石までレベル差がある。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

第３グループ

第３グループは，集石19～28号までの集石である。Ｂ～Ｄ－２・３区に広がる。第２グループと同様，Ｂ～Ｄ－２区から西側の調査区外は，尾野見川に向けて下る斜面になっている。Ⅴ層該当集石が４基，Ⅴ・Ⅵ層該当集石が３基，Ⅵ層該当集石が３基検出された。

集石25号（Ⅲａ類・第20図）

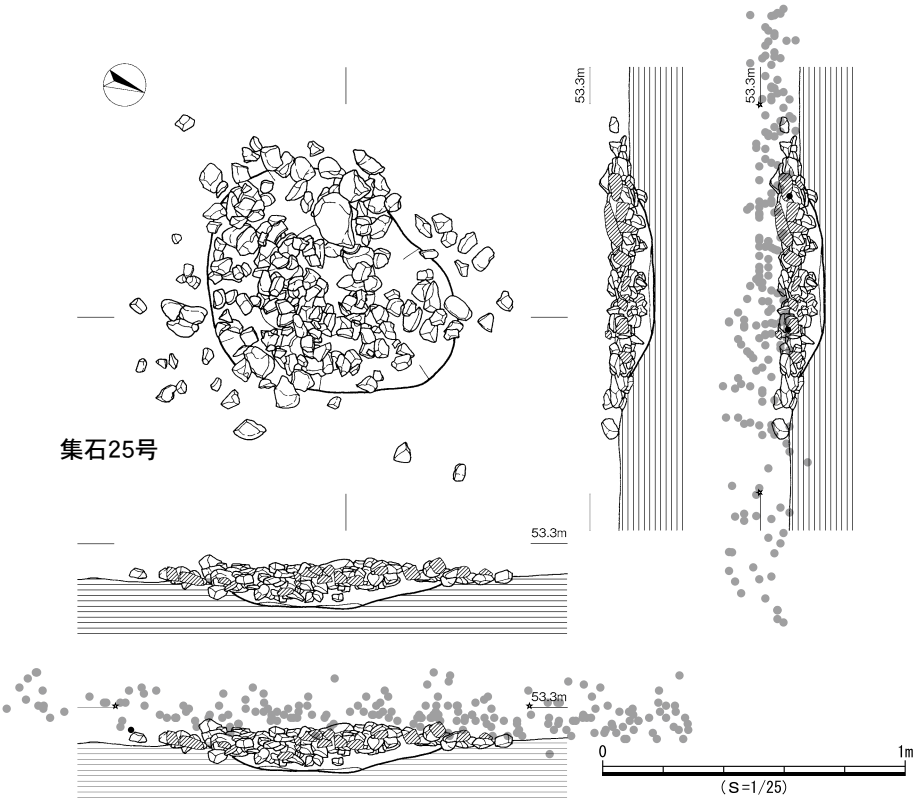
100g以下の破砕礫が80%を占める。約80㎝×80㎝の皿状の掘り込みを持つ。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石27号（Ⅰ類・第21図）

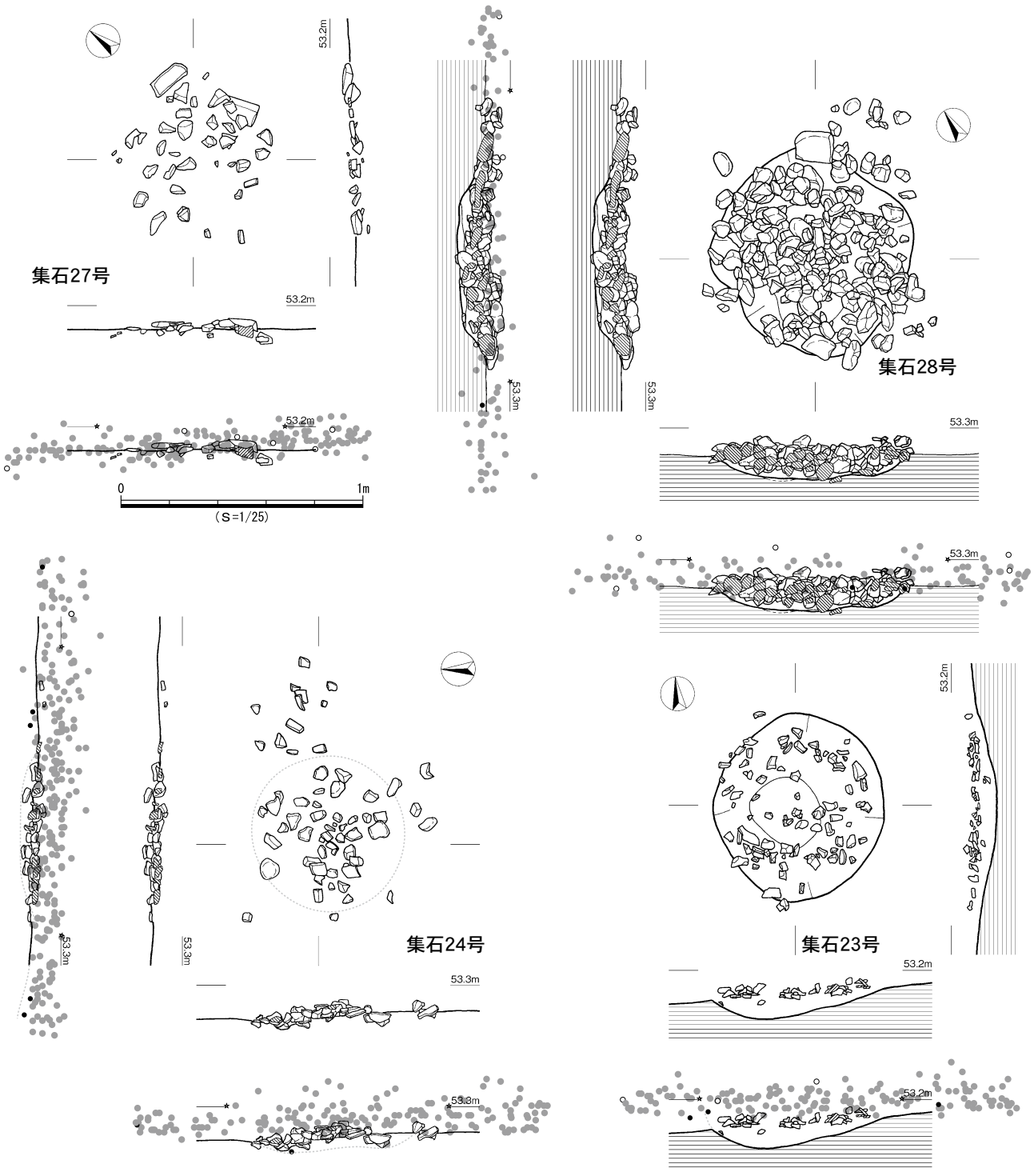
100g以下の礫が約62%を占める。明確な掘り込みを確認できなかった。まとまりなく散在化している状況である。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石28号（Ⅲａ類・第21図）

100g以下の礫は約60%である。約85㎝×80㎝の浅い



第20図　集石実測図（８）25号



第21図　集石実測図（９）23・24・27・28号

皿状の掘り込みを持つ。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

集石24号（Ⅲａ類・第21図）

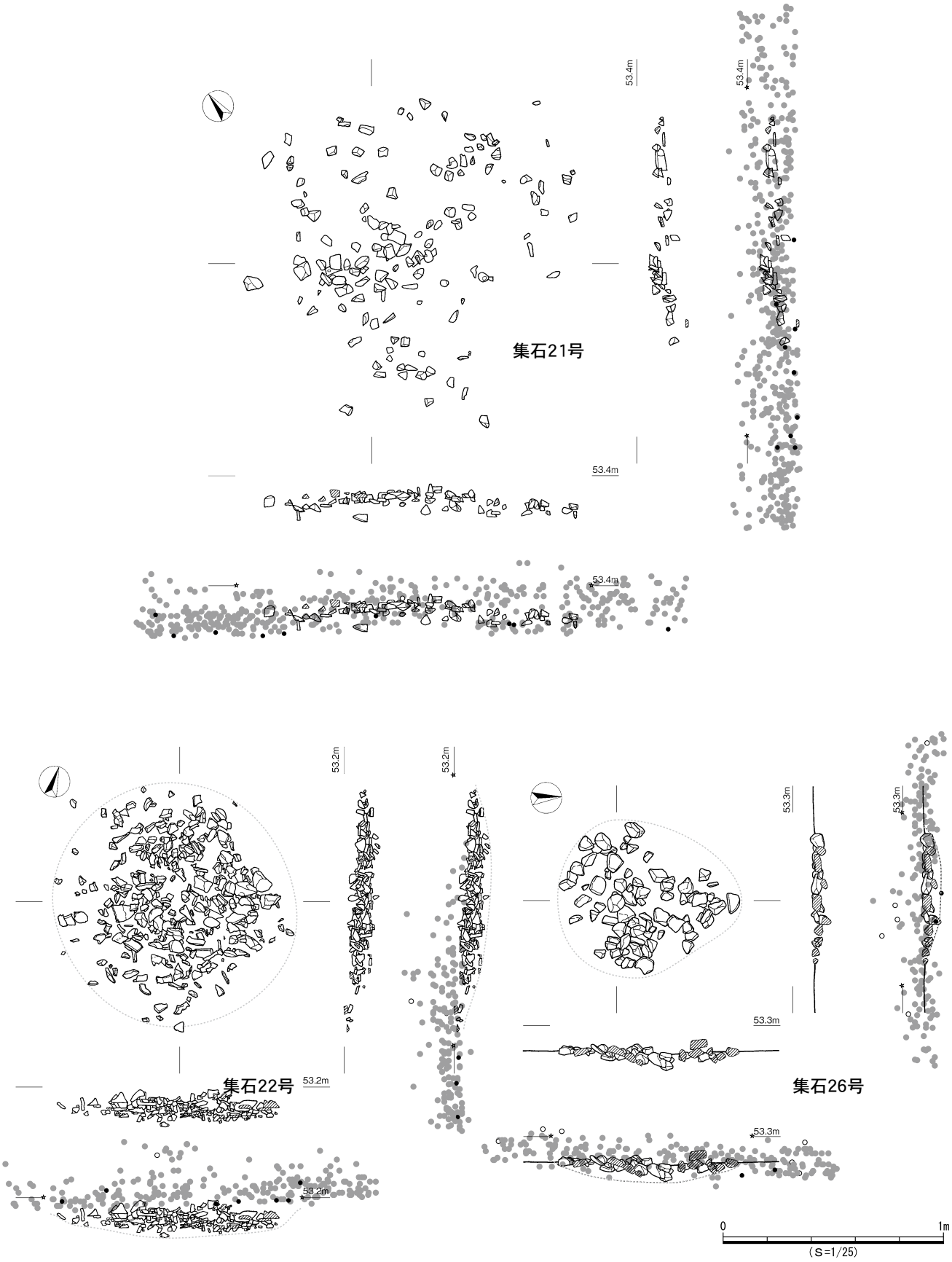
100g以下の破砕礫は66%である。明確な掘り込みを確認できなかったが，浅い掘り込みを持っていたと考えられ，Ⅲ類集石とした。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石23号（Ⅲｂ類・第21図）

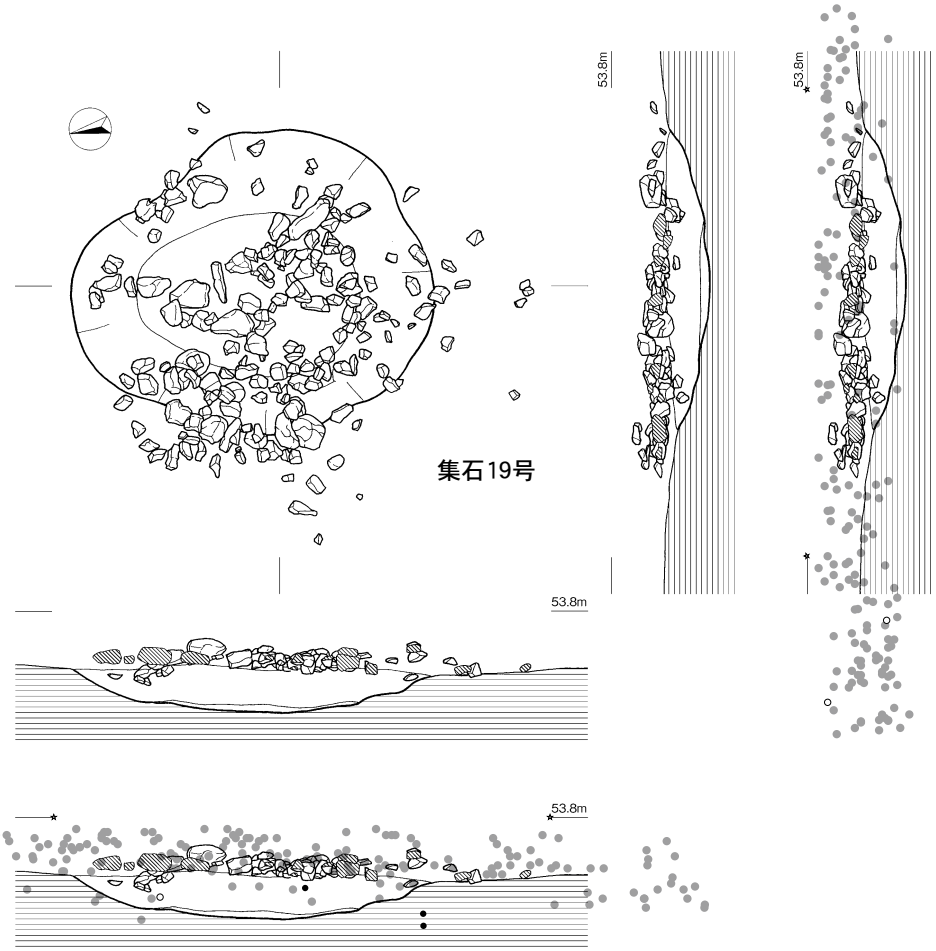
100g以下の破砕礫が89%を占める。約80㎝×70㎝の浅い皿状の掘り込みを持つ。掘り込み内に礫が残っていると考えられるが，散在化し破損率も高い。調査時はⅥ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

集石21号（Ⅱ＋Ⅰ類・第22図）

100g以下の破砕礫が86%を占める。明確な掘り込みは確認できなかったが，断面の状況から浅い掘り込みを持っていた可能性がある。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ層相当の集石と考える。



第22図　集石実測図（10）21・22・26号



第23図　集石実測図（11）19・20号

集石22号（Ⅲａ類・第22図）

100g以下の破砕礫が79%を占める。調査時に明確な掘り込みは確認できなかったが断面の状況から掘り込みがあったと考えられ，Ⅲ類集石とした。推定掘り込みの径は、約115㎝×110㎝である。掘り込み内の礫は小さく破損率が高い集石である。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石26号（Ⅲａ類・第22図）

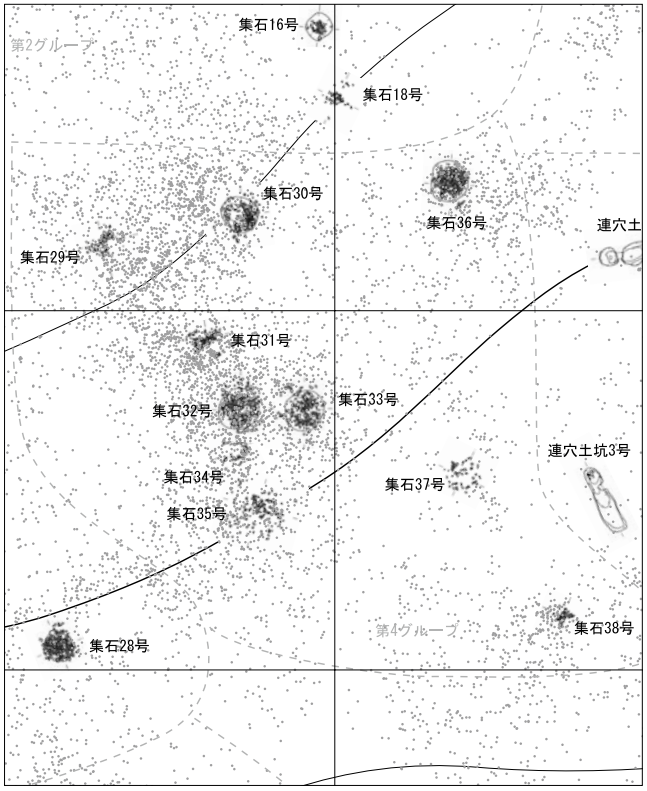
100g以下の礫が約63%を占める。調査時は確認できなかったが，散礫・断面の状況から浅い掘り込みがあったと考えられ，Ⅲ類集石とした。発掘調査時の検出状況，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

集石19号（Ⅲｂ類・第23図）

100g以下の破砕礫が78％を占める。約120cm×100cmのたらい状の掘り込みを持つ。掘り込みの床面から集石までレベル差がある。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石20号（Ⅱ類・第23図）

100g以下の破砕礫は47%である。明確な掘り込みを確認することはできなかった。散在化している状況である。集石上面に散礫が広がるが周辺の状況からこの集石



には伴わないと考えられる。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

第４グループ

第４グループは，集石29 ～ 38号までの集石である。Ｂ・Ｃ－３・４区に広がる。緩やかに南東側に傾斜する面に広がっている。Ⅴ層該当集石が２基，Ⅴ・Ⅵ層該当集石が１基，Ⅵ層該当集石が７基検出された

集石37号（Ⅰ類・第24図）

100g以下の破砕礫が66%を占める。明確な掘り込みを確認できなかった。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石34号（Ⅱ＋Ⅰ類・第24図）

100g以下の破砕礫が74%を占める。明確な掘り込みを確認できなかった。散在化し周辺にも多数の散礫が散らばっている状況である。発掘調査時の検出状況，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

集石33号（Ⅲａ類・第25図）

100g以下の破砕礫が73%をしめる。約11㎝×110㎝の皿状の掘り込みを持つ。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石29号（Ⅲａ類・第25図）

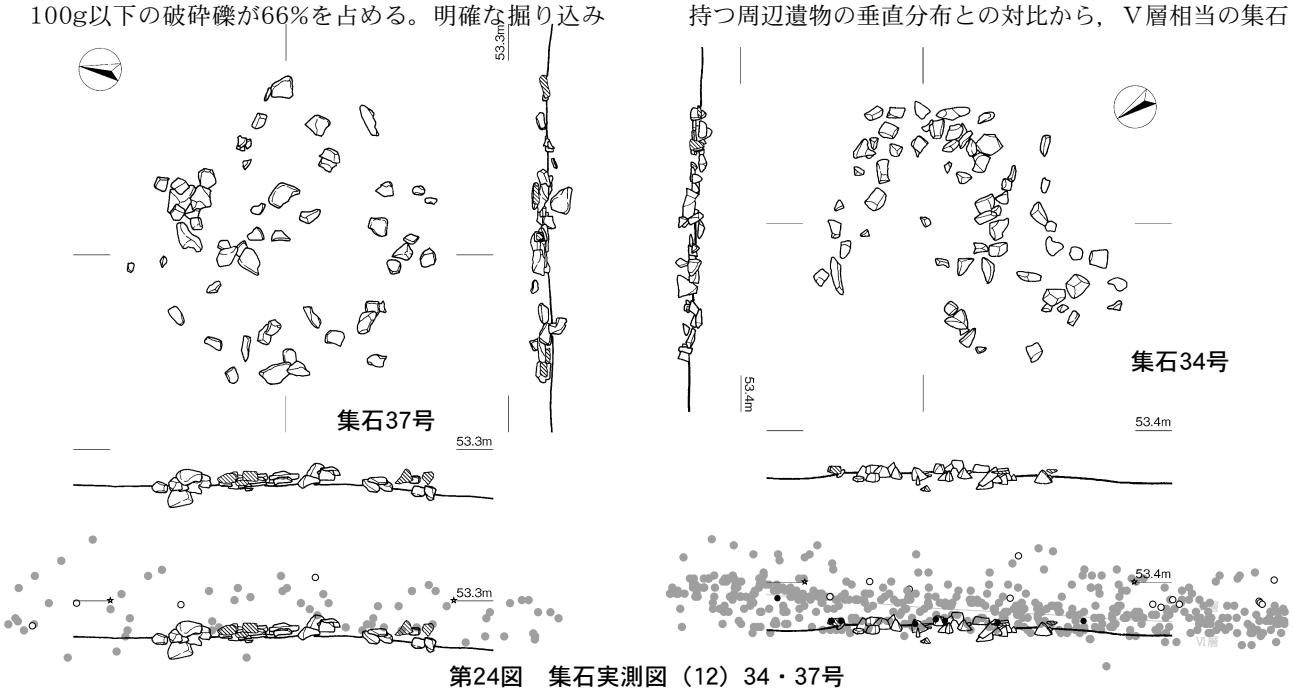
礫の重量データがないが，破砕した小破片が多く散在化した状況が見られる。断面の状況から浅い掘り込みがあったと考えられ，Ⅲ類集石とした。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石30号（Ⅲｂ類・第26図）

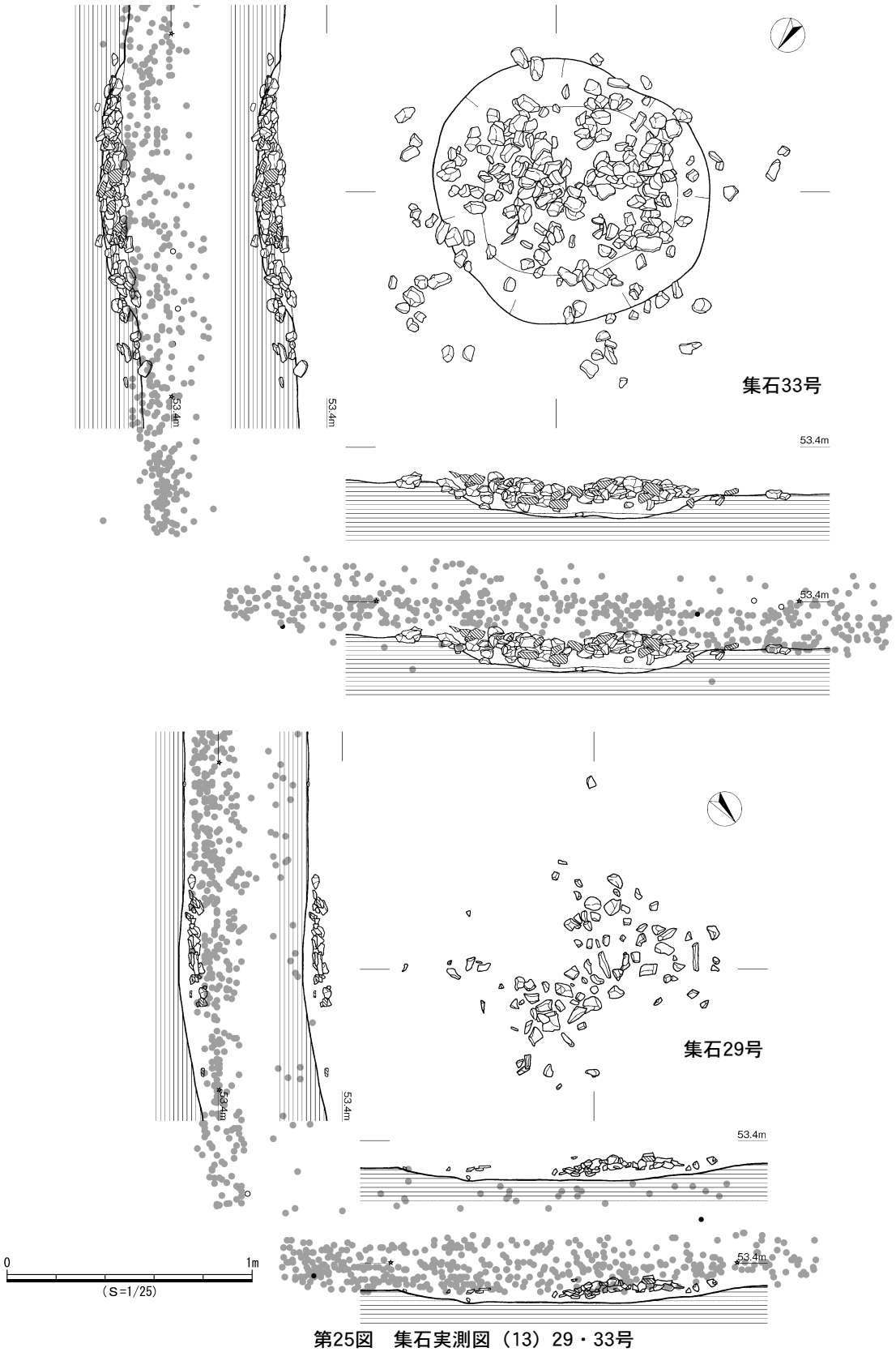
100g以下の礫が56%である。約100cm×100cmのたらい状の掘り込みを持つ。掘り込みの床面から集石までレベル差がある。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石35号（Ⅲａ類・第26図）

100g以下の破砕礫が73%を占める。明確な掘り込みを確認できなかったが，断面状況・被熱破砕礫の分布状況から浅い掘り込みがあった可能性もある。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石



第24図　集石実測図（12）34・37号



第25図　集石実測図（13）29・33号

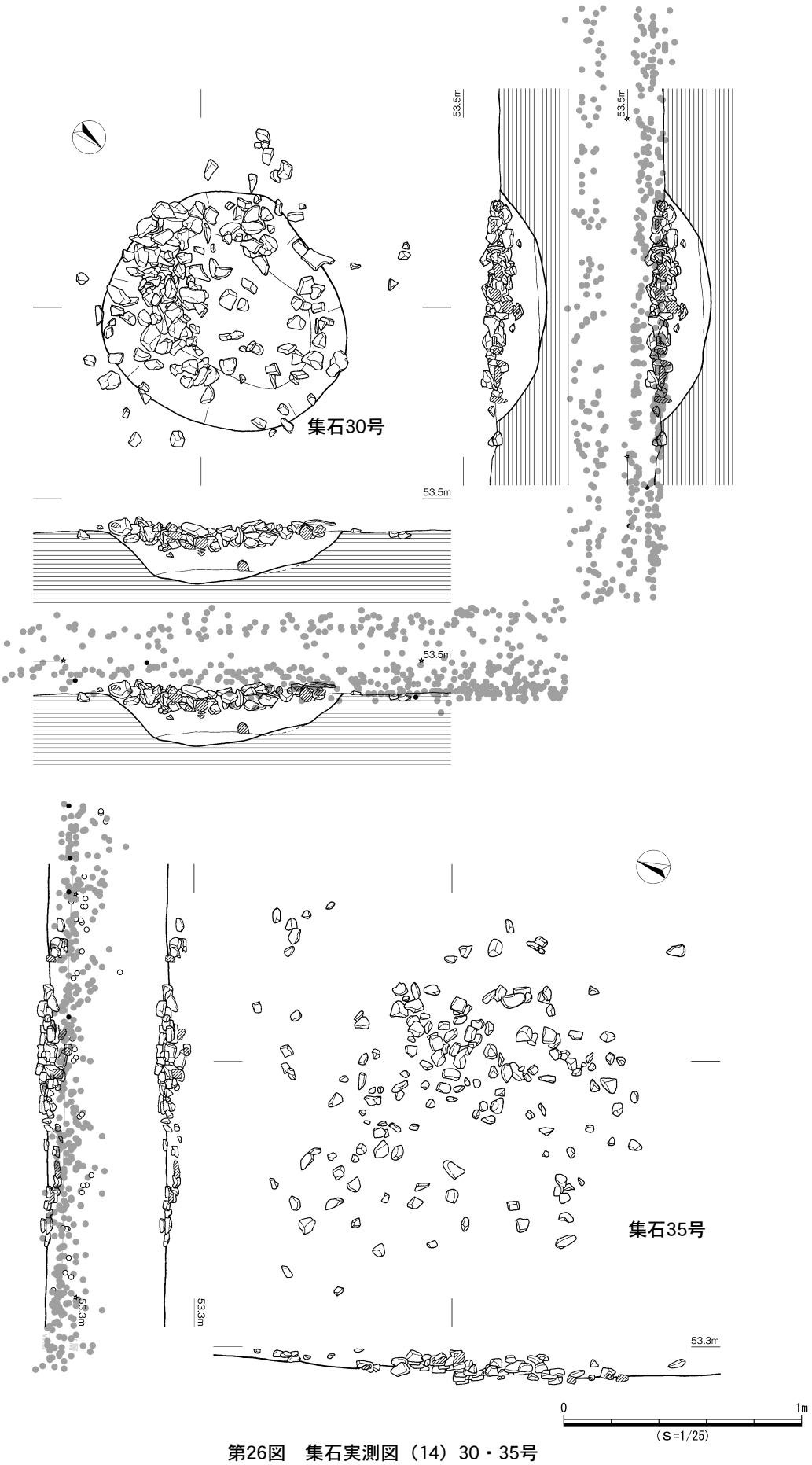
と考える。

集石32号（Ⅲａ類・第27図）

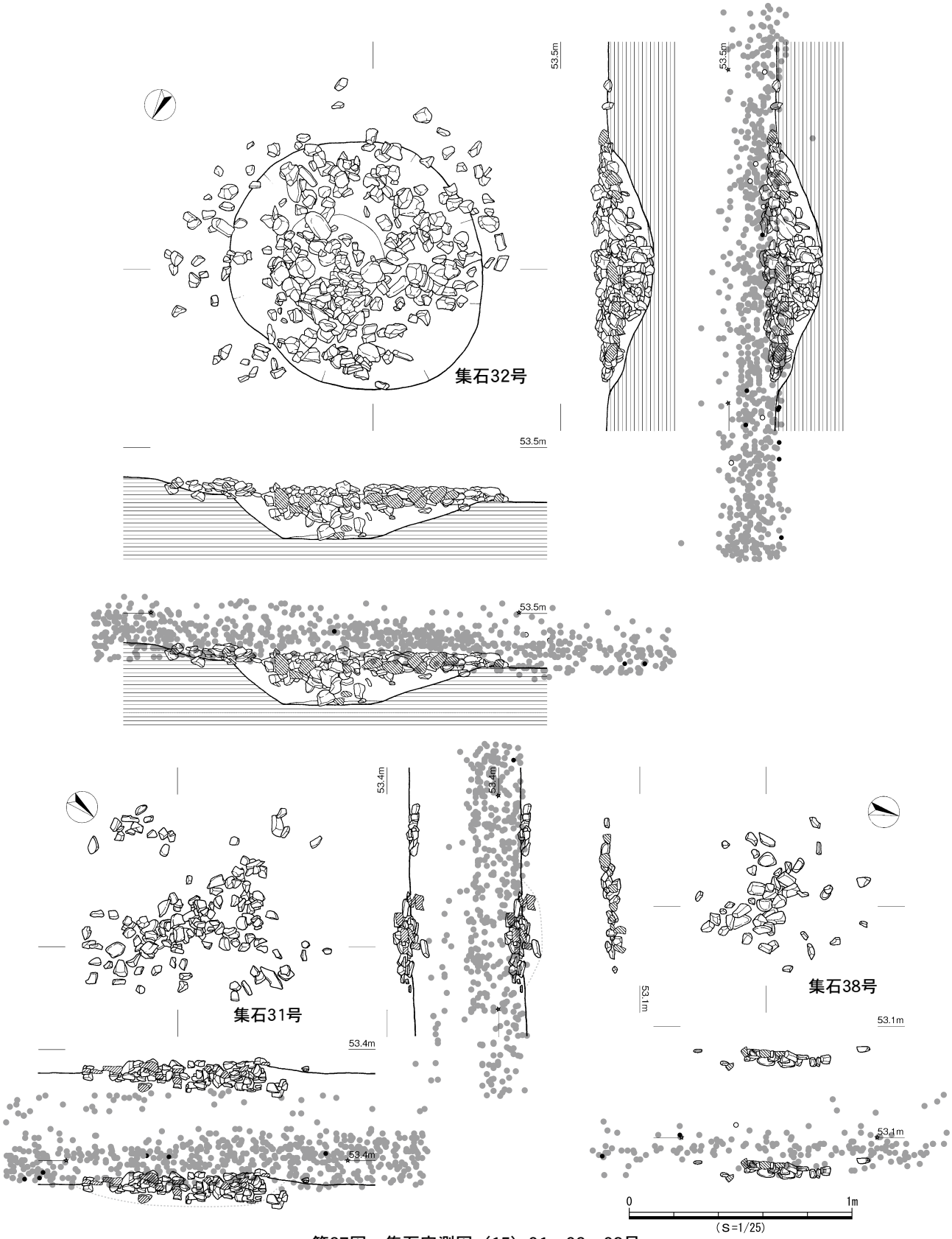
100g以下の破砕礫が65％を占める。約120cm×115cmの深いたらい状の掘り込みを持つ。稲荷迫遺跡では深い掘り込みを持ち，礫が掘り込み床面まで充填されている状況の集石には，底石・壁石を持つものが多いが，この集石では確認できなかった。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石31号（Ⅲａ類・第27図）

100g以下の破砕礫は74%である。明確な掘り込みを



第26図　集石実測図（14）30・35号

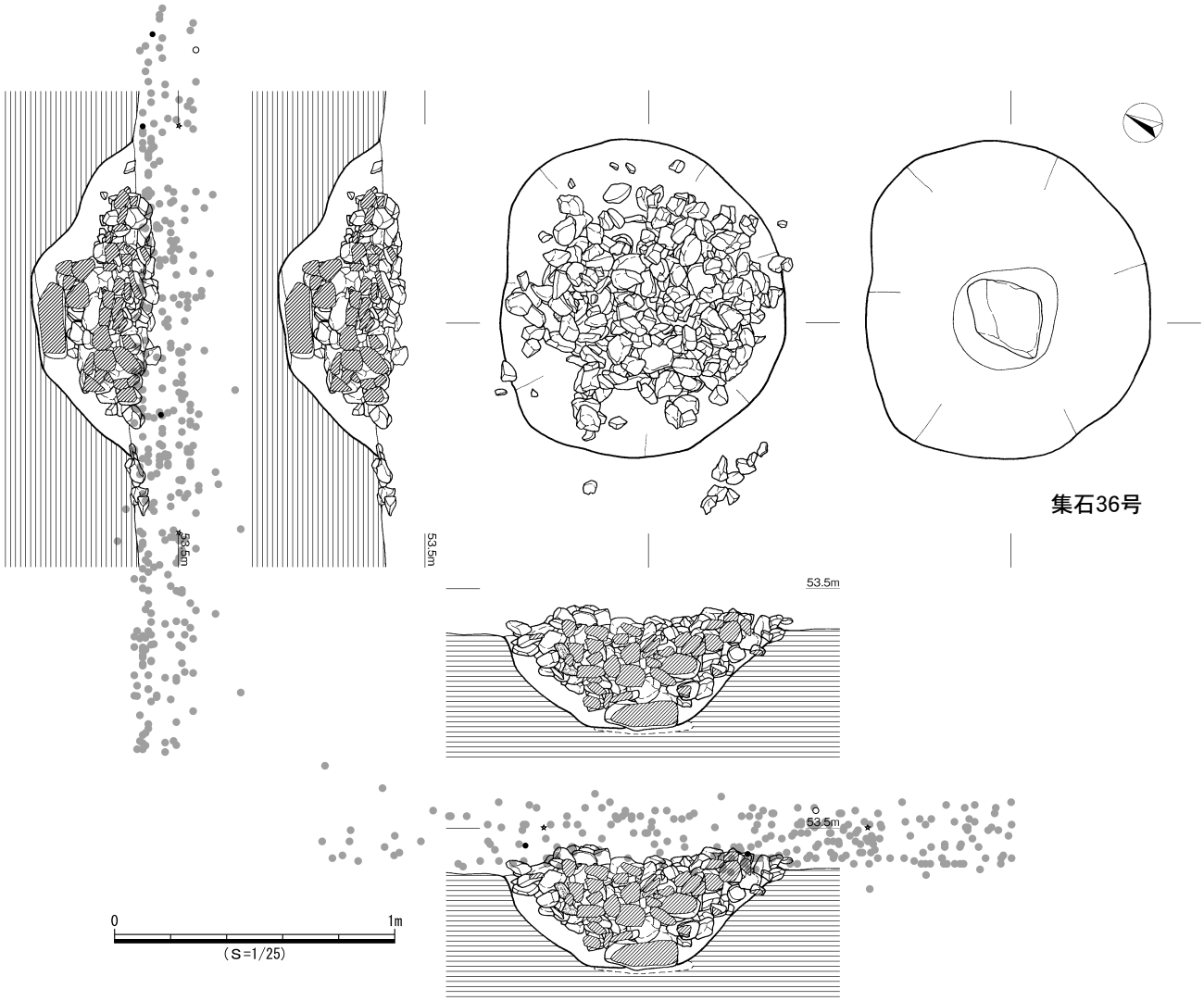


第27図　集石実測図（15）31・32・38号

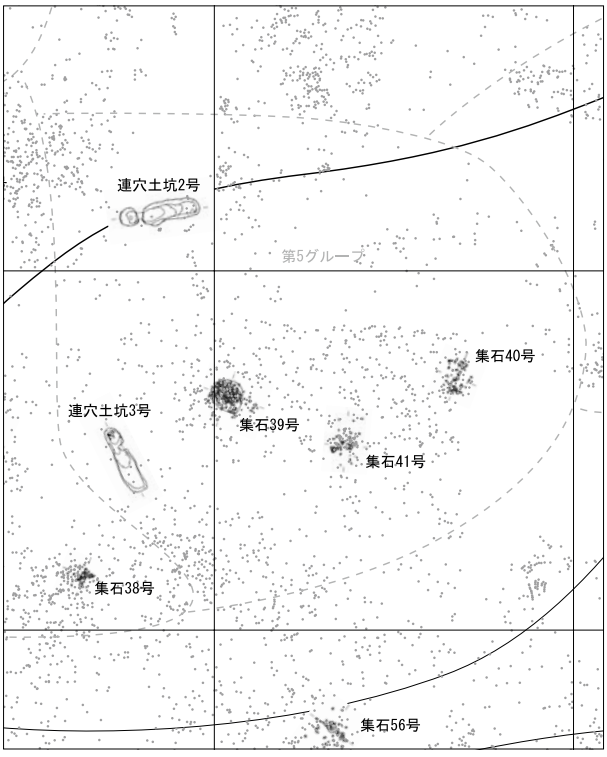
確認することができなかったが，断面の状況から掘り込みを持っていたと考えられ，Ⅲ類集石とした。推定の掘り込みの径は，約110㎝×65㎝である。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石38号（Ⅱ類・第27図）

100ｇ以下の破砕礫は56％である。調査時明確な掘り込みを確認することができなかったが，断面の状況から浅い掘り込みを持っていた可能性がある。発掘調査時の



第28図　集石実測図（16）36号



検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石36号（Ⅳ類・第28図）

300gを超える大型の礫が27%を占める。約115cm×105cmの深いたらい状の掘り込みを持つ。掘り込み内に礫が充填されていると考えられる。大型の礫を底石にしている。稲荷迫遺跡で検出され計測した集石の中では、総重量が最大である。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。

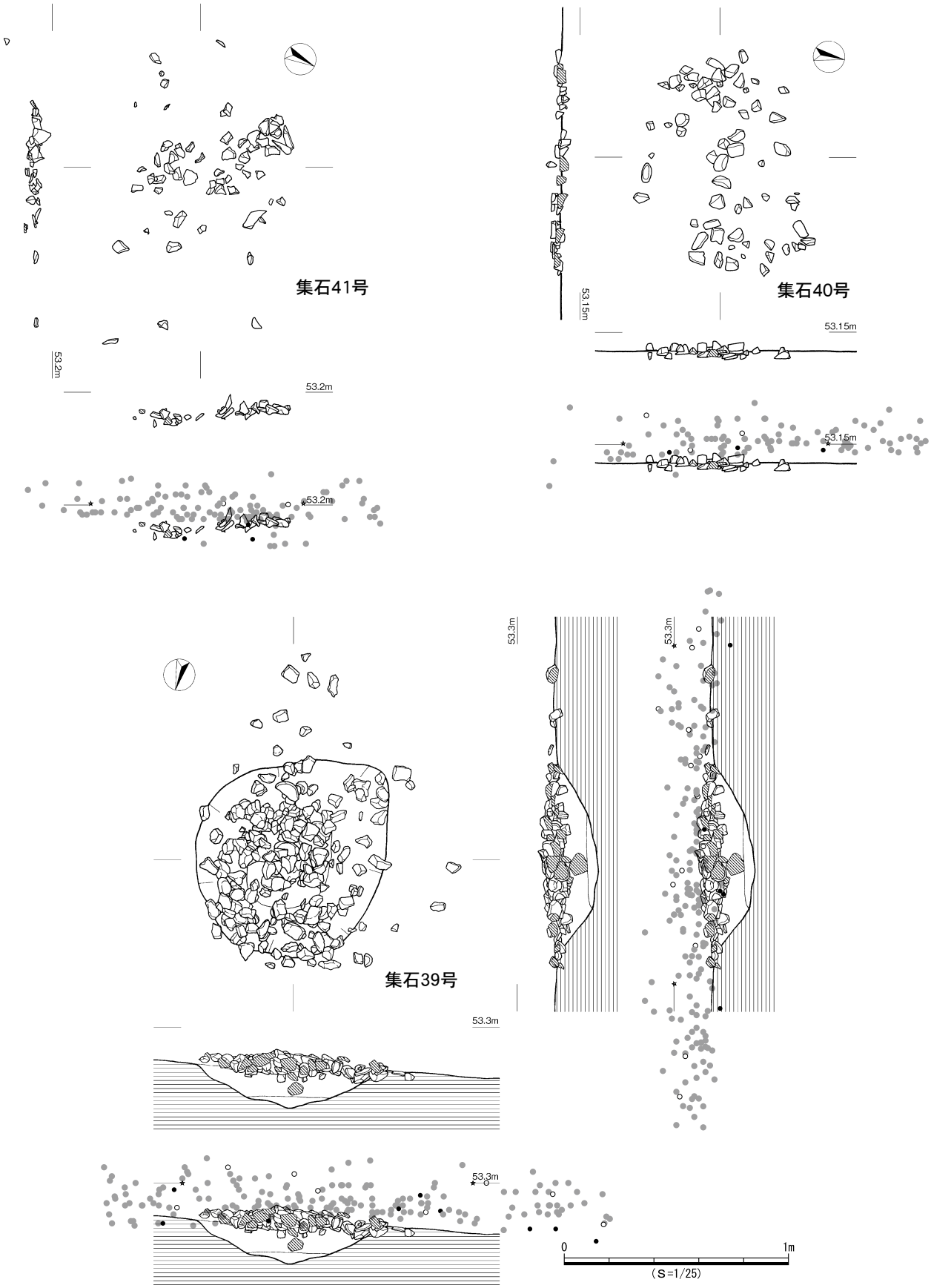
第５グループ

第５グループは，集石39～41号までの集石である。地形的に傾斜が緩やかな，Ｃ－５区に広がる。Ⅴ層該当集石が１基，Ⅴ・Ⅵ層該当集石が２基検出された。

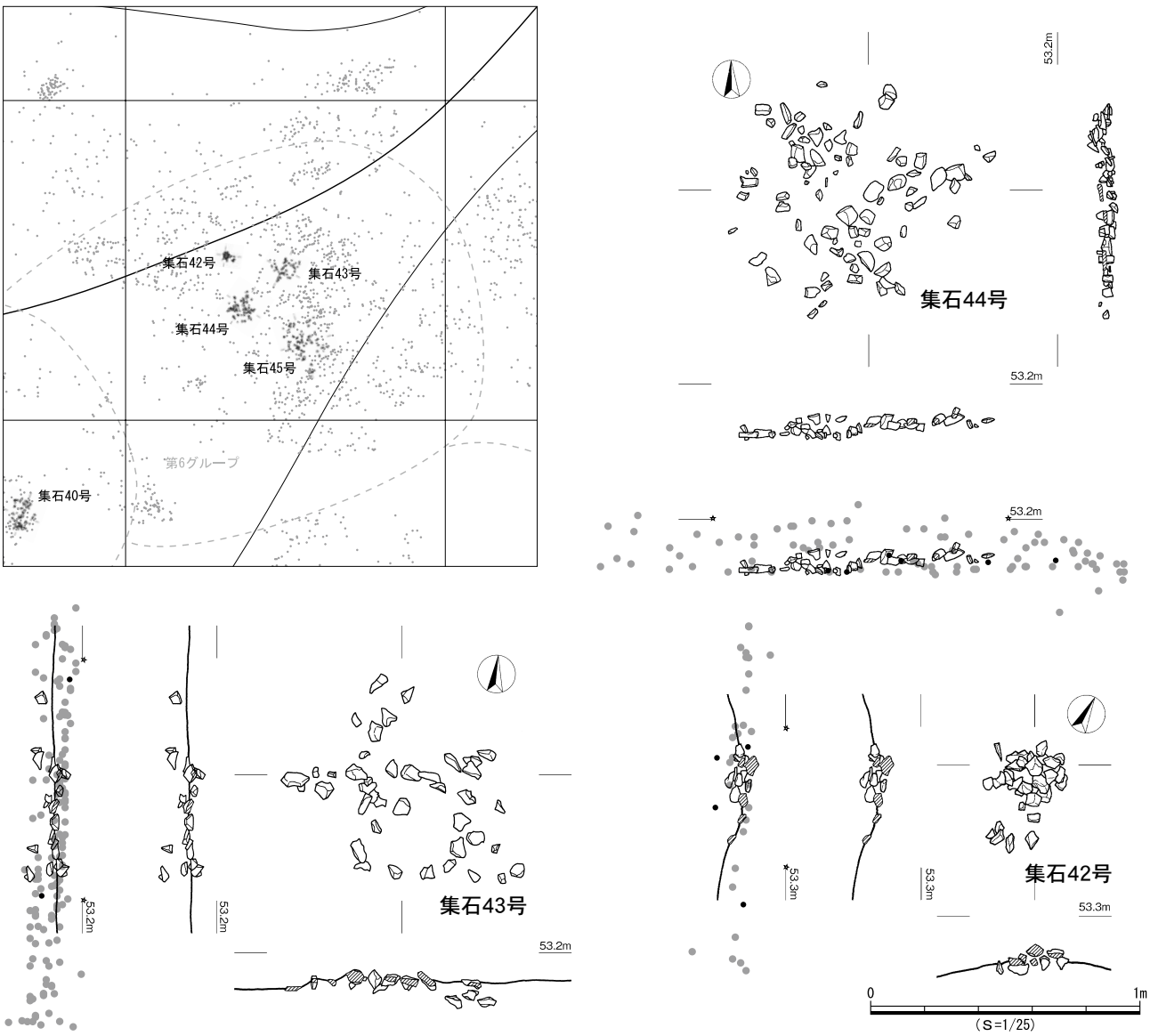
集石41号（Ⅱ類・第29図）

100ｇ以下の破砕礫は56％である。明確な掘り込みは確認できなかった。散在化した状況である。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石40号（Ⅱ＋Ⅰ類・第29図）



第29図　集石実測図（17）39 ～ 41号



第30図　集石実測図（18）42 ～ 44号

100g以下の破砕礫が69%を占める。明確な掘り込みを確認できなかった。礫は散在している状況である。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

集石39号（Ⅲｂ類・第29図）

100g以下の破砕礫が66%を占める。約90㎝×90㎝のたらい状の掘り込みを持つ。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

第６グループ

第６グループは，集石42 ～ 45号までの集石である。地形的に傾斜が緩やかな，Ｂ－６区に広がる。すべてⅥ層該当集石である。稲荷迫遺跡において，Ⅵ層該当集石は，何らかの掘り込みを持つ集石がほとんどであるが，この第６グループはすべて明確な掘り込みを持たないと考えられる。

集石44号（Ⅱ類・第30図）

散礫の重量データはないが，散在化した状況であり小破片が多く見られる。明確な掘り込みを確認できなかった。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。

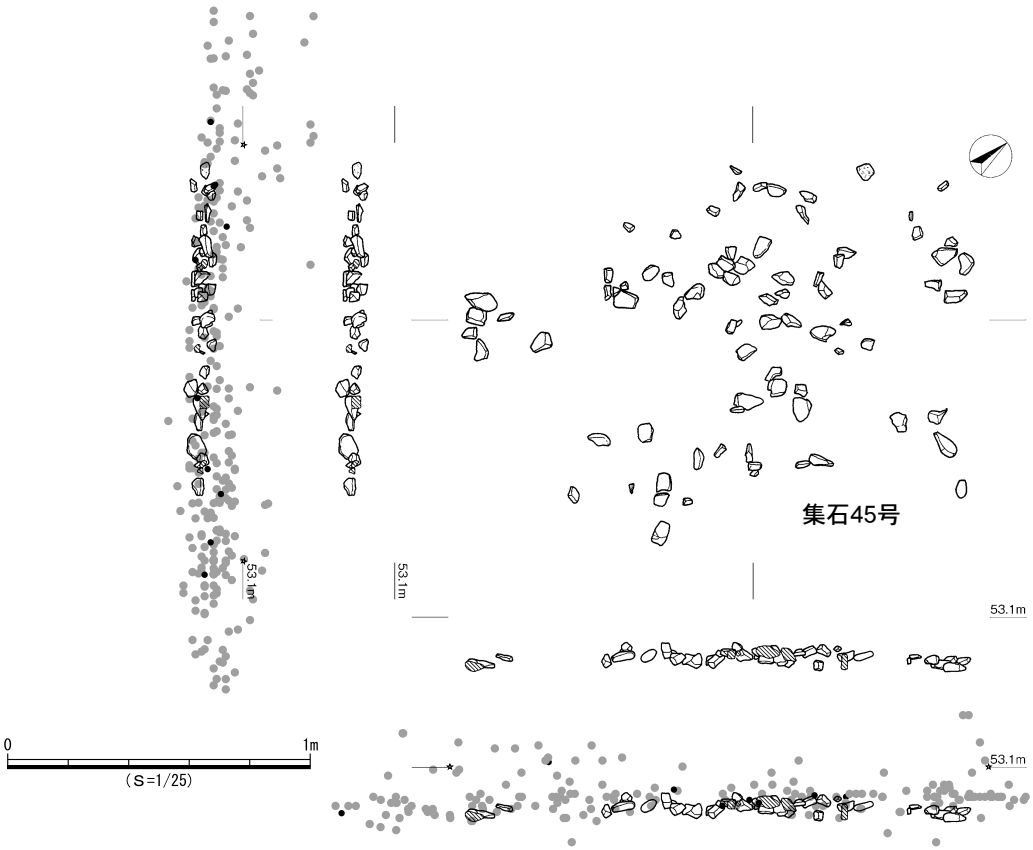
集石43号（Ⅱ＋Ⅰ類・第30図）

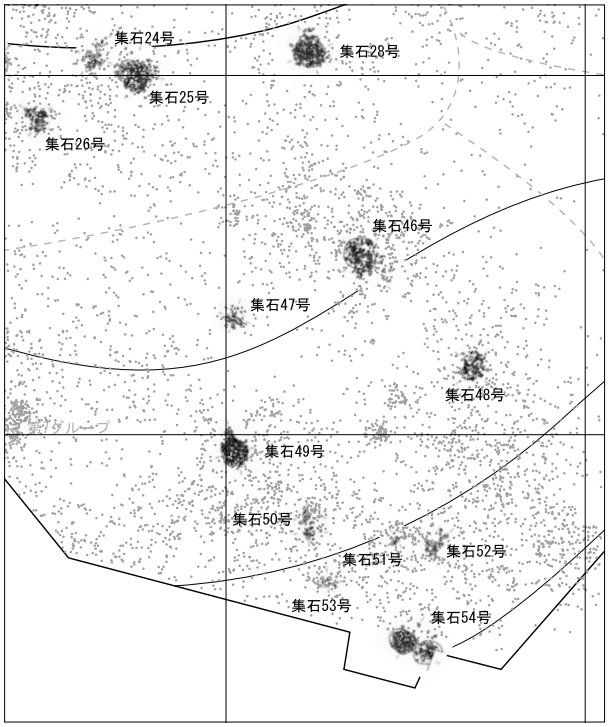
100g以下の破砕礫が90%を占め，散在化している状況である。明確な掘り込みを確認できなかった。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。

集石42号（Ⅱ類・第30図）

100g以下の破砕礫が65%である。明確な掘り込みを確認できなかった。まとまっているが破砕した礫の割合は高い。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。

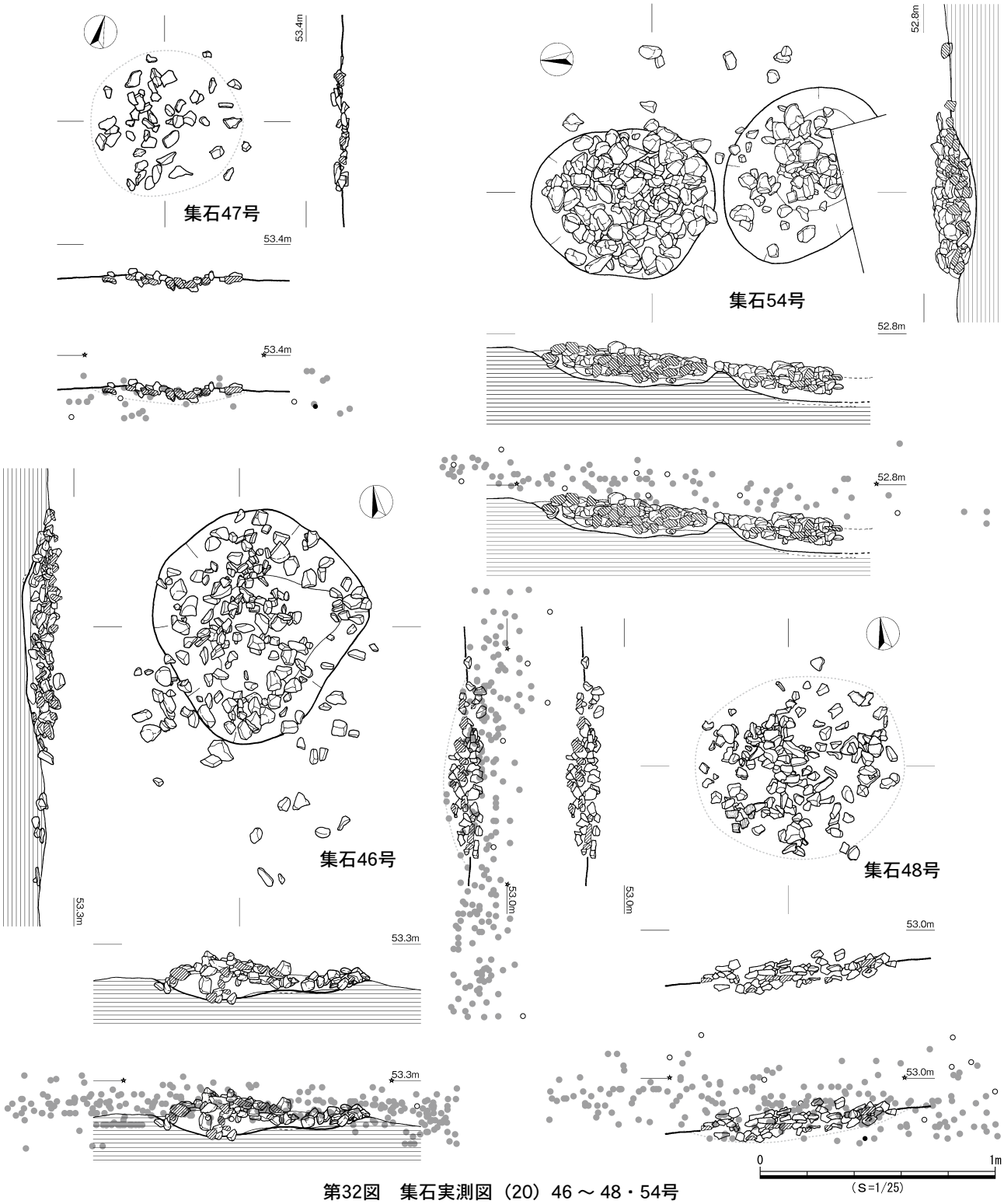
集石45号（Ⅰ類・第31図）





100g以下の破砕礫が78%を占める。明確な掘り込みを確認できなかった。散在化した状況であり，周辺にも散礫が散らばっている。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。

第31図　集石実測図（19）45・50・53号



第32図　集石実測図（20）46 ～ 48・54号

第７グループ

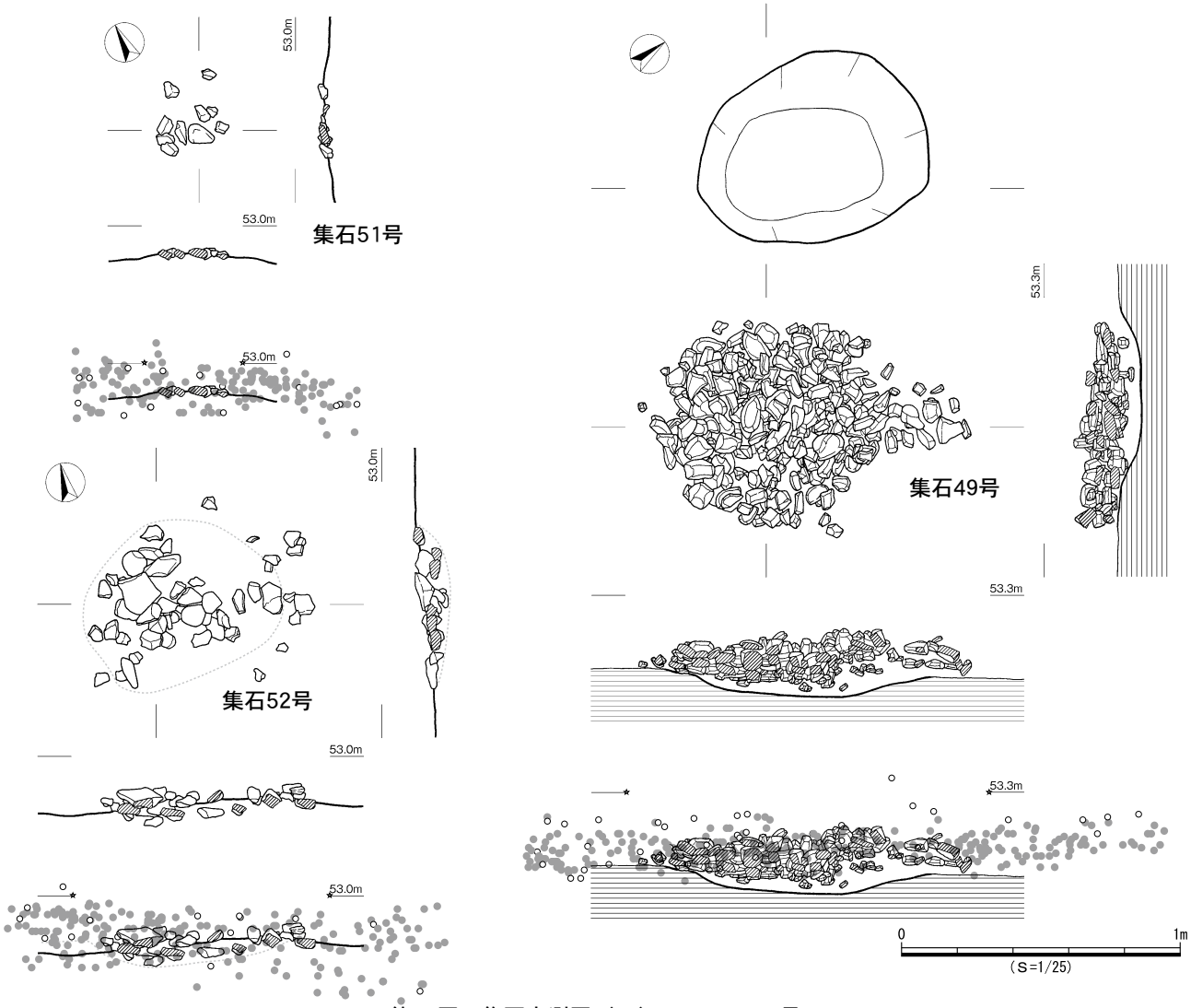
第７グループは，集石46 ～ 54号までの集石である。尾野見川に向かい南側に傾斜がきつくなる，Ｄ・Ｅ－３区に広がる。すべてＶ層該当集石である。

集石50号（Ⅲａ類・第31図）

破砕礫の重量情報がないため正確ではないが，散在化した状況である。調査時に明確な掘り込みは確認できなかったが，断面・散礫分布状況から浅い掘り込みを持っていたと考えられ，Ⅲ類集石とした。推定の径は約55㎝×55㎝である。断面の状況から南西側の礫の集まりはかき出した際の礫と考えられる。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ｖ層相当の集石と考える。

集石53号（Ⅰ類・第31図）

100g以下の破砕礫が51%であるが，礫が非常に少なく散在化している。明確な掘り込みを確認することができなかった。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対



第33図　集石実測図（21）49・51・52号

比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石47号（Ⅲａ類・第32図）

不整形で散在化している状況である。調査時に明確な掘り込みは確認できなかったが，断面の状況から浅い掘り込みを持っていたと考えられ，Ⅲ類集石とした。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石54号（Ⅲａ類・第32図）

100g以下の破砕礫が55%である。約80㎝×65㎝の皿状の掘り込みを持つ。掘り込み内に礫が充填されている。2つの掘り込みが重なっているので，使用された時期に差がある可能性，別々の集石の可能性も考えられる。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石46号（Ⅲａ類・第32図）

100g以下の礫が約74%を占める。約100㎝×95㎝の皿状の掘り込みを持つ。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石48号（Ⅲａ類・第32図）

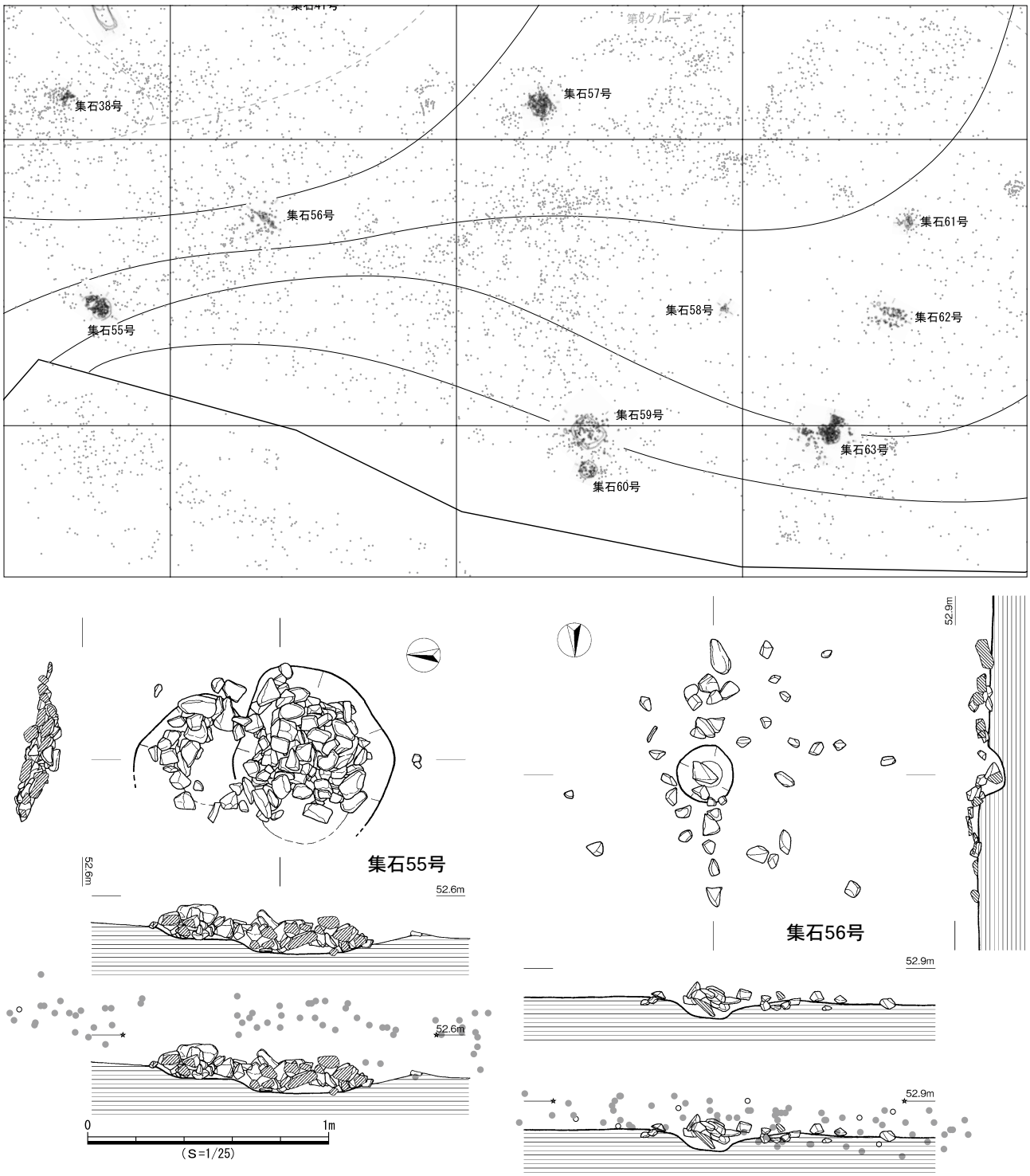
礫の重量データはないが，小破砕礫がほとんどと考えられる。現場で明確な掘り込みは確認できなかったが，断面状況から掘り込みがあったと考えられ，Ⅲ類集石とした。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石51号（Ⅰ類・第33図）

明確な掘り込みは確認できなかった。散礫の分布状況で集石52号との関連性が考えられる。散礫の状況から補充用の礫の一部・かき出した際の礫という可能性もある。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石52号（Ⅲａ類・第33図）

規模としては小さな集石であるが，比較的大きい礫がが多く混じる。調査時明確な掘り込みは確認できなかったが，断面の状況から浅い掘り込みをもっていたと考えられ，Ⅲ類集石とした。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。



第34図　集石実測図（22）55・56号

集石49号（Ⅲａ類・第33図）

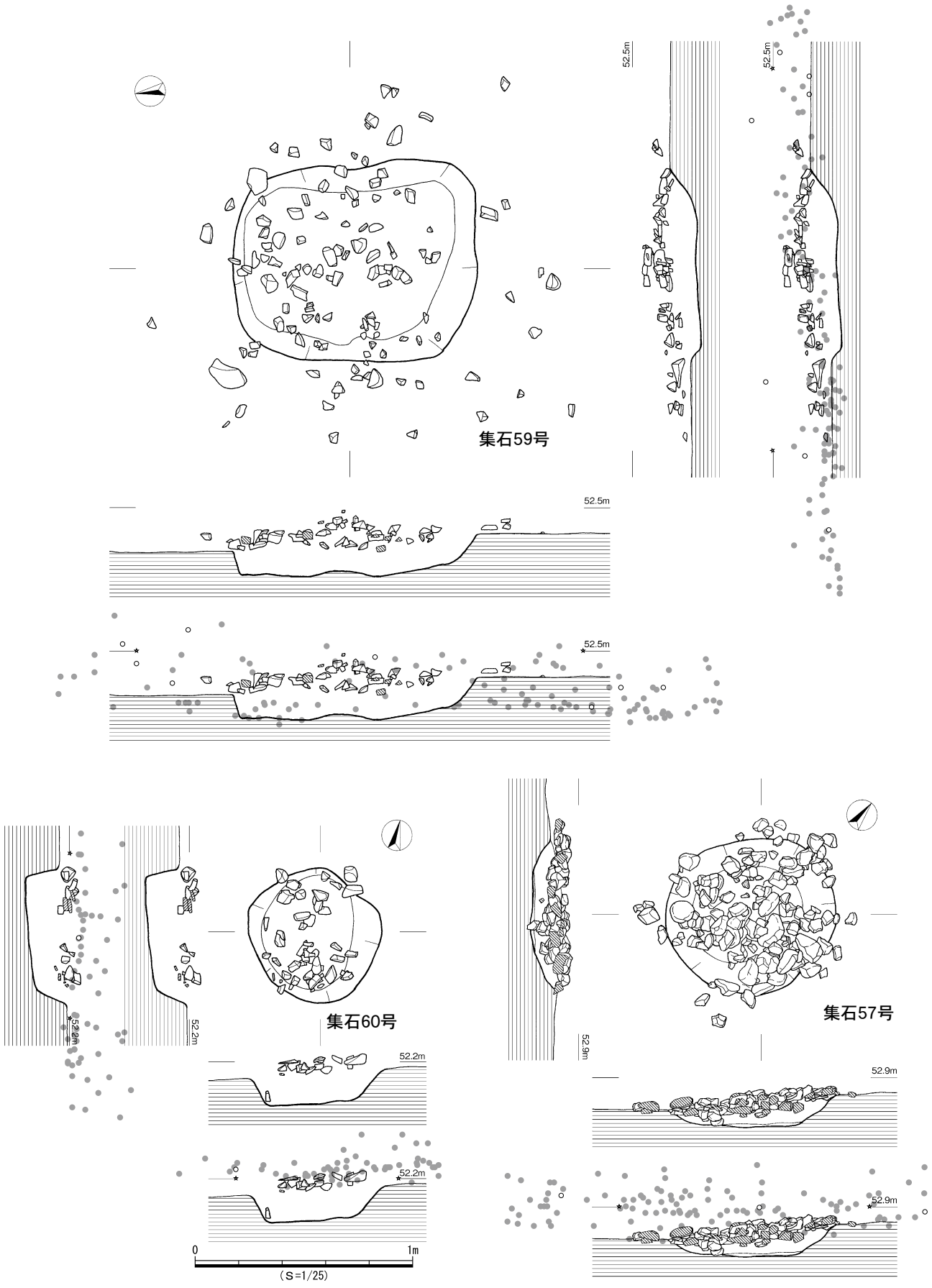
100g以下の礫が約59%である。約85㎝×70㎝の皿状の掘り込みを持つ。掘り込み内の礫は，原位置を保っていると考えられる。断面の状況から，掘り込み開始面はまだ上であった可能性がある。発掘調査時はⅥ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

第８グループ

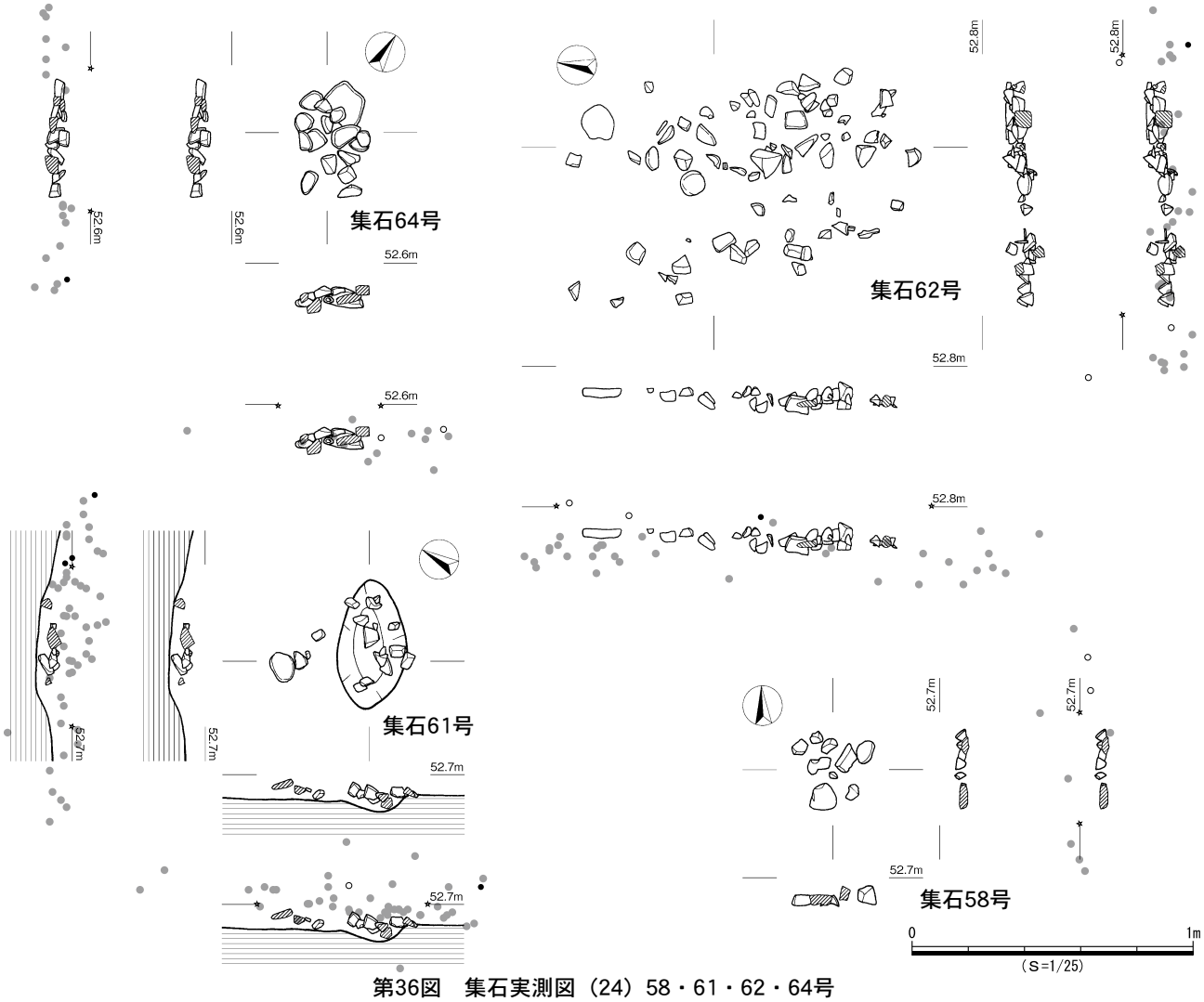
第８グループは，集石55 ～ 64号までの集石である。尾野見川に向かい傾斜する，C～E－４～８区に広がる。Ⅴ層該当集石が６基，Ⅴ・Ⅵ層該当集石が２基，Ⅵ層該当集石が２基検出された。

集石55号（Ⅲａ類・第34図）

100ｇ以下の礫が53％である。破損が大きく見られない礫が多く，まとまりを呈している。110㎝×80㎝の浅い皿状の掘り込みを持つ。発掘調査時の検出状況から，Ⅵ層相当の集石と考える。



第35図　集石実測図（23）57・59・60号



第36図　集石実測図（24）58・61・62・64号

集石56号（Ⅲａ類・第34図）

100ｇ以下の礫が71％を占める。集石の中心と考えられる部分に浅い掘り込みを持ち，稲荷迫遺跡で検出した掘り込みを持つ集石の中では特殊な構造をしている。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石59号（Ⅲｂ類・第35図）

100g以下の礫が71％を占める。約115㎝×90㎝のたらい状の掘り込みを持つ。掘り込み内の礫は散在化しており，原位置を保っていないと考えられる。集石60号と構造が似ている。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石60号（Ⅲｂ類・第35図）

礫の重量データはないが，小破砕礫がほとんどと考えられる。約65㎝×65㎝のたらい状の掘り込みをもつ。また，掘り込み床面から集石までレベル差を持つ。集石59号と隣接し，構造も似ている。発掘調査時はⅤ・Ⅵ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石57号（Ⅲａ類・第35図）

100g以下の破砕礫は57%である。約80㎝×75㎝の皿状の掘り込みを持つ。掘り込み床面と集石の間にレベル差がある。発掘調査時の検出状況から，Ⅴ層相当の集石と考える。

集石64号（Ⅱ類・第36図）

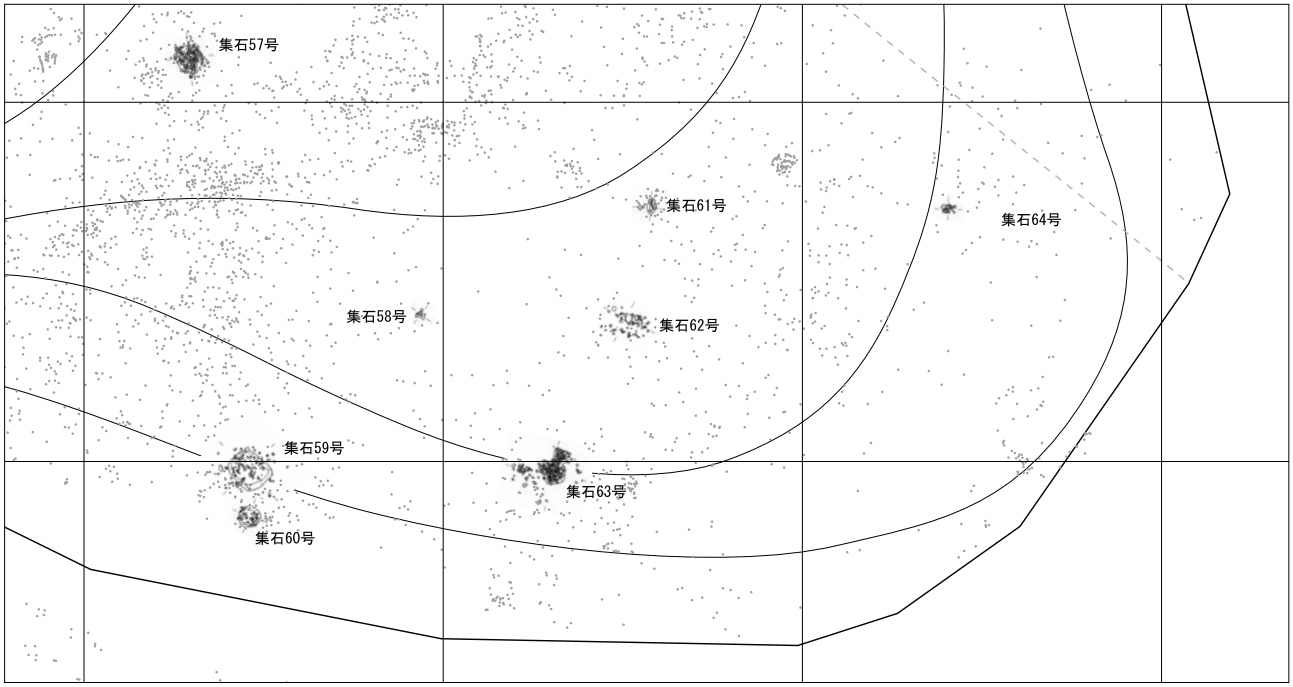
100ｇ以下の礫が40％である。明確な掘り込みは確認できなかった。被熱はうけているが破砕はあまり見られない。発掘調査時の検出状況，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ･Ⅵ層相当の集石と考える。

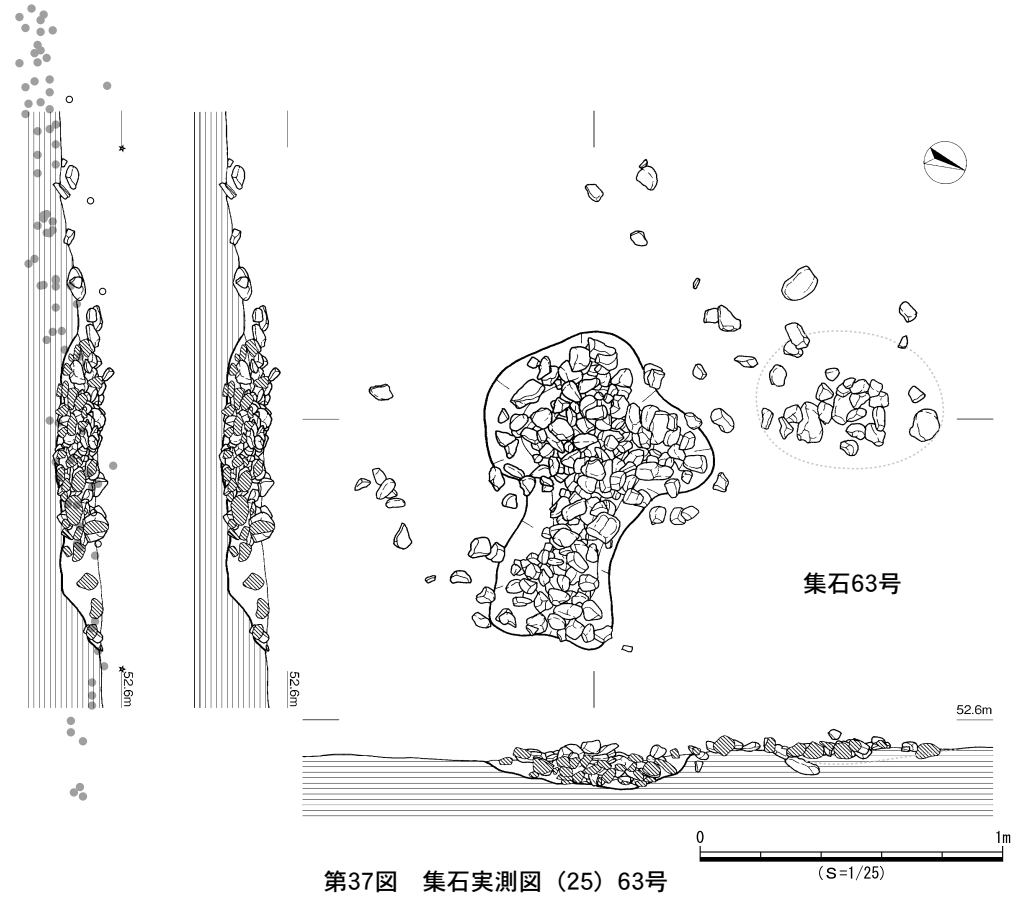
集石62号（Ⅱ＋Ⅰ類・第36図）

100ｇ以下の礫が62％であり，散在している状況である。明確な掘り込みは確認できなかった。発掘調査時はⅥ層としたが，層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ・Ⅵ層相当の集石と考える。

集石 61 号（Ⅲａ類・第 36 図）

100g以下の破砕礫が89%を占める。約45㎝×25㎝の浅い皿状の掘り込みを持つ。掘り込み内の礫は，原位置を保っていないと考えられる。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅵ層相当の集石と考える。





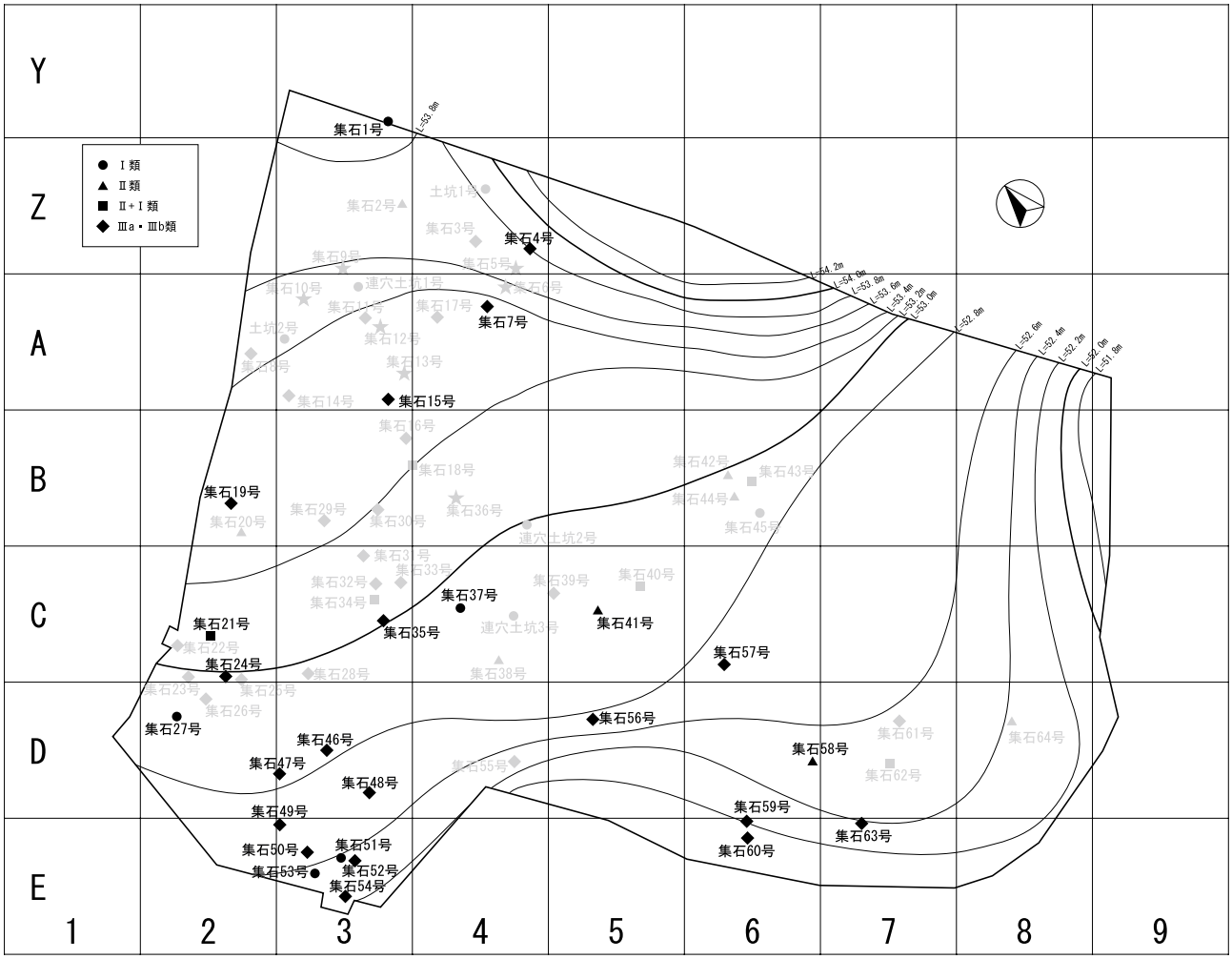
第37図　集石実測図（25）63号

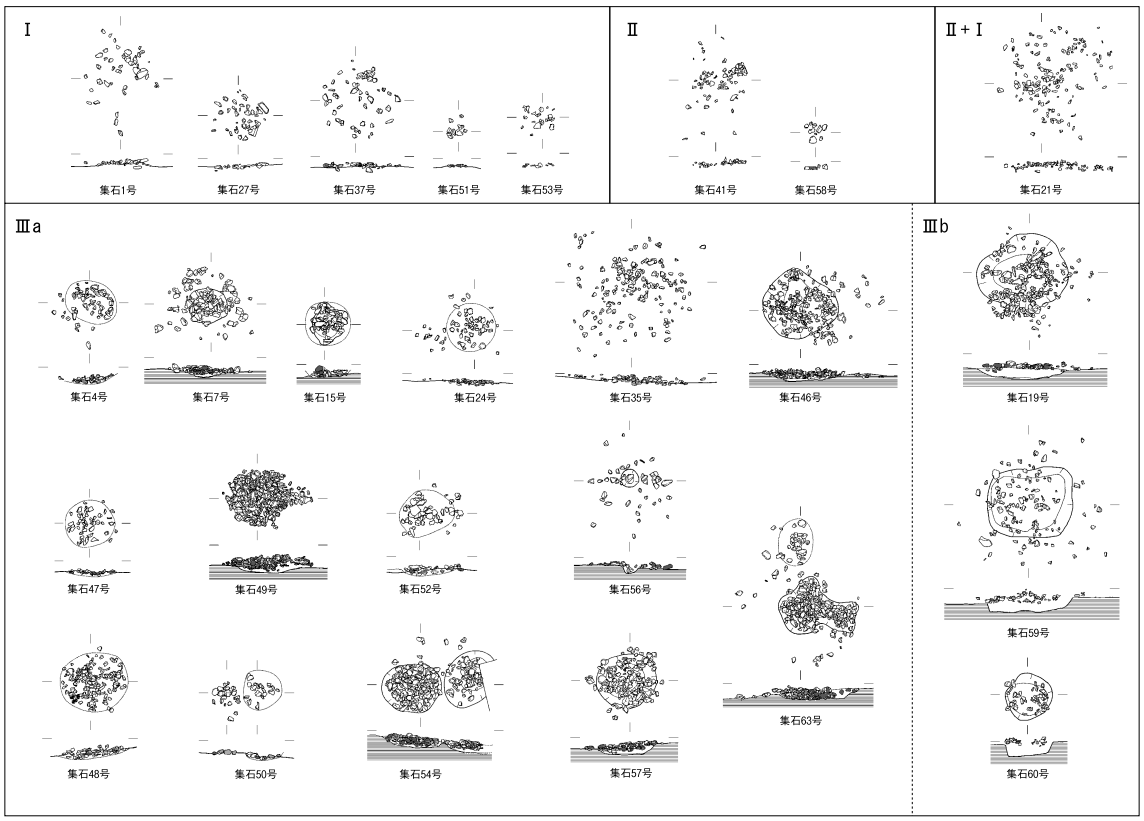
集石58号（Ⅱ類・第36図）

礫の重量データはないが，小破砕礫がほとんどと考えられる。明確な掘り込みを確認できなかった。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。

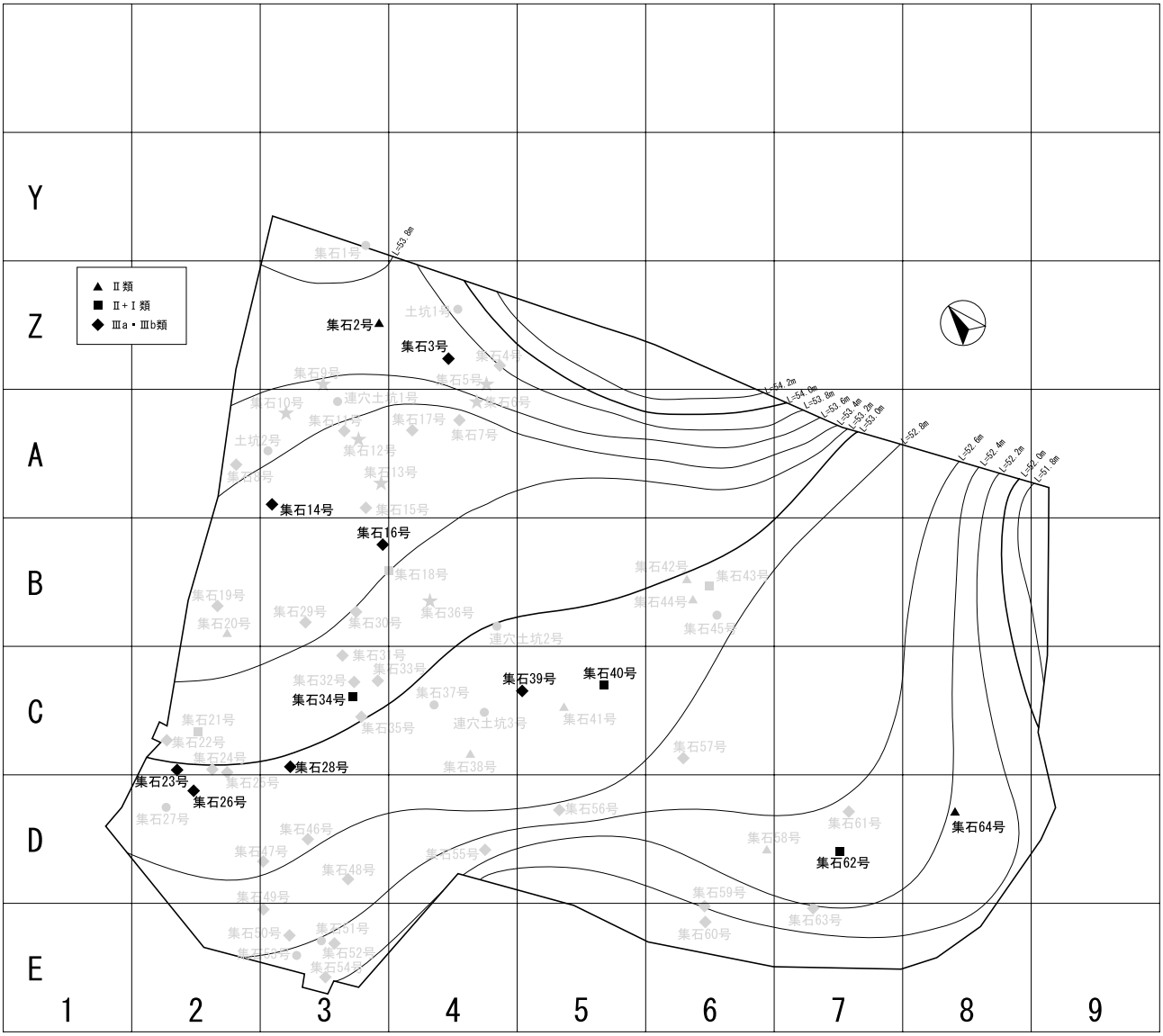
集石63号（Ⅲａ類・第37図）

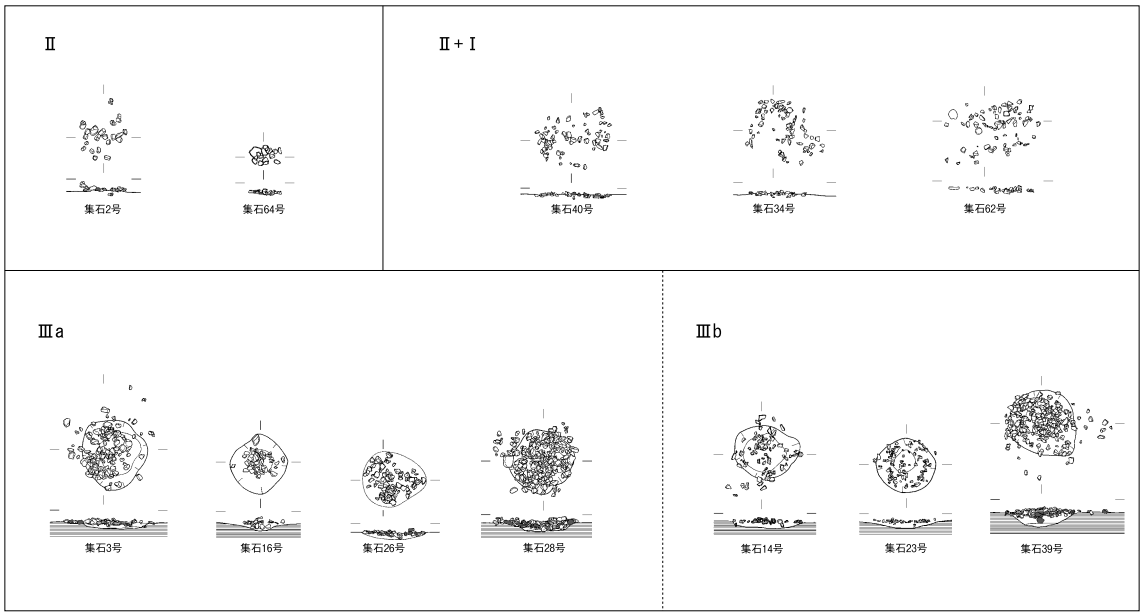
100ｇ以下の礫が55％である。約105㎝×75㎝の皿状の掘り込みを持つ。掘り込み内の礫は，原位置を保っていると考えられる。北側にかき出したと考えられる礫のまとまりがあるが，形状から別個体の集石の可能性もある。層位情報を持つ周辺遺物の垂直分布との対比から，Ⅴ層相当の集石と考える。



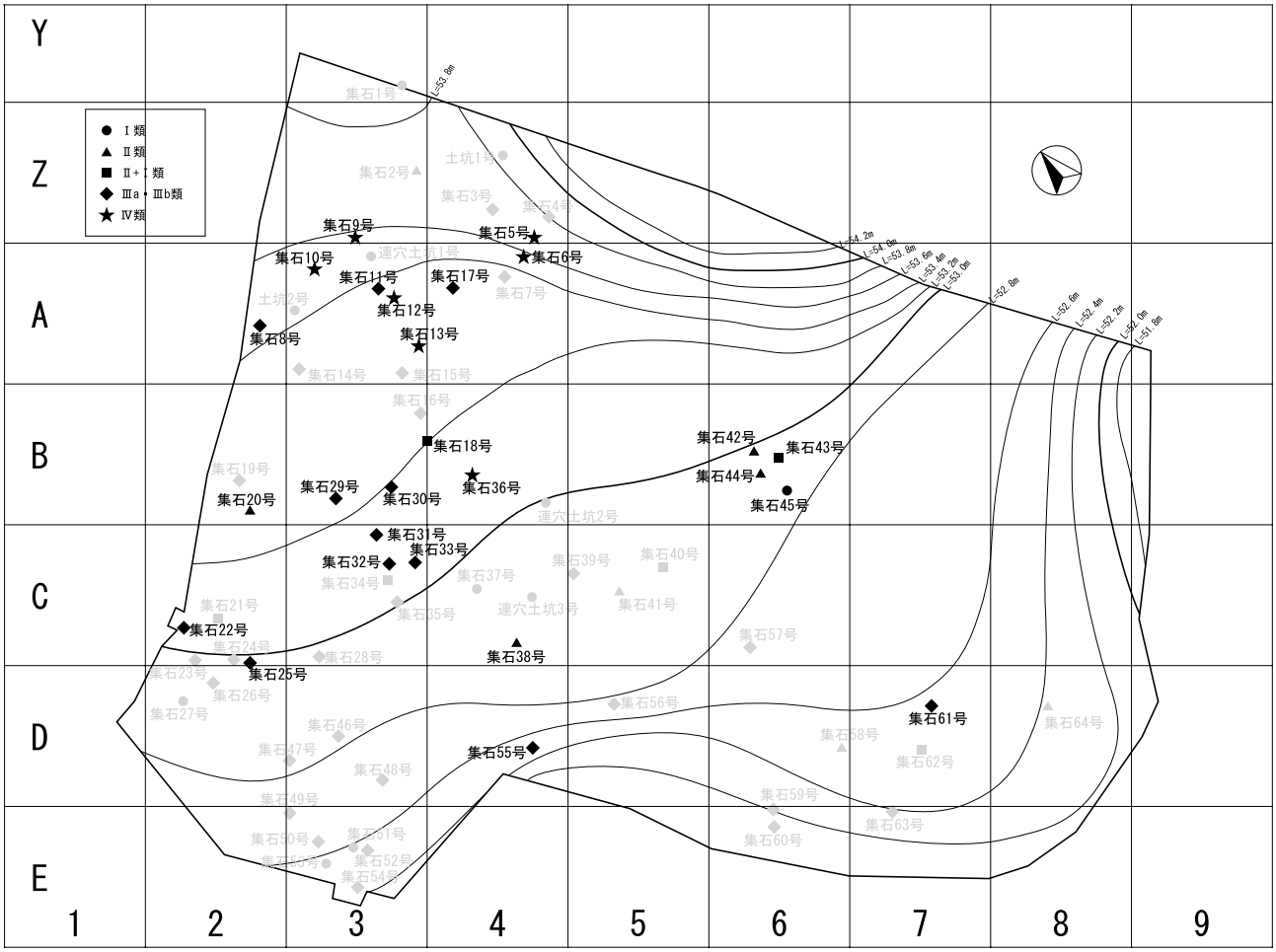


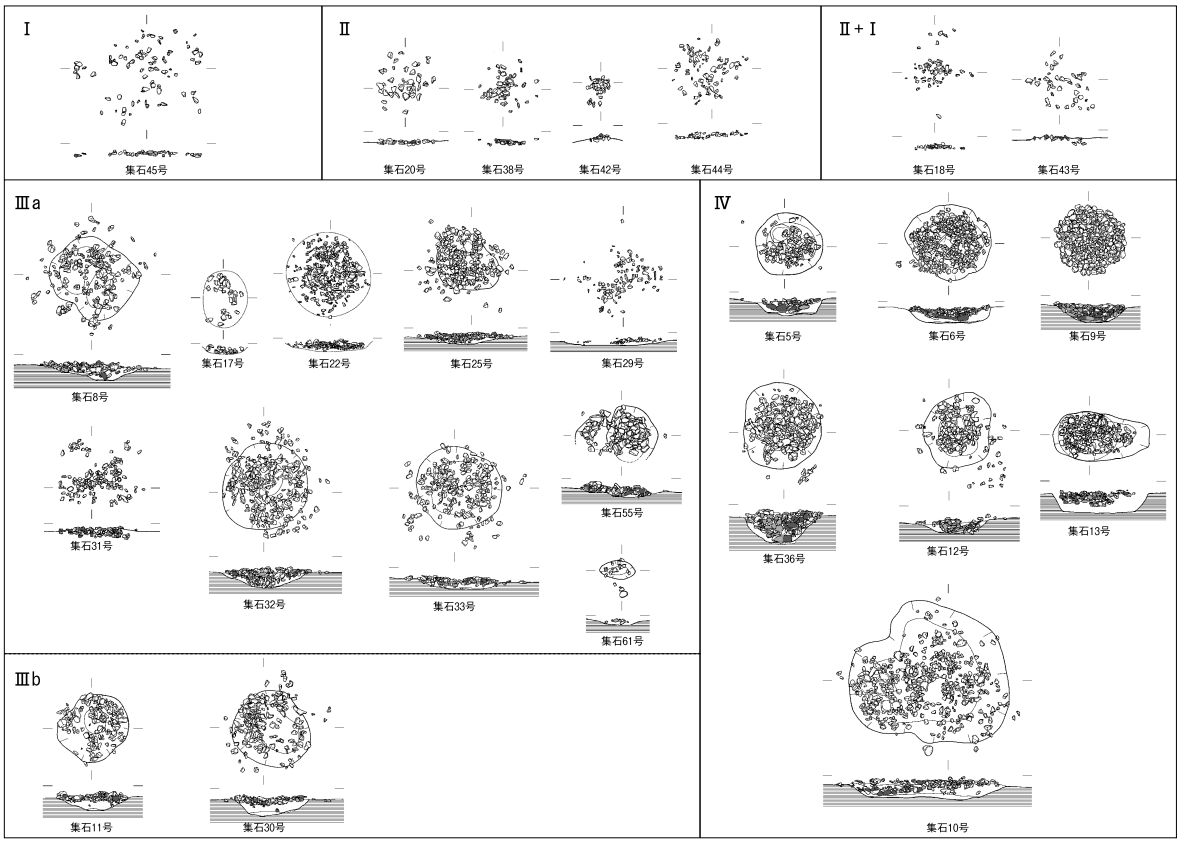
第38図　Ⅴ層集石配置図および1/100実測図（１）





第39図　Ⅴ・Ⅵ層集石配置図および1/100実測図（2）





第40図　Ⅵ層集石配置図および1/100実測図（3）

表４　集石観察表②

集石	掘り込み（推定含む）			総礫数	1～50ｇ	割合	51～100ｇ	割合	101～200ｇ	割合	201～300ｇ	割合	301ｇ～	割合	層	分類	グループ
	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）														
１号	－	－	－	51	2	4%	12	24%	18	35%	10	20%	9	18%	Ⅴ	Ⅰ	1
２号	70	60	10	26	1	4%	5	19%	10	38%	4	15%	6	23%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ	1
３号	90	85	10	163	68	42%	40	25%	32	20%	12	7%	11	7%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲａ	1
４号	80	70	10	66	36	55%	17	26%	11	17%	2	3%	0	0%	Ⅴ	Ⅲａ	1
５号	90	80	20	116	61	53%	23	20%	15	13%	6	5%	11	9%	Ⅵ	Ⅳ	1
６号	115	100	15	399	210	53%	115	29%	55	14%	5	1%	14	4%	Ⅵ	Ⅳ	1
７号	50	45	15	126	37	29%	23	18%	29	23%	15	12%	22	17%	Ⅴ	Ⅲａ	1
８号	120	110	25	220	93	42%	56	25%	43	20%	16	7%	12	5%	Ⅵ	Ⅲａ	2
９号	95	90	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅵ	Ⅳ	2
10号	190	190	25	569	249	44%	150	26%	131	23%	15	3%	24	4%	Ⅵ	Ⅳ	2
11号	95	90	15	145	55	38%	39	27%	34	23%	8	6%	9	6%	Ⅵ	Ⅲｂ	2
12号	100	85	20	124	39	31%	34	27%	34	27%	9	7%	8	6%	Ⅵ	Ⅳ	2
13号	125	65	20	270	106	39%	60	22%	55	20%	21	8%	28	10%	Ⅵ	Ⅳ	2
14号	90	70	15	77	28	36%	21	27%	22	29%	3	4%	3	4%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲｂ	2
15号	60	45	15	79	25	32%	21	27%	21	27%	7	9%	5	6%	Ⅴ	Ⅲａ	2
16号	80	75	20	49	6	12%	10	20%	11	22%	8	16%	14	29%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲａ	2
17号	80	60	10	26	0	0%	8	31%	9	35%	8	31%	1	4%	Ⅵ	Ⅲａ	2
18号	－	－	－	58	16	28%	18	31%	21	36%	3	5%	0	0%	Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	2
19号	120	100	10	229	114	50%	64	28%	28	12%	13	6%	10	4%	Ⅴ	Ⅲｂ	3
20号	－	－	－	47	6	13%	16	34%	18	38%	5	11%	2	4%	Ⅵ	Ⅱ	3
21号	－	－	－	149	73	49%	55	37%	20	13%	1	1%	0	0%	Ⅴ	Ⅱ＋Ⅰ	3
22号	115	110	15	413	184	45%	139	34%	70	17%	14	3%	6	1%	Ⅵ	Ⅲａ	3
23号	80	70	10	93	48	52%	34	37%	11	12%	0	0%	0	0%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲｂ	3
24号	85	85	15	70	27	39%	19	27%	18	26%	2	3%	4	6%	Ⅴ	Ⅲａ	3
25号	80	80	20	156	66	42%	59	38%	27	17%	2	1%	2	1%	Ⅵ	Ⅲａ	3
26号	90	75	15	85	23	27%	31	36%	21	25%	5	6%	5	6%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲａ	3
27号	－	－	－	42	13	31%	13	31%	12	29%	1	2%	3	7%	Ⅴ	Ⅰ	3
28号	85	80	20	250	74	30%	75	30%	56	22%	24	10%	21	8%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲａ	3
29号	95	75	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅵ	Ⅲａ	4
30号	100	100	15	274	79	29%	73	27%	78	28%	35	13%	9	3%	Ⅵ	Ⅲｂ	4
31号	110	65	15	144	50	35%	56	39%	35	24%	3	2%	0	0%	Ⅵ	Ⅲａ	4
32号	120	115	25	336	133	40%	84	25%	76	23%	23	7%	20	6%	Ⅵ	Ⅲａ	4

表５　集石観察表③

集石	掘り込み（推定含む）			総礫数	1～50ｇ	割合	51～100ｇ	割合	101～200ｇ	割合	201～300ｇ	割合	301ｇ～	割合	層	分類	グループ
	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）														
33号	115	110	15	239	96	40%	78	33%	50	21%	12	5%	3	1%	Ⅵ	Ⅲａ	4
34号	－	－	－	77	32	42%	25	32%	16	21%	4	5%	0	0%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	4
35号	－	－	－	210	88	43%	64	30%	45	21%	11	5%	2	1%	Ⅴ	Ⅲａ	4
36号	115	105	40	447	73	16%	79	18%	111	24%	65	15%	119	27%	Ⅵ	Ⅳ	4
37号	－	－	－	62	22	35%	19	31%	14	23%	4	6%	3	5%	Ⅴ	Ⅰ	4
38号	75	70	10	52	19	37%	10	19%	20	38%	2	4%	1	2%	Ⅵ	Ⅱ	4
39号	90	90	20	207	70	34%	66	32%	51	25%	15	7%	5	2%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅲｂ	5
40号	－	－	－	62	23	37%	20	32%	16	26%	3	5%	0	0%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	5
41号	－	－	－	60	20	33%	14	23%	22	37%	4	7%	0	0%	Ⅴ	Ⅱ	5
42号	－	－	－	37	9	24%	15	41%	10	27%	3	8%	0	0%	Ⅵ	Ⅱ	6
43号	－	－	－	49	24	49%	20	41%	5	10%	0	0%	0	0%	Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	6
44号	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅵ	Ⅱ	6
45号	－	－	－	82	24	29%	40	49%	14	17%	4	5%	0	0%	Ⅵ	Ⅰ	6
46号	100	95	20	223	110	49%	55	25%	44	20%	10	4%	4	2%	Ⅴ	Ⅲａ	7
47号	70	65	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅴ	Ⅲａ	7
48号	90	80	15	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅴ	Ⅲａ	7
49号	85	70	20	327	104	32%	88	27%	86	26%	25	8%	24	7%	Ⅴ	Ⅲａ	7
50号	55	55	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅴ	Ⅲａ	7
51号	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅴ	Ⅰ	7
52号	100	65	15	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅴ	Ⅲａ	7
53号	－	－	－	24	9	38%	3	13%	9	38%	1	4%	2	7%	Ⅴ	Ⅰ	7
54号	80	65	15	186	49	27%	53	28%	52	28%	19	10%	13	7%	Ⅴ	Ⅲａ	7
55号	110	80	20	96	29	30%	22	23%	24	25%	12	13%	9	9%	Ⅵ	Ⅲａ	8
56号	30	30	15	45	20	44%	12	27%	10	22%	0	0%	3	7%	Ⅴ	Ⅲａ	8
57号	80	75	15	161	46	29%	45	28%	40	25%	17	11%	13	8%	Ⅴ	Ⅲａ	8
58号	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅴ	Ⅱ	8
59号	115	90	20	167	56	34%	62	37%	41	25%	3	2%	5	3%	Ⅴ	Ⅲｂ	8
60号	65	65	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅴ	Ⅲｂ	8
61号	45	25	10	19	9	47%	8	42%	1	5%	1	5%	0	0%	Ⅵ	Ⅲａ	8
62号	－	－	－	78	27	35%	21	27%	17	22%	10	13%	3	4%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ＋Ⅰ	8
63号	105	75	15	325	112	34%	68	21%	105	32%	23	7%	17	5%	Ⅴ	Ⅲａ	8
64号	－	－	－	20	3	15%	5	25%	5	25%	2	10%	5	25%	Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ	8

小結

1　各該当層ごとの分析

稲荷迫遺跡における縄文時代早期の遺物包含層はⅤ層とⅥ層である。集石もⅤ層，Ⅵ層で検出されているが，それらの集石を遺物の垂直分布･被熱破砕礫の垂直分布･薩摩火山灰混在土（Ⅷ層）のコンタとのレベル差を視点に，集石の時期をⅤ層該当，Ⅴ・Ⅵ層該当，Ⅵ層該当の大きく３つの時期に分けた。各層ごとについてまとめる。

Ⅴ層該当集石（全26基）

Ⅰ類集石５基（約19％），Ⅱ類集石２基（約８％），Ⅱ＋Ⅰ類集石１基（約４％），Ⅲａ類集石15基（約58％），Ⅲｂ類集石３基（約11％），Ⅳ類該当集石なし。

Ⅴ層に該当する集石では，Ⅲ類に該当する掘り込みをもつ集石が割合としては多い。掘り込みを持つ集石の長軸の平均は約84㎝である。また，他の時期に比べてⅠ類の基数および各層に占める割合が大きい。しかし，Ⅳ類に該当する集石が１つもない。

Ⅴ層該当集石は，主にＣ～Ｅ区に集中して検出されている。特にＤ・Ｅ－２・３区は密集している。Ｅ－３区の集石50号と53号・51号と52号は，集石のレベル・被熱破砕礫の分布状況から，掘り込みを持つ集石と持たない集石がセット関係で存在する可能性がある。ただし，構成礫の接合作業を実施してないことから，可能性の域を出ない。

Ⅴ・Ⅵ層該当集石（全12基）

Ⅰ類集石なし，Ⅱ類集石２基（17％），Ⅱ＋Ⅰ類集石３基（25％），Ⅲａ類集石３基（25％），Ⅲｂ類集石４基（33％），Ⅳ類該当集石なし。

Ⅴ・Ⅵ層に該当する集石は，Ⅱ類，Ⅱ＋Ⅰ類，Ⅲ類集石である。掘り込みを持つ集石の長軸の平均は約84㎝である。他の時期と比べ，構成礫の大きさ及び掘り込みの大きさはⅤ層該当集石に似ている。

Ⅴ・Ⅵ層該当集石は，縄文時代早期調査区全体に散漫な状態で広がっており目立った集中部は確認できない。

Ⅵ層該当集石（全26基）

Ⅰ類１基（４％），Ⅱ類集石４基（15％），Ⅱ＋Ⅰ類集石２基（８％），Ⅲａ類集石10基（38％），Ⅲｂ類集石２基（８％），Ⅳ類該当集石７基（27％）。

Ⅵ層に該当する集石では，Ⅲ類に該当する掘り込みを持つ集石が割合としては多く，またⅣ類該当の集石が27％も占めていることが，最大の特徴としてあげられる。Ⅳ類に帰属する集石は，この時期のみで検出されており，稲荷迫遺跡では古い時期に該当する集石の特徴の一つと言える。掘り込みを持つ集石の長軸の平均は，約101㎝である。掘り込みも深いものが多く，集石内に残っている礫も他の時期に比べると大きい。

Ⅵ層該当の集石は，Ｚ～Ｃ－２～４区，Ｂ－６区に集中部が見られる。特にⅥ層該当集石の特徴であるⅣ類該当集石は，Ｚ～Ｂ－３・４区に集中している。Ｂ－６区にも集中部が見られるが，ここの４基の集石は，掘り込みを持たないものである。掘り込みを持つか持たないかだけでは，縄文時代早期の新旧の位置づけはできないと考えられる。

また，Ａ－３区の集石10号は，断面の状況から新旧の集石が切り合っている可能性がある。ただし，断面の形状も部分的であり，礫の接合などの情報がないことから可能性の指摘にとどまる。

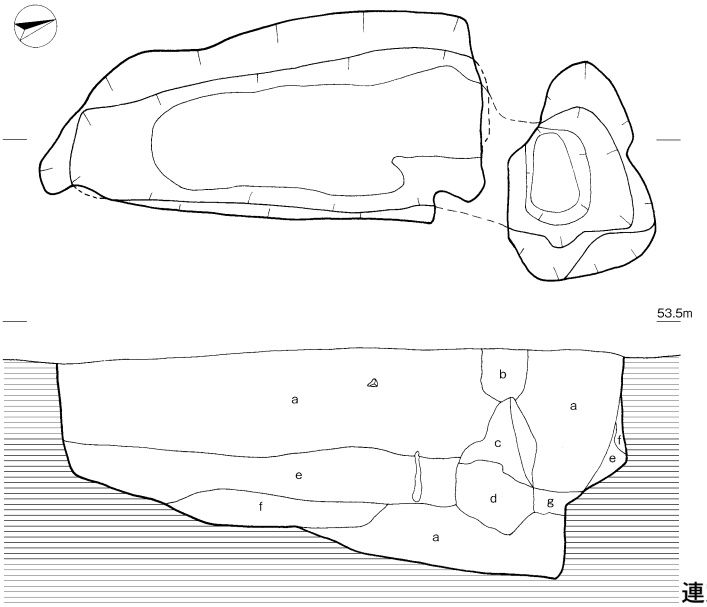
2　小結まとめ

稲荷迫遺跡で検出した64基の集石は，全時期を通すと次のように分類される。

Ⅰ類…６基（9.5％）
Ⅱ類…８基（12.5％）
Ⅱ＋Ⅰ類…６基（9.5％）
Ⅲａ類…29基（45％）
Ⅲｂ類…8基（12.5％）
Ⅳ類…７基（11％）

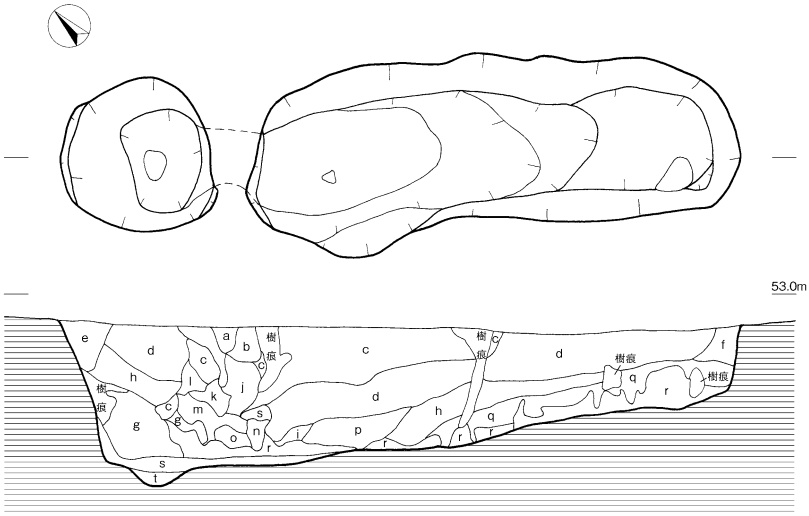
累計の分析結果から，稲荷迫遺跡ではⅢ類（Ⅲａ・Ⅲｂ類）に該当する掘り込みを持つ集石が最も多く検出されている。Ⅳ類も掘り込みを持つタイプであるので，掘り込みを持つタイプの集石は，全集石の約70％を占める。

先ほど各該当層の集石について述べたが，Ⅲ類に該当する集石はどの時期にも存在し，また各時期該当集石で占める割合も大きい。しかし，各該当層のⅢ類集石を見ていくと，掘り込みの径や掘り込み内に残っている礫の重量には差がある。その差については，①集石の構造における時代の新旧を示す差，②使用方法（調理施設・その他の用途）の違いによる差，③集団の差によるものなのか等が考えられる。今後，縄文時代早期における集石についての情報を収集し精査するなど，検討していくことが必要であると考える。



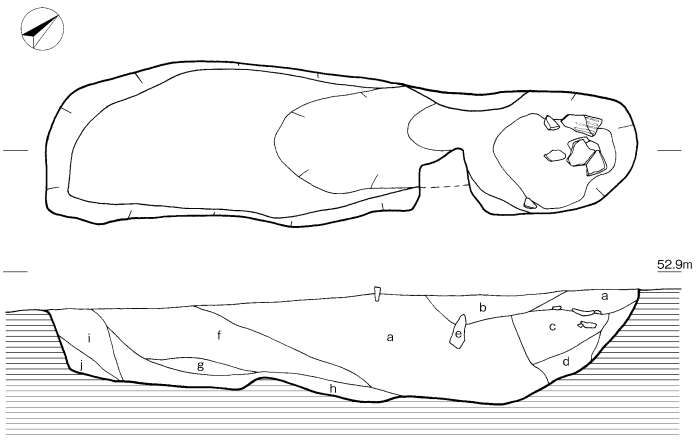
a：黒褐色硬質土
b：薩摩火山灰混在土
c：暗褐色粘質土
d：褐色粘質土
e：灰白色土（ブロック混）
f：黒褐色砂質土
g：薩摩火山灰混在土（崩落ブリッジ）

連穴土坑１号



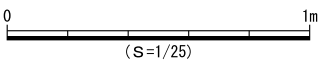
a：にぶい黄色土（サツマ火山灰層）
b：にぶい黄色土（サツマ火山灰層）
c：黒褐色硬質土
d：黒褐色硬質土
e：灰黄褐色土
f：灰黄褐色土
g：黒褐色土
h：黒褐色硬質土（パミス含）
i：にぶい黄褐色土
j：黒褐色硬質土
k：にぶい黄橙色土
l：にぶい黄橙色土
m：にぶい黄橙色土（パミス含）
n：にぶい黄橙色土（パミス含）
o：にぶい黄橙色土
p：黒褐色硬質土
q：黒褐色硬質土
r：にぶい黄褐色粘質土
s：灰褐色土
t：にぶい褐色土

連穴土坑２号

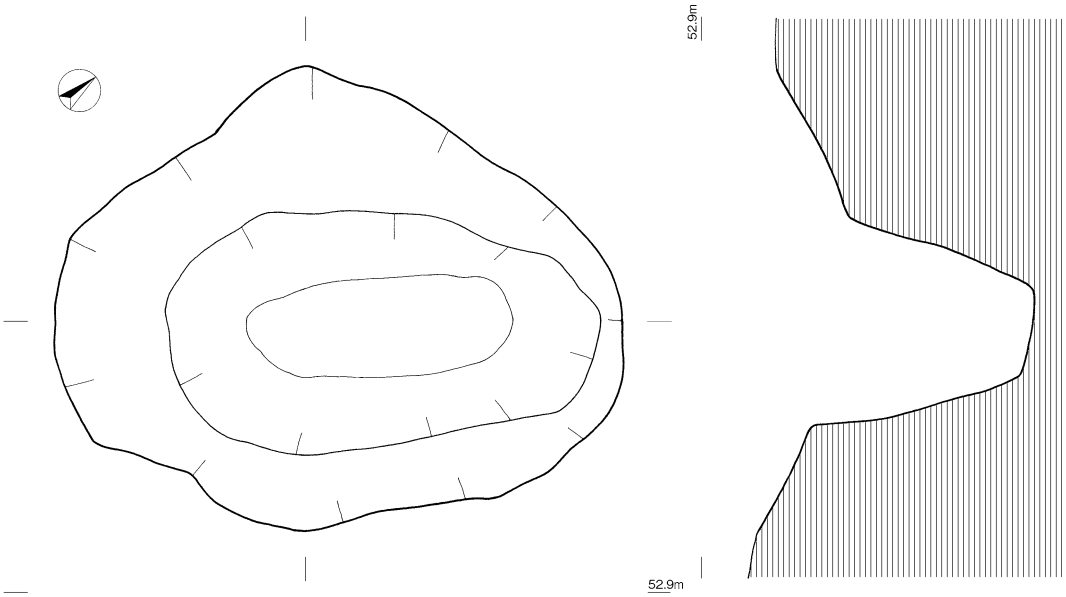


a：黒褐色硬質土
b：暗褐色土
c：薩摩火山灰混在土（崩落ブリッジ）
d：暗褐色硬質土
e：薩摩火山灰混在土（ブリッジ）
f：灰黄褐色粘質土
g：灰黄褐色粘質土
h：にぶい黄褐色粘質土
i：にぶい黄橙色砂質土
j：にぶい黄橙色粘質土

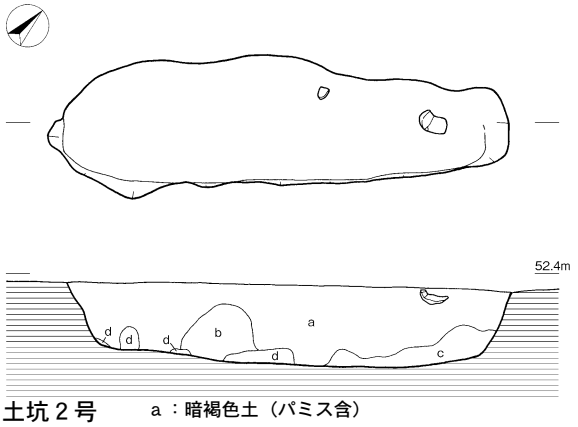
連穴土坑３号



第41図　連穴土坑１～３号



土坑１号



土坑２号

a：暗褐色土（パミス含）
b：暗褐色土（炭化物含）
c：暗褐色土
d：薩摩火山灰混在土（粘性）

0　1m
（S=1/25）

イ．連穴土坑・土坑

概要

稲荷迫遺跡で土坑は，５基検出された。この中には，二つの土坑をトンネルで繋いだ形状の連穴土坑が３基含まれる。

３基の連穴土坑のうち，１基はブリッジの大部分が崩壊しているが，２基は残っている。ブリッジ下の埋土や床面を中心に焼土や炭化粒が確認できた。

連穴土坑１号（第41図）

連穴土坑１号は，Ａ－３区Ⅶ層上面で検出された。長軸200㎝，短軸70㎝，もっとも深いところで深さ75㎝を測る。薩摩火山灰混在土(Ⅶ層)部分を利用したブリッジが残る。トンネル部は約20㎝×15㎝であった。埋土はⅤ層相当と考えられる土が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。

連穴土坑２号（第41図）

連穴土坑２号は，Ｂ－４区Ⅶ層上面で検出された。長軸225㎝，短軸65㎝，もっとも深いところで深さ55㎝を測る。薩摩火山灰混在土(Ⅶ層)部分を利用したブリッジが残る。トンネル部は約20㎝×15㎝であった。埋土はⅤ層相当と考えられる土が堆積していた。埋土中から土器片が出土した。縄文時代早期の土器と考えられるが，型式は不明である。

連穴土坑３号（第41図）

連穴土坑３号は，Ｃ－４区Ⅶ層上面で検出された。長軸195㎝，短軸50㎝，深さ35㎝を測る。ブリッジは東側の壁の一部を残して崩壊している。トンネル部は約30㎝×15㎝であった。埋土はⅤ層相当の土が堆積している。埋土中から加栗山タイプの土器が出土した。

土坑１号（第42図）

土坑１号は，Ｚ－４区Ⅶ層上面で検出された。長軸190㎝，短軸150㎝，深さ85㎝を測る。埋土は，黄色のパミスを多く含む，Ⅴ・Ⅵ層相当の混じった土である。埋土中から出土した遺物はなかった。

土坑２号（第42図）

土坑２号は，Ａ－３区Ⅶ層上面で検出された。長軸150㎝，短軸45㎝，深さ25㎝を測る。埋土はⅤ層相当の土である。埋土中に礫が２点入っていたが石器ではなかった。連穴土坑とプランが似ているが，ブリッジ跡は確認できなかった。

第42図　土坑１・２号

（3）遺物

調査区ごとの遺物出土状況

第43図から第57図には，土器や石器の分布状況を示した。１区から８区にかけては，縄文時代早期も縄文時代後期以降も遺物が集中していたので，7,800年前噴出のアカホヤ火山灰層を挟んで上下層に分けて提示している。以下，各区ごとの様相を簡単に記すこととする。

１～８区下層：調査区の中では最も西側に位置し，尾野見川に面する標高の最も低い場所に位置する。アカホヤ上面での標高は，52m～ 54mである。旧石器時代の細石刃は，このエリアで出土した。縄文時代早期の集石64基と連穴土坑３基，土坑２基と遺構が多数検出された区である。岩本タイプは２・３区に多く，加栗山タイプは４区に多い。石坂式土器は５区で目立っている。平栫式土器になると８区での出土が目立ち，新しくなるにつれて高い位置で生活している。石器は石鏃が最も多く，石槍も２点出土しているので，狩猟に関わる生活を示している。

１～８区上層：Ⅱ層には弥生時代の土器集中部があり，その下から２基の土坑墓が検出された。墓地に関する祭祀が行われたと考えられる。Ⅲ層では縄文時代終わりから弥生時代はじめにかけての土坑３基と時期不明の土坑４基が検出された。遺構が主体的に検出された区域である。土器は６区を中心に縄文時代後期後半の中岳Ⅱ式土器が出土している。突帯文期の甕形土器と板付Ⅱ式の壺形土器も少量ながら出土している。弥生時代前期末～中期前半の入来式土器もこのエリアが主体を占める。

９～24区上層：西側から東側へ高くなり，台地も広がってくる。標高は53mから56mにおさまる。Ⅱ層では古墳時代の土器集中と土坑２基が検出された。Ⅲ層で縄文時代終わりから弥生時代はじめの土坑１基と時期不明の土坑３基が検出されている。入佐式土器と黒川式土器および組織痕土器はこのエリアに多い。古代の遺物は12区にまとまっている。

25～32区上層：人家および志布志と松山を結ぶ道路が走っており，包含層が削平されていた区域である。25区から30区まではなだらかに高くなり，32区までは５mの比高差をもって高くなる。

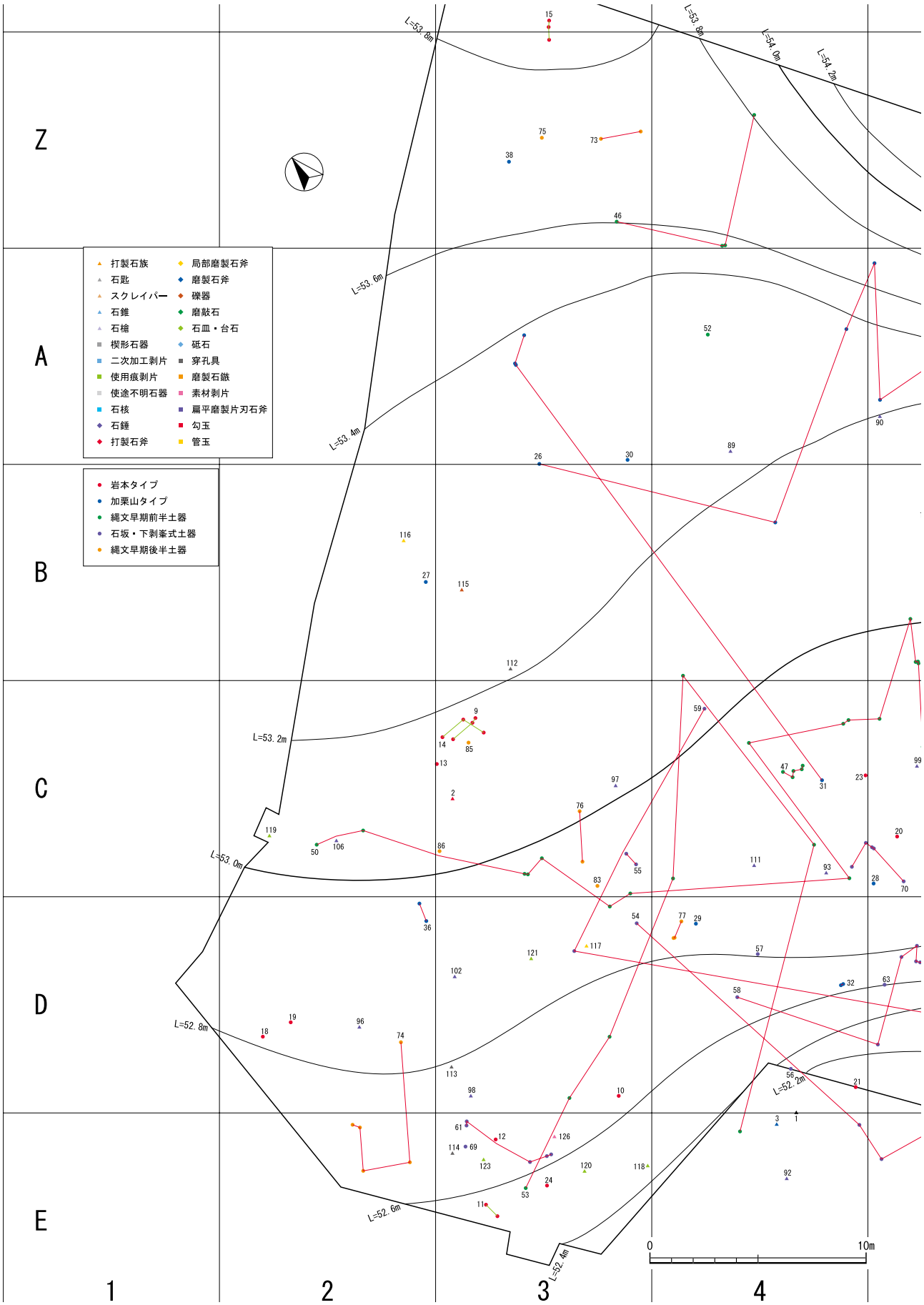
33～38区上層：全体の調査区の中で最も高い場所に位置し，標高は63mを測る。調査前は茶畑として利用されており，表土下はアカホヤ層まで削平されていたので，本来はもっと高かったようである。33区で時期不明の土坑２基，36区と38区で大型の土坑を合計３基検出した。突帯文期から弥生時代中期にかけての遺物が，わずかに出土している。

39～42区上層：北西側から南東側へなだらかに下る地形である。Ⅲ層で縄文時代終わりから弥生時代初めの土坑が３基，時期不明の土坑が４基検出された。縄文時代後期の市来式土器と丸尾式土器はこのエリアから主に出土している。石錘は42・43区の出土であり，縄文時代後期中半の可能性もある。また，突帯文期や弥生時代前期の遺物が多く出土している。石器の多くもこのエリアから出土しており，土掘り具として利用された打製石斧も目立つ。また，扁平磨製片刃石斧は40区の出土である。

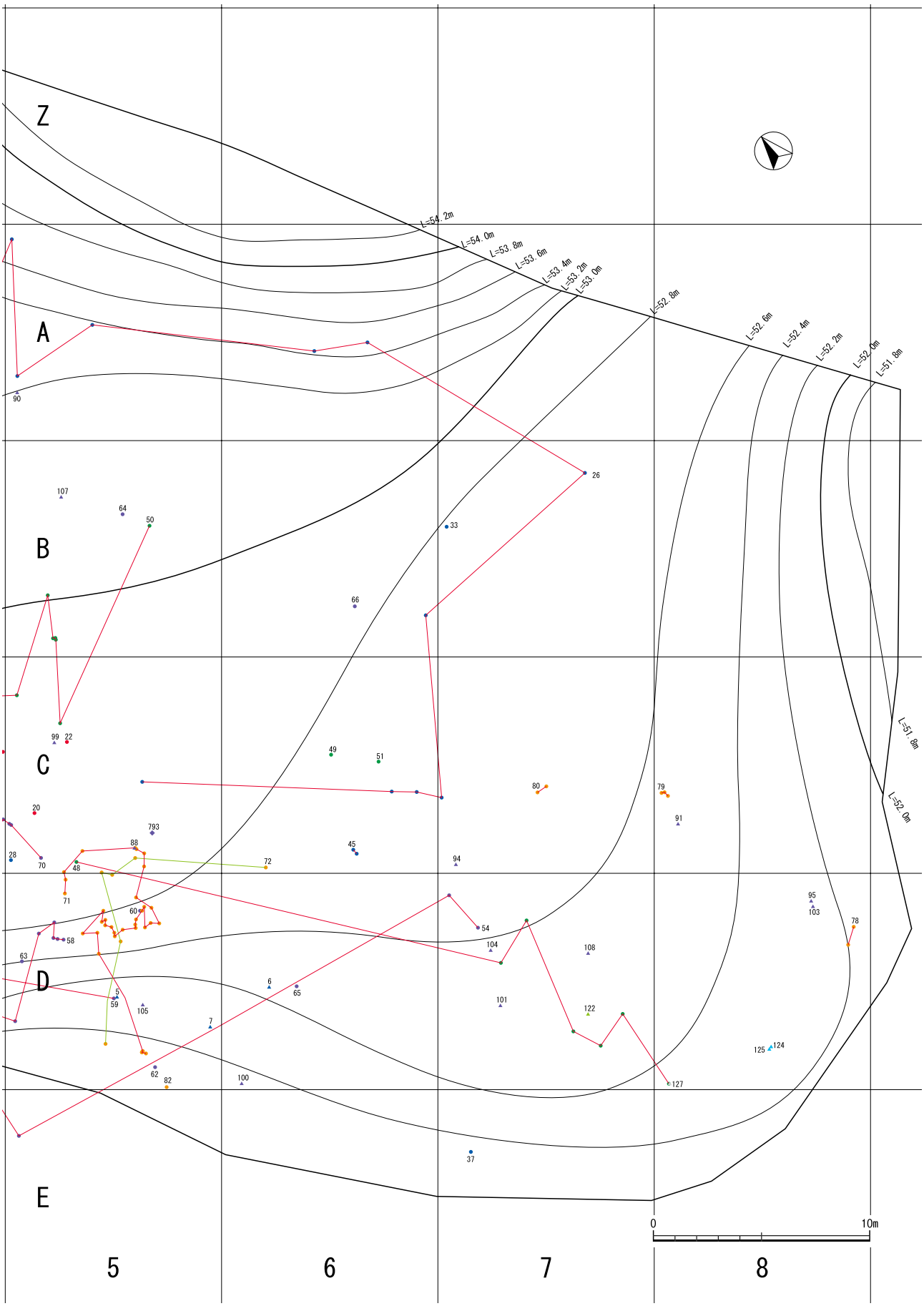
43～48区上層：調査区の最も東側に位置し，46区より南側と48区より東側は急に傾斜がきつくなり，安楽川へと下る。この区の東寄りには古くから道があり，路面からの高さは３mにも及んでいる。Ⅲ層で検出した古墳時代の竪穴住居４軒は，北側に向けて弧状に配置されていた。また，縄文時代終わりから弥生時代はじめにかけての土坑が１基，時期不明の土坑が１基検出された。遺物の出土は，ほとんど古墳時代のものである。磨製石鏃３点は，このエリアでの出土である。

以上から窺える集落の変遷は，１～８区の北西側で旧石器時代終末から縄文時代早期の生活があり，縄文時代後期後半から弥生時代はじめにかけては39～42区の高い位置が主体となる。弥生時代中期の集落主体部は調査区内にみられないが，北西側が墓地として使われた。古墳時代になると43～48区の南東側で集落が営まれるようになった。なお，稲荷迫遺跡の生活痕跡で現在考えられている年代は下記のとおりである。

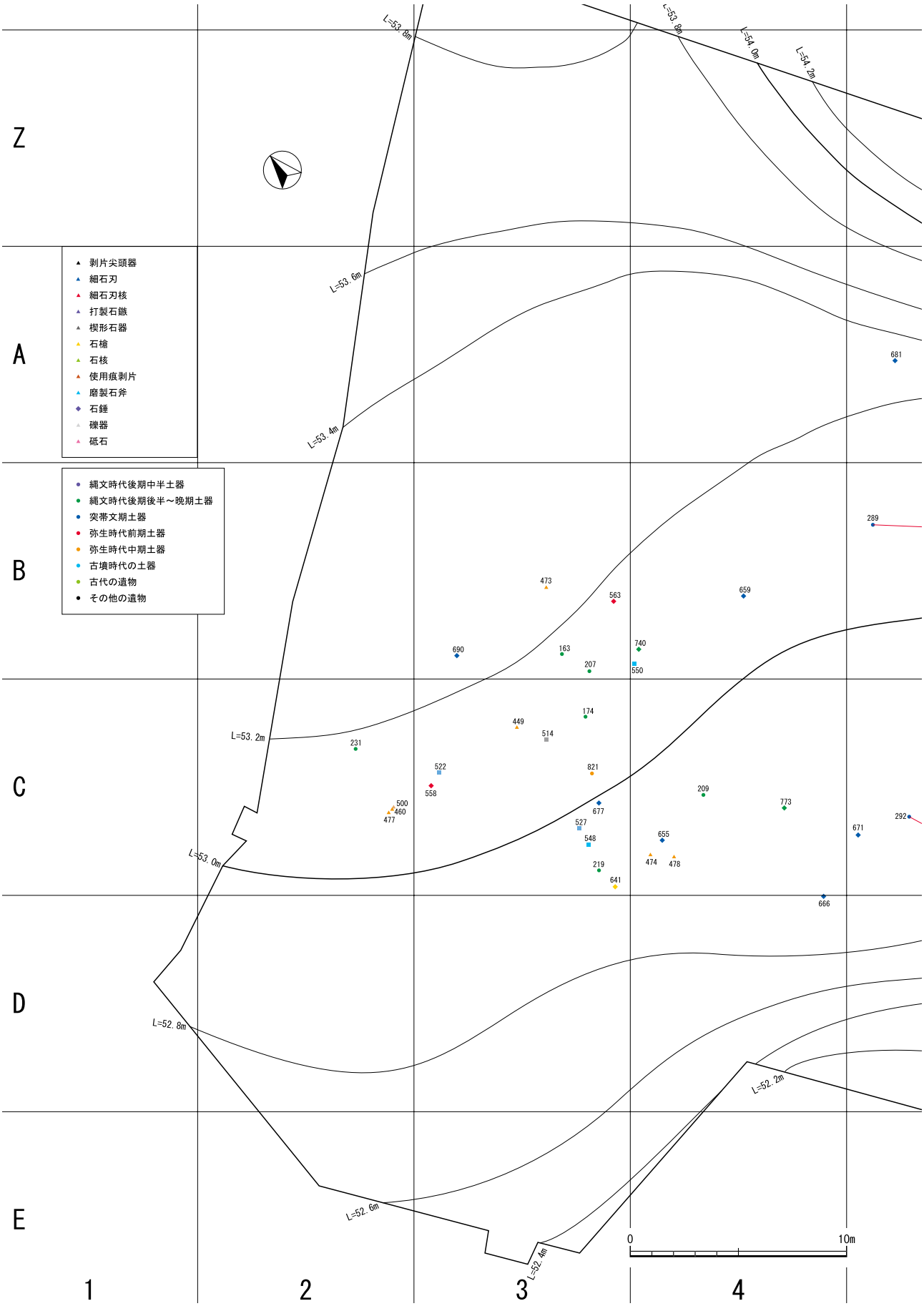
旧石器時代細石器期：約15,000年前
縄文時代早期前半岩本タイプ期：約10,000年前
縄文時代早期前半加栗山タイプ期：約9,500年前
縄文時代早期前半小牧３Ａタイプ期：約9,500年前
縄文時代早期前半吉田式土器期：約9,000年前
縄文時代早期前半倉園Ｂ式土器期：約8,500年前
縄文時代早期前半別府原タイプ期：約8,500年前
縄文時代早期前半石坂式土器期：約8,500年前
縄文時代早期下剥峯式土器期：約8,500年前
縄文時代早期手向山式土器期：約8,000年前
縄文時代早期後半平栫式土器期：約7,900年前
縄文時代早期後半塞ノ神Ａａ式土器期：約7,900年前
縄文時代後期中半市来式土器期：約3,800年前
縄文時代後期中半丸尾式土器期：約3,700年前
縄文時代後期中岳Ⅱ式土器期：約3,650年前
縄文時代後期後半上加世田式土器期：約3,500年前
縄文時代後期後半入佐式土器古段階：約3,400年前
縄文時代晩期黒川式土器期：約3,200年前
弥生時代早期突帯文期：約2,800年前
弥生時代前期前半：約2,600年前
弥生時代前期後半～中期前半：約2,400年前
古墳時代：６世紀代
古代：９世紀



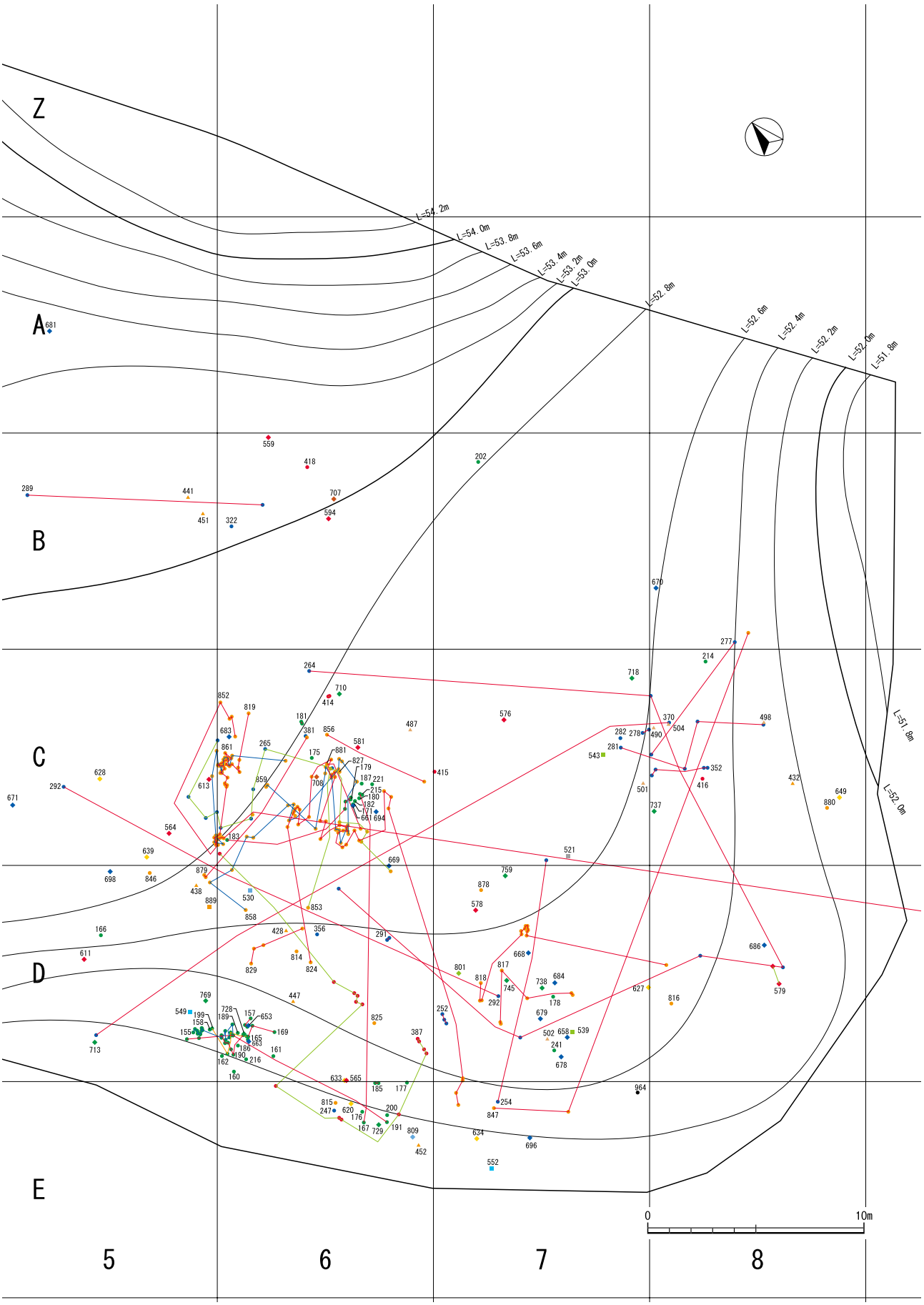
第43図　遺物出土状況図①（１～４区下層）



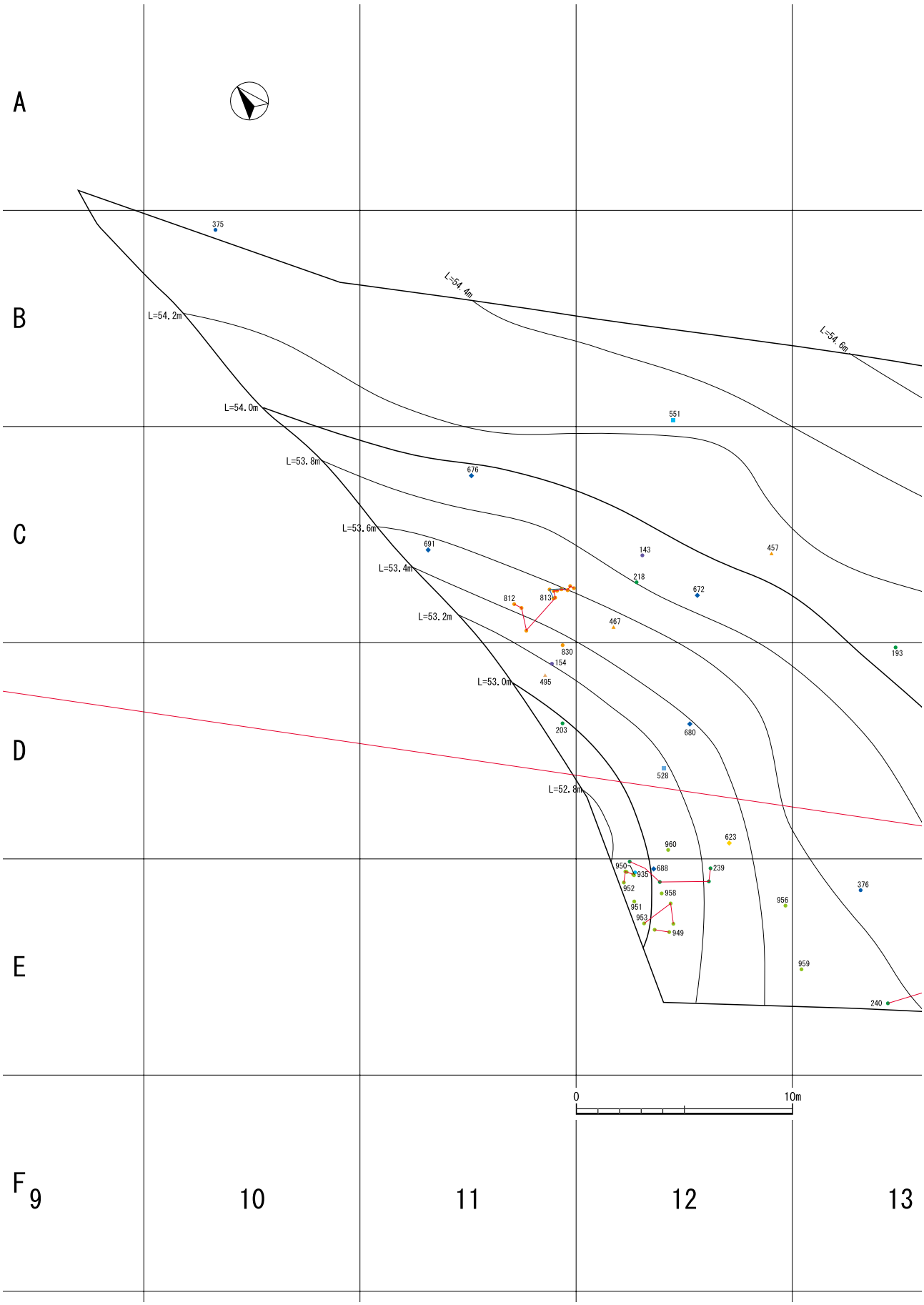
第44図　遺物出土状況図②（５～８区下層）



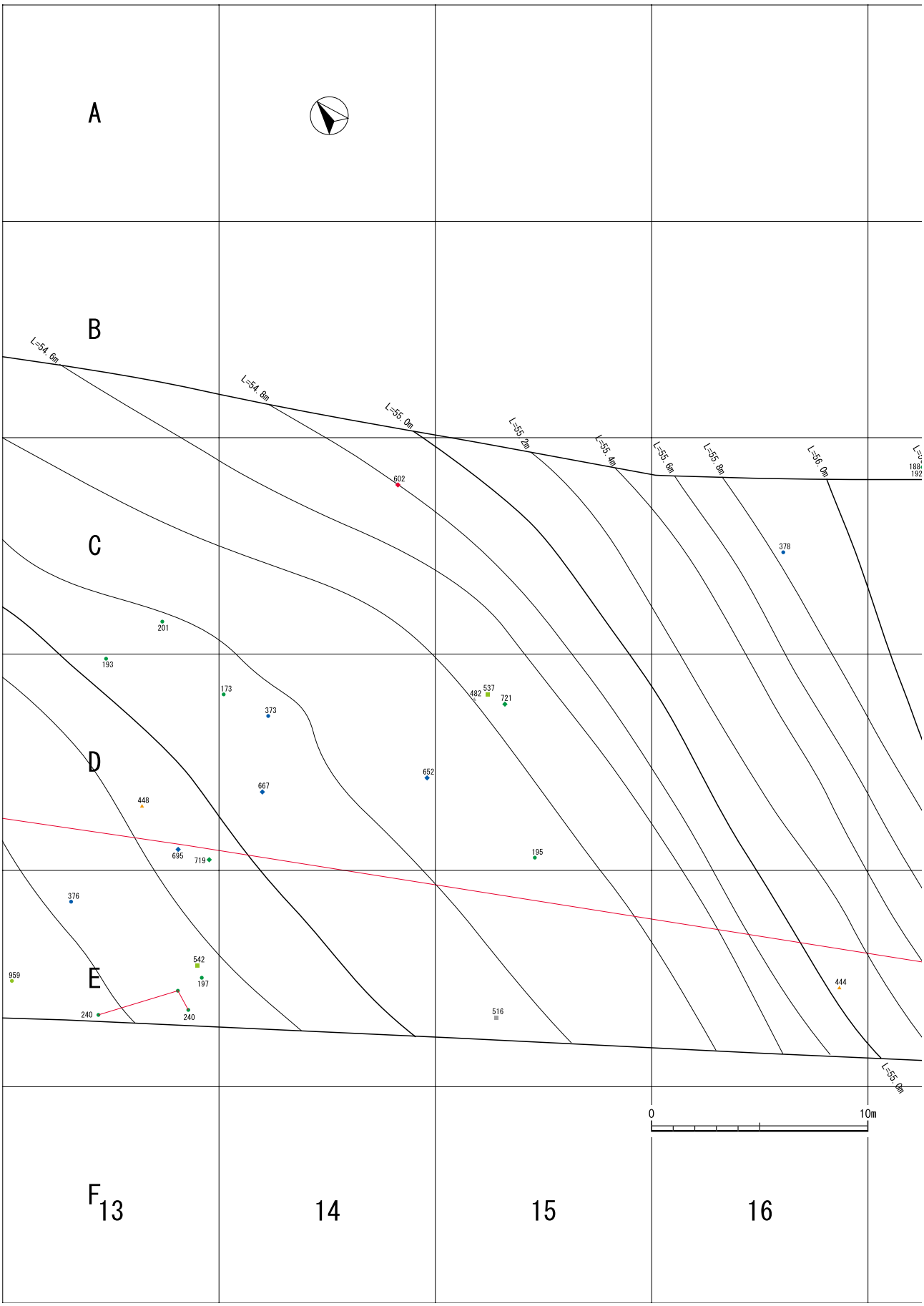
第45図　遺物出土状況図③（１～４区上層）



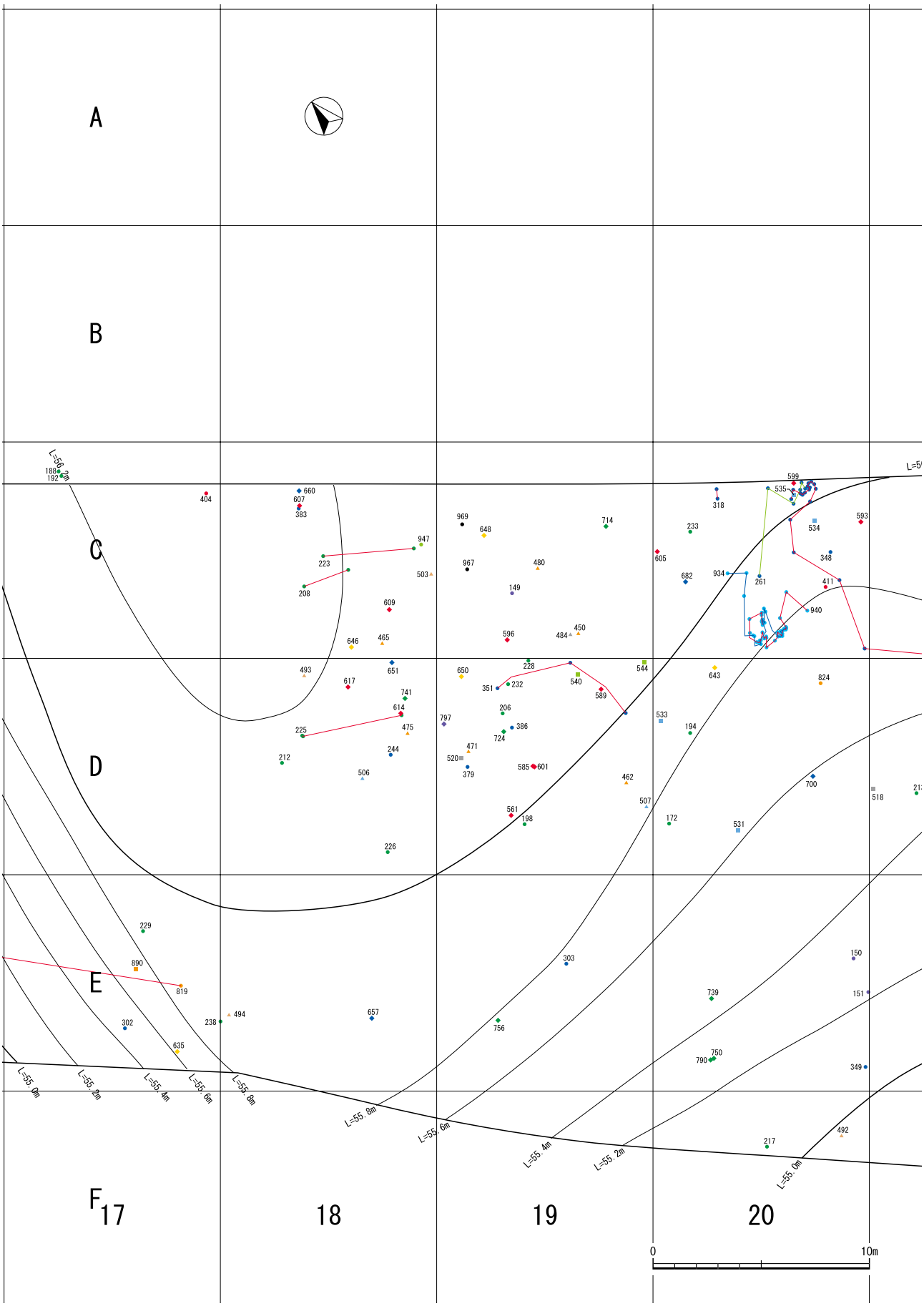
第46図　遺物出土状況図④（５～８区上層）



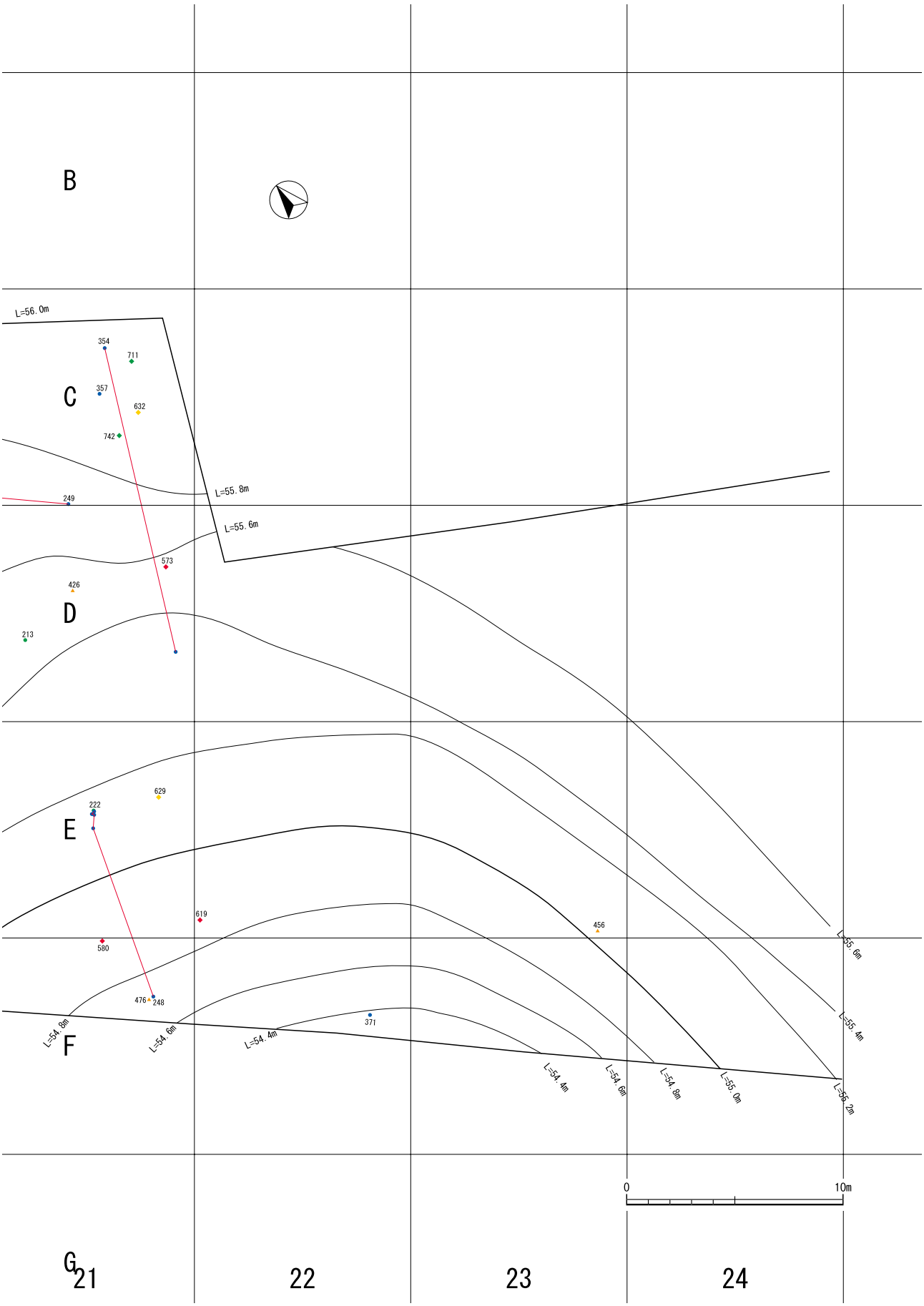
第47図　遺物出土状況図⑤（９～ 12区）



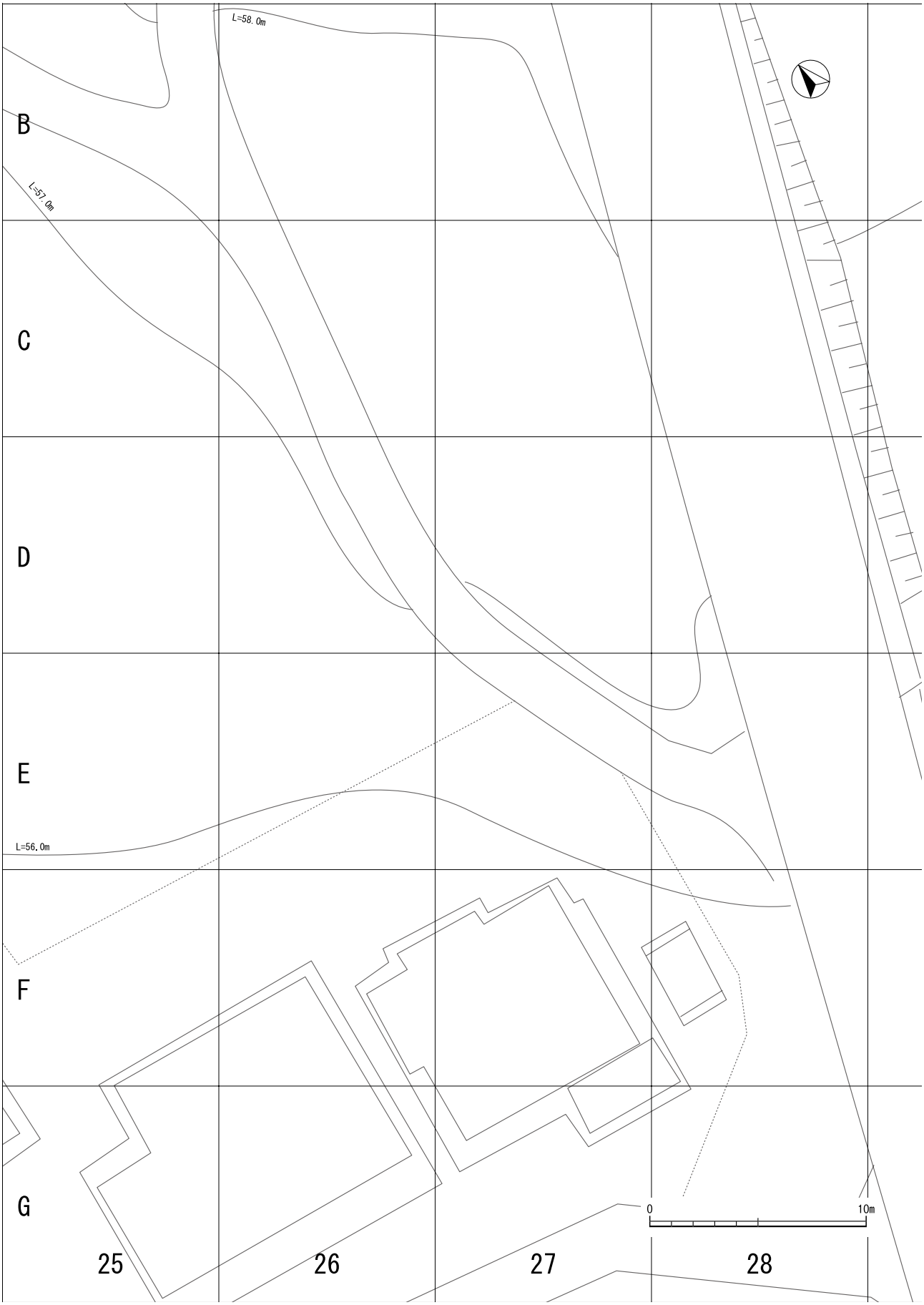
第48図　遺物出土状況図⑥（13 ～ 16区）



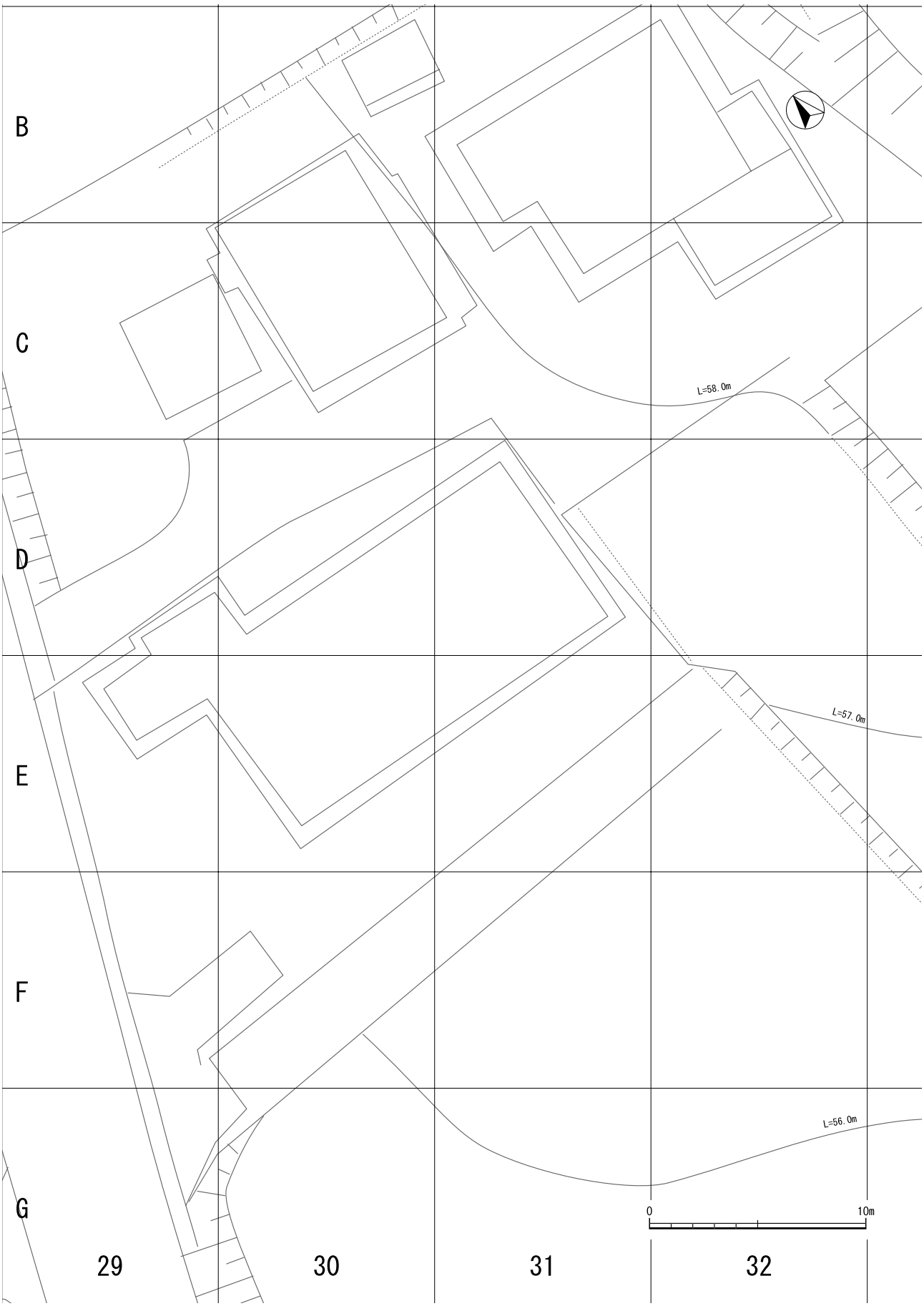
第49図　遺物出土状況図⑦（17 ～ 20区）



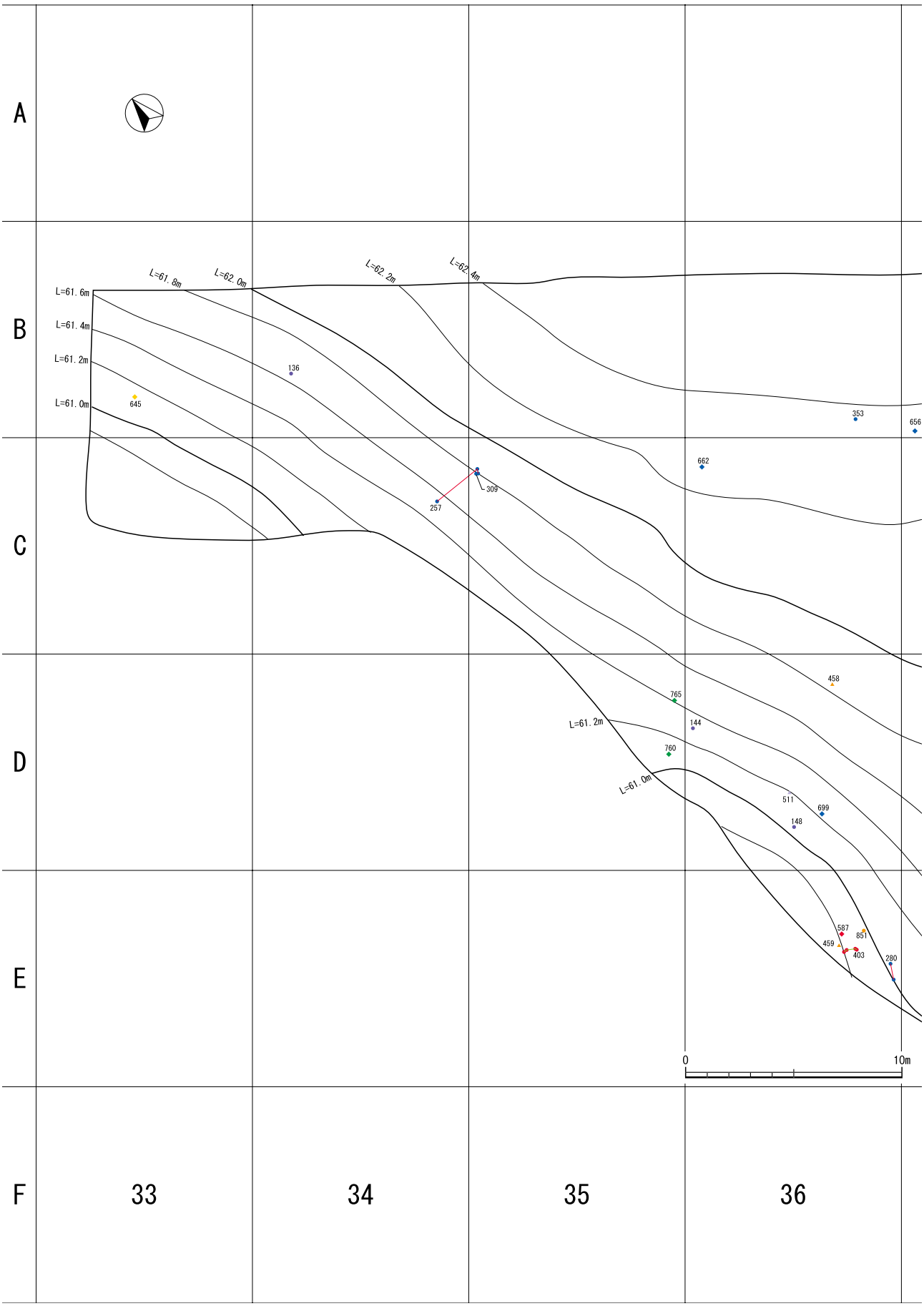
第50図　遺物出土状況図⑧（21 ～ 24区）



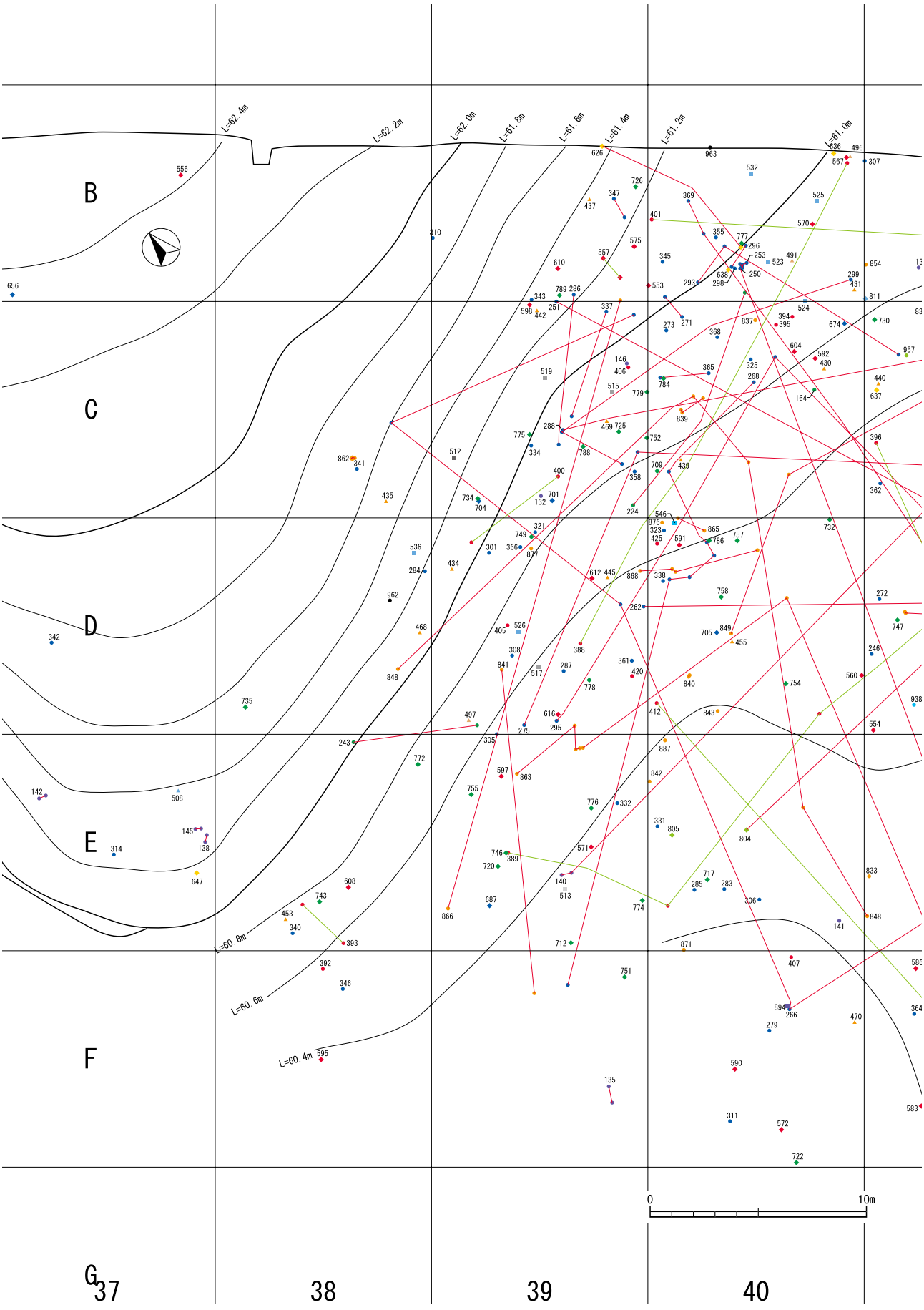
第51図　遺物出土状況図⑨（25 ～ 28区）



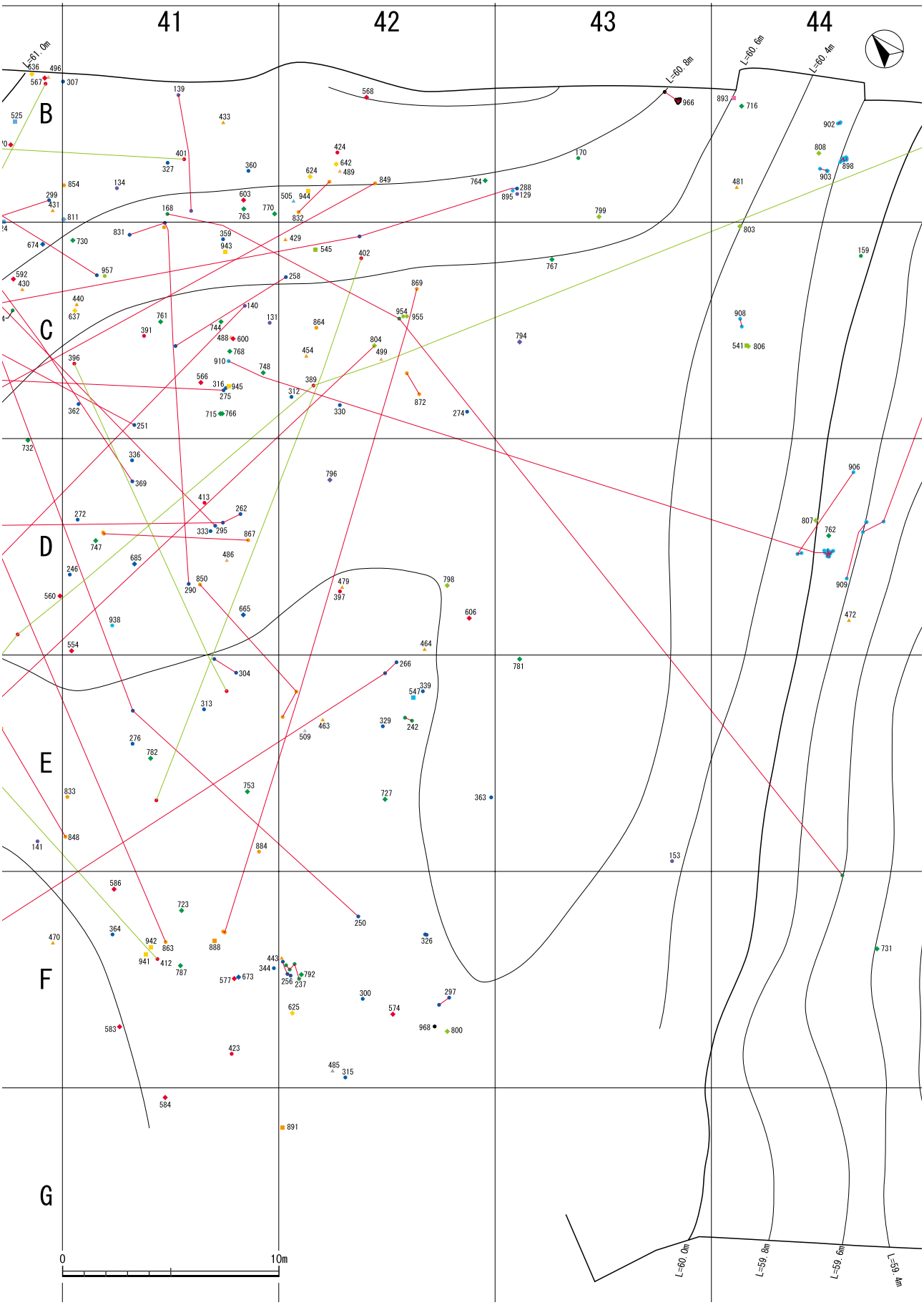
第52図　遺物出土状況図⑩（29 ～ 32区）



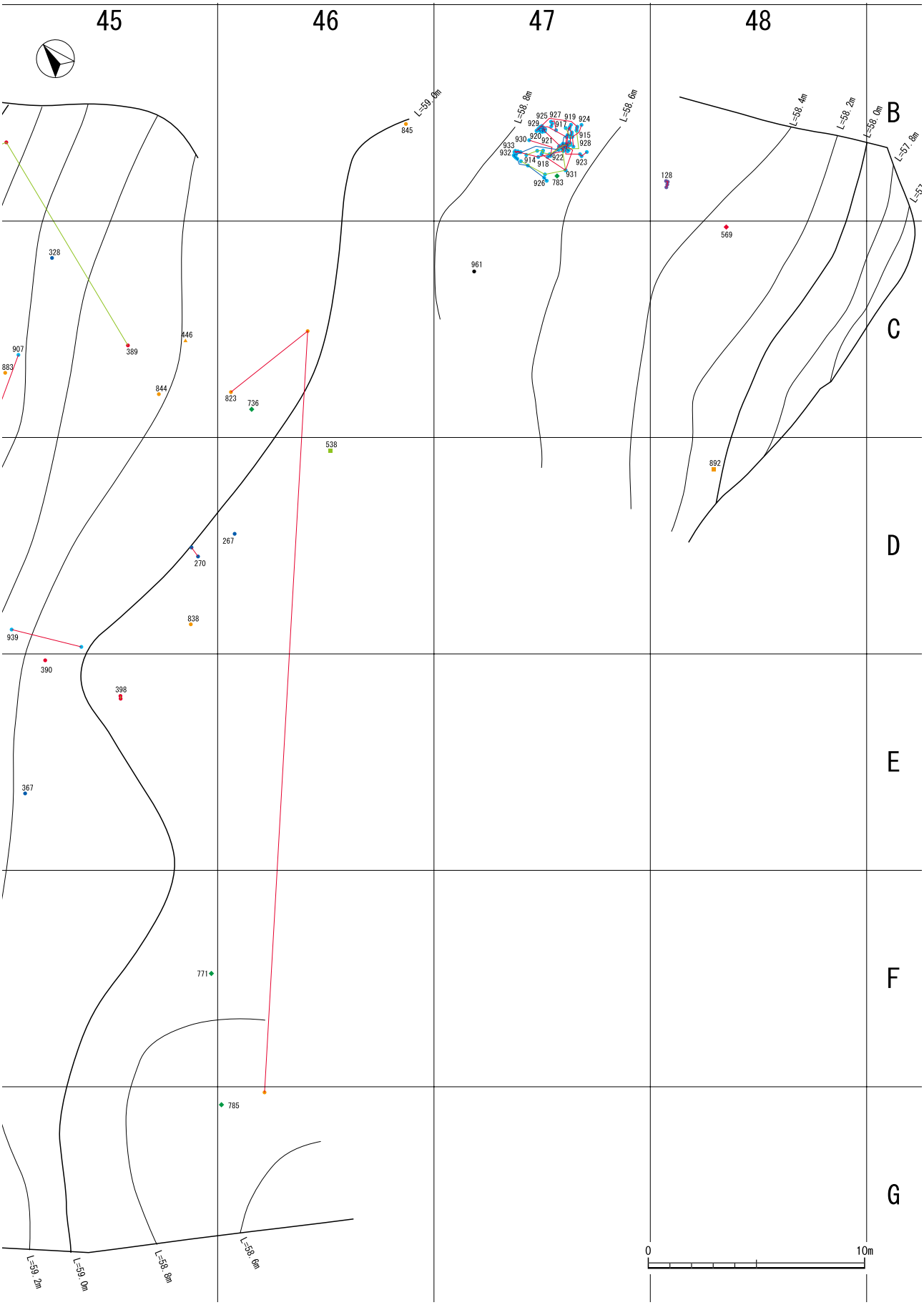
第53図　遺物出土状況図⑪（33 ～ 36区）



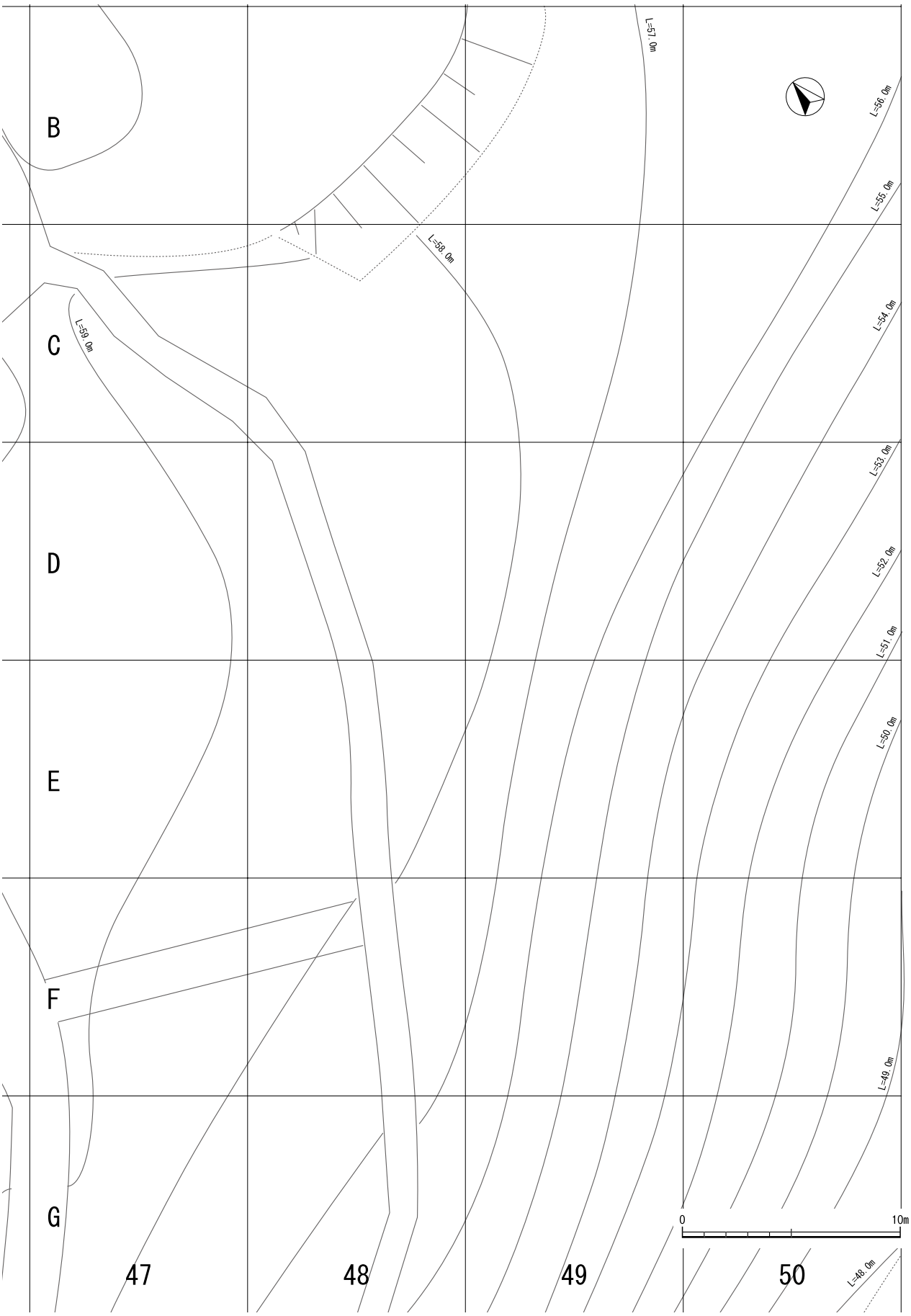
第54図　遺物出土状況図⑫（37 ～ 40区）



第55図　遺物出土状況図⑬（41 ～ 44区）



第56図　遺物出土状況図⑭（45 ～ 48区）

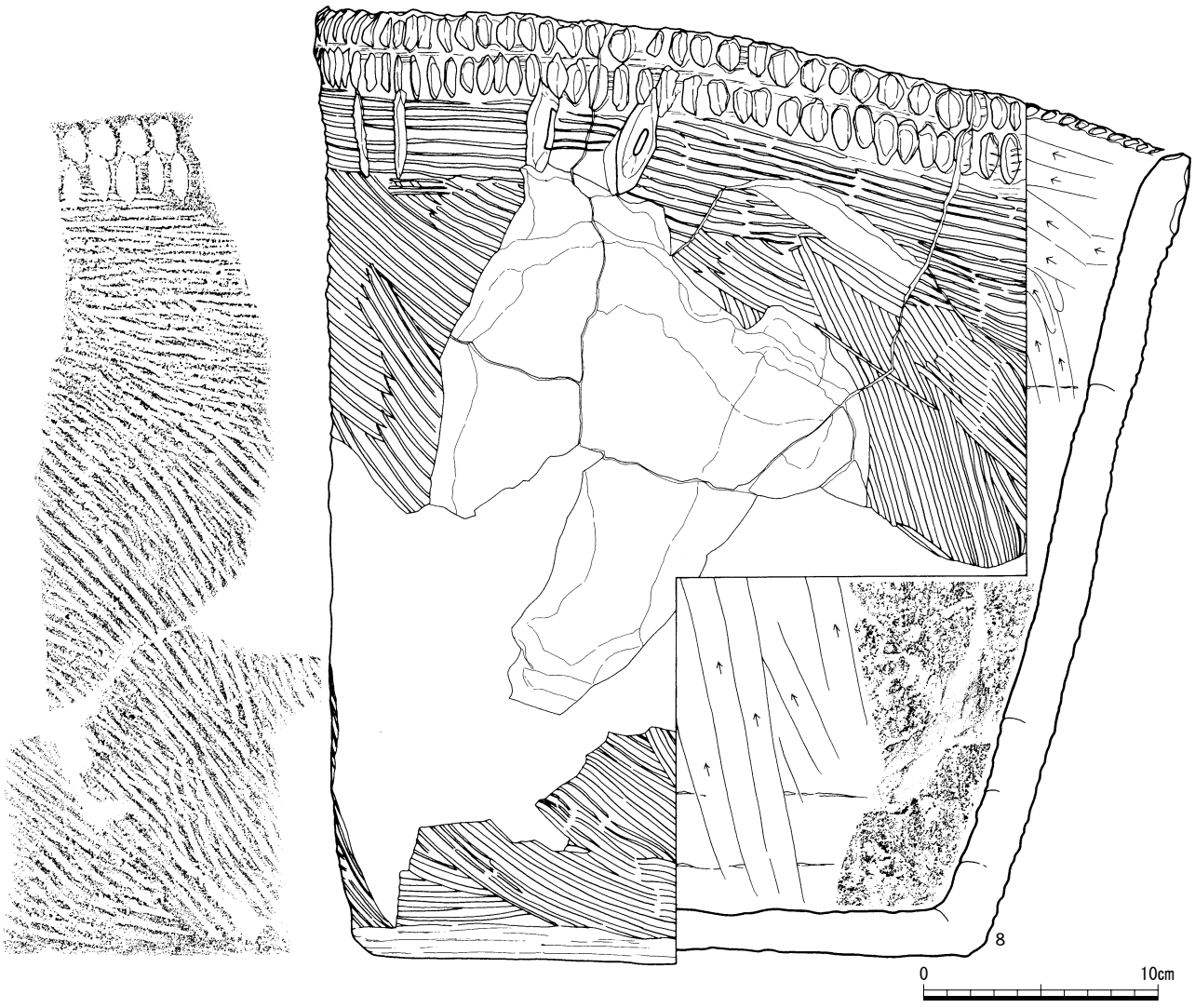


第57図　遺物出土状況図⑮（49・50区）

岩本タイプの土器（第58図８～ 第59図25）

８は器高40.8㎝・口径37.4㎝・底径27.2㎝を測るどっしりした深鉢形土器である。器壁が22㎜と厚いので，重みで歪みが生じたのか，底径が大きい割りには安定感がない。口径と底径に大きな差はなく，円筒状に立ち上がる器形である。底部から口縁部付近まで貝殻条痕による器面調整であり，口唇部は斜め方向に内傾させる。口縁部には２列に左手親指によると考えられる刺突を連続させる。内面の器面調整は，下部は縦方向に，口縁部付近は横方向のケズリによるものである。胴部の一部は大きく剥離しており，焼成時に弾けた可能性もある。擦り切り技法による補修孔が３ヶ所にみられ，２ヶ所は対となる。煤の付着がほとんどみられないことから，焼成後の早い段階でひび割れし，煮炊きには使用されなかった可能性もある。台地縁辺のため層は整然とせず，Ⅴ層下部からⅥ層上部にかけて２m四方に散らばった状態で出土したものであり，縄文時代早期前半に該当する。９は，外面は粗い条痕を斜位に施し，口縁部には押圧を２列加える。口唇部は内向きにほぼ平坦である。10は，外面の貝殻条痕は口縁部付近を横位に，それより以下は斜位に施す。口唇部は内向きに仕上げ，口縁部に沿って２列の押圧を加える。押圧内の右側が深くなっている。11の口縁部刻目は上から下へ，右から左へ施される。12は横位の貝殻条痕に，１列の押圧を加える。口縁部端部がわずかに内湾し，口唇部にも何らかの押圧がある。13は２列の押圧が加わる。14は基本的には９と同じであるが，口唇部が平坦である点と口縁部の施文具が異なる。15は復元口径20.2㎝の円筒形で，口唇部は斜めに面取りする。胴部外面は横方向の粗い条痕で，口縁に沿って２列の刻みを巡らす。胎土に黒曜石状の岩片が含まれる。土器集中区の出土である。

16は粗めの貝殻条痕を斜位に施す。集石48号の出土である。17は貝殻条痕を横方向に施す。集石50号の出土である。



第58図　縄文時代早期の土器①

18と19は横位の浅い貝殻条痕に，貝殻腹縁による斜位の刻みを巡らす。口唇部外端にも貝殻腹縁による刻目を入れるので，口縁部は細かな波状となる。20の器面調整はほぼナデであり，口唇端部に刻目を入れた後，肋のはっきりした左下がりの刺突を密に加える。21は内外面とも貝殻条痕による器面調整で，口縁部には右下がりの貝殻刺突を行う。22は浅い貝殻条痕を横位に施し，口縁部に沿って左下がりの貝殻腹縁刺突を巡らす。口唇部外端にも貝殻腹縁による刻目を入れるので，口縁部は細かな波状となる。23の口縁部文様は上下を横位の貝殻刺突で区画した後，左下がりの貝殻刺突を施している。口唇部外端にも貝殻腹縁による刻目を入れるので，口縁部は細かな波状となる。

24は円筒形の土器で，底部側縁部に筋のある工具で刻目を巡らす。25は直径12.8㎝に復元できる円筒形土器で，底部付近に縦方向の線が入る。胴部は斜位の貝殻条痕である。内面は下から上へケズリ上げて，器面を薄くしている。集石48号の出土である。

加栗山タイプの土器（第60図26 ～第61図45）

26は上半がわずかに外傾する円筒状の土器であり，口径は23㎝を測る。口唇部はシャープさに欠けるが，平らに面取りする。外面の地文は貝殻条痕を斜位に施す。口縁部文様は口唇部に接して楔形の突起を２段貼り付け，両側に貝殻腹縁による刺突を加えている。楔形突起間には３条もしくは４条を単位とする縦方向の貝殻腹縁刺突を垂下させる。この貝殻腹縁刺突は口縁部に近い部分では，両側に開くことを意識している。内面の器面調整は，ケズリによるものである。27は貝殻腹縁を器面に対して直角近くに深く刺突するものである。口縁部に沿って横方向に３段の貝殻刺突を加え，第１文様帯とする。平らに面取りされた口唇部にも貝殻肋の浅い押圧が加わる。28は楔形突起の上面に１点の刺突を加えた後，両側に沈線を入れて貼り付ける。29は，わずかに外反する口縁部で，口唇部は平らに面取りして，肋を押圧する。口縁部下に横方向の刺突を２段に，その下は縦方向に大ぶりの貝殻腹縁を刺突する。30は口縁部がわずかに外反するもので，口縁部は斜位に刺突する。楔形突起を少なくとも２段貼り付けるが，やや丸みを帯びる。31は，ほぼ直行する円筒形で，口唇部は平らに面取りして貝殻肋を押圧する。口縁部下に横方向の刺突を４段に，その下は縦方向および斜位の貝殻腹縁による刺突文がみられる。３段連続して楔形突起を貼り付けるが，両側は沈線状におさえる。32は楔形突起の両側を沈線によって貼り付ける。内面は横方向のミガキによる。33の口縁部刺突は貝殻腹縁を器面に平行になるぐらい傾けて，丁寧に３段施す。下から上の方へ施文したともみえるが，確証はない。34は貝殻腹縁刺突と楔形突起がみられる。集石33号の出土である。35は貝殻条痕の上から貝殻腹縁を直線状に刺突し，楔形突起の側縁は沈線状となる。集石57号の出土である。36は楔形突起の上面に１点の深い刺突を加えた後，両側に沈線を入れて貼り付ける。内面は横方向のミガキによる。口径は26㎝に復元できる。37は楔形突起の外周を連続した刺突によって貼り付ける。内面は横方向のミガキによる。38は直行する円筒形で，口唇部は平らに面取りして貝殻肋を押圧する。口縁部下に横方向の刺突を３段に，その下は縦方向の貝殻腹縁を左方向に進めながら浅く刺突する。２㎝間隔で楔形突起を貼り付けるが，両側は沈線状に，上面は３点の刺突を施す。内面は横方向にミガキ様のナデを施す。39は貝殻条痕の上から貝殻腹縁を直線上に刺突する。集石６号の出土である。

40は角筒の一部であり，左右の厚さが異なる。浅い斜条痕の上から縦方向の貝殻腹縁刺突を直線状に施す。内面は縦方向のケズリである。

41は角筒土器の底部であり，モジリ編みの圧痕がみられる。確実なことは言えないが，角筒であることから縄文時代早期前半の前平式土器に近いものである。前迫満子・前迫亮一両氏がまとめたものによると，角筒土器の底部圧痕例は吉田式土器の標式遺跡である鹿児島市本名町の大原遺跡で出土している。また，縄文時代草創期に三角山遺跡ではモジリ編みが出土しており，縄文時代の早い時期から編組製品の技術は確立していたことが窺える（前迫2006）。

42は底径21㎝のもので，底部側縁には左下がり斜位の短線を入れる。外面は右下がりの貝殻条痕地に，縦の刺突が加わる。内面は縦方向のケズリである。43は条痕地に櫛状工具を刺突する。集石12号の出土である。44は直径11.4㎝に復元できる底部で，底面をケズリによって調整する。ほぼ直立し，器壁を薄く仕上げる胴部がつく。底部付近には斜位の沈線を密に巡らす。貝殻条痕と貝殻刺突の二重施文の土器である。45は直径11.2㎝の底部で，側面には縦方向の条線が施される。

前迫満子・前迫亮一　2006「南九州縄文土器の底部圧痕に関する覚書　－縄文時代草創期・早期の資料集成－」『Archaeology From the South 』鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集　鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会

小牧３Aタイプの土器（第61図46・47）

46は底径13.6㎝に復元され，底部側面は縦方向の条線を施文する。胴部は２㎝幅の貝殻腹縁を左方向にずらしながら浅く刺突している。内面をケズることによって，器壁を４㎜ほどに仕上げている。47は直径12㎝に復元できる底部で，側面には縦方向の沈線が巡る。２㎝幅程度の貝殻腹縁を左方向にずらしながら刺突を繰り返し，

第59図　縄文時代早期の土器②

底部の方へ進んでいく。地文の貝殻条痕はなく，貝殻腹縁刺突による横方向に展開する文様構成である。

吉田式土器（第62図48・49）

48は器高22.4cm・口径21.8cm・底径15.2cmの安定した円筒形土器であり，口縁部のみがわずかに外反する。口唇部は面取りし，工具は不明であるが浅い刻みを施している。口縁部に沿って剣先状の工具で押し引き文を２条巡らし，以下は他の工具により横方向の押し引き文を施してある。底部には縦方向の細い線を巡らす。内面の調整はケズリによるものである。胎土は花崗岩質のものであり，金色の雲母を含む。49は底径10cmに復元され，底部側面には細線を縦方向に施文する。胴部は数条単位の施文具を横方向にずらしながら細かく刺突している。

倉園B式土器（第62図50 ～ 52）

50は器高25.9cm・口径22.2cm・底径16.2cmの安定した円筒形土器であり，口縁部が全体的に外開きする。口唇部は平らに面取りし，貝殻腹縁による押し引き状の刻目を施している。口縁部に沿って貝殻腹縁による横位の刺突を３条巡らし，以下は横方向の貝殻条痕を底部まで施してある。内面の調整はケズリ様のナデによるものである。51は直径9.2cmの底部で，わずかに外傾しながら立ち上がる円筒形である。底部付近は凹線状の条痕を横方向に施す。

52は口縁部を広く面取りするもので，大ぶりの単位をもつ施文具で刺突する。口縁部は縦方向の下に横方向の２段の刺突を施す。その下は横方向の条痕である。内面の調整は横方向のケズリによる。確定はできないが，この類に含めた。

前迫亮一　1993 「倉園B遺跡の再検討Ⅰ」『南九州縄文通信』No.7　南九州縄文研究会

別府原タイプ（第62図53）

53は口径12.4cmの円筒形土器で，口縁端部のみを短く外反気味に仕上げる。口唇部は横方向にヘラナデしながら丸くおさめる。外面は太めの条痕を縦方向に施し，文様としている。太めの金色雲母が含まれる。

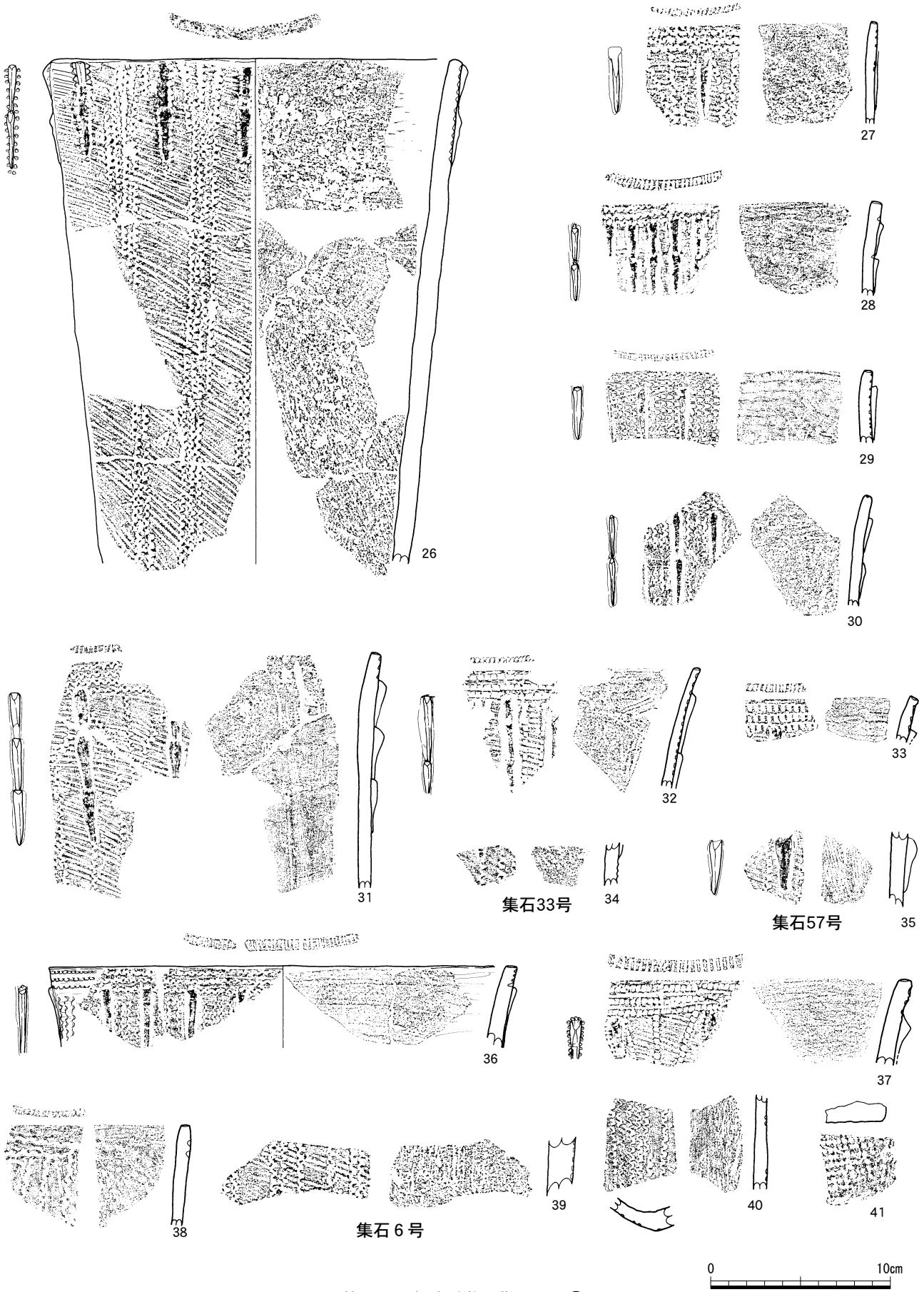
宮崎県埋蔵文化財センター　2002 『別府原遺跡　西ヶ迫遺跡　別府原第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第61集

森田浩史・金丸武司　2003 『鹿村野地区遺跡』田野町文化財調査報告書第47集　宮崎県田野町教育委員会

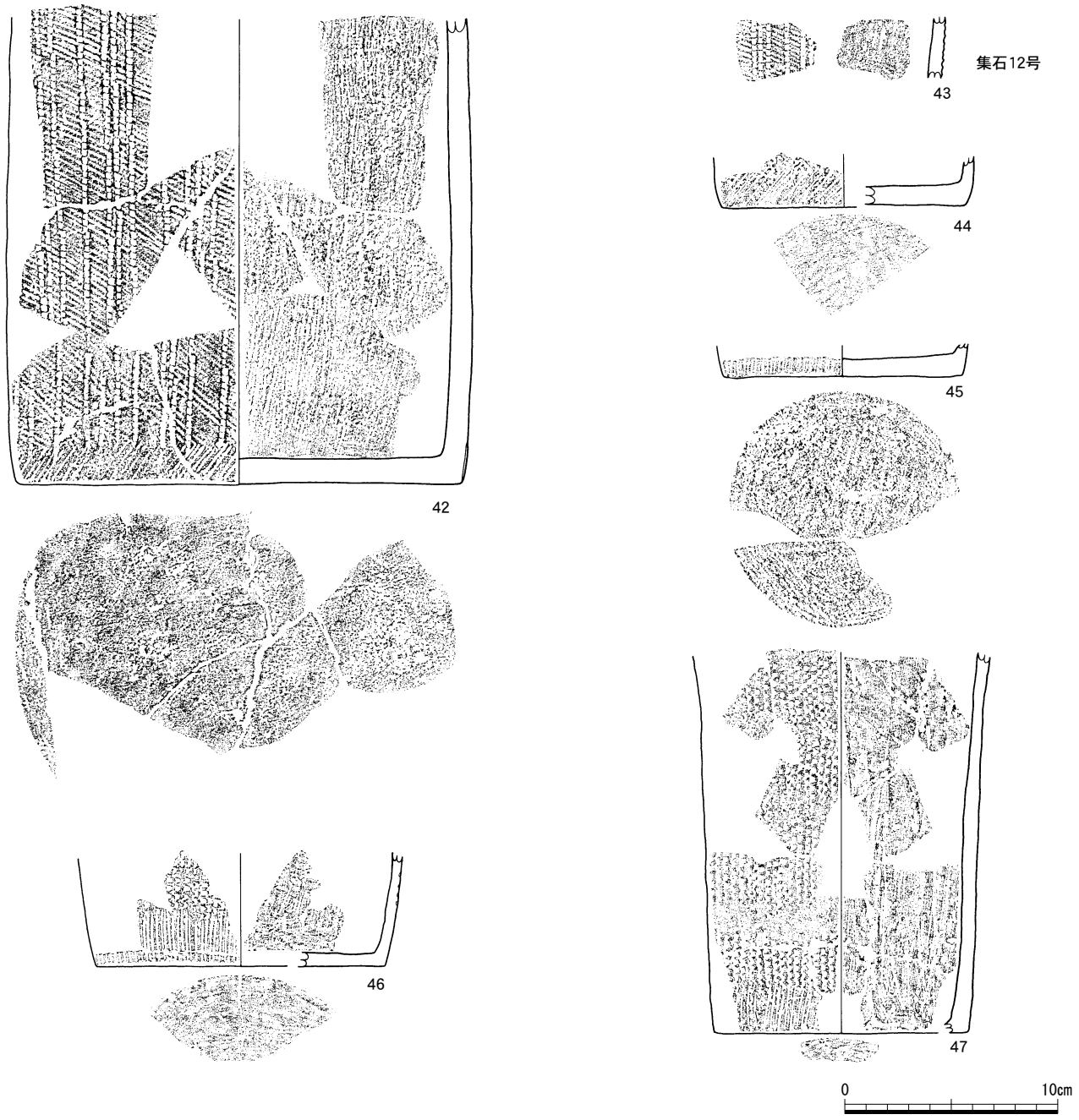
石坂式土器（第62図54 ～ 第63図65）

54は　器高14.7cm・口径11.4cm・底径6.9cmの小型の円筒形土器であり，口縁部がわずかに外開きする。口唇部は平らに面取りし，刻目などは施さない。口縁部に沿って貝殻腹縁による斜位の刺突を１段巡らし，以下は綾杉状の貝殻条痕を底部まで施す。内面の調整は丁寧なナデによるもので滑らかである。55は口縁端部を外反させ，口唇部内側に浅い刻みをもつ。口縁部外面には横方向の刺突がみられる。集石39号の出土である。56は外反する口縁部で，丸みを帯びた口唇部には米粒大の浅い押圧がみられる。口縁部文様は貝殻腹縁を斜位に刺突したものである。57は石坂式で外反する口縁部には櫛歯状工具の刺突を羽状に施し，丸くおさめた口唇部には浅い刻みが付く。胴部以下は綾杉状の条痕である。58は器高29.3cm・口径26cm・底径15cmの円筒形土器であり，口縁部がわずかに外開きする。口唇部は丸くおさめ，浅い刻目を施す。口縁部に沿って貝殻腹縁による斜位の刺突を１段巡らし，その下に横位の刺突線を１条巡らす。胴部外面には綾杉状の貝殻条痕を施し，底部付近は横位に巡らす。底部端には刻目を施している。底部は外側から粘土紐を貼り付けて，胴部から上を立ち上げていると考えられる。内面の調整は丁寧なナデによるもので滑らかである。59は，わずかに波頂部をもつ外開きの口縁部で，櫛歯状工具により羽状の刺突を巡らす。胴部文様は綾杉状となる。内面はハケ目状の不規則な調整がみられる。胎土には金色雲母を含む。60は外反する口縁部で，口唇部と口縁下に貝殻腹縁を横方向に刺突する。口縁部には斜位の刺突が，胴部には綾杉文を意識してはいるものの粗雑な条痕文がみられる。内面の調整は横方向のケズリによるものである。61は直径17.4cmに復元できる底部で，ほぼストレートに外傾する。胴部には綾杉状の条痕が施され，底部には横方向の条痕が巡る。底部側縁部には刻目もしくは綾杉文が横位の条痕によって消された残りがみられる。62は底径11.6cmに復元できるもので，縁辺に細い刻目を密に巡らしている。胴部の文様は綾杉文であり，底部近くには同じ原体を横方向に刺突してある。底面はケズリによる調整である。63は外反する口縁部に櫛歯状工具による刺突が斜位に巡り，口唇部にも同じ施文具で刺突を行う。口縁下部には綾杉状の多重線がみられる。内面の器面調整はケズリ様である。64は，わずかに外開きする口縁部で，櫛歯状工具による羽状の刺突文が巡る。

65は直行する口縁部で，胴部文様は条痕を綾杉状に施す。口縁に沿って櫛歯状の工具を１条巡らす。内面の調整は縦方向のケズリによる。口唇部を平らに面取りする点など，典型的な石坂式土器とは異なるが，胴部文様からこの類に含めた。



第60図　縄文時代早期の土器③



第61図　縄文時代早期の土器④

前迫亮一　2003「石坂式土器再考」『縄文の森から』
創刊号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

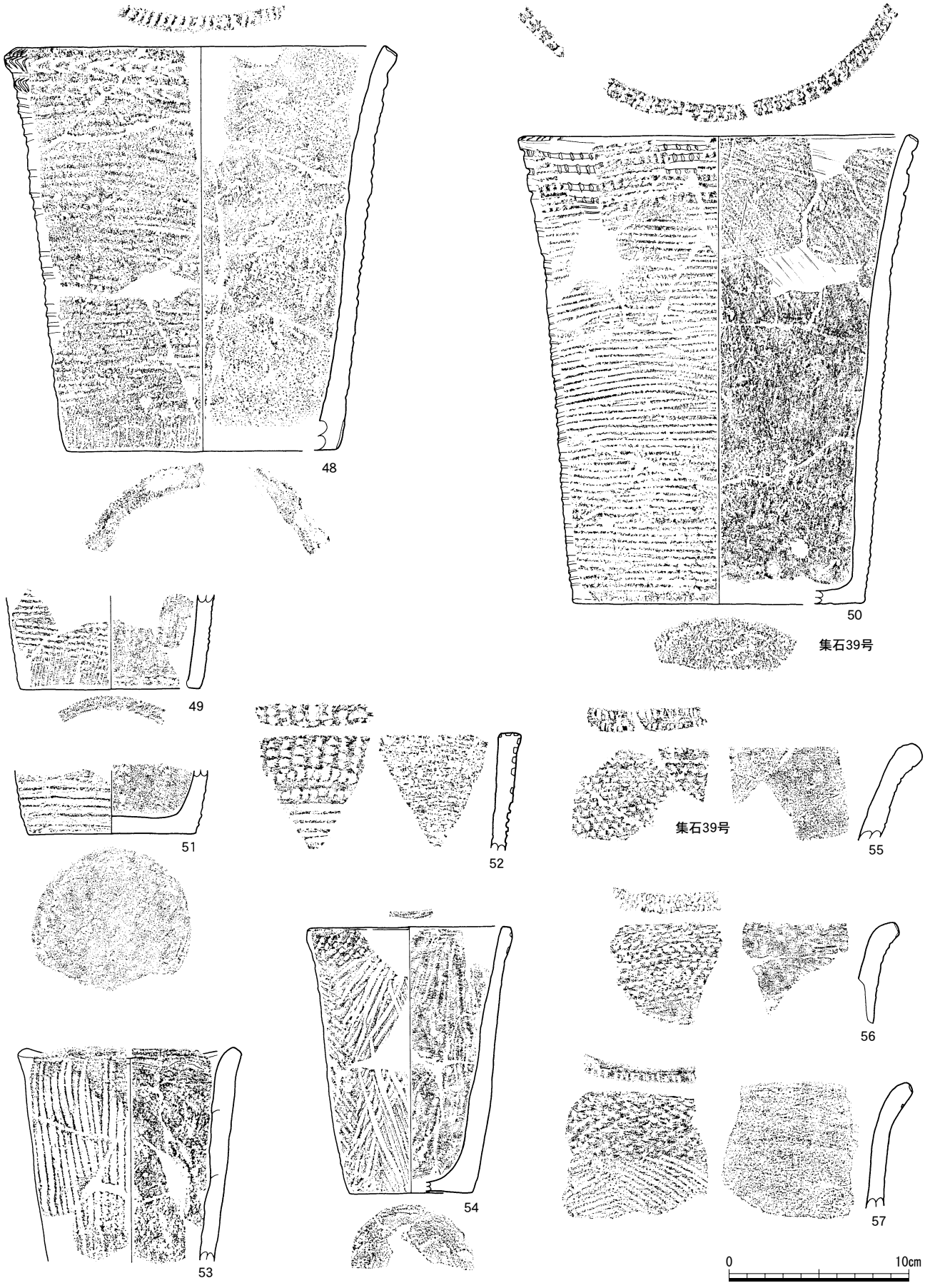
下剥峯式土器（第63図66 ～ 70）

66は内湾する口縁部で，口唇部は平らに面取りする。櫛歯状工具により，口縁上部では横位に，その下は綾杉状に刺突する。器面調整は内外面ともミガキ様のナデで光沢をもつ。胎土に金色雲母を含む。67は櫛状の施文具を斜位に施す。集石57号の出土である。68は縦方向の刺突に斜位の刺突が加わるものである。69は底部に近い部分の胴部片と考えられ，器面調整は内外面ともミガキ様のナデである。70は直径11㎝に復元できる底部で，ほぼストレートに外傾する。櫛歯状の工具で斜位に刺突を繰り返す。赤茶褐色に発色するもので，金色雲母は含まない。

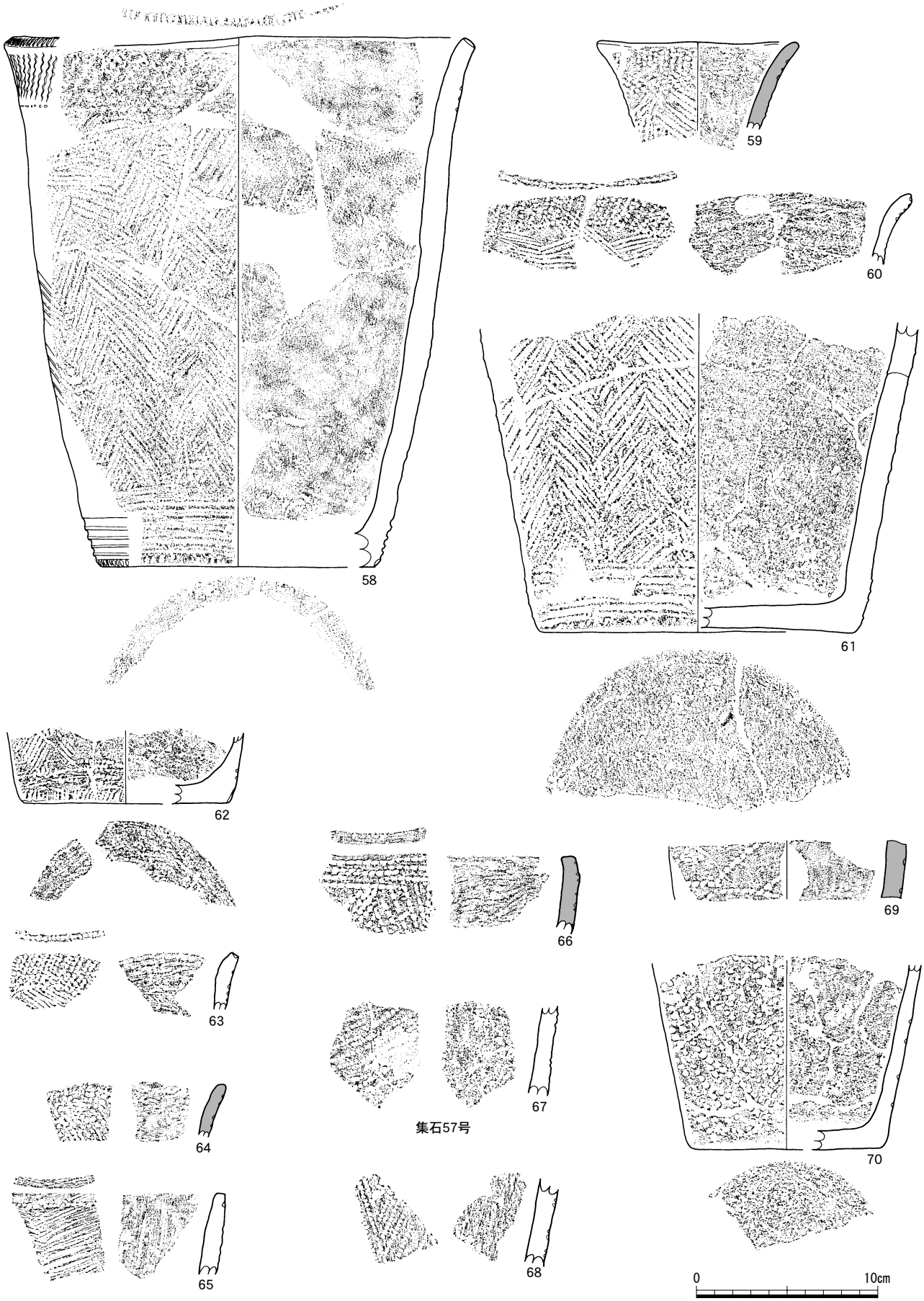
山下大輔　2005「下剥峯式および桑野丸式土器の再検討」『南九州縄文通信』No.16　南九州縄文研究会

手向山式土器（第64図71 ～ 76）

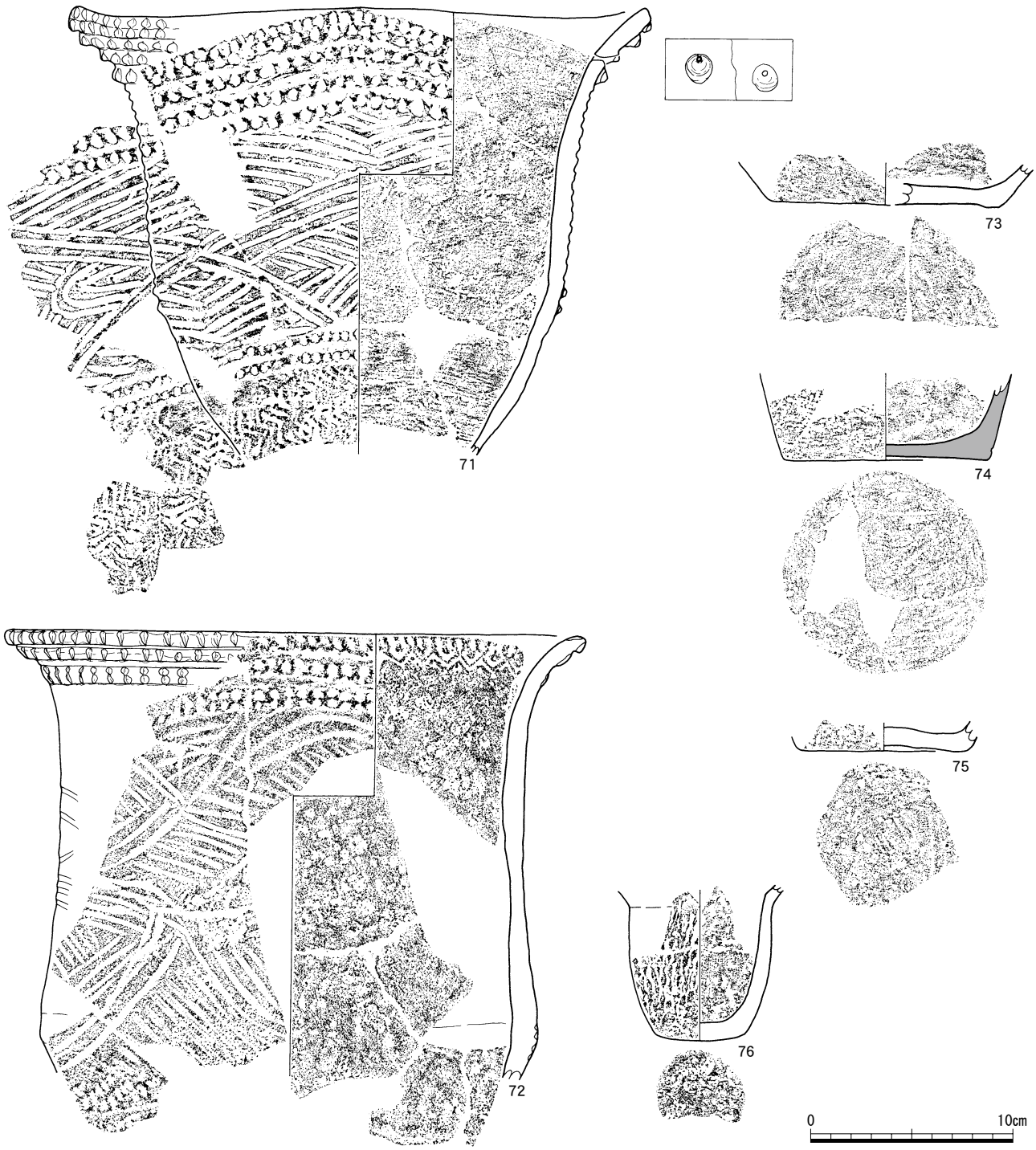
71は胴部径21㎝，口縁部は４つの頂部をもつ波状口縁となるため，上面観は円形ではなく最大幅28㎝となる。胴部下半は内湾気味に立ち上がり，胴部で内側に屈



第62図　縄文時代早期の土器⑤

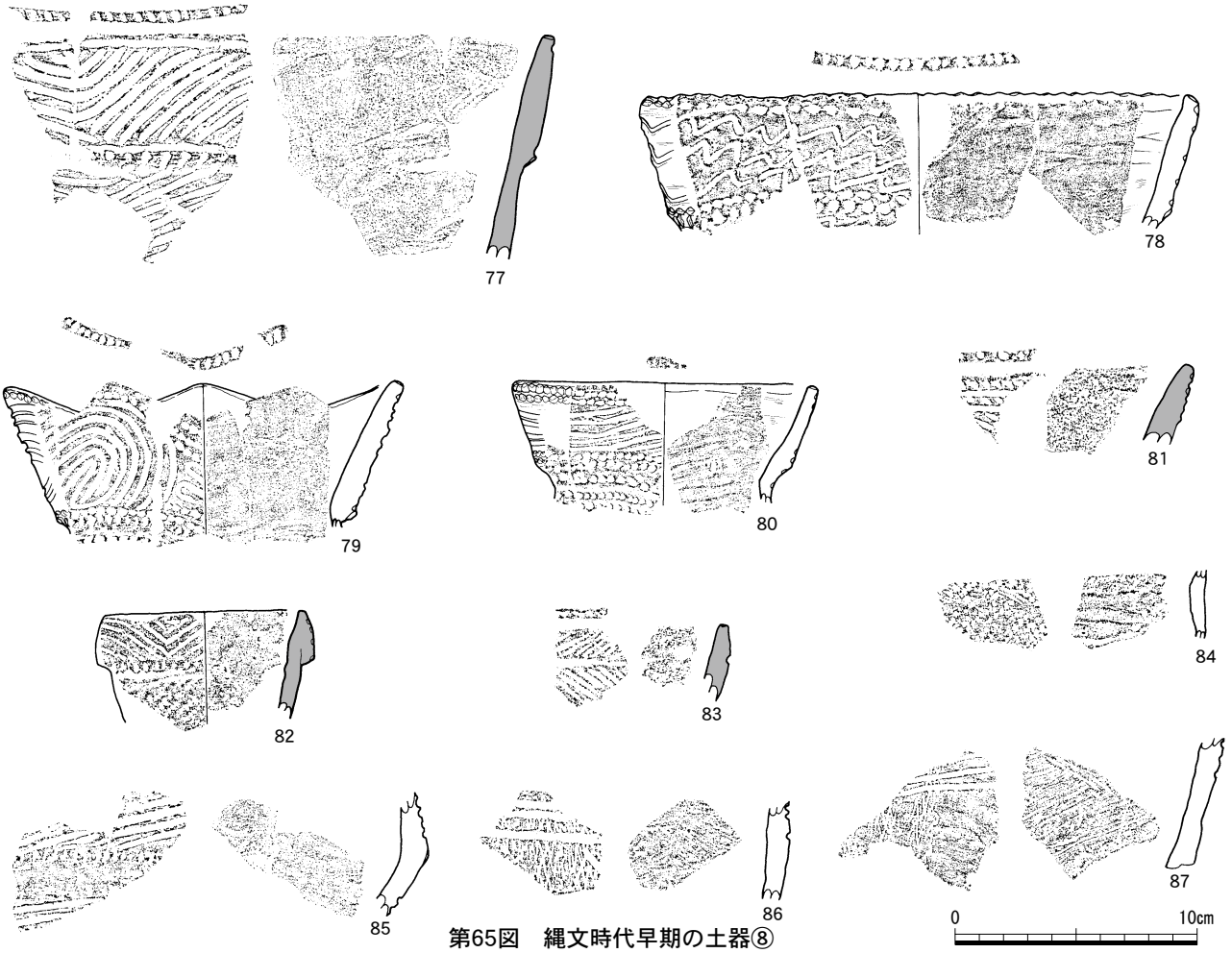


第63図　縄文時代早期の土器⑥



第64図　縄文時代早期の土器⑦

曲して大きく外反しながら口縁部に至る。胴下半には山形押型文を施し，屈曲部には２条の刻目のある突帯を巡らす。胴上半は多条の凹線による横長の菱形文を描き，口縁部に沿って４条の刻目のある突帯を施す。口唇部にも同様の刻目が施される。**72**は，ゆるく内側に屈曲する胴部で，内傾気味に立ち上がる長い頸部から外反する口縁部へ至る。口唇部および２条の突帯に二叉状の工具で刻目を施す。頸部の文様は，菱形をモチーフに凹線で描き，屈曲部には５つの単位をもつ工具を斜めに刺突する。口縁部内面には円周24㎜に２つの頂部をもつ山形押型文が施される。**73**は直径11.8㎝の底部で，縁を盛り上げ，わずかに上げ底となる。胴部は外開きする。確実な要素はないが，手向山式土器と考えられる。**74**は直径10㎝で，わずかに上げ底となる。底部外面の縁はシャープであるが，内面はスムーズに内湾している。外面はミガキ様のナデによるもので，山形押型文を施す。花崗岩質の胎土である。**75**は，わずかに上げ底となり，外開きとなる胴部へ至る。底面には調整の他に，圧痕状の凹みがみられるが，何によるものか追究はしていない。確実な要素はないが，手向山式土器と考えられる。**76**



第65図　縄文時代早期の土器⑧

は底径4.6cm・推定器高９cm弱のミニチュアの深鉢形土器である。わずかに丸みを帯びる平底の底部から，張りのある胴部へ至り，大きく外反する口縁部がつくと推察される。外面には楕円押型文が縦位に施される。内面の器面調整はナデである。類例は知らないが，手向山式土器に該当すると考えられる。

寺師見國　1936 「北薩地方の縄文土器」『史前学雑誌』８－６
寺師見國　1954 「手向山式土器」『南九州の縄文式土器』
片岡肇　1970 「手向山式土器の研究」『平安博物館紀要』Ⅰ
横手浩二郎　1994 「手向山式土器研究史」『大河』第５号　大河同人

平栫式土器（第65図77 ～ 84）

77は肥厚した口縁部をもつもので，段の部分と口唇部に刻目を施す。口縁端部と段のところには，右から左方向へ短線を重ねて凹線様としている。口縁部と頸部は凹線文によって埋めてある。大粒の金色雲母を含む。78は段をもって肥厚させる口縁部で，段部分には低い突帯を巡らせ刻目を施す。口唇部と口縁端部にも刺突を施し，肥厚部には３条の波状文を描く。金色雲母は含まない。79は段をもって肥厚させる波状の口縁部である。段部には低い突帯を巡らし，口唇部と同様の刻目を入れる。肥厚帯の上下には連続した刺突を施し，間は多重線で「傘の柄」形の文様を描く。刺突具は巻き貝の先端とも考えられるが，確証はない。80は段をもって肥厚させる口縁部で，多重線と連続刺突文で全面に文様を構成する。刺突具は巻き貝の先端によるものとも考えられ，今後レプリカ法などを用いた確認が必要である。金色雲母は含まない。81は口唇部に浅い刻みを入れ，口縁部には沈線間に刺突を加える。金色の雲母が含まれる。82は内湾気味に肥厚した口縁部をもつ壺形土器で，口縁部直径は8cmに復元できる。肥厚部には単線を重ねるような手法で文様を描き，段部には刻目を施す。頸部はL撚りの単節縄文を施す。金色の雲母を含む。83は壺形土器の口縁部と考えらるもので，口唇部に刺突を施す。口縁部は横位の線の上下に羽状の文様を描く。金色の雲母を含む。84はL撚りの単節縄文を施すもので，金色雲母は含まない。

塞ノ神Aa式土器（第65図85 ～ 87）

85は屈曲部をもつ口縁で，屈曲部には刻目が巡る。多重線によって文様を描く。86と87は網目状の撚糸の上から，多条の凹線を巡らすものである。内面はケズリ様のナデである。

縄文時代早期の石器

打製石鏃（第66図88 ～ 111）

Ⅴ層・Ⅵ層相当（縄文時代早期）包含層からは，打製石鏃が未製品，破損品を含め24点出土した。Ⅱ層・Ⅲ層からの出土遺物と併せて主に形状を観察し，分類した。

表６　打製石鏃分類表

Ⅰ類	ほぼ正三角形状を呈するもの
a	正三角形状で，基部に抉りのないもの
b	正三角形状で，基部に抉りのあるもの
Ⅱ類	二等辺三角形状を呈するもの
a	二等辺三角形状で，基部に抉りのないもの
b	二等辺三角形状で，基部に抉りのあるもの
Ⅲ類	基部に長軸の 30%以上の深い抉りのあるもの
Ⅳ類	五角形状を呈するもの
Ⅴ類	縁辺部に鋸歯状の剥離加工の観察できるもの
Ⅵ類	その他縁辺部に特徴のみられるもの

88は正三角形状で，殆ど抉りの観察できないものである（Ⅰa類）。唯一，平基式で，樋脇産黒曜石試料に類似する。風化状態から，縄文時代早期相当の可能性が高い。89，90は正三角形状で基部に抉りがみられるものである（Ⅰb類）。上青木産黒曜石試料に類似する。91 ～ 103は欠損品も含め，Ⅱb類とした。104 ～ 108は深い抉りの状況から，Ⅲ類とした。109は，左右基部縁辺に膨らみを持たせた特殊な形状をしている。同素材を使用した石鏃は，特に丁寧な押圧剥離加工を施している。狩猟の際の有効性は不明である。110，111は，縁辺部に鋸歯状の押圧剥離加工を施しているものである（Ⅴ類）。縁辺部を鋸歯状に加工するのは狩猟の際に石鏃が獲物から抜け落ちないための加工とも言われるが，本遺跡での出土は少なく，また調整も甘く，鋸歯状に加工する拘りはみえてこない。

本遺跡出土の打製石鏃石材をみると，縄文時代早期相当期では県内では上青木系に類似する黒曜石の割合が高い。また，西北九州産及び東北九州産と推測できる石器素材の出土状況から，本遺跡でも縄文早期相当時期にはすでに広く九州全域との交流があったことが窺える。

表７　打製石鏃石材別一覧表

黒曜石Ⅵ	1	黒曜石Ⅳ	3
黒曜石Ⅴ	2	黒曜石Ⅰ	1
黒曜石Ⅱ	4	黒曜石Ⅲ	3
サヌカイト	4	玉髄系	2
チャート	3	不明	1

スクレイパー（第67図112）

112は石英製のスクレイパーと想定される。石英結晶の小片の上部，下部に使用痕が見られる。あるいは楔形石器の用途に用いられたのかもしれない。

楔形石器（第67図113・114）

113，114は石英の楔形石器と推測できるものである。114は凸レンズ形状を呈し，上下部に打撃痕が観察できる。113は比較的小型で横長の形状をしている。上部に顕著な打撃痕が観察される。

二次加工剥片（第67図115）

115は二次加工を施す剥片である。青木産黒曜石の剥片縁辺部に刃こぼれと思われる使用痕が観察される。

石槍（第67図116・117）

116，117は西北九州産のサヌカイトの試料に類似する石材を素材とする。117は丁寧な加工により槍先端部を作出している。116は同素材を使用しており，先端部は欠損しているが，残存部分の作出状況から117と同様の形状を保っていたと思われる。

石核（第67図118 ～第68図123）

118 ～ 123は石核である。118，119は黒曜石の平坦な自然面を打面とし，中心に向かい求心的に剥離を行っている。120は平坦な部分を作出し，二方向から剥離作業を行っている。121は石英の剥片を一定方向から数回剥離を繰り返し，剥片を作出した形跡が残る。122は頁岩の小円礫を敲打により分割し，平坦面を作出した後，求心的に剥離を繰り返しているものである。123は繰り返し打面調整を行い，双方向からの剥離痕が観察される。

磨製石斧（第68図124・125）

124，125は頁岩を使用した磨製石斧である。124は素材全体を研磨し，作出している。側面等も研磨により形成を施す。基部の抉り部には，装着によると推定される紐ずれ痕が確認できる。刃部形状及び刃部欠損の状況から，木材加工等に使用したものと思われる。125は敲打加工により，あらかたの成形を行った後，刃部を主に研磨加工を施したものである。124との相違点は，刃部を下部のみでなく，側面にまで作出していることであり，柄に装着するものではなく，工具というより，石器を直接握り食品加工等を行うツールとも考えられる。

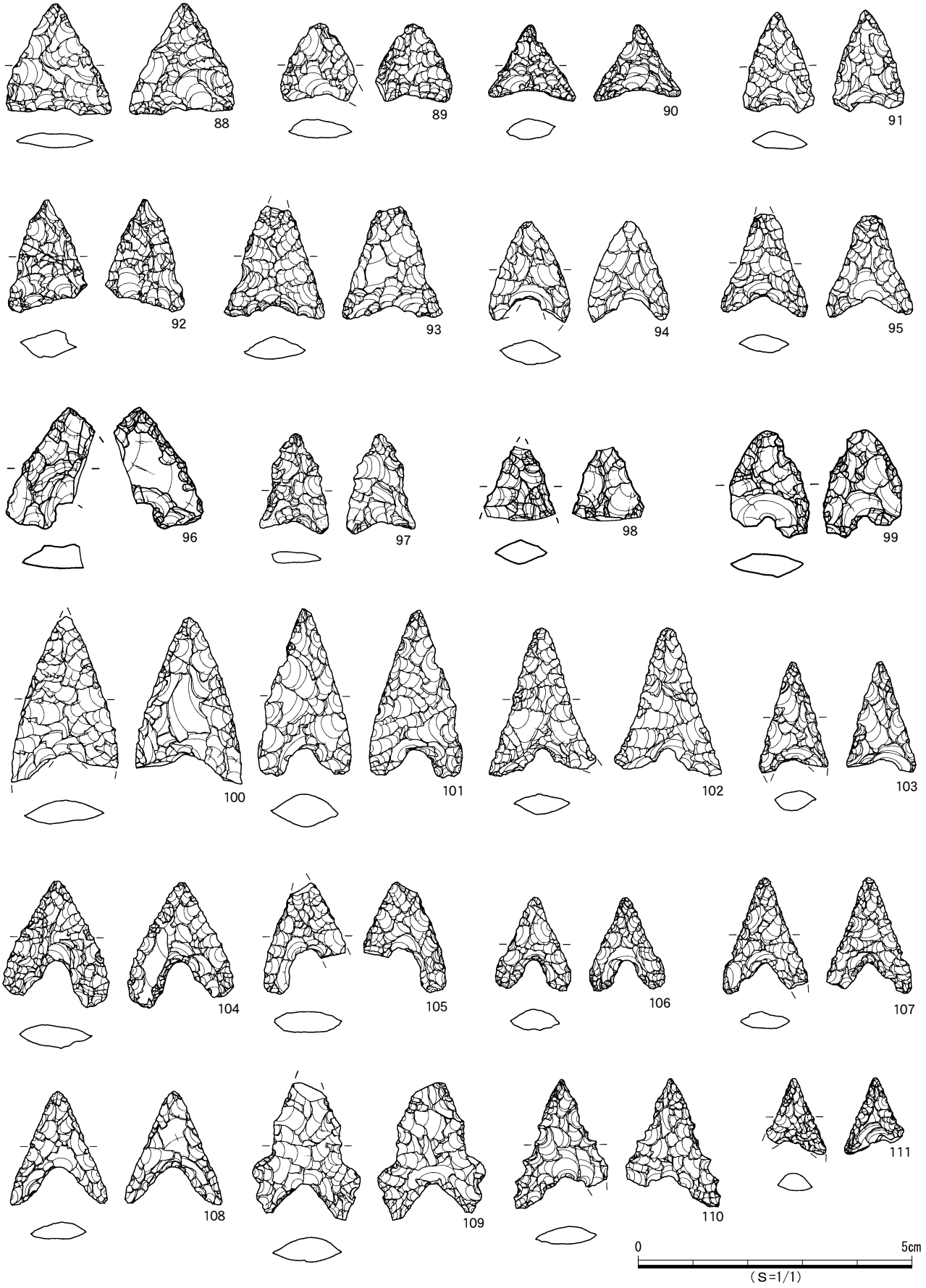
形状は，大隅半島の縄文時代後期から晩期にみられるラケット形の石製土掘具に似ているが，両石器ともアカホヤ層下位の出土である。

砥石（第68図126）

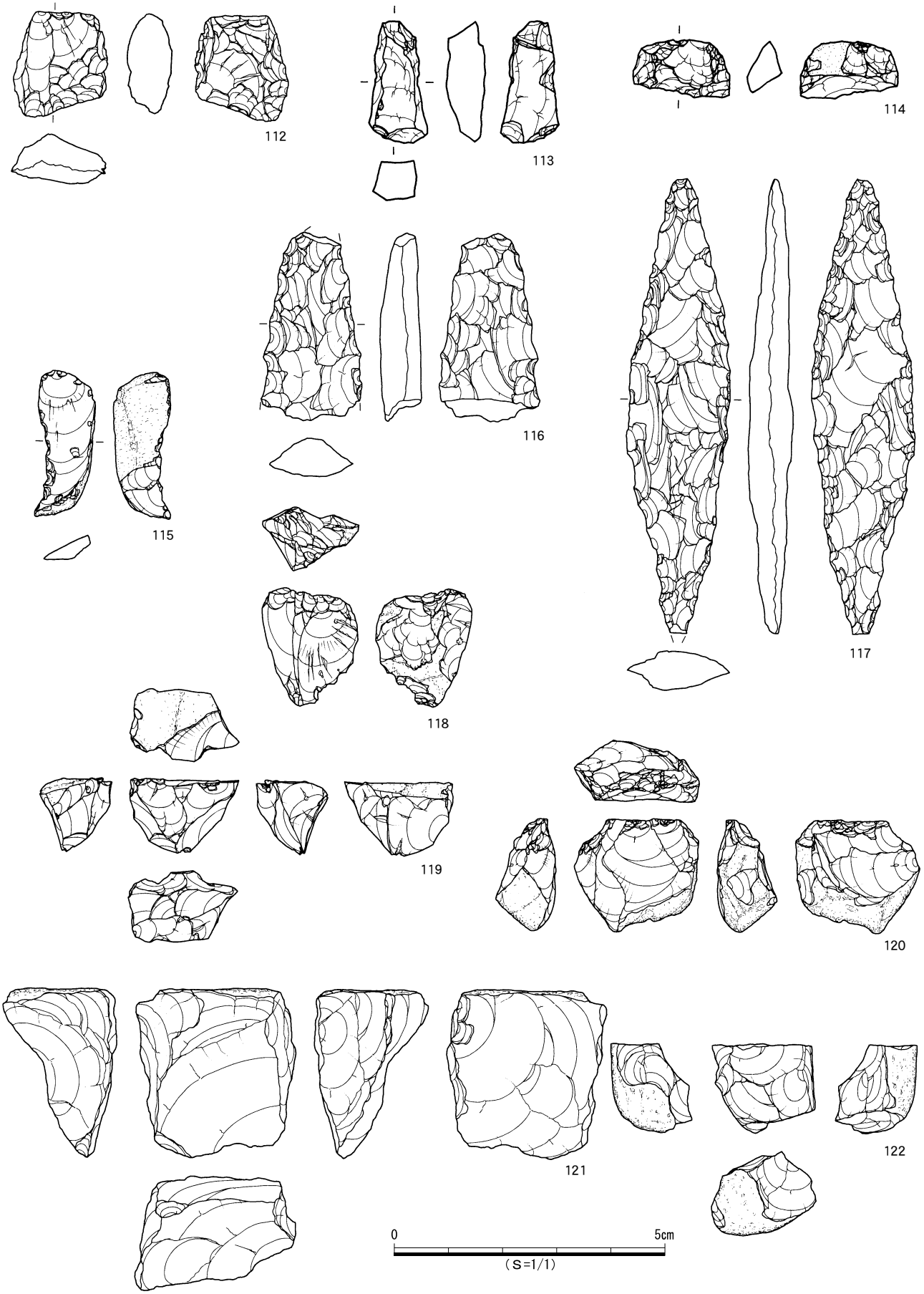
126は，表裏平坦面の擦痕から，砂岩製の砥石と思われる。表面には敲打痕も観察できる。また，縁辺部の敲打痕の状況から，敲石としての使用も想定される。

礫器（第68図127）

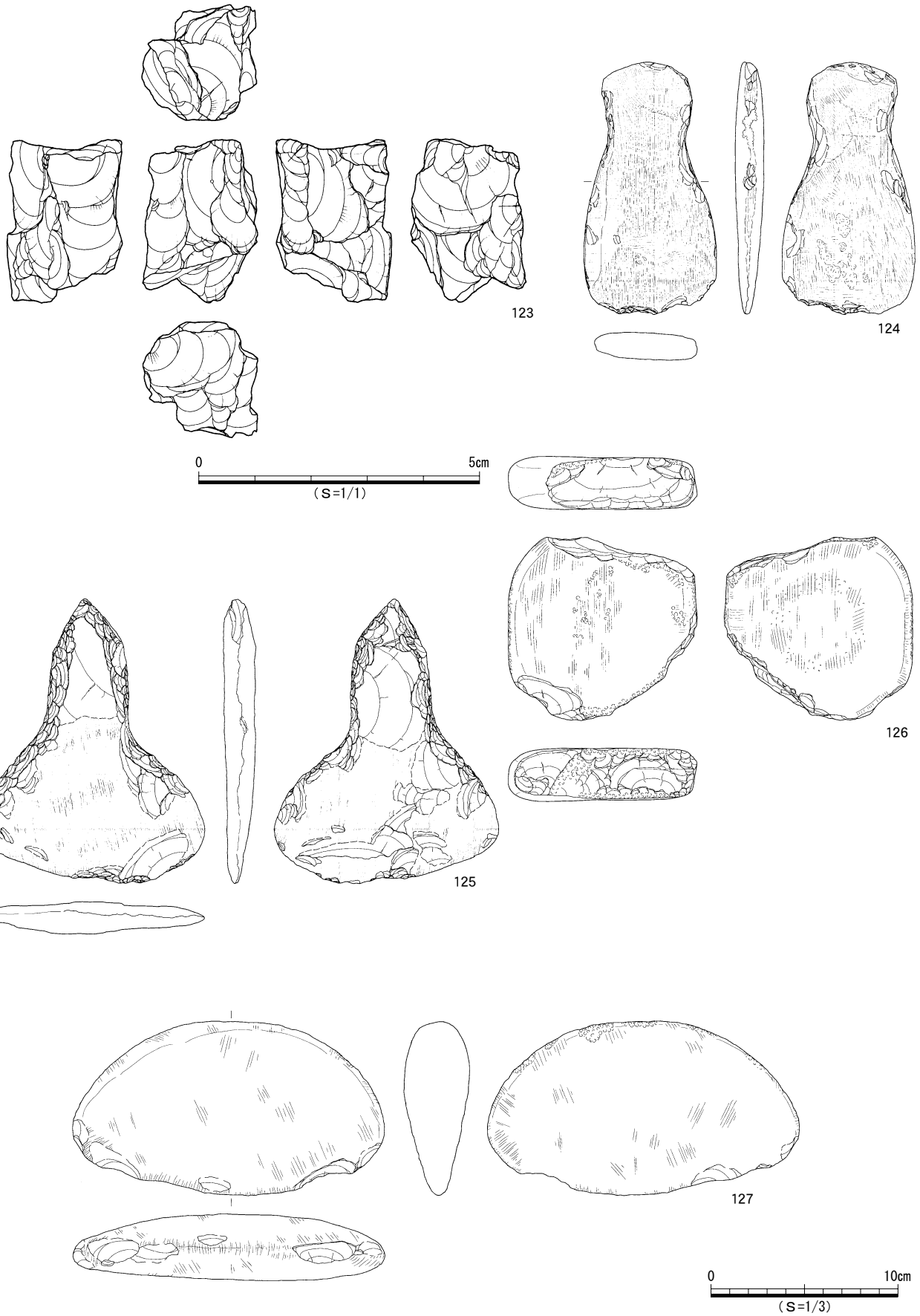
127は扁平な楕円礫の一縁辺を打ち欠き，刃部としている。刃部状況から，繰り返しの使用の形跡は確認できない。ただ，刃部先端に若干の擦痕が観察されるため，他の用途も考えられる。



第66図　縄文時代早期の石器①



第67図　縄文時代早期の石器②



第68図　縄文時代早期の石器③

4　縄文時代後期～弥生時代前期末の調査

(1) 調査の概要

縄文時代後期から弥生時代の調査は，稲荷迫遺跡の全調査区で行った。層位的にⅣ層（アカホヤ火山灰）の上位は，耕作による削平の影響を受けている場所も多く，各層ごとで厳密に時代を分けることができなかった。

遺構は，主にⅢ層上面とⅢ層下面（御池火山灰が混じる）およびⅣ層（アカホヤ火山灰）上面で検出された。縄文時代晩期～弥生時代にかけての遺構は削平により層の残存状況が悪かったため，Ⅳ層上面でしか検出できず，残存状況の悪い遺構であった。遺構の時期認定は，埋土内の出土遺物から判断しているが，埋土遺物がなかった，もしくはあっても時期の特定ができなかったものについては，周辺の遺構の状況を勘案し縄文時代晩期～弥生時代相当と判断した。

縄文時代後期から弥生時代の土器は，Ⅱ・Ⅲ層出土の土器が，型式的に混在している状況が見られるため，古いと考える方から順に記述する。既存の型式名が明らかな土器については様式ごとあるいは型式ごとに分類し，さらに細分できる場合は，Ⅰ類・Ⅱ類・・・とした。なお縄文時代後期終末から，弥生時代後期初頭までは連続していることと，器種が多岐にわたることから，Ⅰ群・Ⅱ群・・・としてまとめてある。

石器についても同様の状況が見られることから，弥生時代もしくは古墳時代相当と判断できる石器および石製品を除いて，器種ごとに掲載した。そのため，ここで報告するものの中には，弥生時代以降相当の資料が混在している可能性がある。

(2) 遺構（第69図）

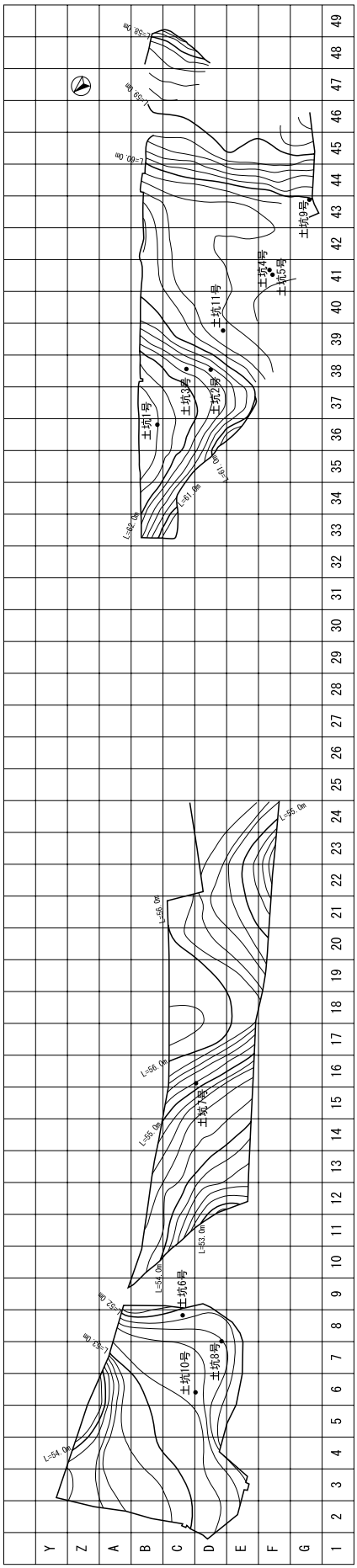
縄文時代晩期～弥生時代に該当すると考えられる土坑については，大型の土坑（土坑１～５），円形（土坑６～８），楕円形（土坑９・10），方形（土坑11）の４類に分類した。

土坑１号（第70図）

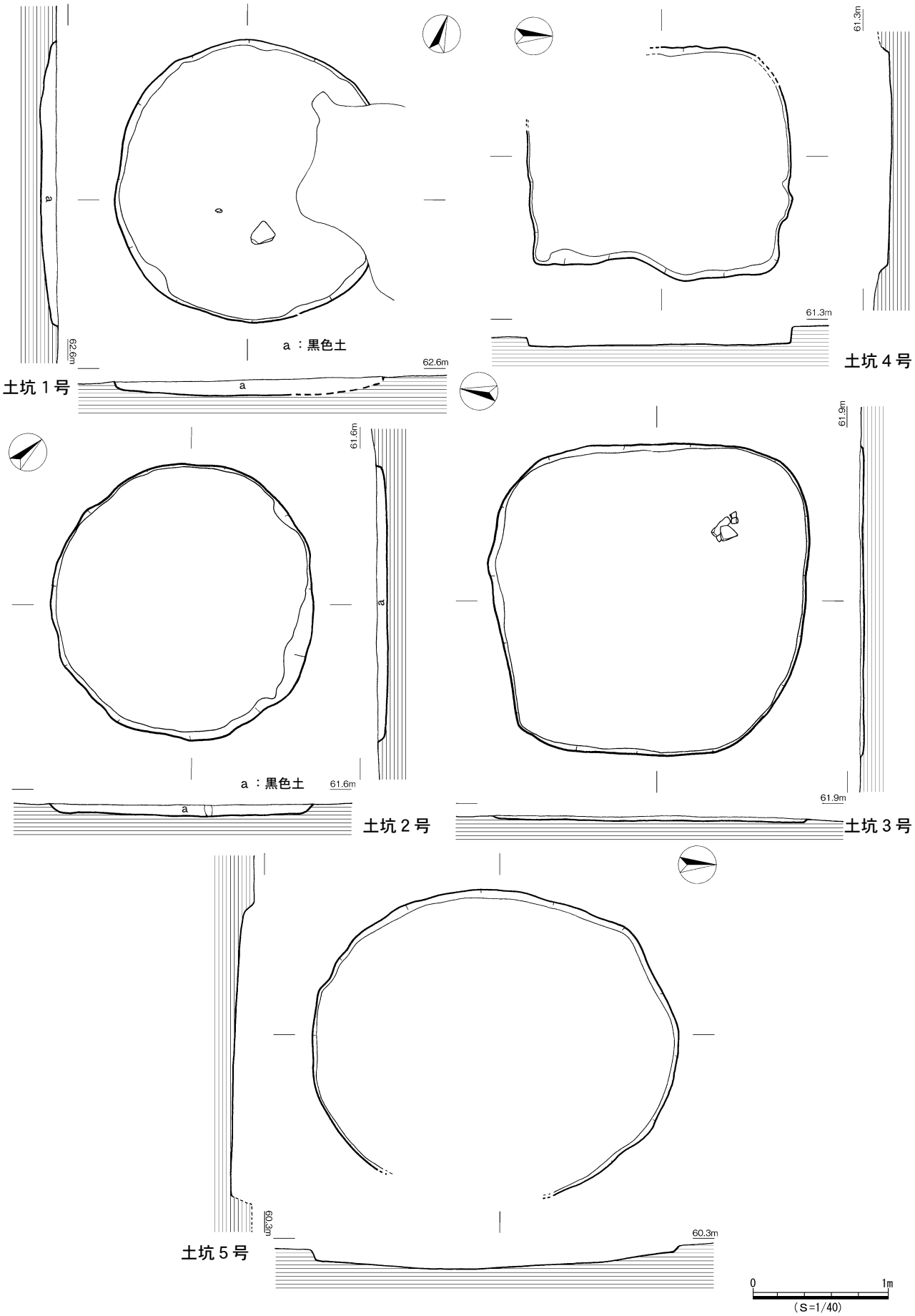
Ｂ－36区Ⅳ層上面で検出された。平面形態は，削平を受けており厳密ではないが，210㎝×200㎝の円形を呈する。床面での長軸・短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はⅢ層土に近い黒色土が主体であり，アカホヤ火山灰の小ブロックが混じる。検出面からの深さは12㎝で床面はフラットである。遺物は弥生時代に該当する土器と考えられる259と260が出土している。

土坑２号（第70図）

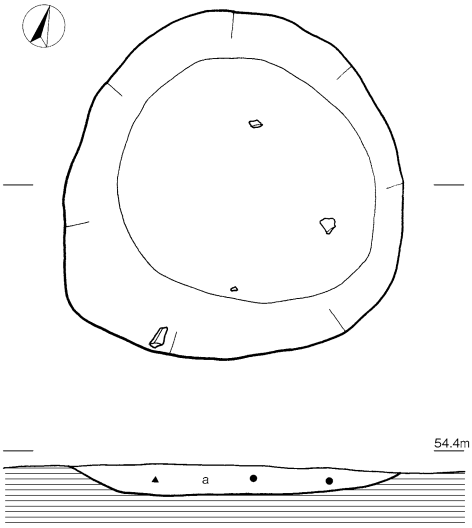
Ｄ－38区Ⅳ層上面で検出された。平面形態は，205㎝×195㎝の円形を呈する。床面での長軸・短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は，Ⅲ層土に近い黒色土である。検出面からの深さは８㎝で床面はフラットである。遺物は縄文晩期相当の147の土器が出土している。



第69図　縄文時代後期から弥生時代　前期末の遺構配置図

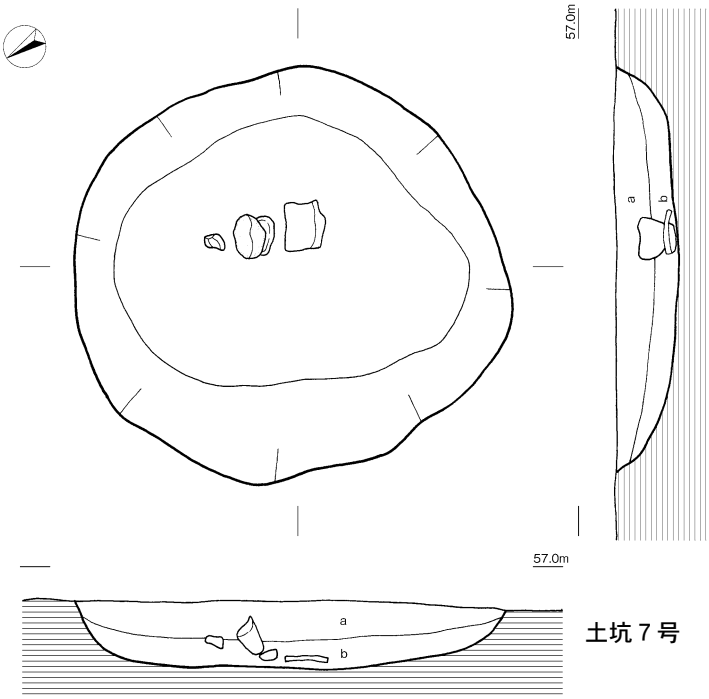


第70図　縄文時代後期から弥生時代前期末の遺構①



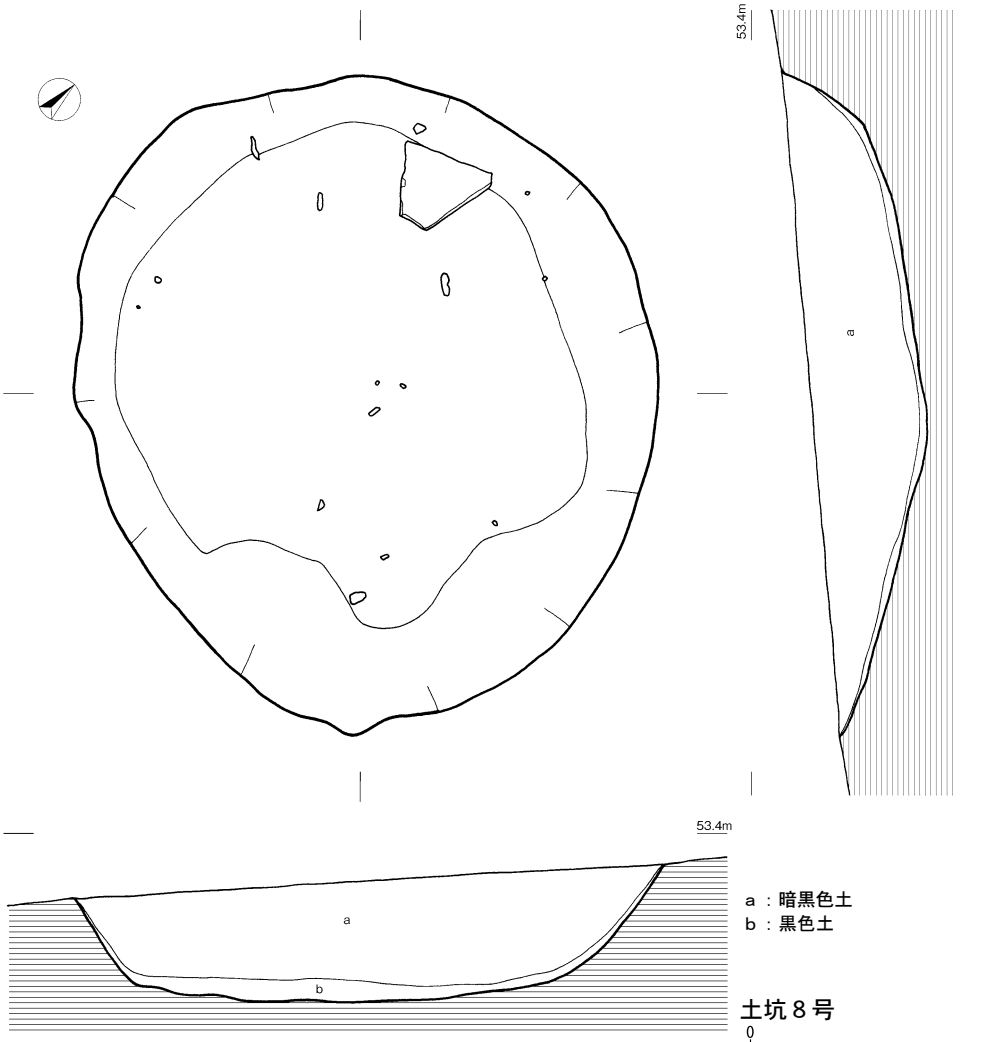
a ：暗黒色土

土坑6号



土坑７号

a ：暗黒色土
b ：黒色土

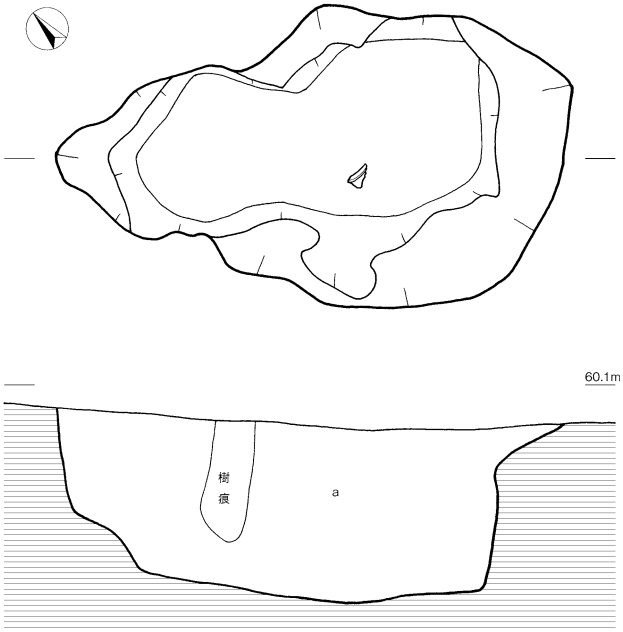


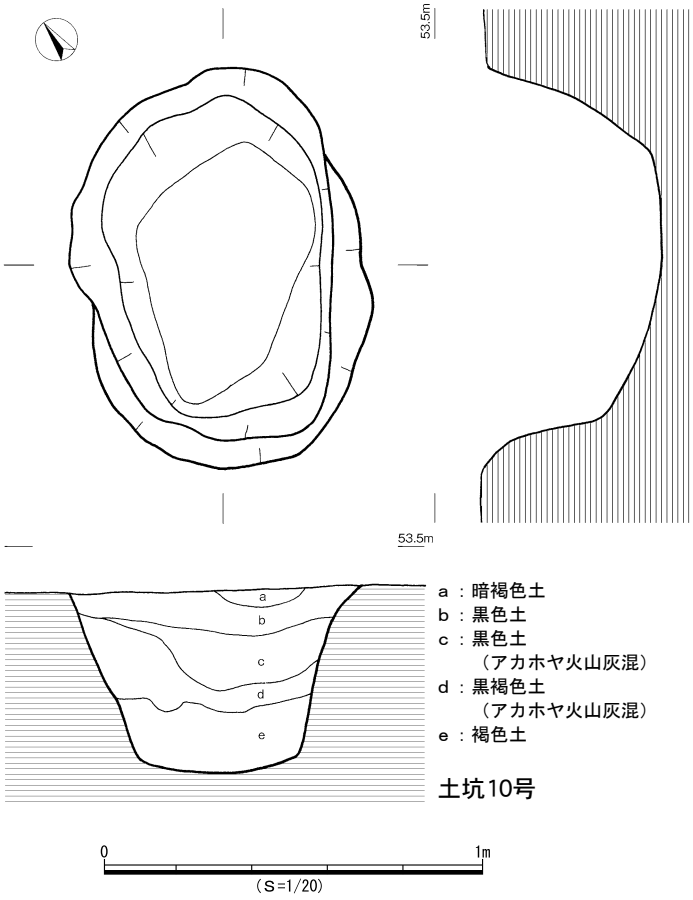
a ：暗黒色土
b ：黒色土

土坑８号

0 1m
（S=1/20）

第71図　縄文時代後期から弥生時代前期末の遺構②





土坑３号（第70図）

Ｃ－38区Ⅳ層上面で検出された。平面形態は，230㎝×230㎝の隅丸方形を呈する。床面での長軸・短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はⅢ層土に近い黒色土が主体でアカホヤ火山灰の粒が少量混じる。検出面からの深さは４㎝で床面はフラットである。遺物は弥生時代相当の862の土器が出土している。

土坑４号（第70図）

Ｆ－41区Ⅳ層上面で土坑５号と切り合う状態で検出された。平面および断面での切り合い関係に十分注意したが前後関係を明らかにすることはできなかった。平面形態は，190㎝×165㎝の方形を呈する。床面の長軸・短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はⅢ層土に近い黒色土が主体である。検出面からの深さは12㎝で床面はフラットである。遺物は弥生時代中期相当の869・882の土器が出土している。

土坑５号（第70図）

Ｆ－41区Ⅳ層上面で土坑４号と切り合う状態で検出された。平面および断面での切り合い関係に十分注意したが前後関係を明らかにすることはできなかった。平面形態は，270㎝×225㎝の円形を呈する。床面での長軸・短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はⅢ層土に近い黒色土が主体である。検出面からの深さは15㎝で床面はフラットである。遺物は縄文晩期相当の245の土器，弥生時代相当の886の紡錘車，255・317・410の土器が出土している。

土坑６号（第71図）

Ｃ－８区Ⅲ層上面で検出した。平面形態は，92㎝×90㎝の円形を呈する。床面は長軸68㎝×短軸63㎝である。埋土は固くしまったⅡ層土であり炭化物を少量含む。検出面からの深さは８㎝で床面はフラットである。遺物は晩期相当と考えられる土器が出土しているが小破片で型式は不明である。

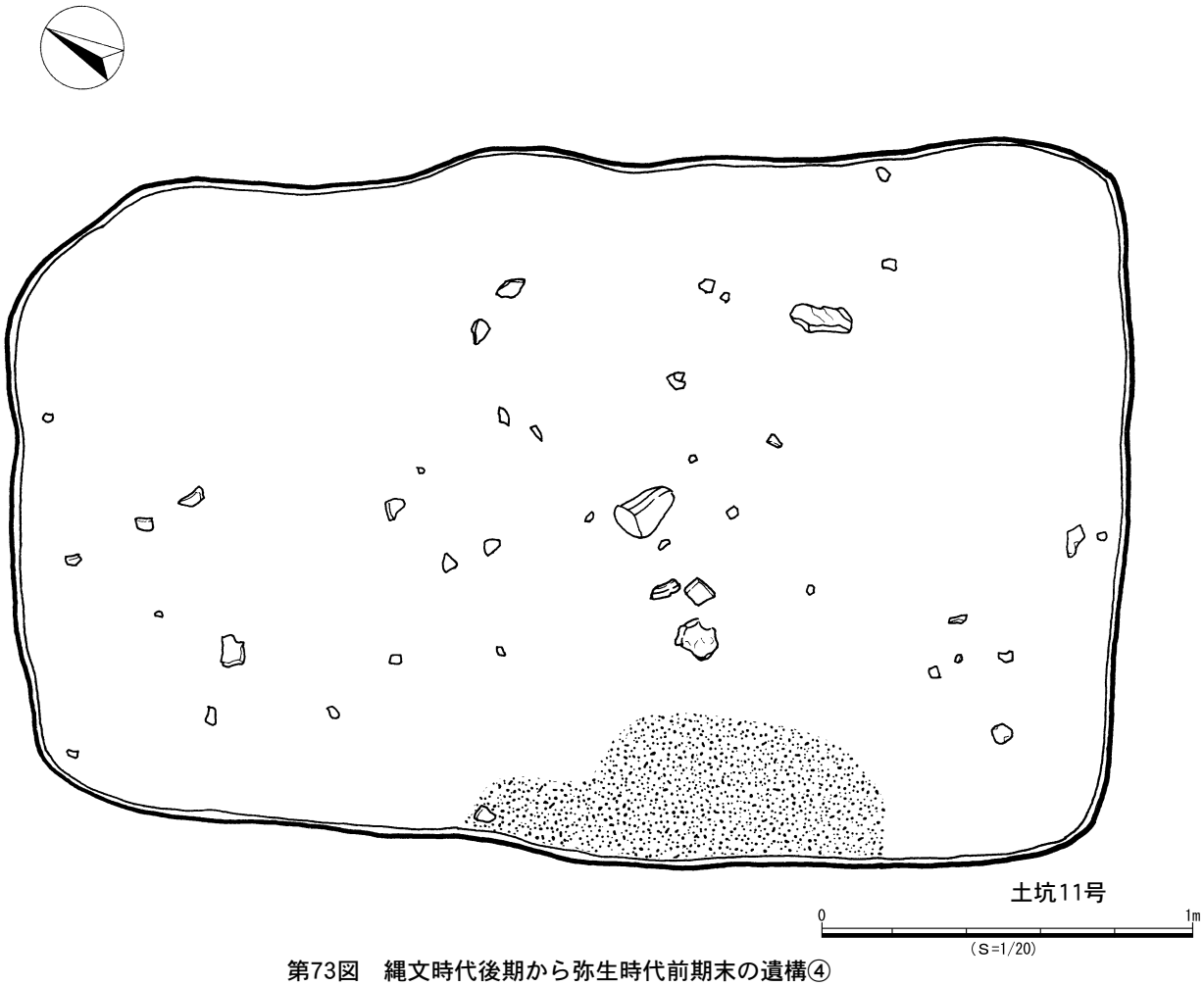
土坑７号（第71図）

Ｄ－16区Ⅲ層上面で検出した。平面形態は，114㎝×108㎝の円形を呈する。床面は94㎝×70㎝である。埋土は，Ⅱ層土と考えられる暗褐色土を主体とし，下位にⅢ層土と考えられる黒色土の堆積がみられる。検出面からの深さは16㎝で床面はフラットである。遺物は，縄文時代晩期～弥生時代前期相当の組織痕土器372が出土している。

土坑８号（第71図）

Ｄ－７・８区Ⅲ層上面で検出した。平面形態は，174㎝×155㎝の円形を呈する。床面は，134㎝×124㎝である。埋土はⅡ層土と考えられる暗褐色土を主体とし，下位はⅡ層暗褐色土とⅢ層黒色土が混じった土の堆積が見られる。検出面からの深さは33㎝で床面はフラット

第72図　縄文時代後期から弥生時代前期末の遺構③



第73図　縄文時代後期から弥生時代前期末の遺構④

である。遺物は，縄文時代晩期・弥生時代相当の刻目突帯文土器254が出土している。

土坑９号（第72図）

Ｇ－43区Ⅳ層上面で検出した。平面形態は，134㎝×78㎝の楕円形を呈する。床面は90㎝×35㎝である。埋土はⅢ層土に近い黒色土で，アカホヤ火山灰のブロックが混じる。検出面からの深さは44㎝で床面はフラットである。遺物は，弥生時代相当の入来式土器と考えられる小破片が出土している。

土坑10号（第72図）

Ｄ－６区Ⅳ層上面で検出した。平面形態は，106㎝×78㎝の楕円形を呈する。床面は62㎝×41㎝である。Ⅱ層土に近い暗褐色土，Ⅲ層土に近い黒色土，下位にⅢ・Ⅳ・Ⅴ層土相当の土が混じって堆積している。検出面からの深さは48㎝で床面はフラットである。遺物は入来Ⅰ式土器857が出土している。

土坑11号（第73図）

Ｄ－39区Ⅲｂ層で検出した。平面形態は，300㎝×190㎝の長方形を呈する。床面での長軸・短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は，黒茶褐色土が主体である。検出面からの深さは11㎝で，床面の一部に硬化した部分が見られる。縄文時代晩期～弥生時代に相当する土器が多く出土しているが，すべて小破片である。

縄文時代後期中半の土器

この時期に該当する本遺跡出土土器はその特徴から，市来式土器，丸尾式土器，北久根山式土器の３つに細分した。

河口貞徳　1957「南九州縄文式後期土器　－市来式土器－」『考古学雑誌』第42巻第２号　日本考古学会

本田道輝　1981「市来式土器」『縄文文化の研究』４　雄山閣

前迫亮一　1992「異系統土器文化の一接点　－南九州における縄文時代後期中葉の一様相：丸尾式土器の提唱－」『南九州縄文通信』No.６　南九州縄文研究会

市来式土器（第74図128 ～ 136）

128は波状口縁の波頂部で，口縁部文様帯の境を断面三角形に肥厚させるものである。モチーフは133と同じであるが，貝殻腹縁がヘラ状工具に変わる点と金色雲母を含む点が異なる。凹線の端部に凹点がみられるところとみられないところが混在する。129の刺突は鋭いヘラ状のもので，凹線も６㎜と幅広い。金色雲母を含む。130は口縁部文様帯の境を断面三角形に盛り上げるもので，文様帯の上下には横方向の貝殻刺突文を施す。その間には凹線と端部に特異な形状の工具による凹点がみられる。口縁部文様帯の下にもやや間隔を置いて貝殻腹縁刺突文が斜位に巡っている。金色雲母を含む。131は貝殻腹縁刺突の下に凹線を施すものである。金色雲母を含む。132は131と同じモチーフであるが，貝殻腹縁の代わりに鋭いヘラ状の工具を用いるものである。金色雲母を含む。

133は134と同様の手法であり，沈線端の刺突具は管状になっている。134は波状口縁の一部であり，口縁部文様帯の境を断面三角形に肥厚させる。口縁部文様帯の上端と下端に貝殻腹縁による刺突を施し，口縁部文様帯の境より下側にも同様の貝殻刺突を加えている。文様帯の内側は縦方向の列点と平たい工具による凹線が施される。金色の雲母が入らない土器である。135は134と同様のもので，大ぶりな文様を施す。136は口縁部文様帯の境を三角形に肥厚させるもので，口縁部と肥厚部上面に貝殻腹縁刺突を加える。その間を沈線で埋めるが，一部の端には凹点がみられる。雲母は含まない。

丸尾式土器（第74図137 ～第75図149）

137と139は，しまった頸部から内湾気味に立ち上がる口縁部である。口縁部文様帯の境をわずかに盛り上げて肥厚させてある。境の上側とやや間隔を置いて下側に貝殻腹縁刺突を斜位に巡らす。138は，わずかに膨らんだ口縁部文様帯の境をもち，内湾気味に直行するものである。貝殻腹縁刺突の間に凹線を縦に短く２条，横方向に長く２条施す。凹線の左端にはないが，右端には凹点がみられる。口縁部文様帯の境の下側にも斜位の貝殻腹縁刺突文が巡る。金色雲母を含む。140は器形やモチーフは138と同じであるが，凹線が半截竹管状の工具による。金色雲母を含む。141は外反する波頂部であり，貝殻腹縁による斜位の刺突が２段巡らされる。その下に肥厚部があったのかどうか判断できないが，浅く窪んで貝殻条痕はみられない。もし，肥厚部があったとしても，窪んだ部分に煤が付着していることから使用時には現状のままであったことが推察される。142は肥厚部をもたないものであり，貝殻腹縁刺突を斜位に２段施す。金色雲母を含む。143は膨らみのある胴部から頸部でしまり，内湾気味の口縁端部に至る。口縁部肥厚帯はみられず，口唇部よりやや下って貝殻腹縁による刺突を斜位に巡らす。器面調整は内外面とも貝殻条痕によるものである。144は波頂部分であり，貝殻腹縁刺突の下に沈線と沈線端部の刺突がみられる。金色雲母を含む。145は口縁部文様帯の境の膨らみがわずかにみられ，口縁部文様帯に貝殻腹縁刺突を２段施した後，中央部に２条の凹線を巡らす。口縁部文様帯の境の下側にも貝殻腹縁刺突を施す。金色雲母を含む。146は，わずかにしまった部分から外開き気味に立ち上がる口縁部である。口唇部下としまった部分に貝殻腹縁刺突を巡らす。器壁が全体的に厚く，肥厚帯はもたない。金色雲母を多く含むタイプである。147は口縁部下で「く」字状に内屈するもので，屈曲部を挟んで上下に貝殻腹縁による斜位の刺突が巡らされる。148は，しまった頸部から外開きする口縁部で，頸部に貝殻腹縁刺突を巡らす。金色雲母を含む。149は波頂部のあるもので，口縁部より下がった位置に貝殻腹縁刺突を少なくとも２段巡らす。肥厚部があるかどうかは確認できない。

台付皿形土器（第75図150 ～ 152）

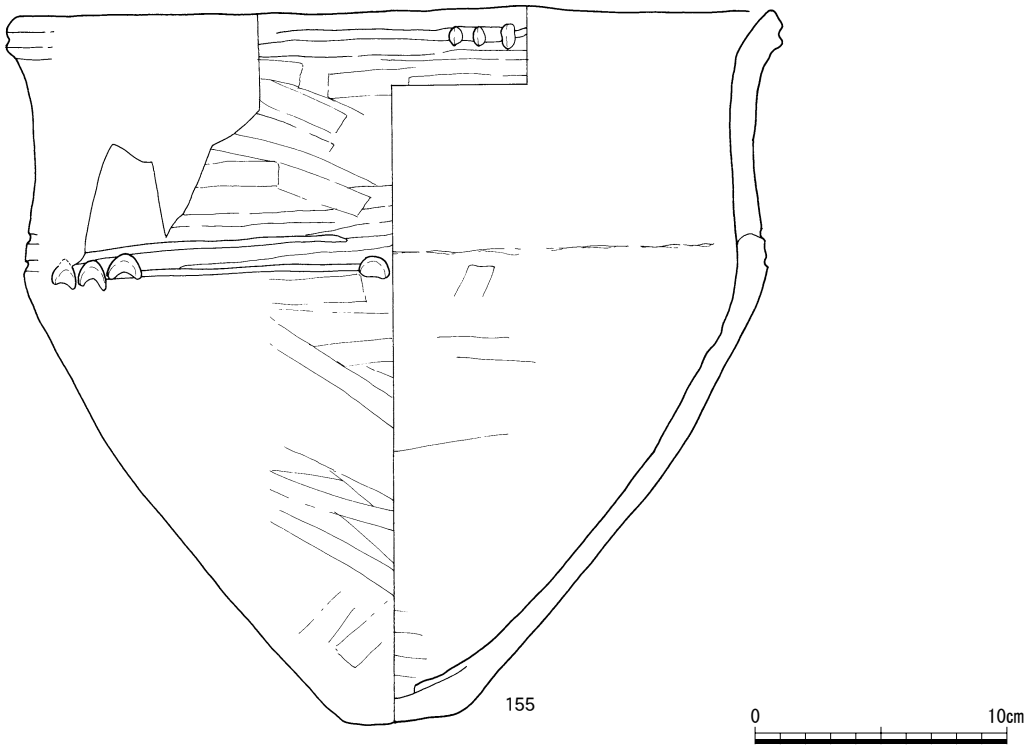
150は皿状の器形で，口唇部上面に太めの凹線を巡らす。内面は条痕で仕上げ，外面はナデによるものである。金色雲母を多量に含む。151は台付皿形土器の口縁部で，粘土紐を「S」字もしくは「W」字状に貼り付けたものであると考えられる。上面からの穿孔が施される。胎土に金色の雲母を含む。152は台付皿形土器の脚部と考えられ，弧状に突帯が貼り付けられる。内面に貝殻条痕を残す。

北久根山式土器（第75図153・154）

153は胴部最大径の部分で内側に「く」字状に屈曲するもので，短めの肩部をもって頸部へ至る。沈線間に文様を入れるが，縄文であるかどうかは確認できない。沈線端を刺突するという手法もみられる。色調がにぶい黄色を呈する点は他の土器と異なる。154は内湾した肩部

第74図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器①

第75図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器②



第76図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器③

付近であり，少なくとも４本の沈線がみえる。空白を置いて，２つの区画に文様が施される。縄文であるのかどうかは，判断できない。

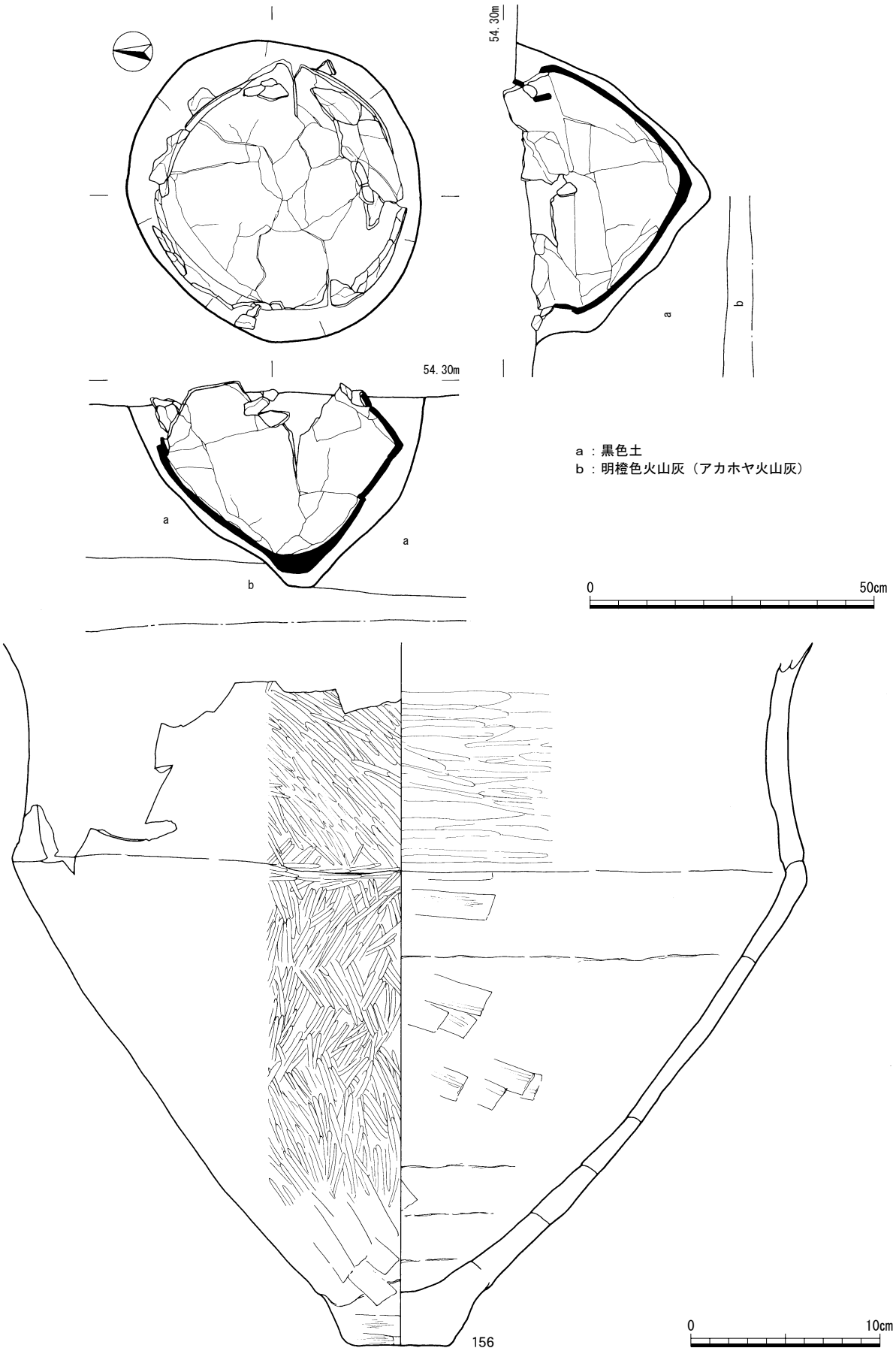
縄文時代後期後半～弥生時代前期の土器

縄文時代後期後半から弥生時代前期にかけては，稲荷迫遺跡での生活がピークを迎える時期であり，途切れなく土器型式が続いている。ただし，この時期には深鉢形土器の他に浅鉢形土器が器種として加わり，さらに弥生時代初頭には甕形土器に壺形土器が伴うようになり，１つの型式や器種から時期の変遷を追うのは難しい。特に，地域色の強い中岳Ⅱ式土器の変化の仕方と，刻目突帯文土器についての時間的な位置付けが困難である。このようなことから，これまでの研究で明らかになっている土器型式や器種を基にしながら，関連する資料について記述していくこととする。

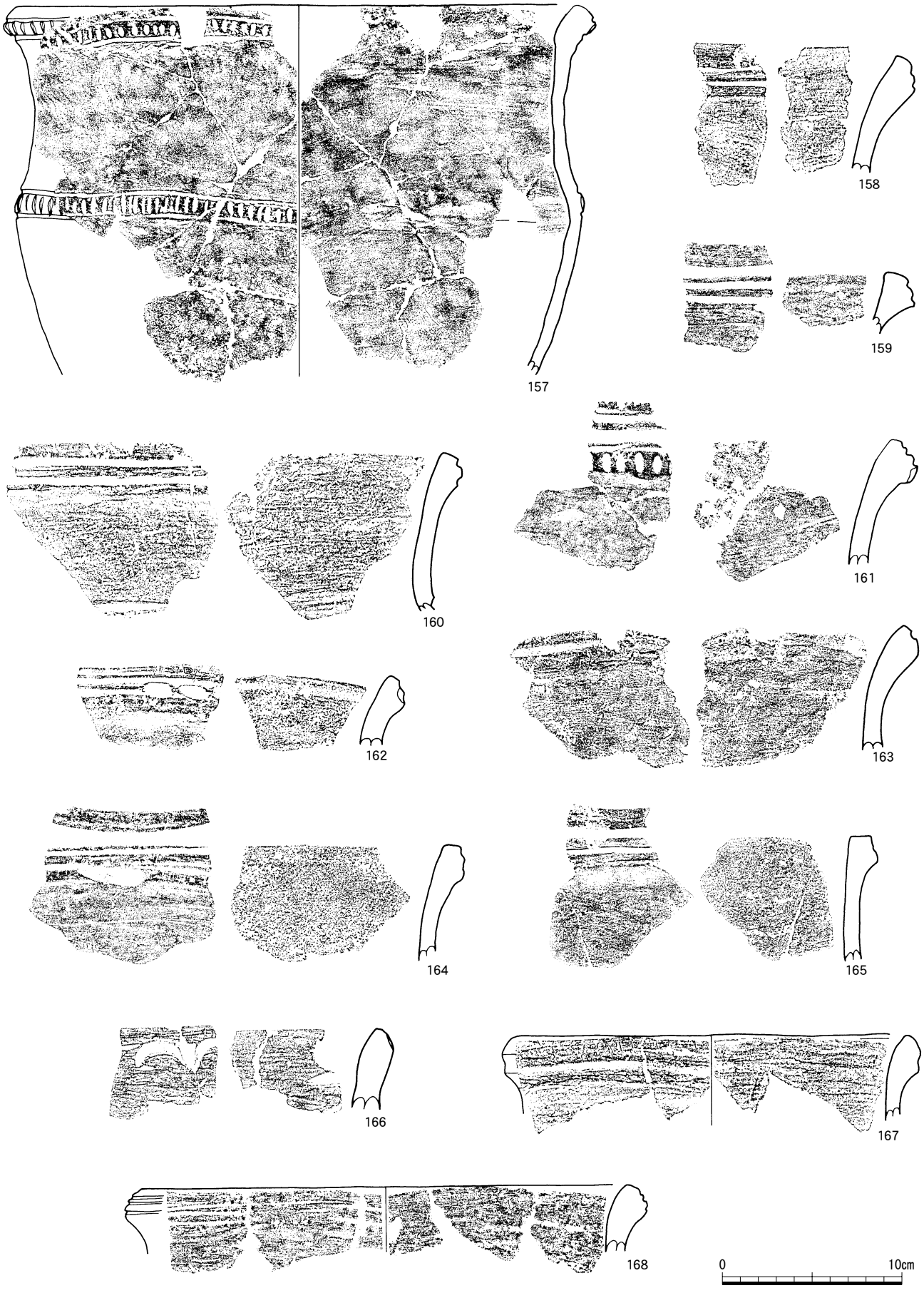
中岳Ⅱ式土器（第76図155 ～第79図172）

155は口径31.1㎝・胴部最大径29.8㎝・底径4.5㎝を測る不安定な形状である。底面はわずかに膨らんでおり，胴部最大径の所まではほぼストレートに延びる。胴部最大径のところで「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は内傾しながら外反する口縁部へ至る。口縁部は肥厚し，凹線を巡らし，一部に凹点を施す。屈曲部上位には２条の凹線が巡り，所々に弦を下にした弧状の凹点が施される。器面調整は，外面がミガキ様のナデであり，内面は板状の工具によるものである。胎土には透明な石英を多く含み，キラキラ輝いている。色調は暗赤褐色を呈する。156の口縁部は欠けているが，胴部最大径41.9㎝・底径５㎝を測る不安定な形状である。底面はわずかに凹んでおり，胴部最大径の所まではほぼストレートに延びる。胴部最大径のところで「く」の字状に内側に屈曲し，頸部は大きく外反する。底部から頸部までの間には，文様はみられない。器面調整は，外面がミガキ様のナデであり，内面は板状の工具によるものである。胎土には透明な石英を多く含み，キラキラ輝いている。色調は暗赤褐色を呈する。胴下半の真ん中より上の方に，煤が付着している。付着炭化物を年代測定した結果，補正年代でBC.1691 ～ 1607の年代値が得られた。

157は口径33㎝・胴部最大径31.6㎝を測る深鉢形土器である。丸みのある胴部から内側に屈曲し，大きく外反しながら口縁部に至る。口縁部は断面カマボコ状に肥厚させ，２条の凹線の間に同じ工具で刻目を巡らす。胴部屈曲部にも同様の手法でやや縦長の刻目を施す。口縁部内面の形状は浅い窪みがある。器面調整は，内外面ともミガキ様のナデである。158は口縁部内面に浅い窪みをもち，肥厚させた口縁部に２条の凹線を巡らす。159は口縁部を肥厚させ２条の凹線を巡らす。口縁部内面には，わずかな窪みがみられる。160は肩部から外反する長めの頸部をもち，肥厚する口縁部に至る。肩部には少なく



第77図　縄文時代後期土器と検出状況



第78図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器④

とも１条の，口縁部には２条の凹線が巡る。161の口唇端部は欠けるが，肥厚した口縁部に２条の凹線と同じ施文具による刻目を巡らすものである。162は口唇部内面に浅い窪みをもち，肥厚させた口縁部に２条の凹線を巡らした後，少なくとも３つの横長凹点を施す。163は肥厚した口縁部に浅い凹線を１条巡らすものである。164は口縁部を肥厚させ，２条の凹線を巡らす。口唇部を幅広く面取りし，内面に段などはみられない。165は口唇部を平らに広く面取りするもので，肥厚させた口縁部に１条の凹線を巡らすものである。166はアクセントをつけずに肥厚させた口縁部に，少なくとも２つの三日月状凹点を描くものである。167の口唇部は尖り気味で，肥厚させた口縁部に浅くて幅広の凹線を１条巡らすものである。168は肥厚した口縁外面に２条から４条の沈線を粗く巡らすものである。器面調整はナデであり，色調も淡黄色を呈する。典型的な中岳Ⅱ式土器よりも，時間的もしくは地域的な差がみられる。169は胴部屈曲部に３条の凹線を巡らし，三日月状の凹点を上に１つ下に２つ施す。170は胴部屈曲部に少なくとも３条の凹線を施し，同じ施文具で刻目を加える。171は胴部最大径で屈曲するもので，屈曲上面に３条の凹線を巡らす。文様を意識したかどうかは不明であるが，凹線の上から直線的な斜線が引かれる。172は胴部屈曲部の破片と考えられる。屈曲部上には窪みがみられるが，文様となるかどうかは不明である。屈曲部下には少なくとも２本の斜線が認められるが，これも文様として意識しているかどうかは，類例を待つしかない。胎土や色調の特徴から中岳Ⅱ式土器の中に含めた。

中岳Ⅱ式土器に近い土器（第79図173 ～ 177）

173は口径26.6㎝に復元できるもので，口縁部をカマボコ状に肥厚させる。器面調整は粗くナデ上げるもので，他に比べ粗雑な感じを受ける。174の口縁部は断面半月系形に肥厚するもので，口唇部の一部分に低い山形の突起をもつ。補修孔が内外面から開けられている。175の外面はカマボコ状に肥厚させ，口縁部内面を凹線状に仕上げることによって，尖り気味の口唇部となる。176は口縁部のみ屈曲して外開きするもので，内面には明瞭な稜が入る。口縁部は肥厚し，口唇部は尖る。177は直立する頸部から大きく外反して直ぐ立ち上がる口縁部に至る。内外面とも稜がはっきりし，口縁部で器壁が厚くなる。この様な特徴から，上加世田式土器古段階に併行するものと考えられる。

深鉢形土器：上加世田式類似土器（第80図178 ～ 189）

178は口縁部を肥厚させ，１条の凹線と刺突を加えるものである。口唇部上面と外端を面取りするものである。179は稜とまではいえないが内外面にアクセントをつけて内湾する口縁部に至る。器壁の厚さはほとんど変わらない。広めの口縁帯に１条の凹線を巡らし，口唇部に小さな頂点を持つ部分に三日月状の凹点を施す。形状は上加世田式土器と共通する。180は口縁部内面に窪みをもち，口縁帯には凹線と三日月状の凹点がみられる。181は大きく外反するもので，口縁部端部のみ短く立ち上がる。口縁部内面は浅い段状になり，口縁部外面には１条の凹線を巡らす。口唇部の一部を内側に引き延ばして頂部をつくり，上面に１ヶ所と凹線上に３ヶ所の凹点を施す。内外面ともミガキによるものである。182は外面にアクセントをつけて口縁部に至る。内面はわずかに屈曲点がみられる。器壁の厚さはほとんど変わらない。口縁帯の下端と口唇部に１条の凹線を巡らす。形状は上加世田式土器と共通する。183は，やや低く肥厚させた口縁部中央と口唇部に１条ずつの凹線を巡らす。184はゆるく外反する口縁部で，口縁下に突帯を巡らす。色調は赤褐色を呈する。185は大きく外反する頸部に，境のはっきりしない口縁部文様帯が付くもので，口唇部は平坦気味に面取りする。文様帯には１条の凹線が巡る。内面には浅い段状となり，頸部と口縁部が一体化している。内外面とも横方向のミガキである。器形は上加世田式土器に含まれるが，色調や胎土は中岳Ⅱ式土器に近い。186は内側に屈曲して短く外反する口縁部に至る。屈曲部の内側には深い窪みがあり，外面の屈曲部は突帯状にみえる。凹線は１条もしくは２条である。

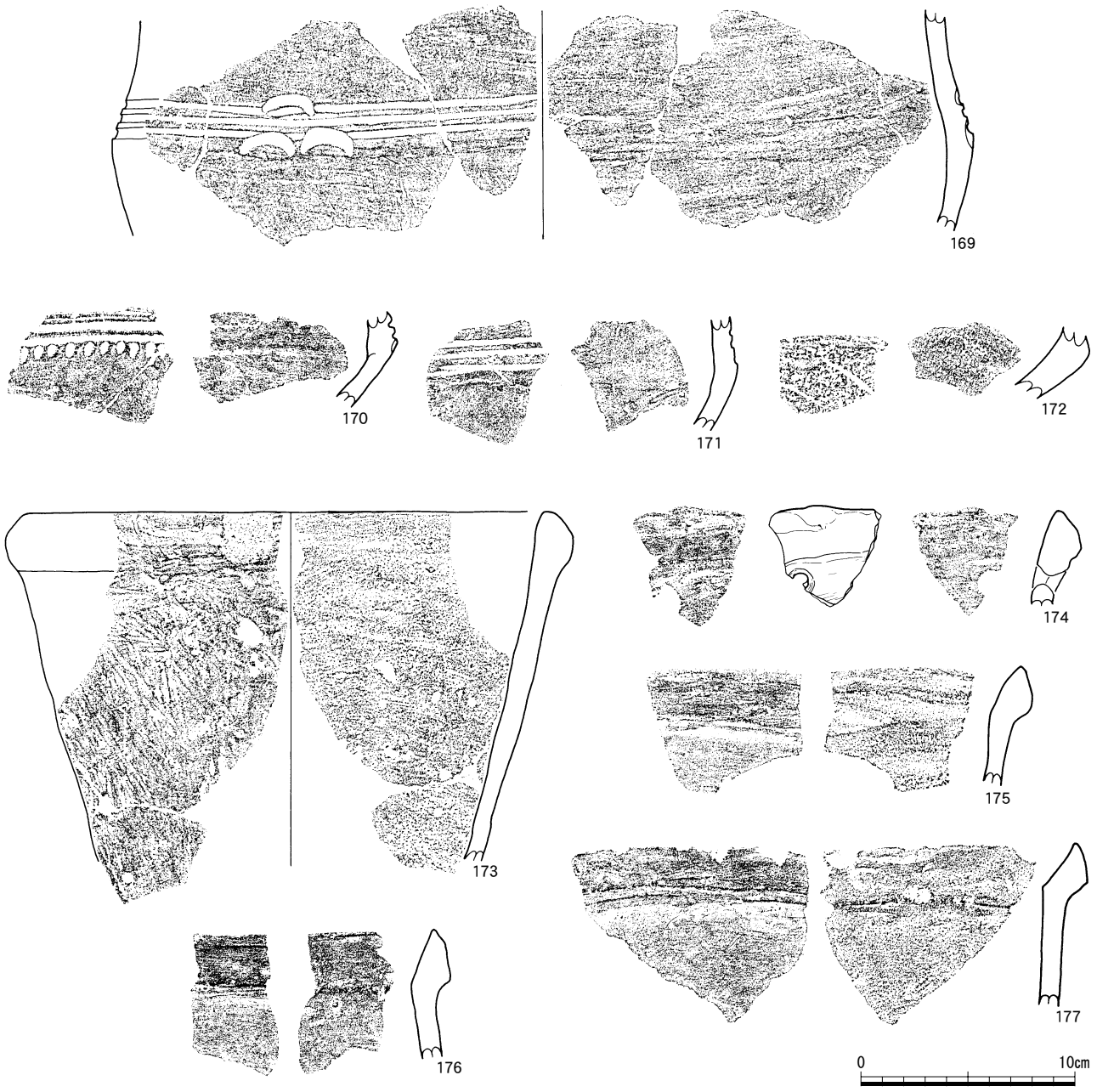
187は大きく外反して直行する口縁部で，口唇部は尖る。口縁部には浅めの凹線を巡らす。188は内外面に稜をもって，長めの内湾する口縁部である。凹線やミガキ調整はみられないが，形状から上加世田式土器新段階に位置付けられると考える。189は外反する口縁部の端部のみが立ち上がる。外面は肥厚帯状に見えるが，厚さは同じであり，無文である。口縁部内面には凹みをもち，端部のみが短く立ち上がる。胎土には金色雲母を多く含む。

底部（第80図190・191）

190は半球形の底面からほぼ直線上に外開きする底部である。器面調整は内外面とも，縦方向のミガキである。191は直径５㎝の丸みを帯びた底部から，大きく外開きして胴部に至る。底部内面から胴部内面にかけては，光沢が出るほどミガキ上げている。

深鉢形土器：入佐式土器・黒川式土器（第81図192 ～ 199）

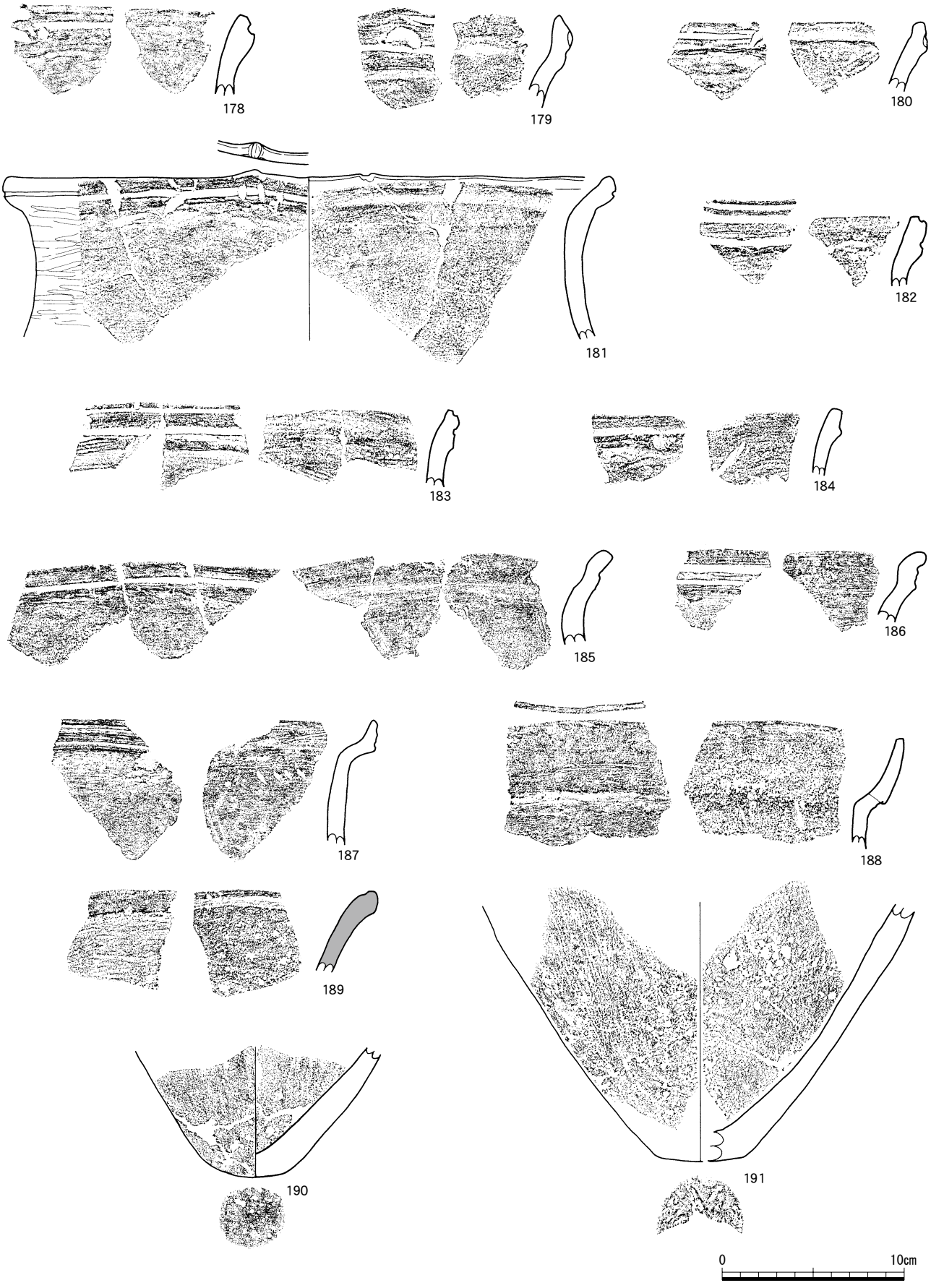
192は推定口径47㎝・胴部最大径50.6㎝を測る深鉢形土器である。丸みのある胴部から内側に屈曲し，やや内反気味に胴上部は立ち上がる。頸部で外側に大きく屈曲し，わずかに内湾気味に外開きする口縁部に至る。口縁部は低い段をもって肥厚しているが，文様は施されない。



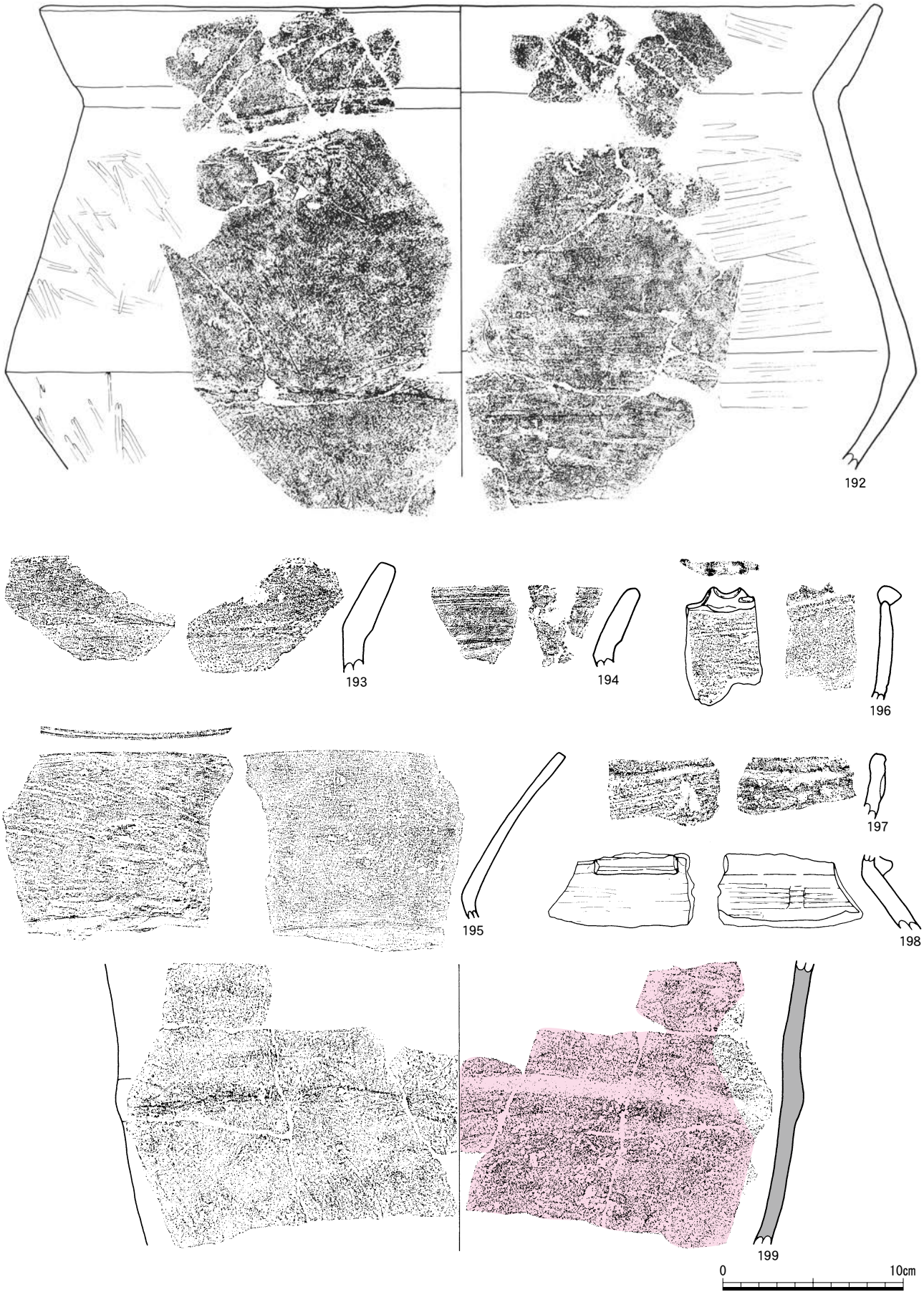
第79図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑤

胴部屈曲部の外面および頸部屈曲部の内面には，明瞭な稜が入る。器面調整は内外面ともミガキによるものである。以上の特徴から，入佐式土器の中でも古段階から中葉段階におかれると思われる。193は頸部と口縁部肥厚帯が「く」字状にやや屈曲するもので，内面の稜がはっきりしている。口縁部肥厚帯には文様はなく，横方向の丁寧なナデ仕上げである。193の口縁部肥厚帯の幅が４㎝であり，194は３㎝である。形状は入佐式土器古段階に近いが，色調や胎土は中岳Ⅱ式土器に共通する。194は頸部で外側に屈曲し，口縁部は段をもって肥厚させてある。文様が施されないが，入佐式土器の古段階と共通する器形である。

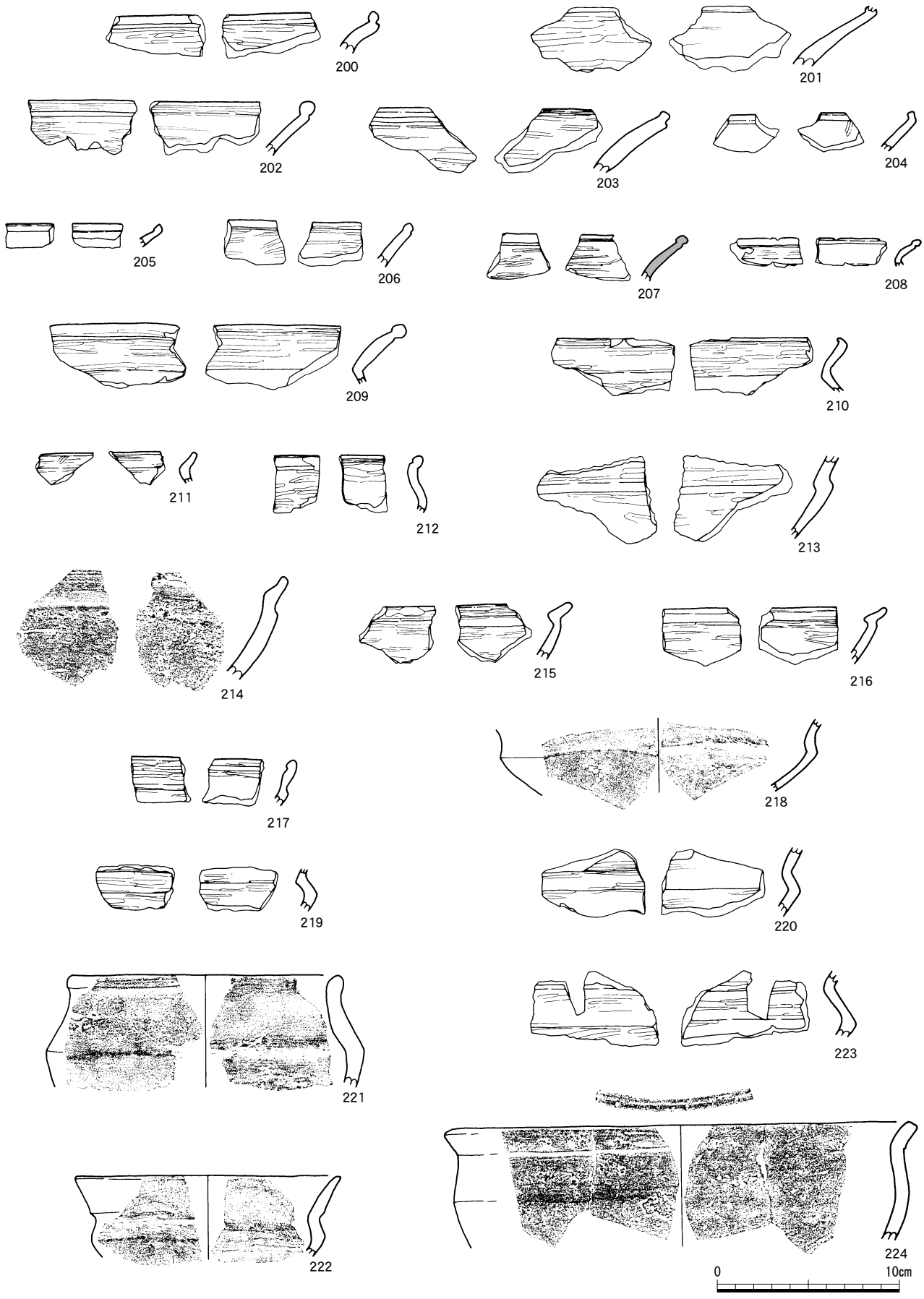
195は屈曲した頸部からわずかに外反する長めの口縁部である。頸部境にわずかな段がみられるが，器壁が厚くなることはない。外面は粗めの，内面は丁寧な器面調整である。入佐式土器新段階から黒川式土器にかけての深鉢形土器と思われる。196はわずかに内湾する口縁部で，口唇部にリボン状の突起をもつ。内面は丁寧なナデで，外面は横方向の貝殻条痕であり，煤が付着する。黒川式土器の中でも新しい要素をもつ。197は口唇部内外面を丸く肥厚させ，さらに口縁部肥厚帯がある。口縁部肥厚帯の一部を「人」字状に削り取り，三叉文風につく



第80図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑥



第81図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑦



第82図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑧

る。黒川式土器の新しい方もしくは，さらに新しい土器と考えられる。198は頸部に横長の突起がつくものである。器面調整はミガキ様のナデである。深鉢形土器に突起が付くようになるのは，入佐式土器新段階から黒川式土器にかけてと考えられているので，器面調整が丁寧であっても時期的には新しくなるものと思われる。199は胴部やや上位で角度をつけずに屈曲するもので，内外面ともミガキ様のナデによる調整である。胎土には金色の雲母が多く含まれる。内面に濁橙色の付着物がみられるが，分析の結果，鉄分をピークとする鉱物結晶が観察され赤色物を保管していた可能性もある。特徴的な部分がないので明確には言えないが，屈曲が弱いこととミガキ様のナデ調整であることから，入佐式土器の新しい頃から黒川式土器にかけてのものであると考えられる。

浅鉢形土器：上加世田～入佐式土器（第82図200 ～ 224）

200は外反する頸部から，丸みを帯びて立ち上がり口縁部へ至る。外面に深く鮮明な凹線を巡らす。上加世田式土器の要素をもつが，色調や胎土が中岳Ⅱ式に近い。201は口縁部が長く延びるもので，口縁端部のみ内外面が凹線状となり丸く仕上げる。202は外反する長い頸部をもつもので，端部を内側に曲げて断面円形の口唇部をもつ。外面の屈曲部は凹線状となる。203は外反する長い頸部をもつもので，口縁部を丸く立ち上げる。外面の屈曲部は凹線状となる。204は口縁部が立ち上がり，外側が浅い沈線状となる。205は口縁端部のみを内側に屈曲させる。外面の沈線は口唇部と一体となる所に巡らす。206は頸部からそのままの角度で口縁部に至り，外面のみ沈線状となる。口縁部の立ち上がりがなくなると，入佐式土器的な要素が強い。207は３㎝程延びる口縁部で，端部を屈曲させずに断面を鶏卵状に仕上げる。内外面は凹線状となる。208は頸部からそのままの角度で口縁部に至り，内外面が沈線状となる。209は頸部で屈曲し，外反する長めの口縁部をもち，端部は内外面を凹線状に仕上げ丸くなる。入佐式土器の中でも新しい要素である。210は短めに外反する頸部をもち，内側に折り曲げたように仕上げる口縁端部である。

211は短い口縁部が内湾気味に外開きするもので，薄くて小さい。212は頸部が屈曲ではなく，湾曲しながら短く開くものである。端部は内外面とも沈線状となる。入佐式土器の中でも新しい要素である。213は内湾しながら外開きする体部に，内側に屈強してすぐ外側に折り返す。

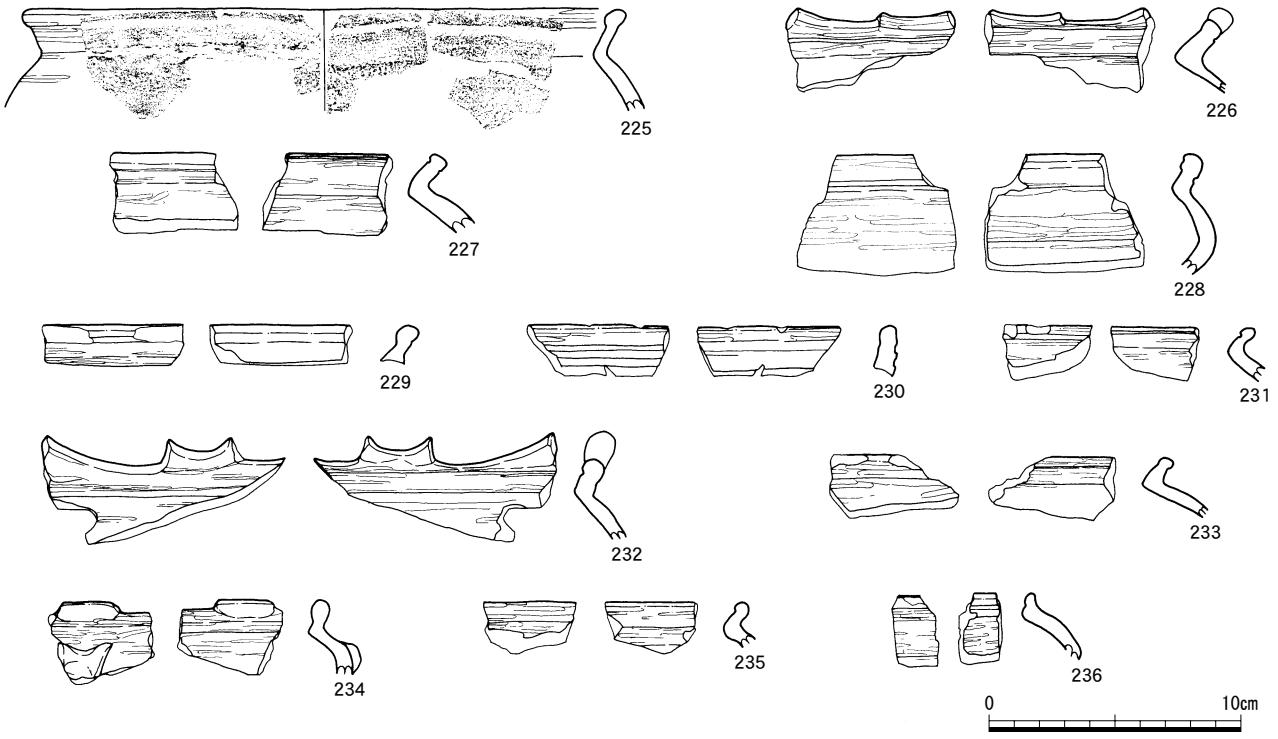
214は丸みをもつ胴部から内側に短く屈曲させ，外観上は外傾させて口縁部に至る。内面は頸部中程で屈曲し，口縁端部で内側に曲げる。厚みのあるつくりで，調整もやや粗い。上加世田式土器に近い。215と216は胴部屈曲部が最上端にあり，ごく短い頸部から強く屈曲して内湾気味に口縁部へ至る。入佐式土器に近い。217は内湾しながら開く椀形の浅鉢で，体部上位で内側に屈曲する。外観上は外側に屈曲して口縁部に至るように見えるが，ケズリ出している可能性もある。口縁部はやや肥厚し，内面に凹線を巡らす。218は丸く内湾する体部から稜をもって内側に屈曲し，さらに口縁部で外反するものである。内面頸部には稜が入る。219は体部上部で内側へ「く」字状に屈曲し，短い肩部をもって今度は外側へ「く」字状に屈曲する。頸部内面の下側にも明瞭な稜が入る。220は胴部で強く屈曲し，短い肩部がつく。肩部から頸部にかけての内側は丸く外反する。外面の頸部では段をつくるように稜が入る。223は胴部最大径で内側に屈曲し，頸部で外側に屈曲するものである。

221は内側に屈曲する体部をもち，頸部は外反する。口唇部は玉縁状に肥厚するものである。内外面とも丁寧なミガキによるものである。外面頸部には煤が厚くつく。上加世田式後半から入佐式土器の古いタイプに器形が近い。222は体部上部で内側に屈曲し，短い肩部がつく。頸部の屈曲は強くないが，外面には段状の境がみられる。内外面ともミガキによる。本資料は小型浅鉢形土器と考えられるが，入佐式土器古段階の深鉢形土器に器形が近い。224は胴上部で内側にゆるく屈曲させ，口縁部のみ外開きする。頸部と口縁部の境には段があり，区別することを意識している。深鉢形土器の器形に合わせると，入佐式古段階に相当する。外面は煤が厚く付着する。

浅鉢形土器：黒川式土器（第83図225 ～ 236）

225は丸みを帯びた肩部から２㎝程立ち上がる口縁部をもち，口唇部は丸く仕上げる。口唇部下の内外面は浅い凹線状となる。226は外側に屈曲した若干長めの口縁部をもつもので，鰭状突起の中央部にもう１つの突起をつける。赤色顔料を塗っていたと考えられる。227は若干長めの口縁部で，内面は凹線状，外面は沈線状のくぼみがみられる。228は丸みのある胴部をもち，頸部で「く」字状に外側へ屈曲する。口縁端部は内湾させて立ち上がる。内面は口縁近くが，外面は頸部近くが凹線状となる。229は短い頸部の割りには，外面が凹線状になる。230は頸部が内湾状になるもので，外面に凹線状が２条巡る。231は内面が深い凹線状となる。232は226と同様の形状で，鰭状突起が大きく，中央部の突起も蝶形をしている。肩部は丸みを帯びる。

233は236と同様の形状で，口縁部が若干長いものである。234は胴部が丸く張るもので，口縁部と胴部最大径の部分に突起を施すものである。235は胴部屈曲部が口縁部に近い位置にあり，短い頸部をもって強く外反し，口縁端部を丸く立ち上げる。236は胴部の丸く張る部分に稜が入るもので，口縁部は屈曲して短く立ち上がる。口縁部内面は凹線状となり，外面部分は形骸化している。



第83図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑨

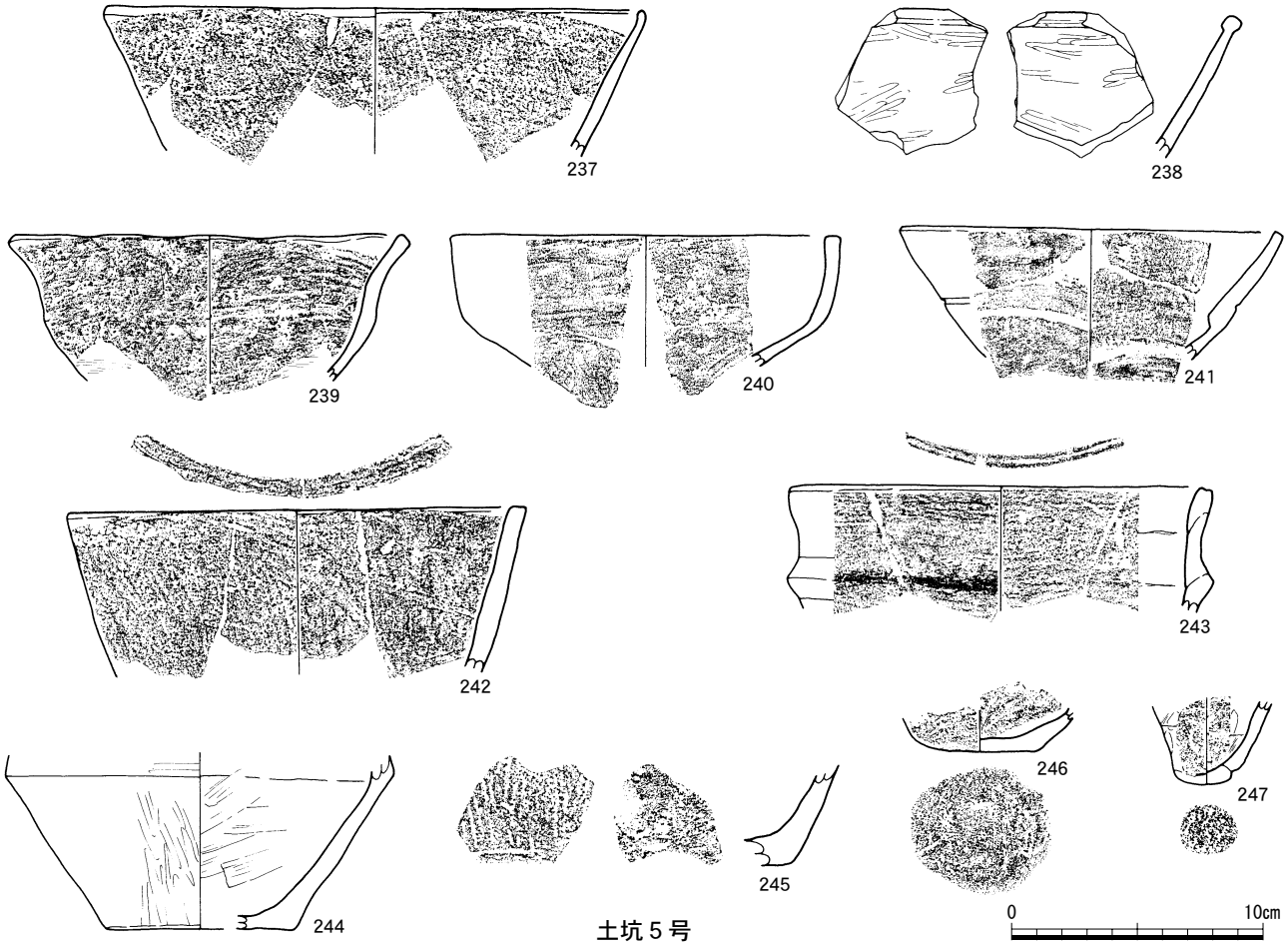
鉢形土器（第84図237 ～ 247）

237はやや内湾気味に外開きするもので，復元口径は21.5cmを測る。器壁の厚さは５㎜ほどで薄いが，器面の仕上げはやや粗く，口縁部にも歪みがみられる。外面に煤が付着する。上加世田式土器と考えられる。238は内湾気味に外開きするもので，口縁端部のみが丸く仕上げてある。体部下半の厚みと口縁端部の厚みが同一であることから，ケズリ出すことによって口縁部を成形した可能性もある。黒川式土器にみられる手法である。239は口径16cmの鉢形土器で，胴上部で内側にゆるく屈曲し，頸部から口縁部は弱く外反する。外面には煤が付着する。突帯文期の可能性もある。240は口径15.5cmで腰部から直行する口縁部をもつ。口唇部は平らに面取りする。色調や胎土は中岳Ⅱ式土器に近い。241は内湾気味に外傾する体部に，内側から口縁部を貼り付けるものである。接合部の内側は段となり，外側には凹線を巡らす。口唇部は平らに面取りする。器形的には入佐式土器に通じると考えられる。242はほぼストレートに外開きするもので，復元口径は18.2cmを測る。口唇部を肥厚気味につくり，平らに面取りする。器壁の厚さは６㎜である。外面には煤が付着する。243は屈曲部から大きく外反して口縁部に至る。屈曲部および口唇部共に丸く仕上げる。244は底径7.6cm，胴部屈曲部径15.4cmで，ほぼ外傾する体部をもつ。器面調整は縦方向のミガキ様ナデである。底部が安定していることから，突帯文期以降のものである。

245は平底から直線的に外傾する体部をもつ。底部側縁に沿って１条の沈線が巡る。外面の器面調整は縦方向のミガキである。土坑５号で出土したものである。底部側縁に沿って沈線を巡らす浅鉢形土器は縄文時代晩期後半の干河原式土器の特徴であるが，干河原式土器の側縁は丸みを帯びている点が異なる。なお，佐賀県唐津市菜畑遺跡出土品には，突帯文期に同様の沈線を巡らす底部もみられることから，本資料も突帯文期の可能性がある。246は膨らみのある底部で，大きく開きながら立ち上がる鉢形土器と思われる。成形や器面調整はやや粗い。縄文時代晩期後半の干河原式土器の浅鉢形土器であるならば，丁寧なミガキに1条もしくは２条の沈線が巡るのが，本資料との違いである。しかし，形状が似ていることから，この時期に置いた。247は底径2.3cmを測る小型の手づくね土器であり，接合痕が認められる。どの器形を模倣しているかどうか不明である。

甕形土器　刻目突帯文土器（第85図248～第88図260）

248はわずかに内湾気味に外開きする甕形土器である。口縁部下１cmほどの部分に太めの突帯を巡らし，指頭による刻目が施される。器面調整は，内外面ともミガキ様のナデによるものである。胎土には透明の鉱物が目立ち，中岳Ⅱ式土器の系譜を引き継いだ刻目突帯文土器であると考えられる。付着炭化物を年代測定した結果，補正年代でBC.695 ～ 540の年代値が得られた。明確な



第84図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑩

一条突帯甕は本資料のみである。

249は，ほぼストレートに外傾する胴部から，下部突帯で内側に屈曲し口縁部に至る。口径は38.5㎝，下部突帯での径は39.6㎝を測る。屈曲の角度は約150°である。口縁部突帯は口唇部に接して貼り付けられ，丁寧にナデつけられている。突帯上の刻目は，上下とも貝殻腹縁のような工具によるものであり，刻目がつぶれている状況により左から右方向へ刻まれていると考えられる。内外面の器面調整は，板状工具による丁寧なナデである。250は屈曲のない二条突帯甕で，上部突帯は口唇部に接している。刻目はヘラ状工具で施す。下部突帯より下に煤が付着する。251は口径40.4㎝の刻目をもつ二条突帯甕である。内面に小さな空間がいくつかみられるが，今回はモデリングをつくる余裕がなかった。

252は屈曲がなく口縁部付近だけ内湾する二条突帯甕である。上部突帯は口唇部に接し，一体化している。刻目は棒状工具による。器面調整は粗めのナデによる。253は屈曲のない二条突帯甕で，外面はミガキ様のナデである。254は土坑８号で出土したものである。下部突帯のみの破片であり，ゆるく内湾する胴上部に下部突帯を巡らす。内面の調整はケズリであり，外面はナデによる。

255は下部突帯部分で，刻目を「ハ」字状に施す。土坑５号の出土である。256は二条突帯甕で，上部突帯は口唇部と一体化している。刻みは間延びしているが，２本単位で「ハ」の字状に施す。257は復元口径30㎝，胴部最大径30.6㎝の二条突帯甕で，刻目は「ハ」の字を意識している。258は下部突帯で屈曲する二条突帯甕で，上部突帯は口唇部と一体化している。刻みは１本単位で「ハ」の字状に施す。259は突帯上に多条沈線による「ハ」字状の刻みを入れる。土坑１号の出土である。260は突帯上に２本を単位とする沈線で「ハ」字状の刻みを入れる。土坑１号の出土である。

孔列文をもつ甕形土器（第89図261～第91図270）

261は口径43.8㎝，胴部最大径46㎝の屈曲する二条突帯甕で，上部突帯は口唇部に接し，棒状工具で刻目を施

す。上部突帯からやや下がったところに孔列文を巡らす。胴部外面の中程に煤が付着する。付着炭化物を年代測定した結果，補正年代でBC.695 ～ 540の年代値が得られた。262は内傾する口縁部に，肥厚した口唇部がつく。刻目は施さず，くびれ部には太めの孔列文が間隔をおかずに深く施される。内外面とも横方向のケズリによるものである。263は口縁端部を外反させ刻目を施し，孔列文を巡らす。土坑５号の出土である。264は屈曲のない二条突帯甕で，上部突帯は口唇部と一体化する。孔列文は深く刺突し，内側に粘土が盛り上がっている。265は屈曲はなく口縁部付近だけ内湾する二条突帯甕である。上部突帯は口唇部に接し，一体化している。刻目は棒状工具による。上部突帯の下に孔列文を施す。下部突帯下には無意識に付いた凹みがみられる。器面調整は粗めのナデによる。土坑２号の出土である。

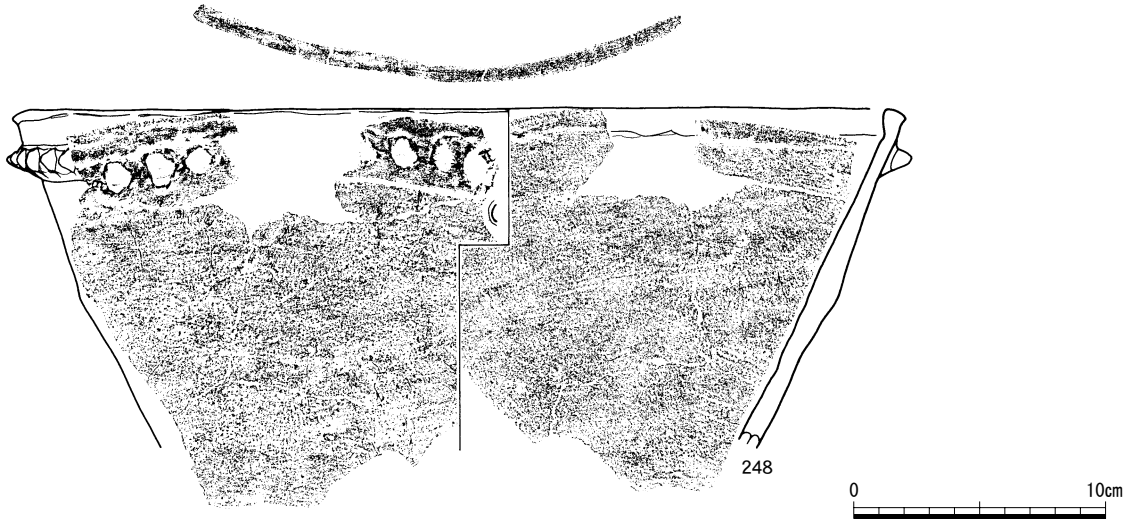
266は二条突帯甕で上部の突帯は口唇部よりやや下がった位置に巡らす。刻目は鋭いヘラ状工具を２本単位で「ハ」の字状に施す。上部突帯の下には円形刺突具による孔列文を巡らす。孔列文の２つおきに頂点をもつ鋸歯文が，２本沈線で下部突帯まで描かれる。孔列文･「ハ」の字刻目・鋸歯文を同時にもつ希少な例である。外面には煤が付着する。267は二条突帯甕で上部の突帯は口唇部より17㎜ほど下がった位置に巡らす。上下をつなぐ縦方向の刻目突帯や鋸歯文も同一個体内にある孔列文土器である。268は口径33.4㎝・胴部最大径36㎝を測る二条突帯甕である。口縁部は内湾し，上部突帯は口唇部に接して一体化している。刻目は棒状工具によるものである。間隔の開いた孔列文と横方向に間延びした鋸歯文が施される。上部外面には煤が付着する。269は，やや内湾するもので，口唇部と一体化した突帯には，２本単位による「ハ」の字状の刻目が施される。その下にやや間隔の開いた孔列文が巡る。270は薄手の刻目突帯土器で，口唇部より下に突帯を巡らせ，斜め方向にも貼り付ける。孔列文は浅く刺突する。

文様のある甕形土器（第92図271 ～第93図285）

271は刻目のある二条突帯甕で，突帯間に軸のある羽状文を描く。272は刻目突帯のある口縁部に，縦方向の沈線を入れ，横向きの鋸歯文を少なくとも３列描く。

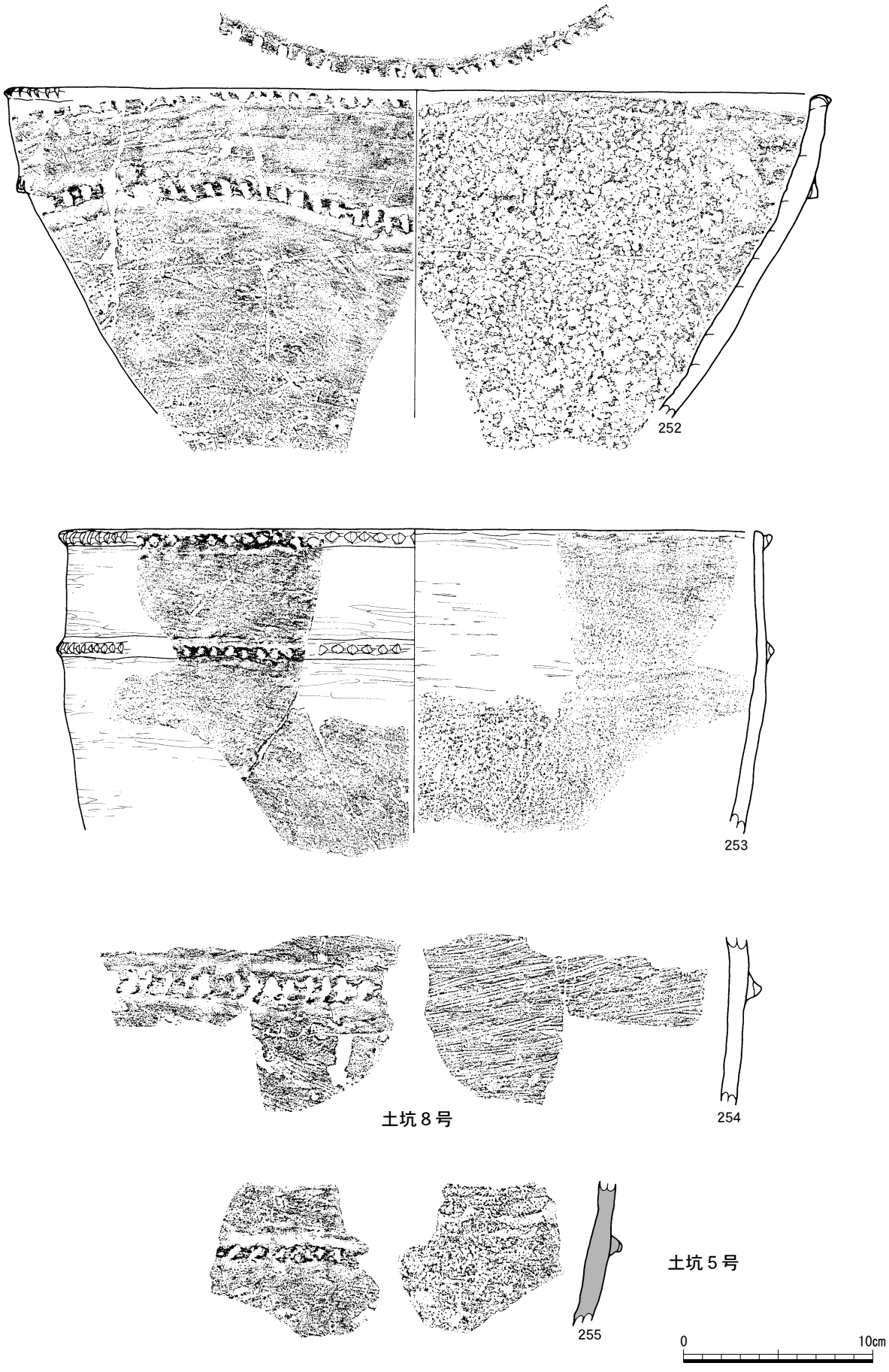
273は口唇部からわずかに下がった位置に突帯を巡らし，やや間隔を置いて細めの刻み目を施す。突帯下に単沈線の鋸歯文を施す。煤が付着する。274は口唇よりやや下がった位置に突帯が巡り，ヘラ状工具で密に刻みを入れる。３本の垂下する沈線の間に，羽状を意識した文様を描いている。胎土に軽石を多く含む。275は内湾する二条突帯甕で，細めの突帯に刻目を施す。突帯間に４本を単位とする沈線で鋸歯文を描き，その中にさらに２本もしくは３本単位で弧文を描く。外面には煤が付着する。雲母を含む。276は曲線を描く刻目突帯の両脇に沈線文を描く。

277は頂部のある二条突帯甕である。下部突帯で155°ほど屈曲し，口唇部に接して細めの突帯を巡らす。頂部から２本の突帯を垂下させ，全ての突帯には２本単位で「ハ」の字状に刻目を施す。器面調整は内外面とも横方向のミガキによるものである。内外面に炭化物が付着する。278は277と同一個体とも考えられるが，口唇部にも「ハ」の字状の刻みがあることから，別個体として扱っている。279は細い刻目のある突帯を窓枠状に施す。下部突帯上位に付着した炭化物を年代測定した結果，補正年代でBC.540 ～ 500の年代値が得られた。280は２条の突帯をもつもので，刻目を施す。上下の突帯を繋ぐように２条の無刻目突帯が垂下する。281と282は口唇部外縁をわずかに張り出させ，粗めの刻目を入れる。下部突帯との間には，鋸歯文を意識したような刻目突帯が連

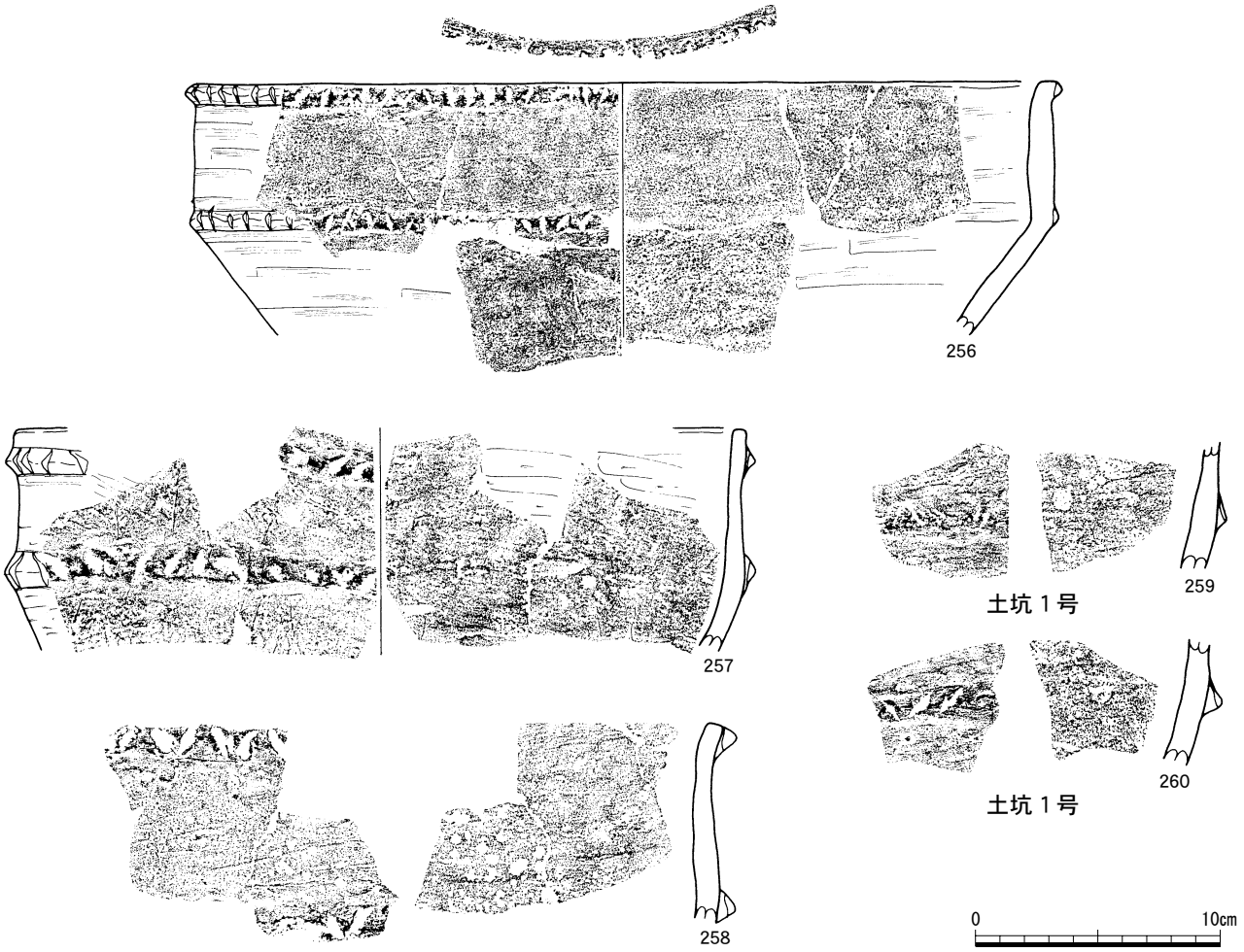


第85図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑪

第86図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑫



第87図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑬



第88図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑭

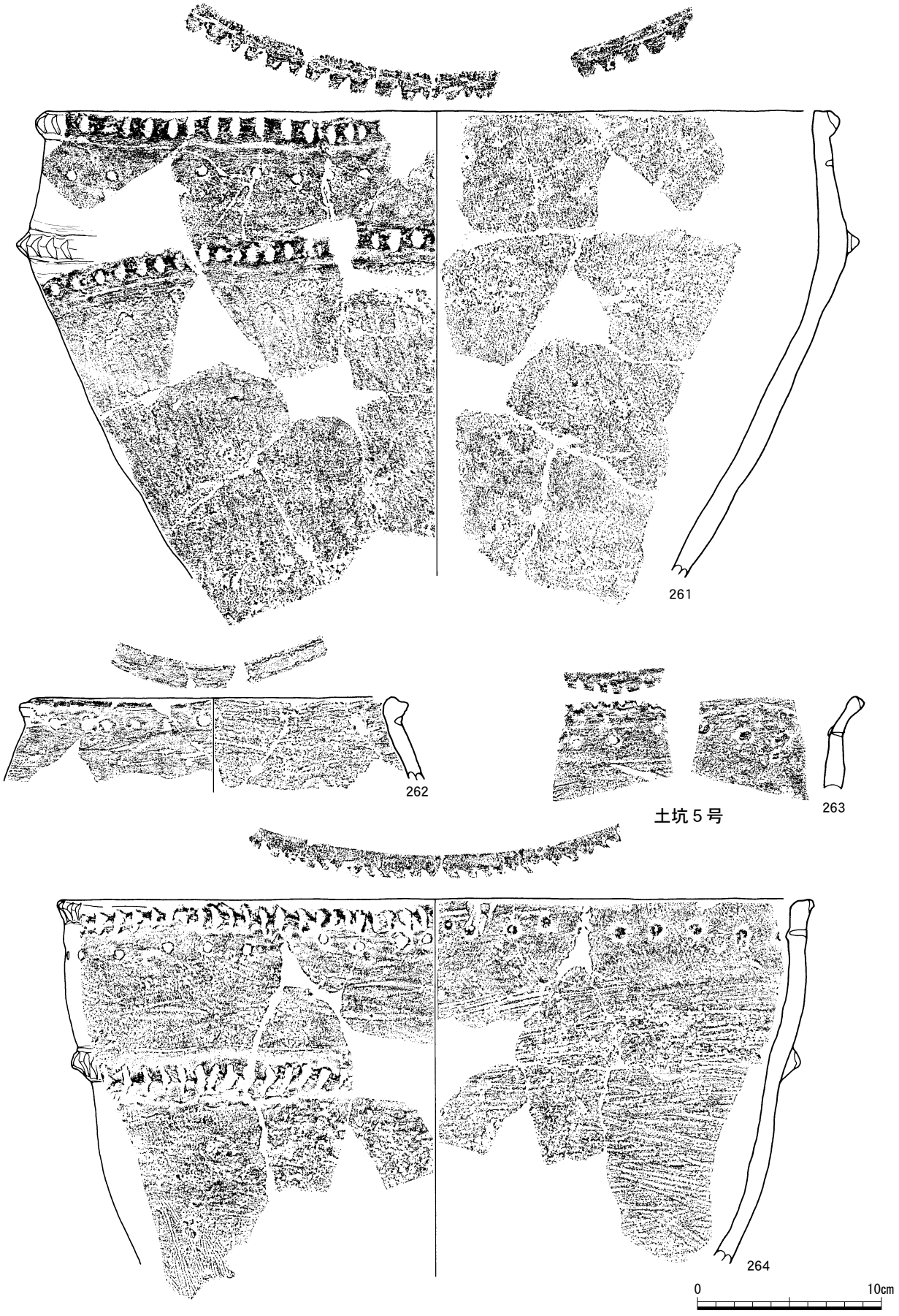
続している。283は，わずかに内湾する甕に口唇部と一体となった刻目突帯が巡り，同じ刻目突帯で曲線的な文様を描く。

284は細めの刻目突帯をもつもので，２本を単位とする突帯で上下の突帯を斜位につなぐ。285は細めの刻目突帯を横方向にも縦方向にも貼り付けるものである。器面調整はミガキ様のナデで下から上に施す。胎土に軽石粒を多く含む。

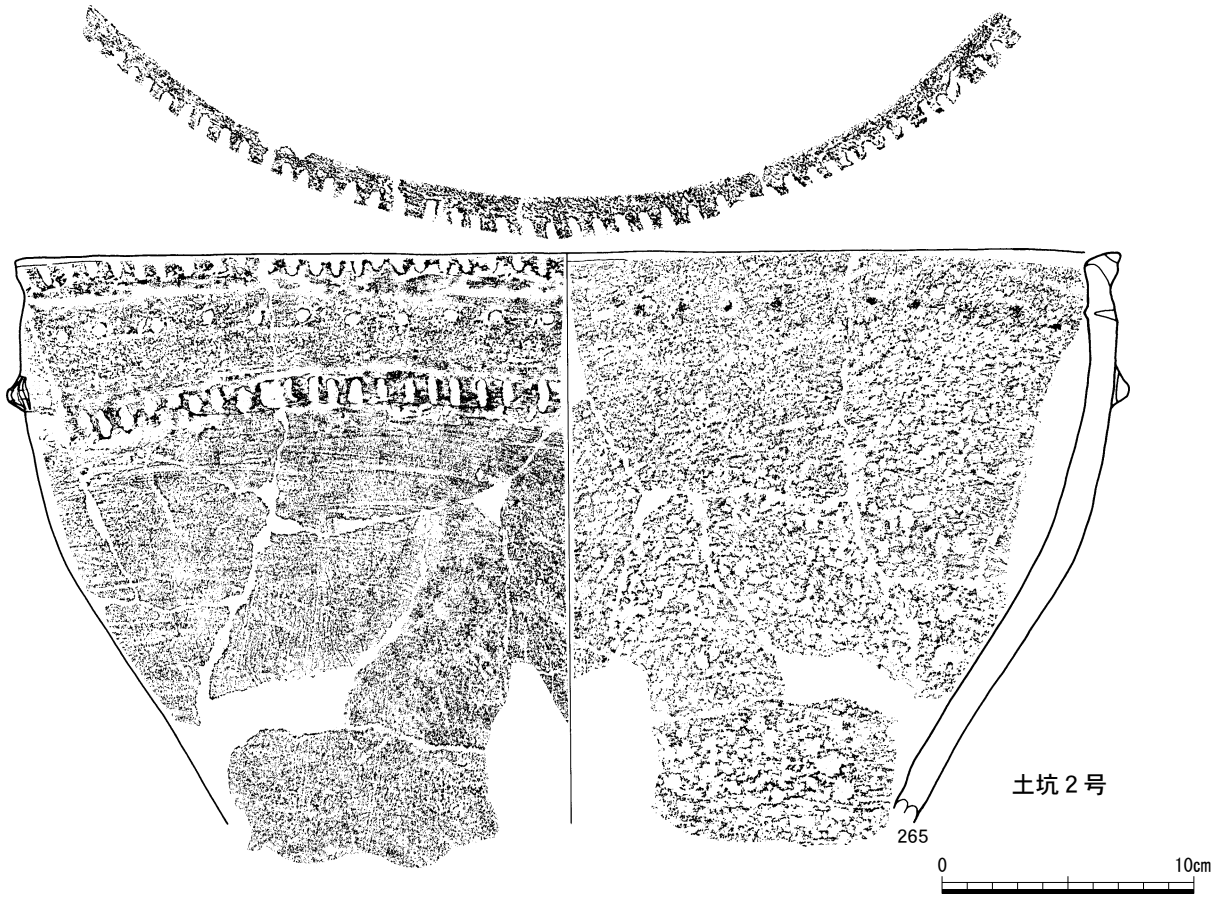
無刻目の突帯をもつ甕形土器（第94図286 ～第95図303）

286は強い屈曲部を突帯風に成形するもので，頸部は大きく外反する。口縁部は外側に折り返し状とし，口縁帯様に段が付く。287は屈曲部と口縁下部に細めの突帯をもつもので，刻目をもたない。煤の付着はみられない。胎土は小石が多い。288は口径18.6㎝に復元できる無刻目の二条突帯甕であり，上部突帯は口縁部に接して貼り付ける。外面には煤が付着する。289は屈曲部に低い突帯を貼り付けるもので，口縁部は短く引っ張り出すことによって突帯風に仕上げる。290は無刻目の二条突帯をもつもので，上部突帯は口唇部と一体化している。回転穿孔による補修孔がみられる。291は復元口径25.5㎝で，ほぼ直行する口縁部をもつ。口縁部に接してややはね上がるような三角突帯を貼り付ける。貼り付け痕は上下とも明瞭である。刻目は施さず，下部突帯との大きさや高さの差はない。金色の雲母を含む。292は内湾する口縁部で，口唇部を内外に広く面取りし，刺突列点を２列施す。胎土に軽石を含む。

293の下部突帯はわずかに内湾した部分に高さをもって貼り付け，刻目はもたない。口縁端部を強く外反させることによって突帯風に仕上げる。内面のミガキは丁寧で平滑である。外面に煤が残る。294は，わずかに屈曲する部分を無刻目の突帯を貼り付け，口縁端部を肥厚させることによって突帯風に仕上げる。外面には煤が付着する。295は無刻目の二条突帯甕で，上部突帯は口縁部より１㎝下がったところに巡る。296は口径18.8㎝のほぼストレートに外傾する２条の突帯をもつもので，刻目は入れない。下部突帯部分は屈曲が無く，上部突帯は口縁端部から少し下がった位置に巡らす。内面も丁寧に磨



第89図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑮



第90図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑯

かれており，平滑である。外面に煤が付着する。297は，ほぼ直行する器形で，口唇部は面取りしない。胴上部に無刻目の突帯が巡る。器面調整は内外面ともケズリ様のナデである。

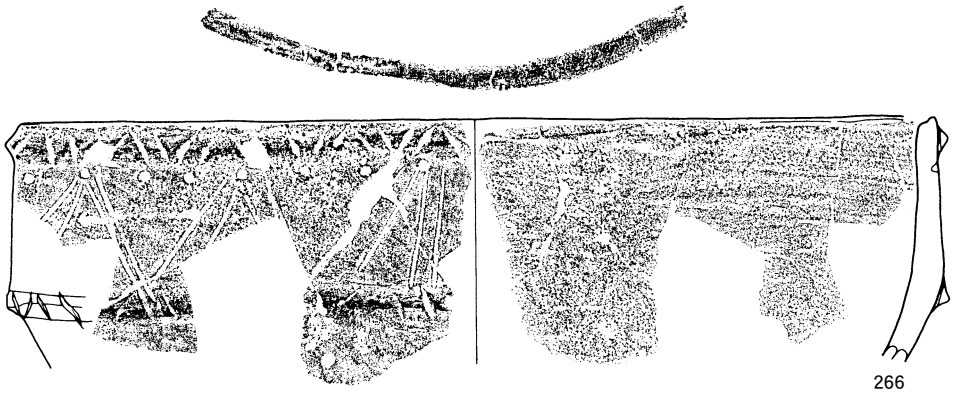
298は口径20.4㎝の内湾する器形である。口唇部に接して低い無刻目突帯から，「L」字状に突帯を貼り付け，窓枠状とする。外面に煤が付着する。299は刻目のない２条の突帯甕である。下部突帯では158°で屈曲し，上部突帯は口唇部と一体化して丸くおさめる。上部突帯の下側には沈線を巡らすが，一周はしていない。突帯間には２本単位の沈線で鋸歯文を描いている。外面には煤が付着する。300は上部突帯は口縁部から下がった位置で，下部突帯との間は狭い。口唇部はやや内側に向く。外面に煤が付着する。301は屈曲部で突帯風に仕上げるもので，上部突帯は口唇部より下がった位置に巡らす。

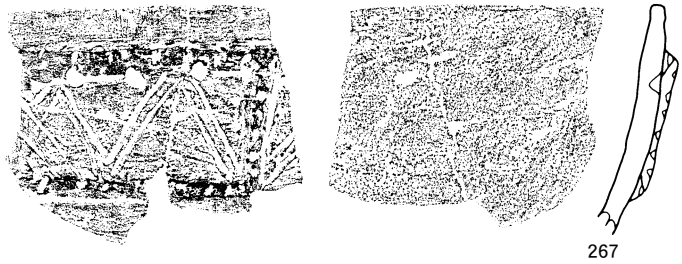
302は口唇部下に突帯を巡らし，下には弧状の突帯を貼り付けるものである。胎土に軽石粒を含む。303は，ゆるく屈曲する部分に無刻目の突帯をもち，口縁部は外側に引き上げ口唇部は斜めに平坦となる。内面も丁寧に調整され平滑である。

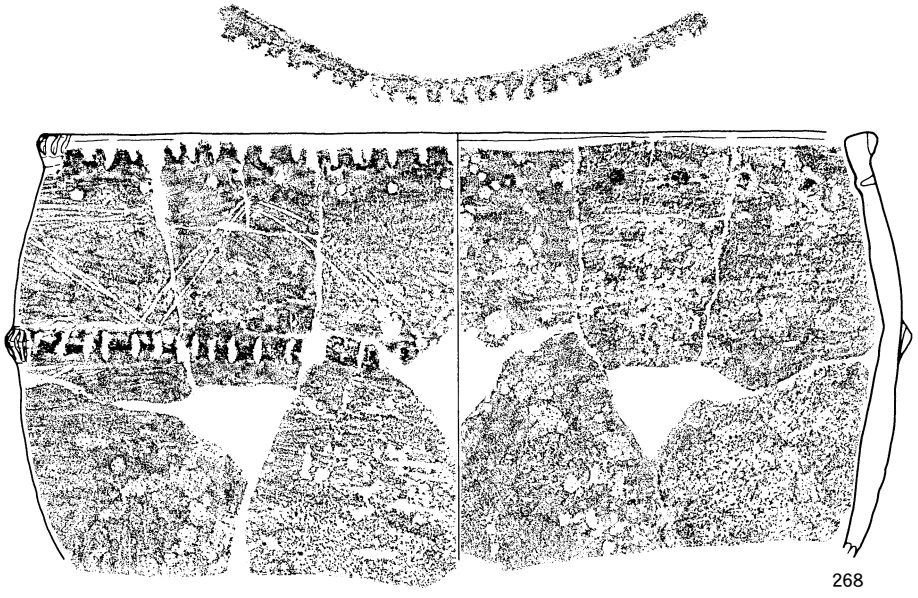
細めの無刻目突帯で文様を描く土器

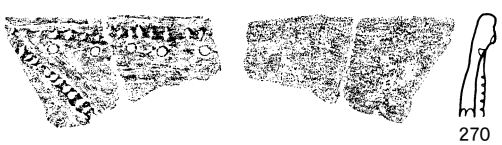
（第96図304 ～ 317）

304・305は，ゆるく内湾する器形で，低い突帯で文様を描く。２条の突帯間に２本を単位とする突帯で鋸歯文を描く。外面は丁寧に磨かれ，煤が付着する。306は波頂部をもつ器形のもので，下部突帯は断面カマボコ状となる。口縁部突帯は細めの無刻目で，口縁部に沿うものと垂下するものがある。307は無刻目の突帯で口縁部に文様を描く。308は波頂部をもつもので，無刻目の突帯を貼り付け三角形の窓枠をつくる。309は無刻目の突帯で文様を描くものである。310は少なくとも２本の無刻目突帯を口唇部を取りまくように貼り付け，口縁に接して横方向の突帯を貼り付ける。311は無刻目の細めの突帯を貼り付けるものである。煤が厚く付着する。312は無刻目の突帯で口縁部に文様を描く。313は２条の無刻目の突帯で文様を描くものである。314は無刻目の突帯が口縁部にみられるものである。また，正円の凹点も観察できる。315は無刻目の突帯を口縁部に沿って貼り付け，垂下させながら曲線を描き，下部突帯へ続く。内外面ともミガキによる調整であり，外面には煤が付着す

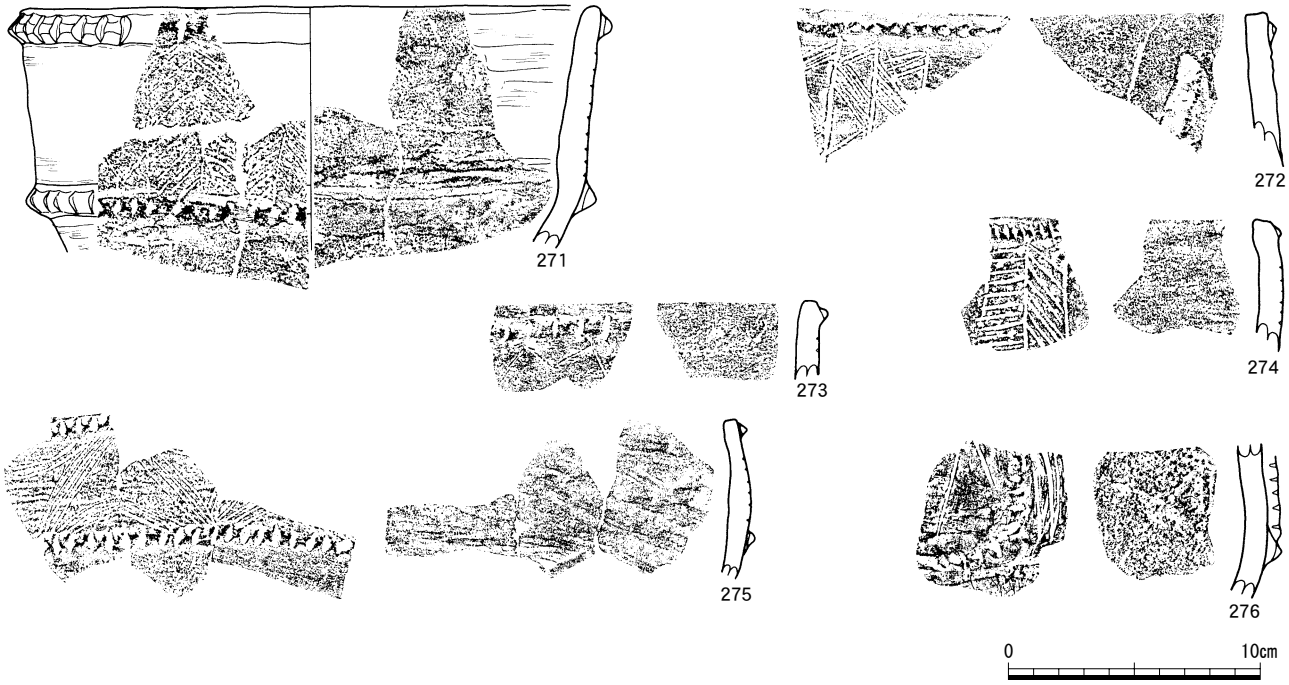








第91図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑰



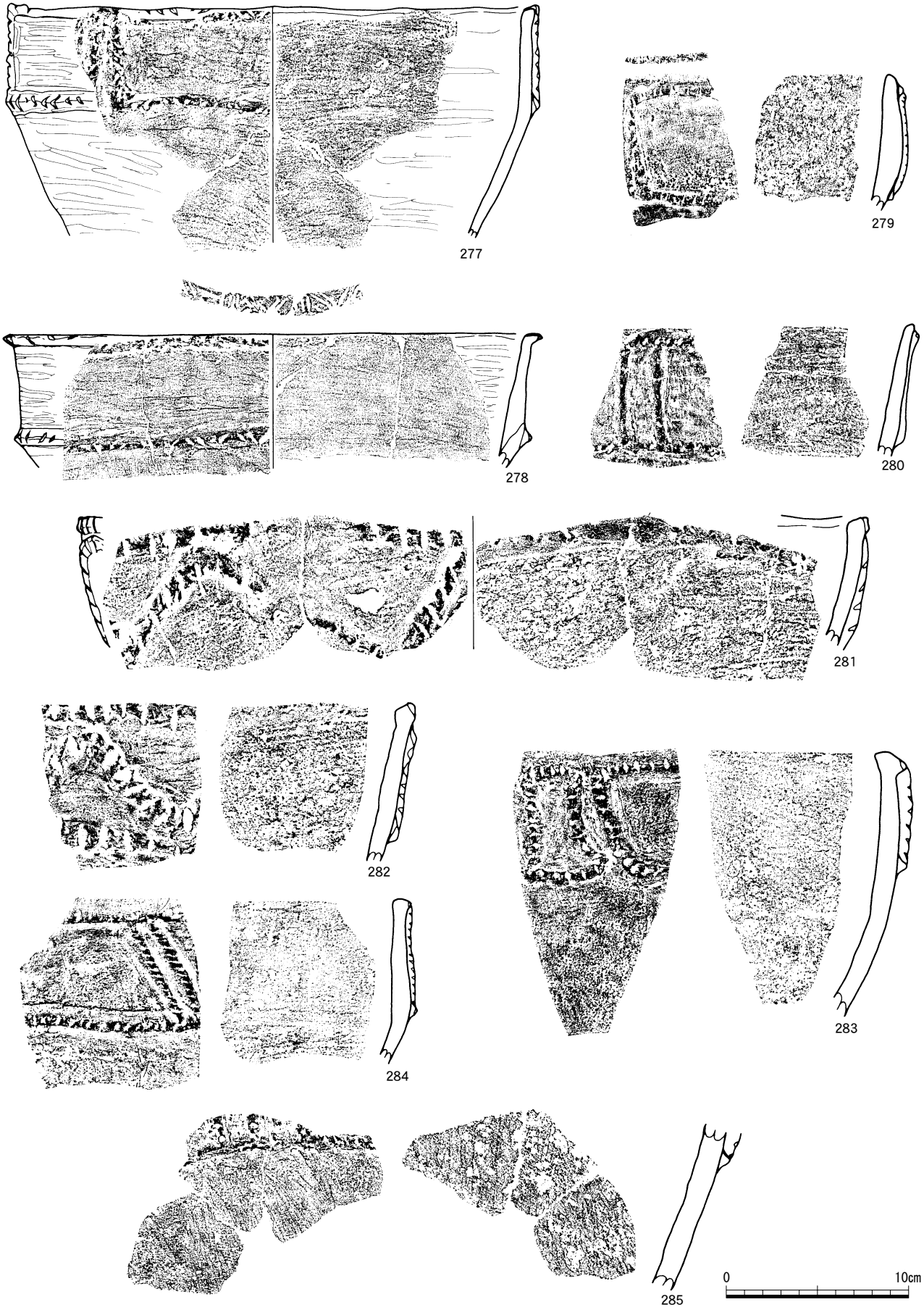
第92図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑱

る。316は無刻目の突帯が口縁部からカーブしながら垂下するものである。317は，わずかに内湾する口縁部で，口唇部と一体となった無刻目の突帯をもつ。外面の器面調整は横方向のミガキである。土坑５号の出土である。

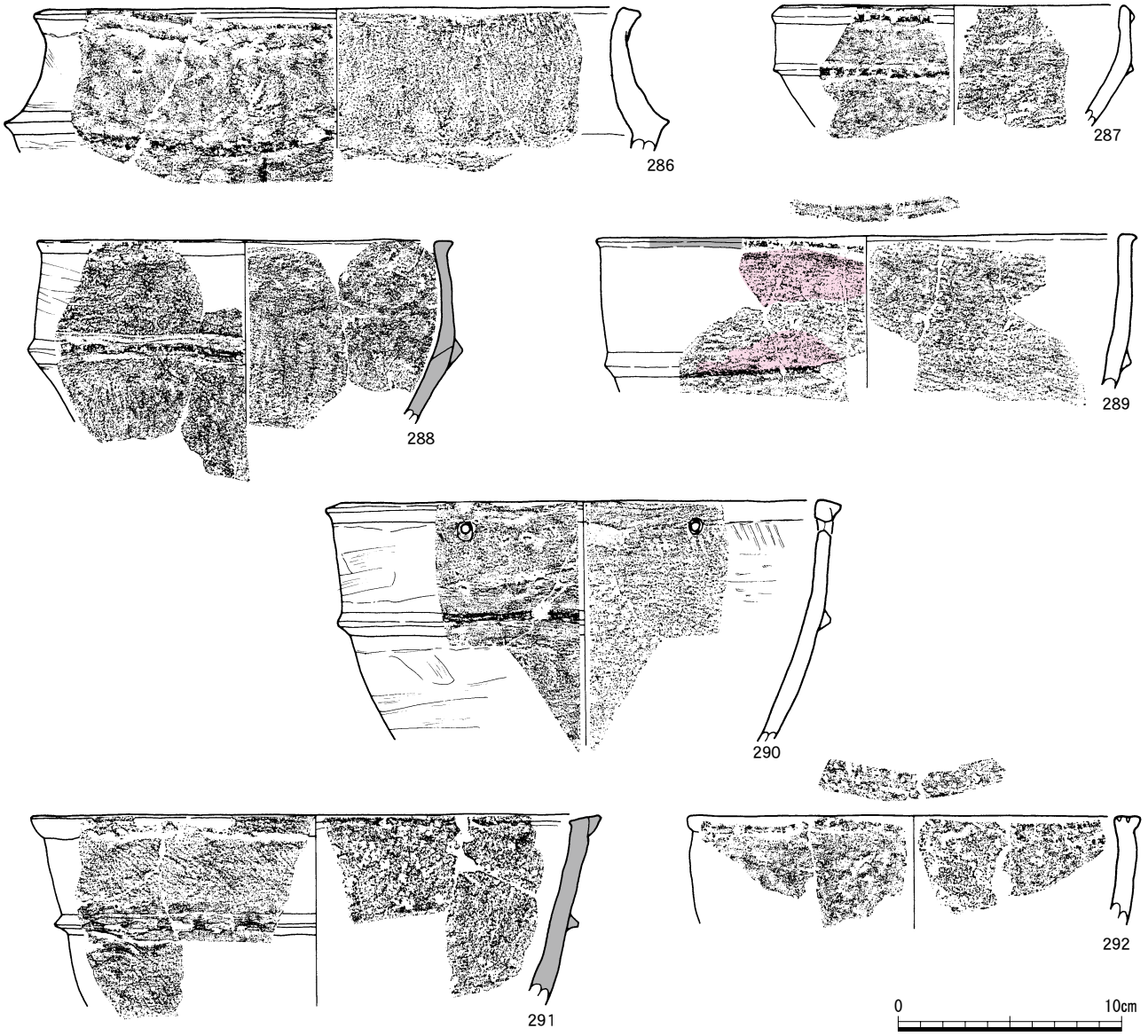
装飾のある鉢形土器（第97図318 ～ 337）

318は刻目のある二条突帯甕で，突帯間に３本を単位とする沈線で鋸歯文を描く。口唇部の一部には円形の突起を貼り付け，上面から刺突している。二条突帯甕に突起を施す例は希少であり，前時期の風習が残ったものと考えられる。319は外反する口縁部に２種類の突起が付くものである。１つは山形であり，もう１つが饅頭状の突起の上方から円形の刺突を施す。器面調整は内面がケズリ様のナデであり，外面も粗いナデである。320は２条の突帯をもつもので，上部突帯は口唇部から下がった位置にある。口唇部の一部には少なくとも３つの頂部をもつ突起が付き，上面から刺突してある。外面に煤が付着する。321は，わずかに内湾するもので，口縁部を丸く肥厚させる。低い山形の突起をもち，上面から円形の刺突を加える。322は，わずかに内湾する口縁部で，山形の突起の上面から円形の刺突を施す。外面は赤色に塗彩される。323は口唇部に接して無刻目の突帯を巡らすもので，一部に突起をつくり上方から刺突している。324は屈曲部と思われ，沈線間を突帯状に強調しており，一部に半円形の浮文を貼り付け円形刺突を施す。

325は上部突帯から垂下させた突帯の縦位部分には刻目は施さない。口唇部に瘤状の突起が少なくとも２つは付く。326は口縁部下の突帯以外に，鰭状突起から垂下させた突帯があり，空間を沈線文で埋めている。327は鰭状突起から垂下した突帯に刻目を入れ，少なくとも２本単位の沈線で山形文を描く。鰭状突起内面にも山形の沈線が入る。328は口縁部を１段肥厚させた上に突帯をもつもので，口唇部には突起を内側向きにつける。外面に煤が付着する。329は口縁部に鶏冠状の突起をもつもので，無刻目の突帯もみられる。330は，わずかに内湾する器形で，口縁部下に無刻目突帯を巡らす。口唇部には内面から巻きつけた突起が少なくとも４ヶ所にみられる。器面はミガキによる。331は内湾する口縁部で，口唇部下に突帯を巡らし，突帯上辺から口唇部内面にかけて細めの粘土紐を貼り付ける。内外面ともミガキ様のナデである。胎土に軽石を多く含む。外面には煤が付着する。332は胴上部でゆるく内側に屈曲し，ほぼ直行して口縁部に至る。口唇部には外面から内面にかけて２条の粘土紐を貼り付け，中央に凹線を入れた突起がつく。333は口縁部より下がった部分に無刻目の突帯を巡らすもので，口唇部には中心に向かって短い粘土紐を密に貼り付ける。胎土に金色の雲母を含んでいる。334は窓枠状の突帯の上に口縁部内面から延びた突起を貼り付ける。沈線および爪状の連点がみられる。胎土に軽石を含む。335は無刻目の突帯を口唇部内面から垂下させる。336は無刻目の突帯を縦横に貼り付けるものである。口唇部を取りまくように縦方向に貼り付け，口縁から下がった位置に横方向の突帯を貼り付ける。外面には煤が付着する。337は少なくとも３条の刻目突帯を口唇部内



第93図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑲



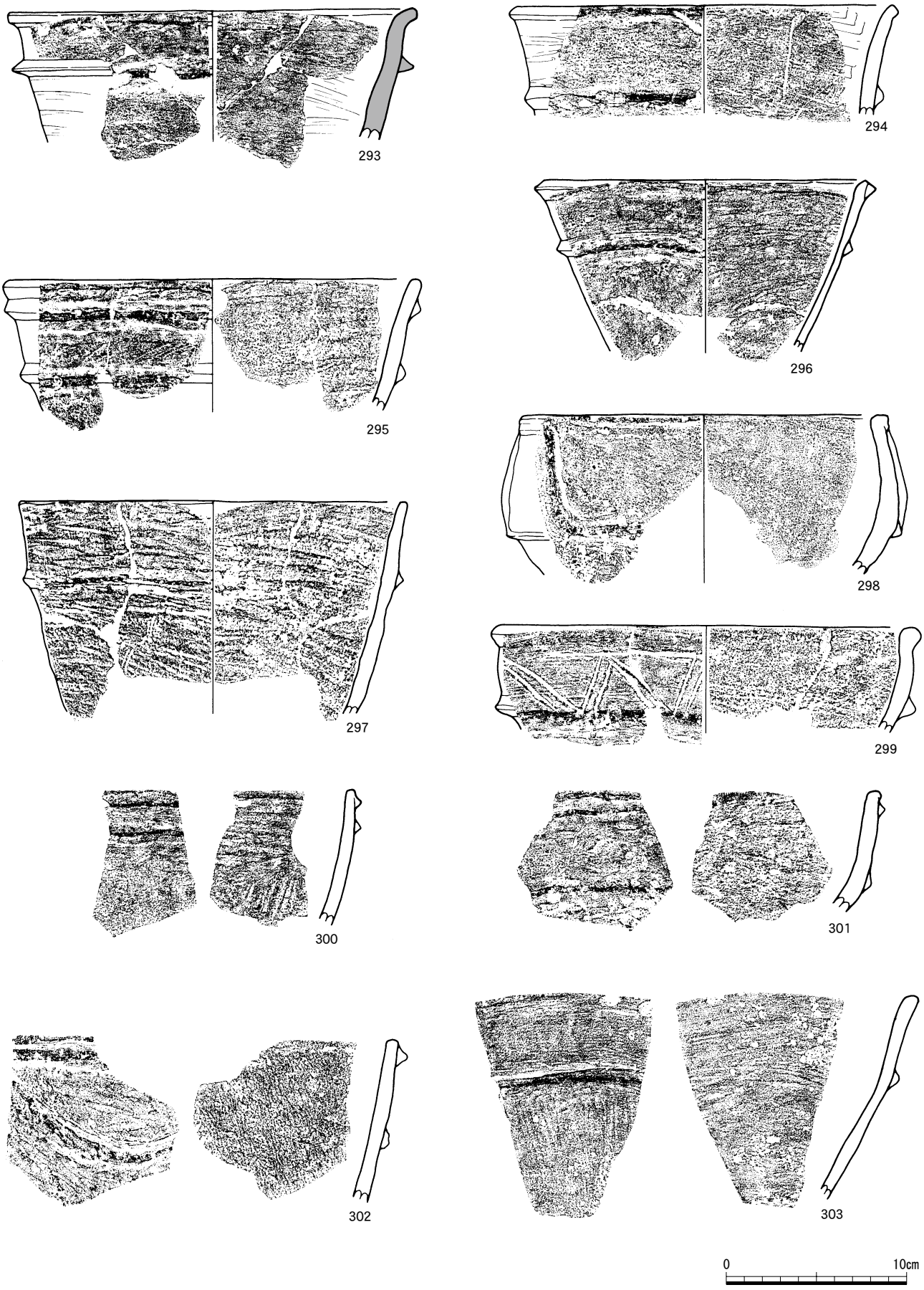
第94図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑳

面から口縁部外面にかけて，弧状に貼り付けるものである。胎土には軽石が含まれる。

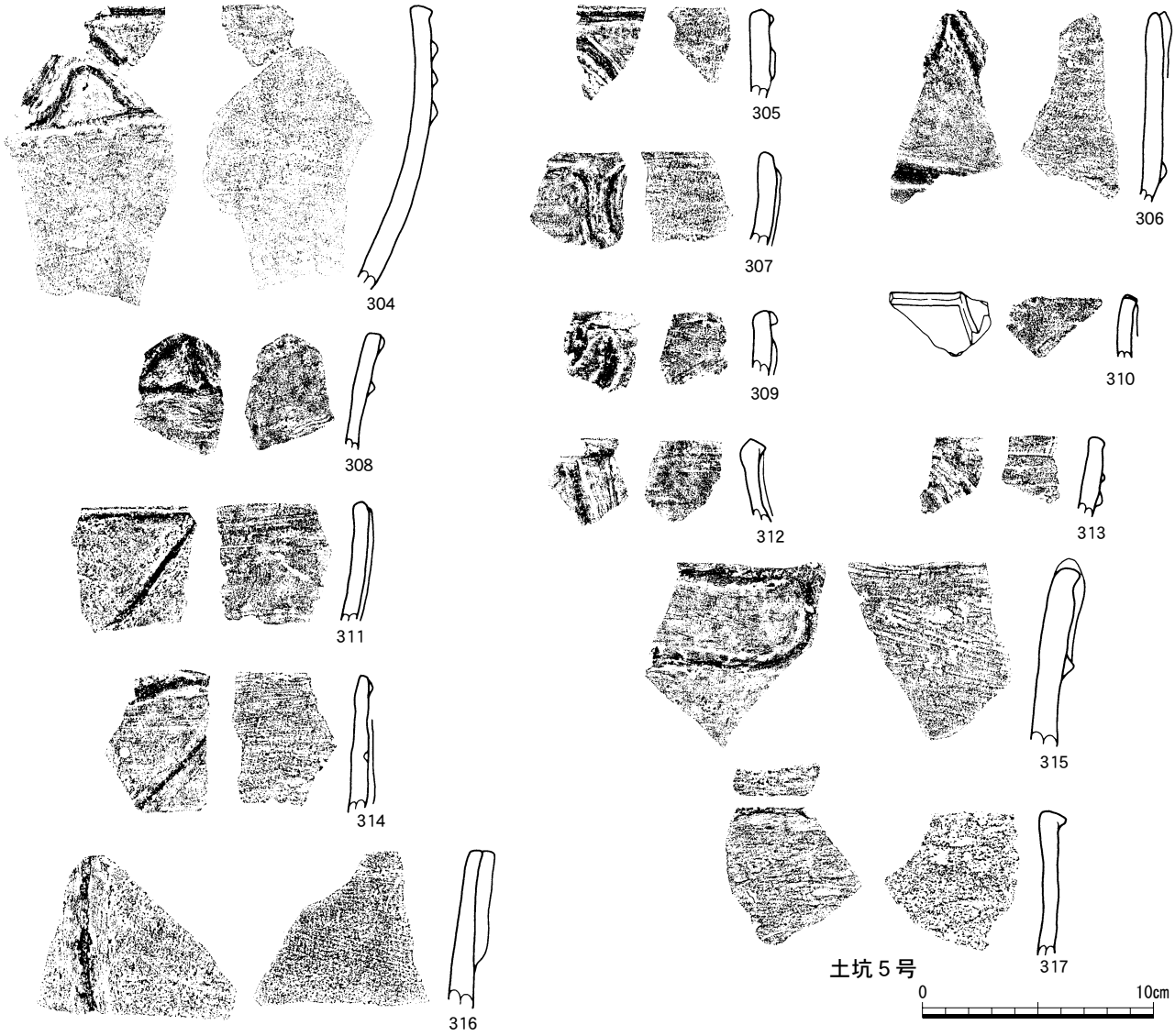
穿孔のある土器（第98図338 ～ 349）

338は，ほぼ直行して立ち上がる波状口縁で，太めの橋状把手がつく。把手上部から左側だけに突帯を貼り付ける。内面には鮮明な赤色粒子がみられる。339は口縁部からやや下がった位置に，縦方向の橋状の把手がある。穿孔工具は直径５㎜である。口唇部は平らに面取りするが，外面端部を張り出させる。340は２条の無刻目突帯の一部に縦長の貼り付けをもち，横から穿孔する橋状把手となる。穿孔工具の直径は５㎜である。341は口縁部に接して延びる縦方向の橋状の把手である。穿孔工具は直径５～６㎜である。口唇部は平らに面取りする。342は口縁部に接して延びる，縦方向の橋状の把手である。穿孔工具は直径４㎜ほどである。343は口縁部に接して延びる，縦方向の橋状の把手である。344は縦方向の橋状の把手であると思われる。

345は窓枠状の無刻目突帯の間に，縦長の貼り付けをもち，上面から穿孔する。穿孔工具の直径は４～６㎜である。346は横方向に突起を貼り付けるもので，上面から穿孔する。穿孔工具の直径は５㎜である。器面調整は縦方向のミガキである。胎土には金色の雲母を含み，色調も弥生時代の土器に近いが，弥生時代にも同様の器形はなく，とりあえずここにおいた。347は２条の無刻目突帯をもつものである。口縁部突帯の一部を広げ，上方から穿孔している。外面から口唇部にかけては赤色塗彩がみられる。外面に煤が付着することから，煮炊きにも



第95図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉑



第96図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉒

使われたと推察される。348は体部上半で内側に屈曲し，２条の突帯を巡らす。突帯の一部を広げ，上面から穿孔している状況も窺われる。口縁部に沿って２条の平行線と，口唇部に凹線を施す。これまで類例がないような文様構成である。349は２条ある突帯の頂部に，上面から両方を貫く穿孔を施すものである。穿孔工具の直径は2.5～3.5㎜である。

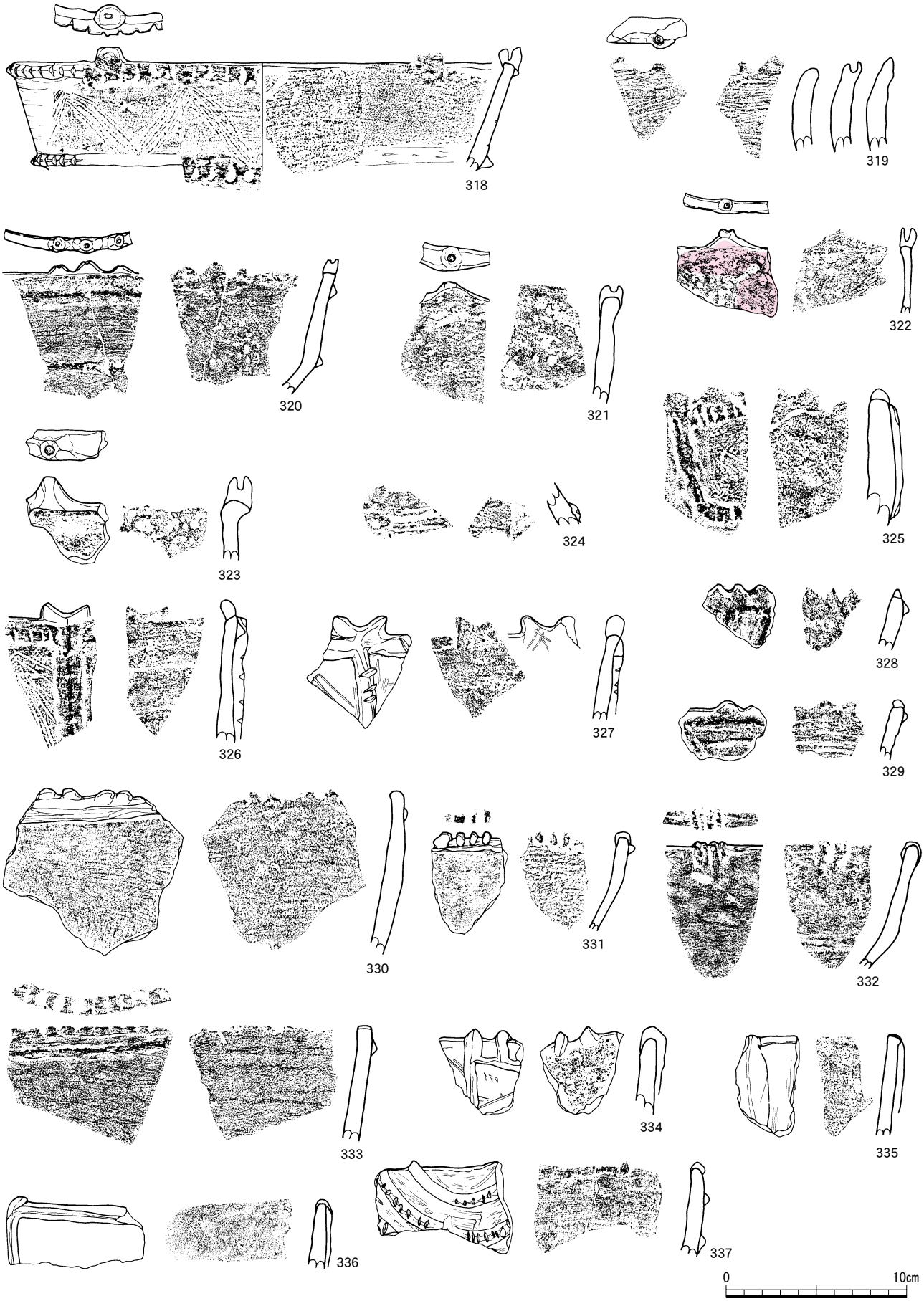
浮文のある土器（第98図350）

350は壺形土器の胴部屈曲部と考えられるもので，文様構成など他の土器と比べると異質である。一つには，胴部で屈曲する土器は南九州にはみられない点と，浮文による文様もみられない。また，細かく磨いてある点も異質な感じを受ける。隆帯上に沈線を入れた浮文で，弧を描いていることから，北部九州でみられる「隆線文土器」である。「隆線文土器」は，設楽博巳氏と小林青樹氏により，北陸から東北地方の影響を受けたものとして最近注目されている。

設楽博巳・小林青樹　2007「板付Ⅰ式土器成立における亀ヶ岡系土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第２巻　雄山閣

浅鉢形土器：突帯文期（第99図351～357）

351は屈曲部を突帯風に成形するもので，口縁部は外反させ突帯はもたない。２本の沈線によって鋸歯状の文様を描く。外面に赤色塗彩がみられる。胎土には小石が多い。352は屈曲部を突帯風に成形するもので，口縁上部を強く外反させることによって突帯風にみえる。外面



第97図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉓

第98図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉔

を赤色塗彩している可能性もある。353は屈曲部を突帯風に成形するもので，口縁部は短く折り曲げることによって突帯風に仕上げる。内外面とも丁寧に磨かれている。354は屈曲部を突帯風に成形するもので，口縁部には突帯はもたない。横長の鰭状突起を４対もつと想定され，鰭状突起間の口唇部には凹線を入れ，頂部はドーナツ状に仕上げてある。頂部下の屈曲部にも，突起がある。外面は赤く塗られている。推定口径は27.8㎝である。355は体部上部で内側に屈曲し，わずかに外反しながら口縁部に至る。窓枠状に貼り付けた無刻目突帯の間が波頂部となる。口唇部は凹線を施し，頂部には棒状工具による刻みを入れる。356は屈曲部を強く張り出させ突帯風に成形するもので，口縁部は強く外反することによって突帯風に仕上げる。屈曲部から口縁部にかけては，赤色塗彩が観察される。357は間隔を置いて２条の突帯を巡らすもので，上部は口唇部よりやや下にある。上部突

帯の上面接合面には沈線を施し，一部に突起をつける。外面は赤色塗彩を施す。

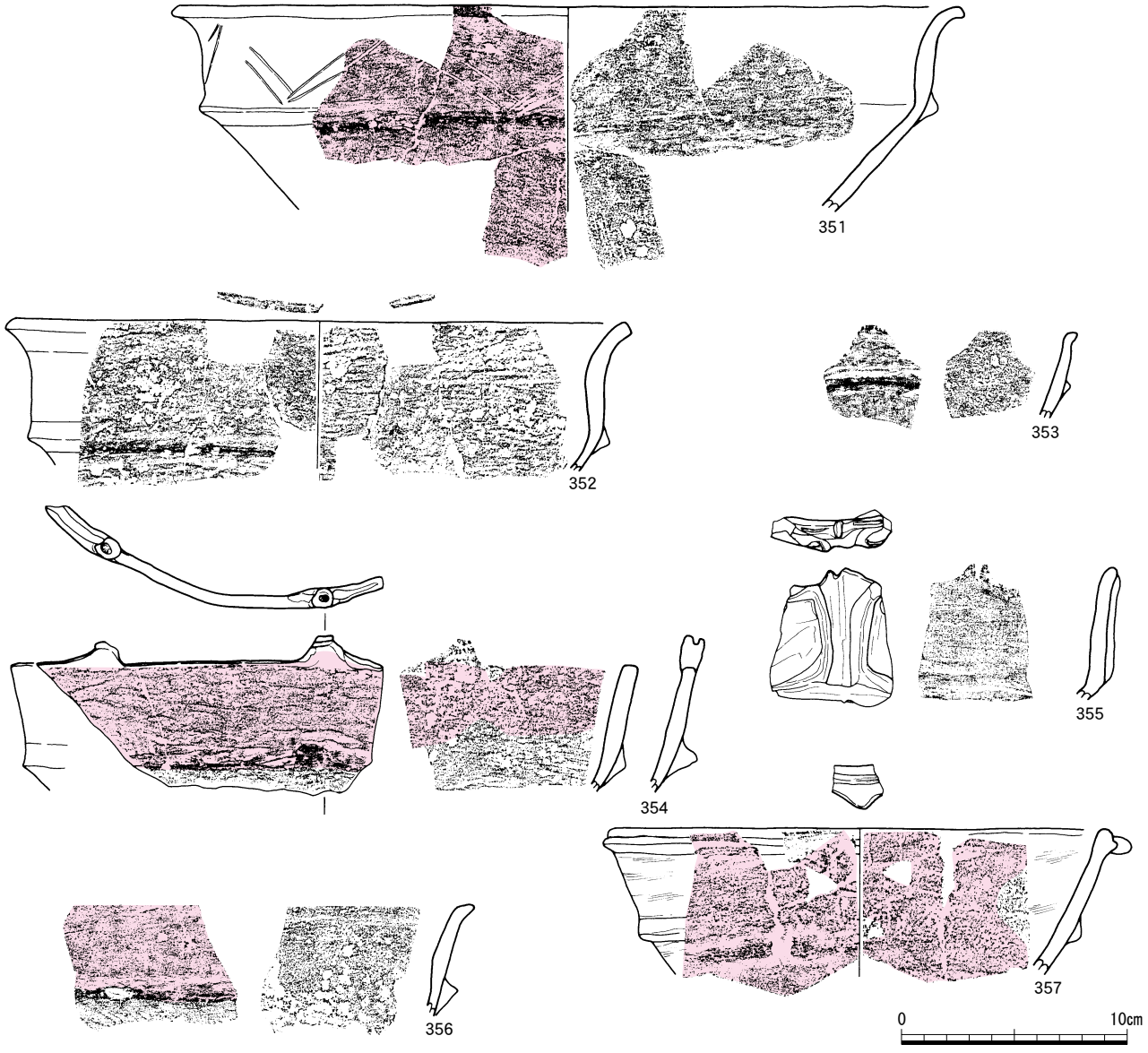
脚台（第100図358 ～ 368）

全形を知ることができないので確実なことは言えないが，脚台が付く鉢形土器や高坏であると思われる。弥生時代早期から前期にかけては坏部と脚部の境に断面三角形の突帯が巡るが，本遺跡の資料で確実に高坏と認められるものはない。

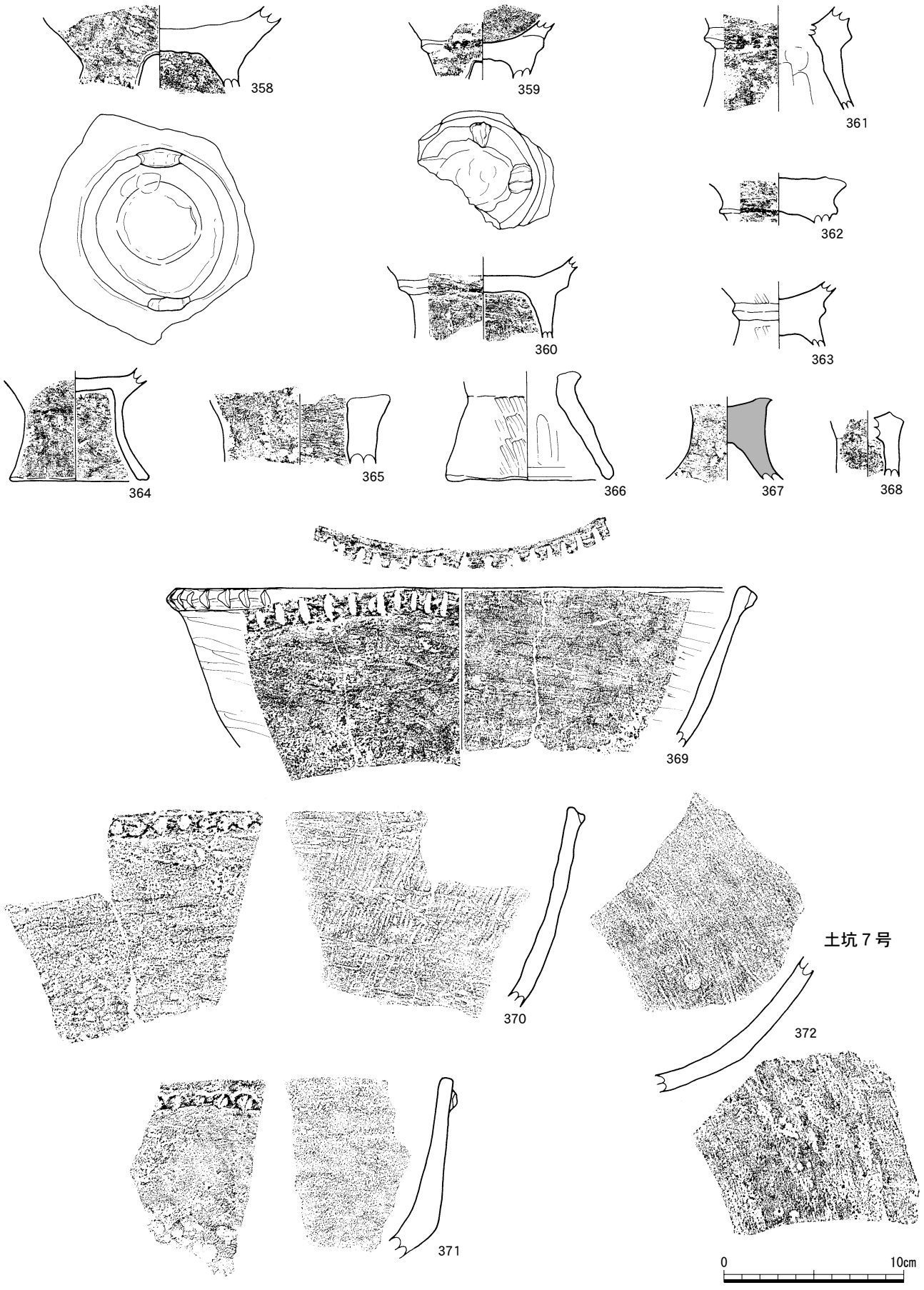
358は狭い部分で直径8.8㎝の安定した脚台で，少なくとも対角線上の一部に円形と考えられる透かしがある。359は狭い部分直径5.7㎝の脚部で，突帯が巡る。４ヶ所に透かしが入ると考えられる。透かしが入る脚台は，日置市吹上町の入来遺跡で出土しており，弥生時代前期末～中期初頭には確実にあるようである。これらの土器がどの段階のものなのか，口縁部までの接合を試みると共に，今後の類例を待ちたい。

360は狭いところでも直径7.6㎝の安定した脚部であり，体部との境に突帯が巡る。361は体部との境に突帯が巡る脚台である。362は体部との境に突帯が巡る脚台である。胎土に軽石を多く含む。363は体部との境に突帯が巡る脚台である。

364は上部の直径7.9㎝・底径7.8㎝・高さ6.2㎝の脚台で，裾が開く。内面に炭化物が残る。外面は丁寧なミガキである。365は直径10㎝の脚台で，体部との接着は水平である。366は上部の直径6.1㎝・底径9.4㎝で，高さ6㎝の脚台である。色調や調整方法は352などの浅鉢形土器に似るが，確証はない。367は脚くびれ部の径4.1



第99図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉕



第100図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉖

㎝の脚台で，ほぼ直立する。底面は上げ底としている。368は直径3.5㎝の細い脚台である。

中華鍋形土器（第100図369 ～第101図386）

内面は丁寧なミガキにより平滑であるが，外面はナデによる粗いもので，「半粗半精製土器」とも呼ばれるものである。外面に組織痕をもつものと組織痕をもたないものがあり，単に「組織痕土器」とは呼べないので，その形状から「中華鍋形土器」として扱う。

369は口縁部に接して１条の突帯をもつもので，棒状工具による刻目を施す。外面より内面の調整が滑らかである。内外面に炭化物が厚く付着しているので，組織痕土器と同様の用途と考えられる。370は口径が大きい割りには低い器形をなし，屈曲のある中華鍋形と考えられる。口唇部直下に突帯を巡らし，爪を含めた指先による刻目を入れる。内面はミガキ調整され滑らかで，外面には煤が付着している。組織痕そのものはみられないが，同様の用途と考えられる。371は口径が大きい割りには低い器形をなし，屈曲のある中華鍋形と考えられる。口唇部より下位に突帯を巡らし，爪を含めた指先による刻目を入れる。内面は丁寧に調整され滑らかで，外面には煤が付着している。組織痕そのものはみられないが，同様の用途と考えられる。372は土坑７号で出土したものである。内面は丁寧なミガキで平滑であり，外面は粗いナデである。組織痕はみられないが，中華鍋形の器形と用途をもつものと考える。

373 ～ 386は組織痕をもつものである。373は５～６㎜の目をもつ網目である。374は５㎜の目をもつ網目である。375は2.5 ～３㎜の細かな目をもつ網目である。

376の経糸は11㎜間隔で，緯糸は１㎝辺り５～６本の編布である。377の経糸は４㎜幅を２列と13㎜幅を１列繰り返すもので，緯糸は１㎝辺り６本の編布である。378の経糸は４㎜と９㎜間隔を繰り返すもので，緯糸は１㎝辺り６本の編布である。379の経糸は５㎜間隔で，緯糸は１㎝辺り７～８本の編布である。胎土に金色雲母を含む。380の経糸は12㎜間隔で，緯糸は１㎝辺り７本の編布である。381の経糸は12㎜間隔で，緯糸は１㎝辺り７～10本の編布である。382の経糸は6.5㎜間隔で，緯糸は１㎝辺り７本の編布である。383の経糸は８㎜間隔で，緯糸は１㎝辺り６本の編布である。384の経糸は12㎜間隔で，緯糸は１㎝辺り６～７本の編布である。胎土に金色の雲母を含む。385の経糸は６～ 7.5㎜間隔で，緯糸は１㎝辺り７本の編布である。

386は経緯１㎝辺り11本の繊維がみられる平織である。平織の組織痕土器は鹿児島市福山町のフミカキ遺跡をはじめとして，類例が少ないので貴重である。

壺形土器（第102図387 ～第104図415）

この時期の壺形土器の型式学的変遷は，胴部と頸部境および頸部と口縁部境の区別が明確でないものから明確なものへ，胴部と頸部境が段をもつものから，突帯あるいは沈線を巡らすものへ変わる。また，赤色顔料を施すものや縦方向のミガキは古いタイプに多い。

387は内傾する長い頸部から，外反して短い口縁がつくと思われる。胴部と頸部の境にわずかな段をもつものである。縦方向のミガキによるもので，外面および内面上位まで赤色塗彩されている。胎土は火山ガラスが目立つ。南九州には無かった技術体系であるので，土器製作者が移動してきてつくったとも考えられる。夜臼式期から板付Ⅰ式期にかけてのものと考えられる。388は胴部と頸部の境に突帯を巡らすものである。外面は横方向のミガキで，赤色塗彩される。火山ガラスを多く含む。頸部突帯の手法は，東九州側の地域に関係するものである。389は立ち上がり気味の頸部から，大きく外反しながら短めの口縁部がつく。胴部と頸部の境に段があるが，内面では確認できない。外面は横方向のミガキであり，内面はハケ目による調整である。外面と内面上位は赤色塗彩される。胎土は花崗岩質のものである。鐘ヶ江賢二氏によると，福岡辺りでは内面のハケ目はナデ消すとのことであり，出自は不明である。板付Ⅰ式期と考えられる。

390は復元口径16.8㎝で，口縁部端部を強く外反させる。口縁部と頸部の境はない。391は復元口径24.8㎝で，口縁端部のみを大きく外反させ，玉縁状に肥厚させる。内外面とも横方向のミガキである。板付Ⅱｂ式に近い。392は口縁端部が段をもって肥厚するものである。口唇部は丸くおさめる。垂れ下がり口縁への遠い序章とも言える。板付Ⅱｂ式に近い。

393は，ゆるい段をもつ口縁部で，内外面はミガキ様のヨコナデである。鉢形土器の可能性もある。394は大きく外反する口縁部で，頸部との境は段をもって明瞭である。雲母を含む。

395は大きく外反する頸部から口縁部であり，境は沈線を巡らすとともに口縁部を肥厚させている。頸部には少なくとも３条の斜線が描かれる。胎土は大隅半島にはみられない花崗岩質である。鐘ヶ江賢二氏によると輝石が多く含まれており，福岡ではみられないという。板付Ⅰ式土器に該当する。396は大きく外反する頸部から口縁部であり，境は段をもって明瞭であり，口縁部を肥厚させている。器面調整は内外とも横方向のミガキである。胎土は大隅半島にはみられない花崗岩質である。板付Ⅰ～Ⅱａ式に該当する。397は頸部と口縁部境を段によって分ける。頸部には少なくとも４条の沈線による文様がある。板付Ⅰ～Ⅱａ式に該当する。

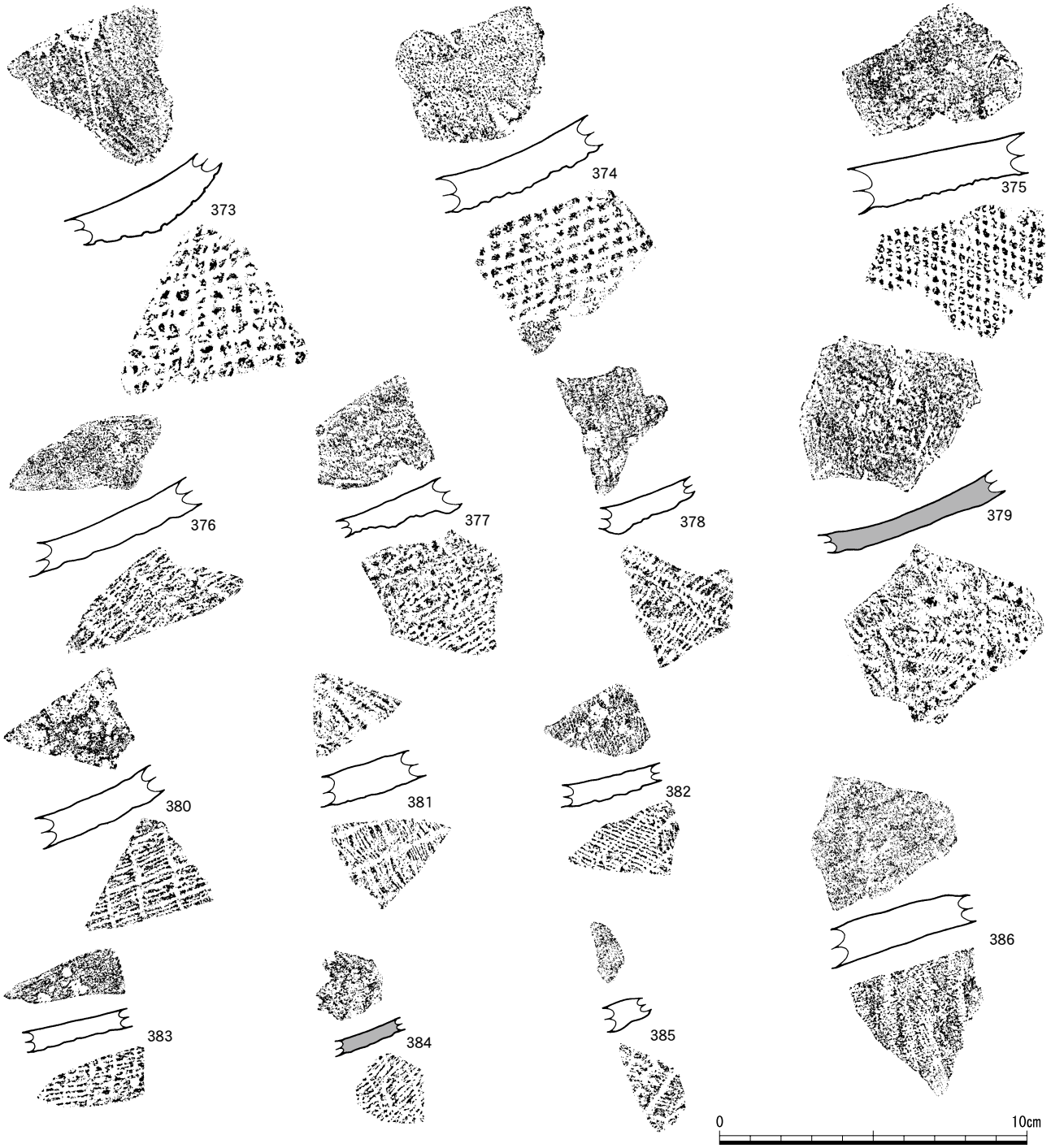
398は他の壺形土器とは雰囲気が異なり，検討を要する。鉢形土器とも考えられるもので，大きく外反した口縁部の下に低い突帯を巡らす。胎土に火山ガラスを含む。

399は頸部境に段と２条の沈線を巡らすもので，その下には３本を単位とする浅い沈線で，「ハ」字状の文様を施す。段より上位には赤色塗彩がみられる。板付Ⅱｂ式に該当する。

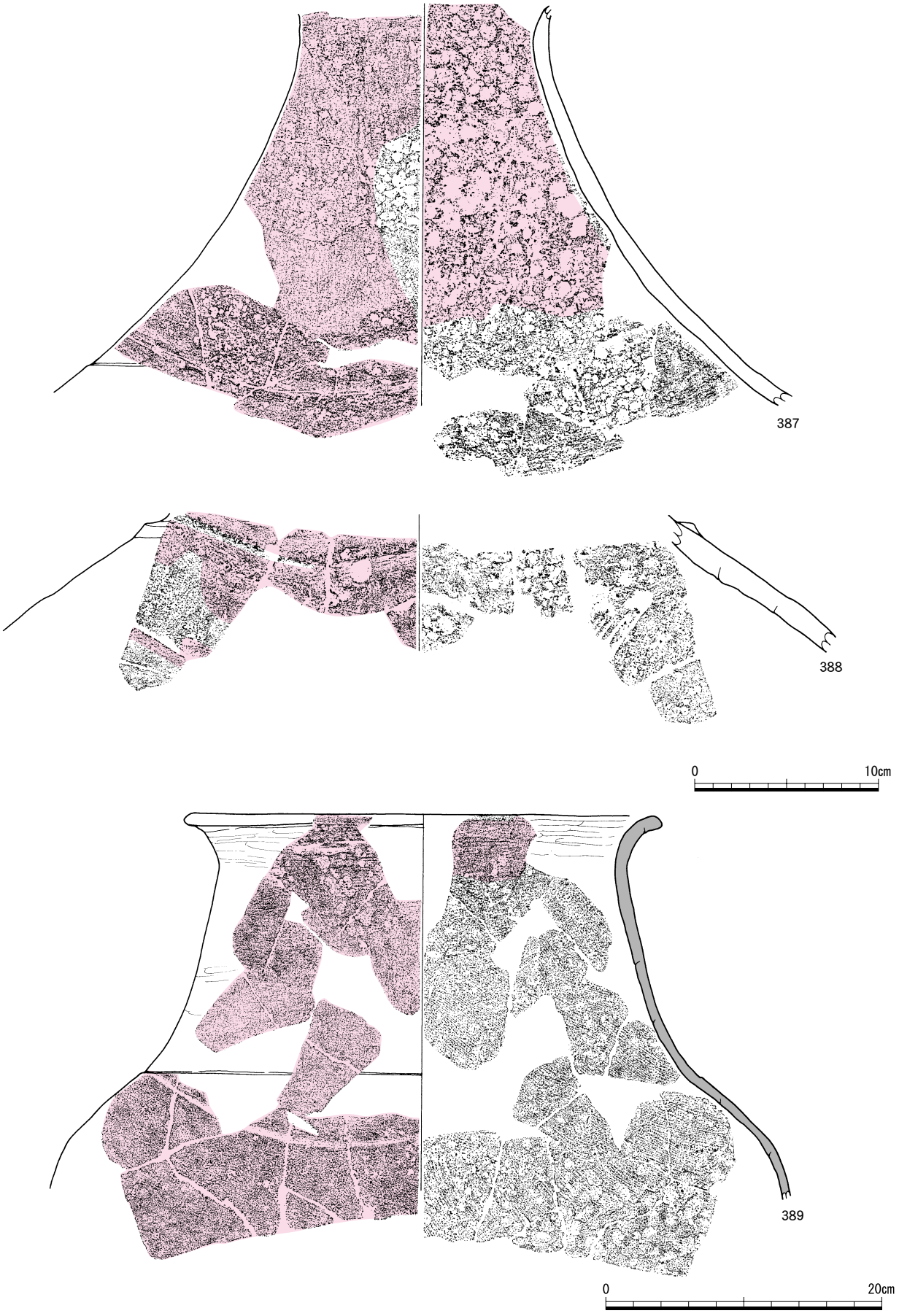
400は胴部と頸部の境は明瞭な段と，３条の沈線によって区画し，その下には２重沈線で弧文を描く。401は胴部上半から肩部にかけての破片で，境に段をつくり３条の沈線を巡らす。その下には，５重の弧文を施す。板付Ⅱｂ式に該当する。402は胴部上半から肩部にかけての破片で，境に段をつくるかどうか確認できないが，３条以上の沈線を巡らす。その下には，５重の大ぶり弧文を施す。胎土は大隅半島にはみられない花崗岩質である。

403は胴部最大径45.4㎝を測り，頸部付近に少なくとも３条，胴部中程に４条の沈線が巡り，間を多条の沈線で「ハ」字状に描く。胎土は鹿児島ではみられないものである。板付Ⅱａ式に該当する。

404は胴部の破片と思われ，横位の沈線間に２条もし



第101図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉗



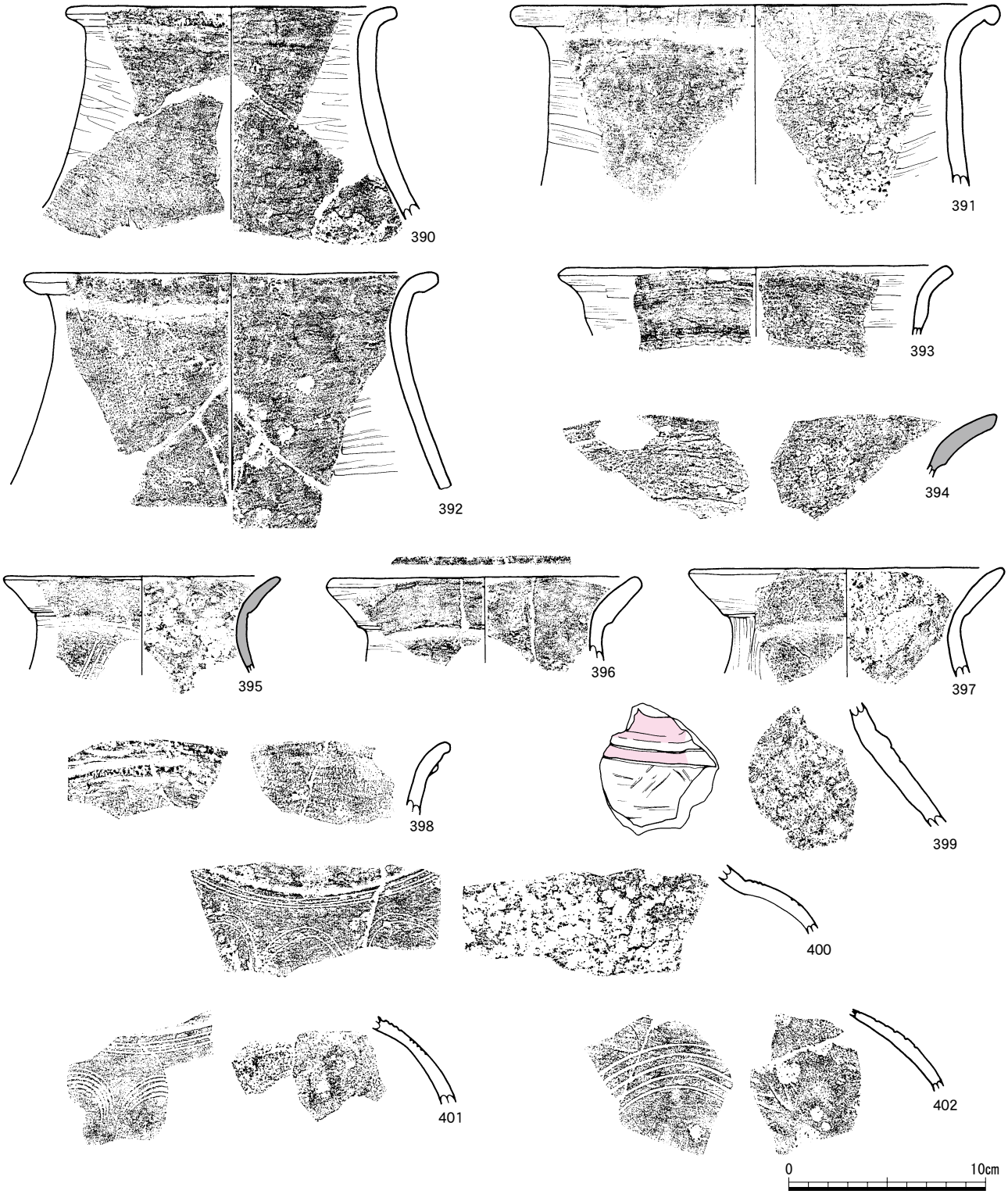
第102図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉘

くは３条の斜位沈線を交互に施すことによって，鋸歯文風としているが，繊細さに欠ける。外面は赤色塗彩される。板付Ⅱａ式に併行すると考えられる。

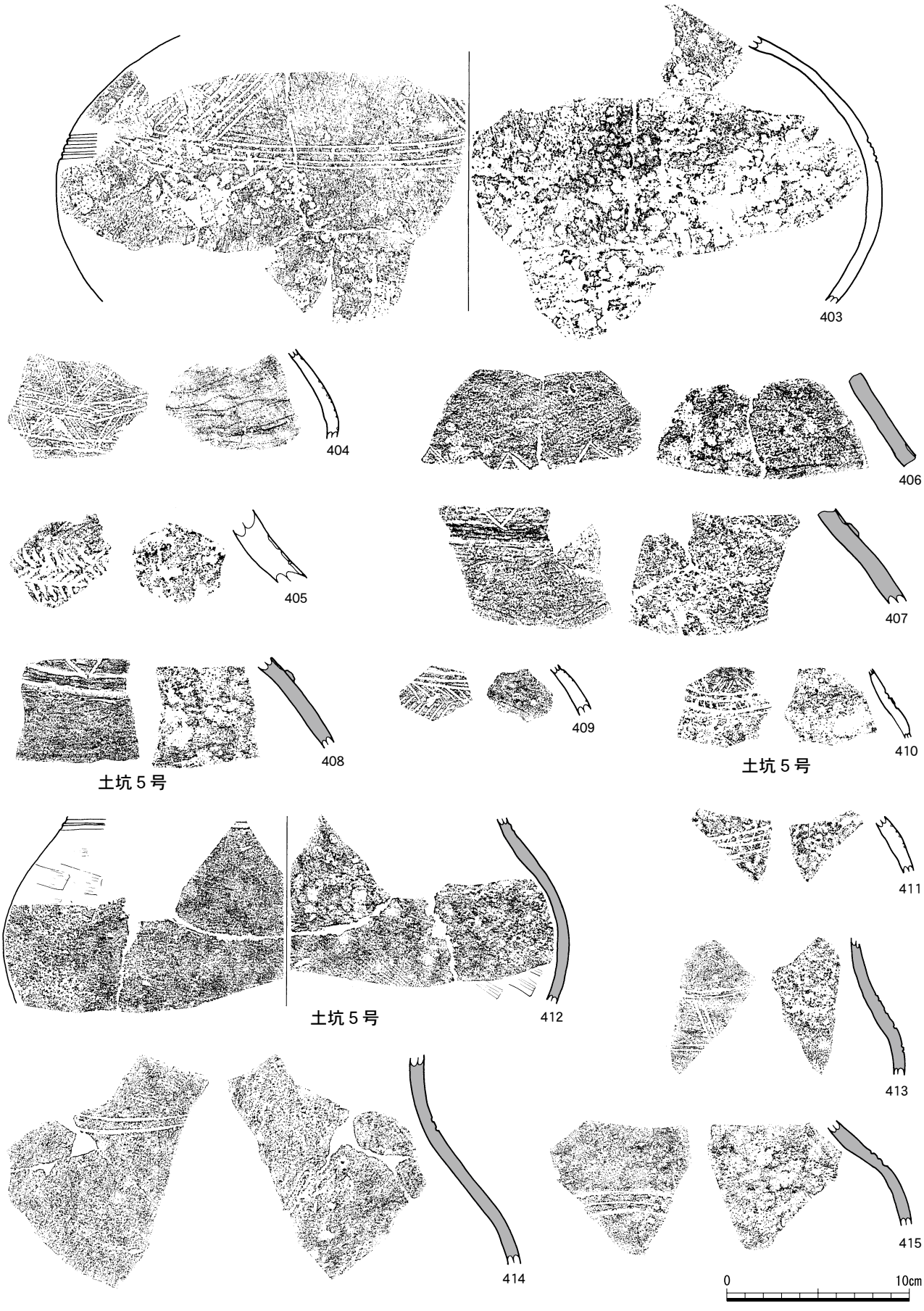
405は壺形土器の胴部と頸部の境付近で，有軸の羽状文の上に片羽状の短沈線を入れる。羽状文が向かい合っている部分もみられる。壺形土器としては弥生時代前期中葉以降のものと考えられ，この頃にも羽状文が使われていることがわかる。刻目突帯をもつ甕形土器の羽状文を考える際に，良好な素材となる。

406と407・408は胴部と頸部境に断面台形の突帯を巡らし，その上に単沈線で鋸歯状の文様を描く。板付Ⅱａ・ｂ式に併行すると考えられる。408は土坑５号から出土したものである。

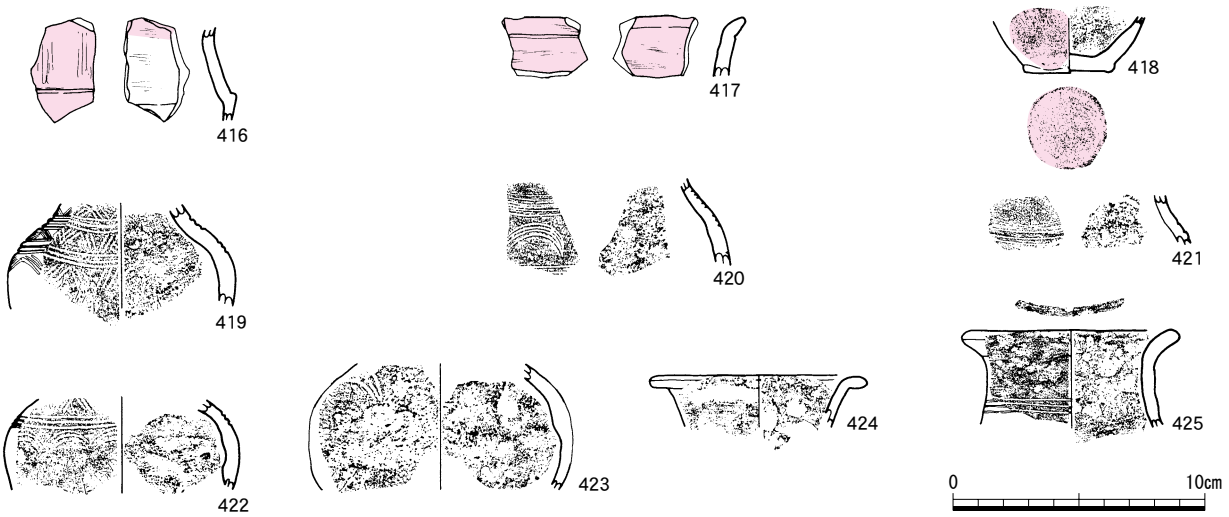
409は肩部の境にわずかな段をもち，２条の沈線の下



第103図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉙



第104図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器⑳



第105図　縄文時代後期から弥生時代前期末の土器㉛

に横方向の羽状文を巡らす。横方向の矢羽根状の文様は古い様相をもつ。板付Ⅱａ式に該当する。410は胴部から頸部の境に，刻目をもつ突帯の上下に２条の沈線を巡らす。さらに頸部と胴部に多条の沈線で鋸歯状の文様を施す。胎土に小石が多い。土坑５号の出土である。板付Ⅱａ式に該当する。411は胴部もしくは肩部の破片であり，横位に巡る４条の沈線の上から，斜位に沈線を施し刻目状としている。板付Ⅱ式である。

412は土坑５号で出土したものである。胴部最大径31㎝に復元できるもので，胴部と頸部の境に少なくとも２条の沈線が認められる。大粒の金色雲母を多く含み，大隅半島南部の特徴を示す。413は胴部上半から肩部にかけての破片で，境に段はつくらず２条の沈線を巡らす。その下には，平行沈線で直線的な文様を施す。胎土は大隅半島でみられる大粒の金色雲母を含む。板付Ⅱ式に併行する。414はスマートに曲線を描きながら頸部に至るもので，胴部との境に２条の沈線を巡らす。器面調整は丁寧なミガキであり，胎土に金色雲母を含む。板付Ⅱｃ式に併行する。

415は胴部から頸部に至るもので，境を削り出し状につくり，幅広の低い突帯としている。突帯の中間に沈線を巡らせてある。金色雲母を含む。板付Ⅱ式に併行する。

小型の壺形土器（第105図416 ～ 425）

416は胴部と頸部の境が胴部最大径となるもので，段および細い沈線が巡る小型壺である。長めの頸部をもち口縁部付近で外反する。外面および口縁部内面に赤色顔料を施す。赤色顔料の塗彩は夜臼式土器に多いが，本資料の位置づけは流動的である。417は頸部と口縁部の境が沈線状になるもので，屈曲風に外開きする小型壺である。内外面に赤色塗彩がみられる。胎土に火山ガラスを多く含む。板付Ⅰ式の古手のものと考えられる。418は直径3.4㎝の小さな底部で，わずかに上げ底となる。外面は２㎜ほど立ち上がり，内湾しながら胴部へ至る。底面を含め外面には赤色塗彩する。古いタイプであり板付Ⅱ式よりは古い。

419は胴部から肩部にかけての破片で，境に段はないが強く外反するもので，３条の沈線を巡らす。その下にも，３条の沈線を巡らし間を３条の沈線による山形文を巡らす。外面は磨いた上に黒く燻しており，光沢がある。胴部最大径9㎝に復元できる小壺である。胎土は422と共通し，火山ガラスを含む。黒く燻す点は夜臼式土器の影響が残るが，文様構成や内面に段がみられないことから，板付Ⅱａ式で前期中半におかれる。420は胴部から頸部に至るもので，境の段を含めて５条の沈線を巡らす。胴部最大径付近にも沈線を巡らし，沈線間に４重の弧文を施す。板付Ⅱａ式に該当する。421は肩部の境にわずかな段をもち，段内部に３条とその下に２条の沈線を巡らす。板付Ⅱａ式に該当する。

422は胴部から肩部にかけての破片で，境にわずかな段をつくり３条の沈線を巡らす。その下には，３重の弧文を施す。頸部には多条の沈線による山形文を巡らす。胴部最大径9.5㎝に復元できる小壺である。板付Ⅱａ式に該当する。423は胴部片であり，上部に３重の弧文が描かれる。胎土は花崗岩質以外のものである。板付Ⅱ式に該当する。424は口縁端部を折り返し状に丸くおさめる。胎土は花崗岩質である。板付Ⅱc式に該当する。425は口径8.6㎝を測る小壺であり，大きく外反する頸部から口縁部片である。境の部分は不明であるが，少しあがった部分に３条の沈線が巡る。板付Ⅱc式に該当する。

縄文時代後期・晩期相当期の石器等

縄文時代早期相当のⅤ層・Ⅵ層遺物と異なり，Ⅱ層・Ⅲ層石器等については，他の共伴遺物から判断される明確な時代区分ができないため，縄文時代相当期の可能性が高い打製石鏃，石匙，スクレイパー，楔形石器，石錐，二次加工剥片，使用痕剥片等の剥片石器，及び石核，また打製石斧，磨製石斧，石錘，磨敲石等の礫石器を縄文時代の遺物として，器種別に一括して扱うこととする。従って，弥生時代以降も継続して使用された可能性のある器種も含まれる。

なお，石材については，一部で帯磁率計のデータを参考としたが，主として肉眼的観察によるものである。

打製石鏃（第106図426 ～第107図481）

Ⅲ層相当（縄文時代後期から晩期）包含層からは，打製石鏃72点が出土した。うち未製品，破損品を含め56点図化した。Ⅱ層からの出土遺物と併せて主に形状を観察し，分類を行った。

表８　打製石鏃分類表

Ⅰ類	ほぼ正三角形状を呈するもの
a	正三角形状で，基部に抉りのないもの
b	正三角形状で，基部に抉りのあるもの
Ⅱ類	二等辺三角形状を呈するもの
a	二等辺三角形状で，基部に抉りのないもの
b	二等辺三角形状で，基部に抉りのあるもの
Ⅲ類	基部に長軸の 30%以上の深い抉りのあるもの
Ⅳ類	五角形状を呈するもの
Ⅴ類	縁辺部に鋸歯状の剥離加工の観察できるもの
Ⅵ類	その他縁辺部に特徴のみられるもの

Ⅰ類（第106図426 ～ 454）

426 ～ 439は，正三角形状を呈し，基部への抉りが殆どみられないものである（Ⅰa類）。比較的小型のものが多い。また石材をみると，玉髄，青木産黒曜石，腰岳産黒曜石，頁岩と多種に及ぶため，石材による作り分けはなかったと思われる。

440 ～ 454は，正三角形状で基部に抉りがみられるものである（Ⅰb類）。441，449については欠損品であるため，抉りの状況は不明である。また431，438については，押圧剥離の状況から未製品と思われる。

Ⅰ類の特徴として，基部への抉りを確認できるものもあるが，他の形状石鏃の抉りに比べ浅い抉りになっている。また，腰岳産黒曜石に類似する試料が比較的多い。

Ⅱ類（第107図455 ～ 469）

455 ～ 469は二等辺三角形状を呈するため，Ⅱ類とした。二等辺三角形状のものについても，後期・晩期相当期の打製石鏃では，顕著な基部への抉り加工は行われていない。

455 ～ 458は殆ど抉りが観察できない。Ⅱa類に分類した。石材は３点が頁岩，１点がチャートである。455は，先端部の作出加工がされていないため，未製品の可能性も残される。Ⅱa類は，縁辺に若干の丸みを帯び，先端部は鋭くない印象を受ける。

459 ～ 469はⅡb類に分類した。この形状に抉りが多いのは，矢柄への装着の際に好都合だったものと思われる。また，先端部が尖るタイプが多い。Ⅰ類との比較を検討したい。467，468は未製品であろう。

Ⅳ類（第107図470 ～ 478）

470 ～ 476は五角形状を呈するものである。形状は，先端が鋭角に加工されたもの，或いは鈍角に加工されたものに分けられる。石材はチャートに偏る。

Ⅴ・Ⅵ層には五角形鏃は出土しないが，Ⅱ・Ⅲ層からのみに出土することから，今まで言われるように，縄文時代早期相当期には五角形鏃は少なく，縄文時代後期から晩期にかけて多産することが，本遺跡でも実証されたと考えられる。

477，478は製作途中のものとし分類したが，或いはスクレイパー，楔形石器に分類すべきものかもしれない。２点ともチャートである。

Ⅴ類（第107図481）

481は丁寧な加工ではないが，鋸歯状に押圧剥離加工を施そうとした意図が窺える。Ⅴ類に分類した。

Ⅵ類（第107図479・480）

479，480は先端部が他に比べて長い形状をしているためⅥ類とした。また縁辺部が鋭く加工されており，打製石鏃として分類したが，作出状況から石錐，或いは未製品の可能性もある。

石匙（第108図482 ～ 485）

４点の石匙及び未製品，欠損品が出土した。482は刃部を幅広く，緩やかな曲線状に作出している。風化面から西北九州産の黒曜石に類似する。483は刃部が比較的円形状に作出されている。押圧剥離痕が中心部まで届かず簡易的な作りである。腰岳産黒曜石の試料に類似する。

484は黒曜石の剥片の縁辺部を，一部に押圧剥離の加工を施している。抉り部を作出しようとした意図が観察される。未製品であると思われるが，剥離は刃こぼれによる可能性も考えられる。

485は，サヌカイト試料に類似する安山岩製の石匙欠損品である。刃部の作出状況からスクレイパーとしての使用は考えにくいため，本項に分類した。抉り部からの欠損であろう。

スクレイパー（第108図486 ～ 第111図504）

剥片の縁辺部や端部に二次調整を行い，刃部整形を施してある剥片をスクレイパーとした。また，分類は大きく，サイドスクレイパーと想定されるものをⅠ類，エンドスクレイパーと想定されるものをⅡ類とした。

486 ～ 488，493 ～ 495は一縁辺を両側からの加工により刃部形成している。刃部は曲線状をなす。489 ～ 491はいずれもサヌカイトの縦長剥片を素材とし，両側縁部に微細な押圧剥離により刃部加工を施している。493は未製品の可能性も残る。494は複数の縁辺の刃部の加工を施し，丁寧な作りになっている。用途以外の使用方法も推測される。498は石匙の未製品の可能性もある。501は頁岩の横長剥片の一辺に刃部加工を施す。横長のスクレイパーである。492，503，504は，端部のみの刃部形成であり，刃部角度が45度以上であるため，エンドスクレイパーとして，Ⅱ類に分類した。

492は玉髄系，503はチャート製，504はサヌカイトの試料に類似する。497は小型の縦長スクレイパーである。長辺の一縁辺に微細な押圧剥離を施している。499，500，502も小型のスクレイパーである。両縁辺部を作出している。499，500はチャート，501は頁岩，502は玉髄系の試料に類似する石材を用いている。

石錐（第111図505 ～ 508）

505 ～ 508は石錐である。505はチャート製で剥片の一端を剥離加工により鋭角に整え，石錐としている。指に持っての使用に適している。506, 507も同じくチャート製の石錐である。形状は505と異なり厚みがある。ドリル部には微細な加工を施し先端を作出している。先端部に穿孔による摩滅が確認できる。508はドリル穿孔部分のみの出土である。西北九州産試料に類似するサヌカイトを素材とし，剥離加工を加え，先端部を丸く整えている。

石槍（第111図509 ～ 511）

509 ～ 511は，丁寧な押圧剥離加工を施し，両端の槍先部を作出する。また，小型ながらⅤ層出土の石槍と形状が酷似しているため，分類は石槍とした。509は針尾系黒曜石，510はサヌカイト，511はチャートの試料に類似する。

穿孔具（第111図512）

512は，長軸4.5cm・短軸2.3cm・重量35ｇ，砂岩の小楕円礫を素材とする。先端部には短軸方向への擦痕が観察されるため，穿孔を行うものでなく，皮革等への穿孔後にその孔を広げる目的で使用した，リーマーのような用途が推定できる。穿孔部の逆端部には，敲打痕も観察されるため，ハンマーストーンとしての使用も類推できる。

使途不明石器（第111図513）

513は頁岩の扁平な自然礫を全面研磨したものである。特に下縁部の刃部周辺は磨面が顕著であり，縦位や斜位の擦痕が確認できるため, 刃部作出の意図が窺える。石包丁的な使用方法も考慮できる。使用時期を考慮しなければ，擦り切り石器の可能性も否定できない。

楔形石器（第112図514 ～ 521）

上下に向き合う二辺から対抗する剥離がみられ，上下の辺に剥離や，両極打法による使用痕と思われる潰れが確認される剥片及び礫を類別し，一括した。主に中心部がふくらみ，レンズ状を呈する剥片の上下両端に使用痕が観察できる。514，515は腰岳産黒曜石の試料に類似する。516，519は水晶の結晶礫を使用している。517，518は玉髄系の石材，520はチャートの石核を転用した楔形石器と考えられる。上部には敲打による使用痕が観察される。前述の資料に比べ大型である。521は乳白色の頁岩製である。ローリングを受け，全体的に丸みを帯びている自然礫を使用している，大型の楔形石器と推測できる。短軸を上下面に置くと，上面，下面に打ち付けによる使用痕及び，欠損する剥離が確認できる。

二次加工剥片（第113図522 ～ 536）

剥片の縁辺部に二次調整を施すが，明瞭な刃部形成や調整が行われない，またツールとして認定できないものを二次加工剥片に分類した。522は小型の縦長剥片を作出後，縁辺部を主に微細剥離加工を施している。523は先端部を押圧剥離により作出した形跡が残ることから，石錐の可能性もある。524，525は，押圧剥離により縁辺部全体に微細な調整を施し，鋭利な先端を作出しようとした形跡が残る。524については，片面からの剥離である。526～531は上下端部を中心に加工痕，あるいは打撃痕が観察できるため，楔形石器の可能性もある。532～534は黒曜石の縦長剥片の縁辺部に，簡易的な押圧剥離による二次加工を施しているが，刃部は完成されていない。刃こぼれとも推測できる。535，536は薄い剥片縁辺の所々に微細な剥離が観察できる。石鏃の未製品の可能性がある。

使用痕剥片（第114図537 ～ 545）

剥片を何らかの目的で使用し，微細な剥離痕の観察で

きるものを分類した。意図的に剥離加工を行ったものではなく，使用による刃こぼれと推測できる場合も含む。537～541，544，545は，剥片を剥離後，鋭利な縁辺部を特に調整を施さず使用したと考えられる。いずれも微細な刃こぼれが確認できる。542は二つの縁辺部に微細な剥離が確認できる。543は上部と鋭角になる先端部に微細な剥離痕がみられ，石錐としての使用も推測される。

石核（第115図546 ～第116図552）

546～548は角礫に平坦な打面を形成した後，打面転移をしながら双方向から剥片を剥いでいる。546は鉄石英，547は腰岳産黒曜石，548はチャートの試料に類似する。549はサヌカイトの剥片を素材とし，表裏面を周辺から中心に向かって求心的に剥ぐものである。550，552は，ローリングを受けた円礫を打撃分割により打面形成し，縁辺部のほぼ同一打面から同方向に複数枚の剥片を作出している。550は日東系黒曜石，552は乳白色の頁岩を素材とする。551は主要打面を形成した後，表裏を交互に同方向転移しながら複数枚剥いでいる。腰岳産黒曜石に類似する。

打製石斧（第117図553 ～第121図619）

頁岩製の土掘具としての使用が想定される打製石斧が，部位の認定ができるもの123点，使用による，或いは製作途中で破損した長軸5cm以上のもの76点が出土した。形状から以下の分類とした。また部位により研磨面が確認できないため，一部，局部磨製石斧も含まれる可能性がある。

Ⅰ類：比較的細身で基部に装着に有利と思われる抉りが確認でき，刃部先端が鋭角になるもの。
Ⅱ類：比較的細身で，装着のための抉りが確認できる。刃部先端は尖らない。
Ⅲ類：装着のための抉りが確認できる。刃部が比較的丸く広いもの。

Ⅰ類（第117図553 ～ 564）

553～556は，Ⅰ類に分類した。比較的大型のものが含まれ，柄に装着して主に土掘具としての使用が想定される。概して，刃部が左右どちらかに偏った形状になっている。振り下ろす使用により，刃部が偏って摩滅していったものと推定される。現在使用される鍬の役割をしていたと思われる。また，特に556，557は細長い形状を考慮すると，比較的深い穴を掘る必要のある山芋等の収穫に使用されたものと推測される。柄への装着も装着痕の状況から，柄と平行に装着され使用されたものと推測できる。558～564は，Ⅰ類の刃部であろう。使用による摩滅や擦痕等の使用痕が観察できる。

Ⅱ類（第118図565 ～ 576）

565～570，575はⅡ類に分類した。刃部が尖らず，丸みを帯びるものが多いため，Ⅰ類とは異なった使用法が考えられる。栽培植物の収穫，または雑草の処理等の使用が想定される。特に567，570は小型のため，形状は同様なものの，異なった使用法も想定される。抉り部には装着痕が顕著に観察される。571，573，574は抉り部から刃部にかけての形状から，Ⅱ類の基部を残した破損品と思われる。基部には明確な装着痕が観察される。576は刃部と思われるが，使用による摩滅が刃部を中心に多く残される。

Ⅲ類（第119図577 ～ 586）

577，579は比較的大型で，装着部の抉りが顕著に観察される。刃部も幅広で，尖らない形状をしている。使用状況も異なると考え，Ⅲ類に分類した。石材は全てⅠ類・Ⅱ類と同様の頁岩である。579は接合資料である。Ⅰ類・Ⅱ類と比較すると比較的寸胴で，幅広な形状をしている。580～582は，Ⅲ類の基部を残す破損品と思われる。583～586は，刃部を残す破損品と思われる。583，584には顕著な摩滅による擦痕が確認できる。

基部から胴部が残存する破損品
（第120図587 ～第121図619）

587～603は，打製石斧（石製土掘具）の基部及び，一部胴部まで残存する資料である。装着部である基部の587～589は細身であるため，Ⅰ類の基部部分と推測できる。590～603は，比較的深い抉りを持ち，基部を残す破損品と思われる。604～619は浅い抉りを持つ破損品と思われる。612～616，619は細身の形状から，後述する磨製石斧に類するところもあるが，装着痕の状況から本類の基部破損品として類別した。抉りの深いものはⅠ類に，浅いものはⅡ・Ⅲ類に相当すると推測できるが，ここでは細分していない。石材は頁岩である。抉り部に顕著な紐ずれ痕や，使用による摩滅が確認できる。

局部磨製石斧（第122図620 ～第124図648）

素材剥片を打ち欠き加工で成形し，全体的に簡易な研磨加工を施し，打ち欠き痕の残るもの。或いは主として刃部のみに，研磨加工を施したものを局部磨製石斧とした。また，刃部の形状から，次の２類に分類した。

Ⅰ類：台形状に形成され，主として刃部のみを直線的に，研磨により作出しているもの。
Ⅱ類：ばち型で基部は細く装着のための抉りも浅いが，概して刃部を湾曲させて研磨加工しているもの。

Ⅰ類（第122図620 ～第123図640）

620～630は，刃部先端が直線状になり，やや台形状を呈す。剥片を打ち欠きにより形成した後，刃部に研磨加工を施す。Ⅰ類とした。刃部には概ね刃こぼれが確認できる。

631～639は，刃部を欠損する基部部分である。刃部以外への研磨は殆ど観察されないが，作出状況から局部磨製石斧として分類した。

Ⅱ類（第124図641 ～ 648）

641～646は基部に比べ，刃部幅が広い。また刃部は湾曲するよう作出され，殆ど刃こぼれがみられない。Ⅰ類とは異なる使用方法が想定される。

643，644は基部と推測できる。基部から刃部への広がりから，Ⅱ類の基部と思われる。

645～648はⅡ類の刃部と思われるが，刃部先端の研磨が，丁寧である。

ここで分類した局部磨製石斧について，刃部は比較的丁寧に作られており，蛤型刃部を持つ磨製石斧とは異なった使用方法が推測される。刃部が薄いため，木材加工に限らず，食料加工，或いは調理具としての使用も推測される。

破損品の二次利用（第124図649・650）

649，650は頁岩製の打製石斧の破損品であると思われるが，二次使用の可能性があるため掲載した。649は刃部と推測できるが，先端が鋭角になるように打ち欠きにより再加工し，刃部を作出している。650も刃部であろうが，縁辺部全体を打ち欠き，楕円状に再加工している。側面及び下面に敲打による摩滅が確認できる。

磨製石斧（第125図651 ～第128図706）

磨製石斧は破損品を含め56点を掲載した。ここでは打ち欠き部を残しつつ，刃部のみならず，全体的に研磨加工を施したものを，磨製石斧として分類した。従って一部，局部磨製石斧も含まれる。なお，Ⅱ層・Ⅲ層相当期は古墳時代の遺物も共伴するため，使用時期については限定できない。また形状等の観察から，大きく４種に分類した。

Ⅰ類：蛤刃型に比べ小型のものが多い。全体的に扁平で，完全な研磨を施さないものもある。
　Ⅰa類：刃部が胴部幅より狭いもの。
　Ⅰb類：刃部が胴部幅より広いもの。
Ⅱ類：Ⅰ類同様扁平で薄い刃部を持つが，幅広の刃部を持つもの。
Ⅲ類：蛤刃型の刃部を持ち，断面は楕円形になるものの，比較的大型のもの。
Ⅳ類：小型で細身の形状をなす。研磨加工は粗い。刃部はノミ型形状を呈すると推測できる。
Ⅴ類：その他の特徴を有するもの。

Ⅰ類（第125図651 ～第126図669）

前述の局部磨製石斧に類似するところもあるが，基部への抉りが顕著でないこと，また，打ち欠き加工部分は残すが，全体への研磨が丁寧なことから局部磨製石斧と別類とした。651，652は打ち欠きによる形成の後，全体的に研磨加工を施すが，特に刃部は，丁寧な研磨の作業工程を経た痕跡が残る。また刃部幅は，概して基部より狭くなっている。装着のためと思われる抉りが若干確認できる。素材は頁岩である。Ⅰa類に分類した。また，刃部の刃こぼれがほとんど確認できないため，振り下ろす使用はしなかったと考えられ，加工具や調理具の可能性がある。653～656は，同類の刃部と思われる。丁寧な研磨により，刃部を作出している。

657～661は，刃部幅が基部幅より広いものである。Ⅰb類に分類した。基部の抉りについても殆ど確認できない。ただ，柄への装着痕と思われる摩滅は確認できる。662，663は，Ⅰb類の刃部だと思われる。664～669は，Ⅰ類の破損品として分類した。研磨の状況から，使用による破損か製作途中に破損したものと推測できる。

Ⅱ類（第126図670 ～ 675）

670～675は，破損品を含め，刃部への研磨は丁寧で，Ⅰ類に近似であるが，刃部幅が広い傾向にあるため，Ⅱ類に分類した。全て欠損しているが，刃部から長軸を推定すると，Ⅰ類の150％から200％に達するであろう。Ⅰ類と比較すると，大型になる傾向がある。ただ，Ⅰ類と刃部厚がほとんど変わらない。使用目的も異なったのかもしれない。

Ⅲ類（第127図684 ～第128図706）

684～706は破損品も含め，いわゆる蛤刃型磨製石斧である。刃部が観察できる８点から推測すると，刃部先端が直線状であり，縦斧としての使用が推測できる。

684～686は，使用による刃部破損の状況が窺えるが，下面に敲打痕がみられるため，敲打具としての再利用が想定される。刃部再生加工は施さない。石材はほぼ頁岩質であるが，687，689，692，698は砂岩質のホルンフェルスである。701は，砂岩質で刃部形成が顕著でないため，器種が異なる可能性もある。687～693，706は基部，698～705は刃部である。700については，刃部幅が狭く，大型のノミとしての使用も想定できる。

Ⅳ類（第126図676 ～ 681）

676～679はⅣ類に分類した。素材を棒状に加工した

後，簡易な研磨加工を施し，刃部を作出したものと思われる。同様の形状の刃部は680の１点のみの出土であるが，形状的にⅣ類として分類した。ノミ等の加工具としての使用が想定される。

Ⅴ類（第126図682・683）

682，683は，特殊な形状からⅤ類に分類した。682は薄く研磨加工した頁岩製磨製石斧の欠損品と思われる。刃部が欠損しているため使用状況等不明である。683は頁岩の棒状自然礫の長軸両端を，簡単な研磨により両刃の刃部を作出している。上下対称でもなく，使用方法は不明である。

礫器（第129図707・708）

707はローリングを受けた頁岩の扁平楕円礫を分割した後，打ち欠きにより鋭角な縁辺を作出し，刃部調整を行っている。ここでは礫器として分類したが，掻器としての使用も想定される。

708は砂岩質ホルンフェルスの礫の縁辺部を打ち欠き，刃部を作出している。片側からの刃部調整により，片刃の礫器となる。使用による刃こぼれが観察できる。

磨石・敲石（第130図709 ～第140図792）

稲荷迫遺跡では，他の多くの石器と共伴して多数の磨石・敲石が出土した。磨る・敲くを併用しての使用状況が観察できるため，明確に磨石・敲石の分類はせず，形状・磨面・敲打痕・研磨の状況から以下のようにⅠ～Ⅳ類に分類した。資料中，磨石に分類した中に，砥石としての使用痕跡が残る資料も含まれる。また，類以下のa，bの標記については形状の分類で，次のとおりである。

Ⅰ類：全面的もしくは部分的に磨面を有する。敲打痕は不明瞭である。
Ⅱ類：全面的もしくは部分的に磨面を有する。平坦面や側縁に明瞭な敲打痕がみられる。
　Ⅱa類：平坦部に敲打痕がないもの。
　Ⅱb類：平坦部に敲打痕があるもの。
Ⅲ類：長軸の端部に敲打痕の残るもの。主な用途は敲石と想定されるもの。
　Ⅲa類：磨面のないもの。
　Ⅲb類：磨面のあるもの。
Ⅳ類：磨敲石としての利用以外に，特殊な研磨部分が確認できるもの。

本遺跡では，使用痕が確認でき，欠損或いは破損があるものの，原型の50％以上を確保できるものを含め，400点あまりが出土した。使用目的のために持ち込んだと思われる素材礫は，1,000点以上にのぼる。素材石材としての価値が高かったものと思われる。石材は98％砂岩質である。また，被熱を受け赤化した礫も多見するため炉材の利用等も含め，多岐にわたって使用した形跡が残される。次は，Ⅱ層・Ⅲ層における類別・石材別一覧である。

表９　Ⅱ層における磨・敲石類別出土数

	Ⅱ層	砂　岩	安山岩	凝灰岩	頁　岩	ホルンフェルス
Ⅰ	67	62	5	0	0	0
Ⅱａ	68	62	4	2	0	0
Ⅱｂ	25	25	0	0	0	0
Ⅲａ	18	16	2	0	0	0
Ⅲｂ	12	8	0	0	2	2
Ⅳ	4	3	1	0	0	0

表10　Ⅲ層における磨・敲石類別出土数

	Ⅲ層	砂　岩	安山岩	凝灰岩	頁　岩	ホルンフェルス
Ⅰ	42	39	3	0	1	0
Ⅱａ	48	44	2	2	0	0
Ⅱｂ	28	22	4	2	0	0
Ⅲａ	31	27	1	0	0	1
Ⅲｂ	32	26	2	1	0	3
Ⅳ	18	17	1	0	0	0

Ⅱ層ではⅠ類Ⅱ類が比較的多く出土している。Ⅲ層ではⅠ類からⅢ類までが平均的に出土したことが窺える。石材については，使用目的の性質上，圧倒的に砂岩質のものが多い。一部ハンマーストーンの性質を持つⅢ類についても砂岩が多く検出されるが，硬質のホルンフェルスの出土が若干認められる。

石材分類については，帯磁率計を併用したが，被熱したものは，数値が上がり結果を活用できないため，最終的には肉眼観察を行い分類した。

Ⅰ類（第130図709 ～ 711・714）

709～711，714はⅠ類に分類した。円礫の平坦面を磨石として使用している。711は扁平な円礫であり，携帯等の砥石である可能性がある。714は楕円形状，また大きさから，土器製作時における，調整具の可能性もある。

Ⅱ類（第130図712・713・715 ～第136図763）

712，713，715～744はⅡa類に分類した。712，713～718は，平坦な両面に顕著な磨痕が観察でき，側面に若干の敲打痕を見ることができる。719～740もⅡa類に分類したが，側面の敲打痕が顕著である。敲打具としての用途が高かったものと思われる。殆どの石材が，砂岩

質の円礫，或いは扁平楕円礫である。741，744は，敲打痕も残されるが，磨痕というより，研磨痕と捉えると，砥石としての用途も考えられる。

745～762は，平坦部に顕著な敲打痕が観察されるためⅡb類に分類した。745～755は10㎝程度の礫を利用した，比較的大型のものである。殆どが砂岩質であるが，753は頁岩の礫を利用している。石材の硬度や磨痕の状況や，表面中心部への敲打が激しいことから，砂岩質の石材を使用したものとは，使用方法が異なっていたのかもしれない。756～761は，10㎝未満の小型のものである。石材はすべて砂岩である。763は安山岩の礫の表裏面に深い敲打痕がみられる。凹石としての用途が推測できる。762は，比較的小型であるため，磨敲石に分類したが，小型の，或いは携帯用の台石とも思われる。平坦な一面だけに敲打痕がみられる。

Ⅲ類（第137図764 ～ 775）

764～768は，Ⅲa類に分類した。ローリングを受けた，砂岩の棒状礫の端部に敲打痕がみられる。石器製作時におけるハンマーストーンの用途が考えられる。769～775は，端部への敲打も確認できるが，表裏面への磨痕も観察されるため，Ⅲb類に分類した。石材は全て砂岩質のものである。

Ⅳ類（第138図776 ～第140図792）

776～792は，前述の磨石，敲石の要素を持ちつつ，表面，或いは表裏面に敲打痕と共に研磨痕が確認できるため，Ⅳ類に分類した。石材，或いは金属製品の加工に用いられたものと考えられるが，具体的な用途については不明である。また，多くは平坦面だけの研磨痕であるが，782については，側面部にも敲打痕に重なる研磨痕が確認できる。砥石としての用途が明らかである。

石錘（第141図793 ～ 797）

扁平な砂岩質楕円礫を素材とする石錘が５点出土した。重量は140ｇから150ｇの中で，ほぼ同じ大きさの礫を選別し，使用したものと思われる。

794～796は，長軸上の２側面に打ち欠きによる抉りを作出し，網掛け部としたと推定される。概して，抉り部には敲打によるブランティングが顕著に観察される。また，794には網掛けによると思われる紐ずれ痕がみられる。793，797は，短軸上の２側面を同様に加工している。装着痕が顕著に観察される。797には敲打痕も確認できるため，敲石への転用がされたと思われる。また，熱を受け，赤化している。

石皿・台石・砥石（第141図798 ～第144図808）

完全な形での出土は少なく，熱を受け，破壊したものが多い。ここでは，食品加工以外の台石として使用されたと推測されるもの，或いは砥石としての使用痕が残るものを含め掲載した。その中で，破損の少ないもの，遺構内遺物，また比較的使用痕の残留している11点を図化した。

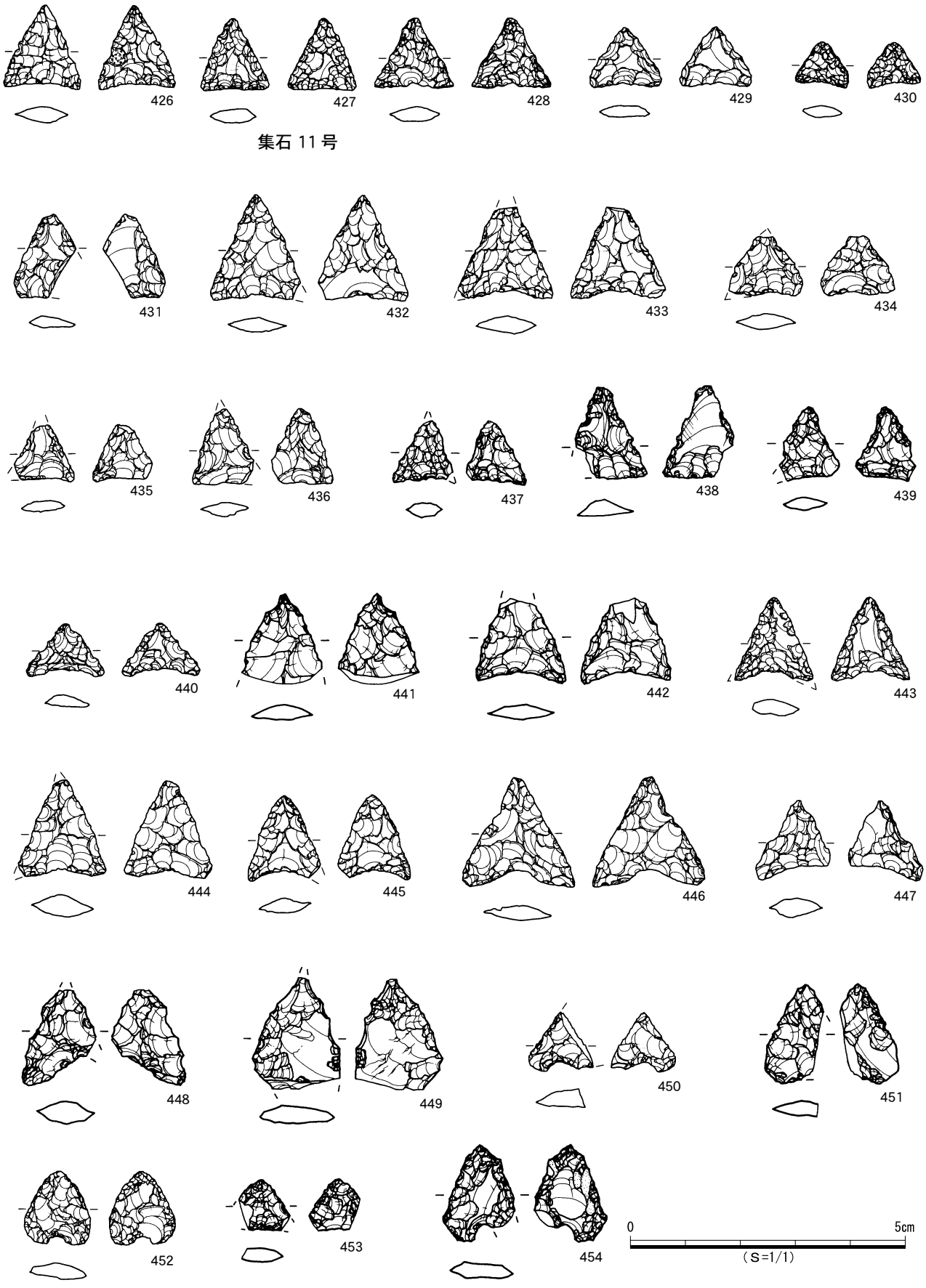
798，799は，砂岩質の礫を多種な用途に使用したものと思われる。798は平坦面を砥石として使用し，側面の一部を磨石的な用途に，また縁辺部に残る敲打痕から，敲石としての用途も考えられる。ただ，同時使用ではなく，破損したものの再利用であろう。799は，砥石と台石を兼用しているものであろう。

800，801は，砥石である。800は破損品であるが，中心部に深く抉れた使用痕が観察できる。801は板状の砂岩を主に砥石として使用するが，一部に敲打痕が確認できる。802，803，806～808は平坦面の一部に斑状に敲打痕を残すものである。806は２号住居，807は３号住居，808は１号住居内からの出土である。住居内から器種不明の金属製品及び金属片が出土していることから，金属の加工に用いた，金床石の可能性がある。ただ，周辺に炉跡や鞴羽口等の製鉄に関連する遺構，遺物の検出はない。

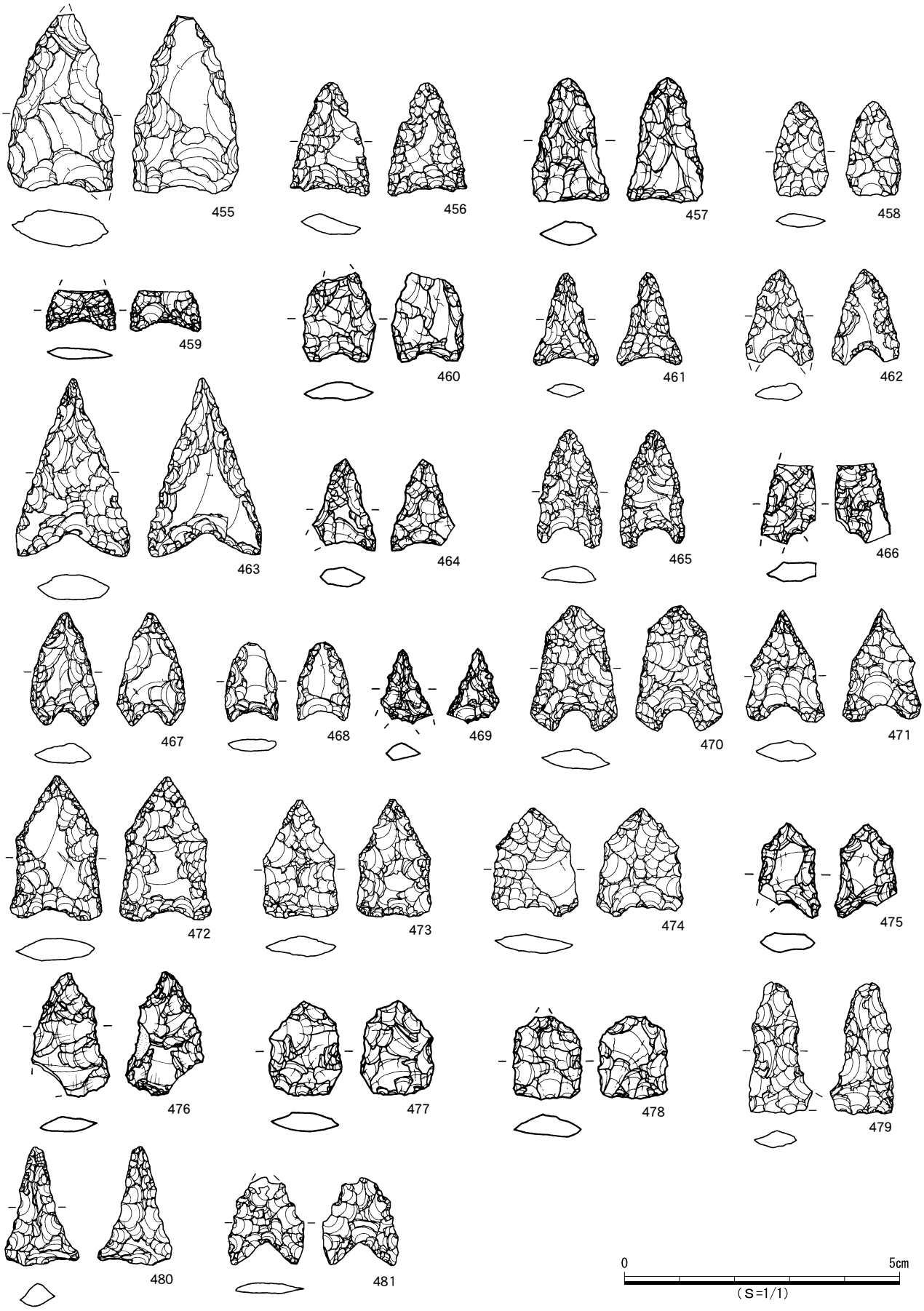
804，805は，石皿であろう。804は，C－42区，E－40区で別に検出されたが，接合した。接合状況から，破損後の縁辺部に敲打痕が確認できることから，敲打具としての二次的使用が推測される。

砥石（第145図809 ～ 811）

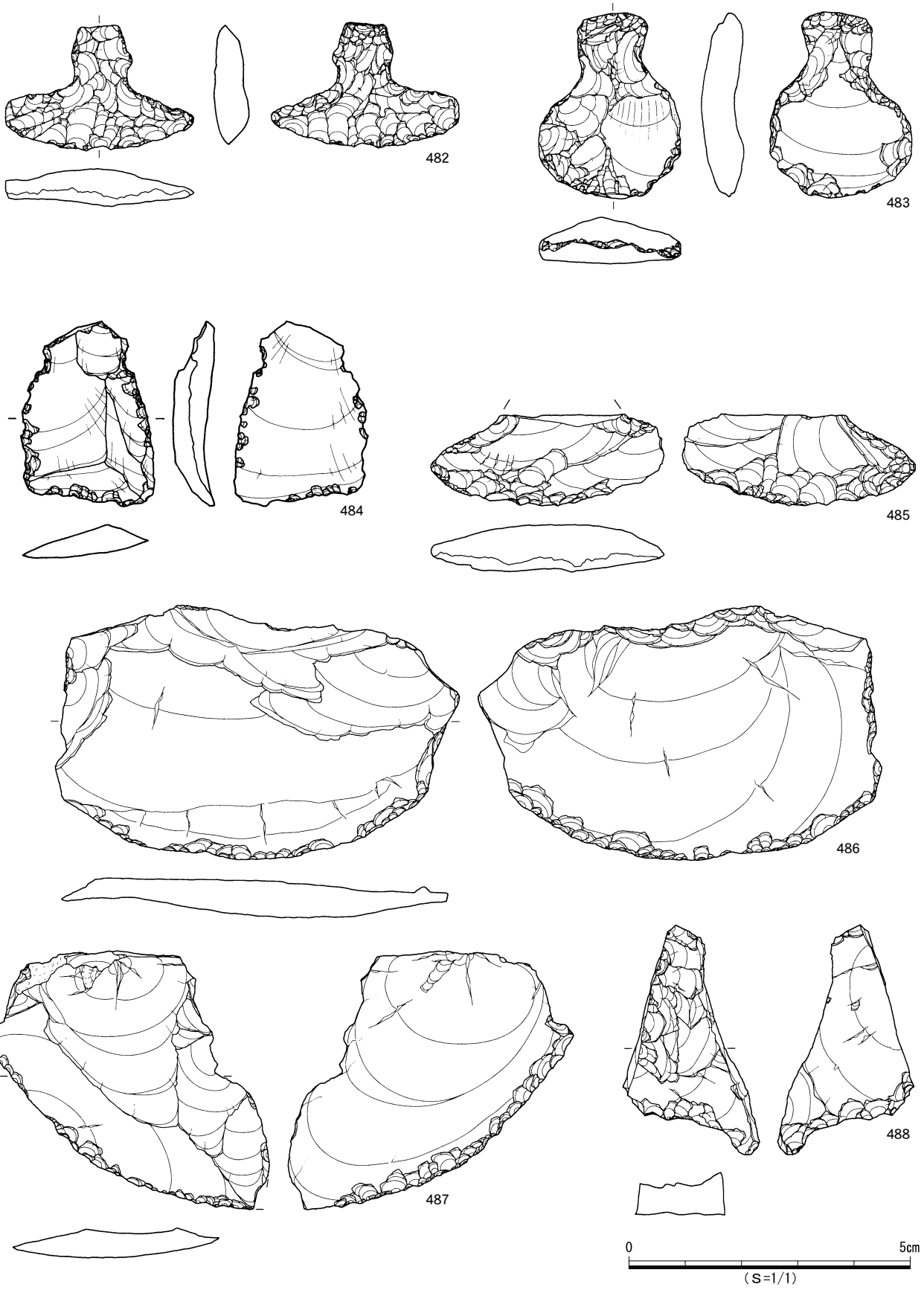
809，811は，砂岩製の砥石である。どちらも断面がU字状に研磨された面を持つ，有溝砥石である。石材或いは金属の研磨加工に用いられたと考えられる。全ての面を砥石として使用しているが，縁辺の一部に敲打痕が確認できるため，敲石としての使用も想定される。810は砂粒の細かい砂岩を用いた砥石である。表裏面及び側面に研磨の形跡が観察できる。石材の種類，及び使用状況から，製品の仕上げ研磨段階で用いられたと思われる。こちらも一部敲打痕が確認できる。なお，小型の砥石，携帯用砥石などは，使用痕の状況から，磨石類に含まれている可能性がある。



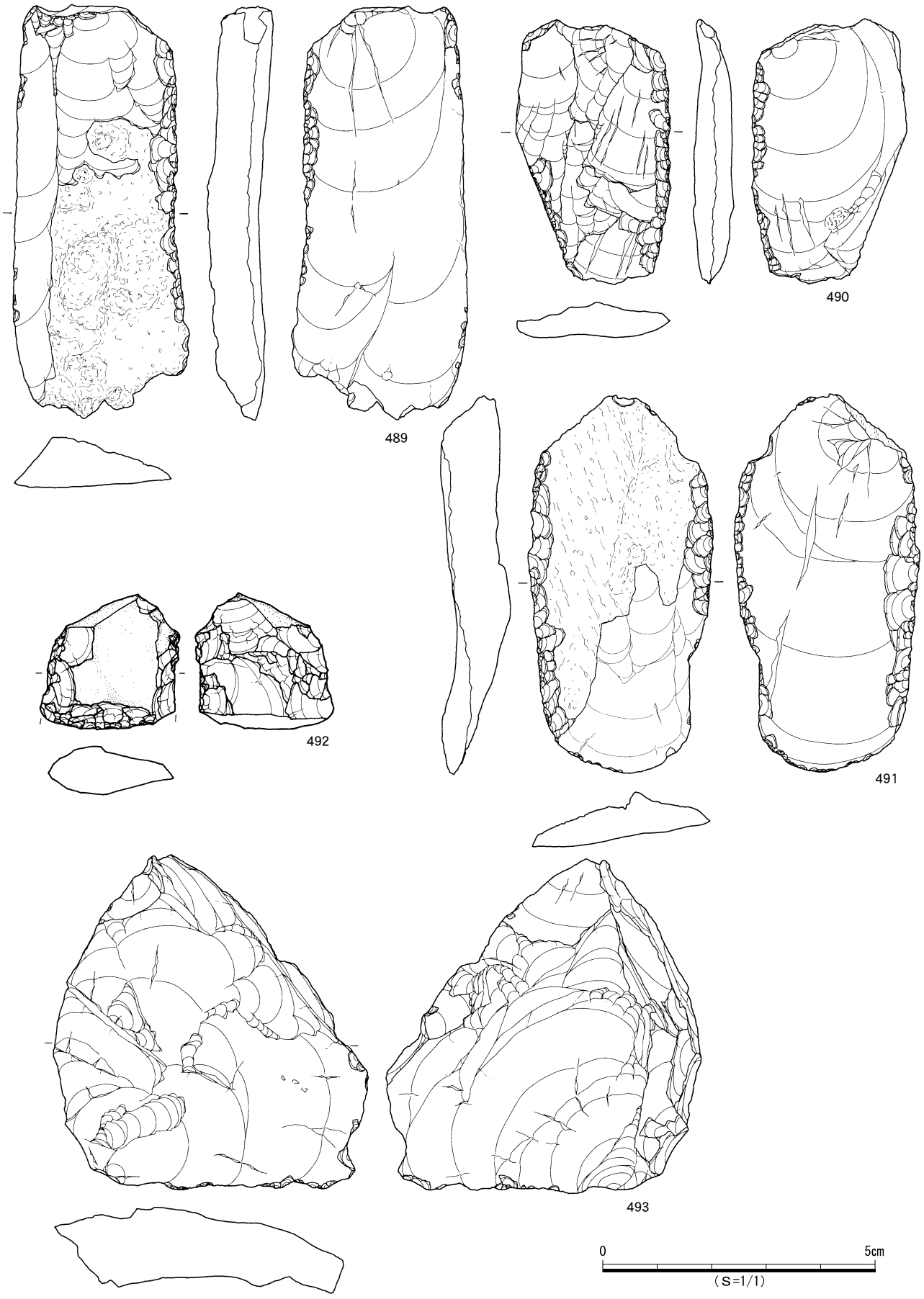
第106図　石器（１）打製石鏃１



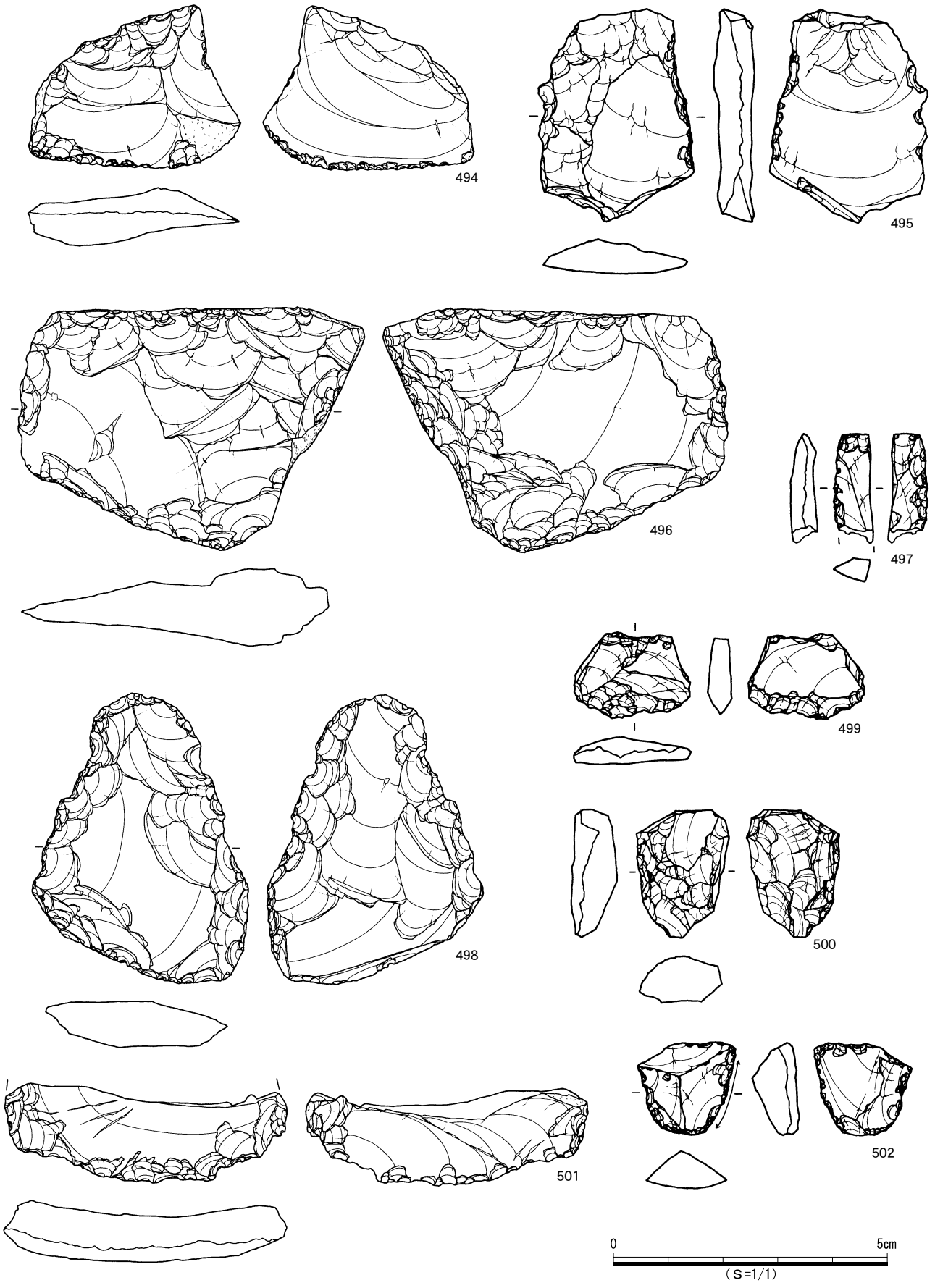
第107図　石器（２）打製石鏃２



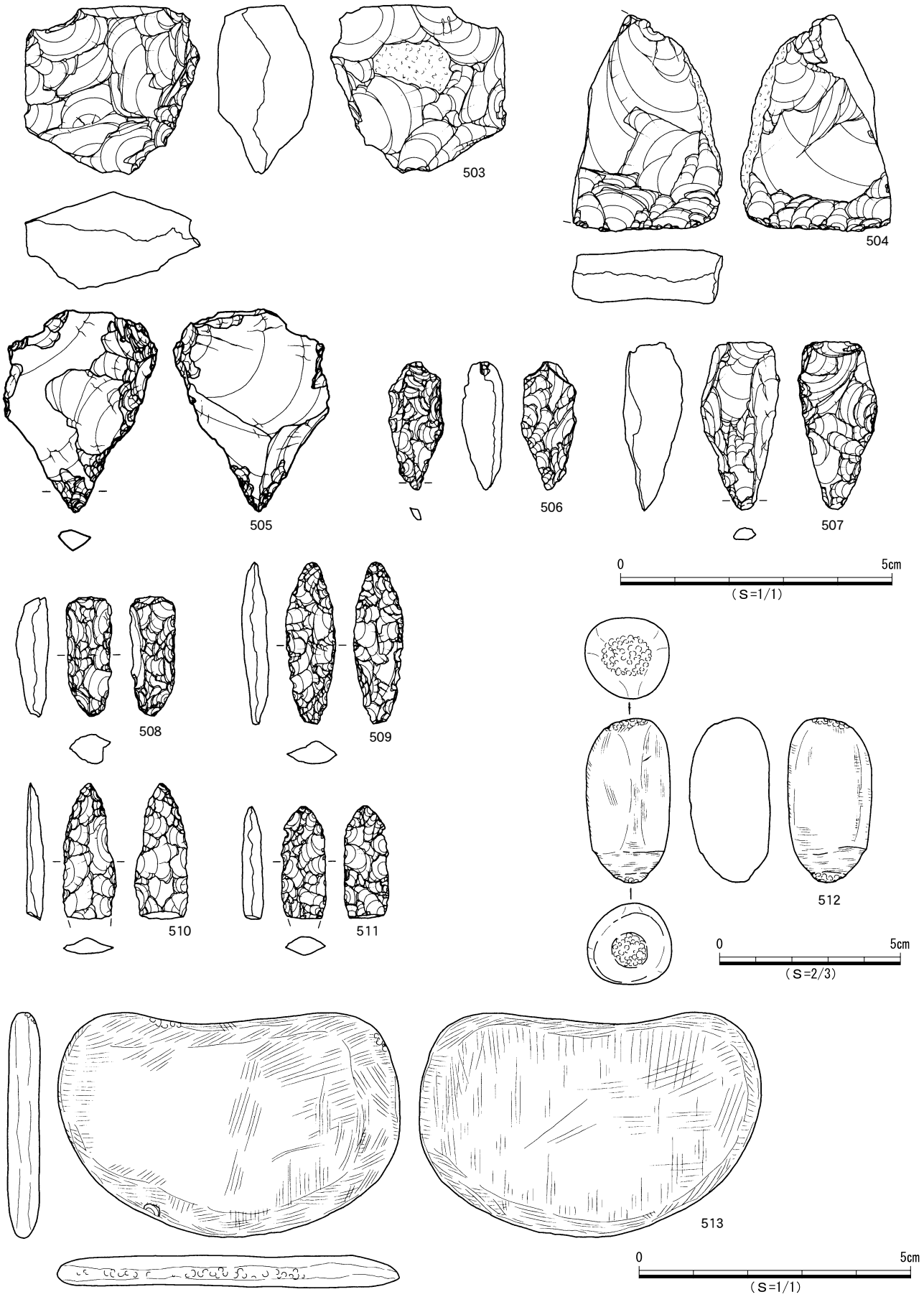
第108図　石器（３）石匙・スクレイパー１



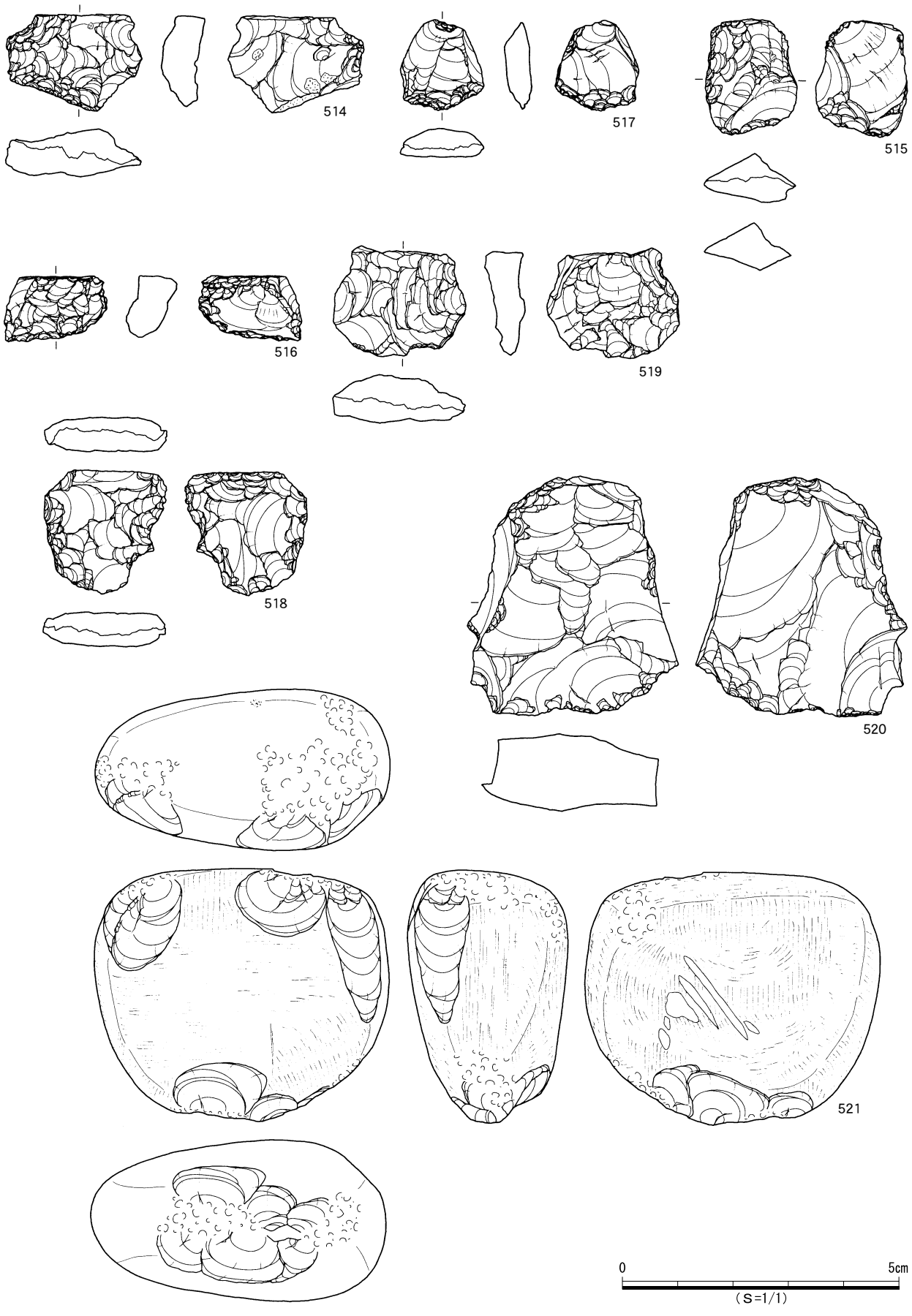
第109図　石器（４）スクレイパー２



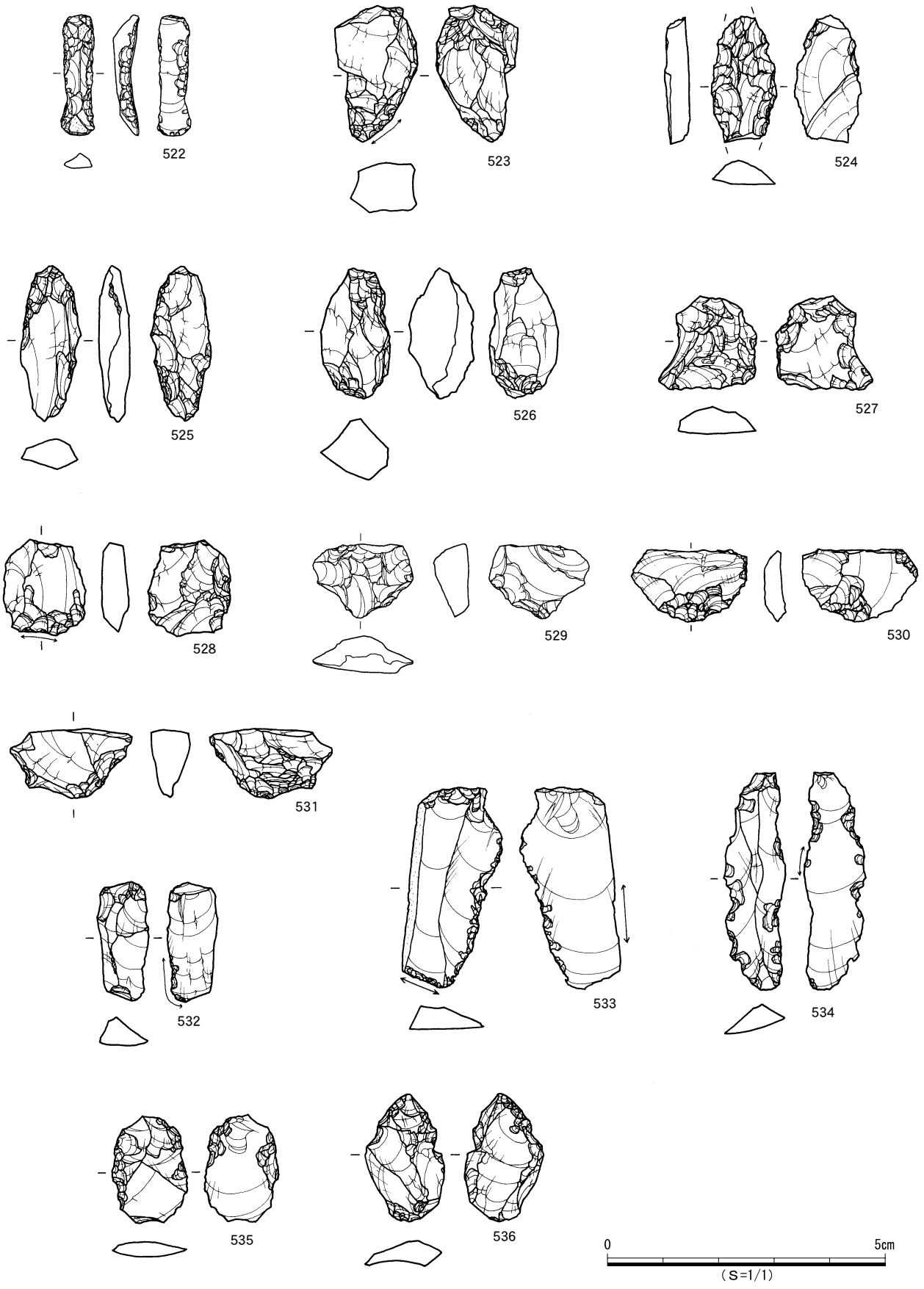
第110図　石器（５）スクレイパー３



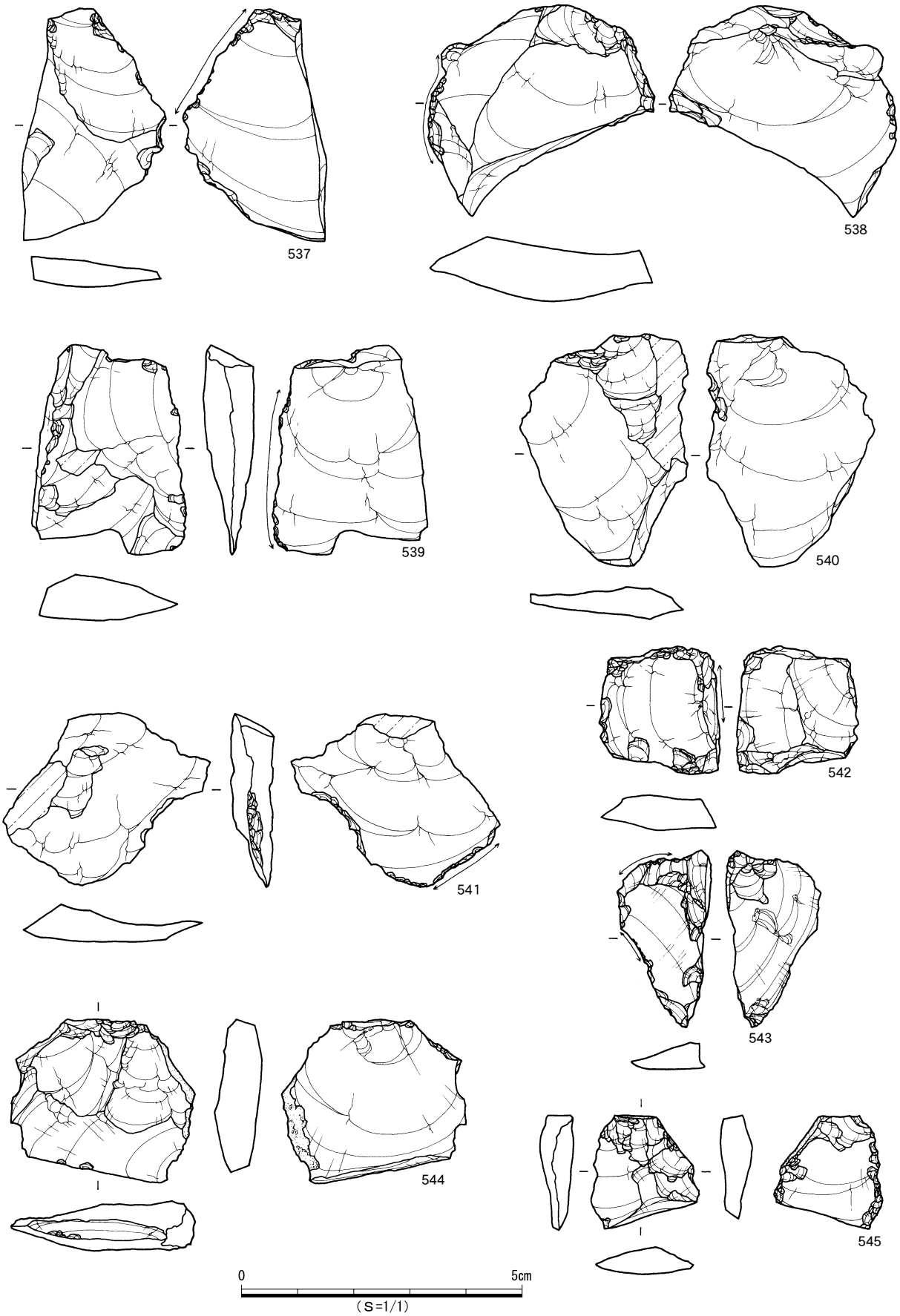
第111図　石器（6）スクレイパー・石錐・石槍・穿孔具



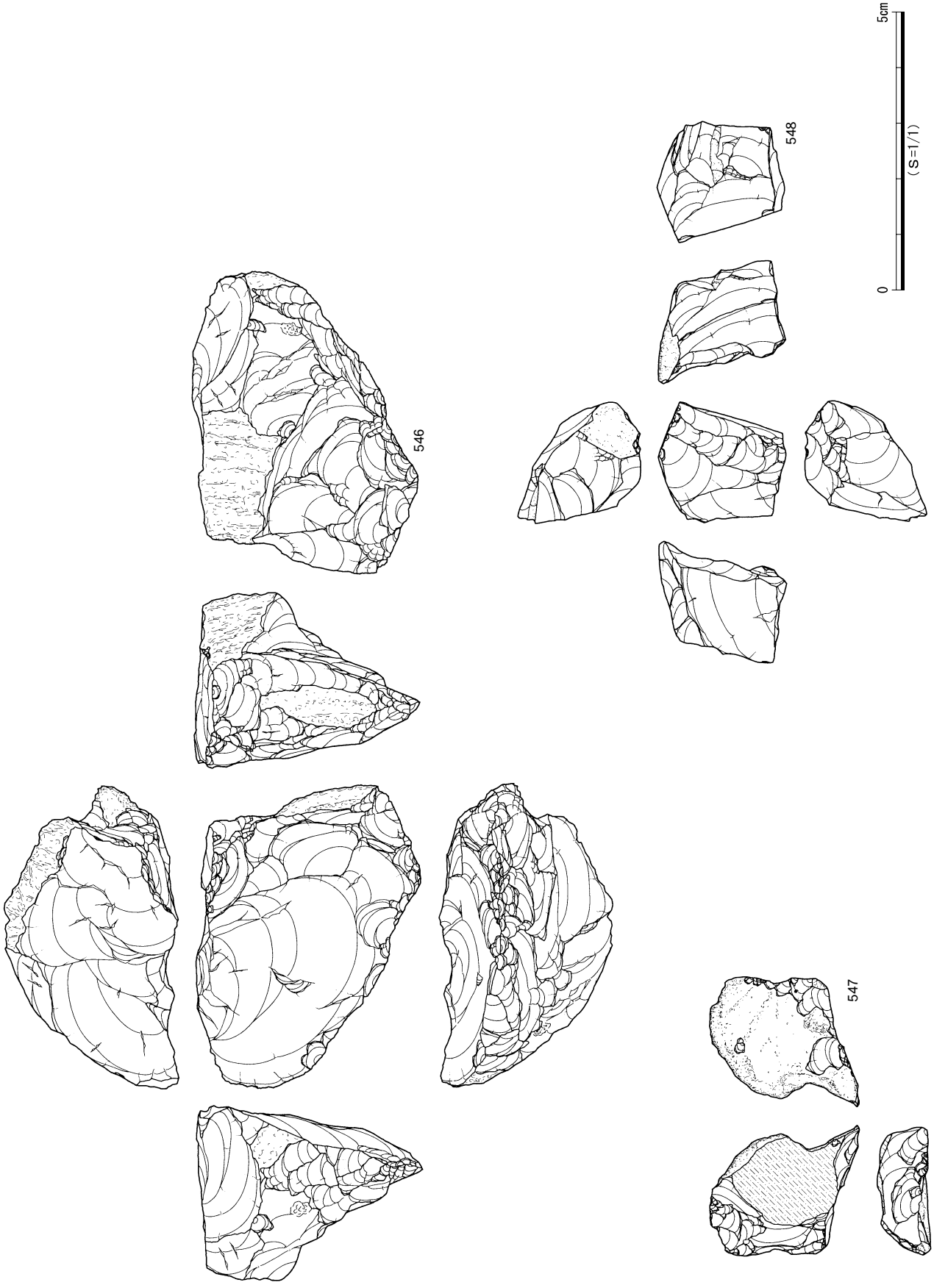
第112図　石器（７）楔形石器



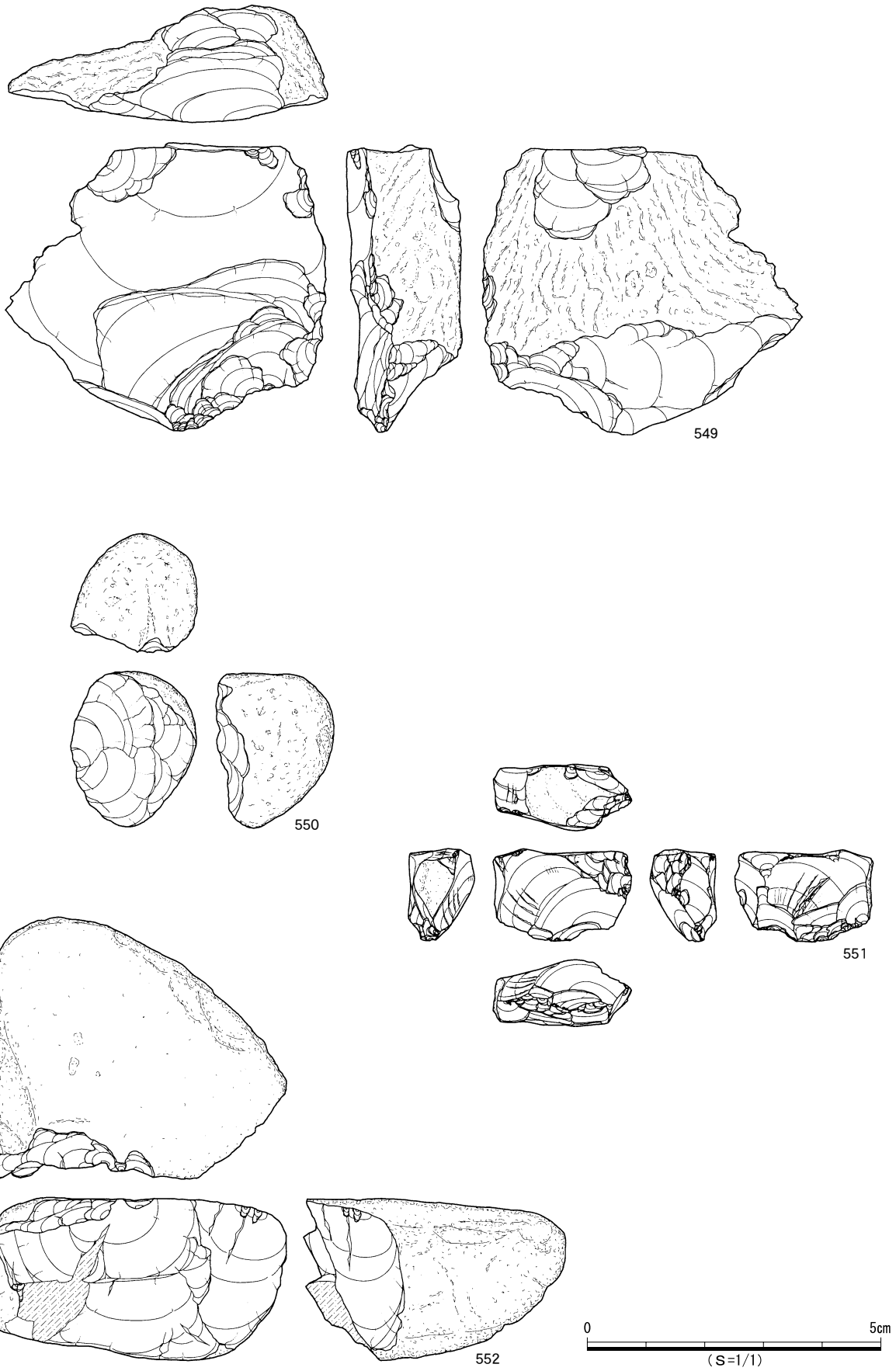
第113図　石器（８）二次加工剥片



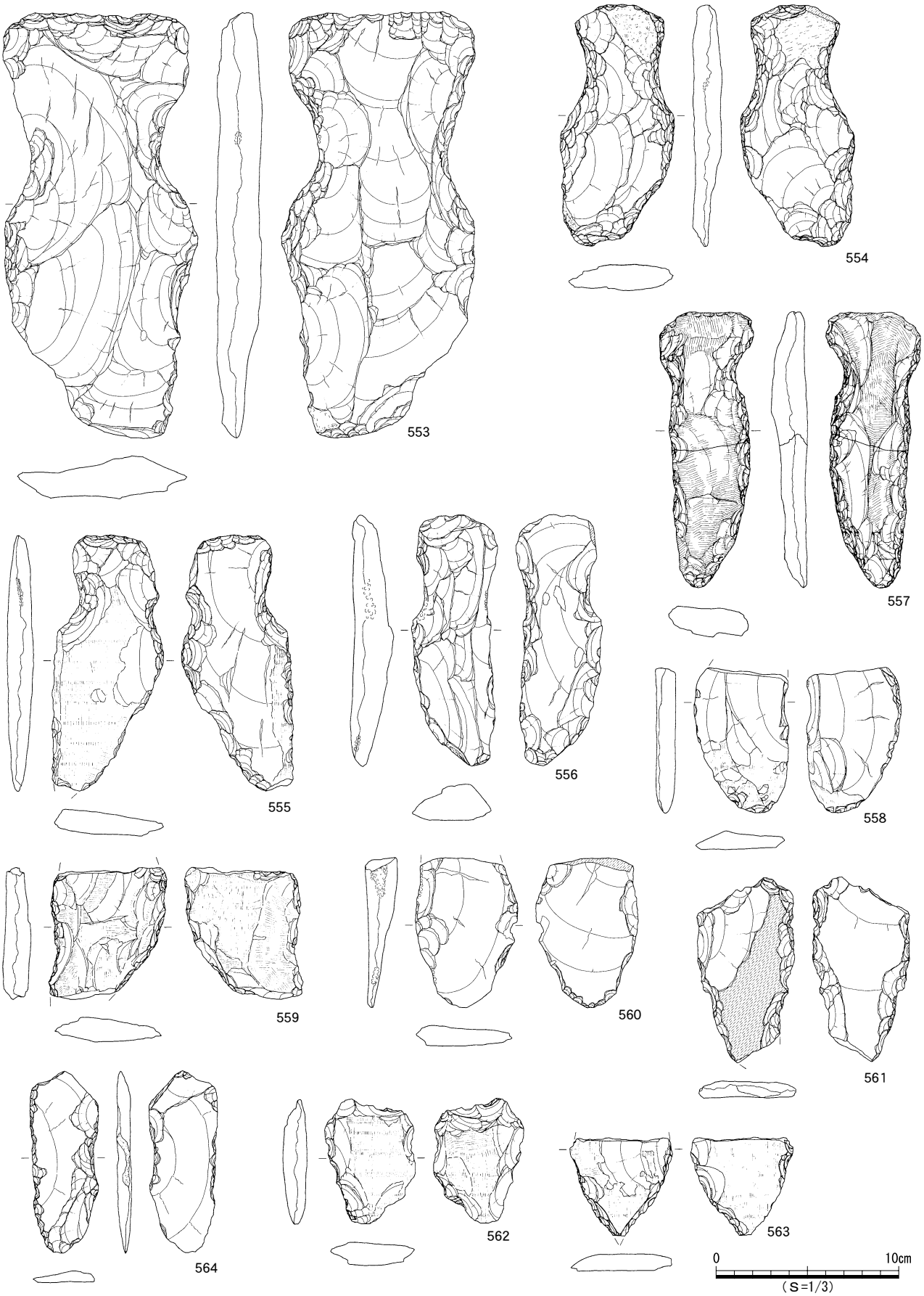
第114図　石器（９）使用痕剥片



第115図　石器（10）石核 1

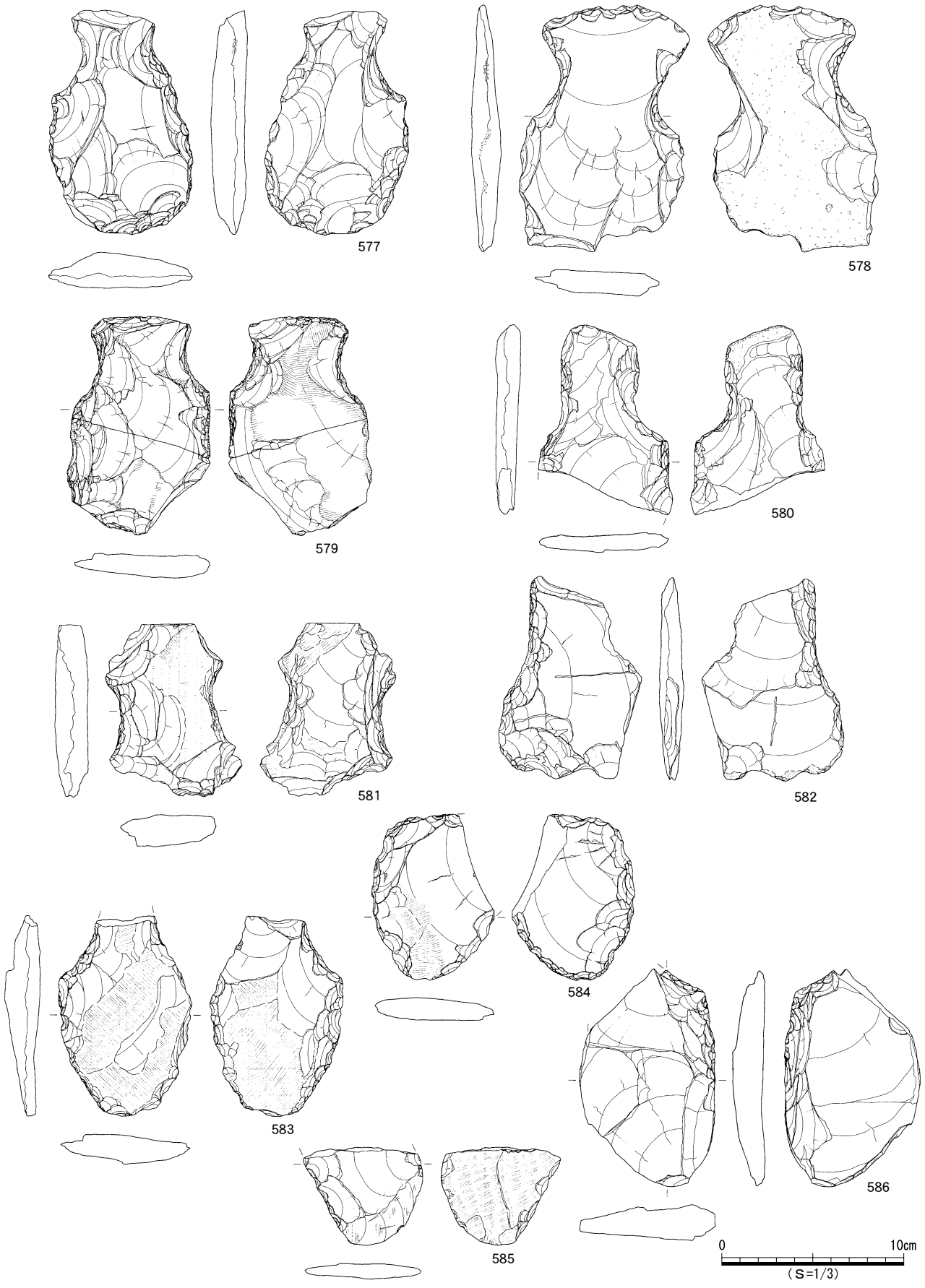


第116図　石器（11）石核２

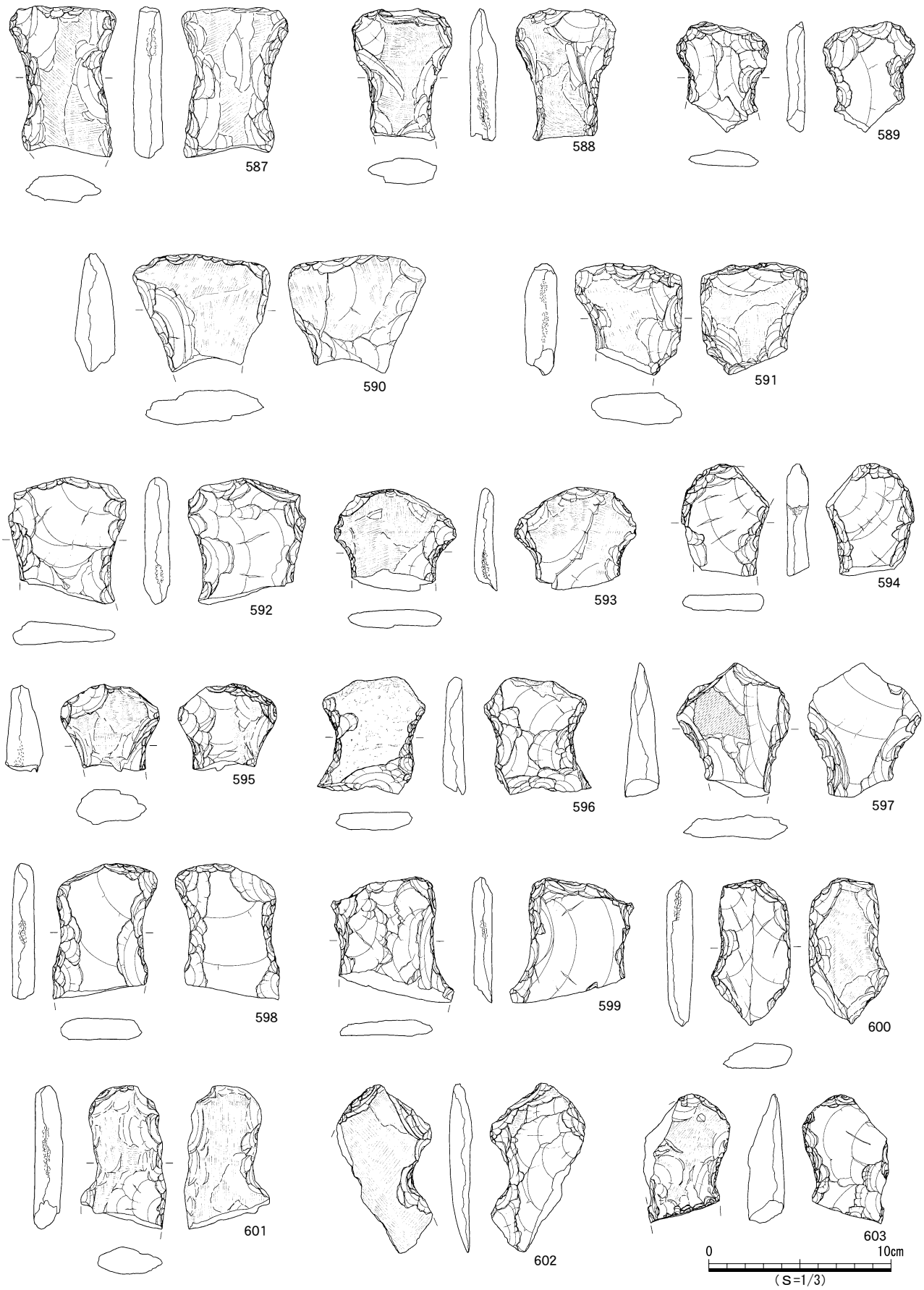


第117図　石器（12）打製石斧 1

第118図　石器（13）打製石斧２



第119図　石器（14）打製石斧３

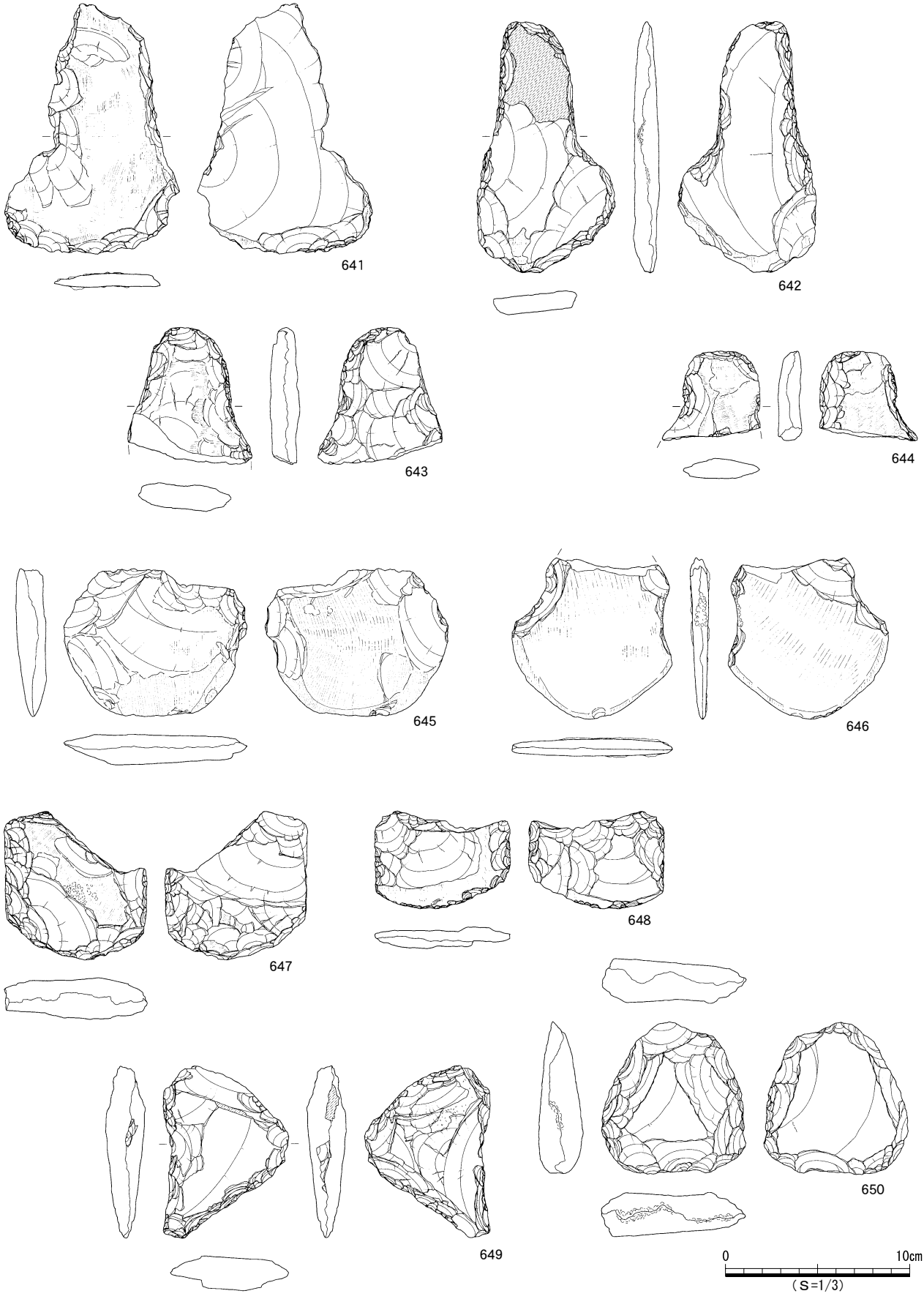


第120図　石器（15）打製石斧４

第121図　石器（16）打製石斧５

第122図　石器（17）局部磨製石斧 1

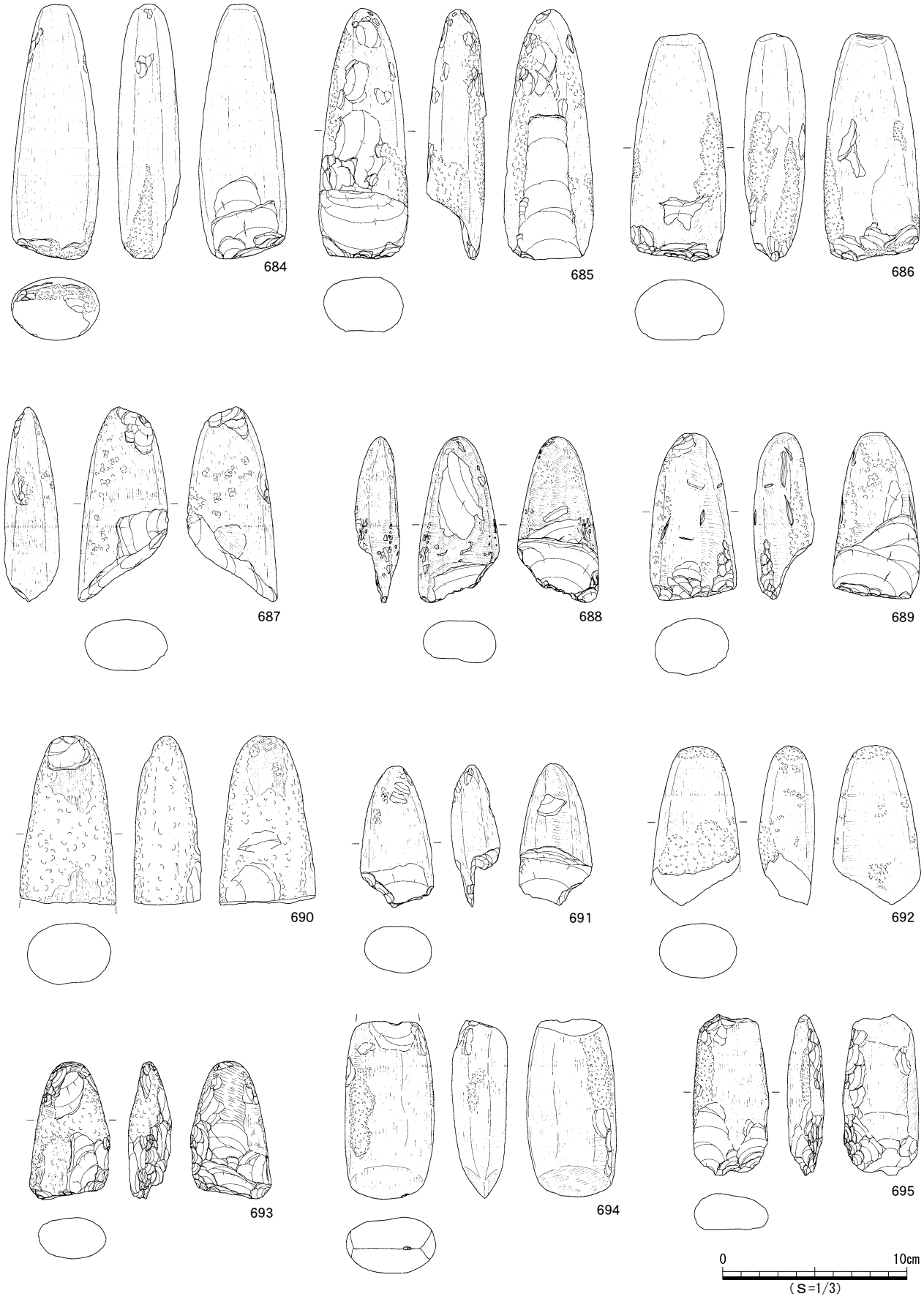
第123図　石器（18）局部磨製石斧２



第124図　石器（19）局部磨製石斧 3

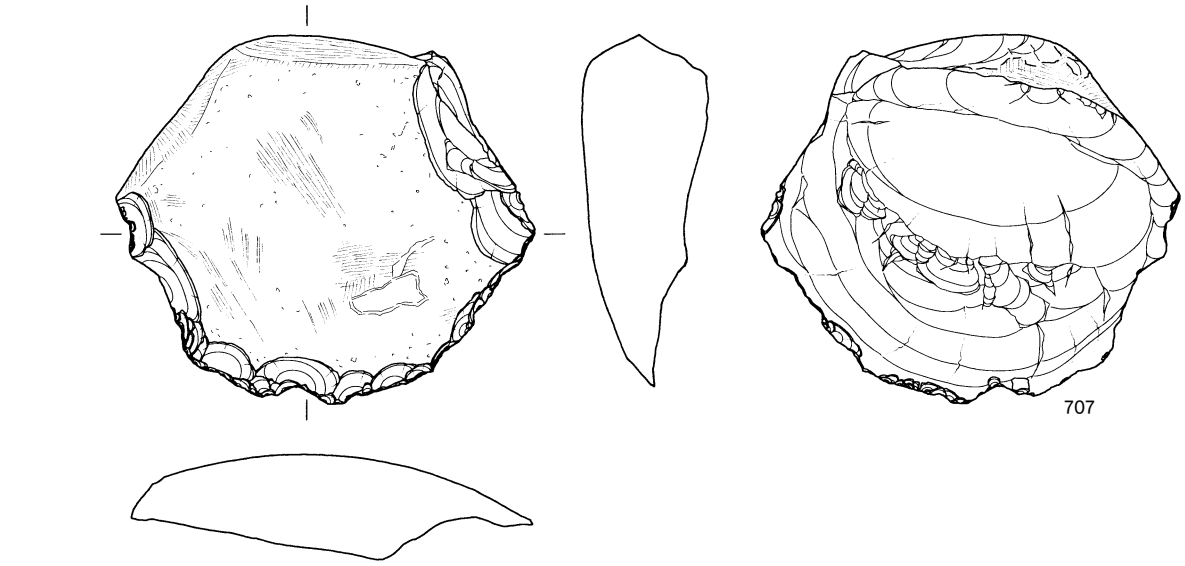
第125図　石器（20）磨製石斧 1

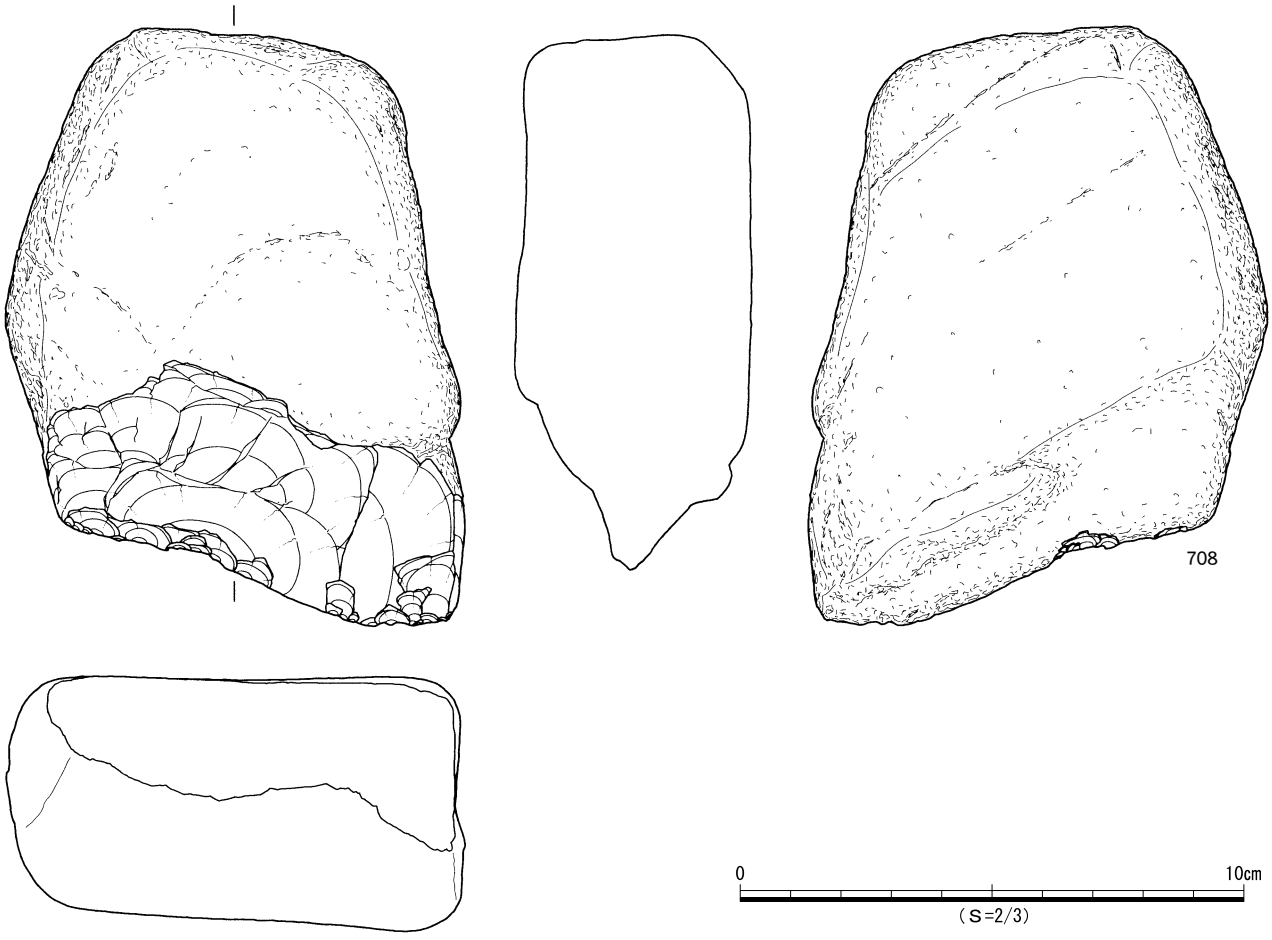
第126図　石器（21）磨製石斧２



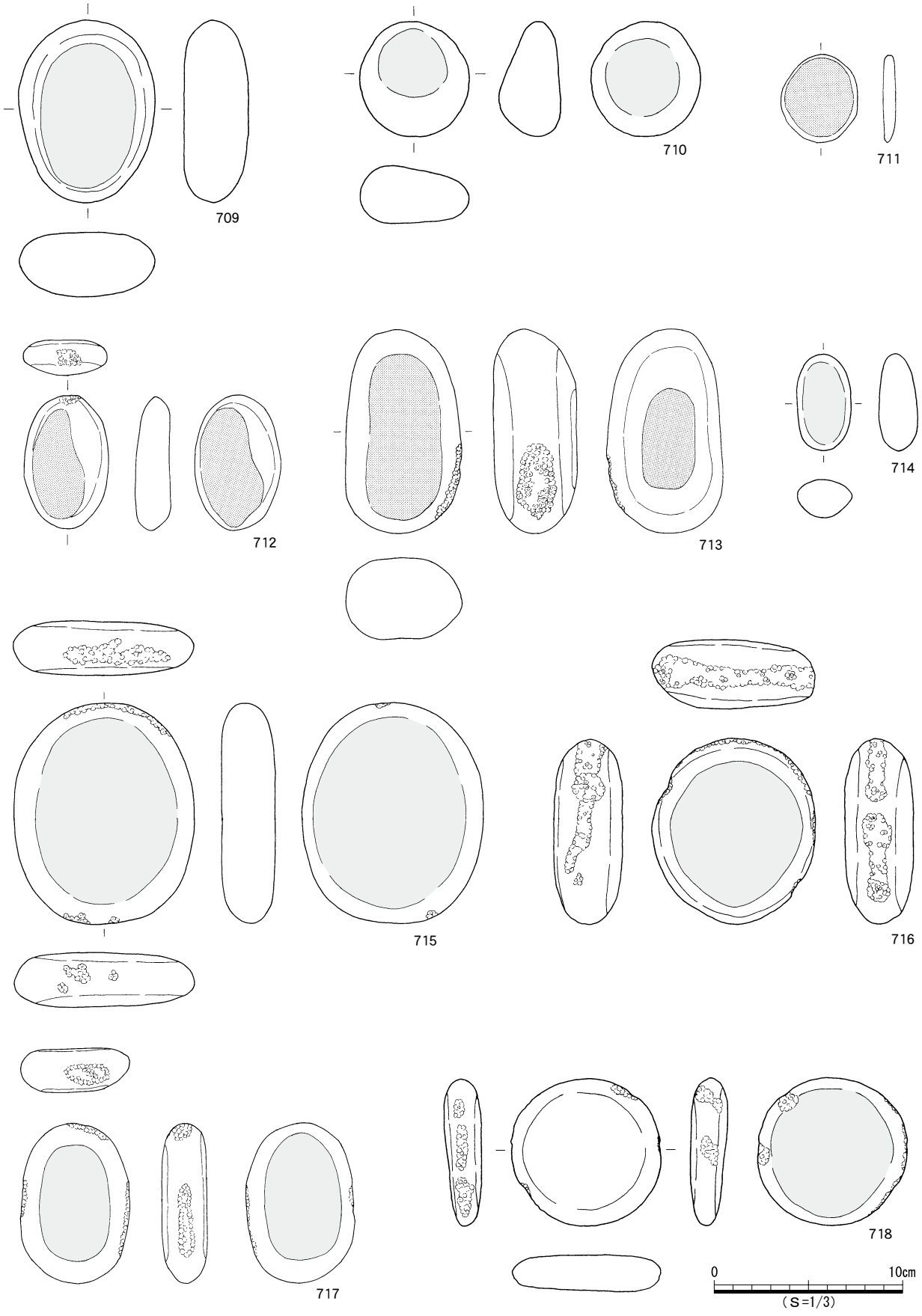
第127図　石器（22）磨製石斧３

第128図　石器（23）磨製石斧４

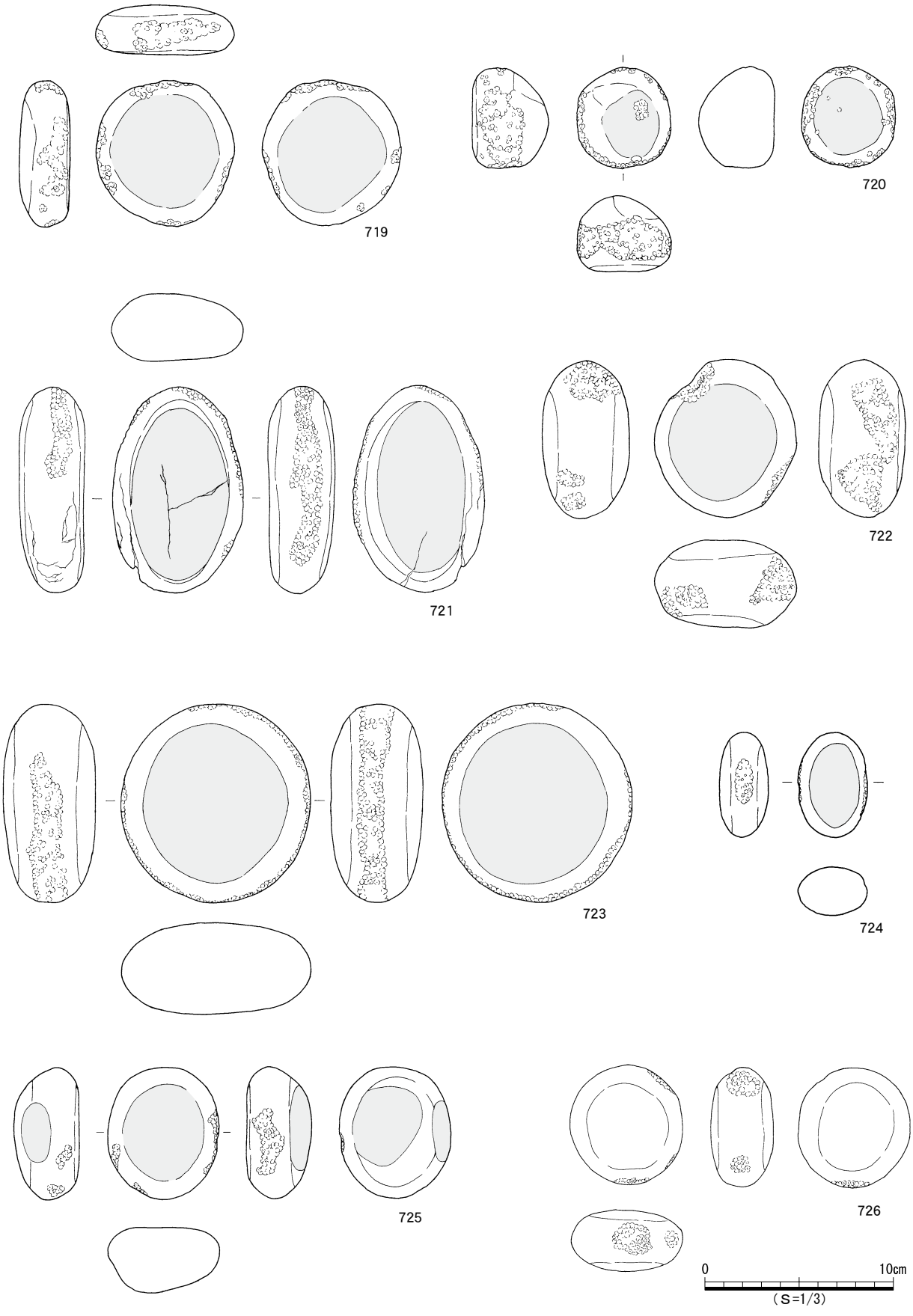




第129図　石器（24）礫器

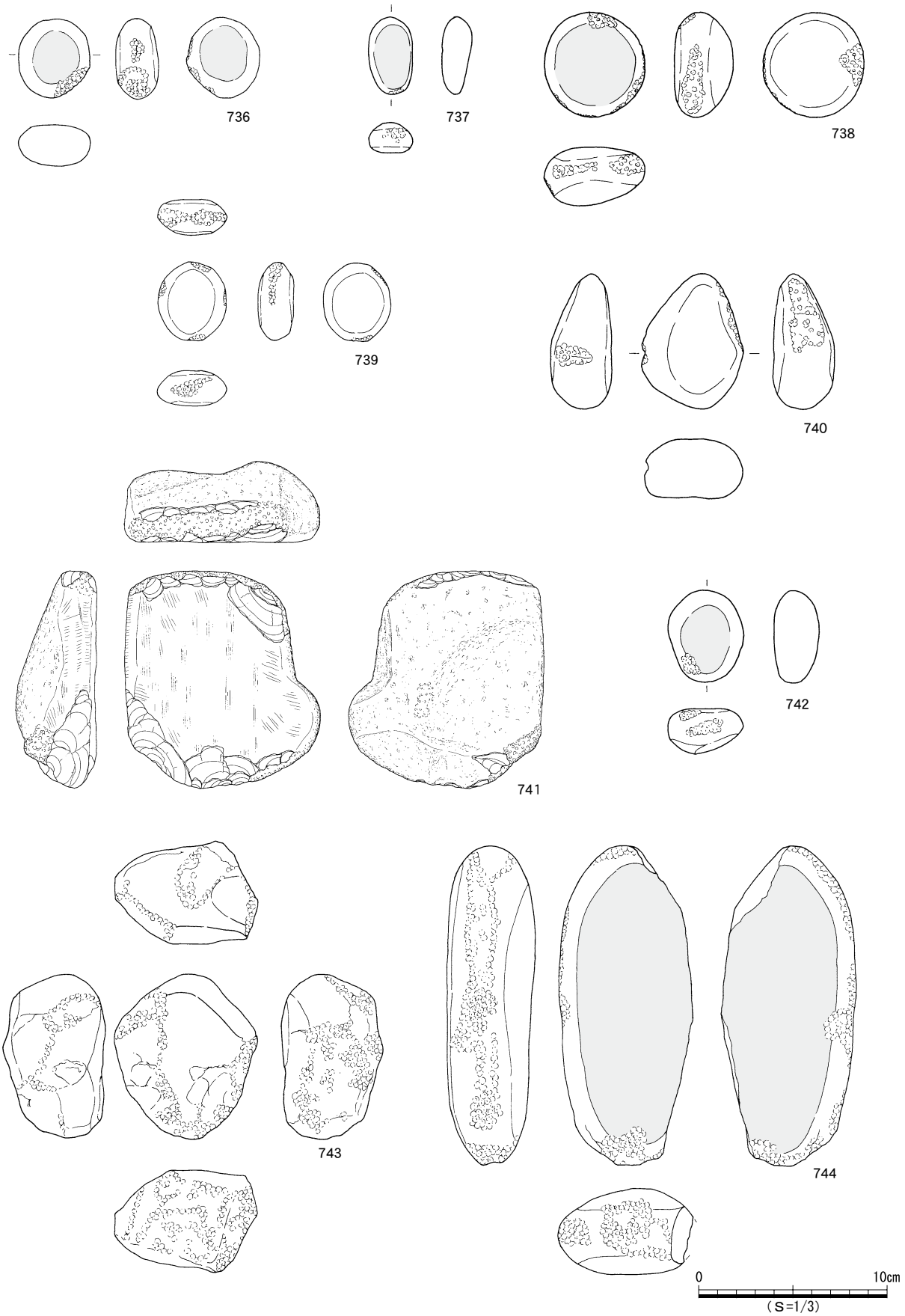


第130図　石器（25）磨石・敲石 1



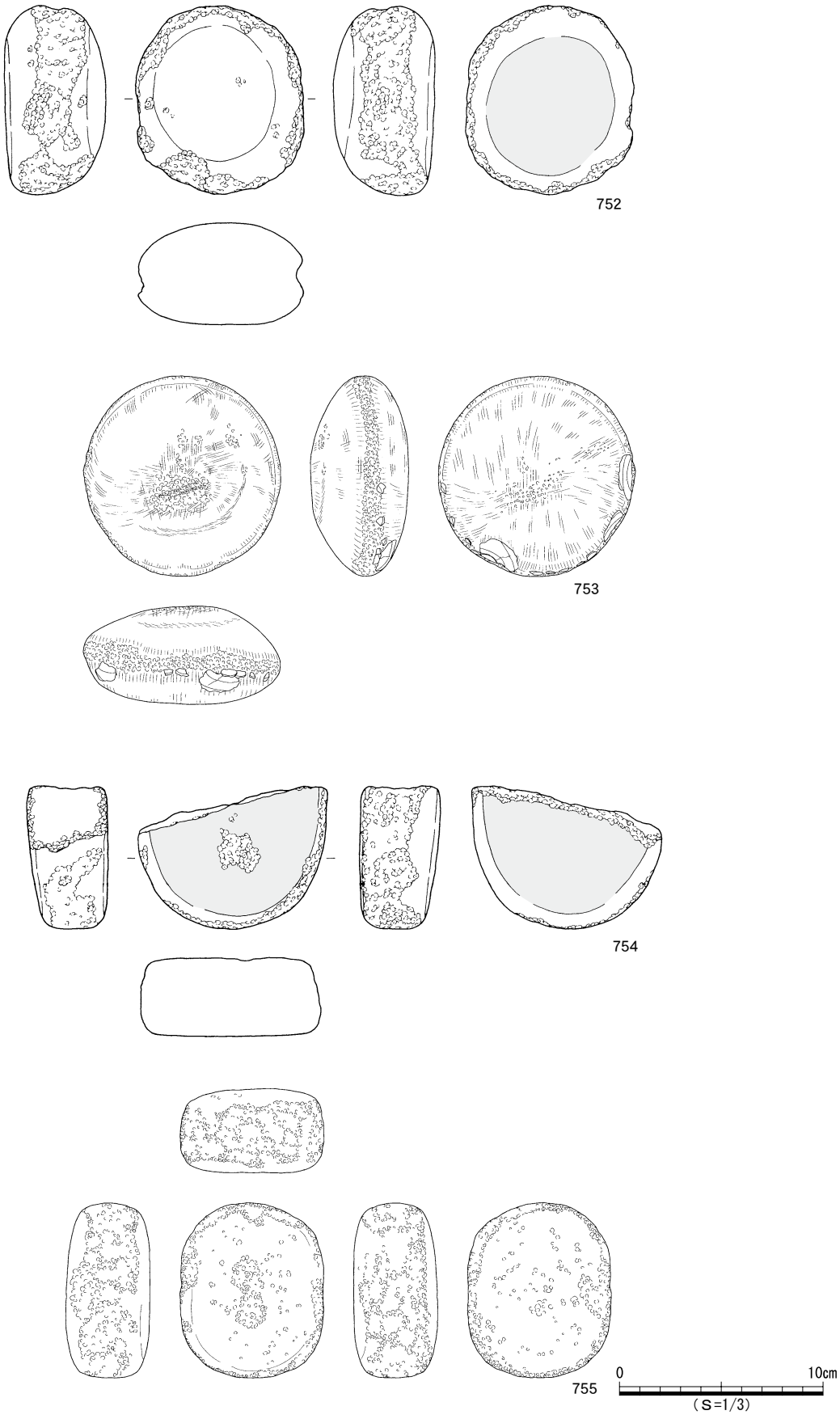
第131図　石器（26）磨石・敲石 2

第132図　石器（27）磨石・敲石 3

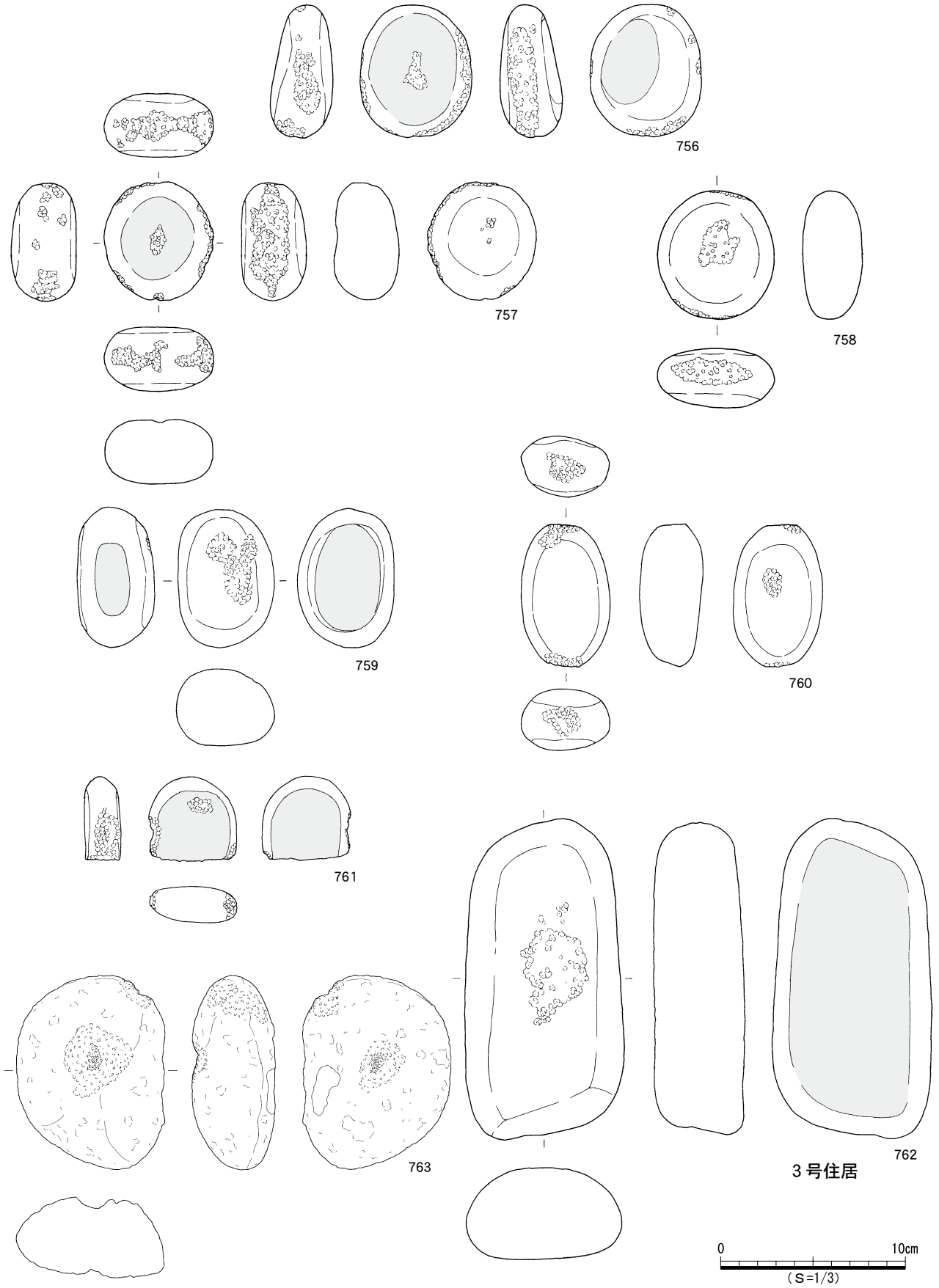


第133図　石器（28）磨石・敲石４

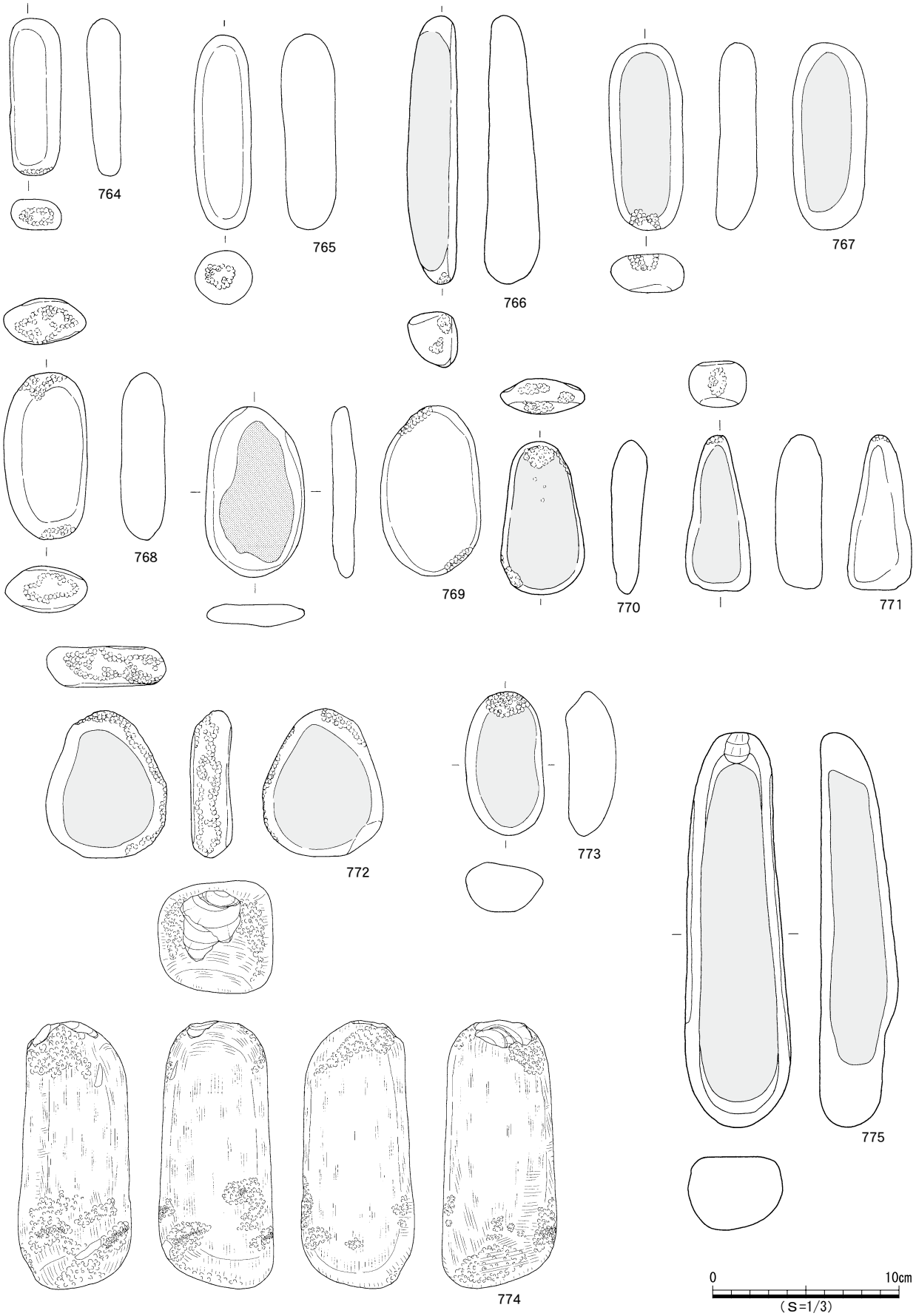
第134図　石器（29）磨石・敲石 5



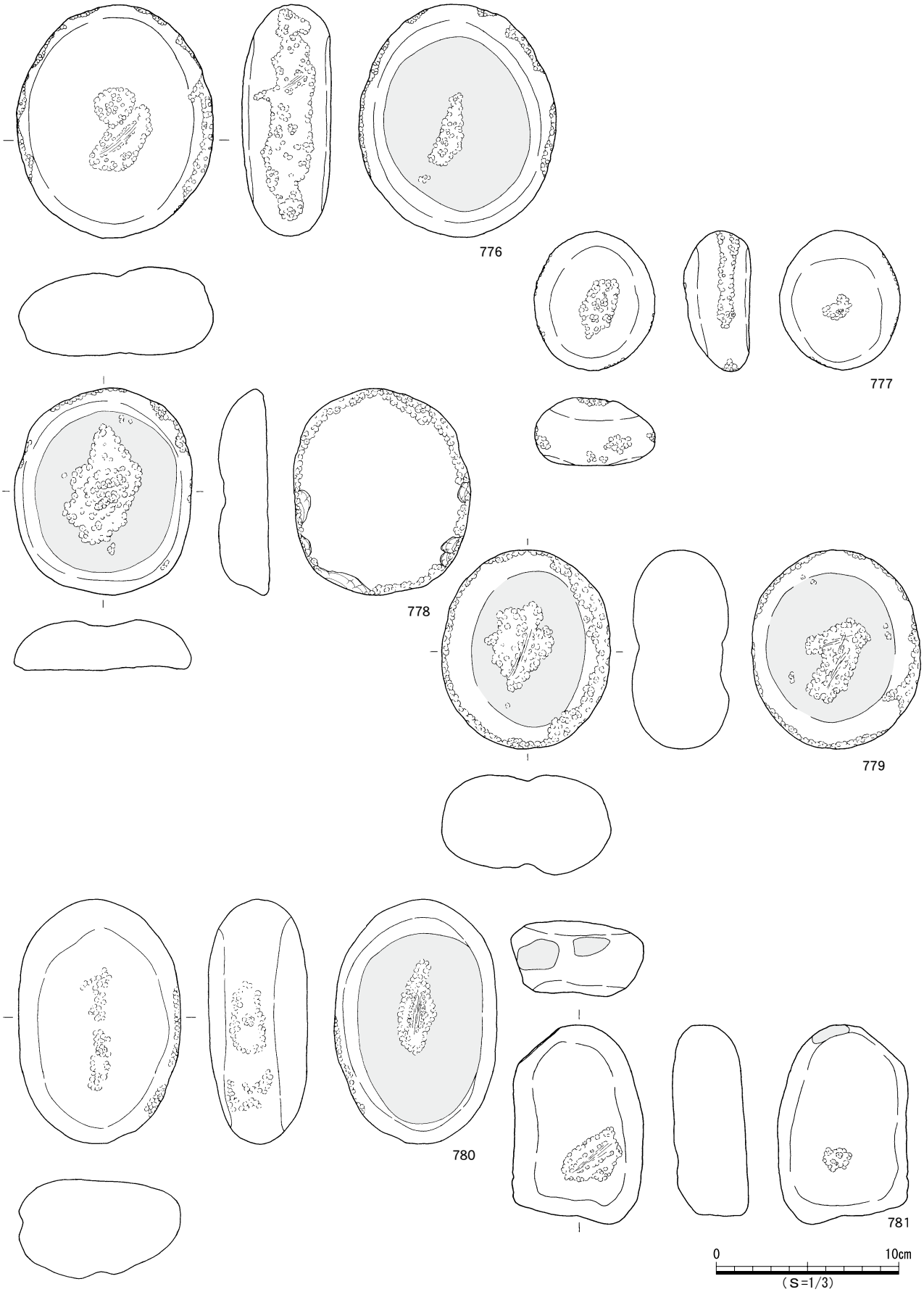
第135図　石器（30）磨石・敲石 6



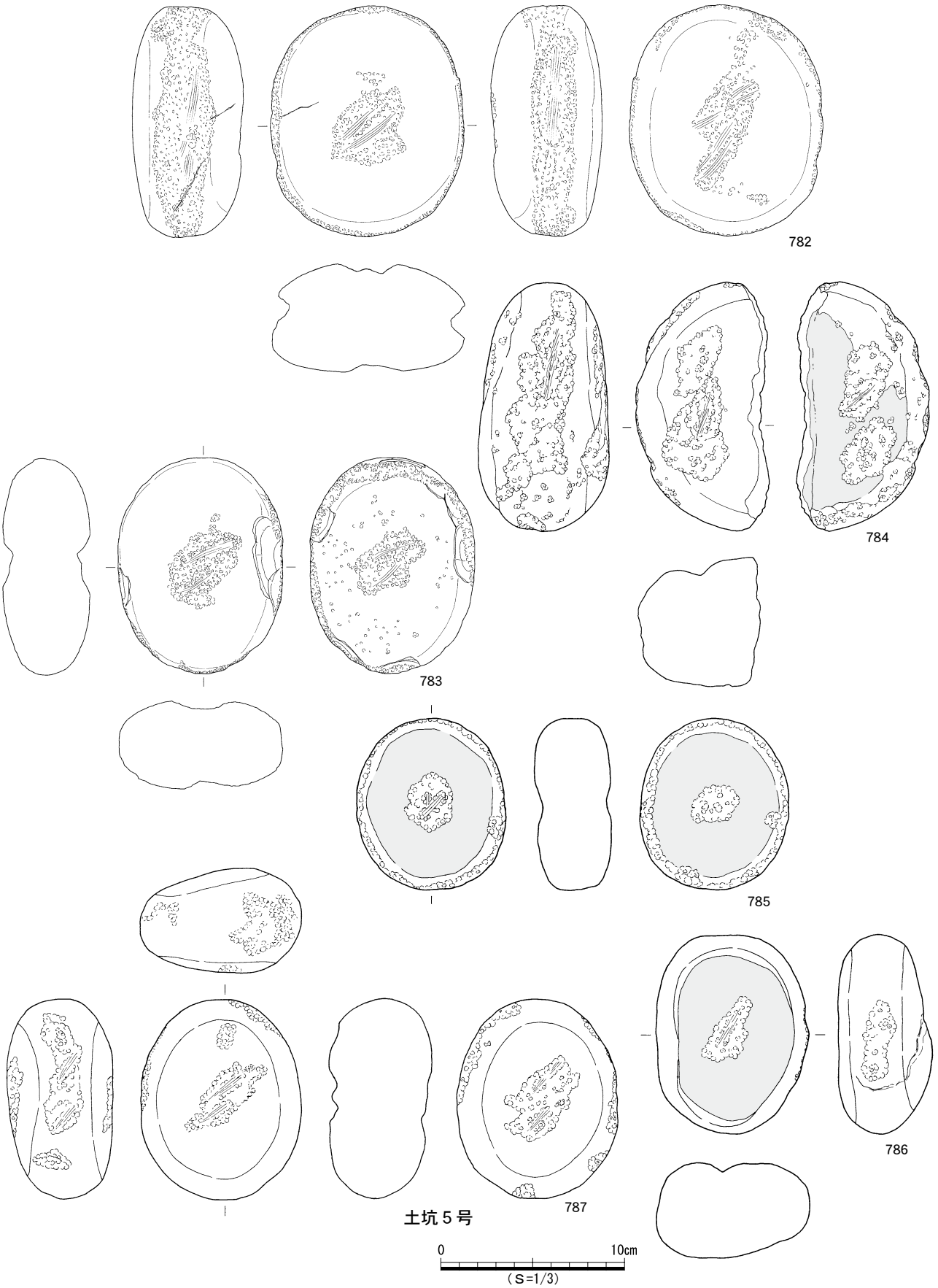
第136図　石器（31）磨石・敲石 7



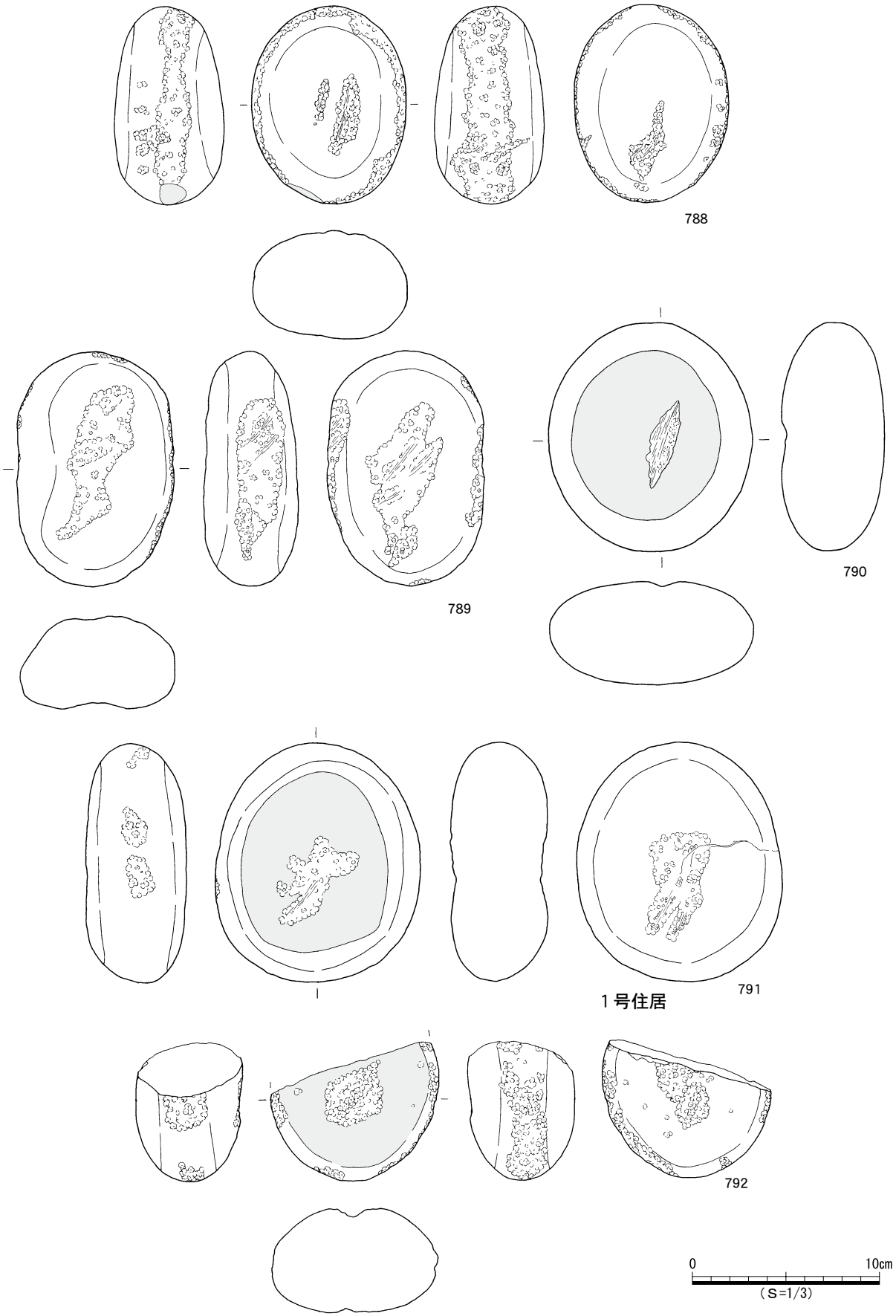
第137図　石器（32）磨石・敲石８



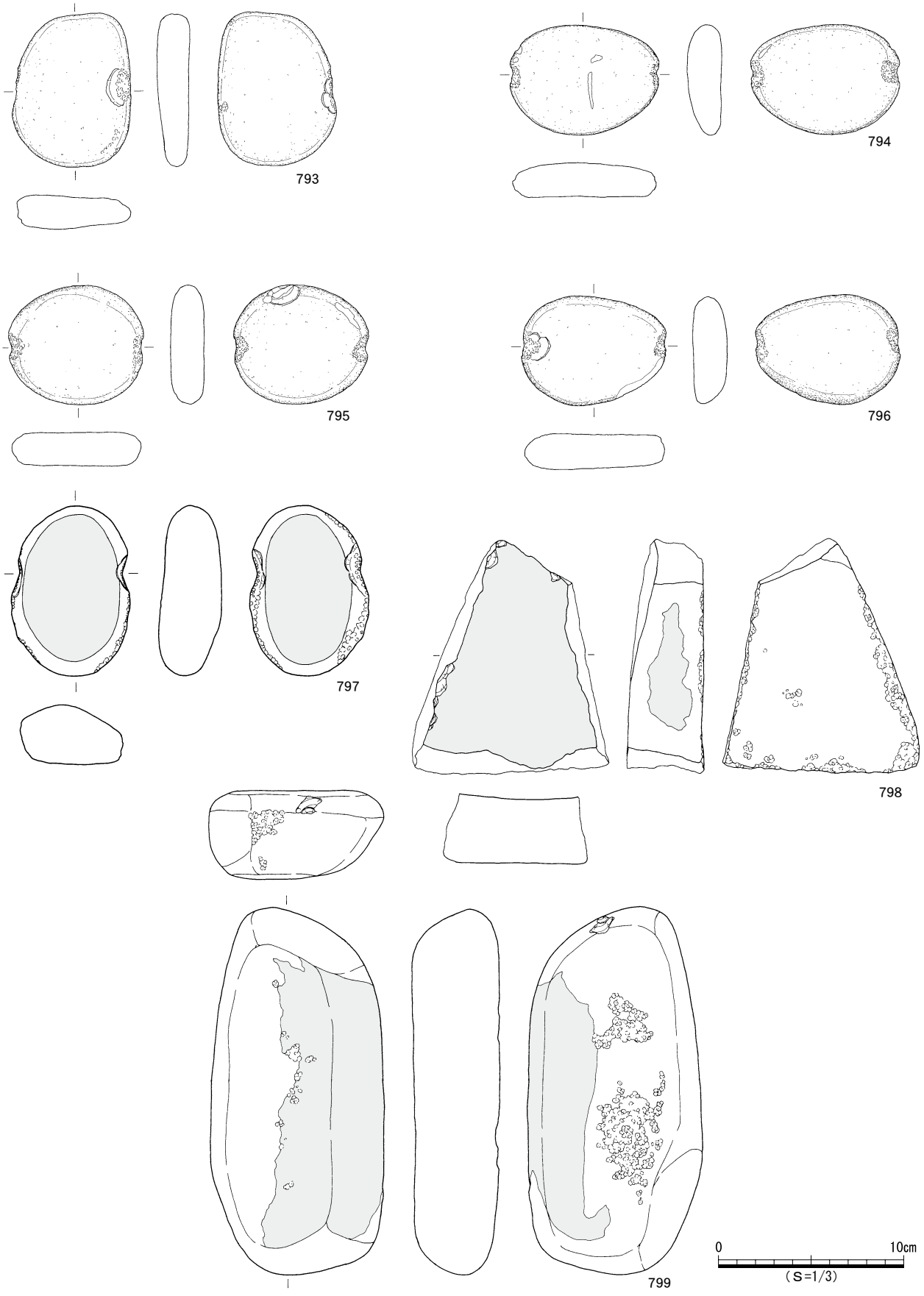
第138図　石器（33）磨石・敲石 9



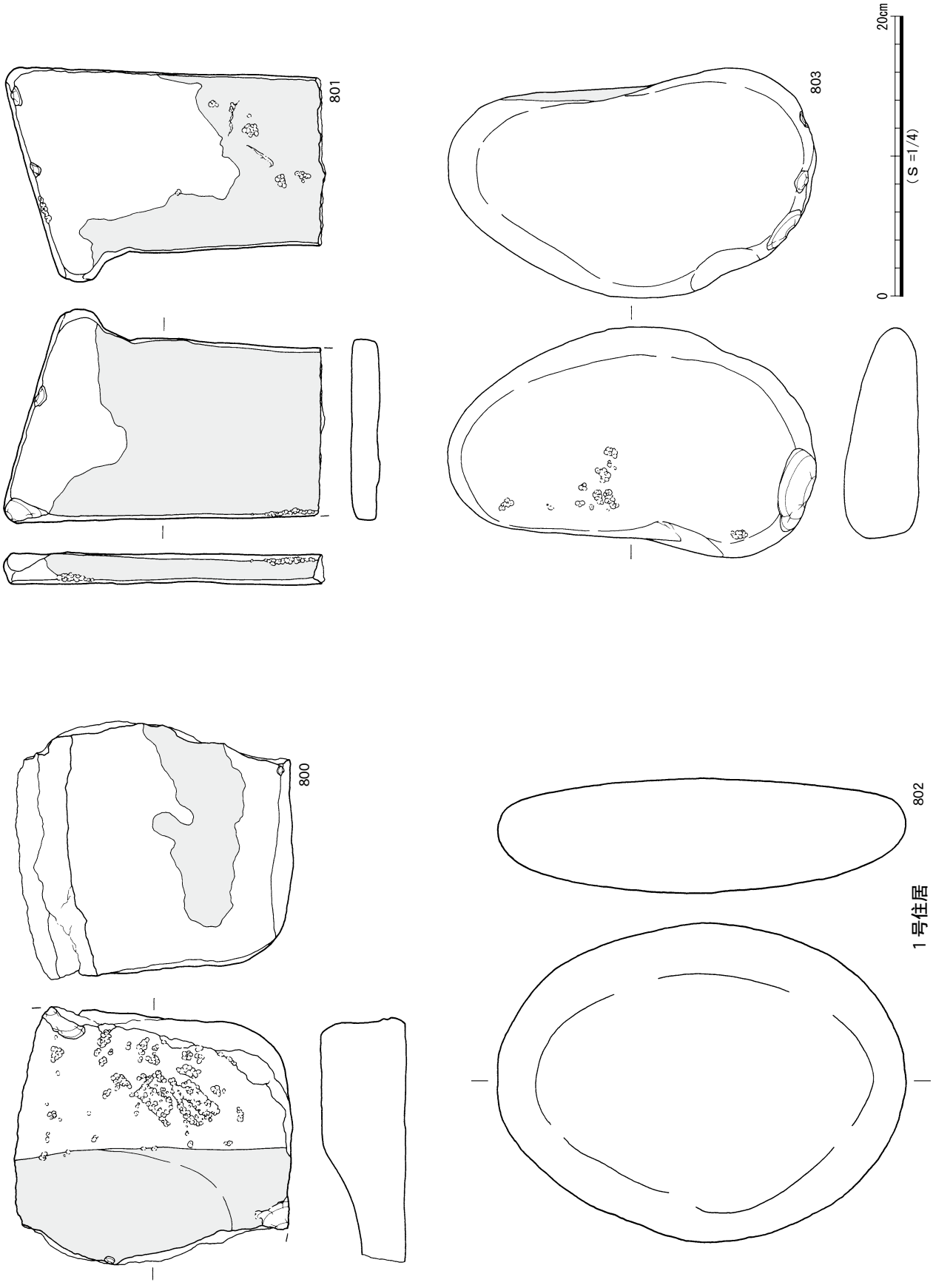
第139図　石器（34）磨石・敲石10



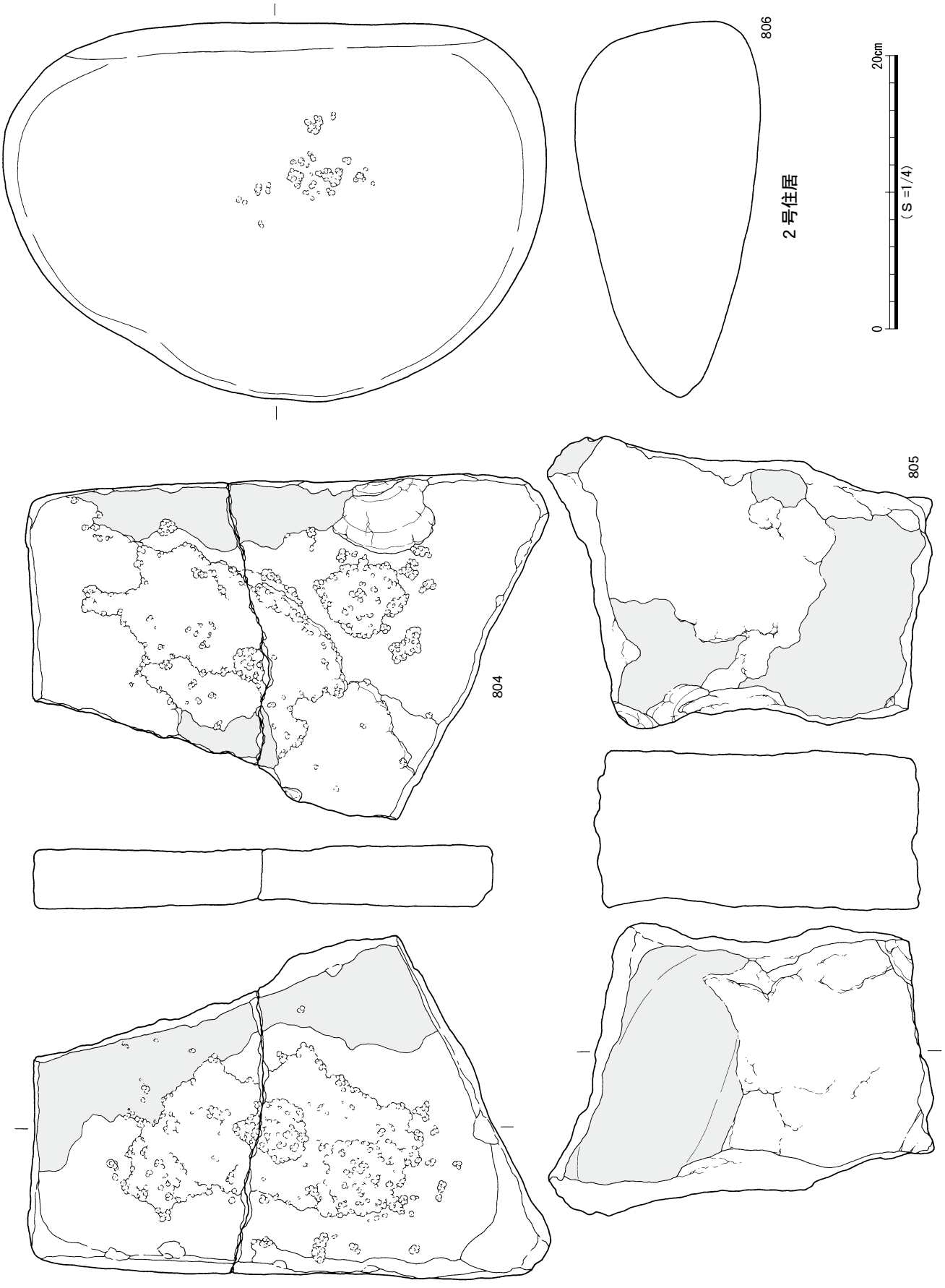
第140図　石器（35）磨石・敲石11



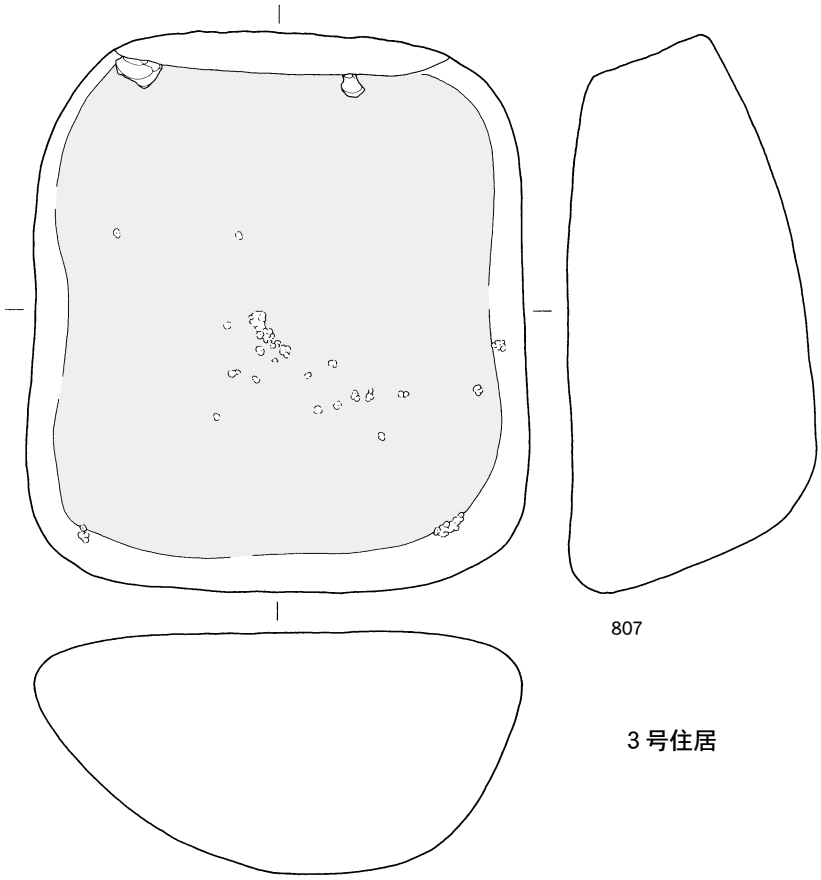
第141図　石器（36）石錘・砥石

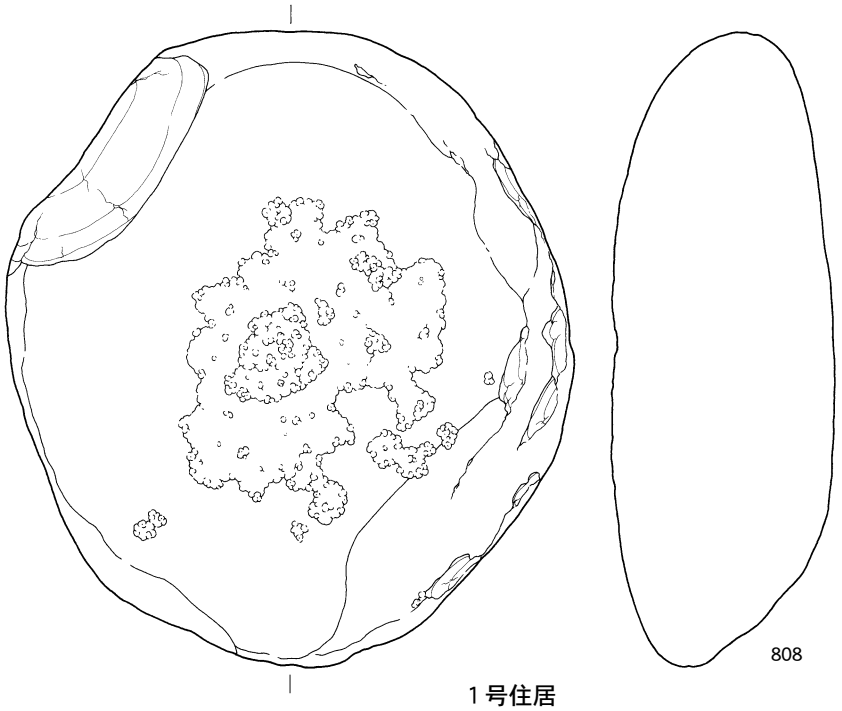


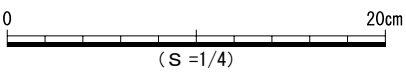
第142図　石器（37）石皿・台石・砥石



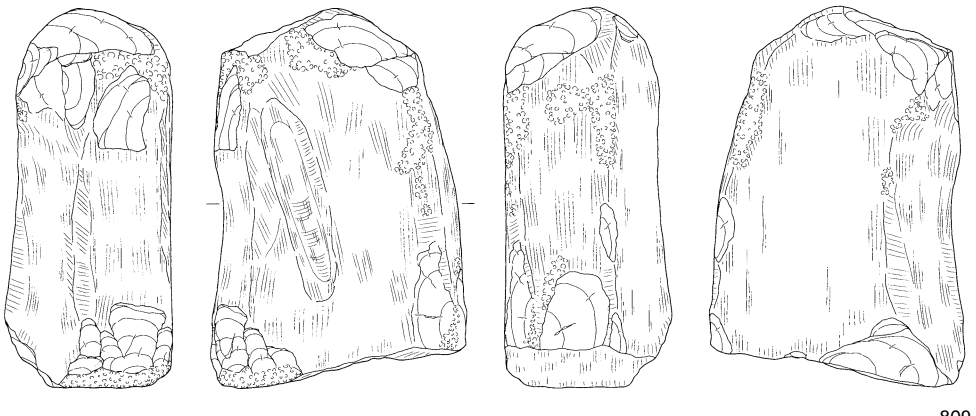
第143図　石器（38）石皿・台石・砥石



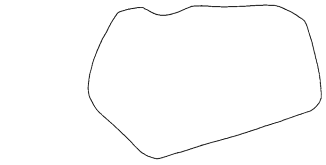


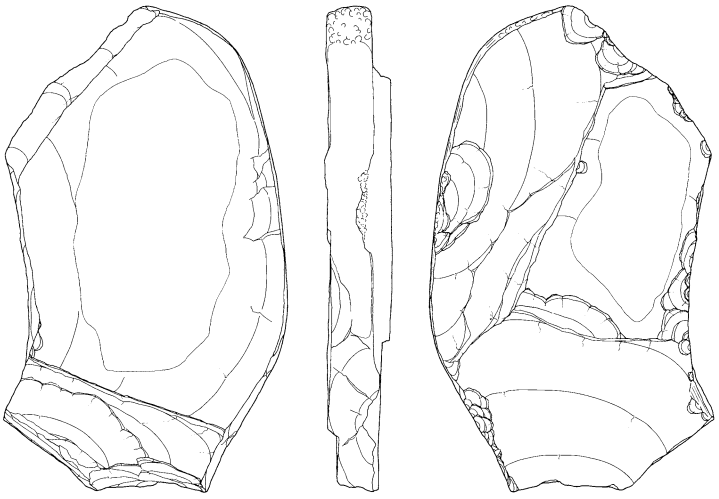


第144図　石器（39）石皿・台石

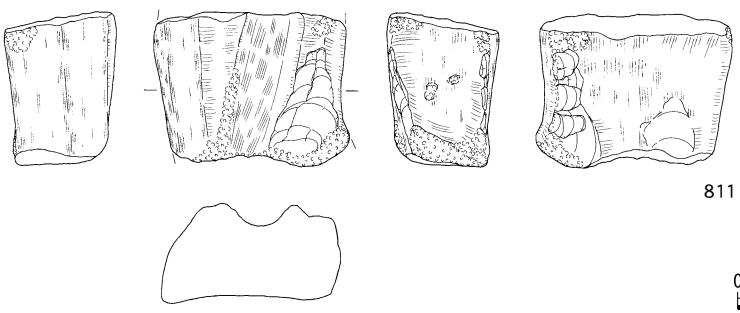


809

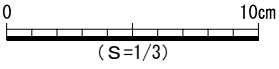




810



811



第145図　石器（40）砥石

5　弥生時代前期末～中期の調査

(1) 調査の概要

弥生時代の調査は,稲荷迫遺跡の全調査範囲で行った。縄文時代後期から弥生時代の調査の項でも述べたが，層位的にⅣ層（アカホヤ火山灰）の上位は，耕作による削平の影響を受けている場所も多く，各層ごとで厳密に時代を分けることができなかった。しかし，出土した遺物の中で明らかに弥生時代に該当すると考えられる遺構及び遺物をここでは報告する。

弥生時代と確認できる遺構は，土坑墓２基である。詳しくは遺構のところで説明する。

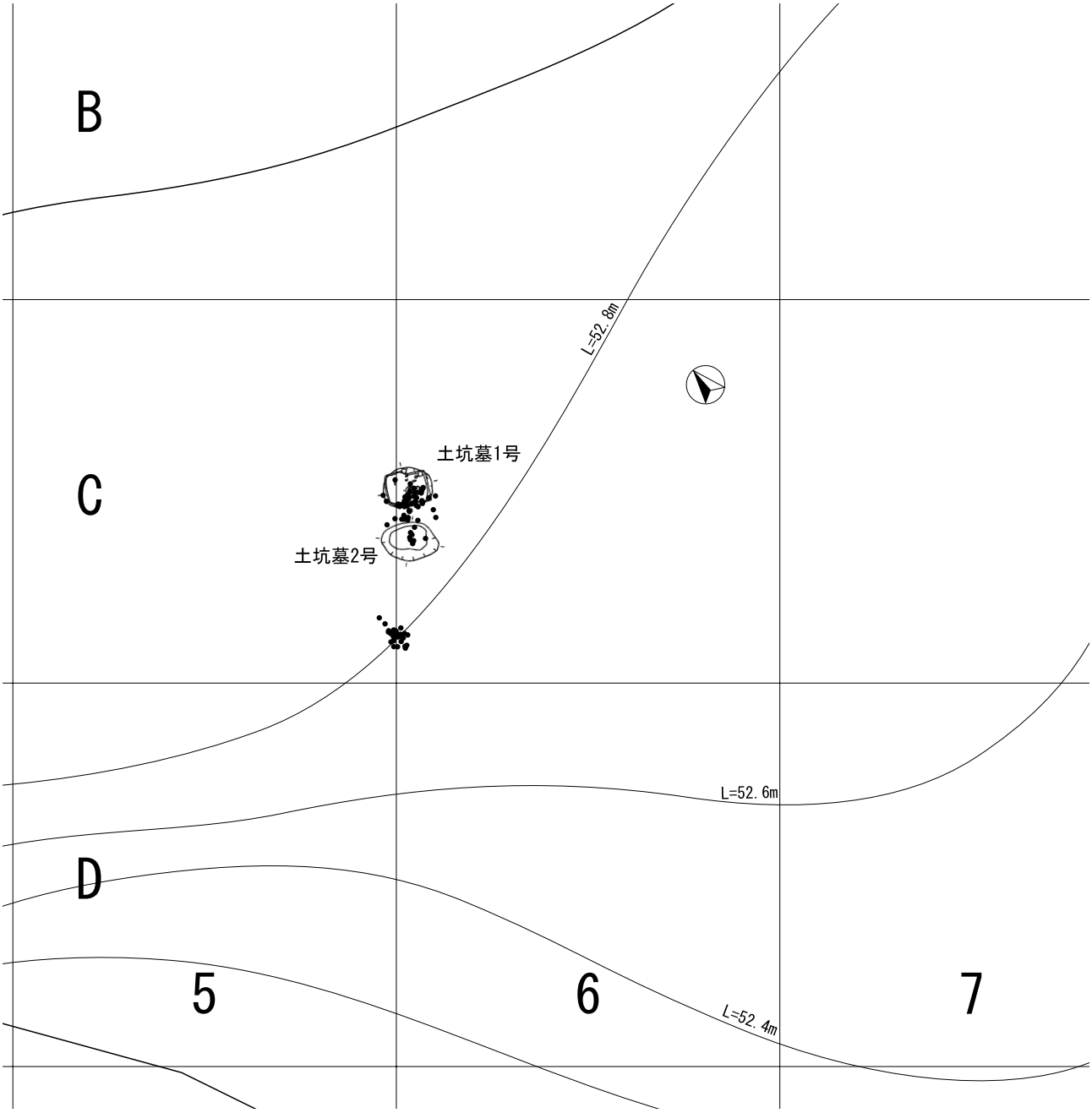
また，出土土器および石器についても各項で述べる。

(2) 遺構

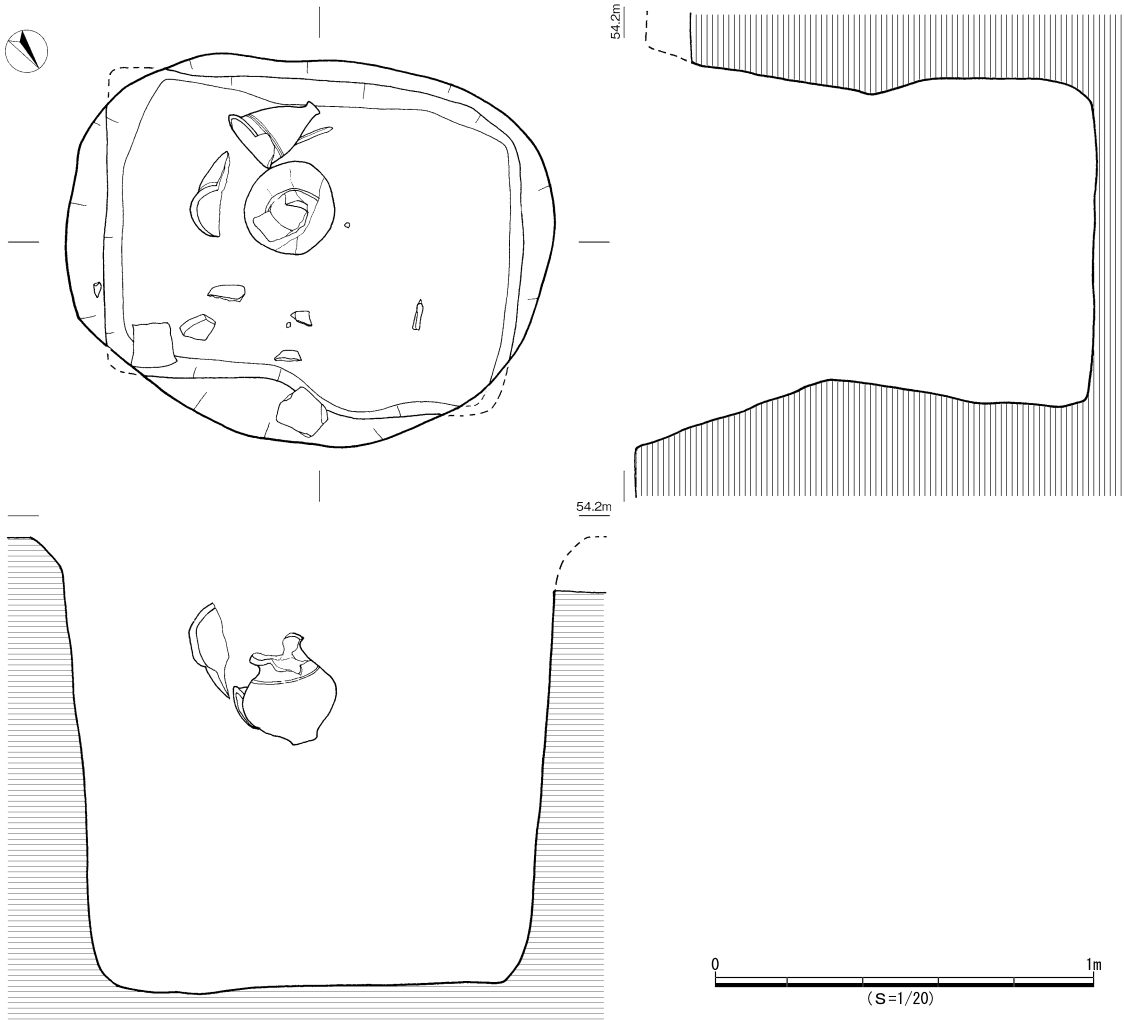
弥生時代に該当する遺構は，土坑墓２基である。

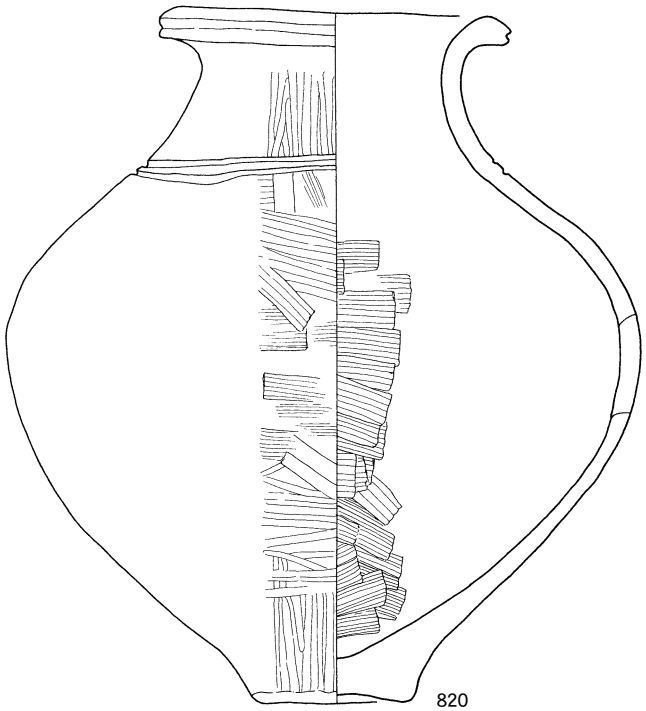
この土坑墓の検出の経緯であるが，Ⅱ層調査中に土器の破片が集中して出土している地点があった。当初，土器の集中部ということで集中している部分を３ｍ×３ｍでくくり，その部分の土器の取り上げ記録を行った。その途中で，遺構のラインを検出することができたので，若干削平された状態で遺構の調査を開始することとなった。

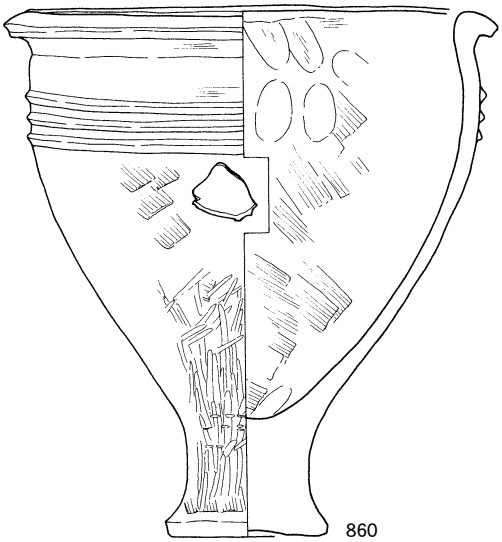
精査を行った結果，土器の集中部の下に土坑が２基あることがわかった。土器の集中を調査終了後これらの土坑の調査に入った。

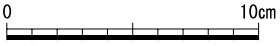


第146図　弥生時代前期以降　土坑墓配置図

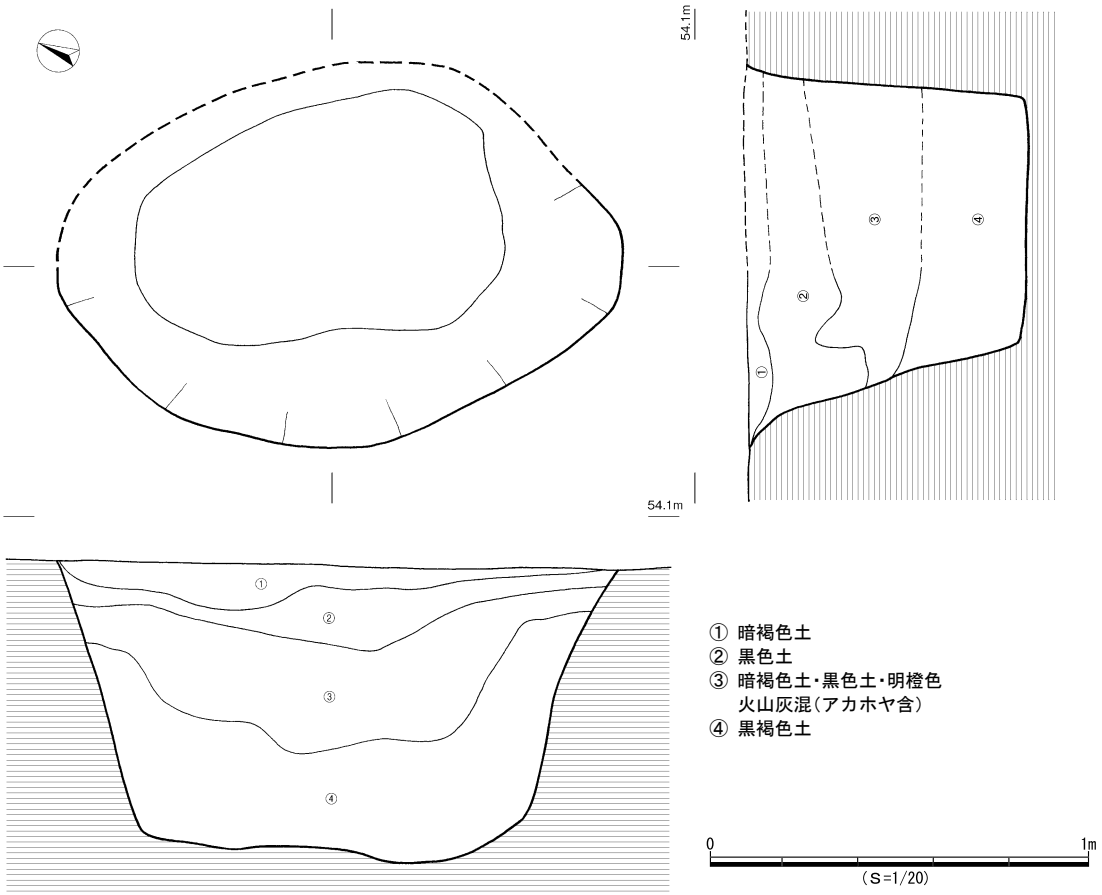








第147図　弥生時代　土坑墓１号および出土土器



第148図　弥生時代　土坑墓２号

土坑墓１号（第147図）

土坑墓１号は，Ｃ－５・６区Ⅲ層上面で検出された。平面形態は，長軸130㎝×短軸103㎝の隅丸方形を呈している。検出面からの深さは120㎝である。床面は長軸100㎝×短軸80㎝であった。掘り込み開始面から50㎝ほど斜めに掘り下げた後，70㎝ほど垂直に掘り下げを行っている。掘り込み開始面から25㎝掘り下げたところで遺物が出土しはじめ，完形の壺と甕が１点ずつ，甕の破片が出土した。

出土状況から，土坑墓に供献された土器と考えられる。また，埋土中から出土した土器の破片と，土坑上部で見つかった土器集中の破片が接合している状況から，土坑墓が埋まる前の段階で祭祀を行い一部の土器を壊した可能性が出土状況から高いと考えられる。

また，木棺墓の可能性を考えそれらに該当する残骸がないか気をつけて掘り下げたが，該当する遺物・痕跡等を確認することはできなかった。また，掘り下げの際の工具痕も確認できなかった。

埋土の状況は，詳細に記録できなかったが，土坑墓２号の状態とほぼ同じであった。

土坑墓２号（第148図）

土坑墓２号は，土坑墓１号のほぼ真横で検出された。平面形態は，長軸150㎝×短軸100㎝の楕円形を呈している。床面は，長軸90㎝×短軸60㎝である。検出面からの深さは，79㎝である。

遺構内からは，土坑墓１号のような供献されたと考えられる土器等は出土せず，土器の小破片が出土した。埋土状況は，Ⅱ層土が混じっている茶褐色土，Ⅲ層土にⅡ層土が混じる土，Ⅱ層土・Ⅲ層土・Ⅳ層土（アカホヤ火山灰）が混じり一部アカホヤ火山灰の小ブロックが混入する土，Ⅲ層土・Ⅳ層土が混じり，アカホヤ火山灰の大きなブロックが混じる土と４層にわかれた。ブロック等が混じり，土坑を掘った後すぐに埋めたと考えられる状態であり，土坑墓１号のすぐ隣にあることから，土坑墓として判断した。

（3）遺物

弥生時代前期末～中期

壺形土器（第149図812 ～第151図827）

弥生時代前期末から中期にかけての壺形土器の型式学的な方向性は，胴部と頸部境に沈線を巡らすものから突帯を巡らすものへ，突帯に刻目を施すものから施さないものへ，口縁部が沈線で区別されるものから肥厚するものへ変化する。

812は胴部最大径41.2cmに復元できるもので，頸部に３条の突帯を巡らし，一部分に細かな刻目を施している。口縁部下には内外面に低い突帯を巡らしていると思われる。頸部は縦方向のハケ目によるもので，胴部はミガキ様のナデである。金色の雲母を含む。813は812と同一個体の底部と思われ，直径は9cmである。弥生時代前期末に位置付けられる。

814は口縁内面に突起をもつもので，上面には円形刺突で文様を描く。金色雲母を含む。815は口唇部に凹みをもつもので，上面に２列の刺突を巡らす。金色雲母を含む。弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。816は破片が小さくて確実ではないが，胴部付近に円形の細かな刺突をもつものである。器種および時期とも明らかでない。

817は胴部最大径と頸部境に２条の突帯を巡らす。頸部境突帯の下には羽状の短沈線を巡らし，胴上部には縦方向の３本沈線を挟んで羽状の短沈線を描く。胎土に小石を多く含む。鐘ヶ江賢二氏によると，有軸羽状文は豊前周辺と関係があるとのことである。宮崎平野の下郷遺跡土坑２で，類似した土器が出土している。下郷遺跡の土坑２では，亀ノ甲式系の刻目突帯二条甕や口縁部に接して２条の刻目突帯が巡る甕形土器と共に出土している。したがって，弥生時代前期後半～前期末に位置付けられる。817は胎土や色調も宮崎平野の弥生土器とよく似ており，両者を一緒に見る機会があれば比較してみたい。

818は底径７cm，胴部最大径27.3cmに復元できるもので，頸部に３条の沈線を巡らしている。口縁部下にも１条の沈線を巡らし，頸部との境としている。口縁部は大きく外反し，口唇部は凹線状となる。金色の雲母を含む。板付Ⅱｃ式に併行する。

819は器高33.2cm・口径14.2cm・胴部最大径25.2cm・底径6.8cmを測る壺形土器である。底面は凸レンズ状で不安定であり，大きく内湾しながら胴部に至る。胴部最大径はやや上に位置する。頸部には３条の沈線を巡らし，外反気味に口縁部へ立ち上がる。口縁部は垂れ下がりの突帯であり，口唇部は凹線状となる。器面調整は，胴下半部から底部が縦方向の丁寧なナデであり，胴部から頸部下半にかけては横方向のハケ目状のナデである。また，頸部は縦方向のミガキ様のナデである。胎土に金色雲母を含む。胴部中央には，打撃による円形の孔が開けられており，非日常的な道具としている。弥生時代前期末～中期初頭の入来Ⅰ式土器の中でも新しい要素をもつ。

820は器高27.6cm・口径14cm・胴部最大径25.2cm・底径5.8cmを測る壺形土器である。底面は浅い上げ底であり，大きく内湾しながら胴部に至る。頸部には２条の沈線を巡らし，外反気味に口縁部へ立ち上がる。口縁部は垂れ下がり気味の突帯であり，口唇部は凹線状となる。器面調整は，胴下半部から底部が縦方向の丁寧なナデであり，胴部から頸部下半にかけては横方向のハケ目状のナデである。胎土に金色雲母を含まない。弥生時代前期末～中期初頭の入来Ⅰ式土器である。

821は口径15.4cmで，短めの頸部から大きく外反する口縁部がつく。頸部と口縁部の境は明瞭ではなく，口唇部は凹線状となる。口縁部付近は内外面ともヨコナデによるもので，頸部下位は縦方向のミガキである。板付Ⅱｃ式に併行する。

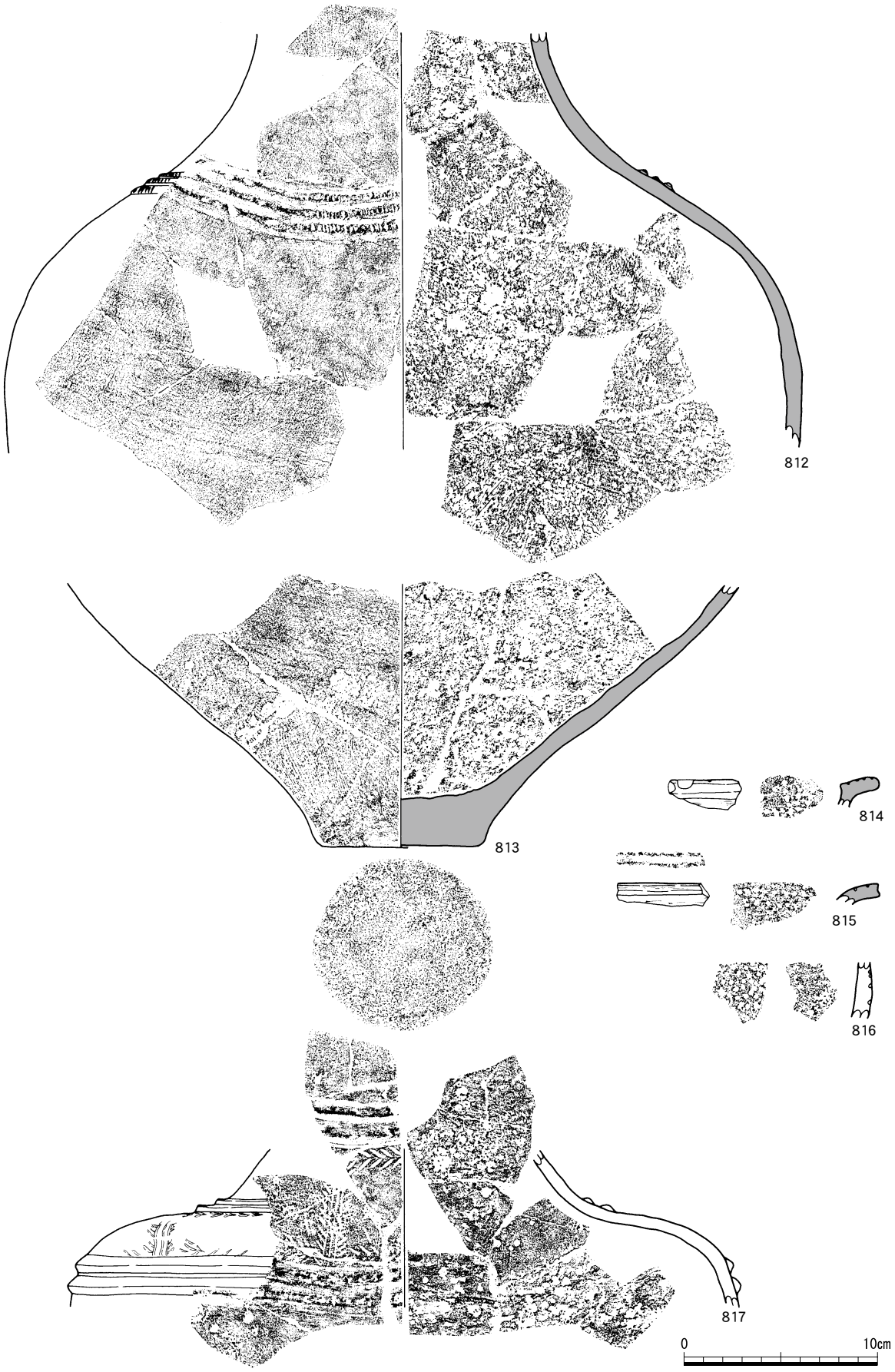
822と823は肩部から頸部にかけてのもので，櫛状の工具で多条沈線文を描く。このような横線間に波状文を巡らす様なモチーフは，中四国地方の中期前葉にみられる。九州では福岡県行橋市竹並遺跡で出土しており，須玖Ⅰ式古段階に位置付けられている（田崎1998）。本資料は金色雲母を多く含み，大隅半島南部でつくられた可能性がある。

824は復元口径17.2cmで外反する頸部から垂れ下がり突帯のある口縁部へ至り，端部は丸みを帯びる。胴部と頸部の境は上位に位置し，３条の沈線が巡る。直接接合はしなかったが，底部は凸レンズ状の不安定なものである。金色の雲母を多く含む。弥生時代前期末～中期初頭の入来Ⅰ式土器である。

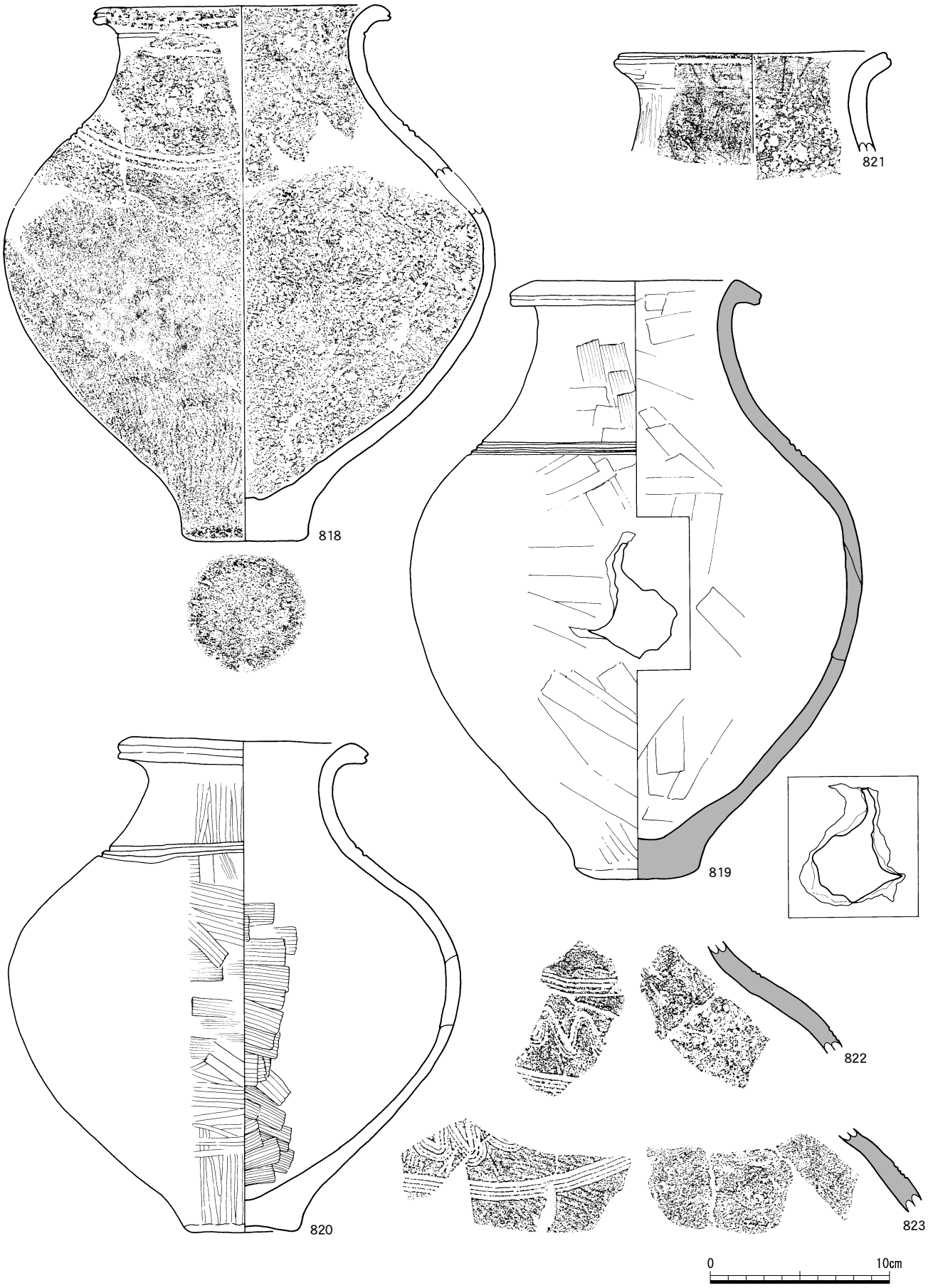
825は復元口径10.5cmの垂れ下がり突帯をもつ無頸壺である。口唇部は凹む。口縁上面から２つの穿孔があり，蓋とセットであったことが考えられる。元来南九州ではみられない器形である。大粒の金色雲母を含み，大隅半島南部で模倣されたものと推察される。弥生時代中期前半に位置付けられる。826は内傾する頸部に垂れ下がり口縁が付き，口唇部は凹みをもつ。頸部の器壁は薄く仕上げてある。胎土に金色雲母を含む。弥生時代中期前半に位置付けられる。827は底径7cmで浅い上げ底となる厚めの底部から，球形状の胴部に至る壺形土器と思われる。胎土には金色の雲母を含む。

宮崎市教育委員会　1999『下郷遺跡』宮崎市文化財調査報告書第41集

田崎博之　1998「Ⅳ　九州系の土器からみた四線文系土器の時間位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成７年度～平成９年度科学研究費補助金（基礎研究Ｂ）研究成果報告書　研究代表者　下條信行



第149図　弥生時代前期末から中期の土器①



第150図　弥生時代前期末から中期の土器②

第151図　弥生時代前期末から中期の土器③

脚台付き壺形土器（第151図828・829）

829は脚台の高さ7.5㎝，胴部最大径17.3㎝を測る。浅い上げ底で，端部には凹線を施す裾広がりの底部から，ほぼ直立する脚台をもつ。胴部との接着部には２条の突帯を巡らす。最大径が上位にある胴部から頸部との境に２条の突帯を巡らす。828の口縁部は直接接合はしていないが，端部に凹みのある垂れ下がり口縁がつくと思われる。大粒の金色雲母を含む。この様な台付き壺形土器は，錦江町山ノ口遺跡や宮崎県都城市星原遺跡ぐらいしかなく，出土例の少ない器形である。星原遺跡例は胴部最大径にも４条の突帯が巡ることや底部側面と口唇部に細かな刻目が入るものの，金色雲母を含む胎土は共通しており，時期的にも遜色はない。この様な形状は北部九州でも祭祀的な遺跡でみられ，熊本県阿蘇郡小国町地蔵原遺跡では赤色塗彩の筒形器台や甕形土器などの中に，脚台付きの壺形土器が出土している。丹塗りであること，注口をもつ点，脚が中空となっている点などが異なる。本資料は地元産としては異質なものであり，壺形土器に甕形土器の脚台を合体したものであり，境に突帯を巡らすことによって，意味を加えてある。口縁部や突帯の特徴から弥生時代中期中半に位置付けられる。

宮崎県都城市教育委員会　2006『星原遺跡』都城市文化財調査報告書第72集

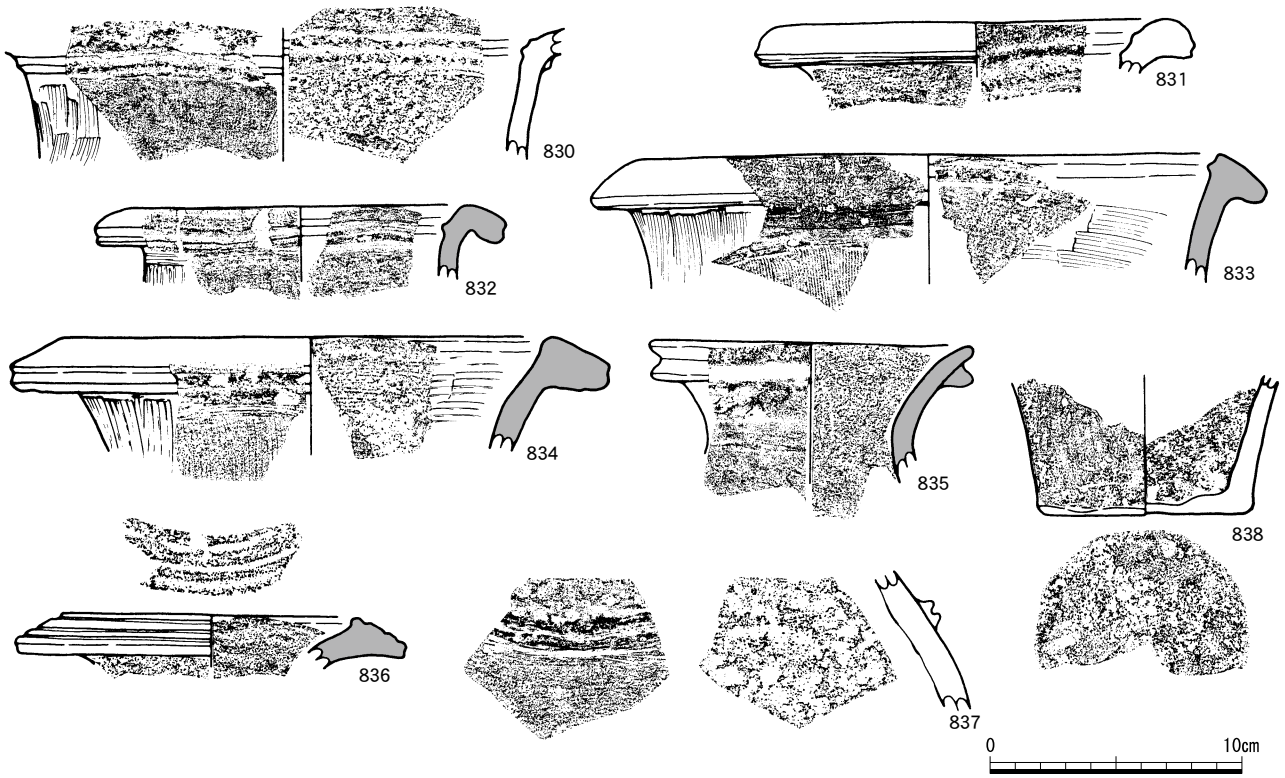
熊本県教育委員会　2004『地蔵原遺跡』熊本県文化財調査報告書第220集

その他の壺形土器（第152図830 ～ 838）

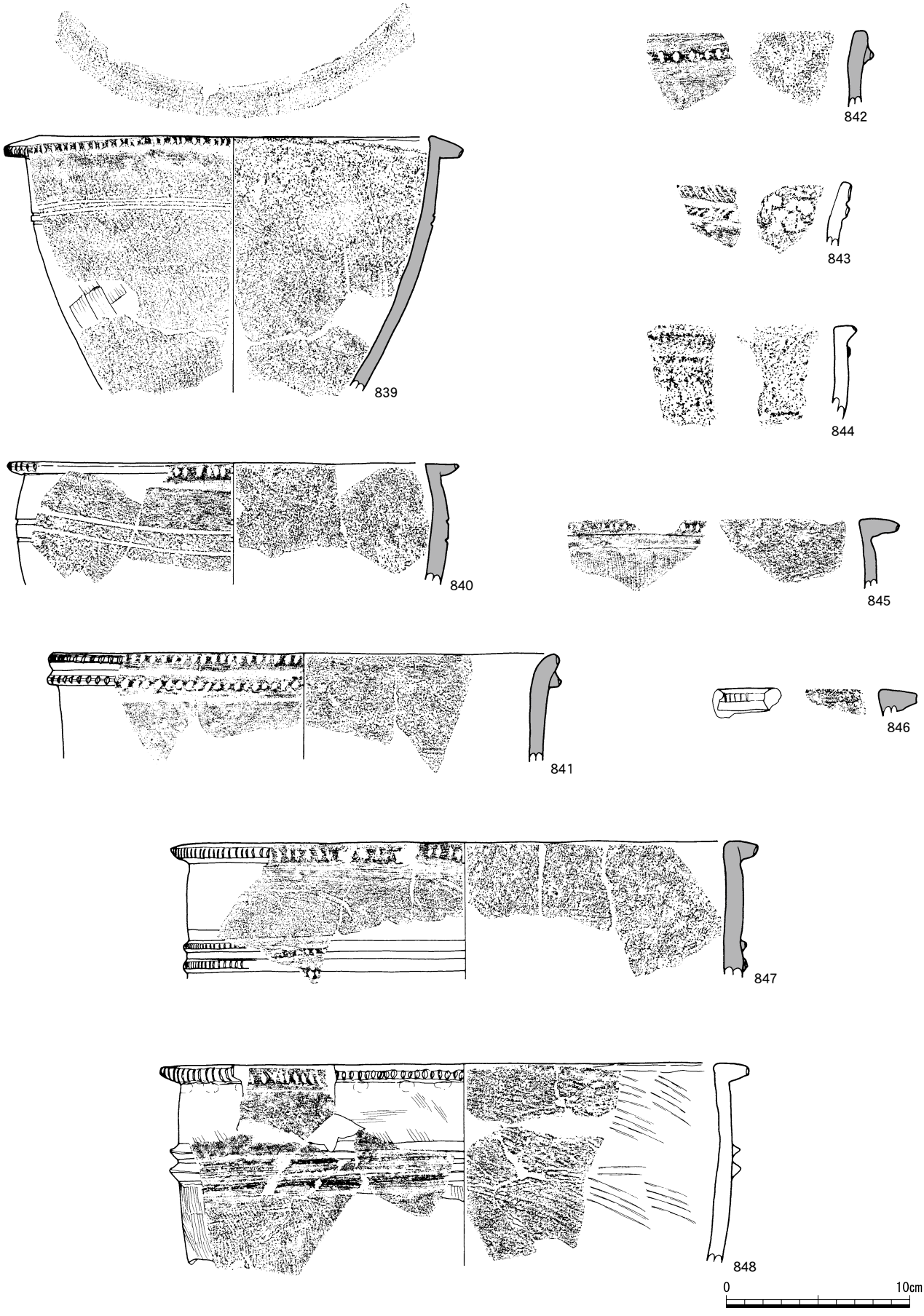
830は大きく外反する口縁部で，内面には２条の低い突帯が，外面にも１条の突帯が巡る。頸部外面は縦方向のハケ目による調整であり，雲母を含む。弥生時代前期末に位置付けられる。831は垂れ下がり口縁で，口唇部は凹線状となる。内面には少なくとも２条の低い突帯が巡る。弥生時代前期末から中期前半に位置付けられる。832は垂れ下がり口縁の壺形土器で，口唇部には凹線が巡る。内面には低めの突帯がある。金色雲母を含む。頸部外面の調整は，縦方向のミガキである。弥生時代前期末から中期初頭に位置付けられる。

833は垂れ下がり口縁の壺形土器で，口唇部は丸くおさめる。内面には低めの突帯が１条巡るが，内面端部を突き出すことから，外見上は２条にみえる。金色雲母を含む。頸部外面の調整は，縦方向のハケ目である。834は垂れ下がり気味の口縁部で，口唇部は凹みを巡らす大型の壺形土器である。口縁部内面は丸みをもって突き出しており，その下は指ナデ状に浅く凹む。口縁部下面はナデであるが，２条の段が付く。頸部外面は縦方向の粗いナデであり，雲母を含む。これらは，弥生時代中期前半から中半にかけてのものである。

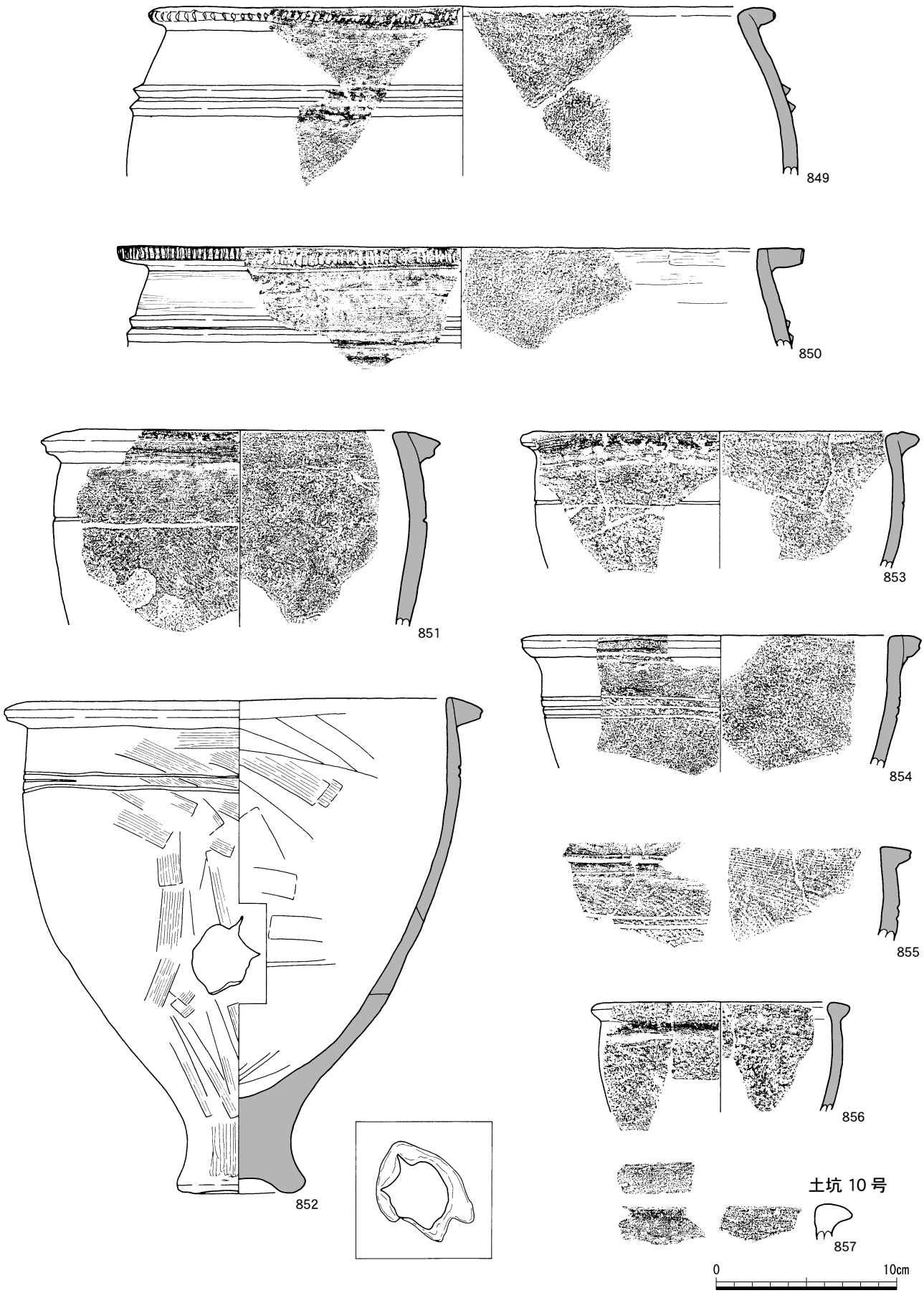
835は大きく外反する口縁部下位に高めの突帯を巡らすもので，１条の凹線状にみえる。金色の雲母を含む。この様な特徴は，弥生時代中期後半の山ノ口式土器にみられるものである。836は内面に張り出しをもち，長めにつくる垂れ下がり口縁で，口唇部を凹める。口縁には３条の細い凹線を巡らす。金色雲母を含み，大隅半島南



第152図　弥生時代前期末から中期の土器④



第153図　弥生時代前期末から中期の土器⑤



第154図　弥生時代前期末から中期の土器⑥

部で瀬戸内地方の凹線文土器を意識してつくられたものであると考えられる。山ノ口式土器に伴うものであろう。

837は肩部に貼り付け突帯をもつもので，突帯の中央に凹線を巡らすことによって，２条の突帯に見える。突帯が「M」字状になるのは，鐘ヶ江賢二氏によると須玖Ⅱ式土器の特徴であるという。ただし，胎土は中岳Ⅱ式などにみられるものに似る。弥生時代中期後半に該当する。

838は直径8.6㎝の安定した平底で，直立した後，開き気味の胴部に至る。薄手であるため弥生時代前期におさまるものである。

甕形土器（第153図839 ～第158図875）

甕形土器の型式学的な方向性は，口縁部突帯の刻目を施すものから施さないものへ，口縁部突帯が垂れ下がりから逆「L」字を経て「く」字状へ，口唇部が丸みをもつものから凹線状のものへ，口縁部突帯と下部突帯の肥厚差が小さいものから大きいものへなどいくつかみられる。口縁部内面縁が突出するのも，中期中半から中期後半にかけての特徴である。

839は口径25㎝の甕形土器である。口縁部から胴中央部付近まで残存し，内湾気味に立ち上がる。沈線は１㎜と狭い幅で２条巡らすが，引き初めと引き終わりの部分は３条となっていることから，螺旋状に引いたとも考えられる。口縁部には幅１㎝の突帯を貼り付け，口縁部上面は湾曲しながら下がる。口唇端部に細かな刻目を加える。内面端部はわずかなふくらみがある。器面調整は板状工具によるハケ目であり，胴上半部に煤の付着がみられる。胎土に金色の雲母を多く含む。これらの特徴から入来Ⅰ式土器であり，弥生時代前期末から中期初頭に該当する。付着炭化物を年代測定した結果，補正年代でBC.362 ～ 196の年代値が得られた。840は胴上部も内湾するもので，口縁部にはやや下向きの突帯が付く。口唇部には刻目を施す。胴上部に２条の沈線を巡らす。金色雲母を含む。入来Ⅰ式土器である。

841の口縁部は短く外反させ，口唇部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部直下に突帯を巡らし，口縁部端部と同じ施文具で刻目を施す。胎土に金色の雲母を含む大隅半島南部のものであると考えられる。形状は東九州系の下城式土器にみられるものであり，両地域との関係も窺える。弥生時代前期後半のものと考えられる。842は口縁部より下がった位置に刻目突帯が巡るものである。口唇部は丸くおさめ，刻目は施さない。突帯文期の可能性もあるが，口唇部から下に下がった例が本遺跡ではみられないことと，ナデがしっかりしていて端正なつくりであることから，弥生時代前期後半と考えられる。胎土には金色の雲母が多く含まれる。843は口縁部に沿って羽状の刻目を施すものである。下部の刻みは低い突帯状に施すもので，筋のある工具を押してある。上部はヘラ状工具により斜線を引く。口縁部のみの破片であるが，他の器種に見あたらないことから甕に含めた。今後検討を要する。鐘ヶ江賢二氏によると豊前や豊後辺りの様相をもつとのことである。弥生時代前期後半頃のものである。844は「L」字状の短い口縁をもち，口縁部突帯に近い部位に細い突帯を巡らし，刻目を施す。胎土は小石類が多く，突帯が接近していることなど，東九州系の様相が強い。弥生時代前期後半から末にかけてのものと考えられる（坪根2001）。

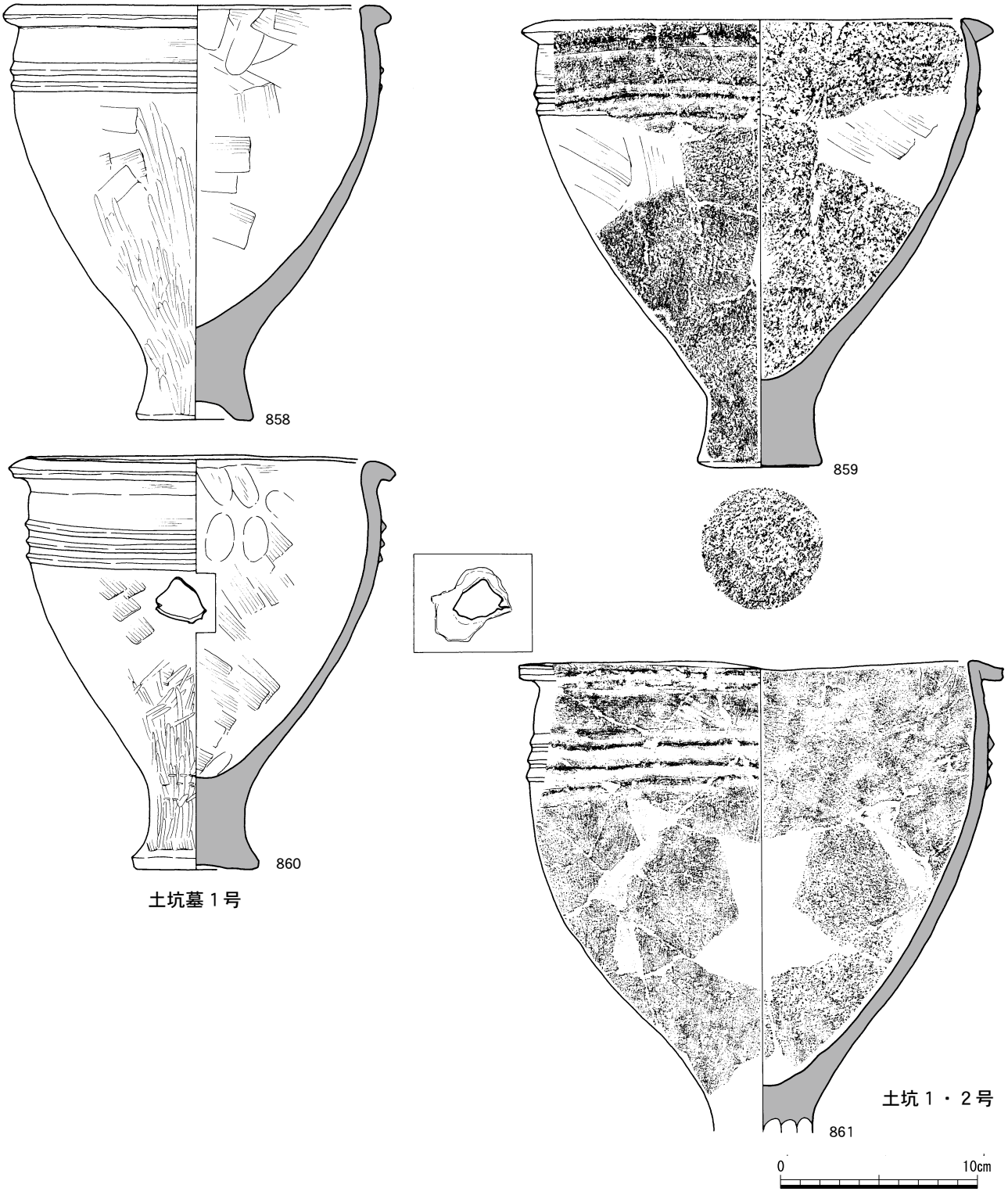
845は，やや垂れ下がり気味に長めの口縁部をもつものである。口唇部は丸くおさめ，刻目を施す。胴上部は縦方向のハケ目である。金色の雲母を含む。弥生時代中期初頭のものである。846は垂れ下がり気味の口縁部で，口唇部は凹み細かな浅い刻みを巡らす。表面は赤く発色しているが，塗彩しているかどうかは確認していない。金色の雲母を含む。弥生時代中期初頭のものである。847の口縁部はカマボコ状の突帯を巡らせ，下部にも少なくとも２条の細い突帯を貼り付ける。いずれの突帯にも刻目が施される。胎土に金色の雲母を含む。弥生時代前期末から中期初頭のものであろう。848は，ほぼ直行する口縁部で，「L」字状の突帯が巡る。口唇部は丸くおさめ，刻目を施す。金色の雲母はみられない。弥生時代中期前半に位置付けられる。849は胴上部から内湾するもので，口縁部にはやや下向きの突帯が付く。口唇部には刻目を施す。胴上部に２条の三角突帯を巡らす。金色雲母を含む。弥生時代中期前半のものである。850は直径38㎝に復元できる口縁部で，指ナデ状に２条の浅い凹みが巡る。口唇部は面取りし，中央に浅い凹みが入る。その上から，細い刻目を密に施す。下部には少なくとも２条の三角突帯が巡る。弥生時代中期前半に位置付けられる。

851は，やや内湾するもので，口縁部は垂れ下がり突帯となる。口唇部は広めにとって凹状となる。胴上部には１条の沈線を巡らす。金色の雲母を含む。入来Ⅰ式土器である。852は器高27.1㎝・口径26.4㎝・底径7.1㎝の甕形土器である。底部は脚台状となり，底面を凹め，縁辺は蛇の目状となる。胴上部まで内湾気味に立ち上がる。沈線部分の上は，やや内湾して口縁部に至る。沈線は1.5㎜と狭い幅で，２条巡らす。口縁部には幅1.5㎝の突帯を貼り付け，口縁部上面は湾曲しながら下がる。口唇部は凹線状に窪んでいる。器面調整は板状工具によるハケ目であり，胴上半部に煤の付着がみられる。胎土に金色の雲母を多く含む。これらの特徴から入来Ⅰ式土器であり，弥生時代前期末から中期初頭に該当する。胴部中央に外面からの打撃を加え，円形に穿孔している。

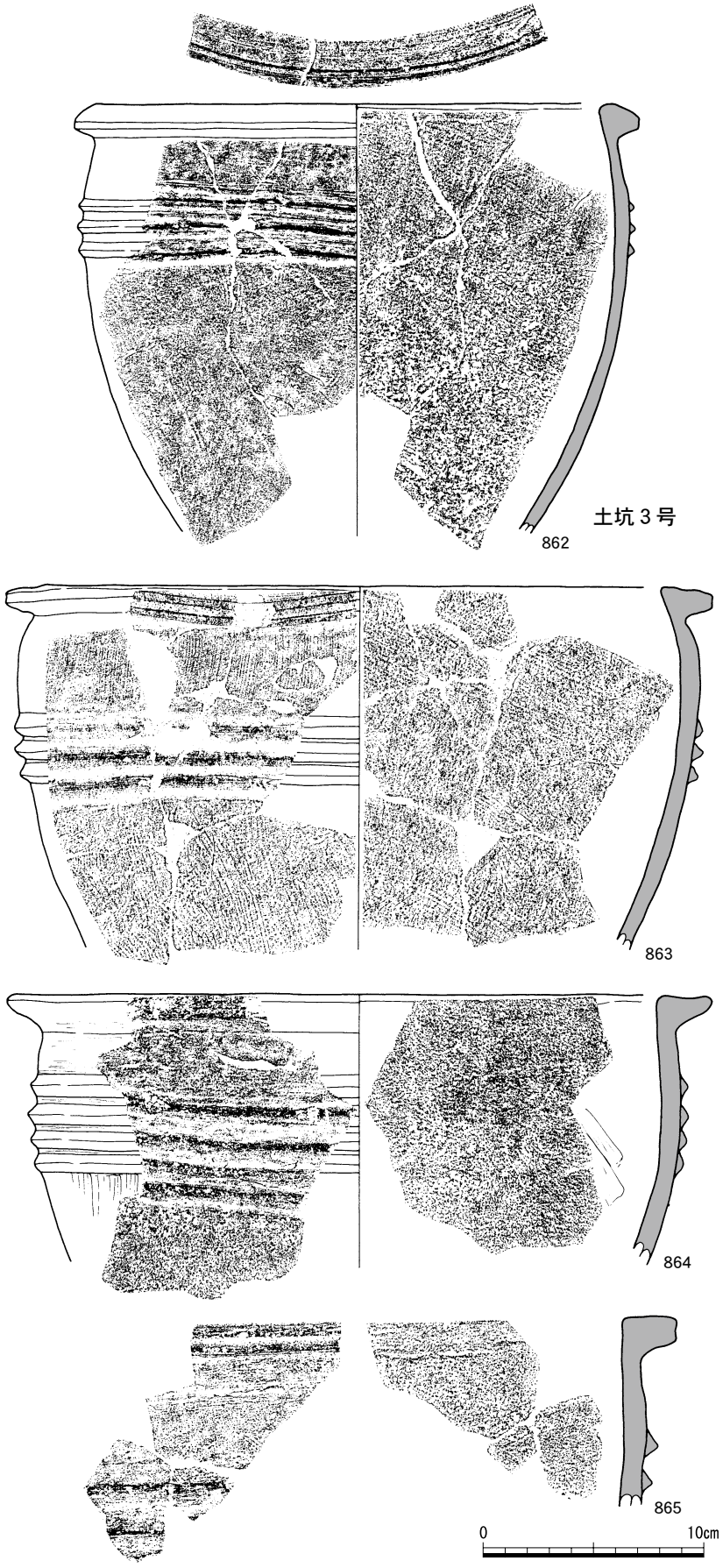
853は内湾しながら口縁部に至るもので，口縁部突帯の断面は丸みを帯びた三角である。胴上部には１条の沈

線が巡る。金色の雲母を含む。入来Ⅰ式土器である。854は垂れ下がり口縁で，端部は凹む。胴上部には３条の沈線を巡らす。金色の雲母を含む。入来Ⅰ式土器である。855は内湾しながら口縁部に至り，垂れ下がりの口縁部突帯をもつものである。口唇部は凹線状となる。胴上部には２条の沈線を巡らす。内面にはハケ目が残る。金色の雲母を含む。入来Ⅰ式土器である。

856は復元口径14.3㎝で，口唇部と一体となった三角突帯を巡らす。金色雲母を含む。857は口唇部が突帯状となるものであり，土坑10号から出土した。これらは弥生時代前期末から中期初頭に位置付けられる。858は器高20.9㎝・口径19.7㎝・底径6㎝を測る甕形土器である。底部は脚台状となり，底面を凹め，縁辺は蛇の目状となる。最大にくびれたところの直径は，5㎝である。



第155図　弥生時代前期末から中期の土器⑦



第156図　弥生時代前期末から中期の土器⑧

胴下半部はほぼストレートに開き，胴上半部で内湾する。胴部最大径の所よりやや上に２条の突帯が巡り，口縁部は垂れ下がり気味の短い突帯である。口唇部は丸くおさめる。器面調整は，胴下半部以下が板状工具による縦方向の丁寧なナデであり，突帯より上はヨコナデによるものである。胎土には大粒の金色雲母が多く含まれる。弥生時代中期初頭から前半の入来Ⅱ式土器である（中園1997）。

859は器高22.6㎝・口径23.9㎝・底径6.3㎝の甕形土器である。平底で充実した脚台状の底部から胴上部まで内湾気味に立ち上がる。突帯部分の上は，やや内湾して口縁部に至る。突帯は断面正三角形で，２条巡らす。口縁部には幅1.2㎝の突帯を貼り付け，口縁部上面は斜位に下がる。口唇部は丸くおさめてある。煤の付着はみられない。胎土に金色の雲母を多く含む。口唇部に凹線が無い点や口縁部上面が湾曲しない点は入来Ⅱ式土器と異なるが，弥生時代中期初頭から前半に該当する。

860は器高21㎝・口径19.7㎝・底径6.5㎝を測る甕形土器である。底部は脚台状となり，底面を浅く凹め，縁辺は凹線状となる。最大にくびれたところの直径は，4.9㎝である。胴下半部はほぼストレートに開き，胴上半部で内湾する。胴部最大径の所に３条の突帯が巡り，口縁部は垂れ下がり気味の突帯である。口唇部は底部と同様に凹線状となる。胴上半部外面には煤が付着している。器面調整は，胴下半部以下が板状工具による縦方向の丁寧なナデであり，突帯より上はヨコナデによるものである。胎土には大粒の金色雲母が多く含まれる。胴中央部に円形の穿孔があり，外面から故意に打撃を加えたもので，日常的な道具を非日常化したものである。弥生時代中期初頭から前半の入来Ⅱ式土器である。

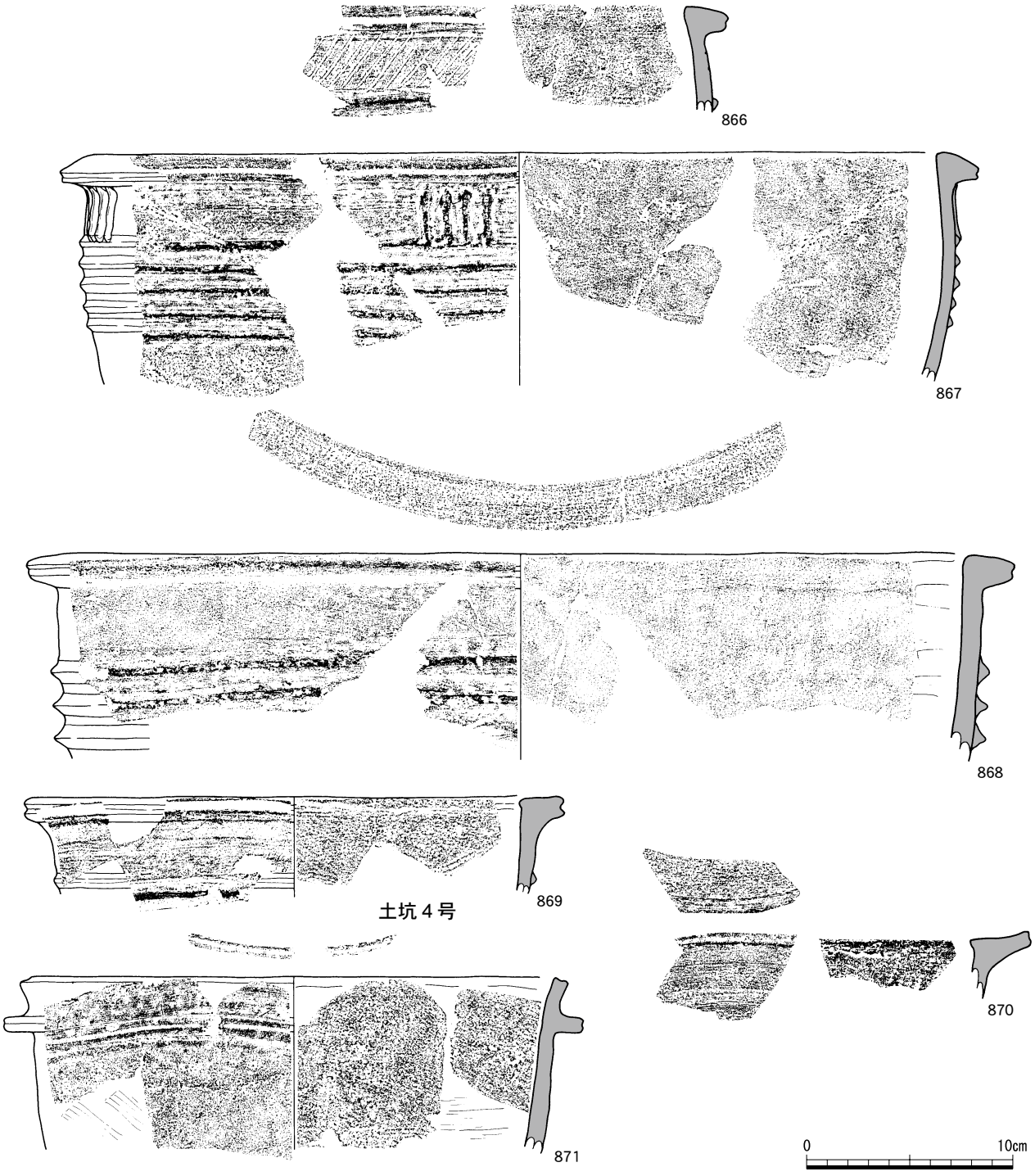
861は，やや下向きの口縁部「L」字突帯で，口唇部は凹む。３条の下部突帯の下は縦方向のハケ目が顕著である。弥生時代中期前半から中半に位置付けられる。土坑１・２号の出土である。

862は口径25.6㎝で，垂れ下がりの口縁部をもち，端部は凹む。胴上部に３条

の三角突帯を巡らす。胴部下半は細めのタテ方向のミガキである。入来Ⅱ式土器である。土坑３号の出土である。

863は復元口径32㎝で内湾しながら口縁部へ至る。口縁部は「L」字状の幅広いもので，端部は垂れ下がり気味になり凹みを入れる。胴上部には３条の三角突帯が巡る。外面には縦方向のハケ目がみられる。金色の雲母を含む。弥生時代中期中半に位置付けられる。

864は口縁部は「L」字に近い状態で貼り付けられ，上面は浅く凹んでいる。口唇部は面取りせず，尖り気味である。胴上部には４条の三角突帯が巡る。金色の雲母を含む。山ノ口式土器の古いタイプであり，弥生時代中期中半から後半に位置付けられる。865は大型の甕形土器で，口縁部は「L」字状で口唇部に凹みが巡る。突帯が付く部分の内面は，指ナデの範囲で浅く凹む。下部には少なくとも２条の三角突帯が巡る。金色の雲母を含む。弥生時代中期中半である。866は口縁部を垂れ下がり状につくり，口縁部は深い凹みを巡らす。胴上部にも三角突帯を巡らし，口縁部との間を斜線で埋めている。金色



第157図　弥生時代前期末から中期の土器⑨

の雲母を多量に含む。弥生時代中期中半の大隅系の甕形土器で沈線による文様を施す例は希であり，興味深い資料である。系譜を追究したい。867は復元口径44.6cmを測るもので，垂れ下がり口縁である。口唇部は凹線状となる。胴上部に５条の三角突帯を巡らし，口縁下の一部に４本の突帯が垂下する。雲母を含む。弥生時代中期前半のものである。868は口径48cmに復元できる大型の甕形土器である。口縁部はほぼ直角に付き，口唇部は凹む。少なくとも３条以上の三角突帯が巡る。金色雲母を多く含む。弥生時代中期中半の吉ヶ崎遺跡の土器に近い。869は復元口径26.2cmで，「L」字状の突帯をもち，口唇部は凹線状となる。口縁部内縁端は内側に張り出す。胴上部には三角突帯が巡る。胎土は金色雲母を含む。土坑４号からの出土であり，弥生時代中期中葉に位置付けられる。

870は，わずかにはね上がる口縁部で，口唇部は凹む。内面縁は若干張り出す。金色の雲母を含む。弥生時代中期後半の山ノ口式土器である。

871は，わずかに内湾する胴上部をもち，口縁部のみゆるく外反させる。口唇下２cmの所に鍔状の突帯を巡らす。口縁部口唇と突帯口唇は凹状に仕上げる。鍔状の突帯は，口縁部外半分の粘土紐と一体となって貼り付けてあることが，断面の接合痕からわかる。煤は突帯の上下に集中する。胎土に雲母を含む。鍔状の突帯が付くのは大型甕形土器に多いが，この土器は復元口径26.6cmと大型ではなく，用途を含めてその出自が課題である。弥生時代中期中半と思われる。

872は弥生時代中期後半の「く」字状に屈曲する口縁部で，外面に２条の浅い段が巡る。873は，やや跳ね上がり気味に開く口縁部で，口唇部も斜め上を向いており浅い凹み状となる。口縁部は指おさえ状の浅い凹みが２条みられる。弥生時代中期でも新しい時期のものであると考えられる。

874は「く」字状に屈曲する口縁部で，口唇部は浅い凹状となる。下部には三角突帯が巡る。土坑５号の出土である。雲母を含む。875は甕形土器の口縁部であり，「く」字状に外傾する口縁部をもつ。外面には屈曲部よりも少し下がったところに，断面三角形の突帯を巡らす。口縁部突帯が「逆L」字状から「く」字状に屈曲するようになるのは，弥生時代中期後半から後期前半である。指宿市成川遺跡では暗紫ゴラの下から同様の器形をした土器が出ており，暗紫ゴラの年代を明らかにする鍵となっている。山ノ口式土器の中でも新しく位置付けられる。

坪根伸也　2001「東九州における弥生前期土器の諸相－口縁下端凸状甕と下城式甕－」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集　土器持寄会論文集刊行会

中園聡　1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』No.９　人類史研究会

甕形土器の脚部（第158図876 ～ 882）

甕形土器の完形品をみると底部の変遷は，上げ底から充実脚台へ，側縁が丸みを帯びたものから凹線状となる。

876は底径6.8cm，高さ3.8cmの脚台で，ほぼ直立する。側縁は蛇の目風に縁取りして，上げ底としている。入来Ⅰ式であろう。877は底径７cm，高さ3.4cmの脚台で，ほぼ直立する。底面は蛇の目風に縁取りして，上げ底としている。外面の調整はナデ上げによる。入来Ⅰ式である。878は底径6.6cm，高さ4.3cmの脚台で，上げ底としている。入来Ⅰ式の範疇におさまるものと思われる。

879は底径6.9cmで，高さ5.5cmの充実脚台である。底端部は丸くおさめてある。入来Ⅱ式である。

880は底径7.3cm，高さ6.8cmの充実脚台で，最も細い部分は直径4.2cmである。底端部に凹線を巡らすが，下向きになっている。

881は底径８cmで，高さ6.7cmの充実脚台である。底端部は凹線を巡らす。882は底径6.7cmで，高さ6.3cmの充実脚台である。底端部は凹線を巡らす。土坑４号からの出土である。これらは，弥生時代中期中半ごろに位置付けられる。

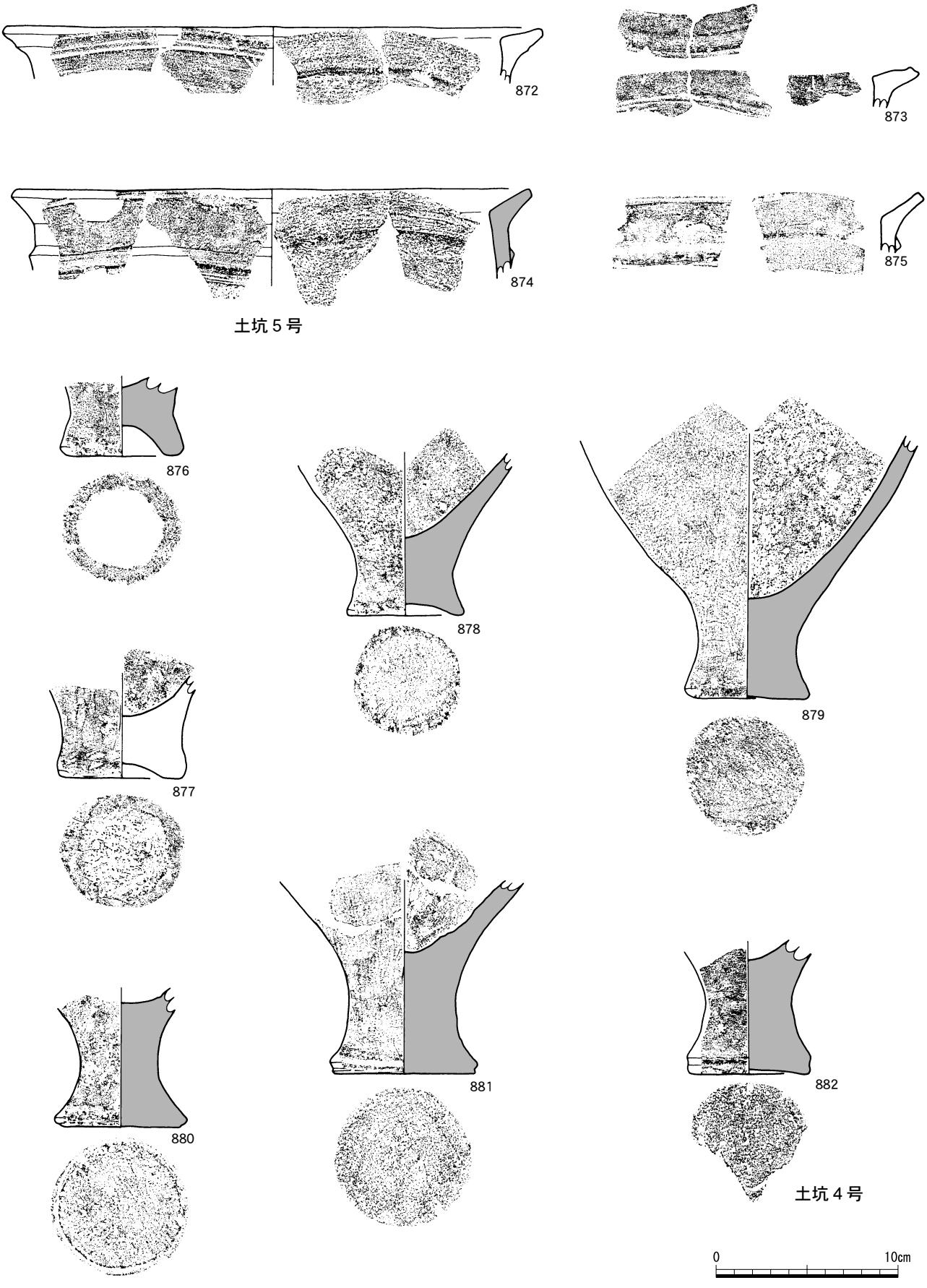
鹿児島で甕形土器が脚台化するのは，弥生時代前期後半からであり，その後古墳時代まで続く点が他の地域と異なる。煮炊き具である甕形土器は地面に置いて火を受けるとすれば，底部が高くなっている方が外炎を受けやすく効率的であると考えられる。中九州における黒髪式土器が弥生時代中期後半になってはじめて台付き甕に変化することに比べると，南九州ではいち早く甕形土器の脚台化が進み，その後古墳時代が終わるまでながく続いたことになる。煮沸形態が異なっていたのか，それとも食材が異なっていたのか追究する必要がある。

外来土器（第159図883 ～ 885）

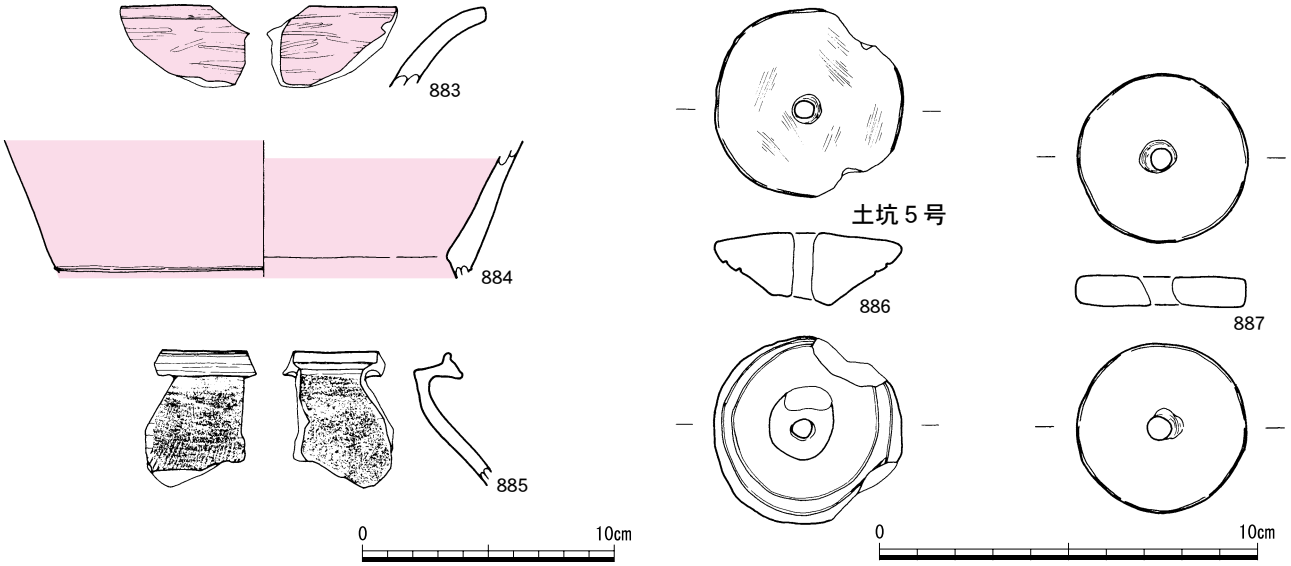
稲荷迫遺跡では少量ではあるが，鹿児島ではみられない器形・手法・胎土の土器が出土している。

883は大きく外反する口縁部で，口縁部は平らに面取りする。内外面とも赤色顔料が施される。胎土には細かな金色雲母がみられる。弥生中期後半の須玖Ⅱ式の広口壺である。884は同一個体の頸部である。同じような土器片は，全部で13点あり同一個体の可能性がある。北部九州からの搬入品と考えられ，胎土の分析が課題である。

885は肩部から口縁部にかけての破片である。わずかに外反気味に頸部へ至り，強く屈曲して外反する口縁部をもつ。再び強く内側に折り曲がって口縁帯をつくり，凹線を巡らしている。全体的に器壁は薄く，シャープなつくりであり，色調や胎土も大隅半島でみられるものと



第158図　弥生時代前期末から中期の土器⑩



第159図　弥生時代前期末から中期の土器⑪

は異なる。山本悦代氏によると，山陽地方にみられる弥生時代中期後半の前山Ⅱ式土器に相当するという。瀬戸内地方と南九州との関係については，梅木謙一氏によってまとめられており，良好な追加資料となった（梅木2004）。

須玖Ⅱ式土器と前山Ⅱ式土器はほぼ同じ時期に位置付けられており，稲荷迫遺跡で出土する地元の土器は，山ノ口式土器が該当すると考えられる。遺構内出土の一括遺物ではないので確実なことは言えないが，872や873の弥生時代中期後半に須玖Ⅱ式土器と前山Ⅱ式土器が伴う可能性が高い。

梅木謙一　2004「四国・南九州間における凹線文土器の交流」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金研究代表者　下條信行

弥生時代土製品

土製品は２点しか出土しなかったが，出土層位と弥生時代前期に多いことから，弥生時代の土製品として扱った。

紡錘車（第159図886・887）

886は　直径5㎝・厚さ1.9㎝で，中央に内径0.6㎝の穿孔がある。全体的な形は逆台形で，下面の直径は1.7㎝である。上面はややふくらみがあり，研磨されている。下面には縁に沿って２条の沈線が巡っている。土坑５号の出土である。887は直径4.6㎝・厚さ0.8㎝で，中央に内径1㎝の穿孔がある。転用品か製作品であるのか確認することは出来ないが，全面が丁寧に磨かれており，文様などはみられない。下面とした方の縁が欠けていることから，こちらの方が下向きになっていた可能性がある。紡錘車は糸を巻き取る面が上にあり，上面の方が保護されやすいと考えるからである。886の様な逆台形に形作られたものは，下縁がぶつかることは少なく，より工夫された道具であると言える。

日本国内および近隣諸国の紡錘車を検討した中間研志氏は，日本の初期における紡織技術の定着過程を明らかにした（中間1985）。中間氏によると，紡錘車は縄文時代後期後半の三万田式土器期に出現し，晩期黒川式土器期になると紡錘車の大きさが小径化するなどしてバラエティーに富むようになるという。さらに，縄文時代と弥生時代の画期とみられる曲り田式土器期に紡錘車の様相が一変し，小型化・規格化が進むと共に石製の紡錘車が出現する時期であるとし，弥生時代前期後半には紡錘車が定型化し紡織技術自体も均一な細い糸を紡いで平織の布を日常的に生産しうるようになった段階であるとしている。鹿児島県内における弥生時代の紡錘車の出土例は少なく，南さつま市金峰町の高橋貝塚や日置市の入来遺跡が知られているぐらいであったが，市ノ原遺跡群で類例が増えてきた。紡錘車が弥生文化と共に南九州にも流入したことが窺える。

中間研志　1985「Ⅱ考察２．紡錘車の研究　－我国稲作文化の一要因とそれの紡錘技術の展開－」『石崎曲り田遺跡－Ⅲ－下巻』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集　福岡県教育委員会

弥生時代の石器

縄文時代後期以降の包含層であるⅡ層，Ⅲ層出土遺物の中で，弥生時代相当期と推測される，石器及び素材剥片について掲載した。打製石斧，磨製石斧，磨敲石，石皿，砥石など，弥生時代以降も継続的に使用されたであろう石器類については，出土状況から明確な時代区分ができないため，前項に記述掲載した。

磨製石鏃（第160図　888 ～ 892）

888 ～ 892は磨製石鏃である。５点出土し，全て図化した。888は使用中の欠損品と思われる。先端部のみの出土である。889は先端部をわずかに欠損するが，ほぼ完全な形での出土である。基部の抉りがやや深い。また，後述する素材石材の特徴である錆付着が観察できる。890は欠損の激しいものであるが，丁寧な研磨により作出されている。891は長軸4.8cm・短軸2.5cmの，比較的大型の磨製石鏃である。形状及び研磨は，鏃先端を頂点とする中心線を最大厚部とし，縁辺部にかけて鋭角に研磨加工する。その後，中心から基部にかけての膨らみを平坦にするための研磨を施している。したがって，研磨面は舟形になる。892は長軸と短軸の比が，4対１と細長い形状をしている。先端部は使用によるものか，欠損している，細身の磨製石鏃であるが，891と同様の加工技術が確認できる。

５点の磨製石鏃は全て，鉄分を含んだ頁岩を素材とする。

扁平磨製片刃石斧（第160図　893）

893は大陸由来の扁平片刃石斧である。当遺跡では，１点の出土であり，他には破損品等の発見もない。刃部を繰り返し研ぎ直したと思われ，7.3cmと短くなっており，相当使い込まれた形跡が残る。これまで入来貝塚・高橋貝塚等，薩摩半島西海岸を中心とする地域での出土が多い片刃石斧である。大隅半島では，内陸部で王子遺跡，水の谷遺跡，最近では上水流遺跡，下鶴遺跡，魚見ヶ原遺跡等での発見が確認される。また，本遺跡の近隣では，夏井土光遺跡で同質石材の抉入片刃磨製石斧が１点発見されている。

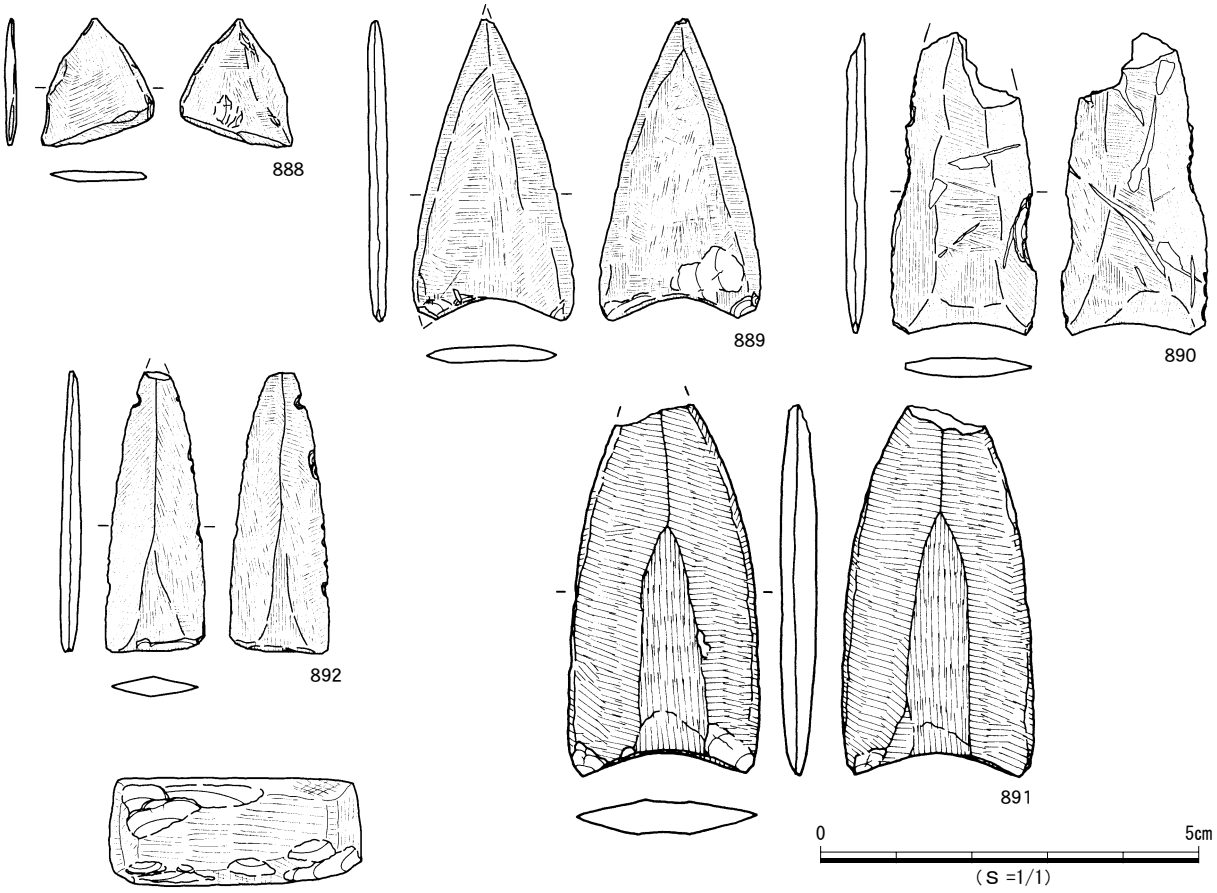
石材も西北九州産試料に類似し，類似遺物出土の遺跡と同様に，製品の持ち込みであると推測される。

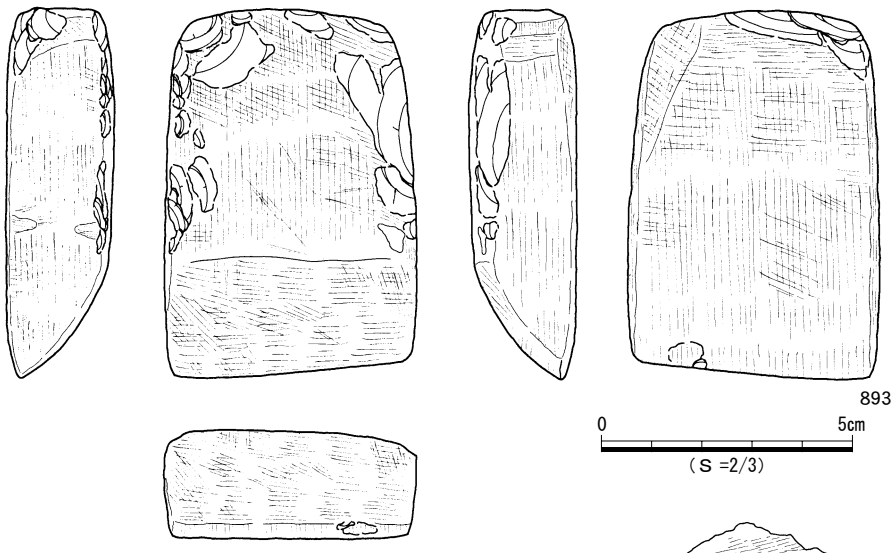
素材剥片（第160図　894）

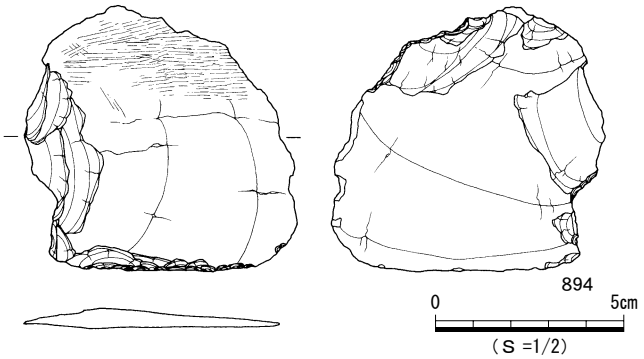
894は頁岩を節理に沿って剥離加工し，厚さが６mm程度の板状になるよう，一部に研磨加工を施した石器素材と思われる。この板状素材の一部を加工し，前述の磨製石鏃，或いは本遺跡では出土の確認はないが，石包丁等に加工するものと思われる。また，この石材は，打製石斧や磨製石斧の素材としても，出土は少ないものの使用されている。鉄分を多く含むため，石斧や土掘具として加工されたものや素材石材の多くが，錆腐食した状態で検出されている。

参考文献等（石器・石製品）

鹿児島県埋蔵文化財報告書（111）魚見ヶ原遺跡　2007
鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県埋蔵文化財報告書（113）上水流遺跡1　2007
鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県埋蔵文化財報告書（107）山ノ中遺跡　2006
鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県埋蔵文化財報告書（130）市ノ原遺跡（4・2）
2007
鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県埋蔵文化財報告書（79）大坪遺跡　2005
鹿児島県立埋蔵文化財センター
志布志町埋蔵文化財報告書（7）倉園Ｂ遺跡　1984
志布志町教育委員会
志布志町埋蔵文化財報告書（6）柳井谷遺跡　1984
志布志町教育委員会
志布志町埋蔵文化財報告書　簑輪遺跡・柳遺跡　1980
志布志町教育委員会
志布志町埋蔵文化財報告書　別府（石踊）遺跡　1979
志布志町教育委員会
松山町埋蔵文化財報告書（6）　山ノ田遺跡　2005
松山町教育委員会
松山町埋蔵文化財報告書（4）前谷Ｂ遺跡　1990
松山町教育委員会
福岡市埋蔵文化財調査報告書（1069）板付10　2010
福岡市教育委員会
出雲玉作の特性に関する研究　2009
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター
日向・薩摩・大隅の原像　南九州の弥生文化　2007
大阪府立弥生文化博物館







第160図　弥生時代の石器

6　古墳時代の調査

（1）調査の概要

標高60m弱の南側に下がる緩斜面に，ほぼ南北・東西に主軸をもつ方形の住居跡が４軒検出された。２号住居跡は削平を受けていたが，Ⅱ層の暗褐色土を剥いだところで，Ⅲ層の黒色土に，Ⅱ層の落ち込みが見られ，Ⅲ層上面で検出した。住居跡の堀方は，Ⅳ層へ達しているので，下部の埋土にはアカホヤが混入する。すべてが貼り床され，中央に地床炉を持つ。

４軒は，南側中央部に広場を持つかたちで，配置された古墳時代の住居跡群である（第161図）。

出土遺物は，在地の成川式土器，須恵器が中心である。成川式土器は，笹貫式土器（中村　1987）が中心である。

土器の胎土は，最も多いものは，黄白色を呈し，石英，長石，砂礫を多く含み，微量に角閃石がみられるもの，899・900・902・910・911・912・914・915・917・925・927・929・930などがこれにあたる。さらに，この胎土に赤色粘板岩の円礫を含む一群がある。918・921・928・931・932・933・934・938・940などである。高隈山系を中心に，曽於地域の台地や，円礫から沖積地の可能性があり，肝属平野の粘土などが使われたと考えられる。また金雲母は国見山系からの河川堆積物に多量に含まれており，丸椀形土器は大隅半島南部や肝属平野の高山側の粘土を使用した可能性が考えられる。

また，赤褐色の発色で，透明の石英を多く含むものがあり，角閃石の量が少し増えること，粘土継ぎ目を残す技術的特徴から，日向方面からの搬入品の可能性も考えられる。

（2）遺構と遺物

１号住居跡（第162図）

Ｂ－44区，Ⅲ層上面で検出された。平面の形状は方形を呈し，長軸が東西方向で５m10㎝，短軸が南北方向４m70㎝で，ほぼ正方形である。

検出面から床面までの深さは約70㎝で，Ⅳ層まで掘り込まれている。掘り込み面は，ポーラスで，Ⅳ層のアカホヤが混じって固い床面が形成される。

埋土は，壁際からアカホヤの混入が多い層とその上に黒色の強い層がレンズ状に堆積しているが，中央付近はアカホヤ混じりの暗褐色土で，アカホヤのブロックが混入するが分層はできなかった。

中央に明黄褐色の地床炉があり，炉の周辺80㎝×90㎝の範囲はさらに硬化面が形成されている。竪穴住居跡の床面で，６基のピットを検出した。

４本柱を主柱とし，柱間は東西約240㎝，南北約200㎝である。ピットの埋土は暗褐色土で，住居跡埋土と同じであるが，うち２基は柱痕跡が残存しており，柱痕跡の埋土は黒褐色を呈する。一穴が25㎝と浅いが，他は40 ～ 50㎝と深い。北西の土坑では，須恵器模倣の土師器が出土している。

１号住居跡出土土器

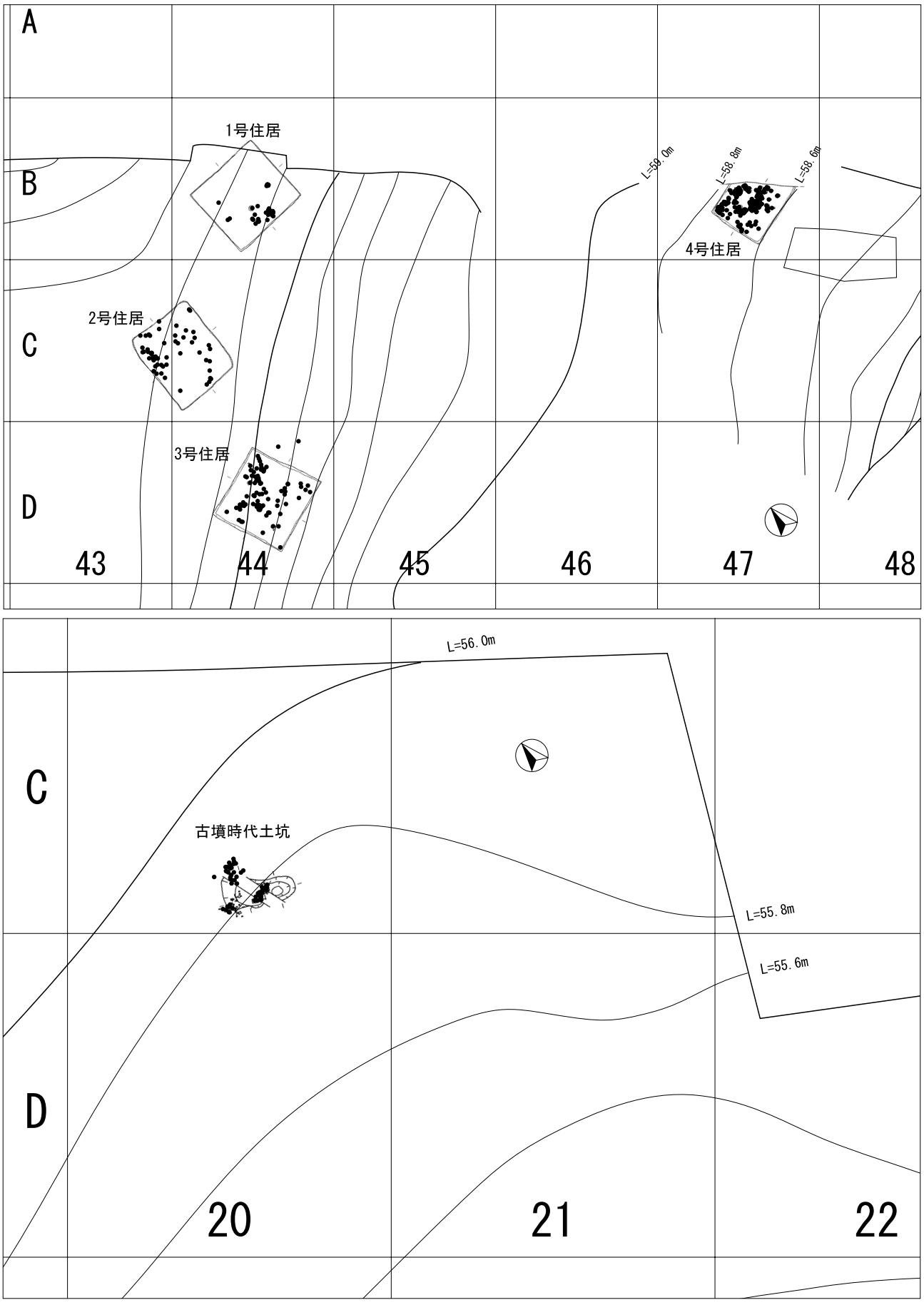
（第163図895 ～ 904，第176図943・944・946）

遺物は，ほぼ床着で出土し，勾玉１個と管玉２個と須恵器が出土しているが，須恵器は住居跡の外から出土したものと接合している。貯蔵穴から須恵器写しの坏蓋が出土した。

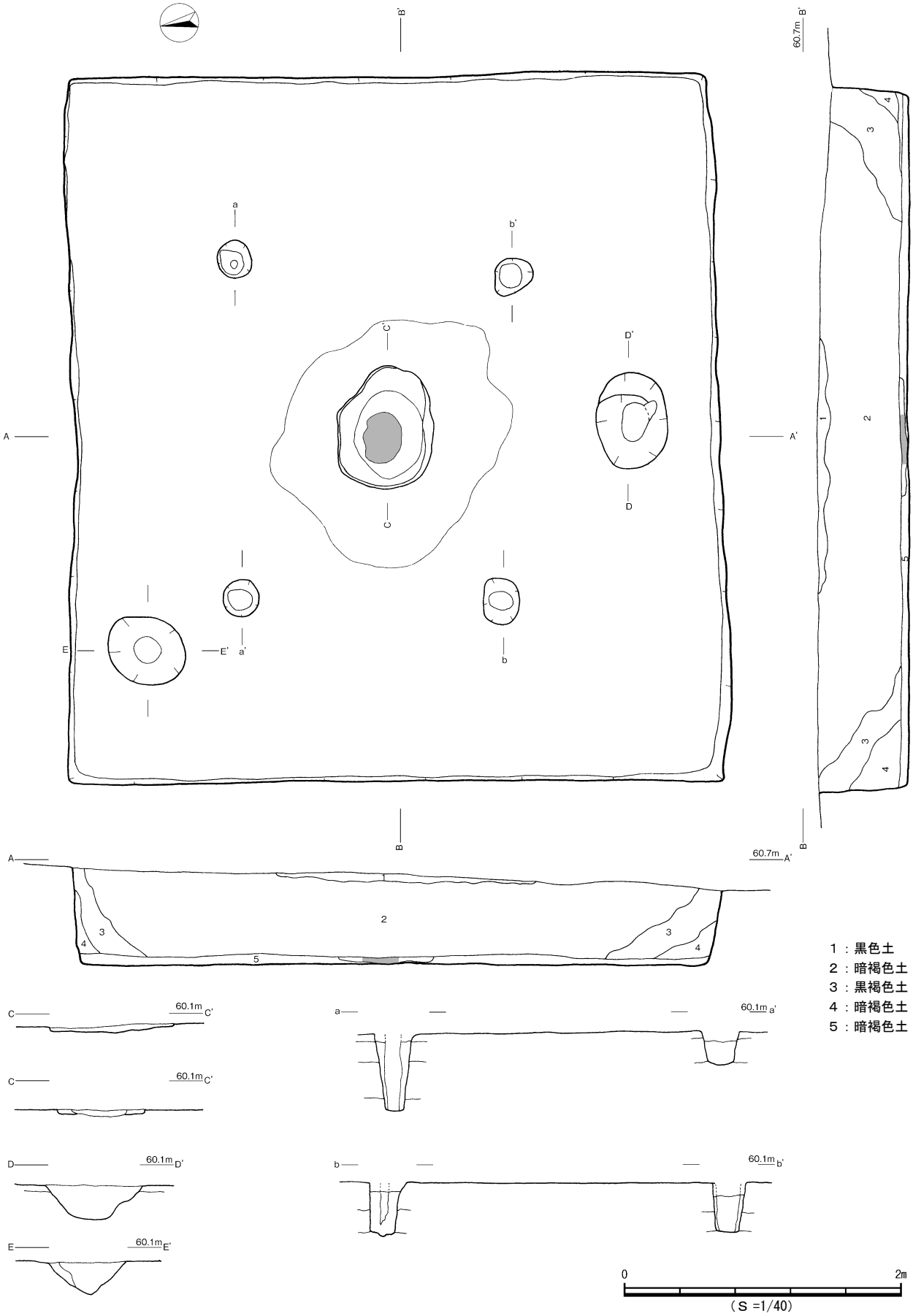
895は須恵器の坏蓋である。天井部は浅く盛り上がり，回転ヘラ削りによって成形を行う。シャープな稜をもって，わずかに外反して口縁部に至る。口唇部は，浅い窪み状となる。大阪府陶邑編年によるⅡ型式２段階の６世紀前半に該当する。896は土師器で，天井部は球形をなし，稜をもってわずかに外反して口縁部に至る。口唇部は，丸くおさめる。Ⅱ型式４段階の６世紀後半の須恵器に近く，模倣したものと考える。

897は小型の広口の壺形土器の口縁部，898，899は壺形土器である。接合痕跡が内面に顕著に残る。外面は，地文というか，ハケ目痕跡が顕著であるが，丁寧に工具でナデられた痕跡がある。898の突帯は繊維圧痕が残る。900は小型坩形土器で，ヘラミガキで仕上げられる。901は高坏形土器である。坏部は直線状に開き，緩く内湾しながら口縁部に至る。脚部は上部から大きく開いた裾部をもつ。脚部内面中央には空洞部をつくる。器面が荒れてわかりづらいが，最終的にはヘラミガキで調整してあり，赤色顔料は塗布されていない。902は高坏形土器である。坏部は内湾しながら立ち上がり，体部上半で内側に屈曲して口縁部に至る。脚部はスカート状に大きく開いた裾部をもつ。脚部内面は空洞部となる。器面が荒れて下調整のハケ目の工具痕跡が見えるが，最終調整はヘラミガキであり，赤色顔料は塗布されていない。903は丸椀形土器である。底部は球形に近く，口縁部付近で内湾する。体部外面上部に煤痕がある。胎土には，大粒の金色雲母を多く含む。

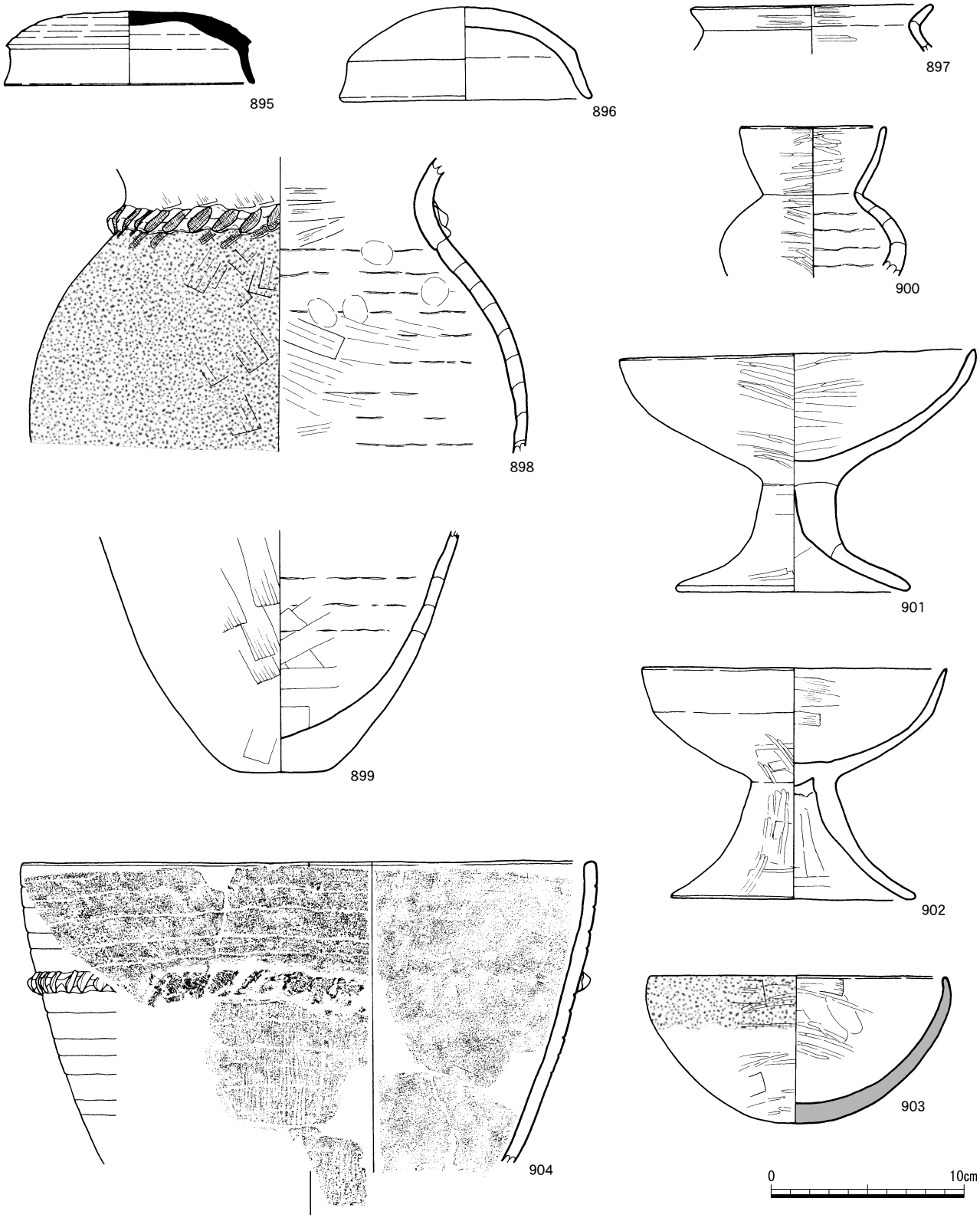
また，943・944の管玉と946の勾玉が出土した。



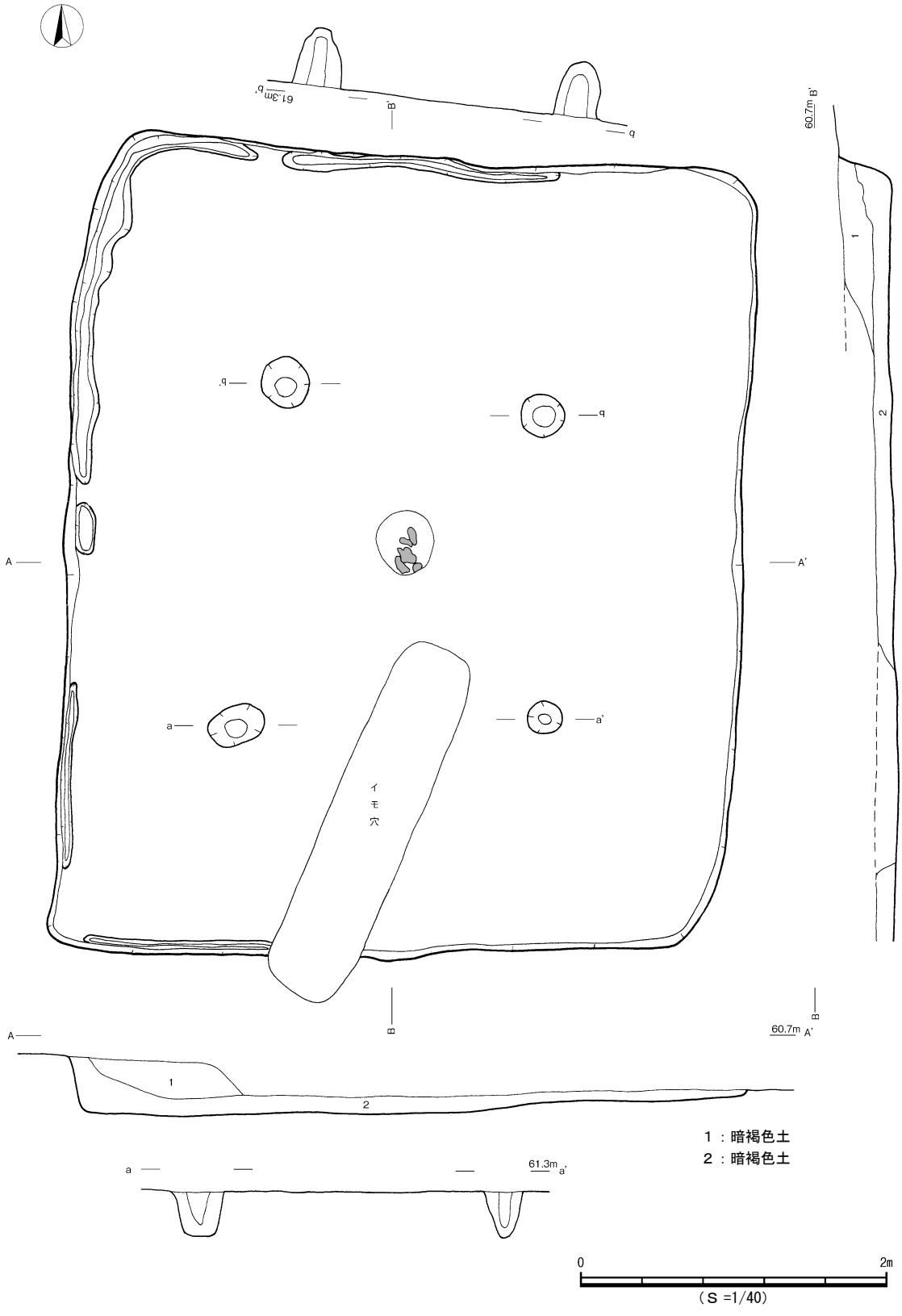
第161図　古墳時代　住居・土坑配置図



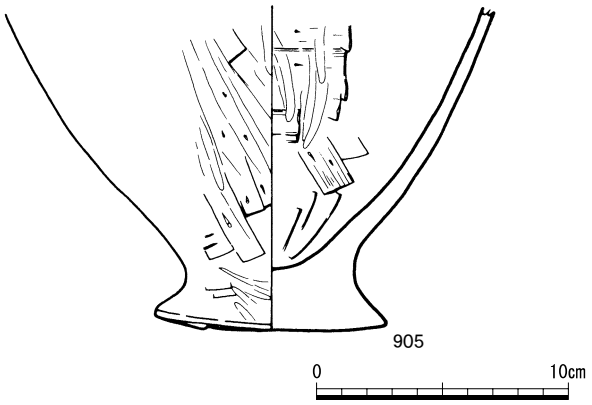
第162図　1号住居



第163図　１号住居内遺物



第164図　古墳時代　２号住居



第165図　２号住居内遺物

２号住居跡（第164図）

Ｃ－43区から44区にかけて，削平のためⅢ層の途中で検出された。平面の形状は，長軸が南北５ｍ30㎝，短軸が東西４ｍ50㎝の長方形である。

南東部分が削平を受けており，貼床部分まで削平されていた。検出面から床面までの深さは約10㎝である。

西側に壁帯溝が残る。全周にあったものと考えられる。中央に約40㎝の円形の地床炉があり，竪穴住居跡の床面で，４基のピットを検出した。ピットの埋土は暗褐色土で，柱痕跡は黒褐色である。

ピットは主柱穴と思われ，４基はいずれも柱痕跡が残り，柱痕跡の埋土は黒褐色を呈する。柱間は北西隅がやや外れるが，約２ｍである。深さは30 ～ 40㎝である。

２号住居跡出土土器（第165図905）

埋土が浅く，遺物は少ない。遺物は，甕形土器の下半部と，坏部の深い高坏の破片が出土している。

905は，甕形土器の胴部下半部で，内外に工具による丁寧なナデが見られる。３号住居跡の出土土器908，909に，共通する型式と考えられる。

３号住居跡（第166図）

Ｄ－44区，Ⅲ層上面で検出された。平面の形状は方形を呈し，長軸が南北方向で４ｍ90㎝，短軸が東西方向４ｍ80㎝で，ほぼ正方形である。

検出面から床面までの深さは約50㎝で，Ⅲ層に掘り込まれている。床面はⅣ層まで掘り込まれている。掘り込み面は，ポーラスで，Ⅳ層のアカホヤが混じって固い床面が形成される。

埋土は，３層に分けられ，黒色土が中央部に円形で堆積し，その下に暗褐色土，アカホヤの混じった黒褐色土，床面，アカホヤブロックが混入した暗褐色土が貼り床となる。

中央に赤褐色の地床炉があり，120㎝×120㎝の不定形で，炭化物が多く混じっている。

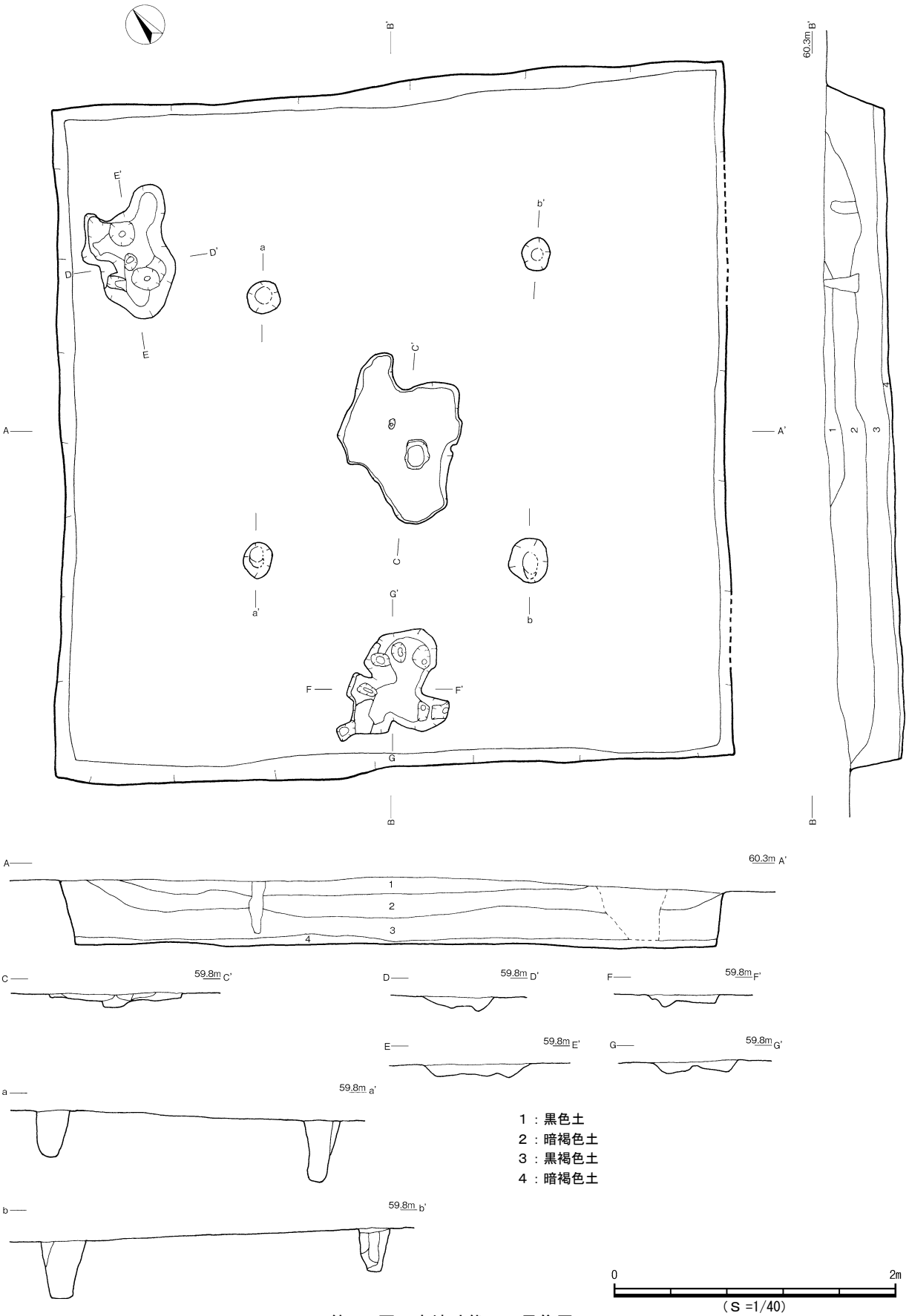
竪穴住居跡の床面で，４基のピットを検出した。ピットの埋土は暗褐色で，アカホヤを含み，住居跡埋土と似ている。

４基のピットは主柱穴で，北東側の１穴がややはずれるが，柱穴間は約２ｍで，北側の２穴は深さ約35㎝，南側の２穴が深さ45㎝と，南側が深い。北西側では柱痕跡が検出されている。この他に北東隅と南側に浅い土坑を検出した。

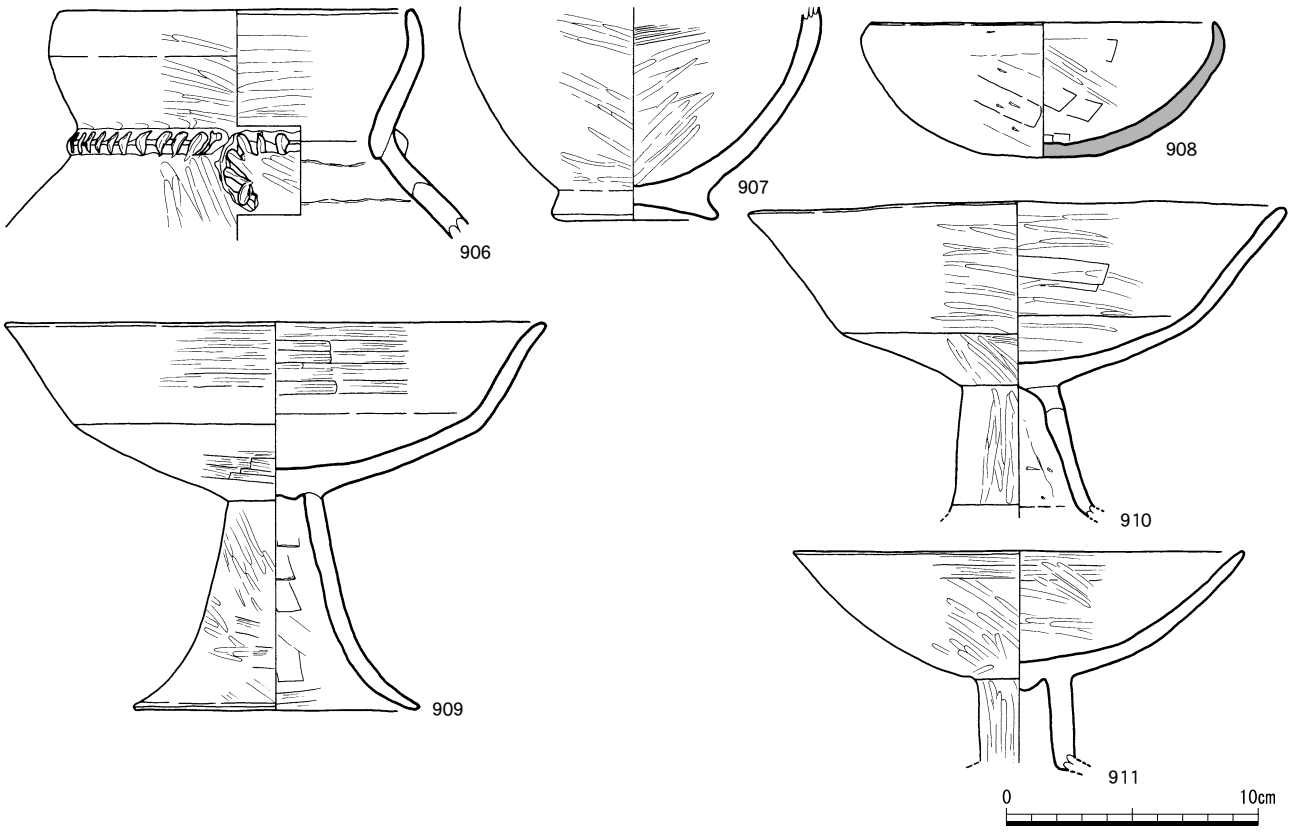
３号住居跡出土土器（第167図906 ～ 911）

遺物は，床面近くからおもに出土した。

906は壺形土器の上部で，口縁部下で屈曲して，内湾しながら立ち上がる。ヘラミガキで調整される。胴部は，粘土の継ぎ目が顕著に残る。907は，壺形土器の胴部下半部で，底部は上げ底状である。内外面はヘラミガキされる。908は，丸椀形土器である。底部は球形に近く，口縁部付近で強く短く内湾する。胎土には，大粒の金色雲母を多く含む。909 ～ 911は高坏形土器である。基本的にヘラミガキで丁寧に仕上げられる。909は，屈曲してやや外反して立ち上がる坏部と，脚部は徐々に裾広がりに開いていく。910は，坏部が直線上にわずかに外反して開き，脚部はエンタシス状から屈曲して大きく開く脚部をなす。911は浅い皿上の坏部に，脚部はエンタシス状から屈曲して大きく開く脚部をなす。



第166図　古墳時代　3号住居



第167図　3号住居内遺物

4号住居跡（第168図）

Ｂ－47区，Ⅲ層で検出された。平面の形状は方形を呈し，長軸が南北方向で４m40㎝，短軸が東西方向３m60㎝の長方形である。

検出面から床面までの深さは約50㎝で，Ⅲ層に掘り込まれている。床面はⅣ層まで掘り込まれている。掘り込み面は，ポーラスで，Ⅳ層のアカホヤが混じって固い床面が形成される。

埋土は，４層に分けられ，上から黒色土，暗褐色土，黒褐色土，暗褐色土にアカホヤの混じった層からなる。

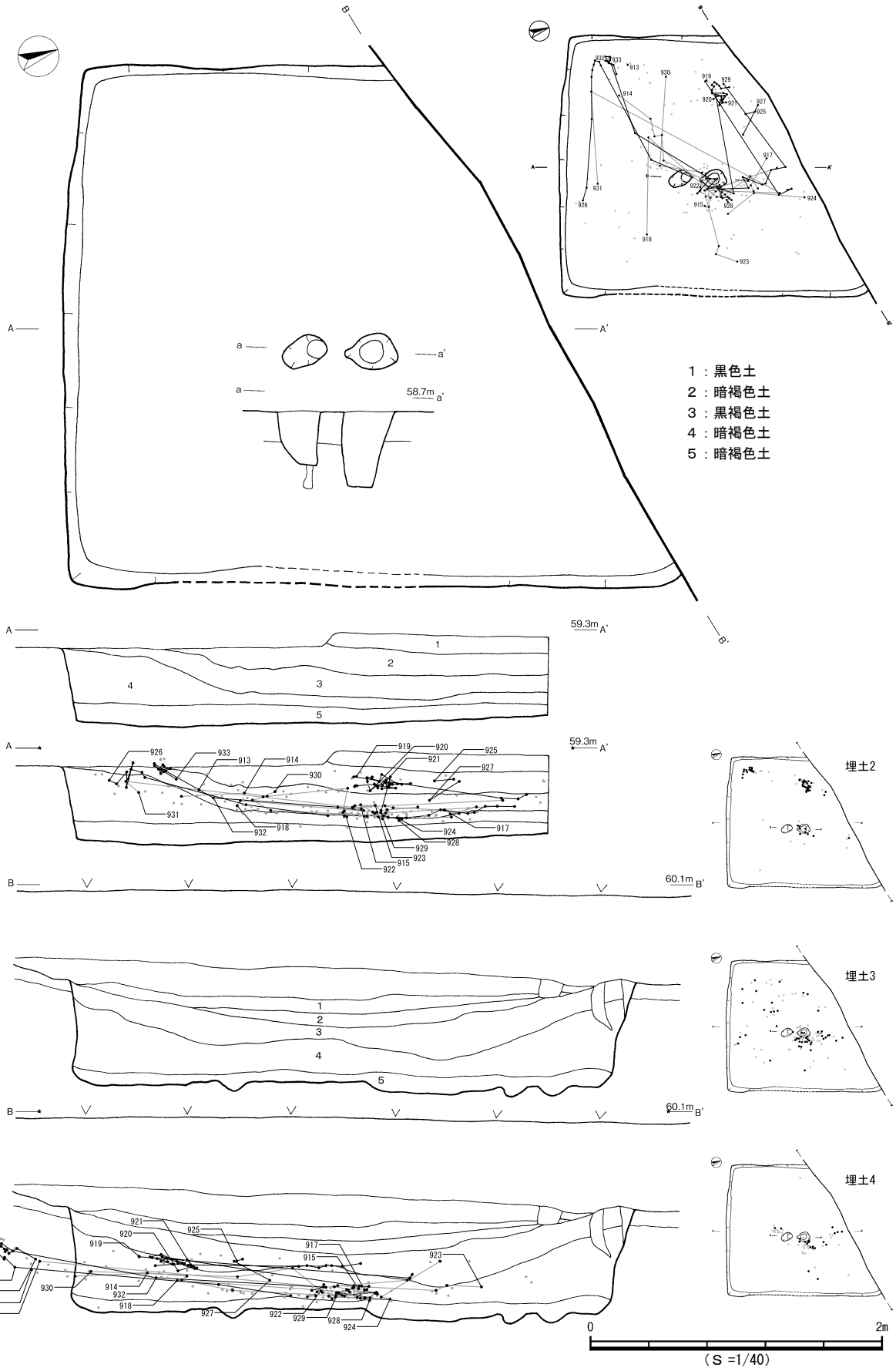
中央に，近接して２基のピットを検出した。ピットの埋土は暗褐色で，アカホヤを含み，上位の住居跡埋土と同じである。

4号住居跡出土土器（第169図912～第172図933）

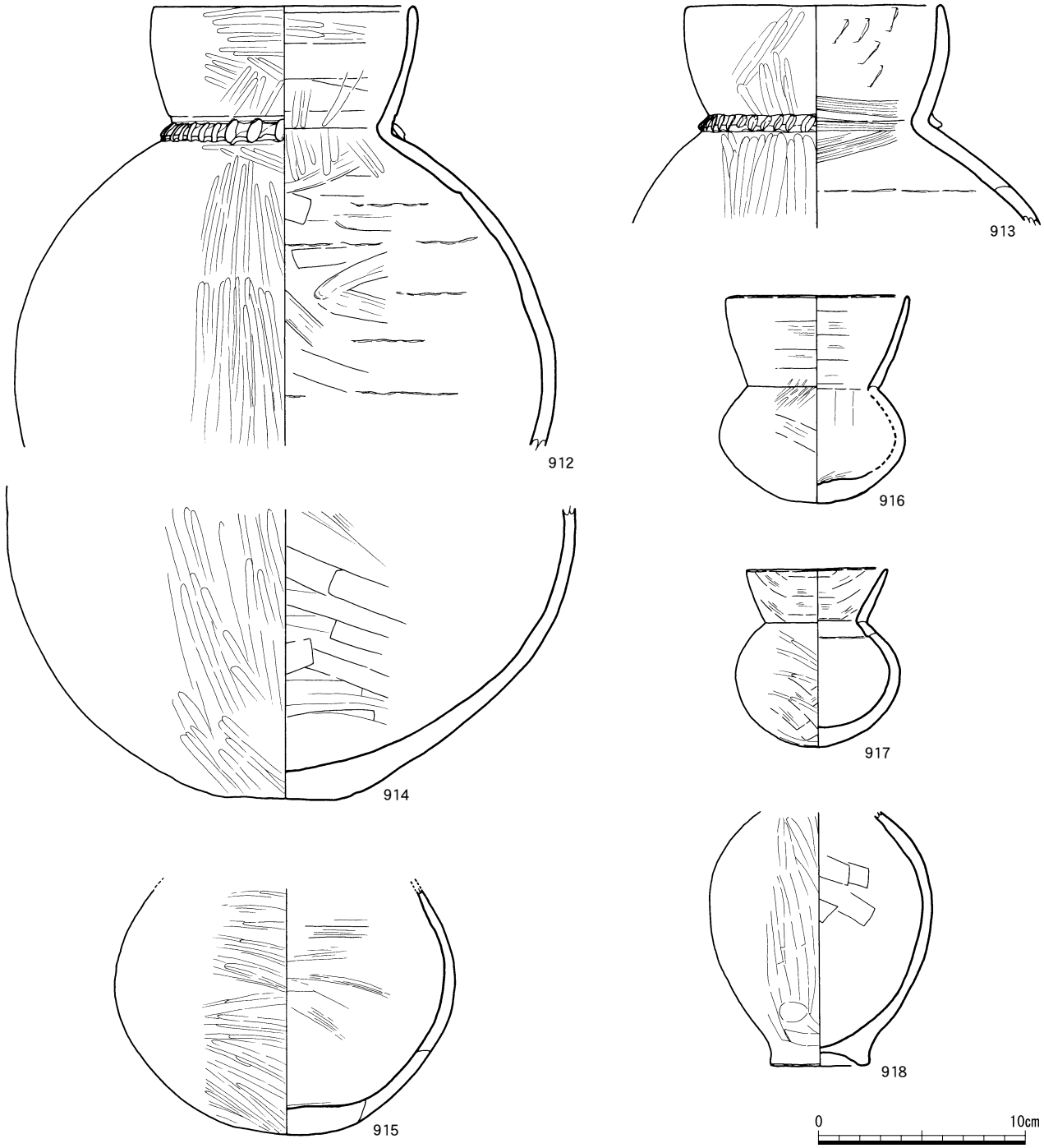
遺物は，床からやや浮いた状況で出土し，遺物の断面図の状況から，2時期に分けて廃棄されたと判断できる。状況からは，２つの土器群の可能性がある。これについては，後ほど詳述したい。

912, 913は壺形土器の上部で，内湾する口縁部を持ち，頸部に刻目突帯を巡らす。912は刻目部分に繊維圧痕を持つ。内外面は，丁寧なヘラミガキで調整される。粘土の輪積み痕が内面に残る。914, 915は壺形土器の胴部で，丸底である。内外面は，丁寧なヘラミガキで調整される。

916は，坩形土器の完形品である。丸底から胴部中位に最大径があり，口縁部は緩く内湾しながら立ち上がる。胴部と口縁部の接合には，ヘラ状工具による斜位方向の調整がみられる。全体的にヨコナデにより，一部ヘラミガキが残って，調整がなされる。赤色顔料などの塗布はみられない。口縁部が大きく開く。917も，坩形土器の完形品である。丸底から胴部中位に最大径があり，口縁部は緩く内湾しながら短く立ち上がる。全体的に丁寧なヘラミガキにより，器面調整がなされる。赤色顔料などの塗布はみられない。918は小型の壺形土器の胴部から底部である。外面は丁寧にヘラミガキされている。919，920は甕形土器である。頸部刻目突帯の刻部は繊維圧痕を残す。919は，わずかに頸部がしまる。口縁部が工具でナデられ，胴部はヘラミガキされている。920は，頸部以下が残っているが，外面ヘラミガキされ，内面はナデられている。底部は張り出した平底である。921は，広口の壺形土器である。全面に煤が付着し，煮炊きに使用したものと考えられる。球形に近い丸底からほぼストレートに胴上半部に至り，緩く内湾して頸部となり，外傾した口縁部が付く。胴部外面の器面調整は，縦方向の丁寧なナデによるものであり，口縁部内外面は板状工具による横方向のナデである。内面の肩部には，輪積みによる粘土の接合痕がみられる。922～924は，



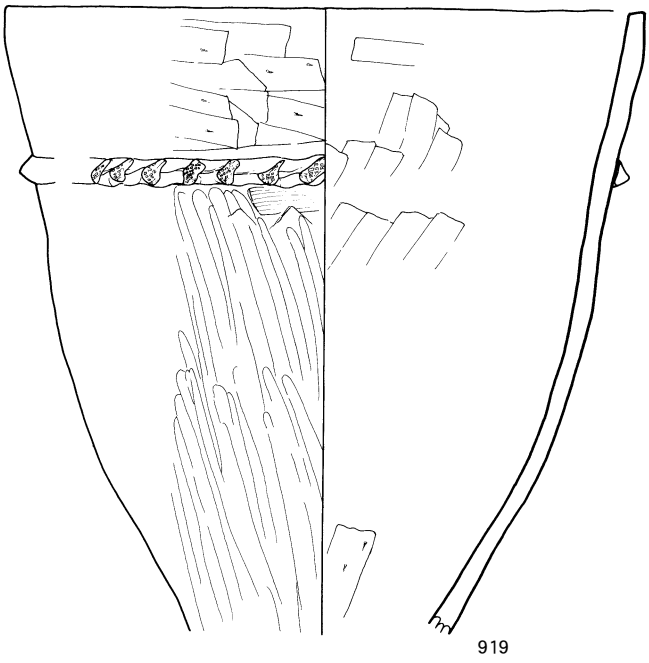
第168図　古墳時代　４号住居

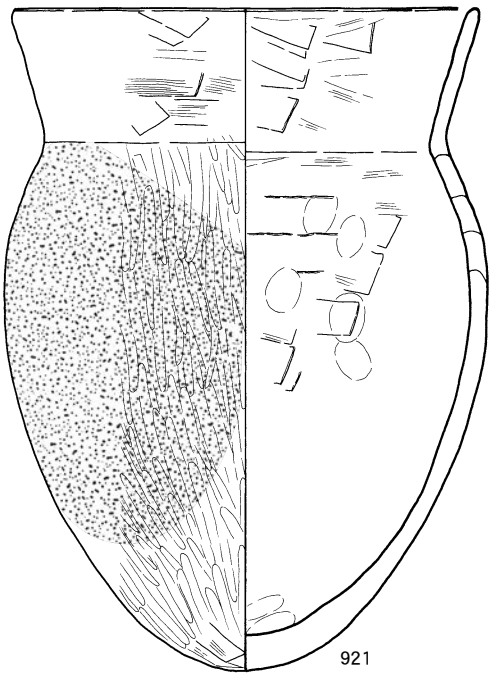


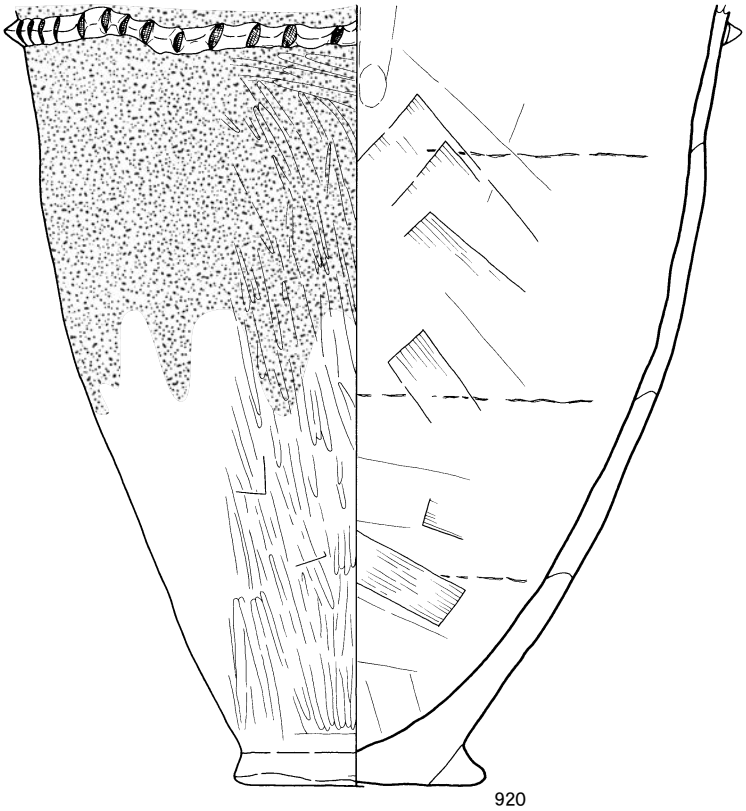
第169図　4号住居内遺物①

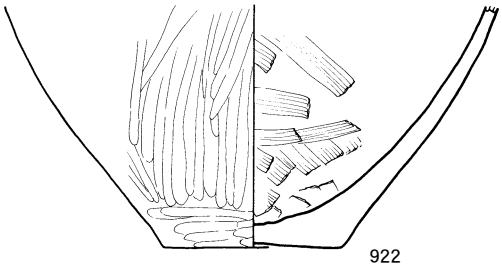
甕形土器の底部である。外面はヘラミガキされて，内面はハケ目を一部残す，工具によるナデである。923の底部は高台状になっている。925は甕形土器の上半部で，口縁部が内湾して立ち上がる。内外面はハケ目調整されている。926の甕形土器は，下半部外面はヘラミガキされて，内面はハケ目，工具ナデ調整される。張り出し，上げ底の底部である。927は鉢か甕の脚台で，胴部にはヘラミガキがみられる。

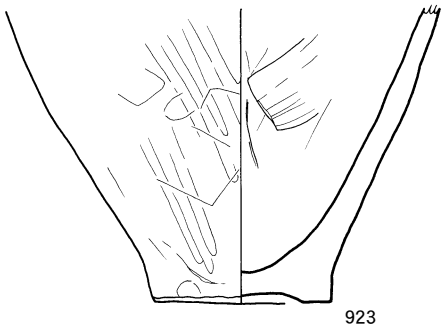
928～933は高坏形土器である。928は，坏部は下半部で内湾し，緩く屈曲しながら外反気味の体部上半をへて口縁部に至る。脚部はエンタシス状の柱状部から大きく開いた裾部をもつ。脚部内面は空洞部となり，柱状部と裾部の境は明瞭な稜が入る。器面調整はヘラミガキであり，赤色顔料は塗布されていない。胎土に赤茶色のシルト礫を含む。929は，坏部は下半部で屈曲し，直線状に開きながら口縁部に至る。脚部はエンタシス状の柱状部から大きく開いた裾部をもつ。脚部内面は空洞部となり，器壁を薄くしている。器面調整はヘラミガキであり，赤色顔料は塗布されていない。930，931は深い坏部の高坏形土器で，脚部はエンタシス状の柱状部から大きく

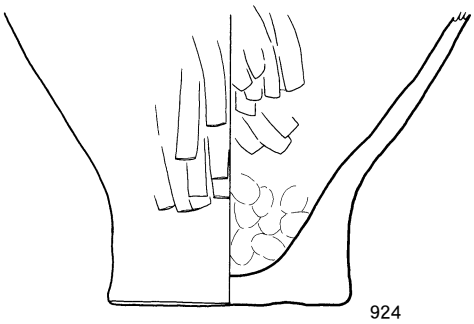




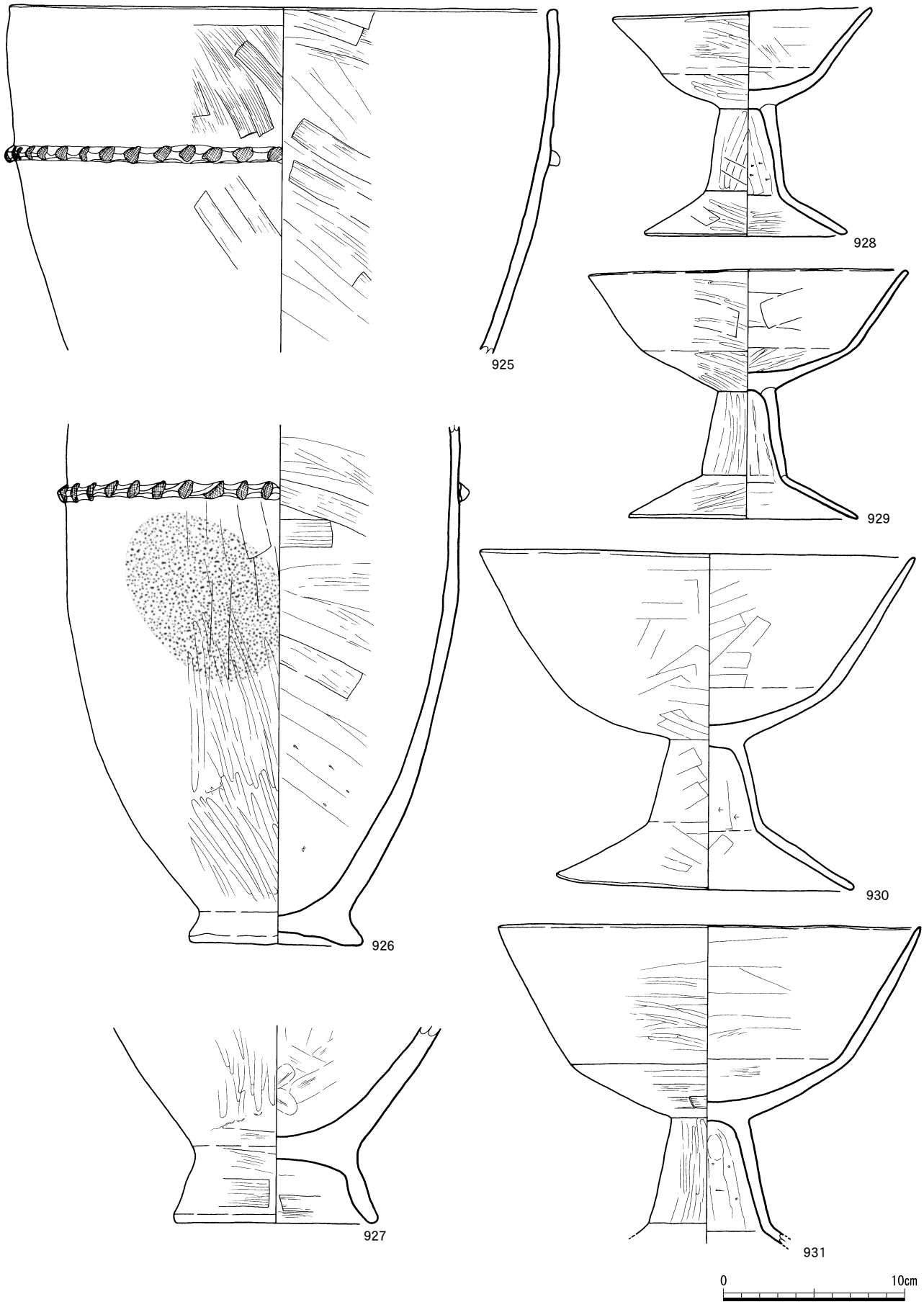




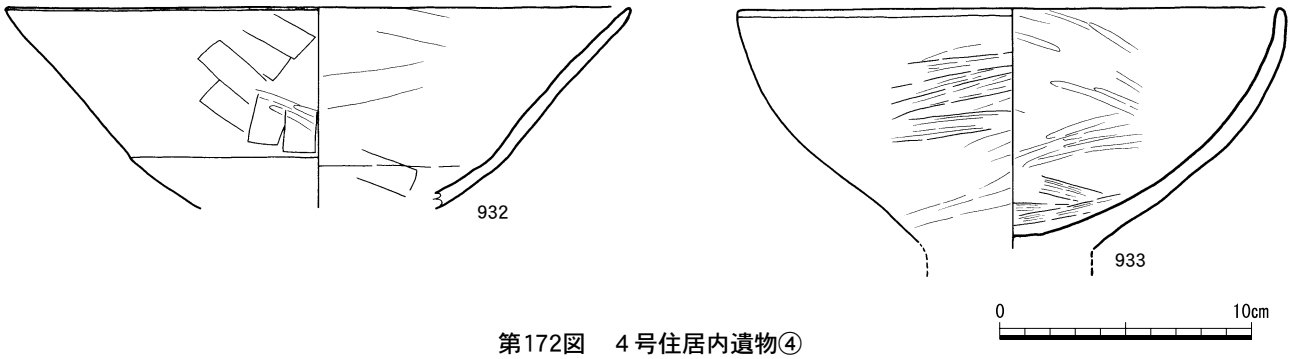




第170図　４号住居内遺物②



第171図　４号住居内遺物③



第172図　４号住居内遺物④

開いた裾部をもつ。脚部内面は空洞部となり，器壁を薄くしている。

932，933も深い坏部のもので，933は，内湾するボール状の坏部である。

底部は稜がはっきりしない平底であり，緩く内湾しながら体部へ至り，口縁部付近で内湾を強くする。底部外面中央に窪みがあり，底部内面は全体的に盛り上がっている。体部外面には煤が付着しており，加熱具として利用されたと考えられる。あるいは煤を付着させた可能性が

土坑（第174図）

Ｃ－20区，Ⅲ層で検出された。中央部がトレンチにより撹乱されているが，平面の形状は楕円形を呈し，長さが南北方向で２ｍ25㎝，最大幅が東西方向１ｍ５㎝の楕円形である。

検出面から床面までの深さは約25 ～ 40㎝で，Ⅲ層に掘り込まれている。完形の甕形土器が出土している。

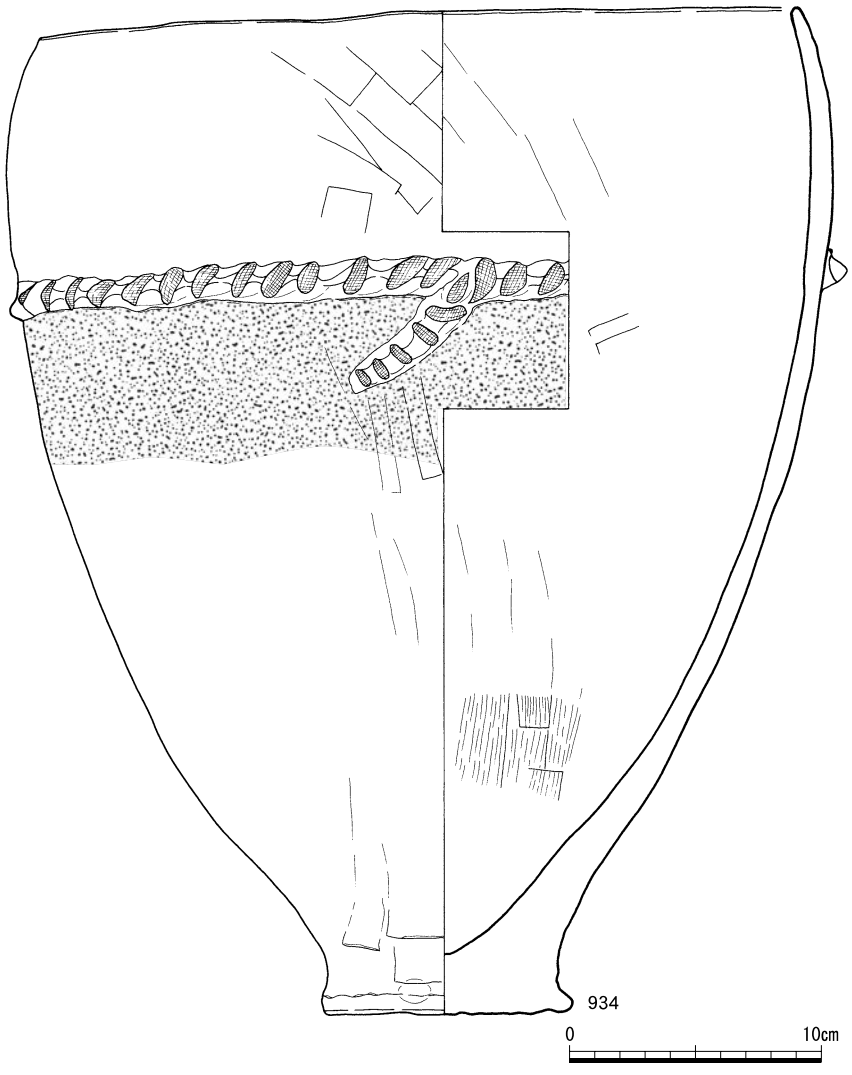
土坑出土土器（第173図934）

平底で張り出しのある底部から胴上部まで内湾気味に立ち上がる。突帯位置はやや下がっている。突帯部分の上は，やや強く内湾した口縁部となる。突帯は斜めに垂下した部分からつくりはじめ，一周させて繋いである。突帯上には刻目を施すが，平織りの布目圧痕が認められ，工具が離れやすいように工夫していると考えられる。突帯下部付近に煤が付着している。

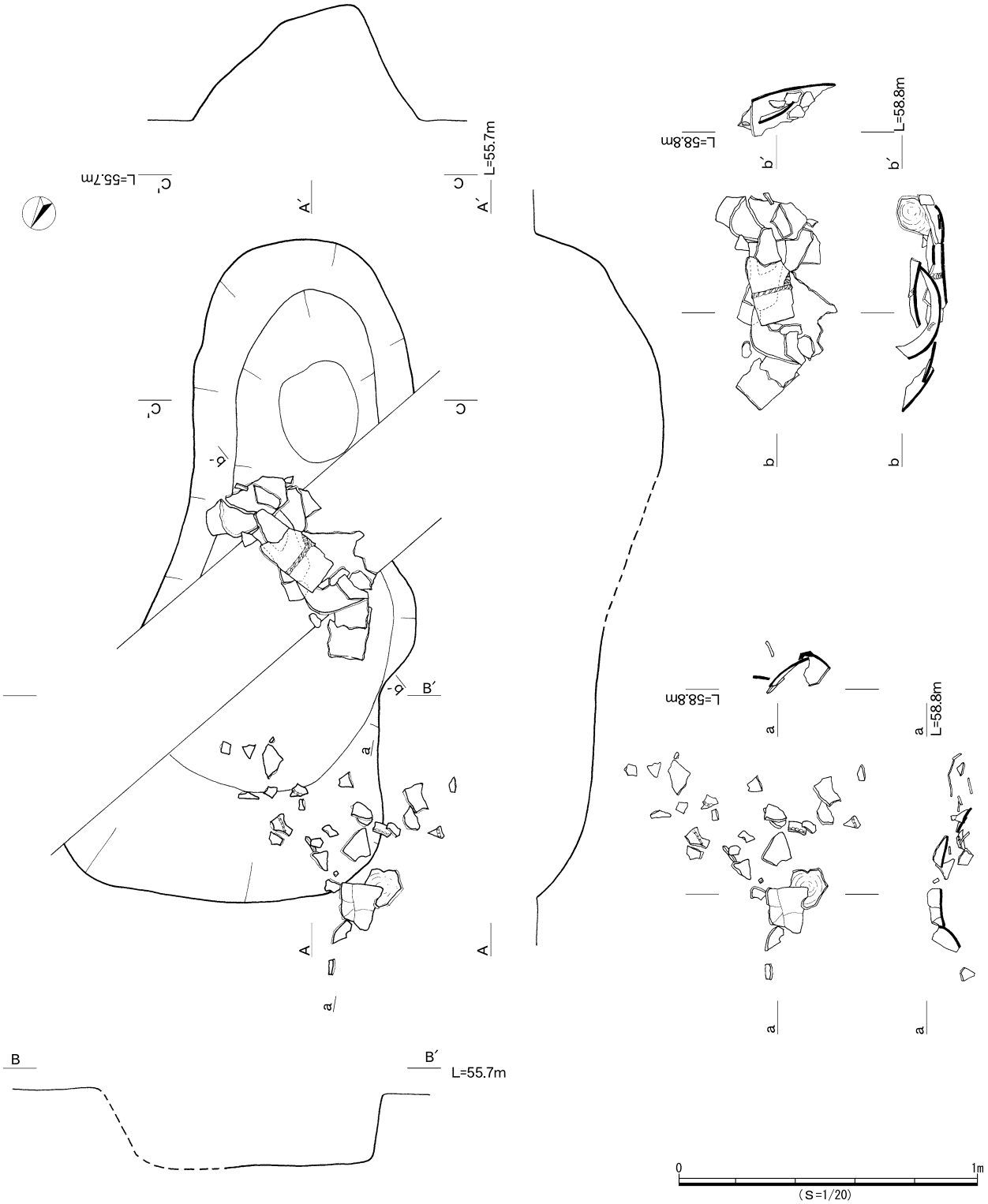
包含層の遺物

（第175図935 ～ 940）

935は，須恵器の口縁部と考えられる。灰釉がかかる。936は小型壺で，外面はヘラミガキで調整される。937は椀形土器である。

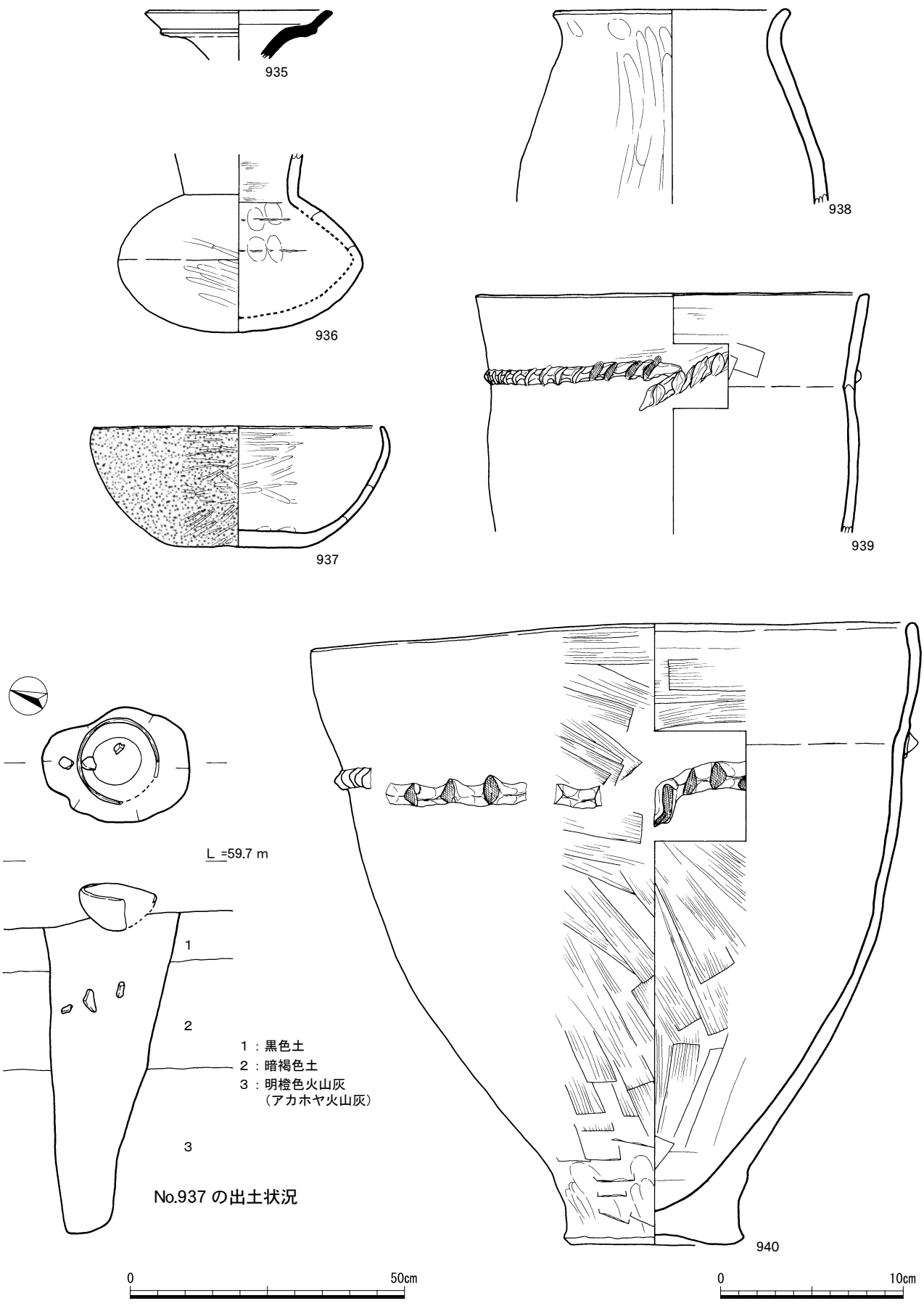


第173図　古墳時代　土坑出土土器

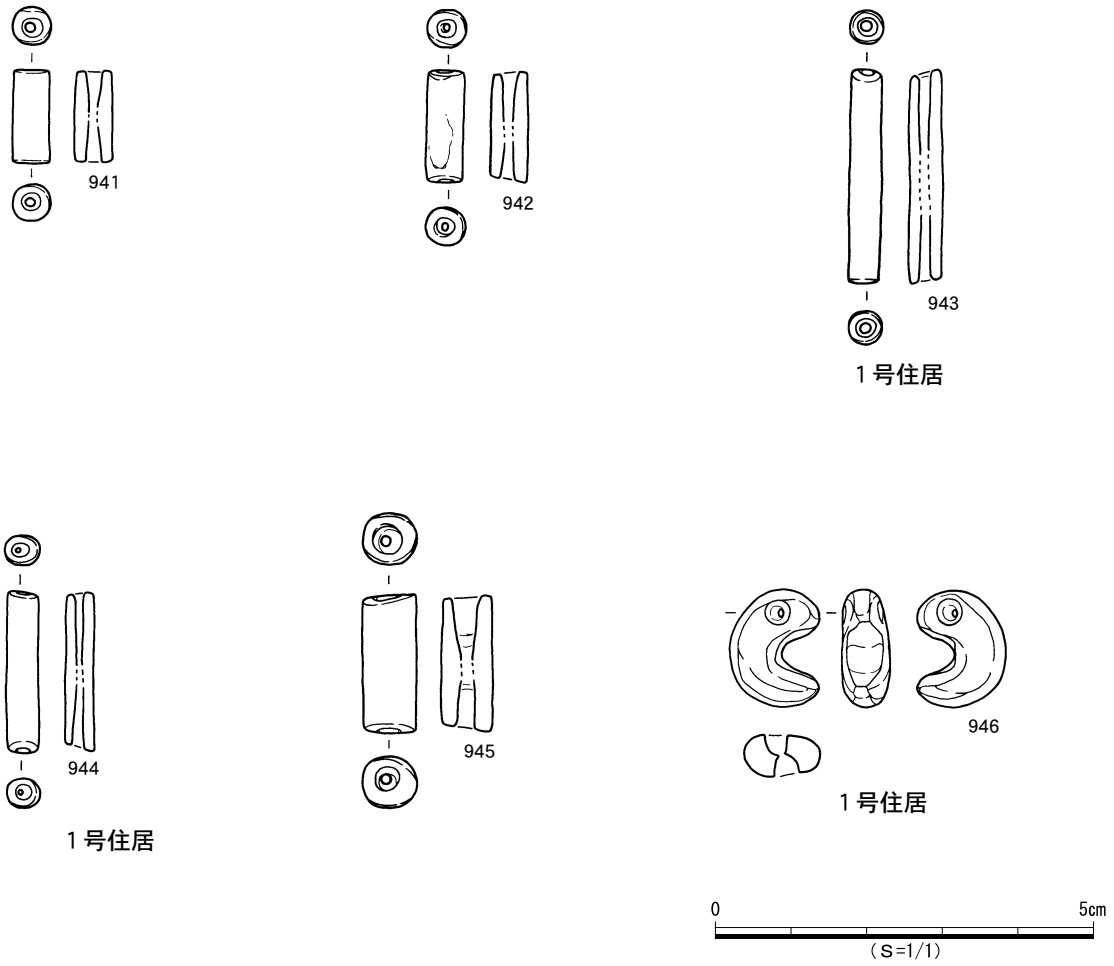


第174図　古墳時代　土坑

ある。須恵器の写しの可能性もある。939・940は甕形土器である。刻目には，平織りの布目圧痕が認められる。939は頸部で屈曲して，口縁部が外反する。丁寧な工具ナデで，外面の全面に煤が付着する。940は，平底で張り出しのないやや厚めの底部から胴上部まで内湾気味に立ち上がる。突帯部分でわずかにくびれ，その上はやや強く内湾した口縁部となる。突帯は斜めに垂下した部分からつくっているかどうかは確認できないが，左手の人差し指と親指でつまみながら一周させている。突帯上には刻目を施すが，指でつまんだ２単位分を基本に刻んでいる。



第175図　古墳時代の土器（その他）



第176図　古墳時代の石製品

古墳時代の石製品（第176図　941 ～ 946）

古墳時代の遺物として，住居内から勾玉及び管玉が出土した。翡翠製勾玉は，最大長1.56cm・最大幅1.2cm・最大厚0.6cm・重量1.82ｇの小型のものであるが，蛸翠の緑色の部分を含む，上質の翡翠輝石を素材とする，翡翠の中でも貴重な部位である。新潟県糸魚川市小滝周辺の産地のものであろう。また，加工は丁寧で，高度な研磨技術を用い，しっかりと磨き込まれ，製品の完成度は高い。穿孔は両面穿孔で，古墳時代の穿孔技術を踏襲している。

管玉は古墳時代の住居内から２点，埋土中から３点の合計５点が出土した。水色から濃緑色の碧玉製である。島根県の花仙山を中心とする中国地方が産地だと推測できる。また，完成度の高さ，高度な研磨加工や穿孔加工の状況から，玉造集団の製作したものを持ち込んだ可能性が高い。943，944は１号住居内で946の勾玉と共伴検出である。細い紐状の繊維に勾玉と共に通して垂飾品として使用したものと思われる。

ただ，墓内からの出土ではなく，一般的な住居と思われる中からの検出である。

7　古代の調査

（1）遺物（第177図947 ～ 960）

層位的にはⅡ層が古代に該当するが，この時期の遺構は検出されなかった。遺物数はパンケース１箱にも満たなかったが，良好な遺物が出土している。

947は，ほぼ直立する胴部から短く外反する口縁部をもつものである。胴部内面にケズリはみられないが，器形と口縁部内面に板目状のヨコナデがみられることから，古代の土師甕と判断した。948は14㎜の厚みをもつ胴部上半で，内面はケズリ，外面はナデによる土師甕である。949は復元口径29㎝で，大きく外反する。口縁部はヨコナデであるが，胴部外面は板状工具によるハケ目である。体部内面はケズリによるもので，口縁部との境が明瞭である。鹿児島県内での土師甕は，一般的にナデ調整よりもハケ目調整が古く，厚手よりも薄手の方が古いとされる。この点からすれば，本資料は古代でも前半の９世紀に位置付けられる。

950は951とほぼ同じ底径で，切り離しもヘラ切り技法による坏である。951は復元径7.6㎝の底部で，外傾しながら体部へ至る。底部の切り離しはヘラ切り技法による坏である。このことから，９世紀代でも齟齬はない。

952は口径15.4㎝，器高3.5㎝のわずかに内湾ぎみとなる蓋である。轆轤による成形で，上半部は回転ヘラケズリによる。頂部の切り離しは，回転ヘラ切りによるもので，つまみは無かったものと考えられる。内面は丁寧なミガキによるものであり，炭素を吸着させた内黒土師器の手法をとる。これらの特徴から，古代前半の９世紀代に該当すると考えられる。山本信夫氏によると，10世紀前半より新しくなることはないとのことである。鹿児島県内で土師器の坏蓋は類例が少なく，一般の集落でも使われたのかどうか追究していく必要がある。

953は丸みをもつ底部付近で，少なくとも１つの穿孔をもつ。穿孔は焼成前になされ，直径７㎜である。確実性には乏しいが，多孔の甑と考えられる。鹿児島県内での甑の出土は薩摩川内市大島遺跡や出水市大坪遺跡などがあるが，つつぬけタイプや一橋状のものしか出土していない。

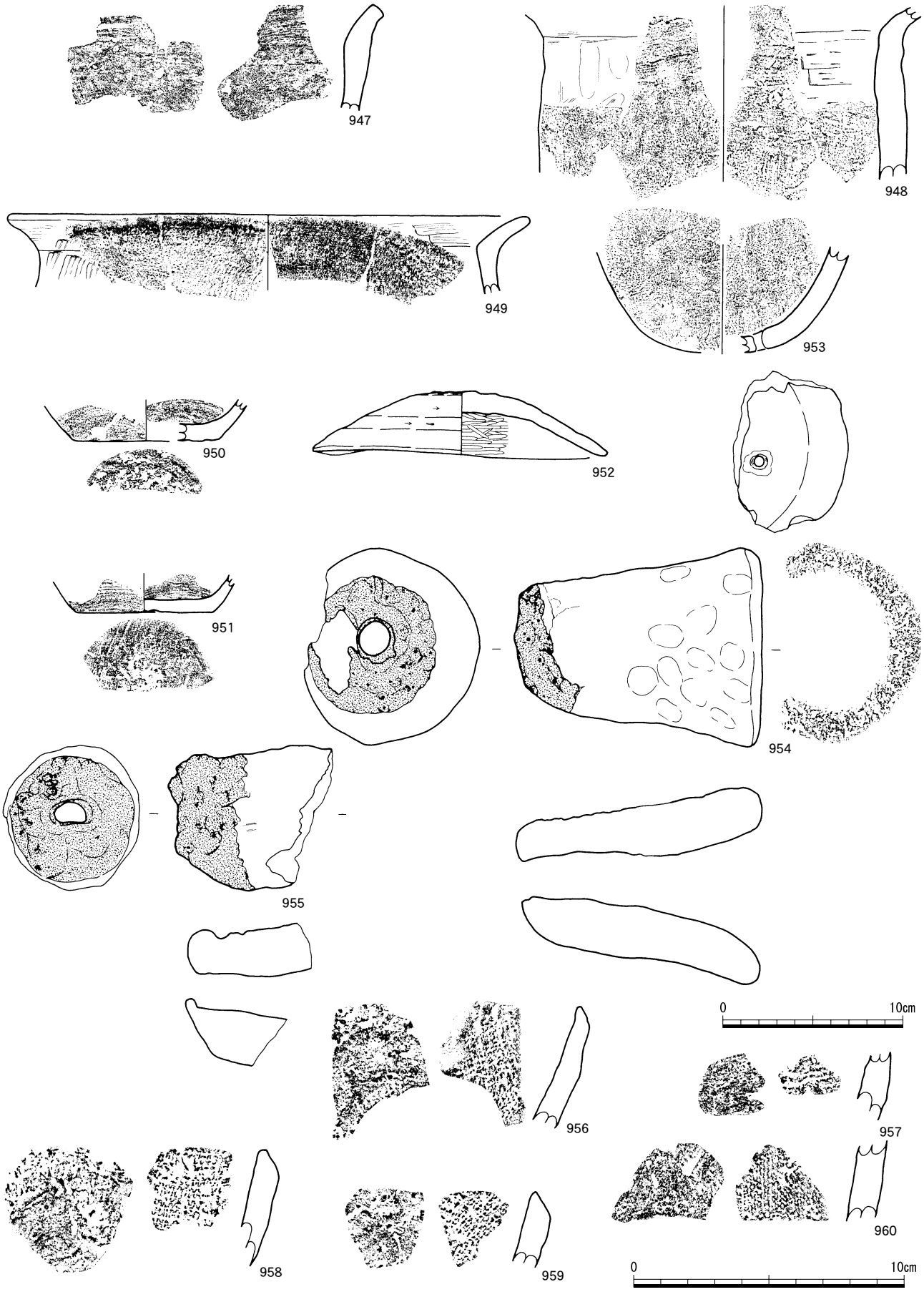
954は先端部径６㎝・裾部径11㎝・長さ14㎝を測る鞴の羽口である。孔の直径は18㎜で，器壁の厚さは28㎜である。先端部は高温のため溶け出していると考えられ，本来の長さは明確でない。胎土に植物繊維を多く含んでおり，種子殻状の圧痕がみられる。955は送風孔の直径2.5㎝，器壁の厚さ３㎝の鞴羽口である。先端部には滓が溶着する。先端が消耗した方が下になると考えられる。発掘調査時点では焼土の存在を把握していなかったとのことであるが，後世の削平により炉跡は消滅した可能性もある。古代や中世の各集落には，鍛冶に関する遺物や遺構があり，鉄の簡単な加工や修理は各集落で行っていた様子が窺える。また，鞴と金床さえあれば，移動しながらでも鍛冶は可能である。鹿児島県内での鞴羽口は６世紀代には高坏の脚部を転用したものがみられ，専用につくられたものは古代に入ってからである。本遺跡の２例も両端の直径の差が開くもので，９世紀代に位置付けられる。中近世になると，両端の直径差がない棒状の鞴羽口がみられる。

956 ～ 960は焼塩壺であり，口縁端部は外側に傾いて尖る。内面には平織りの圧痕が残る。胎土には頁岩性の小石が多く含まれる。このような小石は宮崎地方に分布する四万十層に由来すると考えられ，焼塩壺の製作と製塩は宮崎地方の海辺で行われたと推察される。想像をたくましくすると，宮崎県串間市下弓田遺跡で焼塩壺が多くみつかっているので，ここを拠点に焼塩壺は製作され塩が大隅国内に運ばれたとも考えられる。鹿児島県内の曽於地域には焼塩壺が出土している遺跡も多く，道跡の他に牧場の可能性も指摘されている。人以上に巨体の牛や馬は塩分の補給が欠かせないし，運搬用に使役される牛馬はなおさらである。鹿児島県内で出土する焼塩壺の胎土を把握すると共に，他県を含めた海岸線において，焼塩壺が多数出土した遺跡に注目することによって，塩の生産地と供給地を追究していくことが課題である。

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005『大坪遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）

以上のように，９世紀代における稲荷迫遺跡は遺物の出土数は少なかったものの，甕や坏の日常使う道具の他に，坏蓋や甑，鞴羽口と焼塩壺といった他の遺跡では少ない道具類も出土している。生活の主体部が調査区以外にあったとしても，近隣に日常生活とは異なる空間があったと思われる。最も考えやすいのが牧場であり，道の存在である。稲荷迫遺跡近くには，早馬神が祀られており，通りの多い道の存在も想定される。稲荷迫遺跡の48区にある道の北側には，断面「U」字形の古道が埋没しきれずに続いており，注目される。江戸時代における安楽川の渡河点は橋の必要のない「とどろ渓谷」であったことも参考となる。

古代における稲荷迫遺跡周辺は日向国諸県郡に属しており，大隅国曽於郡ではなかった。古代の稲荷迫遺跡周辺を追究していく上には，山宮神社の存在は大きいと考える。山宮神社周辺が「宮内」地名であるのに対し，安楽川上流には「宮地」や「宮谷」地名がある点も興味深い。稲荷迫遺跡は両地域を結ぶ地点にある。


947
948
949
953
950
952
951
954
955
956
957
958
959
960
0
10cm
0
10cm

第177図　古代の遺物

8　時期不詳遺構およびその他の遺物

(1) 調査の概要

稲荷迫遺跡では，これまで述べてきた遺構・遺物の他に，時期を特定できない遺構と遺物や，章立てするほど無い少数の遺物が出土している。

ここではそれらを，時期不詳遺構・その他遺物としてとりあげる。

(2) 遺構

稲荷迫遺跡で時期を特定することができなかった遺構は，土坑15基である。検出状況から見るとこれらは，すべてⅣ層（アカホヤ火山灰）より上で掘り込んでいることから，少なくともアカホヤ火山灰噴出以降の遺構であることは間違いない。

しかし，時期を特定できる明確な遺物が遺構内から出土しなかったため，時期確定が困難であった。周辺の出土状況等から判断することも考えたが，Ⅱ・Ⅲ層で遺物の型式が混在している状況があったので，一括して時期不詳遺構として報告する。

各遺構の配置状況は，右図に示したとおりである。

土坑１号～４号（第179・180図）

Ｃ－８区で見つかった土坑１号～４号は，非常に近い場所で４基まとまって検出された。

４基ともⅡ層の暗褐色土を埋土としており，埋土は非常に硬くしまっている状態であった。４基とも少量の炭化物を含んでいたが，時期を特定する遺物の出土はみられなかった。各土坑の形状や規模は次の通りである。

土坑１号は，大きさ113㎝×106㎝の円形であり，検出面からの深さは約７㎝である。一部を芋穴により削平されていた。土坑２号は，大きさ100㎝×96㎝の円形であり，検出面からの深さは約13㎝である。土坑３号は，大きさ101㎝×90㎝の円形であり，検出面からの深さは約６㎝である。礫が１点出土したが，石器と認定することはできなかった。土坑４号は，大きさ106㎝×88㎝の円形であり，検出面からの深さは約11㎝であった。

土坑５号（第180図）

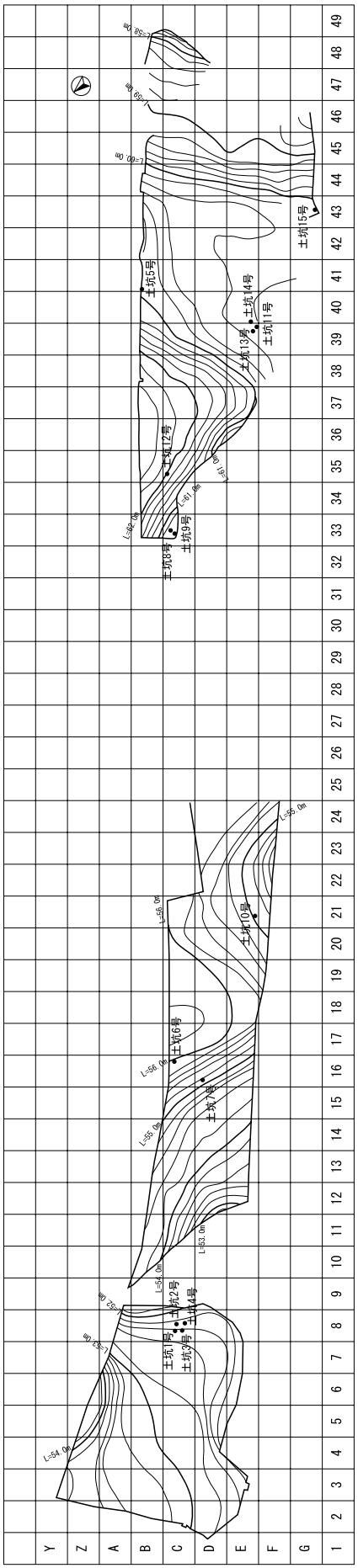
Ｂ－41区で検出した。調査区境で検出したため正確な形は特定できないが，大きさは60㎝×53㎝の円形であり，検出面からの深さは約85㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑６号（第180図）

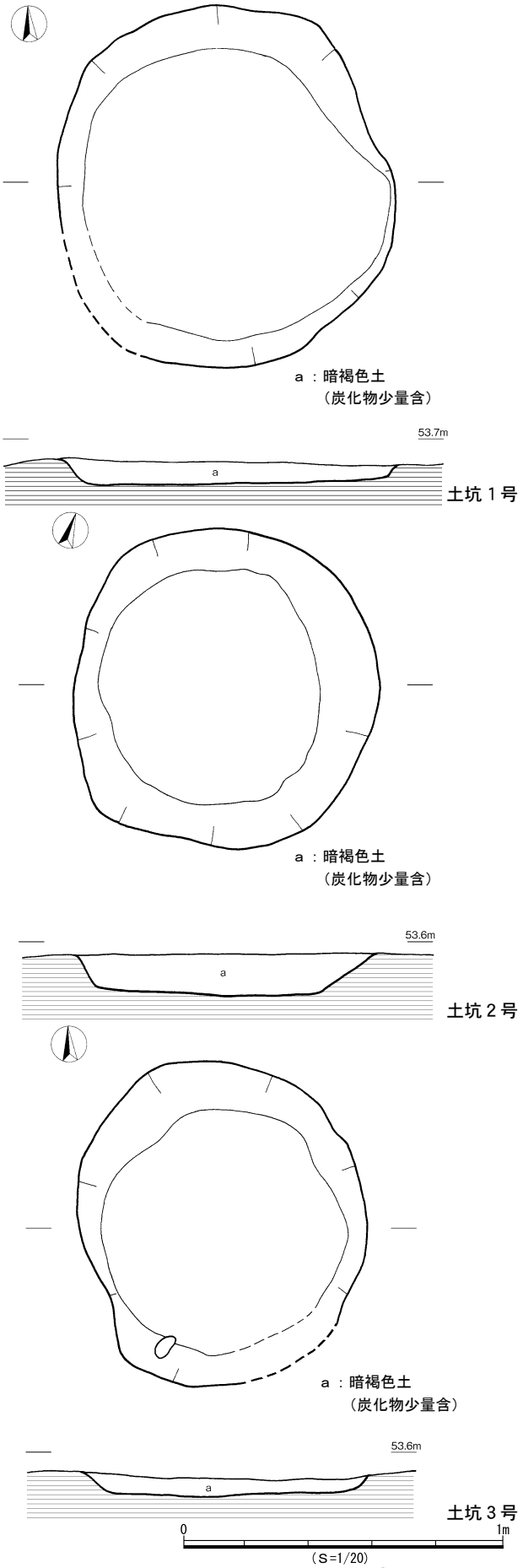
Ｃ－16区でⅢ層調査中に検出した。大きさは172㎝×143㎝の楕円形であり，検出面からの深さは約20㎝である。埋土中から炭化物が集中して出土したが，遺物は出土しなかった。

土坑７号（第181図）

Ｄ－16区でⅢ層調査中に検出した。大きさは160㎝×149㎝の円形であり，検出面からの深さは約47㎝である。床面に礫が３点，土器の小破片が数点出土したが，



第178図　その他の遺構配置図



第179図　その他の遺構①

時期・型式の特定はできなかった。

土坑８号（第181図）

Ｃ－33区で検出した。大きさは120㎝×76㎝の楕円形であり，検出面からの深さは約31㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑９号（第181図）

Ｃ－33区で検出した。大きさは121㎝×87㎝の楕円形であり，検出面からの深さは約30㎝である。遺物は出土しなかった。土坑８号と隣接していることから関連性があると考えられる。

土坑10号（第182図）

Ｅ－21区で検出した。大きさは176㎝×158㎝の楕円形であり，検出面からの深さは22㎝である。炭化物が検出された。土器も出土しているが，小破片で型式等を特定することができなかった。

土坑11号（第182図）

Ｅ－39区で検出した。大きさは129㎝×39㎝の楕円形であり，検出面からの深さは91㎝である。Ⅲ層の御池パミスが混じる面で検出したが，削平を受け厳密な検出形状は不明である。床はアカホヤを掘り抜いており，埋土にもアカホヤのブロックが混じることから自然堆積ではなく意図的に埋め戻されている。

土坑12号（第183図）

Ｃ－35区で検出した。大きさは69㎝×64㎝の楕円形であり，検出面からの深さは215㎝である。稲荷迫遺跡で確認した土坑の中では，もっとも深い土坑である。床面はシラスに達していた。図面の波線部は，水の影響によるものだと考えられる鉄分の沈着がみられた。近くの民家に深さ20m以上の井戸があることから，その可能性もある。遺物は出土しなかった。

土坑13号（第183図）

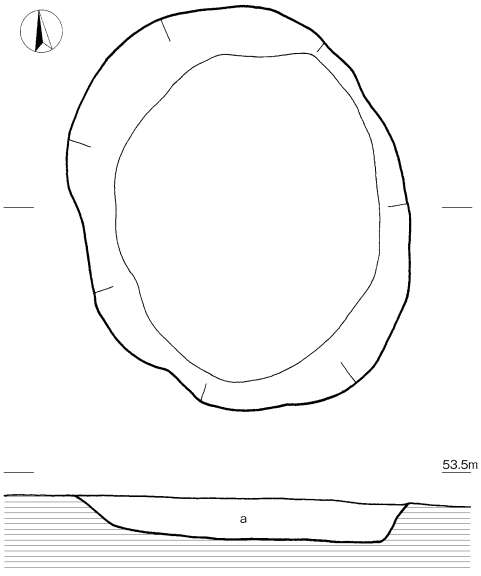
Ｅ－39区で検出した。大きさは177㎝×86㎝の楕円形で，土坑中心部に向けて深くなり，もっとも深いところは検出面から106㎝ある。落とし穴とも考えられるが，逆茂木の痕跡等はなかった。遺物は出土しなかった。

土坑14号（第183図）

Ｅ－40区で検出した。大きさは47㎝×43㎝の楕円形であり，検出面からの深さは18㎝である。焼土・炭化物が混入しており，埋土は硬くしまっている。土器が１点出土しているが，型式等の判断をすることができなかった。

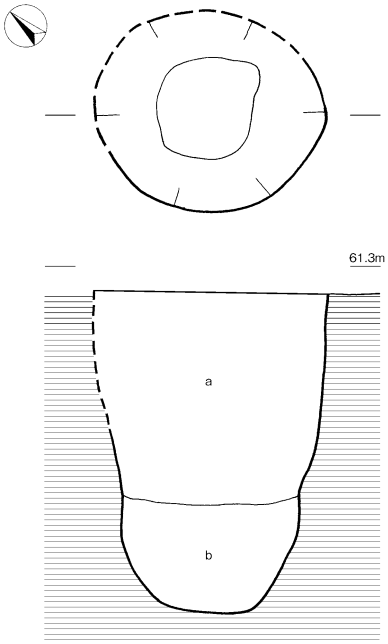
土坑15号（第183図）

Ｇ－43区で検出した。大きさは160㎝×75㎝の楕円形であり，検出面からの深さは41㎝である。遺物は出土しなかった。



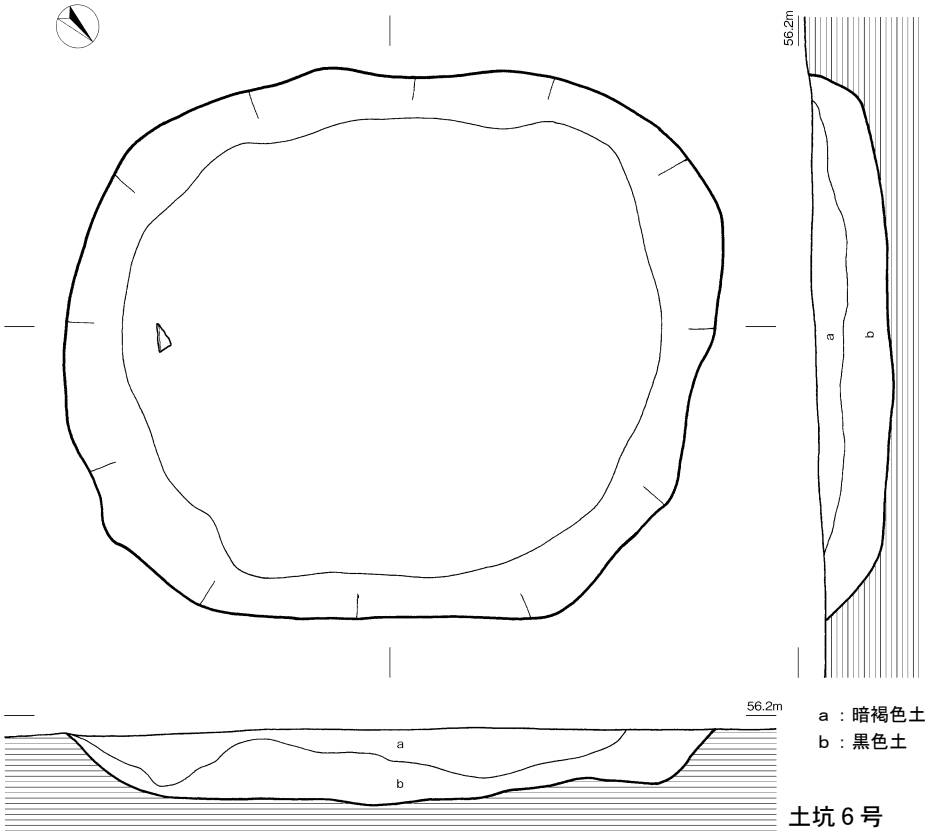
土坑４号

ａ：暗褐色土
（炭化物少量含）



土坑５号

ａ：暗褐色土
ｂ：黒色土

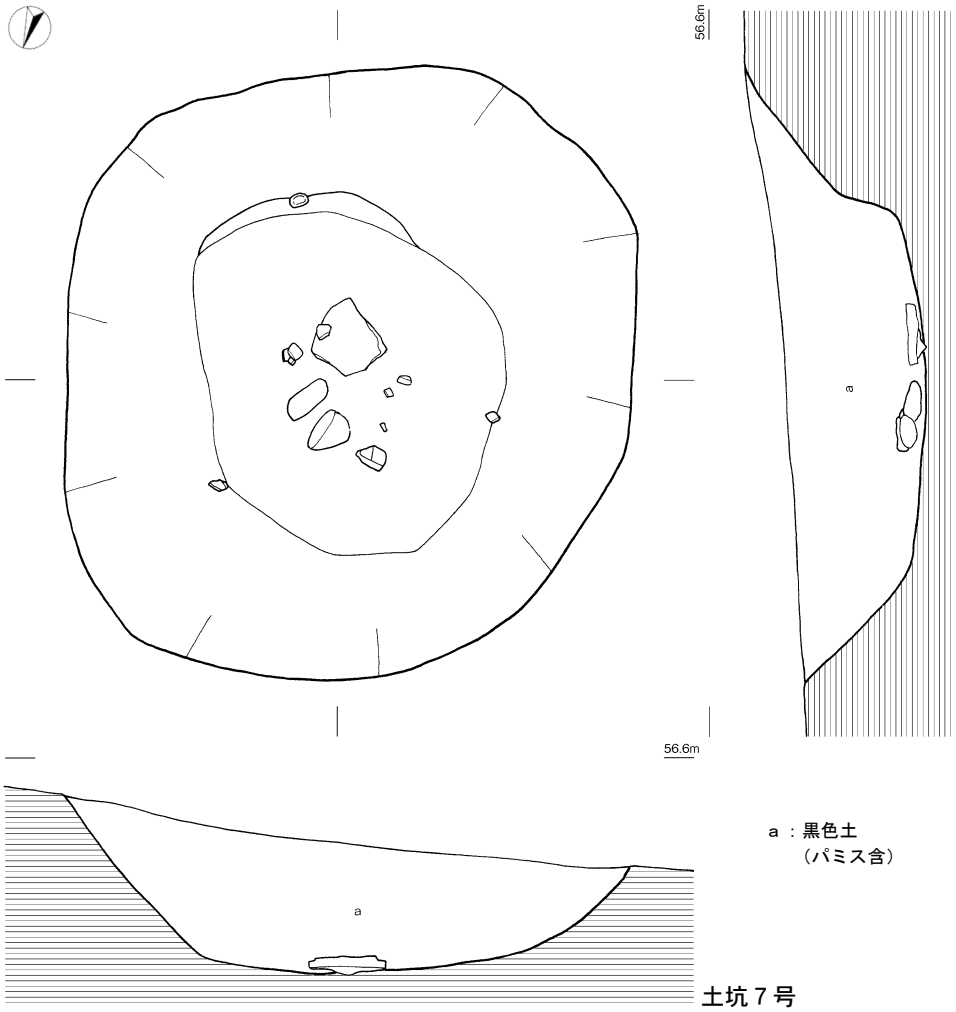


ａ：暗褐色土
ｂ：黒色土

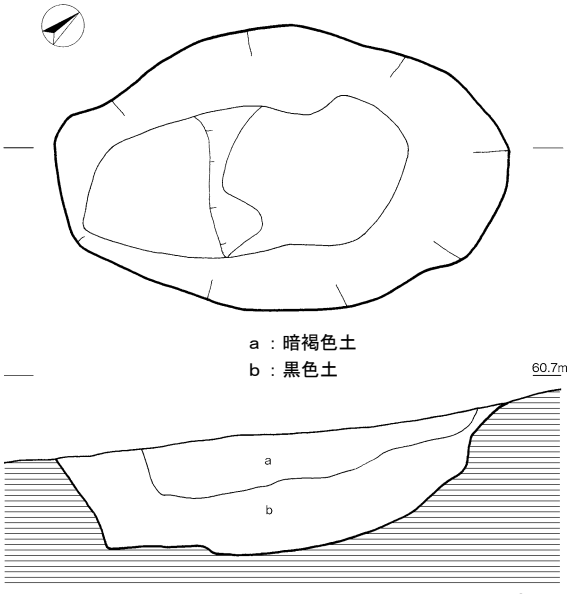
土坑６号

0　1m
（S=1/20）

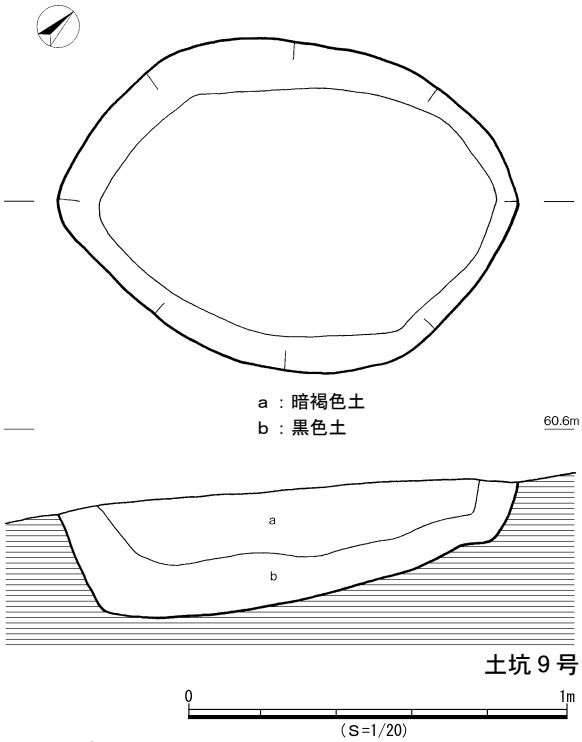
第180図　その他の遺構②



土坑７号

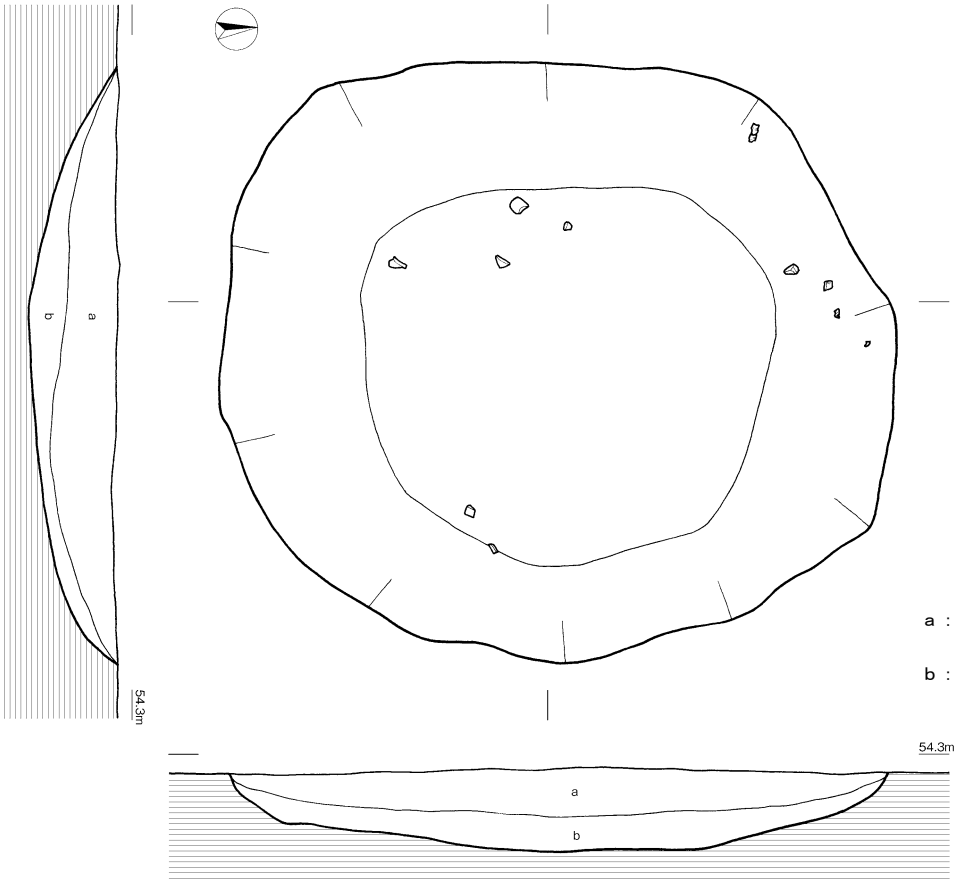


土坑８号

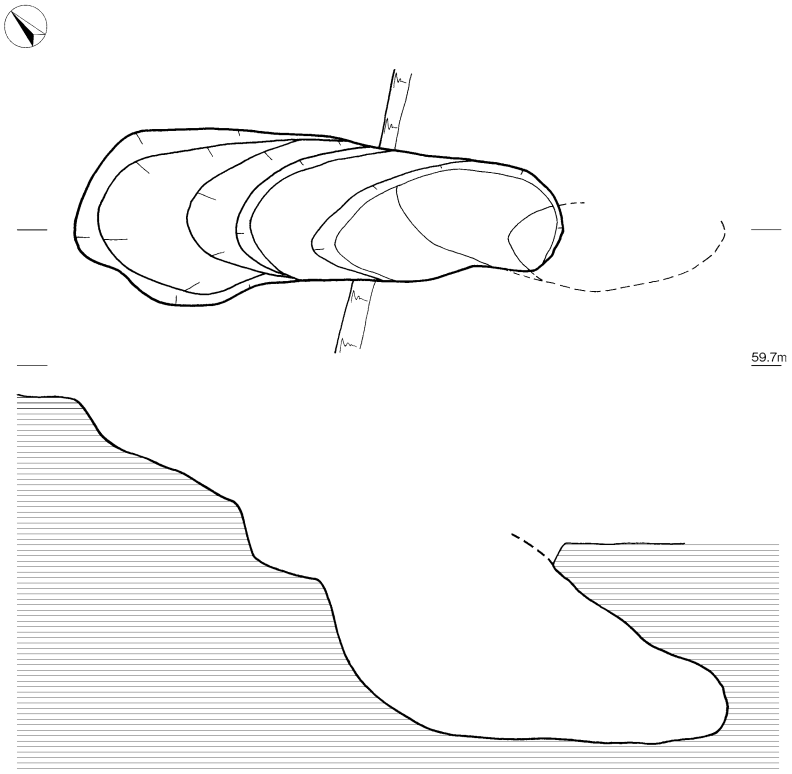


土坑９号

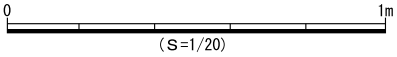
第181図　その他の遺構③



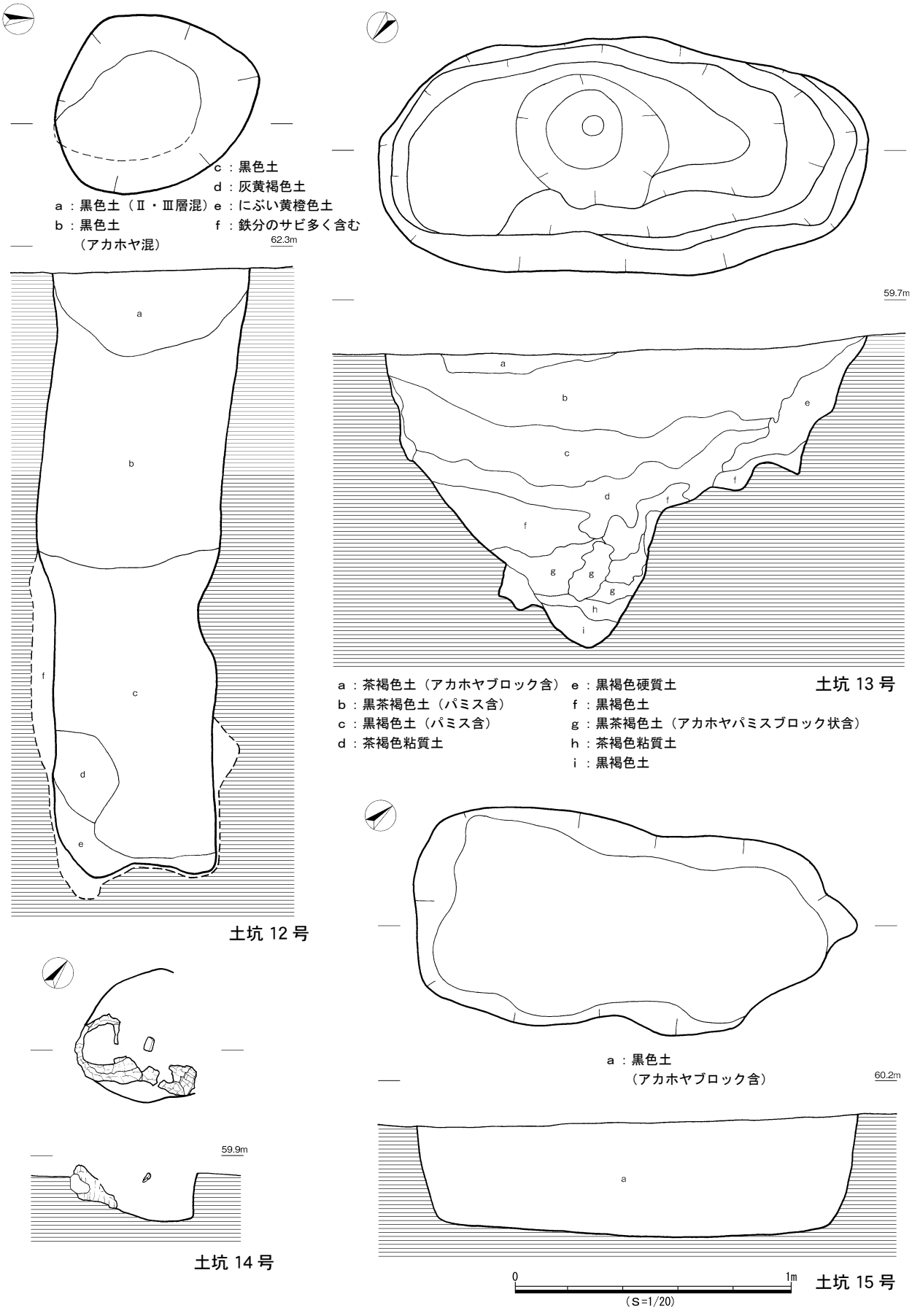
土坑 10 号



土坑 11 号



第182図　その他の遺構④



第183図　その他の遺構⑤

（３）その他の時代の遺物（第184図961 ～ 971）

ここでは，時期が不明確の遺物あるいは遺物数が少なくて主体的な時期にならないものを紹介する。

961は肩部付近に細めの突帯を３条巡らすもので，刻目を施す。胎土にチャート質の小石を含み，鹿児島では見慣れないものである。内外面に炭化物が付着しており，器種や時期も不明である。はじめは，胎土の感じや突帯上の施文から，縄文時代中期の瀬戸内系土器を想定していた。内面の焦げは下に，外面の煤は上方に付くことが一般的であることから，図示した器形を想定した。キャリパー形に見えなくはないが，船元系土器とするには，情報が少ない。

962は太めの浅い凹線を少なくとも２条は描くもので，内面も貝殻条痕によるものである。胎土に金色雲母を多く含む。市来式系の土器にこの様な施文をするのか，他の型式なのか断定はできないが，縄文時代後期であることは間違いないであろう。

963は直径10cmに復元できる底部で，外面はシャープに，内面は丸みをもって立ち上がる。外面の調整は横方向のケズリ様のナデであり，胎土は透明の鉱物が目立つ。胎土は中岳Ⅱ式土器と同様であるが，安定した直立する底部であり，特徴のある部分まで接合できない限り時期を断定することはできない。

964は，そろばん玉状に屈曲する胴部で，屈曲上面に２条の沈線を施す。頸部付近にも少なくとも２条の沈線を施し，肩部には３条の沈線を斜位に描く。免田式土器にみられるような長頸壺の可能性もあるが，確実ではない。鹿屋市吾平町中尾遺跡では，刻目突帯文の時期に同様な器形のものが出土している（遺物番号230）が，「足を広げ，手を下へ向けた人物画のように見える」というのは無理がある。類例が増えることによって，全体の形や所属時期が明らかになることだろう。

965は筒状の器形をしたもので，外面に縦方向の沈線が無規則に施される。器種や時期も不明である。突帯文期の脚台とも考えられるが，文様の入った例を知らない。964を含めて，縄文時代終末期から弥生時代初期の土器を追究する必要がある。

966は底径5.1cmの不安定な底部で，わずかに内湾気味に外傾する胴下半部をもつ。外面は下から上へのケズリである。胴部外面をケズリ上げる手法は，弥生時代後期後半から終末にかけてみられるが，底部形態が台付きとなるので，本資料とは異なる。ただし，底部形態が台付きとなるのは鹿児島県内でも熊本県境や宮崎県境から離れた地域であり，北に行くほど脚台をもたなくなる傾向にある。時期的な位置づけは不明であるが，地域的な関係も意識しておかなければならない。

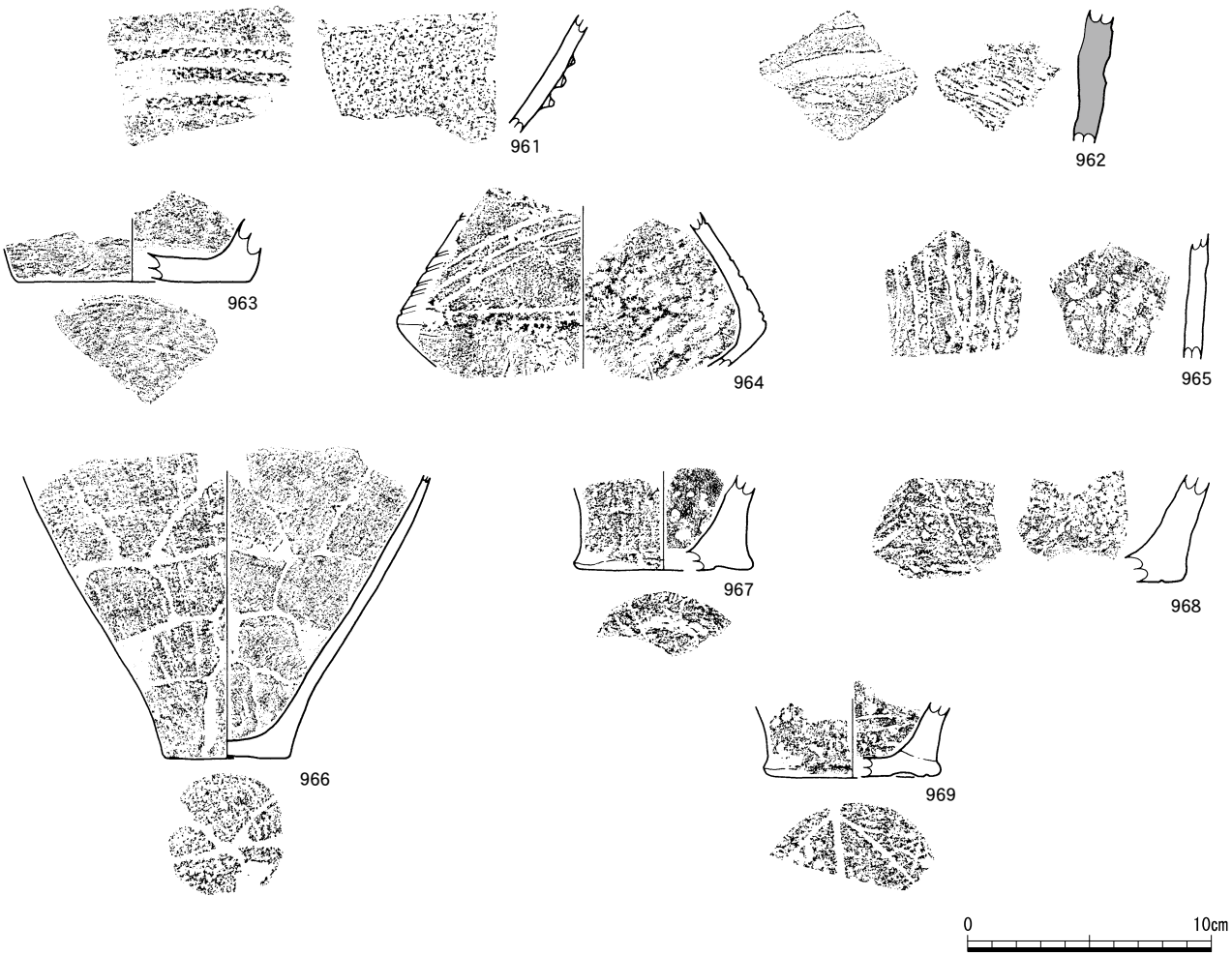
967は底径7.2cmに復元できる底部である。底面に木葉痕が付く。外面は下から上へのタテ方向のケズリによる調整である。968も底面に木葉痕が付く。969は底径7.2cmに復元できる底部である。底面に木葉痕が付く。底面に木葉痕が付くと，通常は縄文時代後期を考えるのであるが，この３点については特徴のある部分まで復元することができなかったことと，Ⅱ層からの出土であることで縄文土器として断定することができなかった。志布志地方には古墳時代後半にも木葉痕のある甕形土器が宮脇遺跡などから出土しており，古墳時代の可能性も残るので不明時期とした。なお，曽於地域から宮崎地域にかけては古代にも木葉痕のある土師器があり，その系譜がどこまで遡るのか追究することが課題である。

970は黒薩摩焼土瓶の注ぎ口である。内面には３つの孔が開けられている。関明恵氏によると，苗代川の注ぎ口下面は湾曲しているが，龍門司の注ぎ口下面はストレートであるという。また，龍門司焼の土瓶が遺跡で出土した例は，まだ２例とのことである。薩摩焼の研究はここ15年ほどで最も進んだ分野であり，窯跡の調査をはじめとして多くの成果がみられる。これまでは，生産地の調査が主体的に進められてきたが，今後薩摩焼が使用された場所での比較も大切である。江戸時代から明治時代のいずれかの時期と思われるが，詳細な時期を特定するには材料が乏しい。稲荷迫遺跡のある中島集落では，江戸時代初期に尾野見川上流から用水路をつくって水を引き，水田を開発している。安永年間（1772 ～ 1780年）と文政10（1827）年に建てられた田之神像が優しく見守っているが，ここ２，３年で水は通らなくなった。現在が，中島集落における時代の変わり目である。

971は磁器製の盃であり，口径６cm・器高2.7cmを測る。高台は角を落とした正方形であり，各辺に対応する腰部を面取りしてある。内面には，日章旗・赤十字章・旭日旗が赤色で描かれている。知覧特攻平和会館の八巻聡氏によると，「陸軍衛生隊に所属していた人物が，満期除隊記念等で記念品としたものではないか」とのことである。どの戦争のものであるか不明であるが，明治時代中期から昭和20年までのものである。同じ図柄ではないが，薩摩川内市川骨遺跡の発掘調査報告書でも，日露戦争からの凱旋を記念した明治38（1905）年頃の盃が紹介されている。

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006『中尾遺跡　四方高迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（99）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2011『川骨遺跡　西之城遺跡　川幡遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（165）



第184図　その他の遺物

表11　石器観察表①

旧石器時代の石器

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第9図	1	細石刃	C	48	Ⅴ	ObⅠ	1.53	0.78	0.28	0.33	13659	33
	2	細石刃	D	5	Ⅵ	ObⅣ	1.38	0.94	0.26	0.27	11377	
	3	細石刃	D	6	Ⅴ	ObⅣ	1.80	0.98	0.25	0.46	11649	
	4	細石刃	E	4	Ⅴ	ObⅣ	1.68	0.79	0.30	0.26	7818	
	5	細石刃	D	6	Ⅵ	ObⅣ	2.23	1.23	0.42	0.68	11653	
	6	剥片尖頭器	E	4	Ⅴ	ShⅡ	5.29	2.18	1.00	8.42	7817	
	7	細石刃核	C	3	Ⅵ	ObⅣ	2.45	1.22	1.48	4.48	12535	

縄文時代早期の石器

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第66図	88	打製石鏃	C	5	Ⅴ	ObⅥ	206.00	1.90	0.29	0.85	12226	33
	89	打製石鏃	A	4	Ⅵ	ObⅣ	1.40	1.37	0.35	0.57	12674	
	90	打製石鏃	A	5	Ⅵ	ObⅣ	1.40	1.58	0.40	0.43	12840	
	91	打製石鏃	C	8	Ⅴ	ObⅦ	1.82	1.28	0.38	0.57	11344	
	92	打製石鏃	E	4	Ⅴ	ObⅤ	1.99	1.45	0.55	0.95	7827	
	93	打製石鏃	C	4	Ⅴ	Cc	2.05	1.79	0.46	0.93	10034	
	94	打製石鏃	C	7	Ⅴ	AnⅠ	1.85	1.46	0.50	0.88	12139	
	95	打製石鏃	D	8	Ⅴ	AnⅠ	1.82	1.58	0.36	0.69	11305	
	96	打製石鏃	D	2	Ⅴ	ObⅤ	2.20	1.12	0.50	1.15	10719	
	97	打製石鏃	C	3	Ⅴ	ObⅣ	1.80	1.22	0.23	0.39	10103	
	98	打製石鏃	D	3	Ⅴ	Ch	1.34	1.32	0.43	0.65	9067	
	99	打製石鏃	C	5	Ⅵ	Cc	1.19	1.45	0.41	0.84	11117	
	100	打製石鏃	D	6	Ⅴ	ObⅡ	2.89	1.92	0.47	1.94	11267	
	101	打製石鏃	D	7	Ⅵ	ObⅡ	3.02	1.70	0.69	2.15	11453	
	102	打製石鏃	D	3	Ⅴ	ObⅢ	2.62	1.92	0.40	1.13	10231	
	103	打製石鏃	D	8	Ⅴ	ShⅡ	1.98	1.23	0.45	0.76	11304	
	104	打製石鏃	D	7	Ⅴ	Ch	2.35	1.90	0.40	1.14	11061	
	105	打製石鏃	D	5	Ⅴ	ObⅡ	1.99	1.58	0.43	0.74	10996	
	106	打製石鏃	C	3	Ⅵ	Ch	1.70	1.38	0.40	0.51	11710	
	107	打製石鏃	C	5	Ⅴ	ObⅢ	2.10	1.52	0.32	0.54	12827	
	108	打製石鏃	D	7	Ⅴ	AnⅠ	2.02	1.73	0.30	0.53	11059	
	109	打製石鏃	C	49	Ⅴ	ObⅢ	2.38	1.92	0.44	1.34	18621	
	110	打製石鏃	C	49	Ⅴ	ObⅡ	2.30	1.74	0.36	0.81	18616	
	111	打製石鏃	C	4	Ⅴ	ObⅠ	1.40	1.10	0.35	0.29	11098	
第67図	112	スクレイパー	B	3	Ⅵ	RC	1.90	1.70	1.02	2.94	12551	
	113	楔形石器	D	3	Ⅴ	RC	2.28	1.20	0.90	2.11	10242	
	114	楔形石器	E	3	Ⅴ	RC	1.08	1.81	0.65	1.16	10668	
	115	二次加工剥片	B	2	Ⅵ	ObⅣ	2.72	1.10	0.46	0.78	12597	
	116	石槍	B	2	Ⅵ	Sh	3.46	1.90	0.78	5.02	11744	
	117	石槍	D	3	Ⅴ	ShⅠ	8.34	1.86	0.83	10.12	11184	
	118	石核	E	3	Ⅴ	ObⅣ	2.21	1.90	1.14	2.80	9159	
	119	石核	C	2	Ⅴ	ObⅣ	1.35	2.05	1.30	2.60	13134	
	120	石核	E	3	Ⅴ	ObⅠ	2.10	2.34	1.08	4.74	11684	
	121	石核	D	3	Ⅴ	RC	3.05	2.95	1.95	20.06	9048	
	122	石核	D	7	Ⅵ	Ch	1.65	1.93	1.53	5.31	12141	
第68図	123	石核	D	3	Ⅴ	ObⅣ	2.90	2.10	2.00	10.71	10545	35
	124	磨製石斧	D	8	Ⅴ	ShⅢ	13.55	7.20	1.48	202.00	11297	
	125	磨製石斧	D	8	Ⅴ	ShⅠ	15.50	12.60	1.78	274.00	11048	
	126	砥石	E	3	Ⅴ	Sa	10.10	9.30	2.30	476.00	9140	42
	127	礫器	D	8	Ⅵ	Sa	9.40	16.90	3.65	646.00	11441	

縄文時代後期・晩期相当期の石器等

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第106図	426	打製石鏃	D	12	Ⅲ	Op	1.40	1.35	0.30	0.36	6466	34
	427	打製石鏃	集石11号		—	ObⅣ	1.26	1.22	0.28	0.34	集石43号	
	428	打製石鏃	D	6	Ⅱ	ObⅠ	1.24	1.42	0.28	0.30	6636	
	429	打製石鏃	C	42	Ⅲ	ShⅡ	1.10	1.32	0.24	0.34	22422	
	430	打製石鏃	C	40	Ⅱ	ObⅠ	0.77	0.94	0.21	0.11	18876	
	431	打製石鏃	B	40	Ⅲ	AnⅠ	1.51	1.15	0.28	0.34	20556	
	432	打製石鏃	C	8	Ⅱ	AnⅠ	1.88	1.62	0.28	0.57	7111	
	433	打製石鏃	B	41	Ⅱ	AnⅠ	1.63	1.70	0.32	0.69	21319	
	434	打製石鏃	D	39	Ⅲ	ShⅡ	1.07	1.31	0.31	0.37	18181	
	435	打製石鏃	C	38	Ⅱ	AnⅠ	1.02	1.10	0.23	0.22	16227	
	436	打製石鏃	D	40	Ⅲ	AnⅠ	1.35	1.13	0.28	0.34	一括	
	437	打製石鏃	B	39	Ⅱ	AnⅠ	1.06	1.11	0.25	0.23	14444	
	438	打製石鏃	D	5	Ⅱ	ObⅠ	1.68	1.38	0.35	0.45	7574	
	439	打製石鏃	C	40	Ⅱ	ShⅡ	1.28	1.06	0.22	0.25	17037	
	440	打製石鏃	C	40	Ⅲ	Ch	0.93	1.38	0.26	0.19	20536	
	441	打製石鏃	B	5	Ⅲ	AnⅠ	1.62	1.47	0.30	0.57	12487	
	442	打製石鏃	C	39	Ⅱ	ShⅡ	1.50	1.62	0.28	0.52	15921	
	443	打製石鏃	F	42	Ⅲ	Ch	1.50	1.39	0.32	0.46	23095	
	444	打製石鏃	E	16	Ⅲ	AnⅠ	1.73	1.57	0.42	0.79	2017	
	445	打製石鏃	D	39	Ⅱ	AnⅠ	1.50	1.28	0.26	0.35	19598	
	446	打製石鏃	C	45	Ⅲ	ShⅡ	1.99	2.03	0.33	0.83	18839	
	447	打製石鏃	D	6	Ⅱ	AnⅠ	1.93	1.35	0.35	0.41	6592	
	448	打製石鏃	D	13	Ⅲ	Op	1.72	1.33	0.43	0.72	936	
	449	打製石鏃	I	3	Ⅱ	Ch	1.98	1.60	0.36	1.09	7952	
	450	打製石鏃	C	19	Ⅲ	ObⅣ	1.01	1.12	0.33	0.24	5109	

表12　石器観察表②

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第106図	451	打製石鏃	B	5	Ⅲ	ObⅠ	1.74	1.20	0.30	0.45	12435	
	452	打製石鏃	E	6	Ⅱ	ObⅠ	1.37	1.20	0.30	0.41	10334	
	453	打製石鏃	E	38	Ⅰ	ObⅠ	0.93	0.93	0.25	0.18	18742	
	454	打製石鏃	C	42	Ⅱ	ObⅠ	1.70	1.30	0.28	0.55	20194	
第107図	455	打製石鏃	D	40	Ⅱ	ShⅡ	3.24	1.90	1.19	3.96	19289	
	456	打製石鏃	E	23	Ⅲ	Ch	2.05	1.14	0.35	0.82	2337	
	457	打製石鏃	C	12	Ⅲ	ShⅡ	2.24	1.38	0.44	1.12	289	
	458	打製石鏃	D	36	Ⅲ	ShⅡ	1.69	0.96	0.26	0.39	14505	
	459	打製石鏃	E	36	Ⅱ	ObⅠ	0.72	1.24	0.22	0.18	17396	
	460	打製石鏃	C	2	Ⅲ	Ch	1.63	1.32	0.36	0.84	11779	
	461	打製石鏃	B	39	Ⅰ	ShⅡ	1.17	1.18	0.26	0.33	一括	
	462	打製石鏃	D	19	Ⅲ	Ch	1.72	1.23	0.32	0.57	5560	
	463	打製石鏃	E	42	Ⅲ	AnⅠ	3.23	2.09	0.52	2.48	22563	
	464	打製石鏃	E	42	Ⅱ	ShⅡ	1.71	1.20	0.32	0.38	22481	
	465	打製石鏃	C	18	Ⅱ	ObⅠ	2.15	1.18	0.30	0.60	3500	
	466	打製石鏃	C	34	Ⅰ	ObⅡ	1.50	1.05	0.41	0.47	一括	34
	467	打製石鏃	C	12	Ⅱ	ShⅡ	2.05	1.22	0.41	0.86	1114	
	468	打製石鏃	D	38	Ⅱ	ShⅡ	1.40	0.95	0.30	0.37	17185	
	469	打製石鏃	C	39	Ⅲ	ObⅠ	1.32	0.92	0.30	0.22	17049	
	470	打製石鏃	F	41	Ⅲ	Ch	2.26	1.55	0.38	1.18	22963	
	471	打製石鏃	D	19	Ⅲ	Ch	2.02	1.40	0.40	0.79	5366	
	472	打製石鏃	D	44	Ⅲ	Ch	2.62	1.65	0.52	1.87	23122	
	473	打製石鏃	B	3	Ⅱ	Ch	2.12	1.33	0.38	0.92	11640	
	474	打製石鏃	C	4	Ⅱ	Ch	1.98	1.56	0.32	0.92	7860	
	475	打製石鏃	D	18	Ⅳ	Cc	1.72	1.12	0.37	0.64	5295	
	476	打製石鏃	F	21	Ⅱ	ObⅠ	2.25	1.40	0.35	0.80	1832	
	477	打製石鏃	C	2	Ⅲ	Ch	1.70	1.33	0.40	0.90	11775	
	478	打製石鏃	C	4	Ⅱ	Ch	1.46	1.25	0.38	0.75	8533	
	479	打製石鏃	D	42	Ⅲ	ObⅡ	2.38	1.14	0.38	0.78	20695	
	480	打製石鏃	C	19	Ⅱ	Op	2.10	1.33	0.48	0.77	4037	
	481	打製石鏃	B	44	Ⅲ	ObⅡ	1.58	1.36	0.21	0.38	21217	
第108図	482	石匙	D	15	Ⅲ	ObⅡ	2.26	3.35	0.65	2.68	6394	
	483	石匙	—	—	—	ObⅠ	3.28	2.50	0.80	5.14	一括	
	484	石匙	C	19	Ⅲ	ObⅠ	3.25	2.34	0.73	3.57	5110	36
	485	石匙	F	42	Ⅲ	An	1.64	4.13	0.86	6.20	23102	
	486	スクレイパー	D	41	Ⅲ	AnⅠ	4.50	7.20	0.74	24.96	21797	
	487	スクレイパー	D	19	Ⅲ	AnⅠ	4.59	5.08	0.75	12.72	8865	
	488	スクレイパー	C	41	Ⅱ	Ch	4.10	2.44	0.80	5.70	21417	
第109図	489	スクレイパー	B	42	Ⅱ	AnⅠ	7.58	3.25	1.24	25.18	20899	36
	490	スクレイパー	C	7	Ⅲ	AnⅠ	4.85	2.87	0.78	10.34	9969	
	491	スクレイパー	B	40	Ⅱ	AnⅠ	6.90	3.43	1.30	20.20	19232	36
	492	スクレイパー	F	20	Ⅲ	Op	2.41	2.60	0.90	5.46	4414	
	493	スクレイパー	D	10	Ⅱ	Ch	6.15	5.78	1.67	54.94	3517	
第110図	494	スクレイパー	E	18	Ⅲ	AnⅠ	3.00	3.88	1.08	7.73	1332	36
	495	スクレイパー	D	11	Ⅲ	Ch	3.86	2.85	0.73	8.14	1506	
	496	スクレイパー	B	41	Ⅱ	AnⅠ	4.45	6.30	1.50	35.51	22859	
	497	スクレイパー	D	39	Ⅱ	ShⅠ	2.00	0.70	0.50	0.70	18798	
	498	スクレイパー	C	8	Ⅲ	AnⅠ	5.30	3.95	0.93	19.08	9908	
	499	スクレイパー	C	42	Ⅲ	Ch	1.56	2.10	0.50	1.80	21180	
	500	スクレイパー	C	2	Ⅲ	Ch	2.30	1.70	0.90	3.58	11778	
	501	スクレイパー	C	7	Ⅱ	ShⅡ	1.82	5.17	1.14	7.80	6899	36
	502	スクレイパー	D	7	Ⅱ	Cc	1.68	1.78	0.84	2.20	7063	
第111図	503	スクレイパー	C	10	Ⅲ	Ch	3.61	3.22	1.72	18.60	6283	
	504	スクレイパー	C	8	Ⅲ	AnⅠ	3.98	2.78	0.96	12.73	9884	
	505	石錐	B	42	Ⅱ	Ch	3.71	2.92	0.80	5.19	22040	
	506	石錐	D	18	Ⅲ	Ch	2.34	1.02	0.79	1.67	5301	
	507	石錐	D	19	Ⅲ	Ch	3.10	1.40	0.60	1.14	5528	36
	508	石錐	E	37	Ⅱ	AnⅠ	2.18	0.38	0.60	1.14	15130	
	509	石槍	E	42	Ⅲ	ObⅠ	3.00	0.94	0.50	0.95	22583	
	510	石槍	E	38	Ⅰ	AnⅠ	2.52	1.00	0.33	0.82	一括	
	511	石槍	D	36	Ⅱ	Ch	2.09	0.84	0.40	0.71	15038	
	512	穿孔具	C	39	Ⅱ	Sa	4.51	2.28	2.20	34.80	16203	41
	513	使途不明石器	F	39	Ⅲ	ShⅡ	6.22	3.93	0.55	24.60	23032	
第112図	514	楔形石器	C	3	Ⅲ	ObⅤ	1.74	2.43	0.88	2.89	7949	36
	515	楔形石器	C	39	Ⅲ	ObⅠ	2.05	1.62	0.90	2.19	18274	
	516	楔形石器	E	15	Ⅱ	RC	1.20	1.88	1.20	2.60	693	
	517	楔形石器	D	39	Ⅲ	Cc	1.62	1.53	0.53	1.27	19650	
	518	楔形石器	D	12	Ⅲ	Cc	2.21	2.18	0.68	3.44	6453	36
	519	楔形石器	C	39	Ⅲ	RC	2.00	2.40	0.90	3.95	18247	
	520	楔形石器	C	6	Ⅲ	Ch	4.29	3.85	1.65	26.23	5365	
	521	楔形石器	C	7	Ⅱ	ShⅥ	4.58	5.36	2.93	103.31	6921	41
第113図	522	二次加工剥片	C	3	Ⅱ	ObⅠ	2.15	0.59	0.42	0.67	7914	
	523	二次加工剥片	B	40	Ⅲ	RC	2.45	1.50	0.95	3.46	18018	
	524	二次加工剥片	B	40	Ⅱ	AnⅠ	2.23	1.17	0.43	1.24	19212	
	525	二次加工剥片	B	40	Ⅱ	AnⅠ	2.78	1.10	0.55	1.44	18851	
	526	二次加工剥片	D	39	Ⅱ	Cc	2.83	1.25	1.15	2.89	19558	
	527	二次加工剥片	C	3	Ⅱ	ObⅤ	0.65	1.73	0.50	1.28	8034	

表13　石器観察表③

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第113図	528	二次加工剥片	D	12	Ⅱ	ObⅣ	1.72	1.50	0.63	1.37	1054	
	529	二次加工剥片	C	11	Ⅲ	AnⅠ	1.80	1.32	0.63	0.66	一括	
	530	二次加工剥片	T	15	Ⅱ	ObⅠ	1.31	2.05	0.40	0.92	2482	
	531	二次加工剥片	D	20	Ⅲ	Ch	1.25	2.20	0.70	1.93	5886	
	532	二次加工剥片	B	40	Ⅲ	ObⅠ	3.60	1.80	0.60	0.91	18058	
	533	二次加工剥片	D	12	Ⅲ	ObⅠ	3.60	1.80	0.50	2.89	6436	
	534	二次加工剥片	C	20	Ⅱ	ObⅠ	3.86	1.10	0.60	1.42	3134	
	535	二次加工剥片	C	20	Ⅱ	ObⅠ	1.90	1.33	0.36	0.78	3436	
	536	二次加工剥片	D	38	Ⅱ	ObⅠ	2.28	1.40	0.45	1.20	18169	
第114図	537	使用痕剥片	D	15	Ⅲ	Ch	4.13	2.61	0.60	5.69	6392	
	538	使用痕剥片	D	46	Ⅱ	Ch	3.74	4.05	1.20	15.32	18827	
	539	使用痕剥片	D	7	Ⅲ	Ch	3.75	2.75	0.88	8.88	8929	
	540	使用痕剥片	D	11	Ⅲ	Ch	4.16	3.05	0.67	7.04	6428	
	541	使用痕剥片	C	44	Ⅲ	Ch	3.05	3.70	0.76	6.23	18507	
	542	使用痕剥片	E	13	Ⅱ	ObⅣ	2.25	2.10	0.78	4.47	789	
	543	使用痕剥片	C	7	Ⅱ	ObⅠ	3.10	1.67	0.65	2.29	6896	
	544	使用痕剥片	D	19	Ⅱ	ObⅠ	2.88	3.27	0.90	7.89	2907	
	545	使用痕剥片	C	42	Ⅲ	ObⅠ	2.03	1.90	0.62	1.82	21109	
第115図	546	石核	D	40	Ⅱ	Fq	4.08	5.42	3.15	53.24	19271	36
	547	石核	E	42	Ⅱ	ObⅣ	2.70	2.35	0.98	5.30	22467	
	548	石核	C	3	Ⅲ	Ch	2.32	2.20	2.20	8.96	8033	
第116図	549	石核	D	5	Ⅱ	AnⅠ	4.90	5.47	1.99	43.84	6563	36
	550	石核	B	4	Ⅲ	ObⅤ	2.65	2.15	2.00	11.88	11810	
	551	石核	B	12	Ⅱ	ObⅠ	2.38	1.60	1.14	4.18	1125	
	552	石核	E	7	Ⅱ	ShⅥ	2.75	5.15	4.49	73.76	10370	36
第117図	553	打製石斧	B	40	Ⅲ	ShⅠ	23.52	10.72	2.63	670.00	18306	
	554	打製石斧	E	41	Ⅱ	ShⅠ	13.38	6.34	1.64	146.26	22777	37
	555	打製石斧	—	—	—	ShⅠ	14.17	6.22	1.48	132.01	道路周辺	
	556	打製石斧	B	37	Ⅲ	ShⅠ	13.90	4.78	1.97	159.21	17329	
	557	打製石斧	B	39	Ⅲ	ShⅠ	13.78	5.27	1.90	155.87	17569	
			B	39	Ⅲ	ShⅠ					20435	
	558	打製石斧	C	3	Ⅲ	ShⅠ	7.84	5.15	1.05	56.00	7915	
	559	打製石斧	B	6	Ⅲ	ShⅡ	7.34	6.57	1.60	79.13	12043	
	560	打製石斧	D	41	Ⅲ	ShⅠ	8.30	5.70	1.79	77.90	22136	
	561	打製石斧	D	19	Ⅲ	ShⅠ	10.39	5.46	0.83	58.00	5384	
	562	打製石斧	D	12	Ⅲ	ShⅠ	6.94	5.00	1.34	50.57	一括	
	563	打製石斧	B	3	Ⅱ	ShⅠ	5.40	5.63	0.92	36.00	11522	
	564	打製石斧	C	5	Ⅱ	ShⅠ	10.08	3.84	0.74	36.00	7697	
第118図	565	打製石斧	D	6	Ⅲ	ShⅠ	9.21	4.70	1.71	96.00	8922	
	566	打製石斧	C	41	Ⅱ	ShⅠ	12.17	5.95	1.90	150.16	21776	37
	567	打製石斧	B	41	Ⅲ	ShⅠ	8.58	4.35	1.45	62.58	22860	
	568	打製石斧	B	42	Ⅱ	ShⅠ	12.56	6.43	1.88	169.73	20249	
	569	打製石斧	—	—	—	ShⅠ	11.36	6.80	10.30	140.00	30	
	570	打製石斧	B	40	Ⅱ	ShⅠ	8.90	4.00	1.31	49.98	20573	
	571	打製石斧	E	39	Ⅱ	ShⅠ	11.70	6.80	10.55	128.63	20022	
	472	打製石斧	F	40	Ⅲ	ShⅠ	10.05	7.88	2.60	222.00	22982	
	573	打製石斧	D	21	Ⅲ	ShⅠ	8.26	5.40	1.65	92.24	6477	
	574	打製石斧	F	42	Ⅱ	ShⅠ	10.00	6.43	1.98	131.31	22817	
	575	打製石斧	B	39	Ⅲ	ShⅠ	8.85	5.07	1.45	71.09	18347	37
	576	打製石斧	C	7	Ⅱ	ShⅠ	3.90	5.10	1.06	28.00	8840	
第119図	577	打製石斧	F	41	Ⅲ	ShⅢ	12.50	8.00	1.96	216.00	23118	37
	578	打製石斧	D	7	Ⅲ	ShⅠ	13.70	9.47	1.68	214.00	8727	
	579	打製石斧	D	8	Ⅱ	ShⅡ	13.18	8.03	1.60	172.21	7171	
			D	8	Ⅱ	ShⅡ					7168	
	580	打製石斧	F	21	Ⅲ	ShⅠ	10.57	7.48	1.42	101.57	1857	
	581	打製石斧	C	6	Ⅱ	ShⅠ	9.60	7.55	1.88	145.55	8333	
	582	打製石斧	—	—	Ⅰ	ShⅠ	11.28	7.96	1.38	116.66	一括	
	583	打製石斧	F	41	Ⅲ	ShⅠ	11.13	7.42	1.96	139.64	22954	
	584	打製石斧	F	41	Ⅲ	ShⅠ	9.24	6.83	1.45	108.67	23002	
	585	打製石斧	D	19	Ⅲ	ShⅠ	5.43	6.71	0.88	40.00	5398	
	586	打製石斧	F	41	Ⅱ	ShⅠ	12.13	7.70	2.06	206.00	22727	
第120図	587	打製石斧	E	36	Ⅱ	ShⅠ	8.43	5.92	1.64	101.43	17388	
	588	打製石斧	C	37	Ⅰ	ShⅠ	7.36	5.56	1.55	74.94	—	
	589	打製石斧	D	19	Ⅱ	ShⅠ	6.13	5.12	1.02	36.36	3724	
	590	打製石斧	F	40	Ⅲ	ShⅠ	6.55	7.62	2.23	105.92	22974	
	591	打製石斧	D	40	Ⅱ	ShⅠ	6.20	5.95	1.74	87.45	20333	
	592	打製石斧	C	40	Ⅲ	ShⅠ	7.05	6.54	1.48	77.93	20540	
	593	打製石斧	C	20	Ⅲ	ShⅠ	5.72	6.76	1.25	49.46	4926	
	594	打製石斧	B	6	Ⅲ	ShⅠ	6.21	4.90	1.23	48.29	12013	
	595	打製石斧	F	38	Ⅱ	ShⅠ	4.85	5.50	2.10	55.73	18759	
	596	打製石斧	C	19	Ⅲ	ShⅠ	6.55	5.98	1.25	57.96	4302	
	597	打製石斧	E	39	Ⅱ	ShⅠ	7.46	6.30	1.92	73.95	20033	
	598	打製石斧	C	39	Ⅲ	ShⅠ	7.58	5.82	1.28	86.17	17540	
	599	打製石斧	C	20	Ⅱ	ShⅠ	7.00	6.86	1.14	57.97	4146	
	600	打製石斧	C	41	Ⅱ	ShⅠ	8.10	4.40	1.50	63.90	21754	
	601	打製石斧	D	19	Ⅲ	ShⅠ	7.98	4.75	1.65	70.50	5438	
	602	打製石斧	C	7	Ⅲ	ShⅠ	9.40	5.23	1.10	54.00	6247	

表14　石器観察表④

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第120図	603	打製石斧	B	41	Ⅲ	ShⅠ	7.20	4.80	2.05	68.49	21610	
第121図	604	打製石斧	C	40	Ⅱ	ShⅠ	9.17	10.40	2.10	264.00	20505	
	605	打製石斧	C	20	Ⅱ	ShⅠ	11.20	7.05	1.92	155.13	4108	
	606	打製石斧	D	42	Ⅲ	ShⅠ	7.24	6.50	1.48	71.07	21032	
	607	打製石斧	C	18	Ⅲ	ShⅠ	6.15	5.16	1.93	50.00	4457	
	608	打製石斧	E	38	Ⅱ	ShⅠ	5.40	6.60	1.33	50.97	18739	
	609	打製石斧	C	18	Ⅱ	ShⅠ	7.93	5.48	2.35	108.05	3993	
	610	打製石斧	B	39	Ⅲ	ShⅠ	6.98	6.50	1.35	64.25	16911	
	611	打製石斧	D	5	Ⅱ	ShⅠ	10.48	5.80	0.92	66.00	8494	
	612	打製石斧	D	39	Ⅱ	ShⅠ	5.78	4.30	1.83	49.71	18944	
	613	打製石斧	C	5	Ⅲ	ShⅠ	5.60	4.20	1.30	33.84	9235	
	614	打製石斧	D	18	Ⅱ	ShⅣ	6.48	5.76	1.05	37.63	3564	
	615	打製石斧	D	11	Ⅲ	Sh	5.80	4.40	1.65	65.96	—	
	616	打製石斧	D	39	Ⅱ	ShⅠ	7.00	4.75	1.55	31.86	19529	
	617	打製石斧	D	18	Ⅱ	ShⅠ	7.88	7.56	1.37	81.94	3541	
	618	打製石斧	—	—	—	Hf	9.20	6.70	2.54	218.45	—	
	619	打製石斧	E	22	Ⅲ	ShⅠ	8.65	4.82	1.85	97.17	3308	
第122図	620	局部磨製石斧	E	6	Ⅲ	ShⅠ	12.15	5.94	10.80	240.00	8924	37
	621	局部磨製石斧	—	—	—	ShⅠ	11.10	6.36	1.85	134.66	—	
	622	局部磨製石斧	—	—	—	ShⅠ	11.53	6.40	1.94	161.73	道路周辺	
	623	局部磨製石斧	D	12	Ⅲ	ShⅠ	12.99	6.74	1.94	157.27	1021	
	624	局部磨製石斧	B	42	Ⅱ	ShⅠ	8.65	6.32	1.28	79.85	20919	37
	625	局部磨製石斧	F	41	Ⅲ	ShⅠ	7.45	5.32	1.70	63.11	22824	
	626	局部磨製石斧	B	39	Ⅱ	ShⅠ	8.00	5.75	1.48	58.75	22305	
		局部磨製石斧	B	40	Ⅱ	ShⅠ					16866	
	627	局部磨製石斧	D	7	Ⅱ	ShⅠ	8.10	7.68	1.40	97.64	8245	
	628	局部磨製石斧	C	5	Ⅲ	ShⅠ	13.73	6.65	1.63	119.96	8580	
第123図	629	局部磨製石斧	C	17	Ⅱ	ShⅠ	10.44	5.38	2.28	126.34	3294	37
	630	局部磨製石斧	C,D	5,6	Ⅰ	Sh	7.70	4.38	1.30	58.77	一括	
	631	局部磨製石斧	—	—	—	ShⅠ	7.94	4.80	0.92	50.53	—	
	632	局部磨製石斧	C	21	Ⅲ	ShⅠ	9.64	6.24	1.62	88.36	5979	
	633	局部磨製石斧	D	6	Ⅲ	ShⅠ	15.55	6.75	2.44	260.00	8922	
	634	局部磨製石斧	E	7	Ⅱ	ShⅠ	7.75	4.58	1.71	65.55	10357	
	635	局部磨製石斧	E	17	Ⅲ	ShⅠ	8.00	5.62	1.90	76.00	2067	
	636	局部磨製石斧	B	40	Ⅲ	ShⅠ	6.80	4.23	0.81	30.00	22082	
	637	局部磨製石斧	C	40	Ⅲ	ShⅣ	7.33	4.63	1.14	47.89	20534	
	638	局部磨製石斧	B	40	Ⅲ	ShⅠ	6.63	4.57	1.05	36.25	20643	38
	639	局部磨製石斧	C	5	Ⅱ	ShⅠ	7.74	7.15	1.24	74.61	7699	
	640	局部磨製石斧	C	43	Ⅱ	ShⅠ	3.98	3.89	0.98	20.00	—	
第124図	641	局部磨製石斧	C	3	Ⅲ	ShⅣ	13.78	9.63	1.18	115.53	8047	
	642	局部磨製石斧	B	42	Ⅲ	ShⅠ	13.78	7.57	1.32	133.71	21077	38
	643	局部磨製石斧	D	19	Ⅲ	ShⅠ	7.55	6.84	1.65	86.46	6476	
	644	局部磨製石斧	—	—	—	ShⅠ	4.90	5.40	1.30	38.28	—	
	645	局部磨製石斧	B	33	Ⅲ	ShⅠ	8.14	10.08	1.66	158.49	15641	
	646	局部磨製石斧	C	18	Ⅱ	ShⅣ	8.90	8.80	1.11	91.15	3509	
	647	局部磨製石斧	E	37	Ⅲ	Hf	8.50	7.72	2.20	136.00	17505	
	648	局部磨製石斧	C	19	Ⅱ	ShⅠ	5.21	7.51	0.93	42.00	3031	
	649	打製石斧二次	C	8	Ⅲ	ShⅠ	9.45	6.76	2.15	124.00	9757	
	650	打製石斧二次	D	19	Ⅲ	ShⅠ	8.36	7.90	2.45	181.66	4512	
第125図	651	磨製石斧	D	18	Ⅱ	Sh	9.63	4.21	1.28	59.86	3523	38
	652	磨製石斧	D	15	Ⅱ	Sh	9.33	4.22	1.84	98.17	6421	
	653	磨製石斧	D	6	Ⅲ	Sh	5.02	4.33	1.71	46.60	10486	
	654	磨製石斧	D	10	Ⅱ　Ⅲ	Sh	6.40	3.87	1.38	41.39	一括	
	655	磨製石斧	C	4	Ⅱ	Sh	5.50	3.78	1.00	27.66	7865	
	656	磨製石斧	B	37	Ⅲ	Sh	5.83	4.30	1.34	45.73	17336	
	657	磨製石斧	E	18	Ⅲ	Sh	8.65	3.99	1.37	52.20	1345	38
	658	磨製石斧	D	7	Ⅱ	ShⅡ	11.67	4.48	1.30	110.40	8769	
	659	磨製石斧	B	4	Ⅱ	ShⅡ	7.92	3.45	0.94	29.22	11566	
	660	磨製石斧	C	18	Ⅱ	ShⅠ	7.41	3.50	0.92	27.43	2801	
	661	磨製石斧	C	6	Ⅲ	Sh	8.06	4.40	1.00	51.32	9677	38
	662	磨製石斧	C	36	Ⅱ	Sh	5.81	4.68	1.00	46.29	14180	
	663	磨製石斧	D	6	Ⅲ	Sh	4.48	5.02	1.61	41.57	8968	
	664	磨製石斧	D	10	Ⅱ・Ⅲ	ShⅠ	5.90	4.65	1.77	55.90	—	
	665	磨製石斧	D	41	Ⅲ	ShⅠ	6.17	4.21	1.47	32.43	21798	
	666	磨製石斧	D	4	Ⅱ	ShⅠ	4.38	3.28	0.78	14.00	7838	
第126図	667	磨製石斧	D	14	Ⅲ	ShⅠ	6.60	3.83	1.36	41.16	915	
	668	磨製石斧	D	7	Ⅲ	ShⅠ	6.50	4.27	1.89	65.75	9960	
	669	磨製石斧	D	6	Ⅲ	Sh	4.70	4.12	0.90	26.75	8432	
	670	磨製石斧	B	7	Ⅲ	Sh	8.62	5.00	1.64	89.14	12952	
	671	磨製石斧	C	5	Ⅲ	Hf	8.15	4.72	1.67	102.00	8572	
	672	磨製石斧	C	12	Ⅱ	Sh	5.85	5.44	1.26	58.49	1106	
	673	磨製石斧	F	41	Ⅲ	Sh	7.84	6.56	1.33	95.17	23117	
	674	磨製石斧	C	40	Ⅲ	Sh	6.34	5.28	1.16	52.92	20544	
	675	磨製石斧	—	—	—	Sh	8.60	5.47	1.30	84.63	道路周辺	
	676	磨製石斧	C	11	Ⅲ	Sh	6.30	3.10	1.06	27.84	535	
	677	磨製石斧	C	3	Ⅱ	Sh	6.74	2.95	1.60	33.57	7991	
	678	磨製石斧	D	7	Ⅱ	Sh	7.70	3.00	1.58	49.90	8281	

表15　石器観察表⑤

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第126図	679	磨製石斧	D	7	Ⅱ	Sh	5.58	2.78	1.45	27.85	8258	
	680	磨製石斧ノミ型	D	12	Ⅱ	Sh	5.73	2.52	1.40	24.05	1036	41
	681	磨製石斧	A	5	Ⅲ	ShⅠ	5.00	3.17	1.20	24.68	12255	
	682	小型磨製石斧	C	20	Ⅱ	ShⅠ	3.47	1.56	0.53	4.00	3160	41
	683	小型磨製石斧	C	5	Ⅲ	Sh	7.50	2.15	1.08	16.53	8600	
第127図	684	磨製石斧	D	7	Ⅱ	Sh	13.95	4.85	3.45	328.00	8231	
	685	磨製石斧	D	41	Ⅱ	Sh	13.75	4.93	3.03	274.00	21893	38
	686	磨製石斧	D	8	Ⅱ	Sh	12.56	5.20	3.32	336.00	8121	
	687	磨製石斧	E	39	Ⅱ	Sh	10.70	5.00	3.05	185.10	19427	
	688	磨製石斧	E	12	Ⅲ	Sh	9.12	4.48	2.49	100.68	1064	
	689	磨製石斧	—	—	—	Sh	9.11	4.74	3.32	167.56	道路周辺	
	690	磨製石斧	B	3	Ⅱ	Sh	9.25	5.28	3.71	250.00	11840	
	691	磨製石斧	C	11	Ⅲ	Sh	7.80	4.03	2.67	81.71	1583	
	692	磨製石斧	B	3	Ⅰ	ShⅠ	8.75	4.82	3.13	164.06	—	
	693	磨製石斧	—	—	—	Hf	7.76	4.21	2.30	94.00	—	
	694	磨製石斧	C	6	Ⅱ	Sh	9.76	4.90	3.06	234.00	6829	38
	695	磨製石斧	D	13	Ⅲ	Sh	8.82	4.18	2.03	104.60	930	
第128図	696	磨製石斧	E	7	Ⅲ	Sh	12.38	5.40	2.28	228.00	10458	38
	697	磨製石斧	B	37	Ⅱ	Sh	12.28	6.54	2.90	340.00	一括	
	698	磨製石斧	D	5	Ⅱ	Sh	9.94	6.40	3.30	350.00	7559	
	699	磨製石斧	D	36	Ⅱ	Sh	8.35	6.40	3.13	248.00	14573	
	700	磨製石斧	D	20	Ⅲ	Sh	10.07	4.00	2.70	164.49	6449	
	701	磨製石斧	C	39	Ⅲ	ShⅠ	11.70	7.30	2.70	226.23	17058	
	702	磨製石斧	B	3	Ⅱ	Sh	7.60	5.50	3.07	172.27	一括	
	703	磨製石斧	B	—	表	Hf	8.22	5.97	1.47	110.60	—	
	704	磨製石斧	C	39	Ⅲ	ShⅠ	7.66	4.40	1.32	212.00	18066	
	705	磨製石斧	D	40	Ⅱ	ShⅠ	6.80	5.40	2.35	114.43	20301	
	706	磨製石斧	B	44	1号住居	ShⅠ	5.23	4.97	2.11	72.40	一括	
第129図	707	礫器	B	6	Ⅲ	ShⅢ	7.30	7.20	2.60	152.00	12014	
	708	礫器	C	6	Ⅱ	Hf	11.90	8.40	4.56	780.00	7317	
第130図	709	磨石・敲石	C	40	Ⅲ	Sa	9.85	7.38	3.52	372.00	18378	
	710	磨石・敲石	C	6	Ⅲ	Sa	6.20	5.90	3.45	158.90	13076	39
	711	磨石・敲石	C	21	Ⅱ	Sa	4.73	4.18	0.69	20.97	3214	
	712	磨石・敲石	E	39	Ⅱ	Sa	7.22	4.70	1.86	85.53	19429	
	713	磨石・敲石	D	5	Ⅱ	Sa	11.60	6.23	4.40	466.00	7637	
	714	磨石・敲石	C	19	Ⅲ	Sa	5.20	2.95	2.10	42.70	4765	39
	715	磨石・敲石	C	41	Ⅲ	Sa	11.88	9.69	2.92	548.00	21778	
	716	磨石・敲石	B	44	Ⅲ	Sa	10.00	8.80	3.70	472.00	13492	
	717	磨石・敲石	E	40	Ⅱ	Sa	8.63	5.88	2.37	194.16	19374	
	718	磨石・敲石	C	7	Ⅲ	Sa	8.00	8.10	2.05	196.38	13276	
第131図	719	磨石・敲石	D	13	Ⅲ	Sa	7.90	7.40	2.71	232.00	924	
	720	磨石・敲石	E	39	Ⅱ	Sa	5.44	5.05	4.08	154.63	19425	
	721	磨石・敲石	D	15	Ⅲ	Sa	11.10	7.10	3.70	396.00	6383	
	722	磨石・敲石	F	40	Ⅲ	Sa	8.45	7.58	4.72	396.00	23012	
	723	磨石・敲石	F	41	Ⅱ	AnⅡ	10.40	10.10	4.83	822.00	22643	
	724	磨石・敲石	D	19	Ⅲ	Sa	5.70	3.80	2.26	80.04	5373	
	725	磨石・敲石	C	39	Ⅲ	Sa	7.11	6.02	3.53	206.00	18116	
	726	磨石・敲石	B	39	Ⅱ	Sa	6.36	6.00	3.40	181.72	14398	
第132図	727	磨石・敲石	E	42	Ⅱ	Sa	10.25	8.80	4.70	610.00	22506	
	728	磨石・敲石	D	6	Ⅳ	Sa	7.02	4.95	3.24	150.57	10280	39
	729	磨石・敲石	E	6	Ⅲ	Sa	8.43	5.21	4.70	270.60	9009	
	730	磨石・敲石	C	40	Ⅲ	Sa	7.79	6.40	2.73	180.55	20552	
	731	磨石・敲石	F	39	Ⅱ	Sa	6.00	5.70	2.80	122.35	19072	
	732	磨石・敲石	D	40	Ⅱ	Sa	6.10	5.48	3.34	156.62	18888	
	733	磨石・敲石	D	40	Ⅰ	Sa	5.30	5.10	3.36	115.85	一括	39
	734	磨石・敲石	C	39	Ⅱ	Sa	5.40	5.38	3.93	163.11	18219	
	735	磨石・敲石	D	38	Ⅱ	Sa	4.20	3.75	2.70	57.57	15215	
第133図	736	磨石・敲石	C	46	Ⅱ	Sa	4.34	3.95	2.22	51.35	19906	39
	737	磨石・敲石	C	8	Ⅲ	Sa	4.10	2.40	1.66	20.76	9850	
	738	磨石・敲石	D	7	Ⅲ	Sa	5.68	5.45	3.21	125.08	8753	
	739	磨石・敲石	E	20	Ⅲ	Sa	4.16	3.70	1.92	40.71	2240	
	740	磨石・敲石	B	4	Ⅲ	Sa	7.30	5.50	3.33	161.27	11630	
	741	磨石・敲石	C	21	Ⅲ	Sa	11.65	10.38	4.22	644.50	4900	
	742	磨石・敲石	D	18	Ⅲ	Sa	4.95	4.05	2.41	62.69	5265	
	743	磨石・敲石	C	45	Ⅲ	AnⅡ	8.90	7.70	5.50	456.00	19111	
	744	磨石・敲石	C	41	Ⅲ	Sa	17.10	7.20	4.70	826.00	21809	
第134図	745	磨石・敲石	D	7	Ⅲ	AnⅡ	12.30	9.30	3.90	612.00	8754	39
	746	磨石・敲石	E	39	Ⅱ	Sa	12.60	10.00	3.90	706.00	19052	
	747	磨石・敲石	D	41	Ⅲ	Sa	11.20	9.70	5.00	774.00	21886	
	748	磨石・敲石	C	41	Ⅲ	Sa	11.13	8.02	4.10	568.00	22371	39
	749	磨石・敲石	D	37	Ⅲ	Sa	9.80	8.40	4.40	540.00	19626	
	750	磨石・敲石	E	20	Ⅲ	Sa	11.40	8.45	5.82	756.00	2224	
	751	磨石・敲石	G	39	Ⅲ	Gr	13.40	11.20	5.30	1004.00	23069	
第135図	752	磨石・敲石	C	39	Ⅲ	Sa	9.39	8.30	5.07	586.00	18372	39
	753	磨石・敲石	F	41	Ⅱ	ShⅡ	10.70	10.20	4.96	822.00	22627	
	754	磨石・敲石	D	40	Ⅱ	Sa	7.12	9.40	4.04	404.00	20292	
	755	磨石・敲石	E	39	Ⅲ	AnⅡ	8.64	7.13	4.15	388.90	19476	39

表16　石器観察表⑥

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第136図	756	磨石・敲石	E	19	Ⅲ	Sa	7.25	6.10	3.45	206.00	2196	
	757	磨石・敲石	D	40	Ⅱ	Sa	6.48	5.99	3.61	199.42	19752	
	758	磨石・敲石	D	40	Ⅲ	ShⅢ	7.05	6.45	3.32	222.00	22187	40
	759	磨石・敲石	D	7	Ⅲ	Gr	7.70	5.30	4.20	268.00	8150	
	760	磨石・敲石	D	35	Ⅰ	Sa	7.85	4.89	3.40	180.92	14699	
	761	磨石・敲石	C	41	Ⅲ	Sa	4.63	4.83	2.00	71.01	22008	
	762	磨石・敲石	D	44	3号住居	Sa	17.55	8.75	5.00	1308.00	82	
	763	磨石・敲石	B	41	Ⅱ	An	10.73	8.25	4.40	310.20	21443	
第137図	764	磨石・敲石	B	42	Ⅱ	Sa	8.54	2.78	1.70	73.32	20259	
	765	磨石・敲石	D	35	Ⅱ	Sa	10.60	3.11	2.90	160.32	14691	
	766	磨石・敲石	C	41	Ⅲ	Sa	14.60	2.70	3.00	167.31	21778	40
	767	磨石・敲石	C	43	Ⅱ	Sa	10.23	4.00	2.10	147.63	20063	
	768	磨石・敲石	C	41	Ⅱ	Sa	9.08	4.53	2.55	148.86	21755	
	769	磨石・敲石	D	5	Ⅱ	Sa	9.34	5.43	1.27	95.16	7653	
	770	磨石・敲石	B	41	Ⅲ	Sa	8.30	4.52	1.91	91.86	22342	
	771	磨石・敲石	F	46	Ⅲ	Sa	8.50	3.50	2.48	105.20	13823	
	772	磨石・敲石	E	38	Ⅱ	Sa	8.00	6.50	2.23	181.61	19011	
	773	磨石・敲石	C	4	Ⅱ	Sa	7.84	4.30	2.70	125.74	7749	
	774	磨石・敲石	E	39	Ⅱ	ShⅡ	14.60	6.20	6.08	884.20	19397	
	775	磨石・敲石	C	39	Ⅲ	Sa	21.48	5.80	4.31	732.00	18086	
第138図	776	磨石・敲石	E	39	Ⅱ	Sa	12.90	11.00	5.00	1052.00	20019	
	777	磨石・敲石	B	40	Ⅱ	Sa	7.80	6.70	3.80	256.00	16867	40
	778	磨石・敲石	D	39	Ⅲ	Sa	11.45	9.90	2.90	476.00	21245	
	779	磨石・敲石	C	39	Ⅲ	Sa	10.90	9.35	5.57	838.00	17817	
	780	磨石・敲石	—	—	—	Sa	13.50	9.00	5.60	968.00	一括	
	781	磨石・敲石	E	43	Ⅱ	Sa	11.10	7.83	4.28	532.00	22489	
第139図	782	磨石・敲石	E	41	Ⅲ	Sa	12.72	10.63	5.93	1210.00	22951	40
	783	磨石・敲石	B	47	Ⅲ	Sa	11.93	9.05	4.88	766.40	16519	
	784	磨石・敲石	C	40	Ⅲ	Sa	13.72	7.31	7.22	966.00	17861	40
	785	磨石・敲石	G	46	Ⅱ	Sa	9.30	8.10	4.10	550.00	13918	
	786	磨石・敲石	D	40	Ⅱ	Sa	11.00	8.50	5.30	742.00	19758	
	787	磨石・敲石	B	41	土坑5号	Sa	11.00	8.80	5.78	780.00	22	
第140図	788	磨石・敲石	C	39	Ⅲ	Sa	10.68	8.36	5.93	716.00	18100	40
	789	磨石・敲石	B	39	Ⅲ	Sa	12.75	8.55	5.20	848.00	16904	
	790	磨石・敲石	E	20	Ⅲ	Sa	12.45	11.05	5.12	1034.00	2226	40
	791	磨石・敲石	B	44	1号住居	AnⅡ	13.00	11.10	5.50	1160.00	一括	
	792	磨石・敲石	F	41	Ⅲ	Sa	7.50	9.15	5.78	462.00	22804	
第141図	793	石錘	C	5	Ⅵ	Sa	8.33	6.40	1.92	149.80	12236	
	794	石錘	C	43	Ⅱ	Sa	8.10	6.00	1.84	139.60	20054	
	795	石錘	D	43	Ⅰ	Sa	7.45	7.83	1.85	146.30	—	35
	796	石錘	D	42	Ⅲ	Sa	8.00	5.98	1.97	140.80	20757	
	797	石錘	D	19	Ⅱ	Sa	9.30	6.55	3.50	284.00	2828	
	798	石皿・台石	D	42	Ⅲ	Sa	12.50	10.80	3.50	895.00	21054	
	799	石皿・台石	B	43	Ⅲ	Sa	20.20	9.50	4.70	1235.00	19944	
第142図	800	砥石	F	42	Ⅱ	Sa	18.40	19.93	6.15	3530.00	22694	42
	801	砥石	D	7	Ⅱ	Sa	23.00	15.23	2.30	1264.00	8205	
	802	石皿・台石	B	44	1号住居	An	29.45	22.88	8.32	7.80	一括	
	803	石皿・台石	C	44	Ⅲ	Sa	26.53	16.40	5.30	3320.00	18504	
第143図	804	石皿・台石	C	42	Ⅲ	Sa	38.43	25.20	4.56	6746.00	22028	42
			E	40	Ⅱ	Sa					19020	
	805	石皿・台石	F	40	Ⅲ	An	28.20	21.40	11.73	10340.00	23050	
	806	石皿・台石	C	43・44	2号住居	Sa	40.00	27.80	13.65	20150.00	61	
第144図	807	石皿・台石	D	44	3号住居	Sa	29.70	26.73	13.23	15560.00	1	42
	808	石皿・台石	B	44	1号住居	An	33.60	30.13	11.90	12210.00	38	
第145図	809	砥石	E	6	Ⅱ	Sa	14.20	9.70	6.40	1444.00	10333	42
	810	砥石	D	11	Ⅲ	Sa	19.20	10.50	1.80	810.00	—	
	811	砥石	B	40	Ⅲ	Sa	5.90	7.60	4.30	274.00	20554	

弥生時代の石器

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第160図	888	磨製石鏃	B	44	—	ShⅤ	1.72	1.53	0.14	0.44	—	
	889	磨製石鏃	D	5	Ⅱ	ShⅤ	3.70	1.30	0.26	1.31	1272	
	890	磨製石鏃	E	17	Ⅱ	ShⅤ	3.99	2.12	0.25	2.39	671	41
	891	磨製石鏃	B	35	Ⅱ	ShⅤ	3.97	1.93	0.30	2.86	19317	
	892	磨製石鏃	D	48	Ⅱ	ShⅤ	4.82	2.53	0.47	6.48	7583	
	893	扁平磨製片刃石斧	G	40	Ⅲ	ShⅥ	7.32	4.97	2.08	156.02	23090	
	894	素材剥片	B	44	Ⅲ	ShⅤ	7.05	7.25	0.58	28.65	13547	

古墳時代の石製品

挿図番号	遺物番号	器種	出土区		層位	石材分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	写真図版
第176図	941	管玉	—	—	—	Jp	1.20	0.50	0.50	0.47	21082	
	942	管玉	C	41	Ⅱ	Jp	1.45	0.50	0.50	0.57	21957	
	943	管玉	B	44	1号住居	Jp	2.79	0.43	0.44	0.85	SH-6　36	41
	944	管玉	B	44	1号住居	Jp	2.10	0.43	0.39	0.59	SH-6　37	
	945	管玉	C	41	Ⅱ	Jp	1.80	0.70	0.68	1.42	21561	
	946	勾玉	—	—	1号住居	Ja	1.56	1.20	0.63	1.82	—	

土器観察表について

表 17 ～表 26 は土器の観察表であり，図示した土器についての基本的な情報を記載してある。本報告書で特に注視した点は，色調と胎土であり以下のような手順で作業を進めた。

色調については，これまでは一点一点の土器を見ながら担当者が思い浮かべる色調名をあげるか，標準土色帖と照らし合わせながら近い色調名を記載してきた。しかし，担当者が思い浮かべる色調名は時間の経過と共に変化する可能性があり，また標準土色帖に合わせても記号と数値で記入されるとどんな色か想像できない。そこで，今回は稲荷迫遺跡で出土した各時代や時期の土器から代表的な色調のものを選び出し，A・B・C・・・と印をした上で，一人の担当者が掲載土器と照らし合わせていった。それが下記の写真である。観察表に記載するにあたっては，標準土色帖の色名を基にして区別してある。土器の色調は被熱した胎土鉱物や粘土と関わりがあると考えられるので，遺跡ごとに積み重ねることによって地域や時期ごとの普遍性が出てくるものと期待する。

胎土については，これまでは実体顕微鏡で観察しながら鉱物名を記入してきたが，「石英と長石」あるいは「輝石と角閃石」の区別は難しかった。そこで今回は，稲荷迫遺跡で出土した各時代や時期の土器から代表的な胎土のものを選び出し，ａ・ｂ・ｃ・・・と印をした上で，一人の担当者が実体顕微鏡を覗きながら照らし合わせていった。稲荷迫遺跡出土土器の胎土については，鐘ヶ江賢二氏によって後述されるように，花崗岩質のものと堆積岩質のもの，それに火山噴出物を含むものがある。したがって，今回の表では鉱物名を列挙するのではなく，岩質名もしくは目立った鉱物や状況のみを記すこととする。

「花崗岩 A」は 1.5㎜大の金色雲母が多量に含まれる。「透明石英・黒色鉱物」としたものには，微細な金色雲母が含まれるものもある。「風化礫」としたものは，花崗岩質のものであり微細な雲母が含まれるものもある。「小石」としたものは，摩滅して角のとれたもので，花崗岩質のものもある。

色調

A：黒色　B：暗赤褐色　C：にぶい黄色
D：赤褐色　E：明赤褐色　F：にぶい赤褐色
G：橙色　H：明褐色　I：淡黄色　J：浅黄橙色

胎土

ａ：「花崗岩Ａ」
ｂ：「透明石英・黒色鉱物」
ｃ：「軽石」もしくは「火山ガラス」
ｄ：「火山ガラス」
ｅ：「小石」もしくは「風化礫」

表17　土器観察表①

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第58図	8	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	貝殻条痕	ケズリ	淡黄色	風化礫	—	—	—
第59図	9	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	粗い条痕	—	淡黄色	風化礫	C-3	Ⅴ・Ⅵ	11210　12542　他
	10	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	貝殻条痕	ケズリ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	D-3	Ⅵ	11707
	11	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	貝殻条痕	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	E-3	Ⅴ・Ⅴ下	10571　11689
	12	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	貝殻条痕	ケズリ	淡黄色	風化礫	D-3	Ⅴ	10250
	13	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	貝殻条痕	—	淡黄色	風化礫	C-3	Ⅵ	11334
	14	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	粗い条痕	—	にぶい赤褐色	風化礫	C-3	Ⅴ	10156　10152　他
	15	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	粗い条痕	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	Y.Z-3	—	土集P12　P15　P16
	16	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	粗い貝殻条痕	ケズリ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	集石48号	—	集石4-2
	17	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	貝殻条痕	ナデ	淡黄色	風化礫	集石50号	—	集石27-1
	18	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	浅い貝殻条痕	条痕	にぶい赤褐色	花崗岩	D-2	Ⅴ	10756
	19	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	浅い貝殻条痕	条痕	にぶい赤褐色	花崗岩	D-2	Ⅴ	10881
	20	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	ナデ	ナデ	淡黄色	風化礫	C-5	Ⅴ	10055
	21	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	貝殻条痕	貝殻条痕	淡黄色	風化礫	D-4	Ⅴ	7792
	22	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	浅い貝殻条痕	条痕	にぶい赤褐色	風化礫	C-5	Ⅵ	11115
	23	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	ナデ	ナデ	淡黄色	風化礫	C-4	Ⅵ	11122
	24	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	条痕	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	E-3	Ⅴ下	11685
	25	縄文時代早期	円筒土器	岩本タイプ	貝殻条痕	ケズリ	橙色	風化礫	集石48号	—	集石4-1
第60図	26	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	A-3.5～7		
	27	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ケズリ	浅黄橙色	風化礫	B-2	Ⅵ	12598
	28	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ミガキ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-5	Ⅴ	10920
	29	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	ナデ	ミガキ様のナデ	明褐色	風化礫	D-4	Ⅴ	10023
	30	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	ナデ	ケズリ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	B-4	Ⅴ	12653
	31	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ケズリ様のナデ	淡黄色	風化礫	A-3　C-4	Ⅵ	11138　12611　他
	32	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ミガキ	にぶい赤褐色	風化礫	D-4	Ⅴ	11086　11087
	33	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	—	ケズリ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	B-7	Ⅴ	13191
	34	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ミガキ様のナデ	淡黄色	風化礫	集石33号	—	集石10-1
	35	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ケズリ様のナデ	明褐色	風化礫	集石57号	—	集石37-2
	36	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	ナデ	ミガキ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	D-2	Ⅴ	10698　12528
	37	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	横方向のミガキ	にぶい赤褐色	風化礫	E-7	Ⅴ	11317
	38	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	ナデ	ミガキ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	Z-3	Ⅴ	12699
	39	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ケズリ様のナデ	淡黄色	風化礫	集石6号	—	集石54-1
	40	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	浅い斜条痕	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	C-49	Ⅴ	18620
	41	縄文時代早期	角筒土器	加栗山タイプ	モジリ編み圧痕	—	にぶい赤褐色	風化礫	—	—	—
第61図	42	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	—	—	—
	43	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	集石12号	—	集石49-1
	44	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	貝殻条痕	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	—	—	—
	45	縄文時代早期	円筒土器	加栗山タイプ	条線	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	C-6	Ⅴ	12192　12193
	46	縄文時代早期	円筒土器	小牧３Ａタイプ	貝殻腹縁刺突	ケズリ	赤褐色	風化礫	Z-3.4	Ⅵ	12687　12688　他
	47	縄文時代早期	円筒土器	小牧３Ａタイプ	貝殻腹縁刺突	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	C-4	Ⅴ・Ⅵ	10005　11101　他
第62図	48	縄文時代早期	円筒土器	吉田式土器	貝殻腹縁刺突	ケズリ	淡黄色	花崗岩	D-7	Ⅴ・Ⅵ	11322　11447　他
	49	縄文時代早期	円筒土器	吉田式土器	貝殻腹縁刺突	ケズリ	にぶい赤褐色	風化礫	A-4　C-6	Ⅴ	12165
	50	縄文時代早期	円筒土器	倉園Ｂ式土器	貝殻条痕	ケズリ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	集石39号	Ⅴ・Ⅵ	11116　12796　他
	51	縄文時代早期	円筒土器	倉園Ｂ式土器	凹線状の条痕	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-6	Ⅴ	12158
	52	縄文時代早期	円筒土器	倉園Ｂ式土器？	条痕	ケズリ	淡黄色	風化礫	A-4	Ⅵ	13405
	53	縄文時代早期	円筒土器	別府原タイプ	条痕	ケズリ様のナデ	明褐色	花崗岩	B.C.E-4 D.E-3	Ⅴ・Ⅴ下Ⅵ	7821　9034　他
	54	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	貝殻条痕	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	D-3.7 E-4 3T	Ⅴ・Ⅵ	6479　7807　他
	55	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	貝殻刺突	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	集石39号	Ⅴ	11181　11179　他
	56	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	貝殻刺突	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	D-4	Ⅴ	7797
	57	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	貝殻条痕	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	風化礫	D-4	Ⅵ	11151
第63図	58	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	貝殻条痕	丁寧なナデ	明褐色	風化礫	D-4.5	Ⅴ・Ⅵ	9166　10985　他
	59	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	貝殻条痕	ハケ目状のナデ	明褐色	花崗岩	C-4 D-3.5	Ⅴ・Ⅵ	9046　11378　他
	60	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	粗雑な条痕文	ケズリ	明褐色	風化礫	D-5	Ⅴ	10954

表18　土器観察表②

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第63図	61	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	綾杉状の条痕	ミガキ様のナデ	にぶい赤褐色	風化礫	E-3	Ⅴ	9134　9133　他
	62	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	綾杉状の条痕	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	D-5	Ⅵ	11402
	63	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	綾杉状の条痕	ケズリ	にぶい黄色	風化礫	D-5	Ⅵ	—
	64	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	ナデ	ナデ	にぶい黄色	花崗岩	C-5	Ⅴ	12882
	65	縄文時代早期	円筒土器	石坂式土器	綾杉状の条痕	ケズリ	にぶい黄色	風化礫	D-6	Ⅴ	11661
	66	縄文時代早期	円筒土器	下剥峯式土器	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	明褐色	花崗岩	B-6	Ⅵ	13188
	67	縄文時代早期	円筒土器	下剥峯式土器	ナデ	—	にぶい赤褐色	風化礫	集石57号	—	集石37-1
	68	縄文時代早期	円筒土器	下剥峯式土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	—	—	—
	69	縄文時代早期	円筒土器	下剥峯式土器	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	淡黄色	花崗岩	E-3	Ⅴ	9103
	70	縄文時代早期	円筒土器	下剥峯式土器	ミガキ様のナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-4.5	Ⅴ・Ⅵ	10056　10919　他
第64図	71	縄文時代早期	深鉢形土器	手向山式土器	山形押型文	ケズリ様のナデ	にぶい黄色	花崗岩	C.D-5	Ⅴ・Ⅵ	10063　11283　他
	72	縄文時代早期	深鉢形土器	手向山式土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	C.D-5	Ⅴ	10934　10935　他
	73	縄文時代早期	深鉢形土器	手向山式土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	Z-3	Ⅴ	12705　12716
	74	縄文時代早期	深鉢形土器	手向山式土器	ミガキ様のナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩	D.E-2	Ⅴ	10792　10808　他
	75	縄文時代早期	深鉢形土器	手向山式土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩	Z-3	Ⅵ	12697
	76	縄文時代早期	ミニチュア土器	手向山式土器	楕円押型文	ナデ	明褐色	風化礫	C-3	Ⅴ	11245　10145
第65図	77	縄文時代早期	深鉢形土器	平栫式土器	ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	D-4	Ⅴ	11079　11080　他
	78	縄文時代早期	深鉢形土器	平栫式土器	ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	風化礫	D-8.9	Ⅴ・Ⅵ	11435　11054
	79	縄文時代早期	深鉢形土器	平栫式土器	ナデ	丁寧なナデ	明褐色	風化礫	C-8	Ⅴ	11427　11428　他
	80	縄文時代早期	深鉢形土器	平栫式土器	ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-7	Ⅴ	12132　11349
	81	縄文時代早期	深鉢形土器	平栫式土器	—	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	—	—	—
	82	縄文時代早期	壺形土器	平栫式土器	単節縄文	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	D-5	Ⅵ	11403
	83	縄文時代早期	壺形土器	平栫式土器	—	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	C-7	Ⅴ	11246
	84	縄文時代早期	深鉢形土器	平栫式土器？	単節文様	ナデ	明褐色	風化礫	—	—	—
	85	縄文時代早期	深鉢形土器	塞ノ神式土器	ナデ	ナデ	赤褐色	風化礫	C-3	Ⅴ	10154
	86	縄文時代早期	深鉢形土器	塞ノ神式土器	ナデ	ケズリ様のナデ	浅黄橙色	花崗岩	C-2	Ⅴ	12523
	87	縄文時代早期	深鉢形土器	塞ノ神式土器	ナデ	ケズリ様のナデ	淡黄色	風化礫	5T	Ⅰ	—
第74図	128	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	1T	Ⅲ	1516　他
	129	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	B-43	Ⅱ	20092
	130	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	ナデ	貝殻条痕	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	B	Ⅰ	—
	131	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	ナデ	貝殻条痕	黒色	花崗岩Ａ	C-41	Ⅲ	22429
	132	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	C-39	Ⅱ	18913
	133	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	ナデ	貝殻条痕	にぶい赤褐色	風化礫	F-38	Ⅲ	—
	134	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	ナデ	ナデ	赤褐色	風化礫	B-41	Ⅲ	21656
	135	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	ナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	F-39	Ⅲ	23124　23125
	136	縄文時代後期	深鉢形土器	市来式土器	条痕	条痕	赤褐色	風化礫	3T	Ⅲ	690
	137	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	条痕	暗赤褐色	風化礫	B-48	Ⅱ	—
	138	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	条痕	条痕	明赤褐色	花崗岩Ａ	E-37	Ⅲ	15143　15144
	139	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	貝殻条痕	明赤褐色	風化礫	B-41	Ⅲ	21982　22286
	140	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	C-41 E-39	Ⅱ・Ⅲ	19833　19834　他
第75図	141	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい赤褐色	風化礫	F-39.40	Ⅲ	23061
	142	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	貝殻条痕	暗赤褐色	花崗岩Ａ	E-37	Ⅲ	16623　17449
	143	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	貝殻条痕	暗赤褐色	風化礫	F-38	Ⅲ	229
	144	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	貝殻条痕	明赤褐色	花崗岩Ａ	D-36	Ⅱ	14486
	145	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	貝殻条痕	暗赤褐色	花崗岩Ａ	E-37	Ⅱ・Ⅲ	15329　15330
	146	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	C-39B.C-41	Ⅲ	20443
	147	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄色	風化礫	土坑2号	—	SH2
	148	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	D-36	Ⅲ	14607
	149	縄文時代後期	深鉢形土器	丸尾式土器	貝殻条痕	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-19	Ⅲ	5239
	150	縄文時代後期	台付皿形土器	市来式or丸尾式	ナデ	条痕	暗赤褐色	花崗岩Ａ	E-22	Ⅱ	1980
	151	縄文時代後期	台付皿形土器	市来式or丸尾式	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	E-21	Ⅲ	4623
	152	縄文時代後期	台付皿形土器	市来式or丸尾式	貝殻条痕	貝殻条痕	明赤褐色	花崗岩Ａ	—	—	—
	153	縄文時代後期	深鉢形土器	北久根山式土器	ミガキ	—	にぶい黄色	風化礫	4T	Ⅲ	661

表19　土器観察表③

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第75図	154	縄文時代後期	深鉢形土器	北久根山式土器	ミガキ	ナデ	淡黄色	風化礫	D-11	Ⅱ	1507
第76図	155	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	板状工具によるナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-6	Ⅲ	9362　9383 他
第77図	156	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	板状工具によるナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	B-5.6	—	—
第78図	157	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	暗赤褐色	風化礫	D.E-6	Ⅲ	9316　9608　他
	158	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-5	Ⅱ	7517
	159	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ	—	黒色	透明石英・黒色鉱物	C-44	Ⅲ	18501
	160	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	暗赤褐色	花崗岩	D-6	Ⅱ	8669
	161	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	D-6	Ⅲ	8683
	162	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	D-5	Ⅱ	7506
	163	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ナデ	ナデ	浅黄橙色	風化礫	B-3	Ⅱ	11621
	164	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C-40	Ⅲ	21224
	165	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-6	Ⅲ	9323
	166	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	風化礫	C-4　D-5	Ⅱ	8493
	167	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C.E-6	Ⅲ・Ⅲb	9266　9533
	168	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ナデ	ナデ	淡黄色	透明石英・黒色鉱物	C-41.42E-44	Ⅱ・Ⅲ	21157　21445　他
第79図	169	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ	ナデ	明赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-6	Ⅲ	10506　10509　他
	170	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	2T	Ⅲ	647
	171	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ミガキ	ナデ	黒色	透明石英・黒色鉱物	C-6	Ⅲ	9676
	172	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器	ナデ	ナデ	明赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-20	Ⅱ	5485
	173	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	粗いナデ	ナデ	赤褐色	風化礫	D-15	Ⅲ	921
	174	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C-3	Ⅱ	7931
	175	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ナデ	ナデ	赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C-6	Ⅱ	7306
	176	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ナデ	ナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	E-6	Ⅲ	8644
	177	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	E-6	Ⅲ	8995
第80図	178	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-7	Ⅱ	8229
	179	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ミガキ	ミガキ	黒色	透明石英・黒色鉱物	C-6	Ⅱ	7331
	180	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ミガキ	ミガキ	黒色	透明石英・黒色鉱物	C-6	Ⅲ	9544
	181	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C-6	Ⅱ	8368　8369
	182	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ミガキ	ミガキ	黒色	透明石英・黒色鉱物	C-6	Ⅲ	8387
	183	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	風化礫	C-6	Ⅱ	7330　6694
	184	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	横方向のミガキ	横方向のミガキ	赤褐色	透明石英・黒色鉱物	—	Ⅰ	—
	185	縄文時代後期	深鉢形土器	上加世田式土器？	横方向のミガキ	横方向のミガキ	明赤褐色	風化礫	E-6	Ⅲ・Ⅲ下	8990　9238
	186	縄文時代後期	深鉢形土器	上加世田式土器？	ナデ	ミガキ様のナデ	明赤褐色	風化礫	D-6	Ⅲ	8687
	187	縄文時代後期	浅鉢形土器	上加世田式土器？	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	明赤褐色	風化礫	C-6	Ⅲ	9195
	188	縄文時代後期	深鉢形土器	上加世田式土器？	ナデ	ナデ	橙色	風化礫	C-17	Ⅲ	4666
	189	縄文時代後期	深鉢形土器	上加世田式土器？	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	E-6	Ⅲ	9607
	190	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	縦方向のミガキ	縦方向のミガキ	明赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-6	Ⅲ	8913　9348 他
	191	縄文時代後期	深鉢形土器	中岳Ⅱ式土器？	ナデ	ミガキ	赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D.E-6	Ⅲ	9003　9382　他
第81図	192	縄文時代後期	深鉢形土器	入佐式土器	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	C-17	Ⅲ	4664
	193	縄文時代後期	深鉢形土器	入佐式土器	ミガキ	丁寧なナデ	暗赤褐色	風化礫	D-13	Ⅲ	490
	194	縄文時代後期	深鉢形土器	入佐式土器	ミガキ	丁寧なナデ	暗赤褐色	風化礫	D-12	Ⅲ	6444
	195	縄文時代晩期	深鉢形土器	入佐式土器	粗いナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色	風化礫	D-15	Ⅱ下	6411
	196	縄文時代晩期	深鉢形土器	黒川式土器？	貝殻条痕	丁寧なナデ	浅黄橙色	風化礫	D-11	Ⅲ	—
	197	縄文時代晩期	深鉢形土器	黒川式土器？	条痕	ナデ	にぶい黄色	火山ガラス	E-13	Ⅱ	788
	198	縄文時代晩期	深鉢形土器	黒川式土器？	ミガキ様のナデ	ナデ	明褐色	風化礫	D-19	Ⅲ	5386
	199	縄文時代晩期	深鉢形土器	黒川式土器？	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	D-6	Ⅲ	9321　9372 他
第82図	200	縄文時代後期	浅鉢形土器	上加世田式土器？	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	風化礫	E-6	Ⅱ	8653
	201	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	明褐色	火山ガラス	C-13	Ⅲ	354
	202	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	B-7	Ⅲ	12352　12373
	203	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	淡黄色	風化礫	D-11	Ⅲ	1516
	204	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	D-8	—	—
	205	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	赤褐色	火山ガラス	C-12	Ⅲ	—
	206	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	火山ガラス	D-11	Ⅰ	2864

表20　土器観察表④

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第82図	207	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	淡黄色	火山ガラス	B-3	Ⅲ	11793
	208	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	明褐色	火山ガラス	C-18	Ⅱ・Ⅲ	2713　3933
	209	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	C-4	Ⅱ	7876
	210	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	風化礫	D-11	Ⅲ	—
	211	縄文時代後期？	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	E-9	Ⅱ	—
	212	縄文時代後期？	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	淡黄色	火山ガラス	D-18	Ⅲ	4712
	213	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	明褐色	花崗岩	D-12	Ⅲ	6458
	214	縄文時代後期	浅鉢形土器	上加世田式土器？	ナデ	ミガキ	暗赤褐色	風化礫	B-8	Ⅲ	13054
	215	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	C-6	Ⅱ	7335
	216	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	D-6	Ⅲ	8912
	217	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	F-20	Ⅲ	2243
	218	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	赤褐色	風化礫	C-12	Ⅱ	1120
	219	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	明褐色	火山ガラス	C-3	Ⅱ	8043
	220	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	D-11	Ⅲ	—
	221	縄文時代後期	浅鉢形土器	上加世田式土器？	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C-6	Ⅲ	9197
	222	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	明褐色	風化礫	E-21	Ⅲ	3283
	223	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	C-18	Ⅲ	4468　4751
	224	縄文時代後期	浅鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	火山ガラス	B-40　C-39	Ⅲ	17997　18364
第83図	225	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	明褐色	風化礫	D-18	Ⅱ・Ⅲ	2677　3591 他
	226	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	黒色	風化礫	D-18	Ⅲ	5337
	227	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	黒色	風化礫	—	—	—
	228	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	明褐色	風化礫	D-19	Ⅲ	5206
	229	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	E-17	Ⅲ	2092
	230	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	D-10	Ⅱ・Ⅲ	—
	231	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	C-2	Ⅲ	11076
	232	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	D-19	Ⅲ	4519
	233	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	花崗岩	C-20	Ⅱ	4111
	234	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	花崗岩	D-10	Ⅰ	—
	235	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	風化礫	D-6	Ⅱ・Ⅲ	—
	236	縄文時代晩期	浅鉢形土器	黒川式土器	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	風化礫	E-10	—	—
第84図	237	縄文時代後期？	鉢形土器	上加世田式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	F-42	Ⅲ	22884　22902　他
	238	縄文時代晩期？	鉢形土器	黒川式土器？	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	E-17	Ⅲ	1329
	239	縄文時代晩期？	鉢形土器	突帯文期？	ミガキ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	E-12	Ⅱ	177　607　他
	240	縄文時代晩期？	鉢形土器	黒川式土器？	ミガキ	ミガキ	黒色	火山ガラス	E-13	Ⅱ	793　797
	241	縄文時代晩期？	鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ	ミガキ	明褐色	風化礫	D-7	Ⅲ下	9559
	242	縄文時代晩期？	鉢形土器	黒川式土器？	ミガキタテ	ナデ	黒色	風化礫	E-42	Ⅱ	22461　22462
	243	縄文時代晩期？	鉢形土器	入佐式土器？	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	火山ガラス	D-38.39	—	18434　18984
	244	縄文時代晩期？	鉢形土器	突帯文期？	縦方向のミガキ様ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	D-18	Ⅲ	5297
	245	縄文時代晩期？	鉢形土器	突帯文期？	縦方向のミガキ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	土坑5号	—	SH5-59
	246	縄文時代晩期？	鉢形土器	突帯文期？	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	D-41	Ⅱ	21346
	247	縄文時代晩期？	鉢形土器	突帯文期？	ナデ	ナデ	淡黄色	風化礫	E-6	Ⅱ	8471
第85図	248	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	E-21	Ⅱ	1879　1833　他
第86図	249	弥生時代	甕形土器	突帯文期	板状工具による丁寧なナデ	板状工具によるナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C-20	Ⅱ・Ⅲ	3132　3431 他
	250	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	D-42 E-41F-42	Ⅱ・Ⅲ	20608　22533　他
	251	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	B-39　C-41	Ⅲ	16900　21854
第87図	252	弥生時代	甕形土器	突帯文期	粗いナデ	粗いナデ	暗赤褐色	風化礫	D-7	Ⅱ	8210　8212　他
	253	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	暗赤褐色	風化礫	土坑8号	Ⅱ・Ⅲ	18011　20602　他
	254	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ケズリ	明赤褐色	透明石英	土坑8号	Ⅱ・Ⅲ	7223　8148　他
	255	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	土坑5号	—	SH5-15
第88図	256	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	F-41.42	Ⅲ	22883　22885　他
	257	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	明褐色	透明石英・黒色鉱物	C-34.35	Ⅱ・Ⅲ	14227　14783　他
	258	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	C-41.42	Ⅱ・Ⅲ	21576　22401
	259	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	土坑1号	Ⅳ	—

表21　土器観察表⑤

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第88図	260	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	淡黄色	風化礫	土坑1号	—	—
第89図	261	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明褐色	風化礫	C-20	Ⅱ	3146　3433　他
	262	弥生時代	甕形土器	突帯文期	横方向のケズリ	横方向のケズリ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-39.41	Ⅱ・Ⅲ	21242　21385　他
	263	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデヨコ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩	土坑5号	—	SH5-41
	264	弥生時代	甕形土器	突帯文期	粗いナデ	粗いナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-.6.7D-6.7.8E-7	Ⅱ・Ⅲ	6665　7048　他
第90図	265	弥生時代	甕形土器	突帯文期	粗いナデ	ナデ	明赤褐色	風化礫	土坑2号	Ⅱ・Ⅲ	6493　6505　他
第91図	266	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩	B.D-39 C-38 D-41G-40E-42	Ⅱ・Ⅲ	15385　19590　他
	267	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩	D-46	Ⅲ	19898
	268	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩	C.D-40	Ⅱ・Ⅲ	19769　20308　他
	269	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明褐色	風化礫	D-39	Ⅲ	—
	270	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明褐色	風化礫	D-45	Ⅱ・Ⅲ	18701　19894
第92図	271	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明褐色	風化礫	B.C.D-40	Ⅱ・Ⅲ	17980　18305
	272	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明褐色	風化礫	D-41	Ⅱ	21881
	273	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	C-40	Ⅲ	17919
	274	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	軽石	C-42	Ⅲ	20107
	275	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	黒色	花崗岩	C-39.41D-39	Ⅱ・Ⅲ	18125　18993　他
	276	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	にぶい黄色	透明石英・黒色鉱物	E-41	Ⅱ	22761
第93図	277	弥生時代	甕形土器	突帯文期	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	B.C-8	Ⅱ・Ⅲ	7097　13034
	278	弥生時代	甕形土器	突帯文期	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	C-7	Ⅱ・Ⅲ	8125　8813
	279	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	—	暗赤褐色	火山ガラス	F-40	Ⅲ	22971
	280	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	黒色	透明石英・黒色鉱物	E-36	Ⅱ	17444　17447
	281	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-7.8	Ⅱ・Ⅲ	6888　7102　他
	282	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	—	暗赤褐色	風化礫	C-7	Ⅱ	6886
	283	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	E-40	Ⅲ	22869
	284	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	黒色	風化礫	D-38	Ⅲ	18228
	285	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	黒色	風化礫	E-40	Ⅱ	19813
第94図	286	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	B.C-39	Ⅲ	16928　17086
	287	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	明褐色	風化礫	D-39	Ⅱ	18961
	288	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	黒色	花崗岩Ａ	B-43C-39.42	Ⅱ・Ⅲ	18092　20254　他
	289	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ	ミガキ	浅黄橙色	風化礫	B-6	Ⅲ	11900　12283
	290	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	火山ガラス	B.C.D-41	Ⅱ・Ⅲ	21527　21685　他
	291	弥生時代	甕形土器	突帯文期	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	D-6	Ⅱ	6619　6867
	292	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	淡黄色	軽石	C-5　D-7	Ⅱ	7030　7709
第95図	293	弥生時代	甕形土器	突帯文期	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい黄色	花崗岩	B-40　C-41	Ⅱ	16871　17673　他
	294	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-39	—	—
	295	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ	ミガキ様のナデ	にぶい黄色	透明石英・黒色鉱物	C-40　D-39.41	Ⅱ・Ⅲ	20503　21248　他
	296	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ	丁寧なミガキ	暗赤褐色	風化礫	B-40	Ⅲ	20642　22164
	297	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ケズリ様のナデ	ケズリ様のナデ	にぶい黄色	火山ガラス	F-42	Ⅱ・Ⅲ	22696　22699
	298	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明赤褐色	風化礫	B-40	Ⅱ	20611
	299	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	B-40　C-39	Ⅱ・Ⅲ	16096　18112　他
	300	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	にぶい黄色	軽石	F-42	Ⅱ	22661
	301	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-39	Ⅱ	18191
	302	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	黒色	軽石	C-40	Ⅱ	2040
	303	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	にぶい黄色	火山ガラス	E-39	Ⅰ	52
第96図	304	弥生時代	甕形土器	突帯文期	丁寧なミガキ	ナデ	明褐色	風化礫	D.E-41	Ⅱ・Ⅲ	21945　22785
	305	弥生時代	甕形土器	突帯文期	丁寧なミガキ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	D-39	Ⅱ	19522
	306	弥生時代	甕形土器	突帯文期	丁寧なミガキ	ナデ	黒色	火山ガラス	E-40	Ⅲ	19030
	307	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	橙色	風化礫	B-40	Ⅱ	22071
	308	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	黒色	火山ガラス	D-39	Ⅱ	19261
	309	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	C-35	Ⅱ	14121
	310	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	淡黄色	風化礫	B-38	Ⅲ	17302
	311	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ケズリ様のナデ	にぶい黄色	風化礫	F-40	Ⅲ	22979
	312	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	軽石	C-42	Ⅱ	22416

表22　土器観察表⑥

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第96図	313	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	黒色	風化礫	E-41	Ⅱ	22595
	314	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	粗いナデ	黒色	透明石英・黒色鉱物	E-37	Ⅲ	15102
	315	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	風化礫	F-42	Ⅲ	22815
	316	弥生時代	甕形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	黒色	火山ガラス	C-41	Ⅲ	21770
	317	弥生時代	甕形土器	突帯文期	横方向のミガキ	—	暗赤褐色	火山ガラス	土坑5号	—	SH5-80
第97図	318	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	黒色	風化礫	C-20	Ⅱ	3458　4130
	319	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	粗いナデ	ケズリ様のナデ	暗赤褐色	風化礫	C-39	Ⅲ	—
	320	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	D-41	Ⅰ	—
	321	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	D-39	Ⅲ	18420
	322	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ	ミガキ	明褐色	風化礫	B-6	Ⅱ	12461
	323	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明赤褐色	風化礫	D-40	Ⅱ	19663
	324	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	浅黄橙色	火山ガラス	—	—	—
	325	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	火山ガラス	C-40	Ⅲ	18451
	326	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	F-42	Ⅲ	22540　22541
	327	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	B-41	Ⅲ	21645
	328	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ	ナデ	黒色	軽石	C-45	Ⅱ	18541
	329	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	軽石	E-42	Ⅱ	22449
	330	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ	ナデ	にぶい黄色	花崗岩	C-42	Ⅲ	21176
	331	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	黒色	軽石	F-40	Ⅲ	23049
	332	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	—	暗赤褐色	風化礫	E-39	Ⅱ	20003
	333	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	暗赤褐色	花崗岩	D-41	Ⅱ	21372
	334	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	—	にぶい黄色	軽石	C-39	Ⅲ	20453
	335	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	E-40	Ⅰ	—
	336	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	火山ガラス	D-41	Ⅲ	21870
	337	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ハケ目様	にぶい黄色	軽石	C-39	Ⅱ	16362　16754
第98図	338	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	火山ガラス	D-40	Ⅱ	19666
	339	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩	E-42	Ⅱ	22468
	340	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	—	—	火山ガラス	E-38	Ⅱ	18743
	341	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	C-38	Ⅲ	17211
	342	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	D-37	Ⅲ	16599
	343	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	—	—	橙色	風化礫	B-37	Ⅱ	16684
	344	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	淡黄色	火山ガラス	F-41	Ⅲ	22797
	345	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	明赤褐色	火山ガラス	B-40	Ⅲ	18327
	346	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	縦方向のミガキ	—	にぶい黄色	花崗岩	F-38	Ⅱ	19138
	347	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	暗赤褐色	火山ガラス	B-39	Ⅱ	14414　14423
	348	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	暗赤褐色	花崗岩	C-20	Ⅱ	6194
	349	弥生時代	鉢形土器	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	風化礫	E-20	Ⅲ	4411
	350	弥生時代	壺形土器	突帯文期	細かいミガキ	—	にぶい黄色	風化礫	B-4	Ⅰ	—
第99図	351	弥生時代	浅鉢形土器	突帯文期	ミガキ	ナデヨコ	浅黄橙色	花崗岩	D-19	Ⅲ	3664　4529　他
	352	弥生時代	浅鉢形土器	突帯文期	ミガキ	ナデヨコ	にぶい赤褐色	火山ガラス	C-8	Ⅱ・Ⅲ	7099　9849　他
	353	弥生時代	浅鉢形土器	突帯文期	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	黒色	火山ガラス	B-36	Ⅲ	15565
	354	弥生時代	浅鉢形土器	突帯文期	ミガキ	ミガキ	明褐色	火山ガラス	C.D-21	Ⅱ・Ⅲ	4837　6077
	355	弥生時代	浅鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	B-40	Ⅲ	17717
	356	弥生時代	浅鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	D-6	Ⅱ	7437
	357	弥生時代	浅鉢形土器	突帯文期	ナデ	ナデ	浅黄橙色	火山ガラス	C-21	Ⅲ	4892
第100図	358	弥生時代	脚台部	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	火山ガラス	C-39	Ⅲ	18120
	359	弥生時代	脚台部	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	C-41	Ⅲ	21742
	360	弥生時代	脚台部	突帯文期	ナデ	—	橙色	花崗岩	B-41	Ⅲ	21966
	361	弥生時代	脚台部	突帯文期	ナデ	—	にぶい黄色	風化礫	D-39	Ⅱ	19538
	362	弥生時代	脚台部	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	軽石	C-41	Ⅲ	21829
	363	弥生時代	脚台部	突帯文期	ナデ	ナデ	橙色	火山ガラス	E-42	Ⅲ	22495
	364	弥生時代	脚台部	突帯文期	ミガキ	ミガキ	明褐色	風化礫	F-41	Ⅲ	22957
	365	弥生時代	脚台部	突帯文期	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-40	Ⅲ	17860　20463

表23　土器観察表⑦

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第100図	366	弥生時代	脚台部	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	浅黄橙色	軽石	D-39	Ⅲ	18205
	367	弥生時代	脚台部	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩A	E-45	Ⅱ	22846
	368	弥生時代	脚台部	突帯文期	ミガキ様のナデ	ナデ	赤褐色	風化礫	C-40	Ⅱ	15692
	369	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	突帯文期	粗いナデ	丁寧なミガキ	黒色	透明石英・黒色鉱物	B-40　D-41	Ⅲ	14349　17695　他
	370	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	突帯文期	粗いナデ	丁寧なミガキ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C-8　D-5	Ⅱ	7080　7636
	371	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	突帯文期	ナデ	丁寧なミガキ	明赤褐色	火山ガラス	F-42	Ⅲ	2311
	372	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	粗いナデ	丁寧なミガキ	暗赤褐色	火山ガラス	土坑7号	—	土坑6P1
第101図	373	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	丁寧なミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	D-14	Ⅱ	426
	374	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	D-11	Ⅲ	—
	375	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	細かな網目	ミガキ	にぶい赤褐色	火山ガラス	B-10	Ⅲ	1641
	376	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	明赤褐色	火山ガラス	E-13	Ⅲ	1431
	377	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	D-12	—	—
	378	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	にぶい黄色	火山ガラス	C-8	Ⅲ	6264
	379	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	黒色	花崗岩	D-19	Ⅲ	5367
	380	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	にぶい赤褐色	火山ガラス	E-5	Ⅲ	—
	381	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	C-6	Ⅱ	6879
	382	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	明赤褐色	火山ガラス	D-12	—	—
	383	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	にぶい赤褐色	火山ガラス	C-18	Ⅱ	2803
	384	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	明褐色	花崗岩	D-11	Ⅲ	—
	385	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	にぶい赤褐色	火山ガラス	D-42	Ⅰ	—
	386	縄文晩期～弥生	中華鍋形土器	黒川式～突帯文期	網目	ミガキ	黒色	風化礫	D-19	Ⅱ	3634
第102図	387	弥生時代	壺形土器	夜臼式～板付Ⅰ式期	縦方向のミガキ	ミガキ	浅黄橙色	火山ガラス	C.D.E-6	Ⅱ・Ⅲ	6692　7420　他
	388	弥生時代	壺形土器	夜臼式～板付Ⅰ式期	横方向のミガキ	ナデ	浅黄橙色	火山ガラス	B-40　C-41D.E-39	Ⅱ・Ⅲ	21274　19580
	389	弥生時代	壺形土器	板付Ⅰ式期	横方向のミガキ	ハケ目	浅黄橙色	花崗岩	B-450-41.42.45　D.E-40　F-40	Ⅱ	13434　18658　他
第103図	390	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキヨコ	ミガキ	明褐色	小石	E-45	Ⅲ	19889
	391	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	横方向のミガキ	横方向のミガキ	明赤褐色	火山ガラス	C-41	Ⅱ	21812
	392	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	ナデ	橙色	花崗岩	D-39　F-38	Ⅱ・Ⅲ	19140
	393	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のヨコナデ	ミガキ様のヨコナデ	赤褐色	火山ガラス	E-38	Ⅱ	18748　19112
	394	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のヨコナデ	ミガキ様のヨコナデ	明赤褐色	花崗岩	C-40	Ⅲ	20498
	395	弥生時代	壺形土器	板付Ⅰ式期	ミガキヨコ	ミガキヨコ	にぶい黄色	花崗岩	C-40	Ⅱ	19205
	396	弥生時代	壺形土器	板付Ⅰ・Ⅱ式期	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄色	花崗岩	C-40　E-41	Ⅱ	20429　22593
	397	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	ナデ	浅黄橙色	花崗岩	D-42	Ⅲ	20694
	398	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキヨコ	ナデ	にぶい黄色	火山ガラス	E-44	Ⅱ	18799　18800
	399	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	—	にぶい黄色	火山ガラス	C-34	Ⅰ	—
	400	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のナデ	—	にぶい赤褐色	風化礫	C.D-39	Ⅲ	17063　19620
	401	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のナデ	ナデ	にぶい黄色	花崗岩	B-40.41	Ⅱ・Ⅲ	14744　21971
	402	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のナデ	ナデ	浅黄橙色	花崗岩	C-42　E-41	Ⅱ・Ⅲ	20169　22948
第104図	403	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ	ナデ	浅黄橙色	小石	E-36.39　F-38	Ⅱ・Ⅲ	17383　17384　他
	404	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	浅黄橙色	火山ガラス	C-17	Ⅲ	2816
	405	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	ナデ	明赤褐色	風化礫	D-39	Ⅱ	19259
	406	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩	C-39	Ⅲ	17820
	407	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	花崗岩	G-40	Ⅲ	23088
	408	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	花崗岩	土坑5号	—	SH10-21
	409	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	ナデ	明褐色	火山ガラス	C～E-40	Ⅰ	—
	410	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ	—	浅黄橙色	花崗岩・小石	土坑5号	—	SH5-91
	411	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	—	—	浅黄橙色	火山ガラス	C-20	Ⅱ	4177
	412	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	明赤褐色	花崗岩A	土坑5号	Ⅱ	SH10-36　41　他
	413	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のナデ	—	にぶい黄色	花崗岩A	D-41	Ⅱ	21380
	414	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	丁寧なミガキ	ナデ	明赤褐色	花崗岩	C-6	Ⅲ	13072　13073
	415	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩	C-6	Ⅱ	6738
第105図	416	弥生時代	壺形土器	夜臼式～板付Ⅰ式期	ミガキタテ	ナデ	浅黄橙色	火山ガラス	C-8	Ⅲ	9817
	417	弥生時代	壺形土器	板付Ⅰ式期	ナデ	ナデ	浅黄橙色	火山ガラス	C-43	Ⅰ	—
	418	弥生時代	壺形土器	板付Ⅰ式期	ミガキタテ	ナデ	浅黄橙色	火山ガラス	6T	Ⅲ	2368

表24　土器観察表⑧

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第105図	419	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ	ナデ	黒色	火山ガラス	C-42	Ⅲ	—
	420	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ	ナデ	黒色	風化礫	D-39	Ⅲ	21243
	421	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ	—	にぶい黄色	風化礫	D-39	Ⅰ	—
	422	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ	ナデ	明褐色	火山ガラス	C-42	Ⅲ	—
	423	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	F-41	Ⅱ	22820
	424	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	赤褐色	花崗岩	B-42	Ⅱ	20911
	425	弥生時代	壺形土器	板付Ⅱ式期	ミガキ	ミガキ	明褐色	風化礫	D-40	Ⅱ	18895
第149図	812	弥生時代	壺形土器	前期末～中期初頭	ハケ目・ナデ	—	明赤褐色	花崗岩	C-11	Ⅱ・Ⅲ	1162　1163　他
	813	弥生時代	壺形土器	前期末～中期初頭	ハケ目・ナデ	—	明赤褐色	花崗岩	C-11	Ⅱ	1161　1165　他
	814	弥生時代	壺形土器	前期末～中期初頭	—	—	にぶい赤褐色	風化礫	D-6	Ⅱ	6624
	815	弥生時代	壺形土器	前期末～中期初頭	ナデ	—	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	E-6	Ⅱ	8648
	816	弥生時代	壺形土器	前期末～中期初頭	ナデ	ナデ	にぶい黄色	透明石英	D-8	Ⅱ	7181
	817	弥生時代	壺形土器	前期末～中期初頭	ナデ	ナデ	橙色	風化礫	D-7	Ⅱ	6994　7029　他
第150図	818	弥生時代	壺形土器	入来Ⅰ式土器？	ミガキ様のナデ	—	にぶい赤褐色	花崗岩	C.D-5.6D.E-7　D-8	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	6983-2　3　他
	819	弥生時代	壺形土器	入来Ⅰ・Ⅱ式土器	ナデ	ナデ	赤褐色	花崗岩Ａ	B-5　C-6	—	2078　6851　他
	820	弥生時代	壺形土器	入来Ⅰ式土器？	ハケ目・ミガキ	ナデ	橙色	風化礫	土坑墓1号	—	—
	821	弥生時代	壺形土器	入来Ⅰ式土器？	ミガキ・ヨコナデ	ミガキ・ヨコナデ	浅黄橙色	風化礫	C-3	Ⅱ	7941
	822	弥生時代	壺形土器	瀬戸内系土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	C-43.45	Ⅰ・Ⅱ	—
	823	弥生時代	壺形土器	瀬戸内系土器	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	C.G-46	Ⅱ・Ⅲ	13926　18680　他
第151図	824	弥生時代	壺形土器	入来Ⅰ式土器	ミガキ様のナデ	—	明赤褐色	花崗岩Ａ	C.D-6　D.E-7	Ⅱ・Ⅲ	6752　7230　他
	825	弥生時代	壺形土器	中期初頭	ナデ	ナデ	にぶい黄色	花崗岩Ａ	D-6	Ⅱ	7417
	826	弥生時代	壺形土器	中期初頭	—	—	明褐色	花崗岩Ａ	—	—	—
	827	弥生時代	壺形土器	中期初頭	ナデ	ナデ	淡黄色	花崗岩Ａ	C-6	Ⅱ	7321
	828	弥生時代	脚台付壺形土器	入来Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	—	にぶい赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-6	Ⅱ	—
	829	弥生時代	脚台付壺形土器	入来Ⅱ式土器	２条突帯	—	にぶい赤褐色	透明石英・黒色鉱物	D-6	Ⅱ	6641　7535　他
第152図	830	弥生時代	壺形土器	前期末～中期初頭	縦方向のハケ目	—	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	D-11	Ⅲ	1495
	831	弥生時代	壺形土器	中期初頭	—	—	橙色	風化礫	C-41	Ⅱ	21688
	832	弥生時代	壺形土器	中期初頭	縦方向のミガキ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	B-42C.D-39	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	20897　21084
	833	弥生時代	壺形土器	中期初頭	縦方向のハケ目	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	E-41	Ⅱ	22736
	834	弥生時代	壺形土器	中期中半	ナデタテ	ナデヨコ	明赤褐色	花崗岩Ａ	2T	—	—
	835	弥生時代	壺形土器	山ノ口式土器	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	F-42	Ⅰ	—
	836	弥生時代	壺形土器	中期後半	—	—	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	B-40	Ⅰ	—
	837	弥生時代	壺形土器	須玖式系土器	ミガキ様のナデ	—	暗赤褐色	火山ガラス	C-40	Ⅲ	18299
	838	弥生時代	壺形土器	中期中半	ミガキ様のナデ	—	にぶい黄色	火山ガラス	D-44	Ⅱ	18816
第153図	839	弥生時代	甕形土器	入来Ⅰ式土器	板状工具によるハケ目	ナデ	暗赤褐色	花崗岩	C-40	Ⅱ・Ⅲ	18284　18411　他
	840	弥生時代	甕形土器	入来Ⅰ式土器	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	D-40	Ⅱ・Ⅲ	20281　21260
	841	弥生時代	甕形土器	東九州系土器	ミガキ様のナデ	ナデ	明褐色	花崗岩	D.F-39	Ⅱ	18978　19455
	842	弥生時代	甕形土器	東九州系土器	ナデ	—	暗赤褐色	花崗岩Ａ	E-40	Ⅱ	19357
	843	弥生時代	甕形土器	東九州系土器	ナデ	—	にぶい赤褐色	火山ガラス	D-40	Ⅱ	20288
	844	弥生時代	甕形土器	東九州系土器	—	—	黒色	小石	C-45	Ⅲ	18571
	845	弥生時代	甕形土器	中期初頭	縦方向のハケ目	ナデ	明褐色	花崗岩	B-47	Ⅲ	18624
	846	弥生時代	甕形土器	中期初頭	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩	D-5	Ⅱ	7566
	847	弥生時代	甕形土器	中期初頭	—	—	明褐色	花崗岩	B-8　E-7	Ⅱ・Ⅲ	7211　7222　他
	848	弥生時代	甕形土器	中期初頭～前半	—	—	明赤褐色	火山ガラス	C.D.E-38.40.41	Ⅱ	17873　15235　他
第154図	849	弥生時代	甕形土器	中期初頭～前半	ヨコナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	B-42C.D-40	Ⅰ・Ⅱ	19709　20240　他
	850	弥生時代	甕形土器	中期初頭～前半	ヨコナデ	ナデ	にぶい黄色	花崗岩Ａ	D-40.41E-42	Ⅱ・Ⅲ	21528　22906　他
	851	弥生時代	甕形土器	入来Ⅰ式土器	ナデ	ナデ	明褐色	花崗岩Ａ	E-36	Ⅱ	17376
	852	弥生時代	甕形土器	入来Ⅰ式土器	板状工具によるハケ目	板状工具によるハケ目	明赤褐色	花崗岩Ａ	C-5.6	Ⅱ	6880-60　8526-12　他
	853	弥生時代	甕形土器	入来Ⅰ式土器	板状工具によるハケ目	ナデ	明褐色	花崗岩Ａ	C.D-6	Ⅱ	6646　6717　他
	854	弥生時代	甕形土器	入来Ⅰ式土器	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	B-40	Ⅲ	20558
	855	弥生時代	甕形土器	入来Ⅰ式土器	ヨコナデ	ハケ目	暗赤褐色	花崗岩Ａ	—	—	—
	856	弥生時代	甕形土器	前期末～中期初頭	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	C-6	Ⅱ	6811　7353
	857	弥生時代	甕形土器	前期末～中期初頭	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩	土坑10号	—	9号土坑

表25　土器観察表⑨

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第155図	858	弥生時代	甕形土器	入来Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩	C-6　D-5.6	Ⅱ	6770　7347　他
	859	弥生時代	甕形土器	入来Ⅱ式土器	ナデ	—	明赤褐色	花崗岩Ａ	C-6	Ⅱ	6712　6806　他
	860	弥生時代	甕形土器	入来Ⅱ式土器	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	土坑墓1号	—	—
	861	弥生時代	甕形土器	入来Ⅱ式土器	ハケ目	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	土坑1・2号	Ⅰ・Ⅱ	6880-20　44　他
第156図	862	弥生時代	甕形土器	入来Ⅱ式土器	縦方向のミガキ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	土坑3号	—	SH3-P1　P2　他
	863	弥生時代	甕形土器	中期中半	縦方向のハケ目	ハケ目	明赤褐色	花崗岩Ａ	SH10	Ⅱ・Ⅲ	23023　20041　他
	864	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	C-42	Ⅱ	21148
	865	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	D-40	Ⅱ	19280　19763
第157図	866	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	D.E-39	Ⅱ・Ⅲ	19844　20436
	867	弥生時代	甕形土器	中期前半	ナデ	ナデ	橙色	花崗岩Ａ	D-41	Ⅱ・Ⅲ	22248　22275　他
	868	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	橙色	花崗岩Ａ	D-39.40	Ⅱ・Ⅲ	19273　19274　他
	869	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	土坑4号	Ⅱ	1　77　他
	870	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	暗赤褐色	花崗岩Ａ	G-42	Ⅰ	—
	871	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	E.F-40	Ⅰ・Ⅱ	19324
第158図	872	弥生時代	甕形土器	中期後半	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	C-42	Ⅱ	20110　20127
	873	弥生時代	甕形土器	中期後半	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	D.E-44	Ⅰ・Ⅱ	—
	874	弥生時代	甕形土器	後期前半	ナデ	ナデ	にぶい黄色	花崗岩Ａ	土坑5号	Ⅱ・Ⅲ	—
	875	弥生時代	甕形土器	後期前半	ナデ	ナデ	にぶい黄色	風化礫	C-45	Ⅰ	—
	876	弥生時代	甕形土器	前期末～中期初頭	ナデ	ナデ	明褐色	風化礫	D-40	Ⅱ	19662
	877	弥生時代	甕形土器	中期初頭	ナデ	—	明赤褐色	花崗岩Ａ	D-39	Ⅲ	19629
	878	弥生時代	甕形土器	中期初頭	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	D-7	Ⅱ	8152
	879	弥生時代	甕形土器	中期前半	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	C-6　D-5	Ⅱ	6818　7571　他
	880	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	C-8	Ⅱ	9929
	881	弥生時代	甕形土器	中期中半	ハケ目状	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	C-6	Ⅱ	6830　7304
	882	弥生時代	甕形土器	中期中半	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	土坑4号	—	SH4-6
第159図	883	弥生時代	広口壺形土器	須玖Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	赤褐色	花崗岩	C-45	Ⅲ	18482
	884	弥生時代	広口壺形土器	須玖Ⅱ式土器	ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	赤褐色	花崗岩	D.E-41	Ⅰ・Ⅱ	22632
	885	弥生時代	甕形土器	前山Ⅱ式土器	ハケ目様	ナデ	淡黄色	風化礫	E-38	Ⅰ	—
	886	弥生時代	紡錘車	—	ケズリ様のナデ	ケズリ様のナデ	浅黄橙色	火山ガラス	土坑5号	—	43
	887	弥生時代	紡錘車	—	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	淡黄色	風化礫	E-40	Ⅱ	19985
第163図	895	古墳時代	須恵器坏蓋	—	ヘラケズリ	—	青灰色	—	B-44　1号住居	Ⅱ	①　20094
	896	古墳時代	土師器坏蓋	—	—	—	橙色	風化礫	1号住居	Ⅱ	—
	897	古墳時代	広口壺形土器	—	ハケ目のちナデ	—	橙色	風化礫	1号住居	—	①
	898	古墳時代	壺形土器	—	ハケ目のちナデ	—	橙色	風化礫	1号住居	—	11　12　他
	899	古墳時代	壺形土器	—	ハケ目のちナデ	—	橙色	風化礫	1号住居	—	①
	900	古墳時代	坩形土器	—	ヘラミガキ	—	明褐色	—	1号住居	—	①　③
	901	古墳時代	高坏形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい赤褐色	風化礫	1号住居	—	—
	902	古墳時代	高坏形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	風化礫	1号住居	—	1　2　他
	903	古墳時代	丸椀形土器	—	—	—	にぶい赤褐色	花崗岩Ａ	1号住居	—	③　27　他
	904	古墳時代	甕形土器	—	—	—	赤褐色	風化礫	1号住居	Ⅲ	1　2
第165図	905	古墳時代	甕形土器	—	ナデ	ナデ	赤褐色	風化礫	2号住居	—	—
第167図	906	古墳時代	壺形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	風化礫	D-44　3号住居	—	75　77　他
	907	古墳時代	壺形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	透明石英	3号住居	Ⅲ	24　29　他
	908	古墳時代	丸椀形土器	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	花崗岩Ａ	3号住居	Ⅱ	47　48
	909	古墳時代	高坏形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙色	風化礫	3号住居	—	22　28　他
	910	古墳時代	高坏形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙色	風化礫	3号住居	Ⅱ	55　56　他
	911	古墳時代	高坏形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	火山ガラス	3号住居	—	79
第169図	912	古墳時代	壺形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡黄色	赤色礫	B-47　4号住居	—	—
	913	古墳時代	壺形土器	—	ヘラミガキ	ナデ	浅黄橙色	赤色礫	4号住居	—	92
	914	古墳時代	壺形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙色	赤色礫	4号住居	他	埋土２　③　他
	915	古墳時代	壺形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙色	赤色礫	4号住居	Ⅱ・Ⅲ	65　66　他
	916	古墳時代	坩形土器	—	ナデ・ヘラミガキ	ナデ	浅黄橙色	火山ガラス	4号住居	—	—
	917	古墳時代	坩形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡黄色	黒色鉱物	4号住居	—	125　130　他

表26　土器観察表⑩

挿図番号	遺物番号	時代	器種	分類	調整・文様		色調	胎土	出土区・遺構	層位	取上げ番号
					外面	内面					
第169図	918	古墳時代	小型壺形土器	—	ヘラミガキ	ナデ	浅黄橙色	赤色礫	4号住居	Ⅲ	埋土２　３　他
第170図	919	古墳時代	甕形土器	—	ナデ・ヘラミガキ	ナデ	にぶい赤褐色	火山ガラス	4号住居	Ⅱ	170　171　他
	920	古墳時代	甕形土器	—	ヘラミガキ	ナデ	明褐色	火山ガラス	4号住居	—	44　45
	921	古墳時代	広口壺形土器	—	ナデ	ナデ	浅黄橙色	風化礫	4号住居	—	234　235　他
	922	古墳時代	甕形土器	—	ヘラミガキ	ハケ目	淡黄色	風化礫	4号住居	—	62　157　他
	923	古墳時代	甕形土器	—	ヘラミガキ	ハケ目	にぶい赤褐色	風化礫	4号住居	—	52　64　他
	924	古墳時代	甕形土器	—	ヘラミガキ	ハケ目	淡黄色	風化礫	4号住居	—	80　167　他
第171図	925	古墳時代	甕形土器	—	ハケ目	ハケ目	浅黄橙色	火山ガラス	4号住居	—	185　216　他
	926	古墳時代	甕形土器	—	ヘラミガキ	ハケ目・ナデ	にぶい赤褐色	小石	4号住居	—	③　10　他
	927	古墳時代	鉢形or甕形土器	—	ヘラミガキ	ナデ	明褐色	火山ガラス	4号住居	Ⅲ	184　215
	928	古墳時代	高坏形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙色	赤色礫	4号住居	Ⅱ	115　116　他
	929	古墳時代	高坏形土器	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	赤色礫	4号住居	Ⅲ	110　122　他
	930	古墳時代	高坏形土器	—	—	—	浅黄橙色	火山ガラス	4号住居	Ⅳ	③　36　他
	931	古墳時代	高坏形土器	—	ナデ	—	橙色	赤色礫	4号住居	—	3　13　他
第172図	932	古墳時代	高坏形土器	—	ナデ	—	橙色	赤色礫	4号住居	—	84　89　他
	933	古墳時代	高坏形土器	—	ナデ	ナデ	明褐色	赤色礫	4号住居	—	埋土2　③　他
第173図	934	古墳時代	甕形土器	—	—	—	浅黄橙色	赤色礫	C-20	Ⅱ・Ⅱ下Ⅲ	6207-4　5　他
第175図	935	古墳時代	須恵器	—	—	—	青灰色	—	E-12	Ⅱ	1075
	936	古墳時代	小型壺形土器	—	ヘラミガキ	—	明褐色	風化礫	B-44	Ⅲ	—
	937	古墳時代	椀形土器	—	—	—	赤褐色	花崗岩	C-46	—	土器埋納ピットNo.1
	938	古墳時代	壺形土器	—	—	—	にぶい赤褐色	小石	D-41	Ⅲ	22122
	939	古墳時代	甕形土器	—	ナデ	—	淡黄色	風化礫	D-45	Ⅱ	18593　18594
	940	古墳時代	甕形土器	—	—	—	淡黄色	風化礫	C.D-13C-20	Ⅱ・Ⅱ下Ⅲ	6207-2　3　他
第177図	947	古代	土師器甕形土器	—	ミガキ様のナデ	板目状のヨコナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-18	Ⅱ	3920
	948	古代	土師器甕形土器	—	ナデ	ケズリ	—	風化礫	—	—	—
	949	古代	土師器甕形土器	—	ナデ・ハケ目	ケズリ	浅黄橙色	火山ガラス	E-12	Ⅱ	198　587
	950	古代	土師器坏形土器	—	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色	火山ガラス	E-12	Ⅱ	1074
	951	古代	土師器坏形土器	—	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色	火山ガラス	E-12	Ⅱ	1450
	952	古代	土師器蓋形土器	—	回転ケズリ	丁寧なミガキ	浅黄橙色	火山ガラス	E-12	Ⅱ	602　1073　他
	953	古代	甑？	—	ナデ	ナデ	にぶい黄色	赤色粒子	E-12	Ⅱ	199　203　他
	954	古代	鞴羽口	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-42	Ⅱ	20811
	955	古代	鞴羽口	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-42	Ⅱ	20810
	956	古代	焼塩壺	—	指おさえ	平織り圧痕	橙色	風化礫	E-12	Ⅱ	174
	957	古代	焼塩壺	—	指おさえ	平織り圧痕	明赤褐色	風化礫	C-41　２T	Ⅱ	21672
	958	古代	焼塩壺	—	指おさえ	平織り圧痕	にぶい赤褐色	赤色礫	E-12	Ⅱ	205
	959	古代	焼塩壺	—	指おさえ	平織り圧痕	橙色	赤色礫	E-12	Ⅱ	170
	960	古代	焼塩壺	—	指おさえ	平織り圧痕	橙色	赤色礫	D-12	Ⅱ	211
第184図	961	縄文or弥生	不明	—	ナデ	ナデ	黒色	小石	C-47	Ⅱ	16274
	962	縄文時代後期	深鉢形土器	—	ナデ	貝殻条痕	明赤褐色	花崗岩Ａ	D-38	Ⅲ	17175
	963	縄文or弥生	深鉢or甕	—	横方向のケズリ様のナデ	ナデ	暗赤褐色	透明石英・黒色鉱物	B-40	Ⅱ	22295
	964	縄文or弥生	—	—	ナデ	—	淡黄色	火山ガラス	E-7	Ⅱ	7202
	965	縄文or弥生	—	—	ナデ	ナデ	淡黄色	火山ガラス	D-39	Ⅱ	—
	966	縄文or弥生	深鉢or甕	—	ケズリ	ナデ	明褐色	火山ガラス	B-43.45	Ⅱ	13515　13516　他
	967	縄文or古墳	深鉢or甕	—	ケズリ	ナデ	にぶい赤褐色	透明石英・黒色鉱物	C-19	Ⅱ	3055
	968	縄文or古墳	深鉢or甕	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	F-42	Ⅱ	22693
	969	縄文or古墳	深鉢or甕	—	ケズリ	ナデ	にぶい赤褐色	風化礫	C-19	Ⅱ	3041
	970	江戸時代	龍門司焼茶家	—	—	—	褐釉	—	—	—	—
	971	明治・大正・昭和	陶器盃	—	—	—	—	—	C-43	Ⅰ	—

第Ⅳ章　自然科学分析

稲荷迫遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

鹿児島県稲荷迫遺跡の測定対象試料は，F-40区Ⅲ層出土土器付着炭化物（1：IAAA-110972）（No.279），1号住居内出土土器付着炭化物（2：IAAA-110973）（No.898）の合計2点である（表1）。土器はいずれも刻目突帯文土器と見なされている。

2　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。
（2）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid　Alkali　Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」，1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
（3）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。
（6）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

3　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸(HOxⅡ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

（1）δ^{13}C　は，試料炭素の ^{13}C　濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である(表 1)。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。
（2）^{14}C 年代（Libby　Age：yrBP）は，過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver　and　Polach　1977)。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に，補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は，下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は，試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
（3）pMC　(percent　Modern　Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し，pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため，補正した値を表 1 に，補正していない値を参考値として表 2 に示した。
（4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1 標準偏差（1 σ＝68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C 補正を行い，下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09 データベース（Reimer　et　al. 2009）を用い，OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey　2009)を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は，^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal　BC/AD」（または「cal　BP」）という単位で表される。

5　測定結果

試料の^{14}C年代は，F-40区Ⅲ層出土土器付着炭化物1（No.279）が2470±20yrBP，1号住居内出土土器付着炭化物2（No.898）が1600±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，1が750 ～ 519cal　BC，2が421 ～ 532cal　ADの間に各々3つの範囲で示される。1の測定結果は刻目突帯文土器の年代値として矛盾がないと考えられるが，2は明らかに新しい値を示した。

試料の炭素含有率はいずれも60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver　M.　and　Polach　H.A.　1977　Discussion：Reporting　of　^{14}C　data，Radiocarbon　19（3），355-363

Bronk　Ramsey　C.　2009　Bayesian　analysis　of　radiocarbon　dates，Radiocarbon　51（1），337-360

Reimer，P.J.　et　al.　2009　IntCal09　and　Marine09　radiocarbon　age　calibration　curves，0-50,000　years　cal　BP，Radiocarbon　51（4），1111-1150

表１

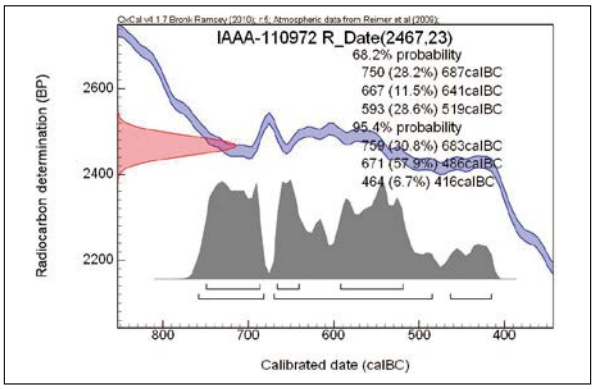
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-110972	**1**	**F-40区 Ⅲ層 No.22971 遺物 No.279**	土器付着炭化物	**AaA**	**-26.35 ± 0.67**	**2,470 ± 20**	**73.56 ± 0.21**
IAAA-110973	**2**	**B-44区 1号住居内出土 遺物 No.898**	土器付着炭化物	**AaA**	**-24.96 ± 0.38**	**1,600 ± 20**	**81.95 ± 0.22**

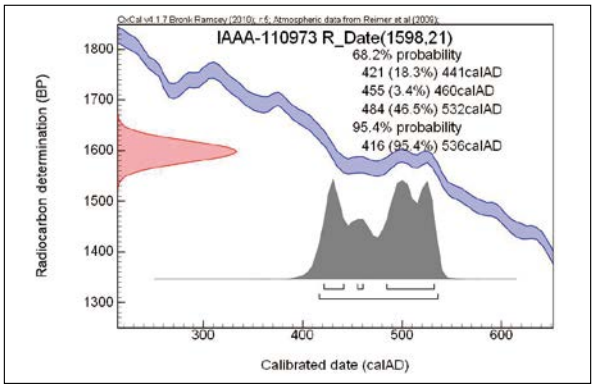
［#4555］

表２

測定番号	δ ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-110972	**2,490 ± 20**	**73.35 ± 0.18**	**2,467 ± 23**	**750calBC - 687calBC（28.2%）** **667calBC - 641calBC（11.5%）** **593calBC - 519calBC（28.6%）**	**759calBC - 683calBC（30.8%）** **671calBC - 486calBC（57.9%）** **464calBC - 416calBC（ 6.7%）**
IAAA-110973	**1,600 ± 20**	**81.96 ± 0.21**	**1,598 ± 21**	**421calAD - 441calAD（18.3%）** **455calAD - 460calAD（ 3.4%）** **484calAD - 532calAD（46.5%）**	**416calAD - 536calAD（95.4%）**

［参考値］





［参考］暦年較正年代グラフ

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・尾嵜大真・丹生越子・廣田正史
山形秀樹・小林紘一・Zaur　Lomtatidze
Ineza　Jorjoliani・菊地有希子

1. はじめに

鹿児島県志布志市安楽に位置する稲荷迫遺跡より検出された炭化物について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報，調製データは表1のとおりである。試料は，土器付着炭化物4点と炭化材2点の計6点である。土器付着炭化物の試料は，E-21区のⅡ層から出土した縄文時代晩期～弥生時代前期の一条突帯文土器の胴部上半外面より採取された試料No.1（PLD-19131），C-20区のⅡ層から出土した縄文時代晩期～弥生時代前期の孔列文のある二条刻目突帯文土器の深鉢の胴部下半外面より採取された試料No.2（PLD-19132），縄文時代後期～晩期の中岳Ⅱ式土器の深鉢の胴部下半外面より採取された試料No.3（PLD-19133），C-40区のⅡ層より出土した弥生時代前期末～中期の入来Ⅰ式の甕形土器の胴部上半外面より採取された試料No.4（PLD-19134）の4点である。また，試料No.5（PLD-19135）は，４号住居の床付近で出土した炭化材で，測定したのは最外年輪ではないが樹皮に近い部分。試料No.6（PLD-19136）は，３号住居の床付近から出土した最外年輪以外の部位不明の炭化材である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-19131	試料 No.1 調査区：E-21 層位：Ⅱ層 遺物 No.248	試料の種類：土器付着炭化物 器種：一条突帯文土器 部位：胴部上半外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.5N, 塩酸：1.2N）
PLD-19132	試料 No.2 調査区：C-20 層位：Ⅱ層 遺物 No.261	試料の種類：土器付着炭化物 器種：孔列文のある二条刻目突帯文土器　深鉢 部位：胴部下半外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.5N, 塩酸：1.2N）
PLD-19133	試料 No.3 遺物 No.156	試料の種類：土器付着炭化物 器種：中岳Ⅱ式土器　深鉢 部位：胴部下半外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.5N, 塩酸：1.2N）
PLD-19134	試料 No.4 調査区：C-40 層位：Ⅱ層 遺物 No.839	試料の種類：土器付着炭化物 器種：入来Ⅰ式　甕形土器 部位：胴部上半外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.2N, 塩酸：1.2N）
PLD-19135	試料 No.5 遺構：４号住居 層位：床付近	試料の種類：炭化材（環孔材） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分（辺材） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-19136	試料 No.6 遺構：３号住居 層位：床付近	試料の種類：炭化材（散孔材） 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 -2 年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

表2に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を，図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や

地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお，1 σ 暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 2　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-19131 試料 No.1 遺物 No.248	-25.57 ± 0.14	2505 ± 22	2505 ± 20	765BC（10.1%）747BC 688BC（10.0%）665BC 646BC（34.0%）588BC 582BC（14.1%）554BC	777BC（20.5%）720BC 695BC（74.9%）540BC
PLD-19132 試料 No.2 遺物 No.261	26.40 ± 0.14	2499 ± 21	2500 ± 20	761BC（ 8.5%）745BC 688BC（ 2.9%）683BC 671BC（ 3.4%）665BC 647BC（53.4%）552BC	771BC（20.7%）706BC 695BC（74.7%）539BC
PLD-19133 試料 No.3 遺物 No.156	-25.71 ± 0.14	3346 ± 22	3345 ± 20	1682BC（68.2%）1615BC	1726BC（ 0.8%）1721BC 1691BC（79.5%）1604BC 1588BC（15.1%）1534BC
PLD-19134 試料 No.4 遺物 No.839	-25.51 ± 0.14	2194 ± 21	2195 ± 20	354BC（48.1%）291BC 231BC（20.1%）203BC	362BC（95.4%）196BC
PLD-19135 試料 No.5 4 号住居	-25.36 ± 0.15	1712 ± 21	1710 ± 20	261AD（18.3%）281AD 325AD（49.9%）382AD	256AD（95.4%）396AD
PLD-19136 試料 No.6 3 号住居	-26.08 ± 0.14	1592 ± 20	1590 ± 20	426AD（14.5%）442AD 454AD（ 4.9%）461AD 484AD（48.7%）533AD	421AD（95.4%）536AD

4. 考察

各試料の暦年較正結果のうち，2 σ暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して結果を整理する。

縄文時代晩期～弥生時代前期に位置づけられる一条突帯文土器の胴部上半外面に付着した炭化物（試料 No.1：PLD-19131）は，777-720 cal BC（20.5％）および 695-540 cal BC（74.9%）の暦年代範囲を示した。また，同じく突帯文系土器である，孔列文のある二条刻目突帯文土器の深鉢胴部下半の外面に付着した炭化物（試料 No.2：PLD-19132）は，771-706 cal BC（20.7%）および 695-539 cal BC（74.7%）の暦年代範囲を示した。今回得られた暦年代範囲は，これまでの九州南部の突帯文系土器付着炭化物の測定事例（藤尾, 2009）で，弥生時代前期初頭の夜臼Ⅱｂ式に併行する試料（曽於市薬師堂の古墳遺跡，上中段遺跡など）の年代と整合的である。

縄文時代後期～晩期に位置づけられる中岳Ⅱ式土器の深鉢胴部下半の外面に付着した炭化物（試料 No.3：PLD-19133)は，1726-1721 cal BC(0.8%)，1691-1604 cal BC（79.5%)，1588-1534 cal BC（15.1%）の暦年代範囲を示した。これは，九州の磨消縄文系土器の測定事例（水ノ江，2008）と比較すると，縄文時代後期後葉の例に近い年代を示している。

弥生時代前期末～中期に位置づけられる入来Ⅰ式の甕形土器の胴部上半外面に付着した炭化物（試料No.4：PLD-19134）は，362-196 cal BC（95.4%）の暦年代範囲を示した。これは，藤尾（2009）の編年表を参照すると九州北部の弥生時代前期末～中期前半に相当し，おおむね整合的であるといえる。

4 号住居の床付近から出土した炭化材（試料No.5：PLD-19135）は，256-396 cal AD（95.4％）の暦年代範囲を示した。これは，3世紀中頃～ 4世紀末で古墳時代前期～中期に相当する。

3 号住居の床付近から出土した炭化材（試料No.6：PLD-19136）は，421-536 cal AD（95.4％）の暦年代範囲を示した。これは，5世紀前半～ 6世紀前半で古墳時代中期～後期に相当する。ただし木材の場合，最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが，内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料No.6は最外

年輪を欠く部位不明の炭化材であり，年代測定の結果が古木効果の影響を受けている可能性，すなわち木材が実際に枯死・伐採された年代よりも古い年代を示している可能性を考慮する必要がある。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1），337-360.

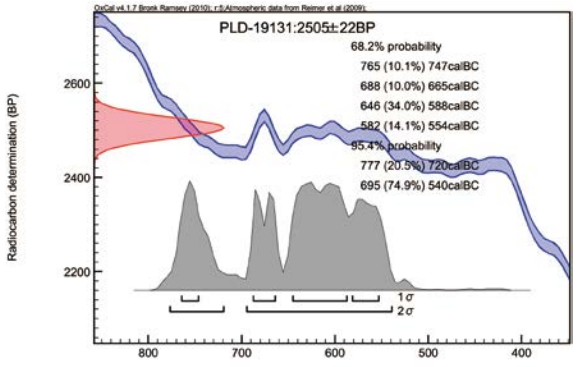
藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代．西本豊弘編「弥生農耕のはじまりとその年代」：9-54.

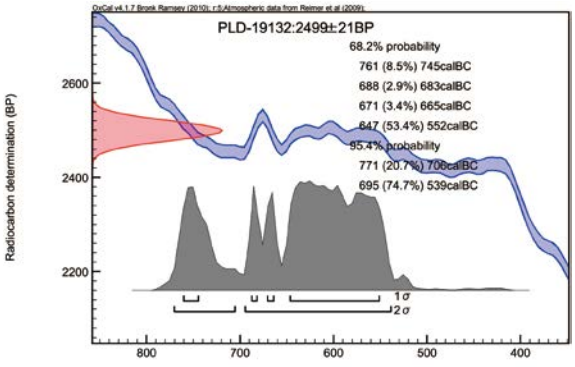
宮地聡一郎（2008）凸帯文系土器（九州地方）．小林達雄編「総覧縄文土器」：806-813.

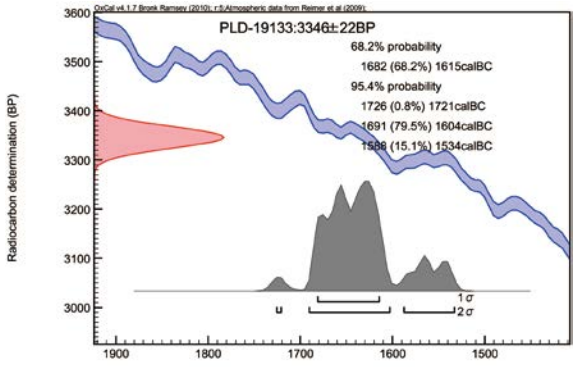
水ノ江和同（2008）九州磨消縄文系土器．小林達雄編「総覧縄文土器」：666-673.

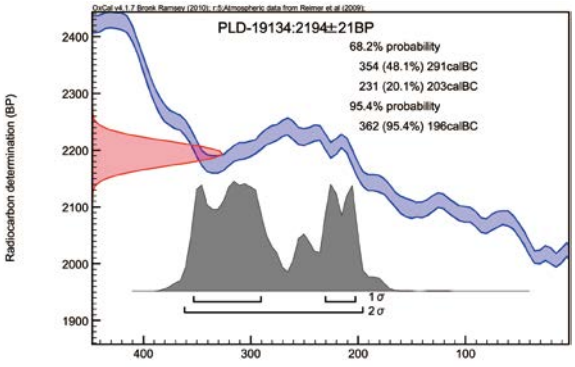
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会．

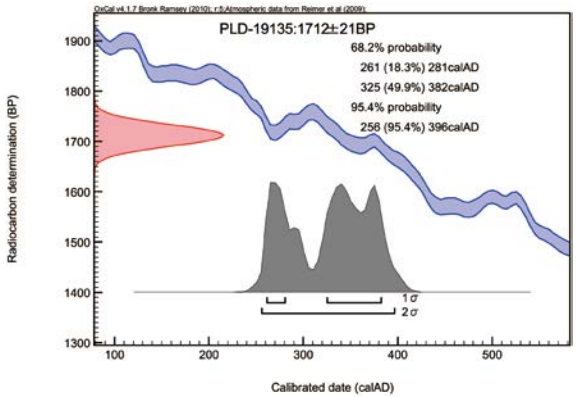
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

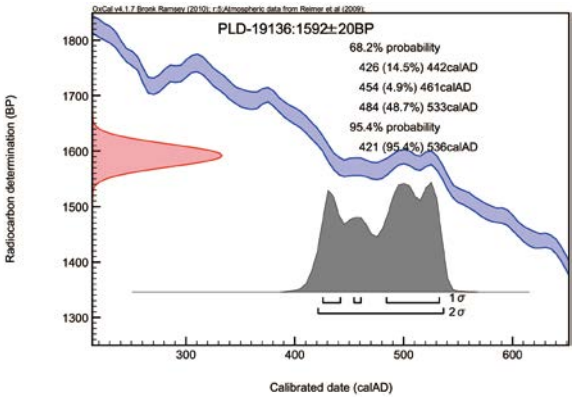












稲荷迫遺跡の土器付着赤色物について

鹿児島県立　埋蔵文化財センター
南の縄文調査室　中村幸一郎

稲荷迫遺跡から出土した土器に付着した赤色物について，分析を行った。

Ⅰ　赤色物の分析

1　資料（土器付着物）

稲荷迫遺跡　No.199, No.289, No.322, No.338，No.347, No.351-1, No.351-2, No.354, No.356, No.357, No.387, No.388, No.389, No.399, No.404, No.416, No.417, No.418, No.883, No.884　計20点

2　観察・分析方法

（1）形状観察

観察用の試料を採取し，走査型電子顕微鏡（日本電子製　JSM-5300LV）による 1000 ～ 3500 倍の観察を行った。

（2）成分分析

エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000，X 線管球ターゲット：ロジウム，X 線照射径 100 μm）を使用して，非破壊で測定した。分析条件は次のとおりである。

X 線照射径：100 μm
測定時間：200 s
X 線管電圧：15kV
電流：1000/880 μ A
パルス処理時間：P3
X 線フィルタ：なし
試料セル：なし
定量補正法：スタンダードレス

3　結果

（1）形状観察

稲荷迫No. 322 に，直径 1 μmあまりの棒状の粒子が見られるが，これはパイプ状粒子と判断できる。そのほかの試料（No. 338，No. 347，No. 404，No. 418）からもパイプ状粒子が観察できた。

その他の試料については，いずれも鉱物結晶が観察できた。

（2）蛍光 X 線分析

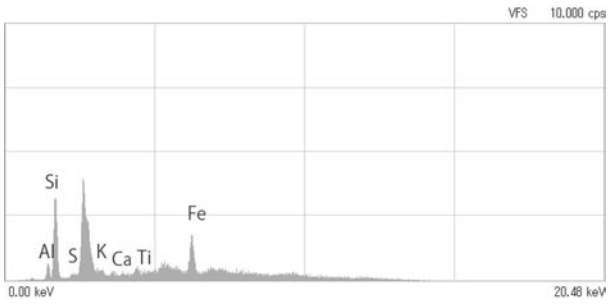
分析の結果，いずれも強い鉄（Fe）のピークが得られた。（以下図参照）

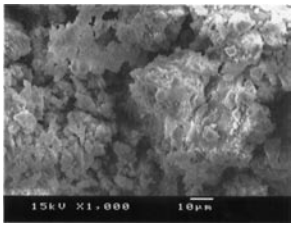
鉄（Fe）以外にも，土壌成分のケイ素（Si）やカリウム（K）などのピークが認められた。それらを考慮して，比較や分析結果の検討，および電子顕微鏡観察の結果から赤色顔料が認められた。

結晶状態から，ほとんどが鉱物由来のベンガラであると考えられる。

しかし，稲荷迫遺跡No. 322，No. 338，No. 347，No. 404，No. 418 の 5 点については，パイプ状ベンガラと考えられる。一方で，鉱物由来のベンガラの場合，特に土器付着物はパイプ状の形状が見えにくい傾向があるので検討を要する。

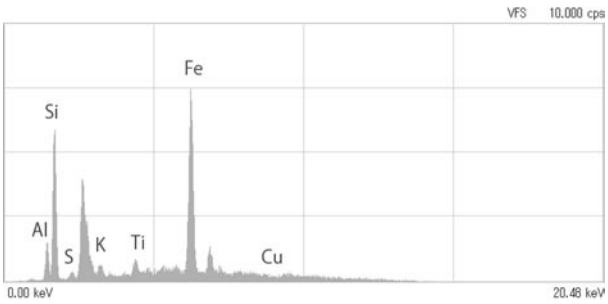
稲荷迫遺跡　No. 199

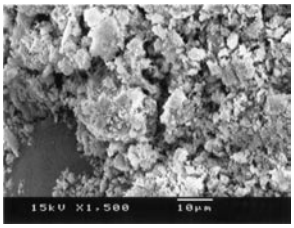




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	20.06	11.29
14Si　けい素	K	66.77	49.48
16S　硫黄	K	0.94	1.48
19K　カリウム	K	2.60	4.23
20K　カルシウム	K	1.22	2.52
22Ti　チタン	K	1.27	11.09
26Fe　鉄	K	7.14	148.21

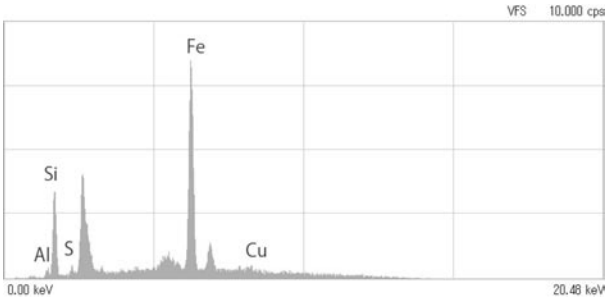
稲荷迫遺跡　No. 289

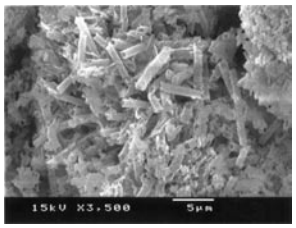




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	19.60	12.28
14Si　けい素	K	61.18	57.40
16S　硫黄	K	0.89	2.17
19K　カリウム	K	2.21	4.47
22Ti　チタン	K	1.16	13.11
26Fe　鉄	K	14.50	374.14
29Cu　銅	K	0.46	6.02

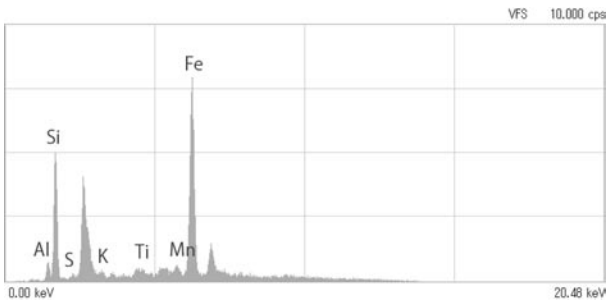
稲荷迫遺跡　No.322

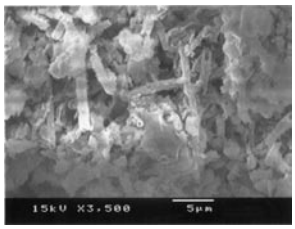




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	9.96	2.42
14Si　けい素	K	60.13	27.93
16S　硫黄	K	1.85	2.23
26Fe　鉄	K	27.11	340.81
29Cu　銅	K	0.95	9.70

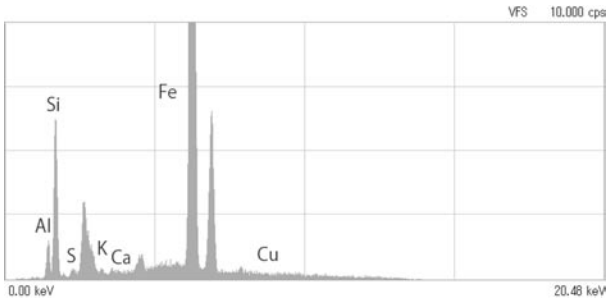
稲荷迫遺跡　No.338

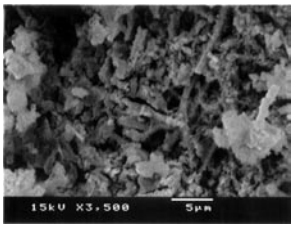




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	13.59	6.95
14Si　けい素	K	55.14	46.60
16S　硫黄	K	0.79	1.71
19K　カリウム	K	1.95	4.76
22Ti　チタン	K	0.98	14.32
25Mn　マンガン	K	0.99	23.48
26Fe　鉄	K	26.56	856.51

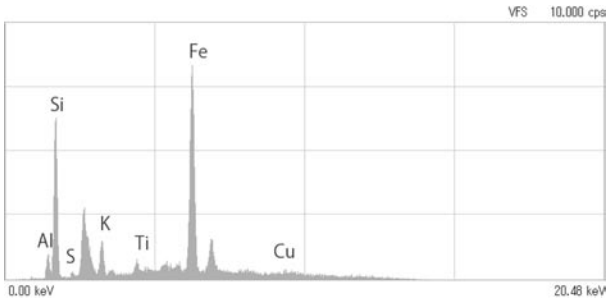
稲荷迫遺跡　No.347

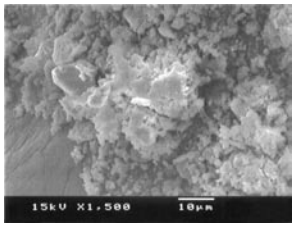




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	14.03	10.81
14Si　けい素	K	38.48	52.49
16S　硫黄	K	0.57	2.73
19K　カリウム	K	0.69	2.72
20Ca　カルシウム	K	0.21	1.31
26Fe　鉄	K	45.74	2511.37
29Cu　銅	K	0.28	7.69

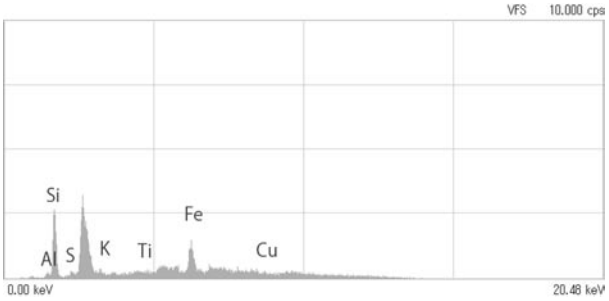
稲荷迫遺跡　No.351- 1

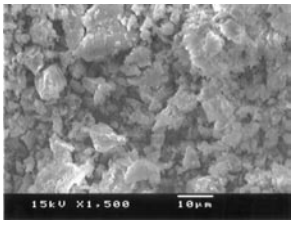




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	14.01	10.23
14Si　けい素	K	58.85	75.75
16S　硫黄	K	0.55	1.69
19K　カリウム	K	5.18	14.99
22Ti　チタン	K	1.20	17.21
26Fe　鉄	K	20.09	651.45
29Cu　銅	K	0.12	3.48

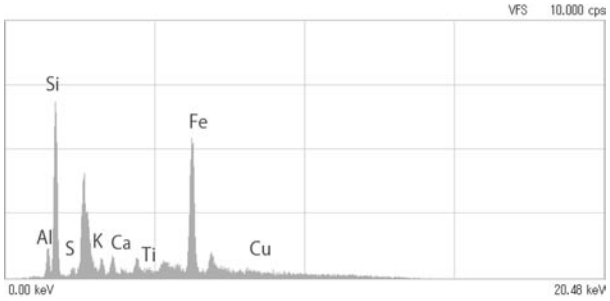
稲荷迫遺跡　No.351-2

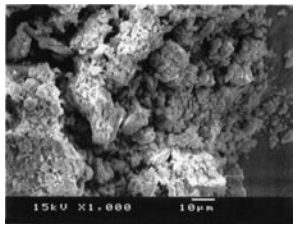




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	10.63	4.35
14Si　けい素	K	75.67	44.73
16S　硫黄	K	1.54	1.50
19K　カリウム	K	2.95	3.38
22Ti　チタン	K	1.16	7.01
26Fe　鉄	K	7.50	82.37
29Cu　銅	K	0.55	8.06

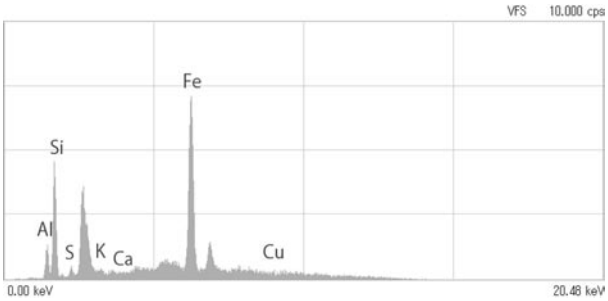
稲荷迫遺跡　No.354

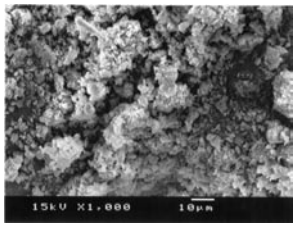




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	17.06	9.30
14Si　けい素	K	62.04	53.05
16S　硫黄	K	1.04	2.23
19K　カリウム	K	2.44	4.77
20Ca　カルシウム	K	1.79	4.52
22Ti　チタン	K	1.46	14.54
26Fe　鉄	K	13.78	305.40
29Cu　銅	K	0.39	9.10

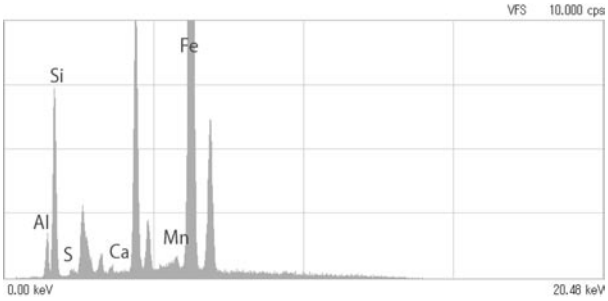
稲荷迫遺跡 No.356

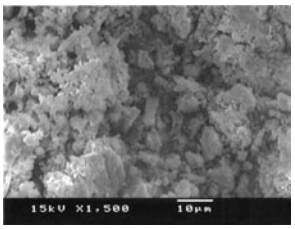




元 素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al アルミニウム	K	21.89	13.37
14Si けい素	K	56.88	51.91
16S 硫黄	K	1.15	2.70
19K カリウム	K	1.53	4.01
20Ca カルシウム	K	0.78	2.31
26Fe 鉄	K	17.35	446.90
29Cu 銅	K	0.43	10.71

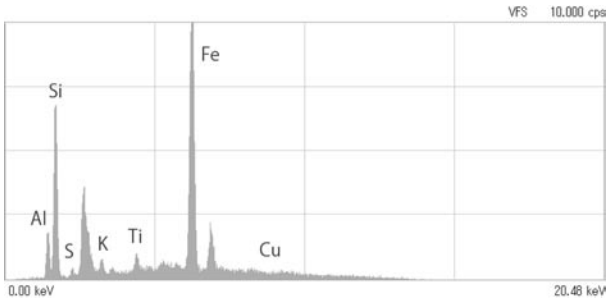
稲荷迫遺跡 No.357

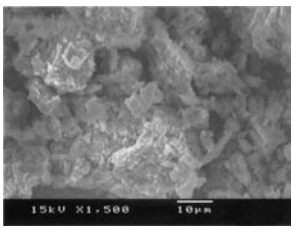




元 素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al アルミニウム	K	10.34	7.48
14Si けい素	K	42.64	45.76
16S 硫黄	K	3.42	1.60
20Ca カルシウム	K	0.68	3.78
25Mn マンガン	K	0.46	16.69
26Fe 鉄	K	42.46	2110.68

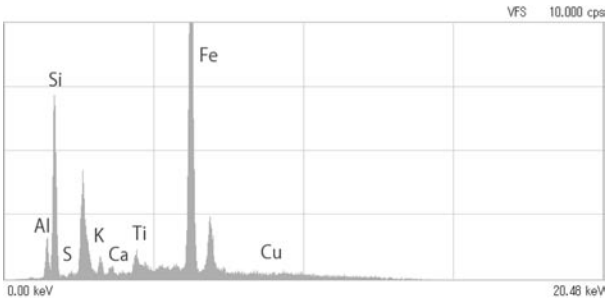
稲荷迫遺跡 No.387

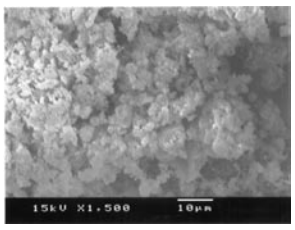




元 素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al アルミニウム	K	18.93	17.12
14Si けい素	K	57.70	82.36
16S 硫黄	K	0.77	2.88
19K カリウム	K	3.31	11.58
22Ti チタン	K	1.60	27.72
26Fe 鉄	K	17.48	662.11
29Cu 銅	K	0.21	8.26

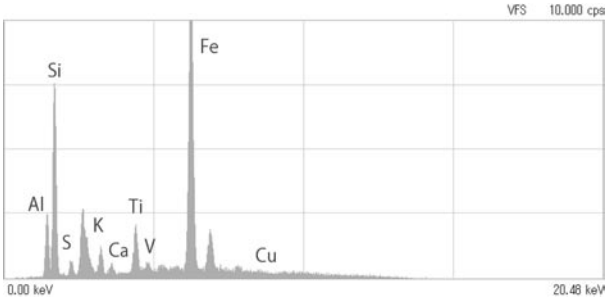
稲荷迫遺跡 No.388

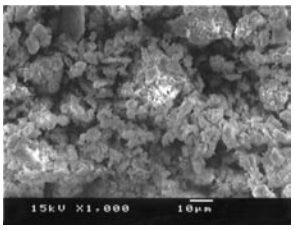




元 素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al アルミニウム	K	17.86	13.66
14Si けい素	K	55.27	69.21
16S 硫黄	K	0.53	1.85
19K カリウム	K	2.12	6.73
20Ca カルシウム	K	0.83	3.33
22Ti チタン	K	1.38	22.18
26Fe 鉄	K	22.01	772.43

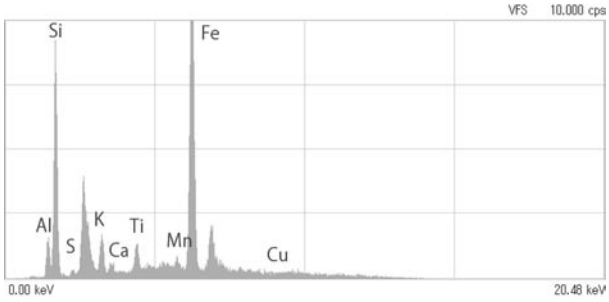
稲荷迫遺跡 No.389

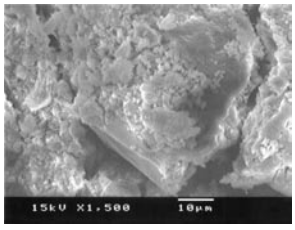




元 素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al アルミニウム	K	23.04	22.37
14Si けい素	K	51.83	74.10
16S 硫黄	K	1.53	6.35
19K カリウム	K	3.22	11.92
20Ca カルシウム	K	0.94	4.24
22Ti チタン	K	2.92	52.87
23V バナジウム	K	0.02	0.54
26Fe 鉄	K	16.30	654.49
29Cu 銅	K	0.20	8.49

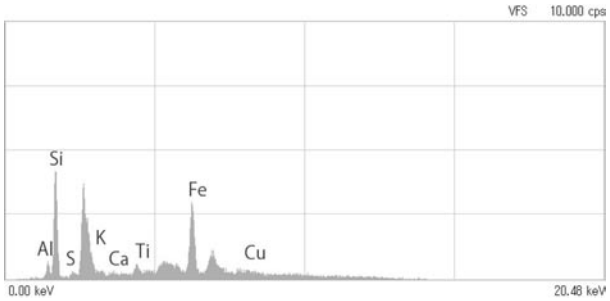
稲荷迫遺跡 No.399

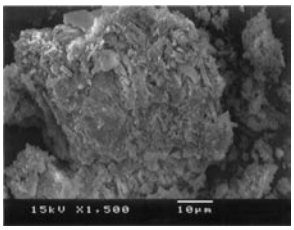




元 素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al アルミニウム	K	15.99	11.77
14Si けい素	K	58.99	70.31
16S 硫黄	K	0.63	1.88
19K カリウム	K	2.89	9.29
20Ca カルシウム	K	0.87	3.38
22Ti チタン	K	1.51	24.15
25Mn マンガン	K	0.59	13.34
26Fe 鉄	K	18.18	648.17
29Cu 銅	K	0.35	9.47

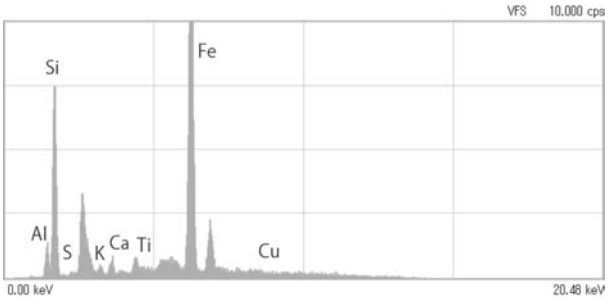
稲荷迫遺跡　No.404

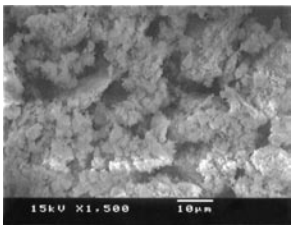




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	15.03	6.61
14Si　けい素	K	69.50	47.11
16S　硫黄	K	1.34	2.00
19K　カリウム	K	2.48	3.41
20Ca　カルシウム	K	0.55	0.94
22Ti　チタン	K	0.93	6.11
26Fe　鉄	K	9.68	161.90
29Cu　銅	K	0.49	9.93

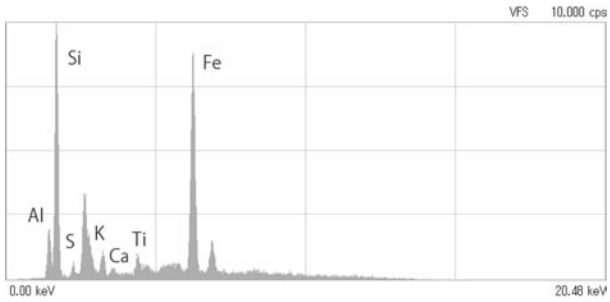
稲荷迫遺跡　No.416

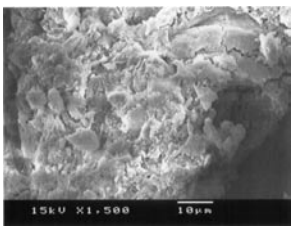




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	16.14	11.01
14Si　けい素	K	57.14	64.91
16S　硫黄	K	0.48	1.50
19K　カリウム	K	1.44	4.11
20Ca　カルシウム	K	0.87	3.20
22Ti　チタン	K	0.91	14.63
26Fe　鉄	K	22.70	743.34
29Cu　銅	K	0.32	8.98

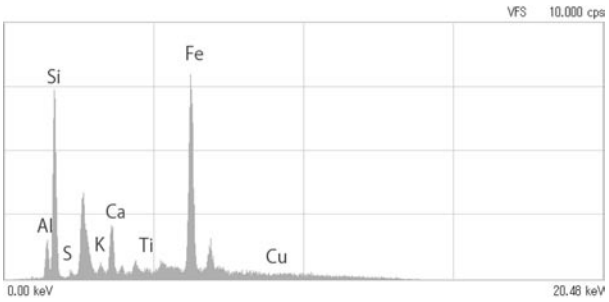
稲荷迫遺跡　No.417

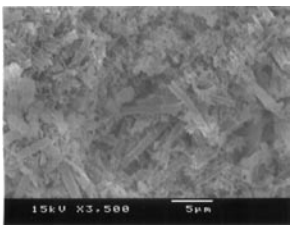




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	17.70	16.12
14Si　けい素	K	64.37	87.96
16S　硫黄	K	1.27	4.19
19K　カリウム	K	3.27	9.61
20Ca　カルシウム	K	0.93	3.30
22Ti　チタン	K	0.96	13.91
26Fe　鉄	K	11.50	403.72

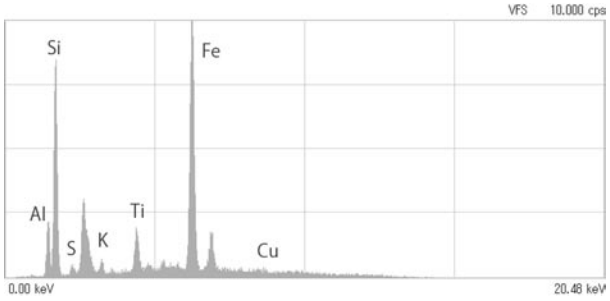
稲荷迫遺跡　No.418

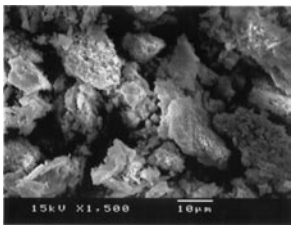




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	15.80	12.26
14Si　けい素	K	58.17	75.05
16S　硫黄	K	0.57	1.90
19K　カリウム	K	2.40	7.27
20Ca　カルシウム	K	2.79	9.28
22Ti　チタン	K	1.12	16.72
26Fe　鉄	K	18.89	666.82
29Cu　銅	K	0.26	8.62

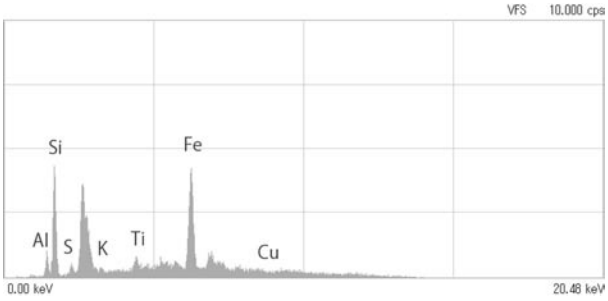
稲荷迫遺跡　No.883

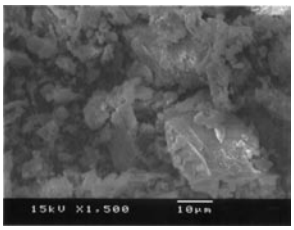




元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	20.54	16.51
14Si　けい素	K	59.44	70.81
16S　硫黄	K	1.18	3.69
19K　カリウム	K	1.87	5.29
22Ti　チタン	K	2.31	33.94
26Fe　鉄	K	14.39	476.44
29Cu　銅	K	0.28	9.66

稲荷迫遺跡　No.884





元　素	ライン	質量 [%]	濃度強度 [cps/mA]
13Al　アルミニウム	K	20.45	12.05
14Si　けい素	K	59.41	50.64
16S　硫黄	K	1.87	4.14
19K　カリウム	K	1.53	3.15
22Ti　チタン	K	2.10	22.76
26Fe　鉄	K	14.28	337.65
29Cu　銅	K	0.36	8.54

稲荷迫遺跡出土土器の岩石学的分析

鹿児島国際大学博物館実習施設
鐘ヶ江賢二

1．はじめに

稲荷迫遺跡からは，弥生時代前期から中期を中心とする土器が多く出土しているが，土器表面の砂礫を観察すると，各土器片には違いがみとめられ，稲荷迫遺跡出土土器は採取地の異なる複数の胎土で構成されることが推測された。ただし，肉眼による胎土中の岩石や鉱物の測定には限界もある。胎土の鉱物・岩石組成から土器の移動や材料採取の問題を検討するためには，岩石片および鉱物の正確な同定が必須であり，薄片を製作し偏光顕微鏡で観察することが基礎的作業となる。本論では，稲荷迫遺跡出土弥生土器の岩石学的分析を実施し，弥生時代の土器製作に使用された材料の鉱物組成を明らかにすることで，当時の土器製作時の材料摂取のありかたや，稲荷迫遺跡をめぐる交流について若干の考察を行いたい。

2．分析方法と結果

土器片を上下方向の断面に沿って切断し，約 0.03㎜の厚さのプレパラートを作成した後，偏光顕微鏡で観察を行った。本来，土器の鉱物組成は定量的に提示するのが望ましいが，紙面の都合上，胎土の岩石・鉱物組成の概要について以下述べることにしたい。

No.20（刻目突帯文　甕）　長石類のうち，斜長石を多く含む。有色鉱物では，角閃石をやや多く含み，輝石も確認される。

No.21（刻目突帯文　甕）　斜長石などの長石類とともに，角閃石，輝石，発泡した火山ガラス粒子を含む。砂岩など堆積岩の粒子がみとめられる。

No.22（刻目突帯文　甕）　大粒の堆積岩（砂岩）が含まれ，輝石や角閃石などの有色鉱物は目立たない。基質に微細な火山ガラスの粒子が含まれる。

No.23（突帯文　甕）　石英，長石が大部分を占め，黒雲母を少量含む。花崗岩類に由来する胎土とみられる。凝灰岩やガラスとみられる粒子も少量確認される。

No.24（突帯文　甕）　斜長石が多く，火山ガラスや輝石，かんらん石が確認される。角閃石もわずかに含む。

No.25（突帯文　甕）　石英，長石が大半を占め，黒雲母を少量含む。花崗岩類に由来する胎土である。

No.26（弥生前期　壺）　石英や長石とともに，輝石や凝灰岩，火山ガラスを含み，大粒の堆積岩がみられる。

No.27（弥生　壺）　石英，長石が大半で，組成の大半を占め，黒雲母を少量含む。花崗岩類に由来する胎土。

No.28（弥生　壺）　斜長石や輝石が主体で，火山ガラスもみられる。

No.29（弥生　壺）　斜長石，輝石，火山ガラスとともに，かんらん石，凝灰岩，軽石粒子も確認される。

No.30（弥生　壺）　石英，長石が大半で，黒雲母を少量含む。花崗岩類に由来する胎土。

No.31（弥生　甕）　石英，長石が大半で，黒雲母を少量含む。火山ガラス，凝灰岩もわずかに確認される。

No.32（須玖Ⅱ　壺）　石英，長石が大半で，黒雲母を少量含む。花崗岩類に由来する胎土。全体に粒子の大きさがそろい，北部九州からの搬入が想定される。

3．考察

今回分析した 13 点の土器は，多様な鉱物組成を示しており，稲荷迫遺跡をめぐる土器や人の動きも活発であったと推測される。稲荷迫遺跡が立地する志布志市付近は，古第三期の日南層群および熊毛層群を基盤とし，火砕流堆積物（テフラ）が分布する地質構造である。20，21，22，24，26，28，29 にみられるような，斜長石や輝石類を中心とした鉱物組成の胎土は，火砕流堆積物が風化・変成した胎土と推測され，遺跡の地質構造と整合的であり，遺跡近辺から材料を採取し土器を製作したことを示唆すると考えられる。21，22，26 で多く確認される堆積岩粒子は，日南層群および熊毛層群に由来するものであろう。

また，20 や 21 のように輝石類に加えて角閃石を多く含むものについては，角閃石を含むテフラや，角閃石安山岩など，角閃石を含む火砕流堆積物および岩石が分布する地点から材料を採取したことが推測される。鹿児島県内の火砕流堆積物では，先加久藤火砕流に角閃石が含まれることが報告されており，先加久藤火砕流は，大隅半島では鹿屋市輝北町などに分布している。また角閃石安山岩は，県北部を中心として分布がみられる。角閃石を含む胎土は，このようなテフラや安山岩類が風化・変成し粘土化した材料を土器製作に使用したことを示し，稲荷迫遺跡と他集落との交流を示唆するかもしれない。

一方，23，25，27，30，31，32 は，深成岩を由来とする石英や長石を中心とし，黒雲母を少量含む組成である。これは花崗岩が風化・変成した材料であるとみなされる。花崗岩は，大隅半島の垂水市付近および東南部一帯に分布する。河川の砂礫の調査でも，大隅半島南部

の河川には黒雲母が含まれることが多いことから，花崗岩類に由来する土器胎土は，大隅半島の花崗岩の分布域から採取された可能性があり，集落外からの搬入品と判断される。32 は北部九州の丹塗りの須玖Ⅱ式の広口壺とみられる個体であるが，全体に粒子の大きさがそろい，また石英や長石類にみられる変質の痕跡などには，ほかの花崗岩起源の個体の粒子と若干差異がみとめられる。したがって，32 は北部九州の花崗岩地帯で採取された材料で製作された土器が搬入された可能性を想定したい。

このように，稲荷迫遺跡出土土器の胎土は複数の胎土から構成されており，稲荷迫遺跡をめぐる各地との交流は，土器自体の移動をともなうものであったことが理解される。現段階では各地の土器胎土および土器製作のための採取地を検討するための検証材料は十分でなく，土器の移動について具体的にトレースするにはさらなる分析の蓄積が必要となる。今後も分析を重ねたい。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「土器胎土の鉱物を求めて―土器製作推定地のための基礎研究―」『縄文の森から』 3

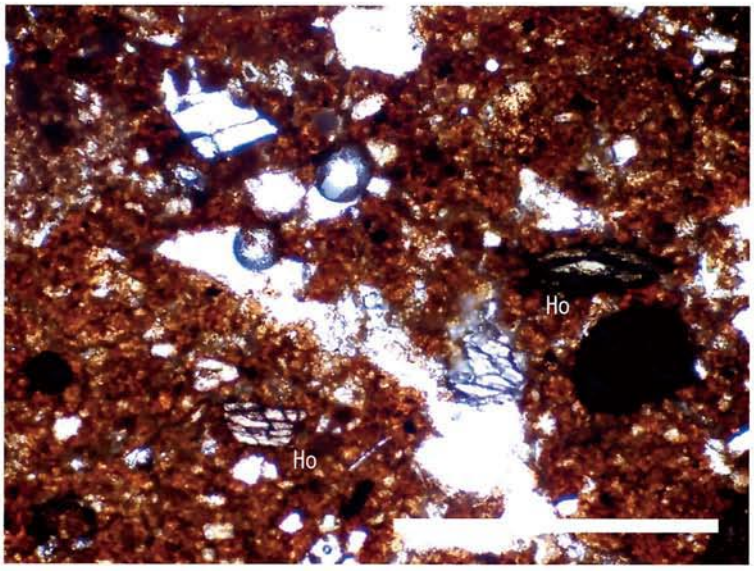
鐘ヶ江賢二 2009「鹿児島県における河川の砂の岩石学的分析（第３報）」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』第６集

大庭　昇 1990「深成岩および半深成岩」『鹿児島県の地質』鹿児島県地質図編集委員会

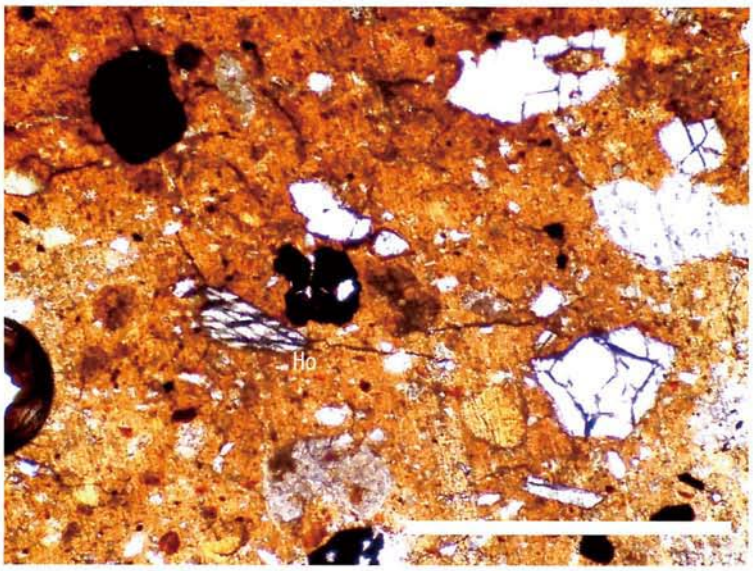
表１　稲荷迫遺跡出土土器の鉱物組成

	石英	斜長石	カリ長石	黒雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	かんらん石	火山ガラス	火山岩	深成岩	堆積岩
20	△	◎	△	×	◎	△	△	×	△	△	×	×
21	△	◎	△	×	◎	△	△	×	○	△	×	△
22	△	◎	△	×	×	△	△	×	○	○	×	○
23	◎	△	◎	△	×	×	△	×	×	△	○	×
24	△	◎	△	×	△	△	○	△	○	△	×	×
25	◎	△	◎	△	×	×	×	×	×	×	○	×
26	△	◎	△	×	×	△	△	×	△	○	×	○
27	◎	△	◎	△	×	×	×	×	×	×	○	×
28	△	◎	△	×	×	○	○	△	○	○	×	×
29	△	◎	△	×	×	○	○	△	○	○	×	×
30	◎	△	◎	△	×	×	×	×	×	×	○	×
31	◎	△	◎	△	×	×	×	×	△	△	○	×
32	◎	△	◎	△	×	×	×	×	×	×	○	×

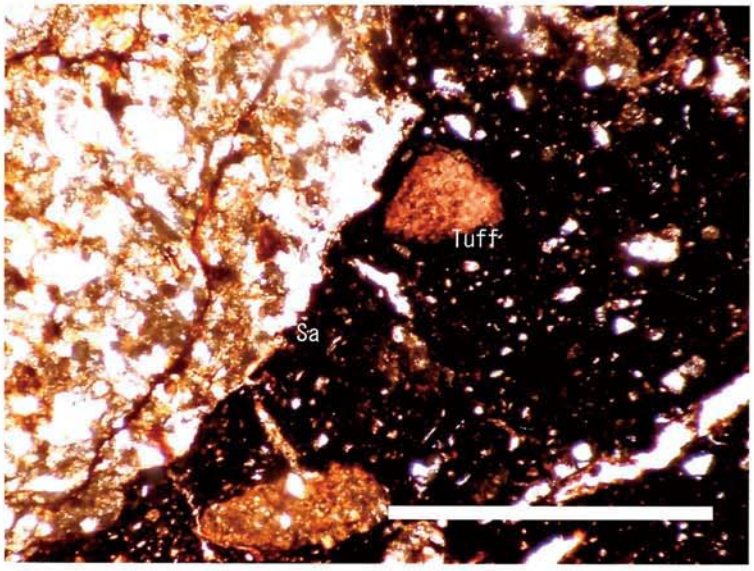
◎多量　○多量～中程度　△少量　×なし



No. 20
刻目突帯文　甕
開放ニコル（スケール約 0.5mm）
Ho：角閃石

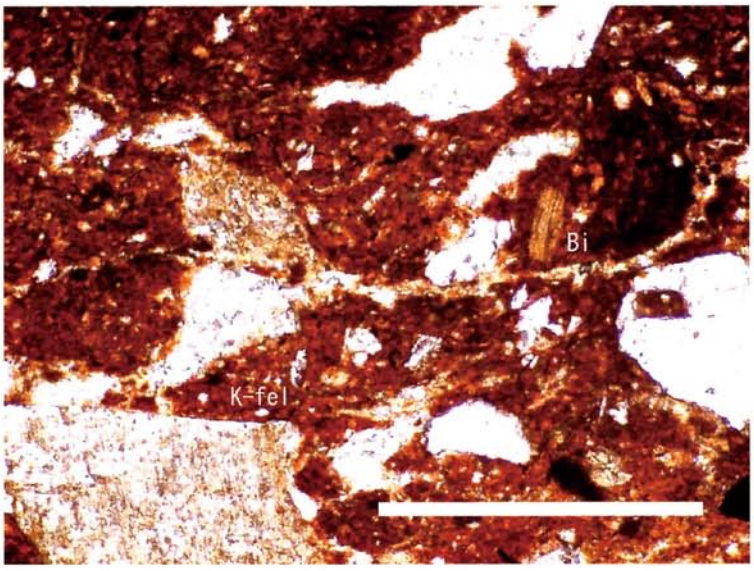


No. 21
刻目突帯文　甕
開放ニコル（スケール約 0.5mm）
Ho：角閃石

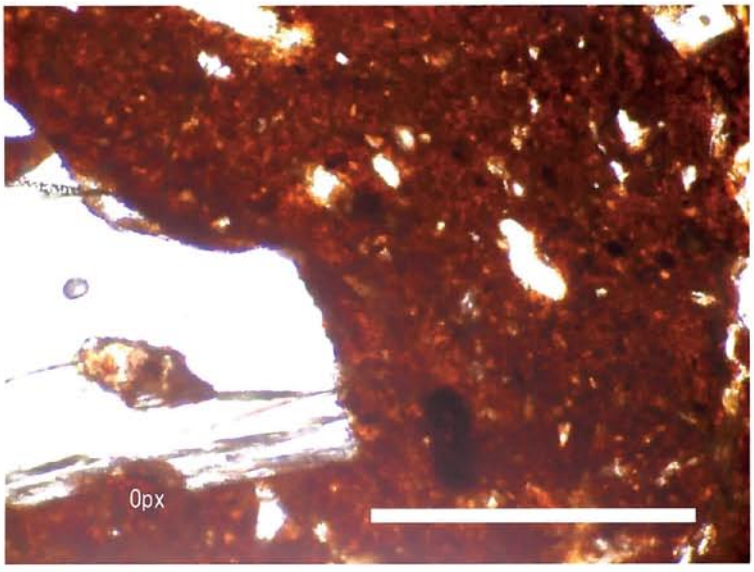


No. 22
刻目突帯文　甕
開放ニコル（スケール約 1.0mm）
Sa：砂岩　Tuff：凝灰岩

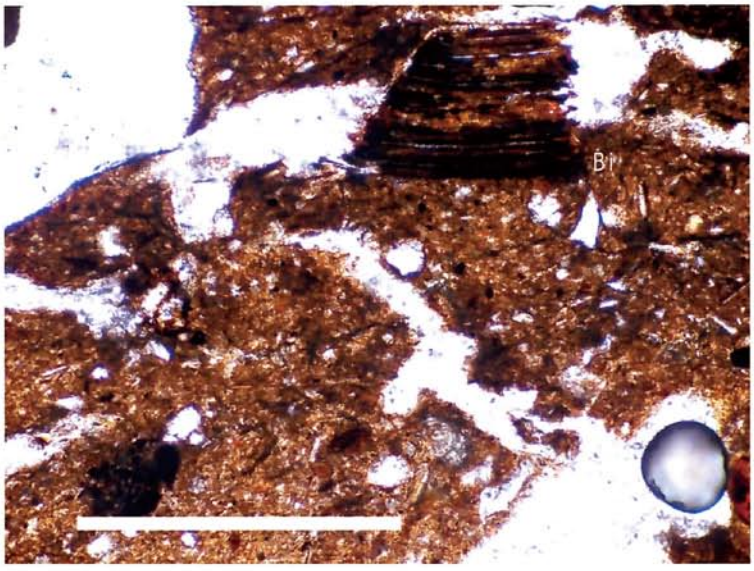
稲荷迫遺跡出土土器の偏光顕微鏡写真



No. 23
突帯文　甕
開放ニコル（スケール約 0.5mm）
K-fel：カリ長石　Bi：黒雲母

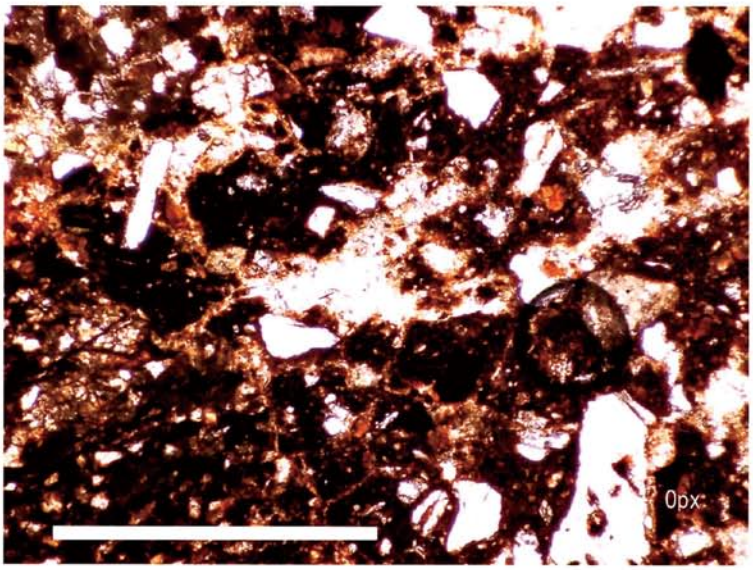


No. 24
突帯文　甕
開放ニコル（スケール約 0.5mm）
Opx：斜方輝石

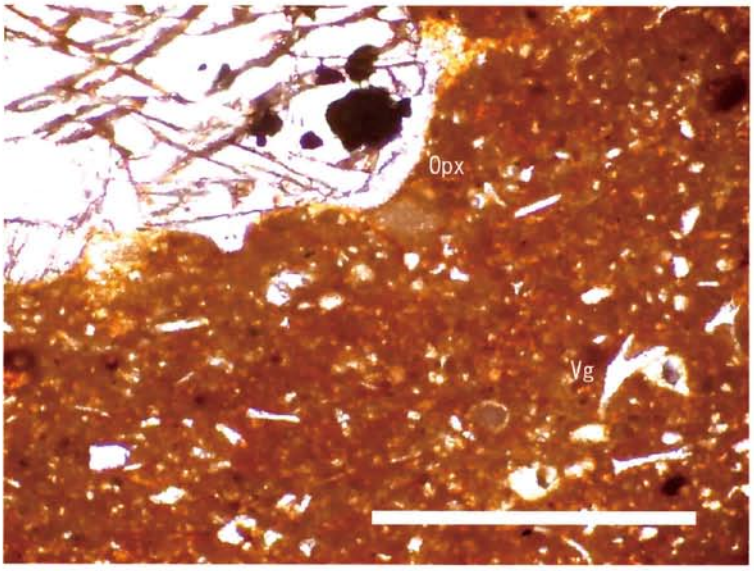


No. 25
突帯文　甕
開放ニコル（スケール約 0.5mm）
Bi：黒雲母

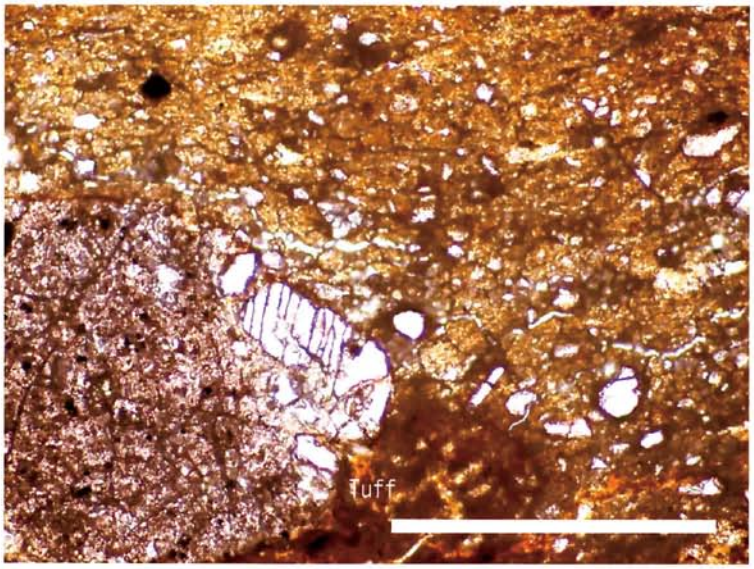
稲荷迫遺跡出土土器の偏光顕微鏡写真



No. 26
弥生前期　壺
開放ニコル（スケール約 1.0mm）
Opx：斜方輝石

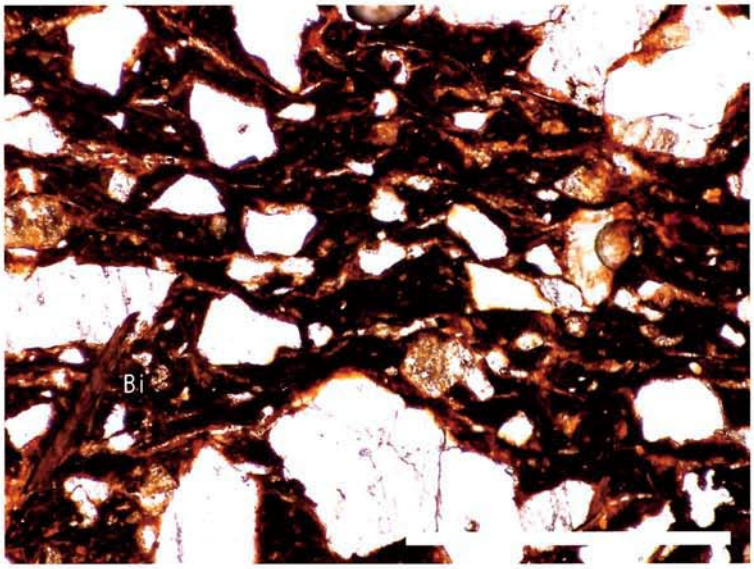


No. 28
弥生　壺
開放ニコル（スケール約 0.5mm）
Opx：斜方輝石　Vg：火山ガラス

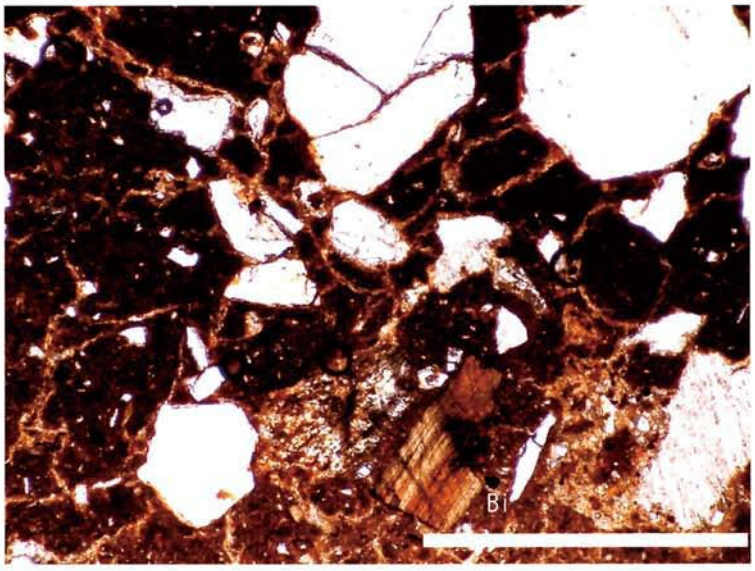


No. 29
弥生　壺
開放ニコル（スケール約 0.5mm）
Tuff：凝灰岩

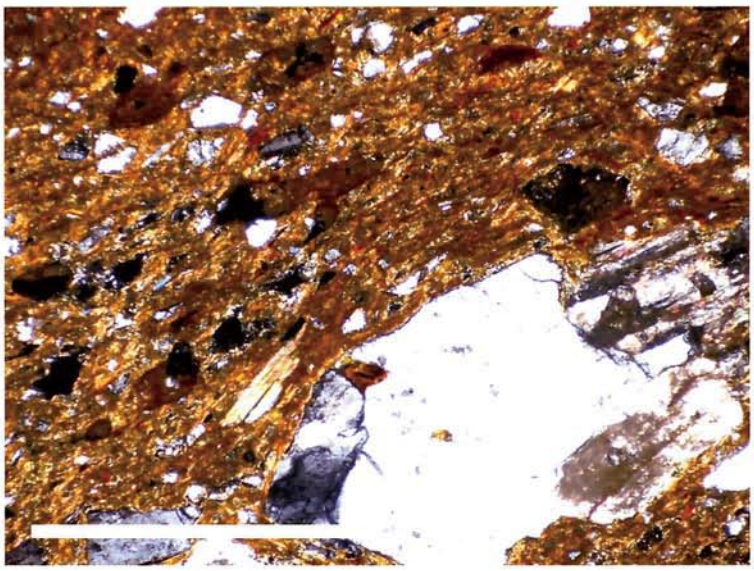
稲荷迫遺跡出土土器の偏光顕微鏡写真



No. 30
弥生　壺
開放ニコル（スケール約 1.0mm）
Bi：黒雲母



No. 31
弥生　甕
開放ニコル（スケール約 1.0mm）
Bi：黒雲母



No. 32
弥生（須玖Ⅱ式）　壺
直交ニコル（スケール約 1.0mm）
Bi：黒雲母　Gr：花崗岩

稲荷迫遺跡出土土器の偏光顕微鏡写真

第Ⅴ章　総括

第１節　縄文時代早期

１　稲荷迫遺跡検出集石について

稲荷迫遺跡では，縄文時代早期の包含層であるⅤ層・Ⅵ層から64基の集石を検出した。各層ごとの分布状況は小結で述べたが，それらの中で特徴的な構造を持つ集石がいくつかある。

まず，Ⅲ類に該当した集石についてである。Ⅲ類該当の集石は，Ⅲａ類とⅢｂ類にわけた。そのうち，Ⅲｂ類（集石３・11・14・19・23・30・39・59・60）は掘り込みの床面とその上にある集石にレベル差があり，掘り込みに対して礫が浮き上がったように見えるものである。稲荷迫遺跡では，埋土の具体的な情報が少ないことから，これらの浮き上がりは，①検出面と旧表土との差によるもの，②当該時期による表土の撹乱等③掘り込んだ後,別の土で床面を作ってから礫を置いた,④以前使っていた集石を再利用した，⑤別の土坑の窪みを利用したことなどが考えられる。Ⅴ層，Ⅴ・Ⅵ層，Ⅵ層の各時期にわたりⅢｂ類タイプの集石は検出されており，集石総数に対しても，約14％を占めていることから，決して少ない数ではない。今後調査していくうえで，埋土情報（埋土の堆積状況・埋土の科学分析）を集めてこの浮き上がりの理由について検討していく必要がある。

２つ目が，Ⅳ類集石（集石５・６・９・10・12・13・36）についてである。Ⅳ類集石は，非常に重厚な作りをした集石であり，すべてがⅥ層該当集石である。稲荷迫遺跡では36号をのぞいて他の６基は，半径10mの範囲内で検出されている。これらのⅣ類は底石・壁石を使用する点では同じであるが，底石・壁石として使用している礫に違いがあり，３タイプに分けることができる。平たい大型の礫を使うタイプ（集石６・９号），大型の礫を使うタイプ（集石５・10・36号），一部大型の礫で拳大の礫を敷き詰めるタイプ（集石12・13号）である。この違いの理由を明確にすることはできなかったが，集石５号と６号は，レベル差もほとんどなく，非常に近い位置で検出されたことから関連性があると思われる。

３つ目は,段差のある掘り込みを持つ集石（集石８号・55号）である。掘り込みを持つタイプの集石は多く検出されたが，明確な段差を持つものはこの２基である。特に集石８号は，断面の形状から２基の集石が切り合っている可能性も考えられる。しかし，平面と断面の形状という見た目の情報しかないので可能性の域を出ない。

以上が本報告をまとめるにあたり気づいた特徴的な構造を持つ集石である。これらの構造が，稲荷迫遺跡という限られた範囲内で見られる構造なのか，それとも他の遺跡にも似たような構造を持った集石があるのかは今後注視していく必要がある。

次に，平面的分布でグループ分けをしたことの結果である。今回は，検出した集石を第１グループから第８グループまで平面的な集石の密集状況と地形の状況でわけた。しかし，該当層位を検証すると近接した集石でも明らかに時期差のあることがわかった。このことから，平面的分布の状況でひとくくりにして時期を判断することは危険であることがわかる。ただし，第６グループのように，近接し検出レベルがほぼ同一だった場合は，そのグループ内をセットとして考えることが可能であるといえる。また，時期の違いがあるのならばその変遷を追うことができる可能性がある。ただし，それらを証明するためには，接合等のより綿密な情報が必要である。

次に，分布している遺物との関連性であるが，集石と直接的な関係をもつ遺物を特定することができなかった。集石は，Ⅵ層からⅤ層検出面にかけて，遺跡の北側から南側の川沿いへ移動していることが見て取れる。土器の分布も，新しくなるほど川沿いに分布する状況が見られる。しかし，古い時期の土器も南側で出土しているので,出土位置との比較作業を行い検証する必要がある。

２　集石の構造の問題

稲荷迫遺跡では，大きくⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅱ＋Ⅰ類の５つに集石を分類した。これらの分類をおこなう際に，被熱破砕礫の分布状況・断面状況から，検出時に明確な掘り込みを確認できなかった集石でも推定できるものはⅢ類（掘り込みのある集石）として認定をおこなっている。これらの作業を行っていく中で問題になってくるのが，調査時に検出したと考えた集石が本来の検出状況なのか違うのかということである。例えば，掘り込み開始面を通り過ぎて検出したと考えた集石や，本来は集石であったが，被熱破砕礫として取り上げてしまった集石の存在の可能性があげられる。また，集石のライフサイクルを考えたときに，その集石が使用準備の状態なのか，使用中だったものなのか，使用されなくなり廃棄された集石なのかによって，最終的な検出状況が大きく変わる可能性がある。見た目の検出状況だけで，構造を判断してしまうと本来の姿が見えなくなってしまう恐れがある。また，構造は，以下のような問題とも関係する。

３　時期認定の問題

時期の認定に際して重要であることは，認定しようとしている集石が，果たしてどの層に該当しているかとい

うことである。稲荷迫遺跡のように複数の包含層・複数の時期にわたる土器型式がある場合がその例であるが，単一の包含層だった場合でも，その層の上・中・下のどの位置から検出されたのかを判断することが，時期を認定していく際には重要である。しかし，先ほど述べたように，集石の構造を見誤ってしまうと時期の認定にも大きな影響を及ぼしてしまう。掘り込みの有無，掘り込みがあった場合の掘り込みの深さなど検出面を慎重にとらえないと，時期認定を大きく狂わしてしまう可能性が非常に高い。また，遺物の垂直分布を断面に重ね合わせたが，遺物の情報だけで時期の判断をすることも困難である。集石内から土器が出土したとしても，それが集石の時期を特定するとは限らない。明確な時期を判断するには，第１に調査時の検出状況をおさえることが重要であるが，被熱破砕礫の垂直分布の状況，遺物の出土状況，地形コンタなど総合的に判断する必要性があると考えられる。

４　集石の調査方法について

２・３で本報告をまとめるにあたり大きな課題となったことをあげたが，それらをもとに集石の調査方法を再検討してみたいと思う。

１つ目は，被熱破砕礫の取り扱いについてである。稲荷迫遺跡における被熱破砕礫の点数は25,151点である。この点数は稲荷迫遺跡で出土した遺物2,411点（土器・石器）の約10倍にあたる。これらの被熱破砕礫がもつ情報量は非常に膨大なものである。平面分布状況・レベル情報・層位情報・被熱の状況・重量・石材といった情報をもてば，集石の構造・時期の認定といったものをより明確にする可能性がある。

２つ目は，集石の検出についてである。被熱破砕礫が多く検出されている場合は密集の状況からいち早く集石を認定することが求められる。また，掘り込み開始面を，より早く見つける必要がある。ただし，埋土が包含層とほぼ同じだった場合などは気づかずに掘り下げてしまうことが考えられ，本来の検出レベルを特定するのに大きな困難を伴うこととなる。それを補完することができる可能性のある情報が，３つ目の接合情報である。

接合情報から得られることとして，大きく３つが考えられる。１つ目は，先行研究等で試みられているように，接合作業で破砕の状況を知ることができるということである。破砕している比率が高いほど，使用の度合いが大きいことを示すと考えられることから，その集石のおおまかな使用状況を知ることができる。２つ目は，集石と近接している被熱破砕礫との接合である。集石内からかき出しをおこなったとき，また集石が廃棄された後地形の傾斜に沿って礫が流れ出た状況が接合によって見られる可能性がある。そうなると，集石の本来の検出レベルを断定できる可能性があり，時期の認定をより確実なものに近づけることができる。３つ目は，近接する集石同士での接合である。接合の状況を見ることで，集石の変遷を見ることができる可能性がある。ただし，集石が検出された場所の地形によって大きく左右される可能性はある。地形の傾斜が急だった場合などは，広範囲に礫が散らばる可能性があるため精度が落ちることも考えられる。また，遺跡内で時期を違えて再利用している可能性もある。いずれにしろ，先ほど述べた情報をまとめていき，総合的に判断をする必要性がある。

以上，３つを調査方法としてあげたが，問題点も多々ある。中でも，被熱破砕礫全てを情報化することは，大きな問題である。被熱破砕礫の扱いの中でも述べたが，稲荷迫遺跡では遺物の約10倍の量の被熱破砕礫が検出された。総重量は，約10ｔである。（重量は，深パンケース１個あたりの平均の重さをだし，それに取り上げたパンケースの数をかけて算出している。）これらすべての礫から先ほど述べた情報をデータ化するためには，多くの時間を要することとなる。また，接合ををおこなう際の作業の流れを考えると，グリッド毎での取り上げや，より狭い範囲での取り上げ（２ｍメッシュなど）をおこない，後に検出される可能性がある集石にそなえて整理する（洗い・収納）必要がある。どちらの作業も，多くの人手と時間と経費がかかることが考えられる。

以上のことから，全被熱破砕礫の分析は不可能であり，先行研究の成果をサンプリングに，接合等を通して再検討し，疑問が生じたら，発掘現場において根拠資料を作る新たなサンプリングを行い試行していくことから行う必要がある。

鈴木忠司ほか　2000「礫群による石蒸し料理予備実験記録」『朱雀』第13集　京都文化博物館

鈴木忠司ほか　2003「石蒸し調理実験記録３）－礫加熱法と調理特性をめぐって－」『朱雀』第15集　京都文化博物館

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2000『国分上野原テクノパーク第３工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）上野原遺跡（第10地点）（第２分冊）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘報告書（27）

八木澤一郎　2003「鹿児島県上野原遺跡第10地点の集石遺構」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』九州縄文研究会・宮崎考古学会

第２節　出土土器の検討

稲荷迫遺跡では縄文時代早期から古代に至るまで，多彩な土器が出土している。特に，縄文時代後期後半から刻目突帯文の時期を経て，弥生時代前期末までの土器群の多彩さは注目される。これらの稲荷迫遺跡から出土した土器を検討する前に，縄文土器に対しては次のような固定観念を我々はもっているのではないかということを提示しておきたい。

①「同じ地域の同じ時期には，一つの型式の土器しか存在しない。」

②「縄文土器は同じ地域で変化していき，編年的にも一系統で変遷していく。」

③「縄文時代は自給自足の生活であり，土器も集落内でつくられていた。」

④「縄文時代は定住生活をしており，移動している人々はいない。」

本稿では一旦これらの固定観念をはずして，稲荷迫遺跡からみえる土器のあり方を探っていきたい。

なお，土器型式名が定着しているものについては，そのまま用いているが，研究者間で見解が分かれている土器については「○○タイプ」と表記してある。筆者自身「○○段階」としたこともあったが（東1995），「段階」自体も一系統論的な考え方であるので，やはり先ず「○○タイプ」としておいた方が良いと考えるからである。

(1) 縄文時代早期

現在認識されている縄文時代早期前葉の流れは，次の通りである。黒川忠広氏によると，鹿児島の縄文時代早期前葉の土器型式を「岩本式→ホケノ頭段階→前平式→志風頭段階もしくは前平式→加栗山式（知覧式）→小牧３A段階→吉田式→岩之上段階→倉園B式→石坂式」とし，一元的な流れの中で説明している（黒川2007）。その中にあって，大隅半島には加栗山タイプに類似するものの二重施文を施さない一群「札ノ元Ⅶ類」を取り上げ，他地域との関わりによって生じた地域性の可能性を指摘している。

稲荷迫遺跡で出土した最も古い土器は，岩本タイプの土器である（８～25）。あえて「岩本タイプ」としたのは，このタイプの土器を狭い意味での「前平式土器」とする考えが最近目立つからである。岩本式土器は指宿市岩本遺跡を標式とし，前平式土器から分離したものである。前平式土器を設定した河口貞徳氏は，前平式土器の指標を「二重施文」とし，胴部文様が貝殻条痕のみのものを「前平B式」とした（河口1989）。現在，岩本式土器は口唇部内側が斜位に面取りされ，貝殻条痕が繊細なものをそう呼ぶ傾向にあり，内側が面取りされず，粗い条痕のものについては「前平式土器」を用いている（新東2008）。河口氏が「前平B式」を分離したことと，前平式土器の指標を「二重施文」としたことから，胴部文様が貝殻条痕のみのものは「岩本式」の範疇に含めた方がよいのではないかと考える。そうした上で，時期差が確認できるのであれば，「ホケノ頭段階」を含め細分し「岩本様式」を充実させた方がよいのではなかろうか。

次に，「二重施文」が前平式土器の指標とするならば，「志風頭式土器（上杉2004ａ）」と「加栗山式土器」が前平式土器になるので，「二重施文土器」を大きく「前平様式」と呼んで区別するか，「永野タイプ・志風頭タイプ・加栗山タイプ・知覧タイプ」とした上で「前平式土器」と呼ぶのか明らかにした方が混乱は少ない。上述した岩本タイプを「前平式土器」と呼ぶことと併せて，「志風頭式土器」と「加栗山式土器」を使っていくならば，河口貞徳氏によって設定された前平式土器の名称が消えていくのではないかと危惧している。26 ～ 45を加栗山タイプの前平式土器とした。

むしろ問題となるのは，地文の貝殻条痕が消え，貝殻腹縁刺突を縦方向に間隔を置かず施す「札ノ元Ⅶ類」や「小牧３Aタイプ」であり，特に「小牧３Aタイプ」は前平式土器と吉田式土器の中間の様相を持ち合わせている。「小牧３Aタイプ」の中で，貝殻刺突が横方向に展開されるものについては，吉田式土器へのつながりを想定させる。これが時間的に中間なのか，地域的あるいは集団による接触の中間なのか，確証は得られていない。46・47を小牧３Ａタイプとした。

48・49は吉田式土器である。河口貞徳氏による吉田式土器の指標は「横方向の押し引き文」であり，前平式土器と区別している。施文具を横方向に強弱をつけながら動かすことからすれば，小牧３Ａタイプと岩之上式土器も「吉田様式」の中に含まれる。稲荷迫遺跡では楔形突起をもつ吉田式土器はみられなかったが，これらも含めて吉田式土器の中にも地域性や集団性はないのか追究していく必要がある。

50 ～ 52は倉園Ｂ式土器とした。吉田式土器と石坂式土器をつなぐものと考えられている。

53は宮崎に分布の主体がある別府原タイプであり，政所式土器や中原式土器との関連性が考えられている（上杉2004ｂ）。ただし，別府原遺跡の出土例は横方向や斜位の条痕がほとんどで，縦方向のものは少ない。縦方向の条痕を施した土器がまとまるようであれば，地域性や集団を示す可能性も出てくる。

54 ～ 65は石坂式土器であり，66 ～ 70は下剥峯式土器である。稲荷迫遺跡では桑ノ丸式土器は出土していないが，山下大輔氏によると下剥峯式土器と桑ノ丸式土器は併存していることが指摘されている（山下2005）。

71 ～ 76は押型文土器の最終形態である手向山式土器である。あと少しのところで底部が接合せず残念であるが，全形に近い形を知ることができる良好な資料である。

妙見式土器あるいは天道ヶ尾Ⅴ類土器へつながる契機となるであろう（吉本1998）。76のミニチュア土器があることも希少な例となった。

平栫式土器（77 ～ 84）と塞ノ神式土器（85 ～ 87）が少量ながらもあることから，縄文時代早期後半まで人々の営みがあることがわかった。特に平栫式土器には大粒の金色雲母が多く含まれており，霧島市国分上野原遺跡出土の壺形土器をはじめとして，花崗岩地帯よりも離れた場所での使用も多々みられる。

以上のように，縄文時代早期だけでも多様な土器を持った人々が，稲荷迫遺跡で入れ替わり立ち替わり暮らしている様子が窺える。土器型式ごとの量はそれ程多くないことと，集石以外の住居跡などがみられないことから，居住地と言うよりもキャンプサイト的な使われ方をしたと考えられる。また，各型式の土器胎土にもいくつかの種類が見られ，もし固定観念③であるならば，土器の材料が他地域から持ち込まれたことになる。なお，土器胎土について河口貞徳氏は「石坂式は雲母を胎土に包含しないが，右の土器（筆者註：吉田式土器）は雲母を胎土に包含している。」と早い段階に注目している（河口1955）。

上杉彰紀　2004ａ　「前平式土器および志風頭土器の検討」『南九州縄文通信』No.15　南九州縄文研究会

上杉彰紀　2004ｂ　「「別府原式土器」とその周辺」『九州縄文時代早期研究ノート』第２号　九州縄文時代早期研究会

河口貞徳　1955　「南九州出土の条痕土器」『石器時代』１号石器時代文化研究会

河口貞徳　1989　「吉田式と前平式のその後について」『鹿児島考古』第23号　鹿児島県考古学会

黒川忠広　2007　「鹿児島県における縄文時代早期前葉の土器相」『九州における縄文時代早期前葉の土器相』第17回九州縄文研究会福岡大会　九州縄文研究会

新東晃一　2008　「早期南九州貝殻文系土器」『総覧　縄文土器』『総覧　縄文土器』刊行委員会

東和幸　1995　「鹿児島県における発掘調査の視点（１）－現状と問題解決に向けて－」『鹿児島考古』第29号鹿児島県考古学会

山下大輔　2005　「下剥峯および桑ノ丸式土器の再検討」『南九州縄文通信』No.16　南九州縄文研究会

吉本正典　1998　「妙見式土器の検討」『九州縄文土器編年の諸問題　-早期後半土器編年の現状と課題-』　九州縄文研究会

(2) 縄文時代後期中半

縄文時代後期中半の土器は，市来式土器・丸尾式土器・北久根山式土器が少数ながらも出土している。市来式土器と丸尾式土器は，型式学的に時間差と考えられており，口縁部が肥厚するものから肥厚しないものへ，文様が凹線を伴うものから貝殻刺突のみのものへ，などの変遷が指摘されている。胎土を観察すると，丸尾式土器には金色雲母を含むことが一般的であるが，同じ市来式土器の中にも金色雲母を含むものと含まないものがある。また，丸尾式土器の中にも金色雲母を含まないものもみられる。この様な状況は，固定観念③とすれば，「同じ型式の土器をつくる人が，粘土を違えて製作した」ことになる。なお，市来式土器や丸尾式土器に北久根山式土器が客体的に伴うことは，姶良市干迫遺跡をはじめとして南九州ではよくみられることであり，固定観念①では説明できない。

(3) 縄文時代後期後半から晩期

この時期の土器型式である中岳Ⅱ式土器は，その存在は認識されているものの，出土例が少なく，全体の形を把握できる資料はなかった。しかし，稲荷迫遺跡の出土資料は接合可能な土器片が多く，全形を捉えられた資料も１点はある。また，上加世田式土器や入佐式土器も出土しており，志布志地域における縄文時代後期後半の土器型式のセット関係もしくは前後関係が，把握できる可能性が期待されるものである。

中岳Ⅱ式土器は，鹿児島県曽於市末吉町南之郷に所在する中岳洞穴が標式遺跡であり，河口貞徳氏によって設定されたものである（河口1980）。中岳洞穴は，1978年から翌年にかけて４次の発掘調査が行われ，河口氏は西平式土器から三万田式土器の移行形態として中岳Ⅱ式土器をとらえた。一方，桒畑光博氏は他地域との接触によって地域色豊かなものに変える事象を発現させる地域システムを解明するために，中岳Ⅱ式土器を再検討し，三万田式土器と御領式土器に並行するものとした（桒畑1989）。その際，中岳Ⅱ－１型式→中岳Ⅱ－２型式→中岳Ⅱ－３型式として，型式組列も行った。また，曽於市末吉町土合原遺跡を調査した長野真一氏と堂込秀人氏は中岳Ⅱ式土器の浅鉢形土器に，天城Ⅲ式にみられるような「頸部は外反し体部との境は強いくの字形を成すもので口縁部は直立あるいは外傾し１条ないし２条の沈線文をもつ」ものを第２段階として，新旧関係を指摘している（長野・堂込1990）。天城Ⅲ式土器は鹿児島での上加世田式土器に相当する。さらに，入佐式土器の古段階から新段階にかけての住居跡が検出された曽於市末吉町桐木遺跡では，一般的にみられる入佐式土器とともに形態や質感が異なる中岳Ⅱ式土器の系譜を引く事例を指摘している（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004）。

ところで，志布志市家野遺跡では中岳Ⅱ式土器と共に三万田式土器の深鉢形土器と浅鉢形土器が出土している。器形や調整は例えば出水市高尾野町中里遺跡例をはじめとする細長い角閃石が含まれる中九州の資料と共通

しているが，家野遺跡出土土器の胎土は中岳Ⅱ式と同様のものや金色雲母を多く含むものがみられる。これらと一緒に出土した中岳Ⅱ式土器は，口縁部内面の窪みが深く，凹線も太くて深い。また，曽於市末吉町鳥巣ノ上遺跡でも三万田式土器と共に中岳Ⅱ式土器が出土している。稲荷迫遺跡で三万田式土器が１点も出土していないことを考えると，家野遺跡出土の中岳Ⅱ式土器と稲荷迫遺跡出土例には，時間的な差があり，稲荷迫遺跡の中岳Ⅱ式土器の方が新しく位置付けられる。改めて稲荷迫遺跡出土の深鉢をみてみると，口縁部内面の窪みはわずかに痕跡をとどめるのみであり，多くは外反する口縁部をもつ。また，凹線の幅が狭くなり，口縁部文様帯の幅も狭くなる傾向にある。さらに，口縁部内面が「く」字状に屈曲し，口唇部が鋭角になるものについては，上加世田式土器との関わりが強いと考える。

以上，中岳Ⅱ式土器は先学者が指摘していたように時期的な細分が可能であり，今後桒畑氏が見通していた３つの型式を基に分類を進める必要がある。併せて，桐木遺跡で指摘されていた入佐式土器古段階にも中岳Ⅱ式土器と関わりをもちそうな土器があり，胎土を中心に時間的な部分まで含めて追究することが課題である。中岳Ⅱ式土器と三万田式土器・上加世田式土器・入佐式土器との関わりを考える場合，固定観念①や②は邪魔になるのである。なお，稲荷迫遺跡では確実に黒川式土器と言えるのは胴張りの浅鉢形土器しか捉えられず，深鉢形土器がどのように関わるのか分からない。堂込秀人氏が進めてきた縄文時代後期後半から晩期にかけての土器編年に(堂込1997)，志布志地方の土器がどのように絡んでくるのかも課題として残った。

河口貞徳・西中川駿　1980『中岳洞穴　遺跡調査報告書』末吉町教育委員会

桒畑光博　1989「東南部九州におけるある縄文土器の型式組列　－中岳Ⅱ式土器の再検討－」『鹿児島考古』第23号　鹿児島県考古学会

堂込秀人　1997「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古』第31号　鹿児島県考古学会

長野真一・堂込秀人　1990「第４章　まとめ」『土合原遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）末吉町教育委員会

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2004『桐木遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(75)

志布志町教育委員会　1994『家野遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（24）

(4) 縄文時代終末から弥生時代前期

稲荷迫遺跡で最も多く出土しているのが，縄文時代終末から弥生時代前期にかけての資料である。特に，刻目突帯文土器が主体を占める遺跡は，大隅半島では垂水市宮下遺跡や鹿屋市吾平町中尾遺跡など数えるほどしかなく，貴重な資料を得ることが出来た。全国的にみれば水田稲作が導入される時期であり，大隅半島でのあり方が注目されている。

鹿児島県内における刻目突帯文土器の取り扱いには，縄文時代晩期土器とするものと，弥生時代以降とするものがあった。また，高橋式土器段階以降の端正な二条突帯をもつ甕形土器については，弥生時代前期よりも後出であると認識されていたが，古色然とした刻目突帯文土器については筆者自身も弥生時代早期に位置付けていた。前者においては，刻目突帯文土器を縄文時代に，一緒に出てきた壺形土器は弥生時代の項目で扱った報告書もいくつかある。後者については藤尾慎一郎氏（藤尾1993）や桒畑光博氏（桒畑2006）によって，板付Ⅱａ式土器と併行する弥生時代前期中半まで存在することが明示されてきた。さらに，土器付着の炭素年代測定による結果においても，南部九州の刻目突帯文土器は新しい段階まで存続するのではないかと指摘されていた（藤尾2009)。

この様に，鹿児島における刻目突帯文土器の取り扱いについては，まだ一般的な見解となっていないので，改めて大隅半島および薩摩半島での壺形土器や浅鉢形土器を含めたあり方をみてみたい。

曽於市末吉町深川に所在する上中段遺跡では，屈曲の度合いが強い刻目突帯文土器と共に赤色塗彩の土器が出土しており，夜臼式土器の古い段階のものと考えられる。浅鉢形土器は屈曲外反口縁の形状であり，屈曲部や口縁部下が凹線状になるものもある。新しい時期のものは含まないが，古い方へは入佐式土器までみられ，突帯文期のものだけを区別することが課題である。

鹿屋市吾平町中尾遺跡では刻目突帯文土器に伴って，頸部を縦ミガキ調整した夜臼式の壺形土器が出土している。さらに，縄文時代晩期の黒川式土器として報告しているものの，無刻目突帯をもつ浅鉢形土器が出土しており，同一時期のセット関係になる可能性もある。これに装飾のある浅鉢形土器や組織痕土器，脚台と体部の境に三角突帯を巡らす土器も加わる。これらより古い土器は入佐式土器，新しい土器は山ノ口式土器しかなく，ほぼ単独で夜臼式土器に並行する好事例である。

曽於市末吉町深川に所在する楠木岡遺跡では，屈曲の弱い刻目突帯文土器と共に鋸歯文をもつ壺形土器が出土しており，板付Ⅱ式の段階に入っていると考えられる。これらと一緒に装飾のある浅鉢形土器も出土しており，縦長の突起に横方向からの貫通もみられる。

以上が，大隅半島側の弥生時代早期から前期中半までの流れであり，次に薩摩半島側の様相をみていくこととする。

日置市東市来町湯田の市ノ原遺跡第５地点では，夜臼式土器から板付Ⅰ式土器にかけての壺形土器が，刻目突帯文土器と共に出土している。刻目二条突帯甕の下部突帯での屈曲は強く，上部突帯は口唇部より下に付けられる。また，刻目も大ぶりなものが多い。浅鉢形土器は直線的に開く体部に折り返し口縁が付き，安定した平底のものである。中には口唇部にドーナツ状の突起をもつものもある。

一方，近接するいちき串木野市大里の市ノ原遺跡第１地点は板付Ⅱ式の単純遺跡であり，北部九州系の壺形土器と刻目突帯文土器が一緒に出土している。刻目二条突帯甕の下部突帯での内湾はゆるく，上部突帯は口唇部に接して付けられる。また，突帯間に刻目突帯を斜位に施すのもみられ，弥生時代前期中半に存在する事例である。

さらに，市ノ原遺跡第４地点では夜臼式土器から板付Ⅱ式土器の新しい段階まで出土しており，鹿児島では出土例の少ない如意状口縁の甕形土器も出土している。ただし，複数の時期の土器が混在しているため，各時期に分離することは難しい。

これら三つの遺跡の資料は，近接する地点にあって時期がずれていることから比較するのに好都合であり，今後の分析が期待される。

大隅半島と薩摩半島の突帯文期の土器を比較した場合，①両地域とも壺形土器は北部九州のものと遜色なく，編年の基準材料として使える。②刻目突帯文土器の形状変化は同じであるが，大隅半島の方が刻目が大ぶりであり，色調や器面調整などが古色然としている。③折り返し口縁の浅鉢形土器がみられる薩摩半島に対し，大隅半島側の浅鉢形土器は屈曲外反口縁のものが多い。　ことなどが指摘できる。壺形土器以外の器種については，地域差が浮かび上がってきており，今後高橋式土器にみられるような端正な刻目突帯文土器がどのような過程でつくられるようになったかを追究する必要がある。

稲荷迫遺跡出土の突帯文期の土器は長期にわたることと，遺構内の一括遺物でないために，時間的な区別をすることは困難である。少なくとも，北部九州の壺形土器から影響を受けた鋸歯文を描く刻目突帯文土器は，板付Ⅱａ式段階まで存在するということは否定できないと考える。したがって，孔列文土器も南部九州では弥生時代前期まで残ることとなる。孔列文土器は韓半島に初源が求められるものであり，北部九州と山陰地方，それに宮崎平野から大隅半島にかけて集中する。他地域の孔列文土器は内面からの穿孔や刺突であるが，南部九州の孔列文土器は外側からの刺突が主となることが，片岡宏二氏によって指摘されている（片岡1999）。南部九州で出土した孔列文土器が全て新しいものであるとは言えないが，遅くまで残っていることは確かである。一旦伝わった事象や伝承が新しい時期まで残るのは，現在でも都市部から離れた地域ではみられることであり，当時弥生文化の受け入れ口であった北部九州から離れた地域でのあり方を示していると言える。想像をたくましくすると，韓半島の孔列文土器を使う人々と関わりのある集団が北部九州と山陰地方に入り，南部九州ではどちらかの集団と関わりのある人々の暮らしが，弥生時代前期まで続いたのではないだろうか。

また，角南聡一郎氏によって指摘されていた加飾された土器も，稲荷迫遺跡では多くの資料が得られた（角南2000）。縄文時代晩期的な様相を弥生時代前期まで残す点も，水田稲作一辺倒ではない南部九州の実体を示していると言える。

一方，稲荷迫遺跡から直線距離で６㎞にある夏井土光遺跡は弥生時代前期末の遺跡であり，端正な突帯甕が出土しており，稲荷迫遺跡で出土する甕形土器との差がみられる。これが時期差なのか，それとも集団の差，あるいは生業の差なのか今後とも追究しなければならない。

片岡宏二　1999『弥生時代　渡来人と土器・青銅器』雄山閣

栗畑光博　2006「東南部九州における縄文から弥生への土器編年」『大河』第８号　大河同人

角南聡一郎　2000「南九州稲作開始前後の加飾土器－リボン状突起，縦列突帯文と有文土器－」『軍原遺跡』高山町埋蔵文化財発掘調査報告書（８）高山町教育委員会

藤尾慎一郎　1993「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第27号　鹿児島県考古学会

藤尾慎一郎　2009「弥生時代の実年代」『新弥生時代のはじまり第４巻　縄文時代から弥生時代へ』雄山閣

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003『市ノ原遺跡（第１地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006『中尾遺跡　四方高迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（99）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006『市ノ原遺跡（第５地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（105）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008『市ノ原遺跡（第４地点・第２地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（130）

志布志町教育委員会　1991『夏井土光遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（21）

末吉町教育委員会　1986『上中段遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

末吉町教育委員会　1987『四枝道遺跡・辰木岡遺跡・中牛牧遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

(5) 水田稲作導入期における九州の様相

稲荷迫遺跡や大隅半島の該期の様相については上述したので，ここでは九州全体の様相について現状を把握しておきたい。土器型式名については，主に水ノ江和同氏が述べるものを使用した（水ノ江1997)。

①無刻目突帯文土器の段階

北部九州の堀田Ⅱ式，柿原Ⅰ段階，貫・井手ヶ本式，東九州の上菅生B式，中九州のワクド石段階，西北九州の宮の本式，南九州の松添式，干河原段階がこの時期に該当する。深鉢形土器は有肩深鉢の屈曲部が形骸化したもので，仮に屈曲直口深鉢あるいは屈曲内傾深鉢と呼んでおく。屈曲部および口縁部が突帯状に低く盛り上がるものもあるが，すべてがそうなるわけではない。底部は張り出しのある平底で,脚台状に厚みを増すものもある。胴上半で屈曲せずにそのまま口縁部にいたる砲弾形深鉢も多い。口唇部にリボン状や鰭状の突起をもつ深鉢もある。中華鍋形土器はこの段階が最も盛行する時期である。また，底部が丸平底で直立あるいはやや内傾した立ち上がりをもつ寸胴鍋形の土器も,新たにこの時期に加わる。

浅鉢形土器はこれまでの丸底を脱し丸みを帯びた平底となり，口縁部・胴部・底部の各部位に沈線を巡らすものも多く，仮に沈線浅鉢と呼んでおく。器形や大きさに多様性があり，赤色塗彩するものや三叉状の文様をもつものもある。胴張り浅鉢，屈曲長頸浅鉢からの系譜を引くものや，内湾しながら波状に大きく開く新たな器形のものもみられる。胴張り浅鉢の系譜を引くものは，口縁部が少し長くなり胴部最大径のやや下位に沈線もしくは段が巡る。屈曲長頸浅鉢の系譜を引くものは，屈曲部上位に段を巡らし，そのままゆるく外反させるもので，口唇部は内外面から沈線状の浅い線を入れることによって玉縁状に強調される。胴部以下は丸くなるが底部は丸底ではない。口縁部が内湾する浅鉢は，口縁部に沿って外面に沈線もしくは段を入れており，胴部中央付近に沈線を巡らし境とし，それ以下は外反して底部に至るのが特徴である。底部は丸みを帯びた平底で，外面に１条もしくは２条の沈線を巡らしている。菜畑遺跡では８上層で出土していることから，刻目突帯文土器が成立した後も使用されていたことが窺える。

瀬戸内では谷尻式，中部瀬戸内では前池式，近畿地方では篠原式新段階に対応できるものである。

②出現期の刻目突帯文土器の段階

深鉢形土器の口縁端部に刻目を施すようになるが，未だ壺形土器や逆くの字形浅鉢を伴わない段階である。北部九州の松木式，柿原Ⅱ段階，長行段階，東九州の夏足原段階，中九州のアンモン山段階，西北九州の黒丸段階などがあり，福岡県江辻遺跡に良好な一括資料がみられる。孔列文土器もこの段階で多くなり，朝鮮半島からの影響を強く受けている。福岡平野以外の出現期の刻目突帯文土器については，既に刻目突帯文土器が成立した後の影響も考えられ，年代的な位置づけについては炭素年代に頼るしかない。

③刻目突帯文土器の段階

刻目突帯二条甕，刻目突帯一条甕，板付祖型甕，壺形土器，逆くの字形浅鉢，方形浅鉢，高坏がセットとして確立した段階であり，本格的な水田稲作を伴うことから弥生時代早期に該当する。山ノ寺式および夜臼Ⅰ式，夜臼Ⅱａ式が単独で存在し，夜臼Ⅱｂ式は板付Ⅰ式と併存することが山崎純男氏によって検証されている。東九州の下黒野式，中九州の上南部式，南九州の下原式もこの時期のものである。刻目突帯は口縁端部より下がった位置に巡り，刻みが粗大である。壺は丸底に近い平底であり，胴部と頸部の境に段はみられない。南九州でも見られる赤色塗彩された大型の壺形土器は，胎土に金色の雲母が含まれており，北部九州からの移入が考えられる。浅鉢は安定した平底からストレートに開く体部をもち，内側に屈曲して口縁端部が外反する「逆くの字形浅鉢」が確立する。この他，丸椀浅鉢や中華鍋形土器も使われている。

④板付Ⅰ式土器の段階

板付Ⅰ式土器が成立する過程は福岡平野内での変遷が主であり，夜臼Ⅰ式あるいは夜臼Ⅱａ式土器に外来的諸要素を組み入れて分離生成されたことが山崎純男氏によって指摘されてきた。甕形土器は如意形口縁が一般化し，口縁部下に段をもって刻目を施すものもみられる。器面調整は貝殻条痕がみられなくなり，ハケ目調整が主となる。板付Ⅰ式で一般的となるハケ目調整の如意形口縁甕の成立については，韓国中期無文土器を祖とする砲弾形の甕形土器が，板付祖型甕を経ることによって一般化したことが藤尾慎一郎氏によって検証されている。壺形土器の口縁部は外反し，口縁部と頸部および頸部と胴部の境は明瞭で，胴は球形に近く円盤貼り付け状の底部をもつ。壺形土器に彩文が施されるようになるのも板付Ⅰ式土器の特徴であり，以降彩文だけでなく沈線でも文様が描かれる。壺形土器の重弧文に東北地方の亀ヶ岡式系土器が隆線重弧文として深く関わったことが，設楽博巳・小林青樹両氏によって指摘されている。

⑤刻目突帯文の成立過程

刻目突帯文の成立については，大きく３つの意見に分かれており未だ決着をみていない。一つ目は，瀬戸内地方から近畿地方にかけての深鉢や鍵形口縁を呈する浅鉢からの系譜を追うものであり，口縁部下の稜が強調され突帯となるという見解である。この突帯が深鉢にも取り入れられ，瀬戸内地方の深鉢にある刻目が加えられ，刻目突帯文が成立するとの考えである。家根祥多氏や宮地聡一郎氏など近畿地方の土器に接している研究者に，この意見の支持者は多い。二つ目は，東九州に分布する無

刻目突帯文土器が発達したものであるとし，刻目は瀬戸内地方の技法を取り入れたものであるとする小南裕一氏などの見解である。三つ目が，朝鮮半島における刻目を施す「突帯文土器」との関連性を考えるものである。以前は北部九州の刻目突帯文土器との年代差が大きいとされていたが，近年の較正年代によるとその差が縮まっており，再度検討を要する状況となった。

⑥朝鮮半島の土器

藤尾慎一郎氏によると，朝鮮半島の刻目を施す「突帯文土器」には，早期無文土器に該当するものと前期無文土器に伴うものがある。早期無文土器に該当するものは，砲弾形の体部をもち，口縁端部から突帯幅一つ分ほど下がった位置に突帯を貼り付け，ヘラを用いたV字刻目や押し引き刻目を施文するⅠ類である。胴張形の体部をもつⅡ類には，Ⅰ類と同じ突帯と刻目をもつA類と，口縁端部に接した位置に突帯を貼り付けるB類があり，前期無文土器に比定している。早期のⅠ類土器は，前10世紀前後に北方からの影響で変容した在来の有文土器を母胎に，各地で創造された無文土器の一つと考えられている。

なお，朝鮮半島での孔列文土器は前期無文土器の時期に位置づけられている。

⑦器形ごとの縄文土器と弥生土器

ア．壺形土器

壺形土器が刻目突帯文土器の段階に朝鮮半島南部から伝えられたことは，両地域の土器組成が共通することから明らかである。弥生時代になって壺形土器が加わった理由として，種籾を次の年まで保管しておくために，ネズミや害虫などから守る狭い口と豊富に入る胴張りの壺形土器が，本格的な水田稲作の導入と共に必要となったと認識している。水田稲作以前に栽培農耕が行われていたということは，プラントオパールや種子圧痕の発見例から明らかになってきており，焼畑による農耕が想定されている。発見された種子にはイネの他，アワ・ヒエ・オオムギなどがあり，雑穀類として重要な食料源である。アワやヒエも一年性の植物として毎年種子を植えるわけであるが，種子の保管としては20㎝程の茎を残して刈り取った穂をそのまま軒下などの雨に濡れないところで陰干しにしていればよく，特別な容器に入れておく必要はない。種子に残す以外のアワの穂については，クラの中に強く踏みつけて保管したり，カマスに入れて囲炉裏の天井に保存していたことが民俗事例で知られている。また，民俗事例では米やムギなどの種子の保管にも，植物繊維で編んだ袋やカゴ類が使われており，必ずしも壺形をした土器を必要とするわけではない。縄文時代晩期における植物性繊維のカゴ類そのものの発見例はないが，縄文時代早期後半以来数多く出土している網代組みでも，稲籾がこぼれ落ちるようなことはない。また，アワやヒエに関しては民俗事例であったように，粒にして保存するわけではなく穂に付いたままの状態なので，同じ様な網代組みのカゴでも充分である。もう少し目の細かい袋類が必要だったとすれば，少なくとも無刻目突帯文の時期には組織痕として平織・編布・コイリングの編み方がみられることから，アワやヒエの粒も漏れることはなかったと考えられる。この様な点が縄文時代晩期に雑穀栽培が行われていたとしても，必ずしも壺形土器を必要としなかった理由であろう。

なお，南九州では鹿児島県薩摩川内市計志ヶ里遺跡と宮崎県都城市星原遺跡で，無刻目突帯文土器に伴う壺形土器が出土しており，その出自が北であるのか南であるのかの解明が待たれる。縄文時代を通して九州の土器が南島に広がることはあっても，その逆はなかったのであるが，宇宿上層式土器の壺形土器が鹿児島県指宿市南摺ヶ浜遺跡で，喜念式土器の壺形土器が鹿児島県南さつま市上水流遺跡と同市下堀遺跡で出土している。宇宿上層式土器は縄文時代晩期に，喜念式土器は縄文時代後期後半に位置づけられており，壺形の器形は既に南島では一般化しているのである。まだ断片的な資料しかないが，縄文時代後期後半から晩期初頭にかけて南島文化の北上がみられる点は，熱帯ジャポニカが古い段階に存在することと併せて，農耕文化の流入に南の視点も欠かせないことを示唆している。

イ．深鉢形土器と甕形土器

黒川式期から無刻目突帯文期の深鉢形土器と刻目突帯文期の甕形土器には，器形や器面調整に連続性が垣間見られる。無刻目突帯文期になって屈曲内傾深鉢が整い，弥生時代の二条突帯甕と同じ器形となる。土器の上部が内傾することによって煮沸時の熱効率を高め，内容物を残しておく際も保温効果や衛生的な面でも合理的な器形である。また，口の部分が狭いというのは食材を継ぎ足しながら調理するものではなく，一度火に掛けたらそのままの状態にしておくのに適している。さらに，平縁の口縁として定着していることから外蓋が被されたと推察され，穀類の調理に最も適した器形が出来上がったと考える。なお，突帯が巡るようになる点については，口縁部の補強と外蓋を被せることによって噴きこぼれが生じやすくなり，これを炎の部分まで届かないようにする役目があったのではないかと考える。このような雑穀類の調理に適した縄文時代晩期土器の器形は，本格的な水田稲作がはじまった弥生時代にもそのまま採用されたと推察される。刻目を施す点に関しては機能的な面というよりも，朝鮮半島で甕形土器の口縁部に施されていた手法が，そのまま突帯に転化された可能性がある。土器の製作者もしくは使用者による何らかの意図や嗜好だったのかどうか課題として残る。

縄文時代と弥生時代の煮沸用土器における大きな違い

は容量であり，縄文時代の深鉢形土器に比べ弥生時代の甕形土器は小型化することである。縄文時代の雑穀類は雑炊のように様々な食材を一緒に煮炊きしていたのに対し，米食となると米と副食を別々にして煮炊きするようになったことから，甕形土器が小型化したと推察される。

ウ．中華鍋形土器

組織痕がみられることの多い中華鍋形土器は，黒川式期から刻目突帯文期まで連続して使用されている。外面は粗い調整で多くの煤が付着し，内面はミガキ調整によりなめらかで黒く焦げており，加熱して調理する道具である。口縁部が大きく開き浅い形状であることから，食材を炒るのに適している。民俗事例では平鍋を使って成熟前の青い稲籾に火を通すことによって，中身を固め食べられるようにする焼米が知られている。また，雑穀類の殻をはずすのには熱を加えて強制的に乾燥させる方法もとられており，雑穀類が既に栽培され初期の稲作が始まった時期にみられる中華鍋形土器も，同様な行為を行うために使われたと想定される。深鉢形土器・甕形土器と中華鍋形土器はいずれも煮沸用の道具であり，煮る・炊く・沸かす・蒸かす・炒るなどの行為はそれ以前から連綿と続けられてきたもので，新来の文化が流入してきたとしても器形が大きく変わることはなかったと考える。

エ．浅鉢形土器

天城式期から古閑２式期にかけての浅鉢が機能している状況は，埋設土器の蓋としてみることができる。単に転用したとみるよりも，煮沸あるいは水などの保管に深鉢が使われている時，浅鉢を蓋として使っていたとしてもおかしくない。本来の機能は丸底が続く黒川式期を通して，単に盛り付け用としてしか想定されていない。弥生時代にはいると規格性のある逆くの字形浅鉢となり，ご飯が銘々につぎ分けられるようになったと考えられる。

オ．高坏形土器

高坏形土器は九州島内の縄文時代土器様式にはなかったもので，水田稲作に伴う生活上必要な道具として移入されたものである。一遺跡からの出土数が限られていることと，ご飯をつぎ分ける容器としては逆くの字形浅鉢が存在することから，豊穣を祈る祭祀用として水田稲作と共に入ってきたものであると考えられる。

カ．小結

刻目突帯文土器の成立については，これまで刻目を施した突帯をもつ深鉢や甕形土器そのものについてだけを追究するきらいがあった。それは，刻目突帯文土器の源流がどの地域にあったか明らかにするために重要なことではあるが，ともすると弥生時代の開始もその地域であることを錯覚しかねない。本格的な水田を伴う弥生土器は，菜畑遺跡９～12層出土土器がもっとも古いということは，発見から四半世紀過ぎた現在でも変わらない。菜畑遺跡９～12層出土土器である山ノ寺式土器と夜臼式土器に刻目突帯文・壺・逆くの字形浅鉢の３点セットが伴うことから，土器からみた弥生時代開始の指標もこの３点セットに求められる。成立期の刻目突帯文土器である江辻遺跡出土の一群は，壺を伴わない点を含めて菜畑遺跡９～12層出土土器との形態差も認められ，この間に食生活具を発展させる大きな変化，すなわち水田稲作の導入があったと考えられる。刻目突帯文・壺・逆くの字形浅鉢の成立については，朝鮮半島も含めて西日本の中でその起源を探っていかなければならない。その際，考古学的な手法と共に年代測定も併用することによって，最初期の水田と最古の弥生土器が明らかにされることが望まれる。

筆者は南九州において，縄文時代晩期終末に未命名型式土器が２・３存在するものと認識していたが，それは無刻目突帯文土器様式と刻目突帯文土器様式との差があまりにも大きかった為である。しかし，この断絶とでも言うべき土器様式の非連続性こそが，水田稲作を主体とする弥生文化の流入なのであり，食器類を中心とした生活様式が変化したことを示している。それは九州内においても同じであり，土器付着物の炭素年代では弥生時代前期後半まで縄文系の土器が残っている状況がみられる。唐津平野から福岡平野も含めて，各地域での弥生化の仕方はかなり多様であったことがわかる。遺跡における共伴関係については常に問題とされるところであるが，「縄文土器あるいは縄文系土器と弥生土器が共存する可能性もある」という意識をもって，遺跡内での出土状況を把握する必要がある。それと共に，可能な限り個体別の土器付着物による放射性炭素14年代測定を行うことによって，層位学的あるいは型式学的な方法の限界を補い，当時の実態に近づいていくことが望ましい。

水ノ江和同　1997「北部九州の縄文後・晩期土器
－三万田式から刻目突帯文土器の直前まで－」
『縄文時代』第８号　縄文時代文化研究会

(6) 弥生時代前期までの小結

以上のように，稲荷迫遺跡で出土した縄文時代早期前葉から弥生時代前期までの土器の様相をみてくると，冒頭であげた①～④の固定観念だけで語ることは難しい。もちろん，一括遺物として捉えられたものではない資料を使って云々言うのは早計であることは承知しているが，これまで南九州でみられる状況を基に述べていきたい。

土器を区別するものは，「時間的空間」・「地域的空間」であることは承知しているが，これに「集団的空間」という認識が抜け落ちているのではないかと考えるのである。南九州の縄文時代のあり方は，例えば「市来式土器から丸尾式土器」に「鐘崎式土器や北久根山式土器」が

伴うように，地域を異にする土器型式同士が一緒に出てくる。これと同様に，異なる地域を主体とする型式の土器同士が同じ場所で使われていて当たり前であるということを鹿児島の遺跡が示していると考える。これまでの考古学における縄文土器研究は「時間的空間」の把握ばかりに傾注し，「地域的空間」や「集団的空間」の研究をおろそかにしてきたのではなかろうか。

今回，土器胎土に注意を払ってみてきたが，例えば市来式土器の中に金色雲母が入っているものとそうでないものが同一遺跡から出土していることを，「集落内の同じ製作者が，粘土を違えて土器をつくった」と説明するのは無理がある。鐘ヶ江賢二氏による偏光顕微鏡での胎土分析にあるように，稲荷迫遺跡出土の弥生土器の胎土は少なくとも①地元的なもの②日南層に由来するもの③深成岩によるものの３種類が確認でき，縄文土器についても今回は間に合わなかったが近く公表できるだろう。鹿児島大学総合研究博物館館長の大木公彦教授によると，正長石の成分分析を行えば，花崗岩であっても地域的な差が出てくるのではないかとのご教示を得た。稲荷迫遺跡出土の花崗岩質胎土には，金色雲母の大粒のものや小さなもの，白色鉱物が目立つものと目立たないものなどがみられ，産出地の違いが考えられる。今後，科学的な分析を試みることによって，産出地を明らかにすることが課題である。さらに，産出地の異なる胎土の土器が，なぜ同じ遺跡で使用されたのか考えなければならない。

最後に，今回の反省としてあげられるのが接合にかける時間が短かったことである。スタッフは精一杯頑張って30個体以上の口縁部から底部までつながる完形土器を仕上げてくれたのであるが，不明土器や未消化の土器を少しでも減らすには，接合によって全体像を明らかにしておくことが大切である。特に，もし土器片から籾やコクゾウムシの圧痕が検出された場合は，所属時期が明らかでなければ資料価値は無いに等しい。接合を的確に行うためにも，「土器の血液型」にあたる胎土に注目して分類していきたい。地質が多様であり，しかも多くの離島のある鹿児島であるからこそ，この様な作業は有効である。鹿児島から土器のあり方を発信していきたい。

(7) 弥生時代中期

稲荷迫遺跡では弥生時代前期末から中期前半の良好な資料が得られた。これらは，河口貞徳氏の述べる入来式土器や中園聡氏による入来Ⅱ式土器に該当する。南九州の弥生土器を前期と中期にはっきりと区別することは難しく，壺形土器と甕形土器の頸部に沈線が入るものを，前期そのものなのか中期まで残ったものかの判断は今後の年代測定に委ねたい。土坑墓に伴って入来Ⅰ式の壺形土器と入来Ⅱ式の甕形土器が一緒に出土したことは，両者が同時に使われていたことが分かる良好な資料である。入来Ⅰ式土器は，入来Ⅱ式土器が成立した以降も使われ続けていたということを示すものである。胴部に焼成後の穿孔が成されていることから，日常的な道具を非日常的な祭祀用具としたことが窺える。鹿児島県内での弥生時代における祭祀遺構や祭祀遺物は，錦江町山ノ口遺跡や志布志市松山町京ノ峯遺跡，指宿市成川遺跡などが知られているが，いずれも山ノ口式土器の時期のものである。京ノ峯遺跡の祭祀遺構は周溝墓に伴うものと考えられており，墓前祭祀という点では稲荷迫遺跡と共通し，同じ地域での墓の変遷に注目していかなければならない。

(8) 土器の総重量

本誌に掲載した以外の稲荷迫遺跡出土土器の総重量は，712kgであった。個数を数えられなかった小破片が120kgであり，時期を特定できなかったものは5,193点91.2kgであった。縄文時代早期で型式が特定できなかったのは，238点，4.9kgである。縄文時代早期前半の岩本タイプは144点5.2kgで，加栗山タイプは664点11.7kgであり縄文時代の中では多い量であった。それに続く石坂式土器は31点1.6kgで，下剥峯式土器は16点0.4kgである。縄文時代早期後半の手向山式土器・平栫式土器・塞ノ神式土器は57点1.5kgで，主体的に住んでいたとは考えられない。市来式土器と丸尾式土器は325点6.0kgであったが，中岳式土器1,672点37.5kg，浅鉢形土器491点4.4kg，突帯文期10,354点232.9kgで生活の舞台になっている。ただし，この時期の煮沸土器の胎土は類似しているため，700年近い年代幅がある。弥生時代前期の壺形土器は1,449点38.7kgであり，前期末から中期は3,577点90.3kgである。古墳時代は3,375点63.6kgで，古代８点0.1kg，近世116点2.0kgであった。

第３節　縄文時代早期の石器

早期相当包含層からは打製石鏃を中心とする剥片石器，及び後期・晩期以降には見られない石斧などの発見がある。また石材についても，黒曜石の産地が早期特有のものである場合が，多々確認できる。また，石器素材を見る限り，広域的な交流が進んでいたことは間違いない。

縄文時代後期・晩期相当期の石器

剥片石器及び礫石器について石器組成をグラフで表した。本遺跡では，ツールとしての出土は打製石鏃が11％を占めている。当該期遺物として，打製石斧（石製土掘具）が共伴出土している。狩猟としての石鏃，農耕生産具の土掘具といわれるように，農耕への使用が想定される打製石斧の出土状況から，狩猟及び農耕作業を平行して行う当時の生業が浮かび上がる。また，石錐や砥石，ノミ型石器等の加工具も共伴検出することから，一定期間の定住形態を窺い知ることができる。

また本遺跡は，景勝地として知られるとどろ渓谷を見下ろす高台にあり，現在でも年間を通して豊富な水量を誇る安楽川及び尾野見川に囲まれ，季節に応じて鰻，鮎，オイカワ，モクズガニ，手長エビ等々，漁業資源が豊富である。内水面での漁労を行う上で，絶好の好立地だったことは間違いない。数点の石錘の出土も，このことを物語っているように感じる。川を挟んだ中原遺跡では，石錘が462点検出されている。本遺跡出土の遺物と石材を同じくし，形状，重量的にも同様のアベレージである。また，遺跡の立地上の性格から，海での漁を日常的に行っていたとは考えにくい。そのため，内水面での漁が行われた可能性が高い。石錘出土状況から，漁網錘としての可能性がある石錘は漁場近く，すなわち住居とは別の場所に保管していた可能性を否定できない。

近隣の，志布志湾に面した遺跡で，海洋漁業に関するであろう石錘との比較検討も必要であろう。

また，食材加工具としての磨石・敲石が46%と突出した出土状況であるのも河川礫の石材獲得が容易であることと関係しているものと思われる。ただ，磨敲石類はその後相当期間使われるため，一概に同時期に突出しているとは言い難いことも事実である。

磨石としての使用・砥石としての使用

先にも述べたが，本遺跡では河川流域ということもあり，河川礫を使用した磨石，敲石はじめ，素材礫として持ち込まれたであろう礫が圧倒的に多い。

その中で，磨石としての使用痕は残しつつ，平坦面の凹みに明らかな溝状研磨痕が確認できるものがある（Ⅳ類に分類）。使用過程は，平坦面敲打の後，窪み部分を活用して何かしらかを研磨した様子が窺える。そこで共通することは，研磨痕は平面を正面に据え，長軸を上下に置くと，一時方向から五時方向へ（或いは逆）の研磨の跡がくっきりと浮かび上がる。石材の研磨，或いは金属製品の研磨に使用したのかは特定できないが，特殊な製品の研磨加工に用いた可能性がある。類例を知らず，比較検討はできないが，今後の調査･報告に期待したい。

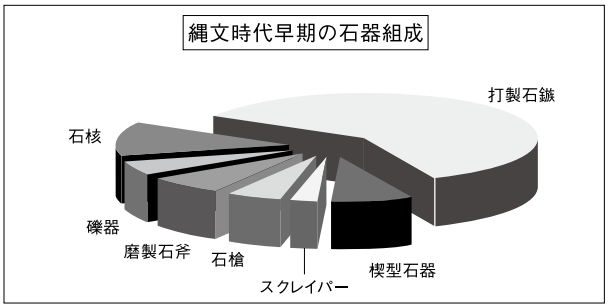
古墳時代の勾玉・管玉について

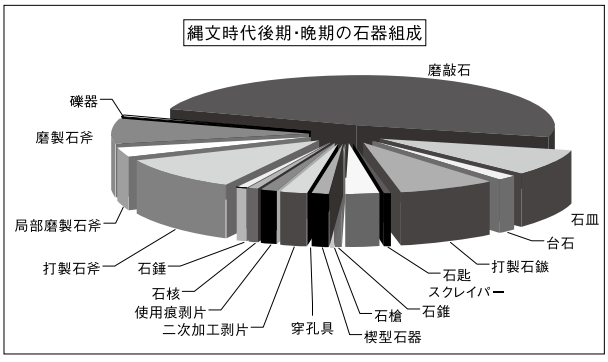
古墳時代の住居内及び周辺から，勾玉，管玉の出土がある。勾玉は長経1.56㎝・重さ1.82ｇと小型のものであるが，緑色の鑞幹部分を持つ，当時としても大変貴重な石材を使用し，作製されている。また，管玉においては，住居内からの出土という，希な出土状況である。

北部九州における玉類製作工程の変遷からみると，弥生時代に成立した定型勾玉は古墳時代にも引き続き用いられる。しかしやや小振りになり，頭部のくびれは持たないという形式変化がみられる（河村2009）ことから，本遺跡出土の勾玉も，この形式に当てはまるものと思われる。穿孔も出雲式でいうところの，古墳時代の特徴として両側穿孔加工が多く用いられる（米田2009）。

また，国内の翡翠産地は，糸魚川周辺のみならず，長崎県や静岡県等に数カ所存在するが，垂飾品としての加工価値があるものは，糸魚川周辺に産する素材に限られる。製作場所についても，北部九州の玉作り遺跡は潤地頭給遺跡や城野遺跡等数カ所があげられるが，翡翠勾玉の生産地は未発見である。従って，本遺跡出土の玉類については，石材採取地及び製作場所も北陸地方の可能性がかなり高いと推測できる。ただ，北陸産であれ近畿産であれ，おそらく伝播の過程で，北部九州を経由したと考える方が無難であろう。

縄文時代から古墳時代の硬玉製玉類については，県内出土を再確認し，伝播や作製について，多面的に研究していく必要があろう。





第４節　古墳時代

古墳時代の住居跡は，方形の４本柱で，中央に地床炉をもつ住居跡群が検出された。南側に開く住居跡の配置は，今後留意しておく必要がある。なお，この時期の住居跡には，４本柱の掘立柱建物跡や大型の土坑などを伴うことが多いが，本遺跡では検出されていない。大型の甕形土器が出土した土坑が一基検出されている。

古墳時代の竪穴住居跡については，中摩浩太郎の研究がある（中摩　1999)。方形主柱４本の竪穴住居跡は，平行枠採用型ということで，大型家屋の類型であり，弥生時代終末～古墳時代初頭において，南部九州の薩摩半島西部と南東部に波及し，後続する時期に薩摩半島東岸地域および大隅半島地域に波及していくとされている。

大隅地域でのこの類型は，その後，肝付町東田遺跡，鹿屋市吾平町中尾遺跡，志布志市有明町長田遺跡などで検出されているが，指摘のとおり，東原式土器以降である。ただ大隅半島側での発掘例が少ないことは注意を要する。壁帯溝については，志布志市有明町長田遺跡で検出され，貼り床についても，志布志市有明町仕明遺跡などで検出されている。住居跡の構造を考える上で，さらに精査した調査が望まれるところである。貼床，中央の地床炉については，笹貫式土器の時期に一般化できると思われる。

１号住居跡は，須恵器の坏蓋の写しから，６世紀中頃から後半の時期が考えられる。４号住居跡は下位埋土の遺物と，半分ほど埋没した穴に投げ込まれた土器群があり，土器群は２時期にわかれる。

912，913，917，920，921，925，926，930，932，933が上位で，916，919，928，929，931が下位から出土している。小型坩形土器は口縁部が長いものから短く，甕形土器は外開きから直立・内湾の器形へ，高坏形土器は坏部が小さく，屈曲の強いものから，深く椀状を呈するものへと，型式変化していったように窺われる。

上位の土器群は３号住居跡と近い時期の遺物が投げ込まれているものと考えられる。

住居跡の変遷は，４号→３号・２号→１号となると考えられる。２号・３号住居跡が営まれていた時期に，陥没した４号住居跡が存在していたということである。なお１号住居跡の出土土器と３号住居跡等の出土土器との差は僅少であり，同時期に併存していたことも想定される。

出土土器は，笹貫式土器である。成川式土器の最終段階は，笹貫式土器とされ（中村　1987)，その下限は当初６世紀末を想定されていたが、その後一緒に出土した須恵器や，指宿市橋牟礼川遺跡の層位などから，８世紀まで存続するとされてきた（中村　2009)。

本遺跡の成川式土器にも須恵器が伴っている。このうち，坏蓋はⅡ期２段階のもので，６世紀前半と判断されるが，住居跡外の場所のものと接合しており，遺跡の上限を示す可能性があるが，住居跡の時期の決め手とはならない。須恵器の坏蓋の写しとして，Ⅱ期３段階以降の写しとして６世紀後半の時期が推定できる。

なお須恵器の住居跡内の共伴については，肝付町東田遺跡13号住居跡，同26号住居跡，肝付町永野原遺跡２号住居跡，鹿屋市吾平町中尾遺跡11号住居跡，志布志市有明町上苑Ａ遺跡竪穴住居３，同竪穴住居６，など大隅半島側と，南さつま市辻堂原遺跡55号住居跡，南さつま市上水流遺跡10号住居跡，日置市吹上町尾ヶ原遺跡４号住居跡（廃棄土器群)，日置市吹上小中原遺跡４号住居跡など類例が増加している。これらでの共伴関係を検討した中村直子は（中村　2009)，現段階の資料では，高坏形土器以外は，顕著な形式変化が見られないとしている。今後も類例等の検討を続けていく必要がある。

甕形土器のミガキについて，器壁を薄く仕上げるための技法（中村　2009　126頁）との指摘がある。口縁部が内湾する笹貫式の甕形土器は，７世紀の第４四半紀降下の青コラより上層にも存在し，指宿地方南部に目立っていた（鎌田　2006)。甕形土器のミガキについての指宿地方の地域性の指摘は，調整技術の変化の方向性は指摘の通りであるが，地域性は調査例の多寡によるものである可能性もあり，むしろミガキ技法の多用が，笹貫式の新段階の特徴と考えることもでき，資料の増加を待っての再検討が必要である。

本文中に，胎土について述べたが，透明な石英を多く含む日向系の搬入品と，角閃石をわずかに含む曽於地域の土器（台地及び肝属平野北部）と，大粒の金色雲母を多く含む大隅半島南部（国見山系）に関わりが認められる土器があり，他の遺跡での比較により，交流や通婚圏等の文化人類学的な分析につながる可能性がある。

〈参考文献〉

中摩浩太郎　1999「南部九州古墳時代の竪穴住居類型の変異に関する一考察」『人類学研究』人類学研究会

中村直子　1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号

中村直子　2009「７・８世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考』南九州縄文研究会

鎌田浩平2006「古墳時代指宿地方における土器の様相」『Archaeology from the South』人類学研究会

写 真 図 版

安楽川から鹿屋方面を臨む

図版 2

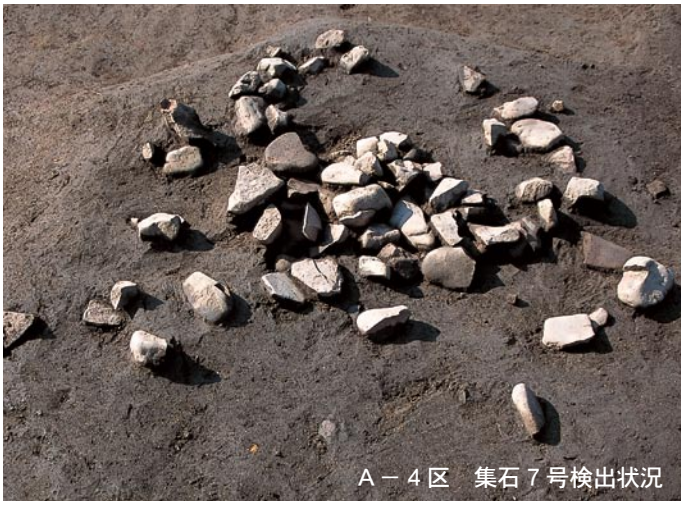
散礫検出状況

集石検出状況

Y－3区　集石 1 号検出状況

Z－4区　集石 3 号検出状況

Z－3区　集石 2 号検出状況


A－4区　集石 7 号検出状況

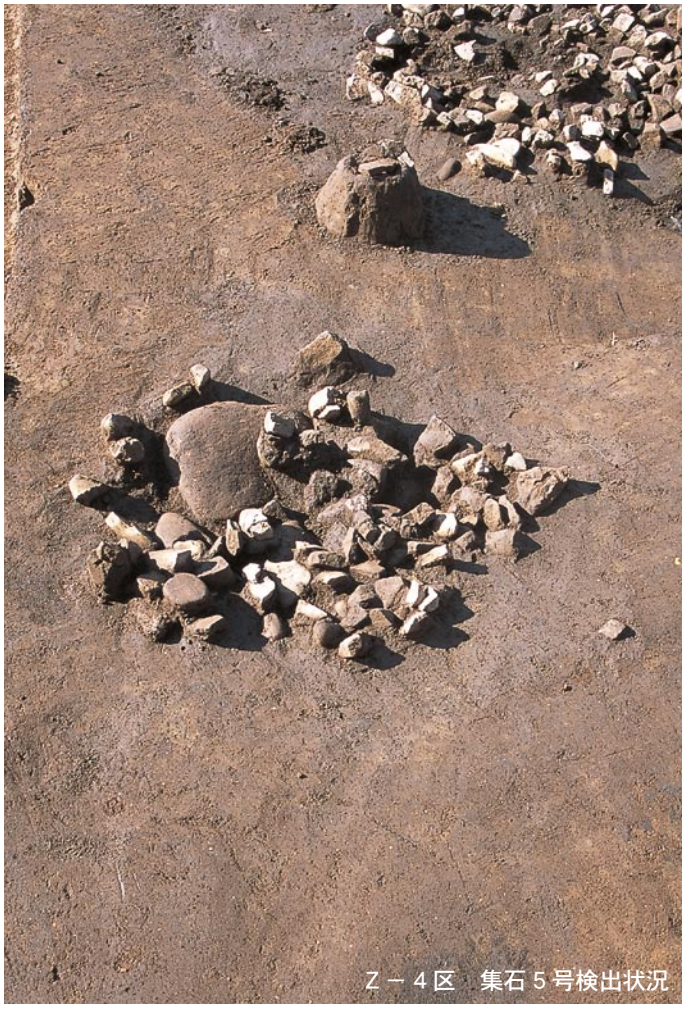
Z－4区　集石 4 号検出状況

A－4区　集石 6 号検出状況

A－3区　集石 14 号検出状況

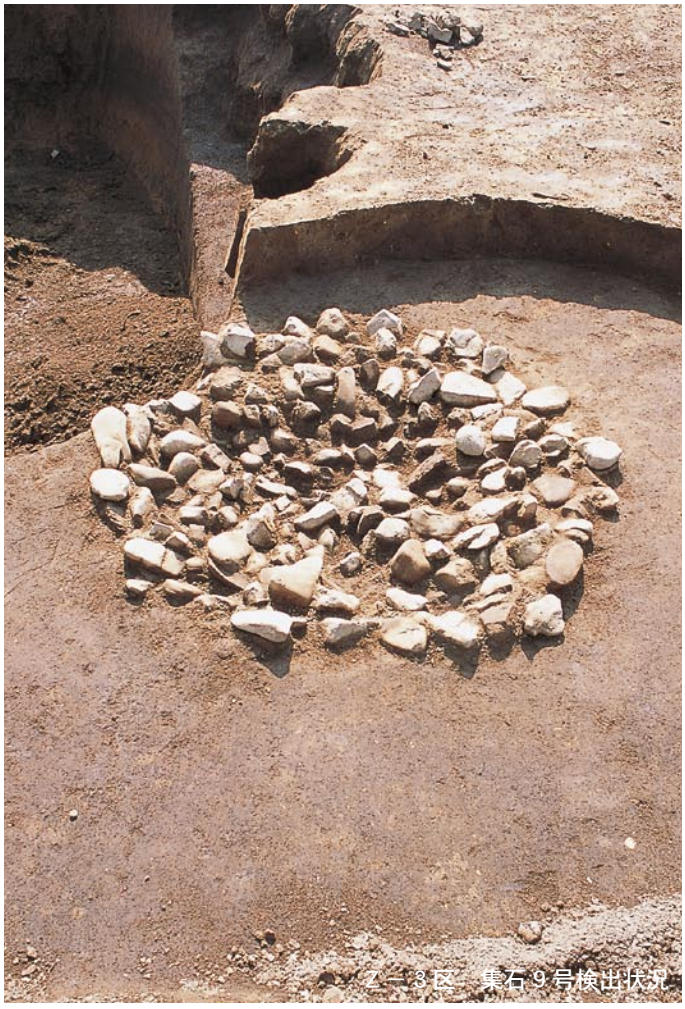
A－3区　集石 15 号検出状況

図版４



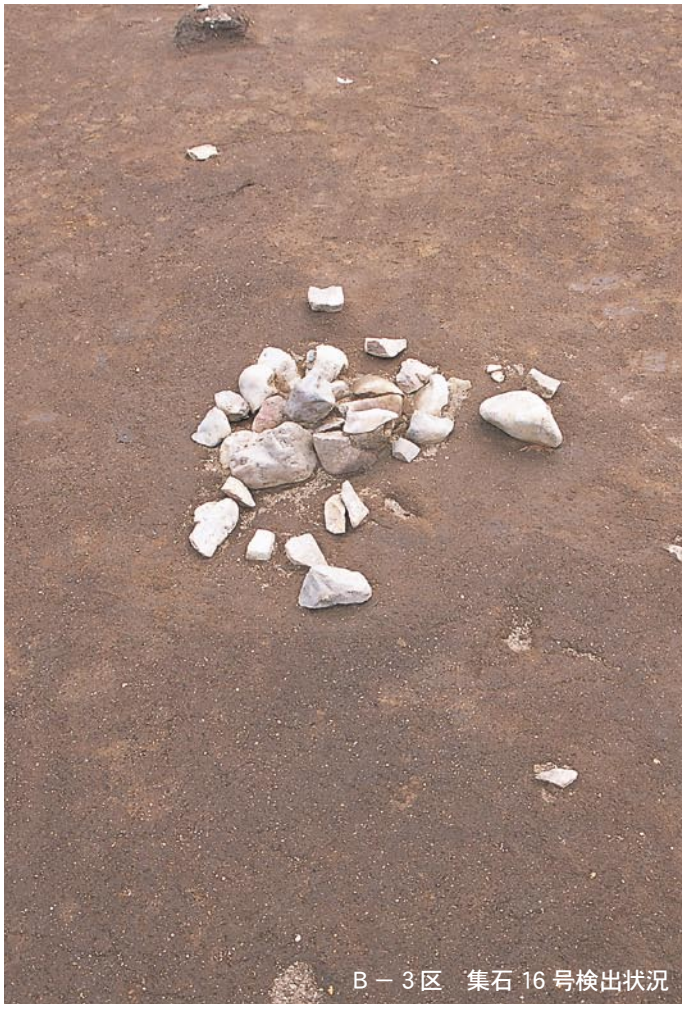
Ｚ－４区　集石５号検出状況

Ｂ－３・４区　集石 18 号検出状況



Ｚ－３区　集石９号検出状況

Ｚ－４区　集石９号底石検出状況


B－3区　集石 16 号検出状況

A－3区　集石 12 号検出状況

A－3区　集石 11 号検出状況

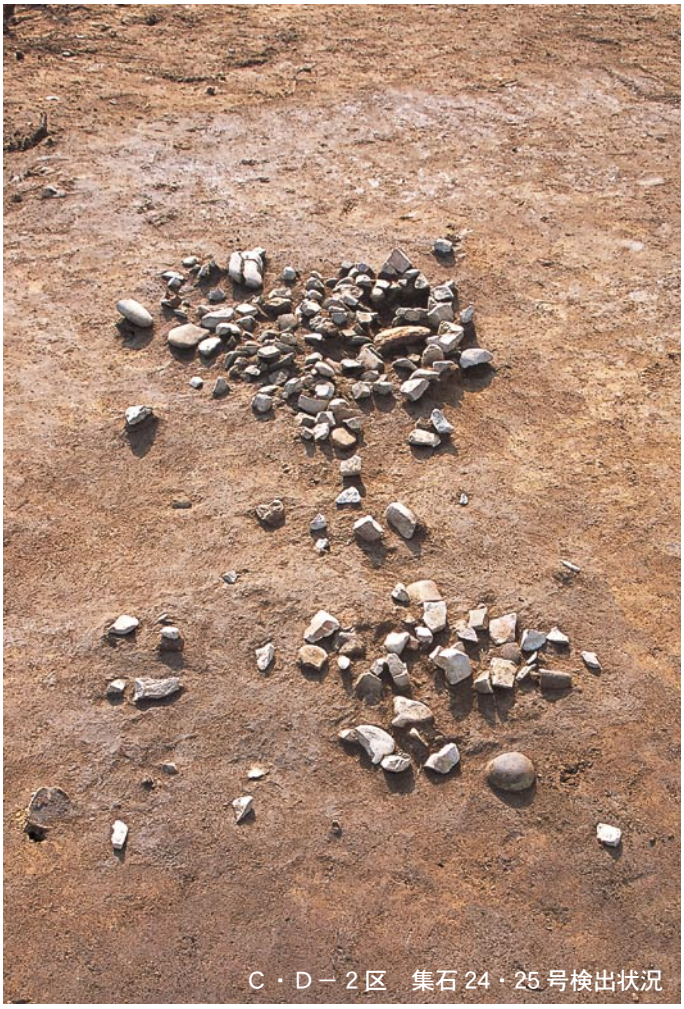
A－3区　集石 10 号検出状況

A－4区　集石 17 号検出状況

D－2区　集石 26 号検出状況

図版 6

C・D－2区　集石 25 号検出状況


C・D－2区　集石 24・25 号検出状況

C－2区　集石 24 号検出状況

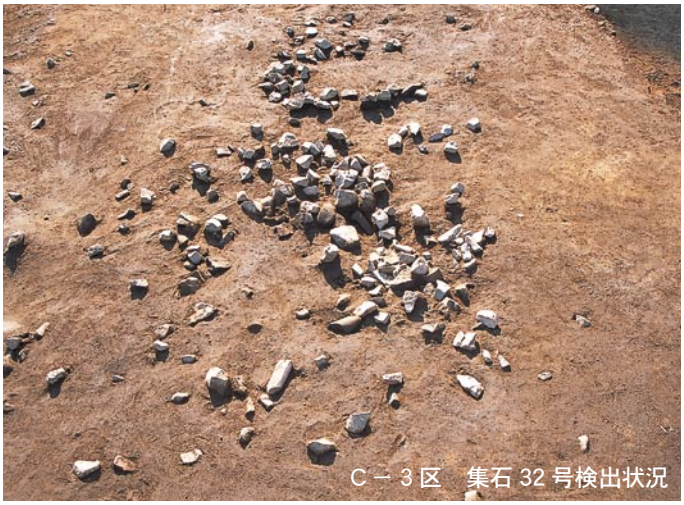
D－2区　集石 26 号検出状況

B－4区　集石 36 号検出状況

B－3区　集石 30 号検出状況

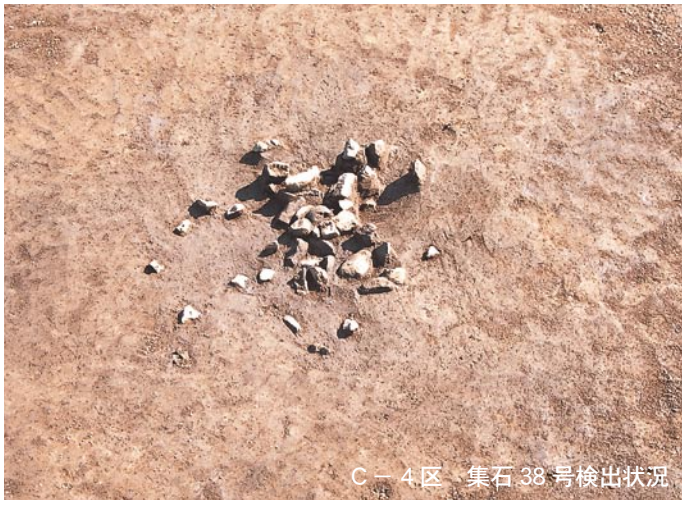
B－3区　集石 29 号検出状況

C－3区　集石 33 号検出状況


C－3区　集石 32 号検出状況

C－3区　集石 34 号検出状況

C－4区　集石 37 号検出状況


C－4区　集石 38 号検出状況

C－4・5区　集石 39 号検出状況

C－5区　集石 41 号検出状況

C－5区　集石 40 号検出状況

図版８

B－6区　集石 42 ～ 45 号検出状況

B－6区　集石 44 号検出状況

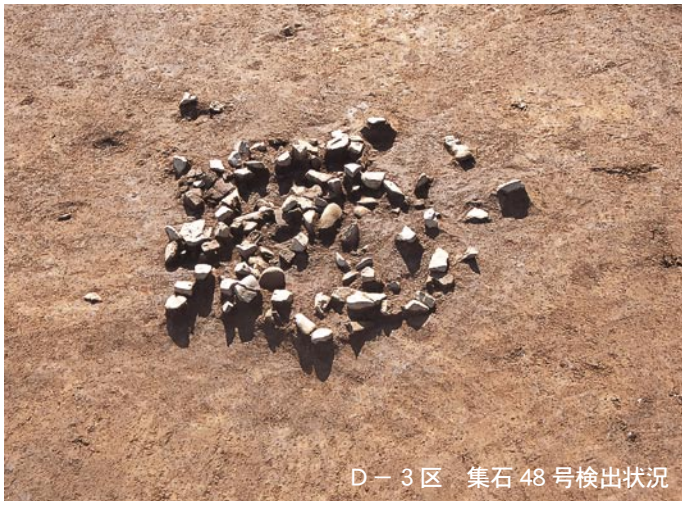
B－6区　集石 45 号検出状況

B－6区　集石 43 号検出状況

B－6区　集石 42 号検出状況

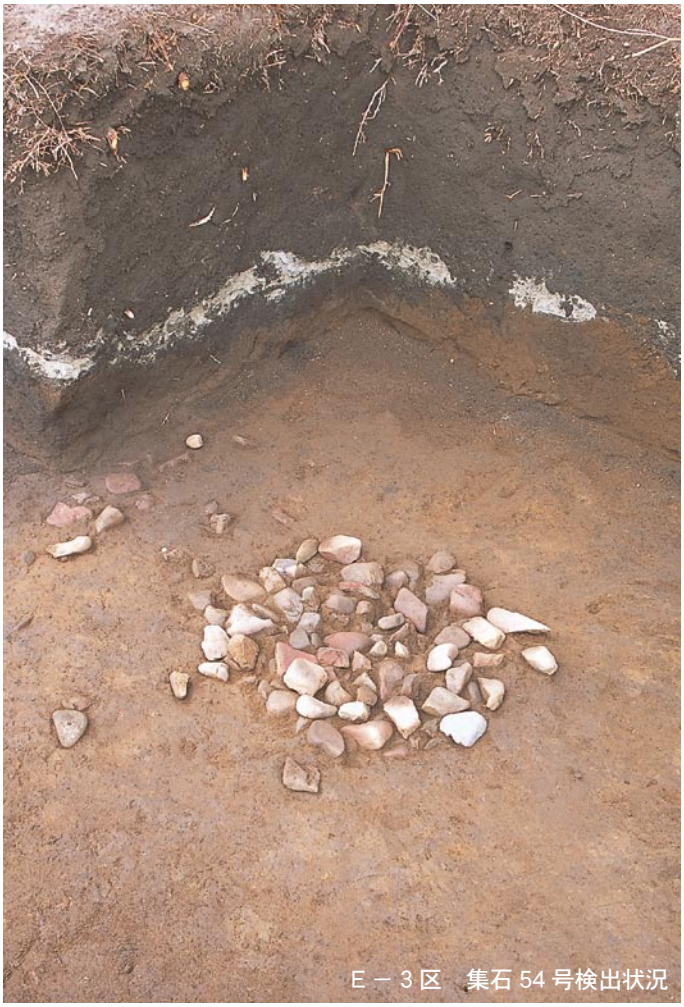
D－2・3区　集石 47 号検出状況

D－3区　集石 46 号検出状況


D－3区　集石 48 号検出状況

E－3区　集石 52 号検出状況

D・E－2・3区　集石 49 号検出状況


E－3区　集石 54 号検出状況

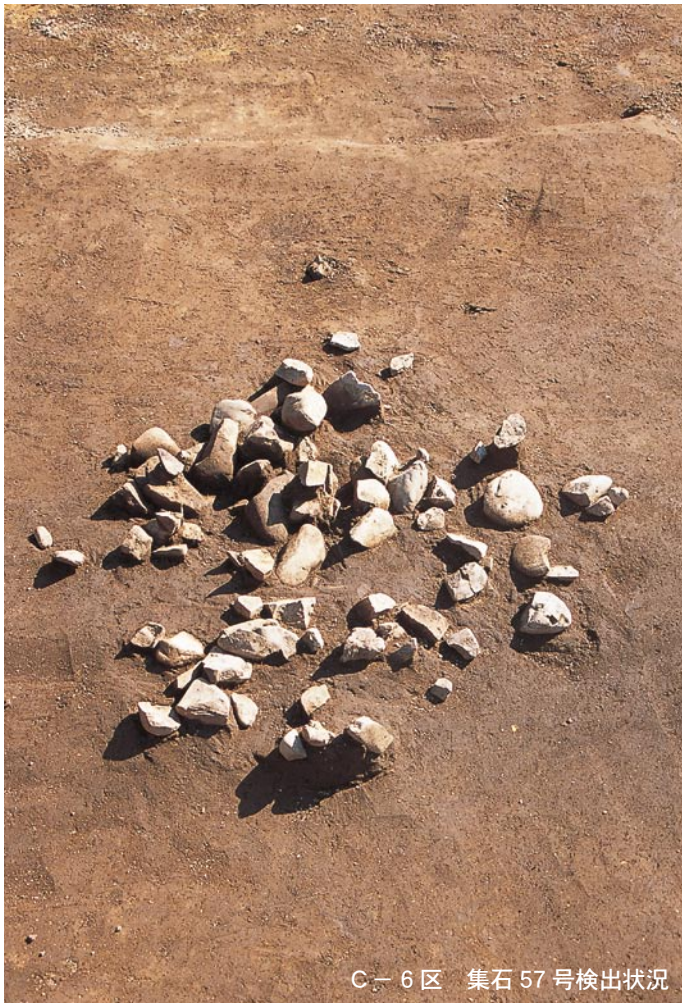
図版 10

D－4区　集石 55 号検出状況

C－3区　集石 28 号検出状況

D・E－6区　集石 59 号検出状況

D・E－7区　集石 63 号検出状況


C－6区　集石 57 号検出状況

D－8区　集石 64 号検出状況

D－7区　集石 62 号検出状況

B－4区　連穴土坑2号検出状況

B－4区　連穴土坑2号半截状況

B－4区　連穴土坑2号断面状況

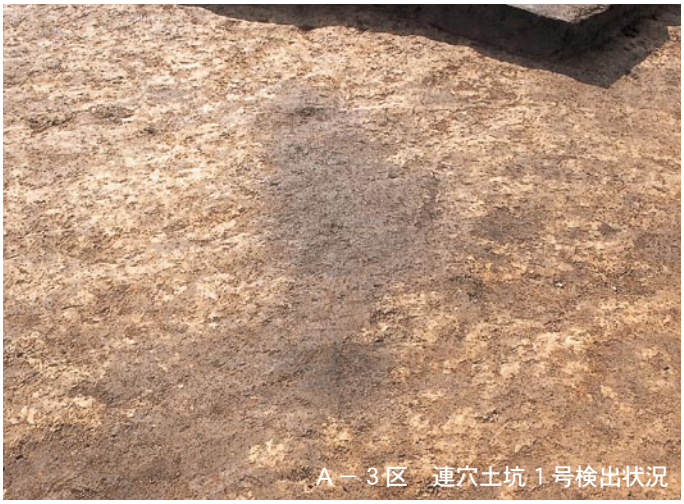
B－4区　連穴土坑2号完掘状況

図版 12

C－4区　連穴土坑3号検出状況

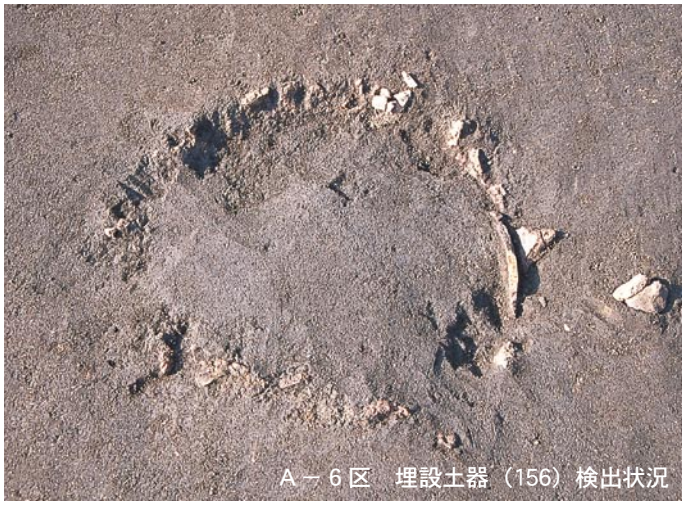
C－4区　連穴土坑3号完掘状況

C－4区　連穴土坑3号内土器出土状況



A－3区　連穴土坑1号検出状況

A－3区　連穴土坑1号断面状況


A－6区　埋設土器（156）検出状況

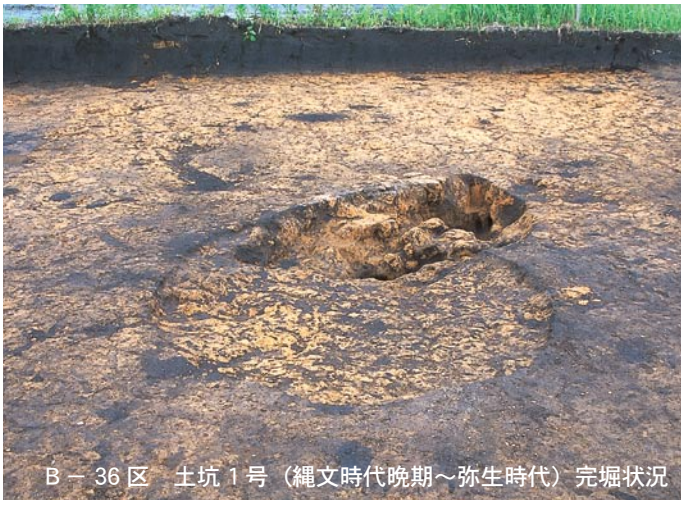
B－5・6区　埋設土器（156）断面状況

D－7・8区土坑8号（縄文時代後期～弥生時代）内遺物出土状況

G－43区　土坑9号（縄文時代晩期～弥生時代）完堀状況

G－43区　土坑9号（縄文時代後期～弥生時代）検出状況

B－36区　土坑1号（縄文時代後期～弥生時代）検出状況


B－36区　土坑1号（縄文時代晩期～弥生時代）完堀状況

図版 14

D－38区　土坑2号（縄文時代晩期～弥生時代）検出状況

D－38区　土坑2号（縄文時代晩期～弥生時代）完堀状況

C－38区　土坑3号（縄文時代晩期～弥生時代）検出状況

C－38区　土坑3号（縄文時代晩期～弥生時代）半掘状況

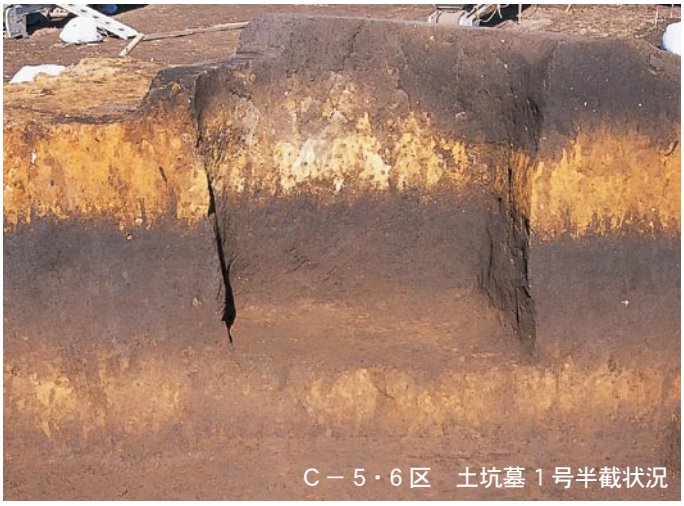
F－41区　土坑4・5号（縄文時代晩期～弥生時代）検出状況

F－41区　土坑4・5号（縄文時代晩期～弥生時代）完掘状況

C－5・6区　土坑墓１号検出状況

C－5・6区土坑墓１号埋設土器

C－5・6区　土坑墓１号完掘状況



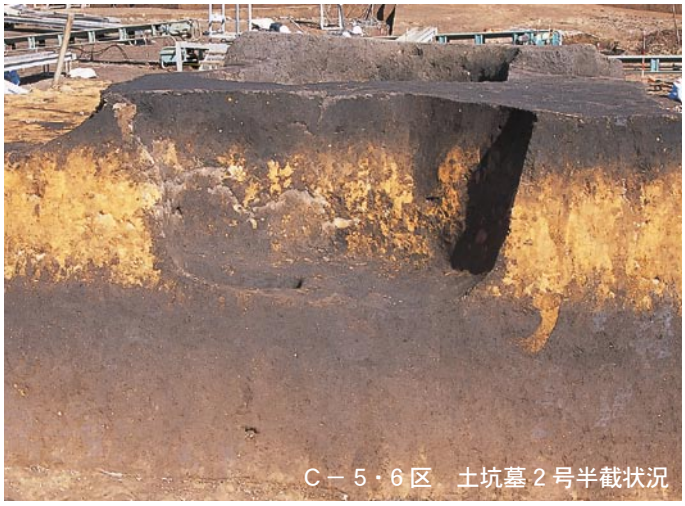
C－5・6区　土坑墓１号半截状況

C－5・6区　土坑墓１号埋設土器検出状況

図版 16

C－5・6区　土坑墓2号検出状況

C－5・6区　土坑墓2号断面状況


C－5・6区　土坑墓2号半截状況

C－5・6区　土坑墓1・2号検出状況

D－39区　土坑11号（縄文時代晩期～弥生時代）検出状況

D－39区　土坑11号（縄文時代晩期～弥生時代）内遺物出土状況

C－35区　土坑12号（時期不詳移行）完堀状況

B － 44 区　古墳 1 号住居検出状況

B － 44 区　古墳 1 号住居断面状況

B － 44 区　1 号住居完掘状況

図版 18

B － 44 区　古墳 1 号住居土坑内坏検出状況

C － 43 区　古墳 2 号住居内遺物出土状況

C － 44 区　古墳 2 号住居完掘状況

D－44 区　古墳 3 号住居検出状況

D－44 区　古墳 3 号住居断面状況

D－44 区　古墳 3 号住居内遺物出土状況

図版 20

B － 47 区　古墳 4 号住居検出状況

B － 47 区　古墳 4 号住居内遺物出土状況

B － 47 区　古墳 4 号住居完堀状況

8

26

47

48

50

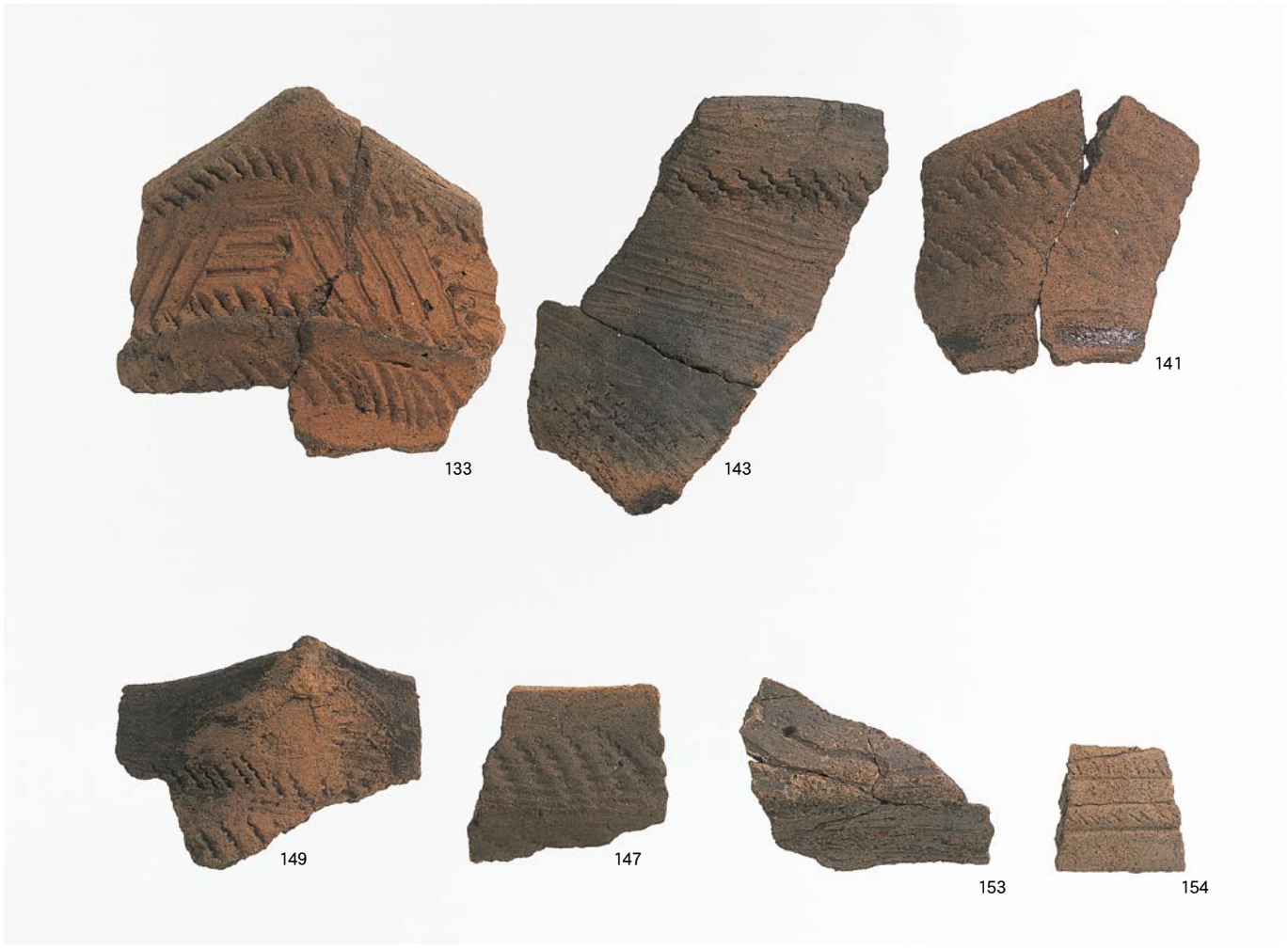
53

54

58

図版 22

縄文時代早期の遺物②

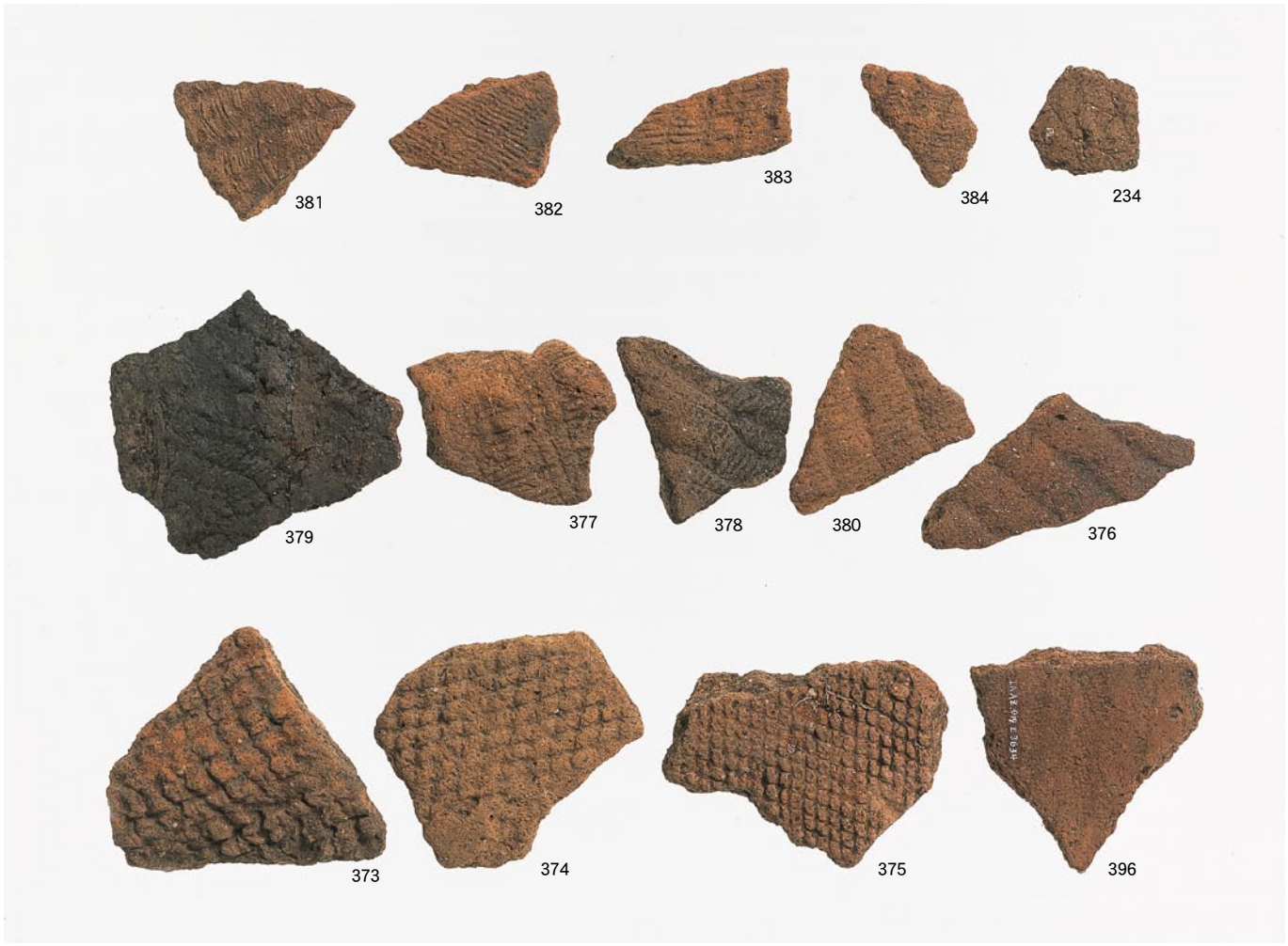


縄文時代後期の遺物①

図版 24

縄文時代後期の遺物②

200
209
222
214
210
232
234
221
241

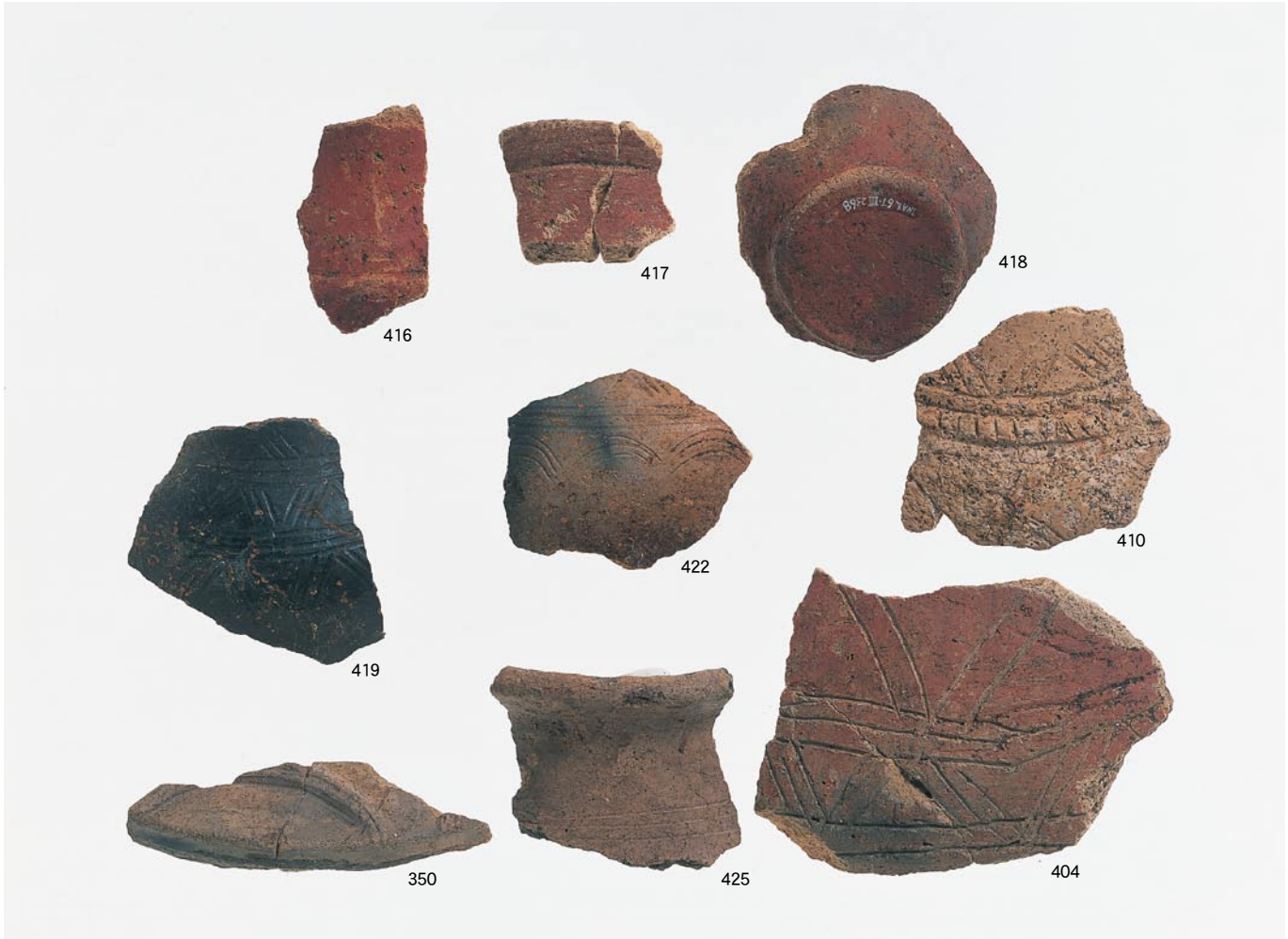

381
382
383
384
234
379
377
378
380
376
373
374
375
396

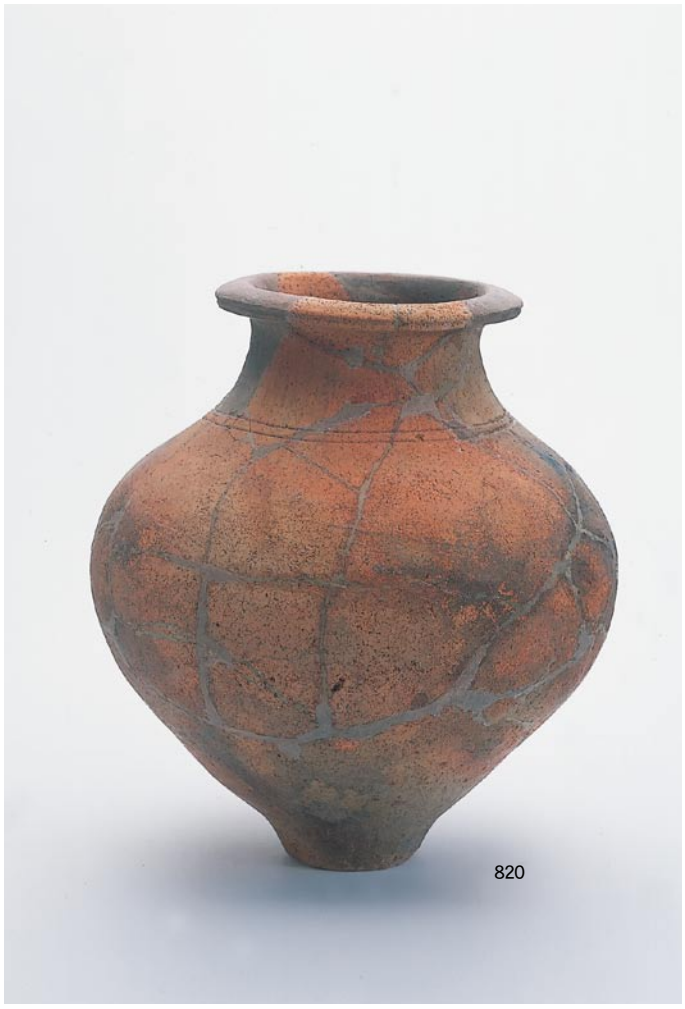
縄文時代後期の遺物③

縄文時代晩期～弥生時代早期の遺物①

縄文時代晩期～弥生時代早期の遺物②

392
390
391
400
396
395
405
399
403


416
417
418
422
410
419
350
425
404


820

819

829

852

858

860

859

823
837
825
842
843
844
841
866

883
884
885
886
887

895

896

937

921

898

904

940

934

901

929

916

917

930

909

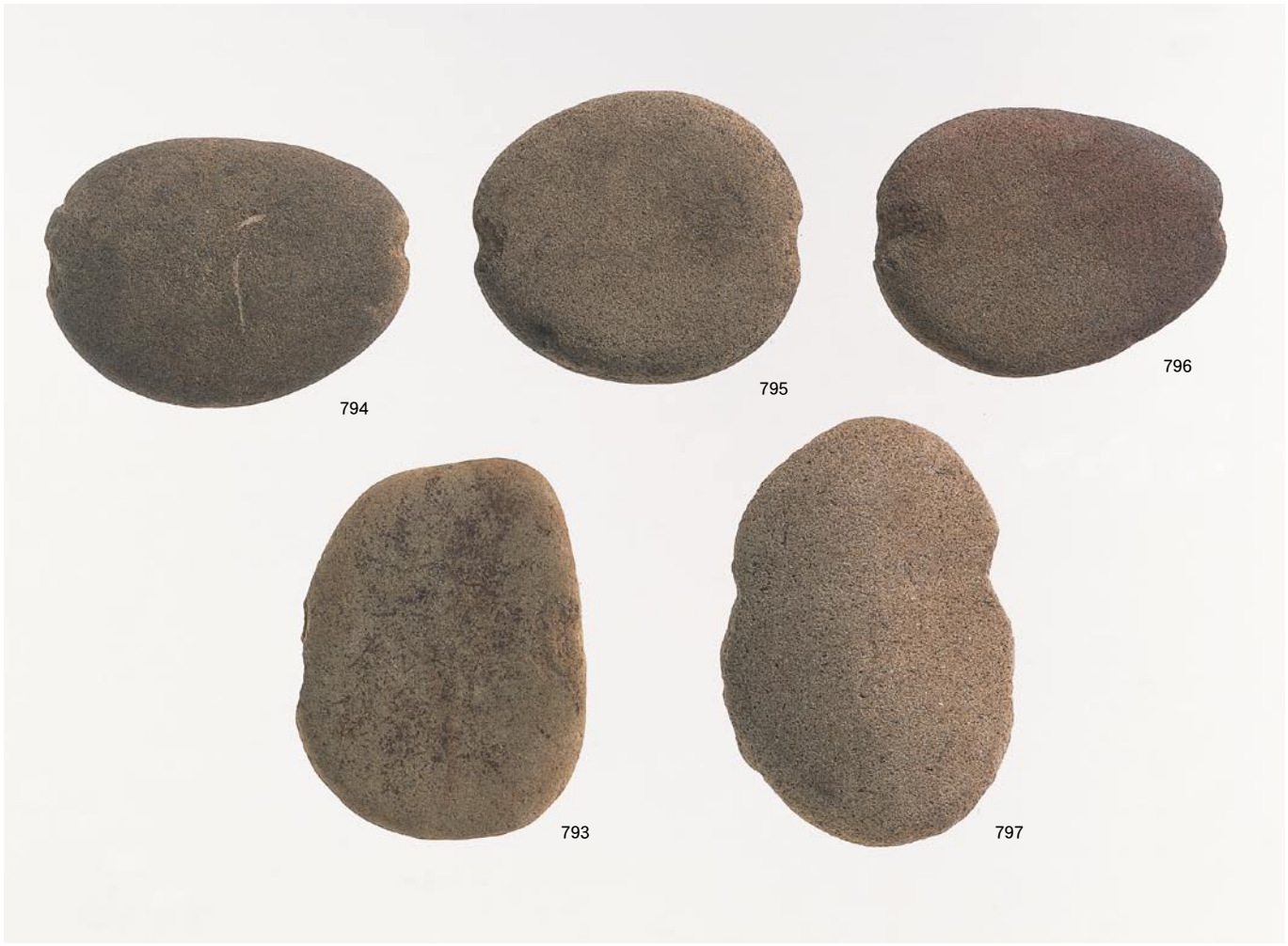
936

古墳時代土器②

旧石器時代・縄文時代早期の石器

図版 34

縄文時代後期・晩期の石鏃

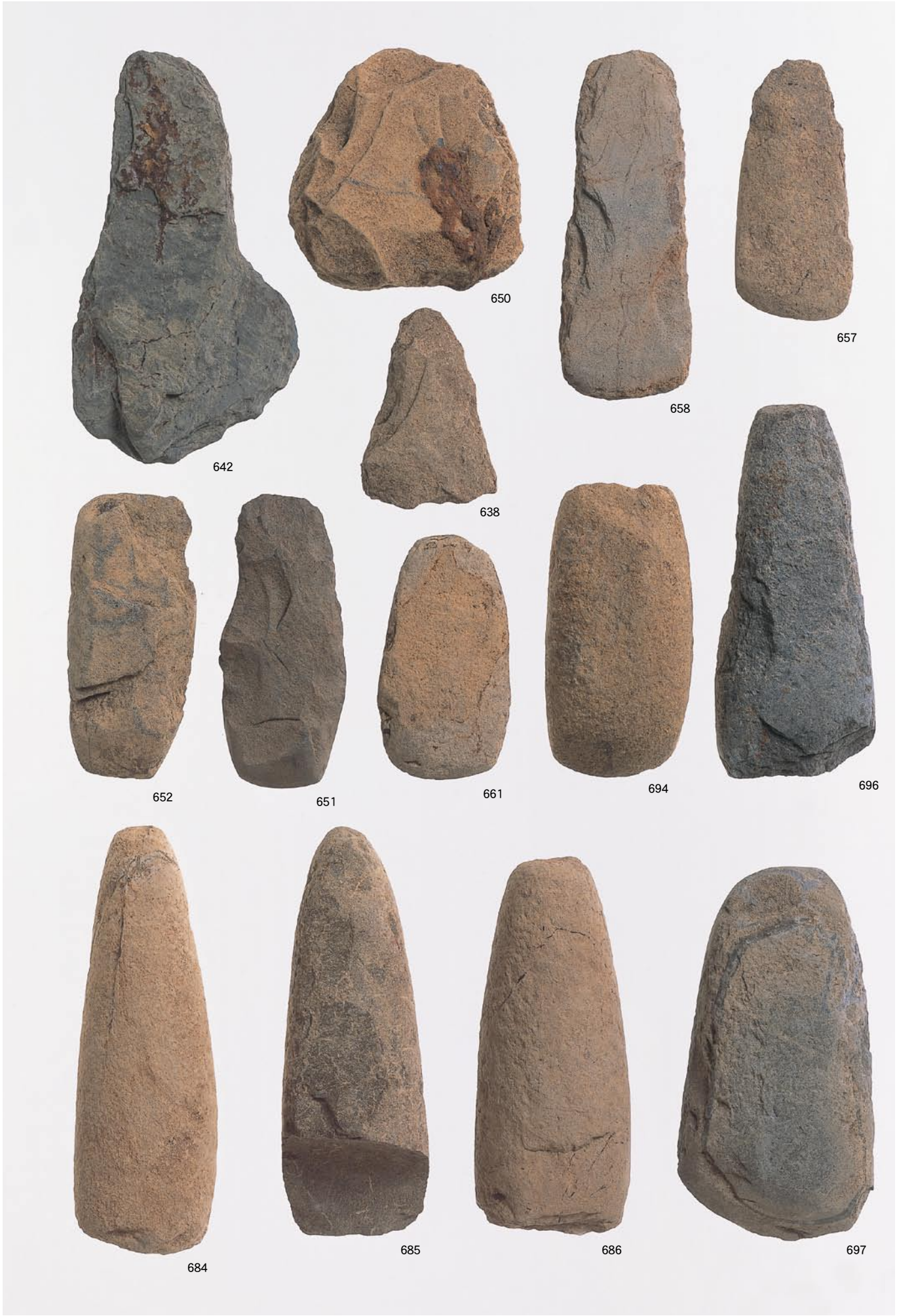


縄文時代早期・後期・晩期の石器

482
483
485
484
486
489
491
492
494
501
504
505
506
507
508
509
510
514
518
519
515
517
552
546
549

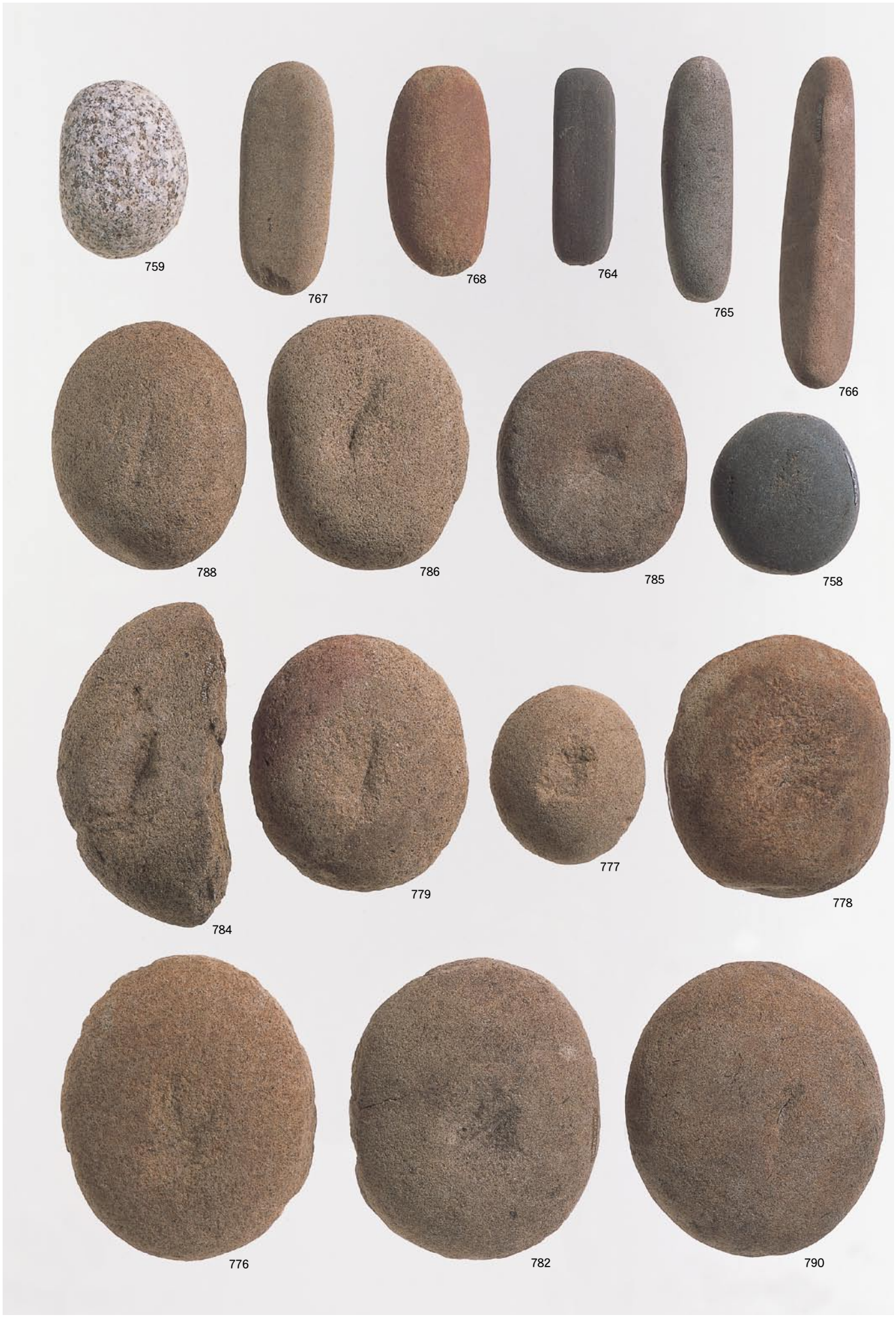
打製石斧（石製土掘具）・局部磨製石斧

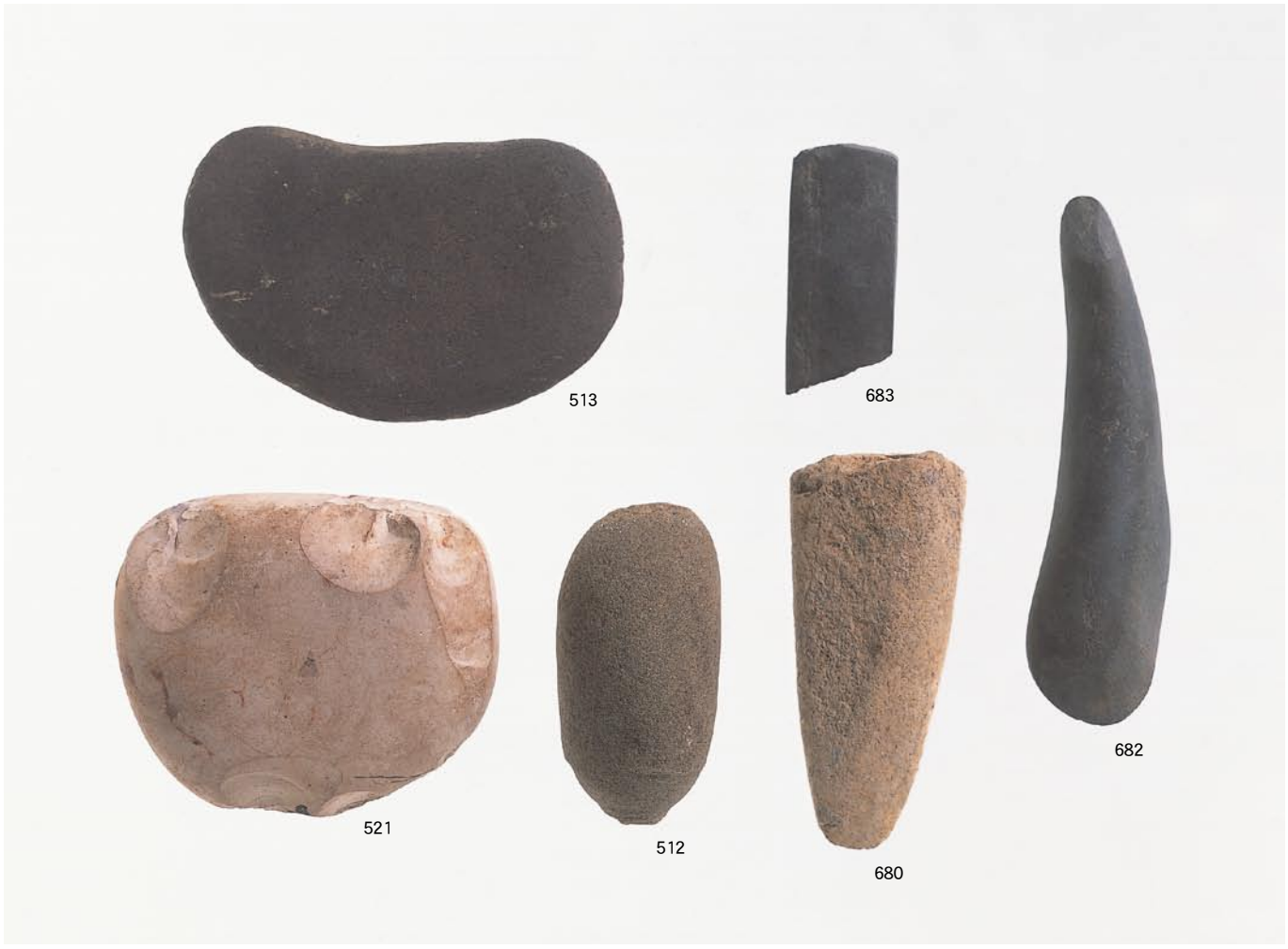
図版 38

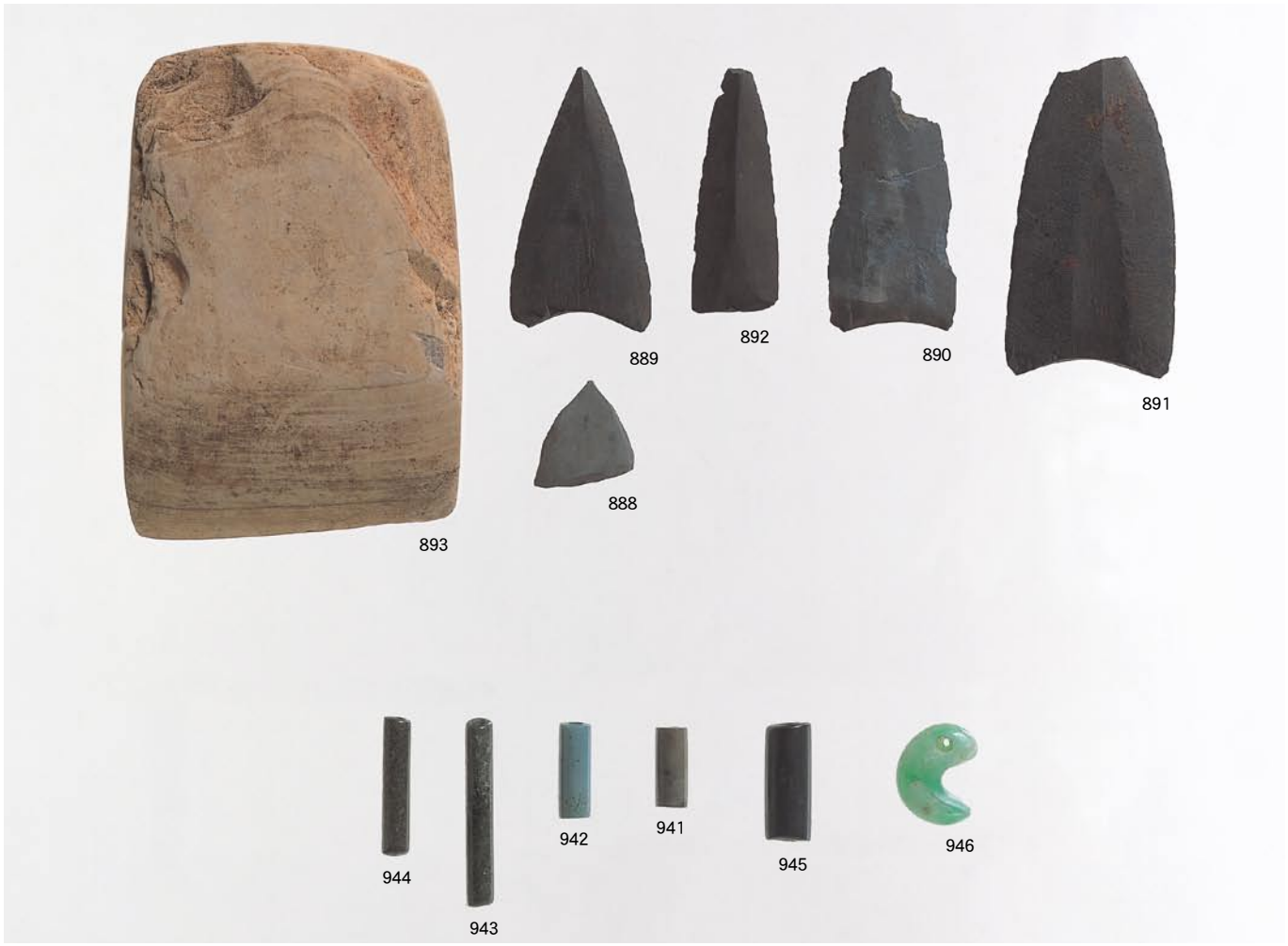


局部磨製石斧・磨製石斧

737
714
736
733
728
710
713
716
755
729
752
748
753
745
727
715


759
767
768
764
765
766
788
786
785
758
784
779
777
778
776
782
790





縄文時代・弥生時代・古墳時代の石器・石製石

図版 42

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

稲荷迫遺跡

発 行 年 月　　２０１２年３月

編集・発行　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811　　FAX　0995-48-5821

印　刷　所　　濱島印刷株式会社
〒890-0052
鹿児島県鹿児島市上之園町 17 番２号
TEL　099-255-6121

鹿児島県